

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化財の研究情報の公開・活用のための総合的研究((1)－①－ア)		
【事業概要】 他機関との連携を図り、文化財の研究情報について、効果的に発信していくための手法を研究・開発し、文化財に関する研究情報の蓄積を行うとともに、公開・活用のための手法等について総合的に研究する。また、東京文化財研究所の全所的アーカイブズの構築を推進する。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	文化財アーカイブズ研究室長 綿田稔
【スタッフ】 田中淳(部長)、山梨絵美子(副部長)、二神葉子(情報システム研究室長)、小林公治(広領域研究室長)、津田徹英(文化形成研究室長)、塩谷純(近・現代視覚芸術研究室長)、小林達朗(主任研究員)、皿井舞(主任研究員)、城野誠治(専門職員)、井上さやか(アソシエイトフェロー)、橘川英規(アソシエイトフェロー)、中村明子(アソシエイトフェロー)、福永八朗(アソシエイトフェロー)、津村宏臣(客員研究員、同志社大学准教授)、中村佳史(客員研究員、国立情報学研究所特任助教)、吉崎真弓(客員研究員、国立情報学研究所特任技術専門員)、丸川雄三(客員研究員、国立民族学博物館准教授)、飯島満(無形文化遺産部音声・映像記録研究室長)、佐野千絵(保存修復科学センター保存科学研究室長)、早川泰弘(分析科学研究室長)、山内和也(文化遺産国際協力センター地域環境研究室長)、加藤雅人(主任研究員)、高砂健介(研究支援推進部管理室長)			
【主な成果】 昨年度一般公開を開始した「東京文化財研究所所蔵資料アーカイブズ『みづゑ』(試行版)」に11号～50号までをアップし、明治期の残り分についてのデータ処理を進めた。引き続き図版を主とする貴重書の公開方法について検討を重ねた。また、東京文化財アーカイブズの基幹のひとつとして「東京文化財研究所刊行物アーカイブシステム」を作成した。アーカイブズを主題とする各種研究会を開催し、アーカイブズのあり方について検討した。なお、国立情報学研究所と東京文化財研究所アーカイブズ構築にかかわる共同研究契約を締結した。			
【年度実績概要】 文化財アーカイブズのよりよい発信方法を開発研究するため、国立情報学研究所と共同研究契約書を交わした。この中で、東京文化財研究所所蔵資料アーカイブズとして以下について協議を重ねて実施した。 ・東京研究所所蔵資料アーカイブズ『みづゑ』(試行版)：前年度一般公開を開始した創刊号～10号までのものについて点検評価を行い、修正と改良を加えた上で11号～50号を追加公開した(http://mizue.bookarchive.jp/index.html)。また51号以降についても次年度に明治期すべてを公開すべく、80号まではデータの整形と登録の準備をほぼ終えた。なお、公開した資料は、誌面の画像データとテキストデータを重ねているため、従来のデジタルアーカイブより、研究資料として多面的なアクセスが格段に可能となった。 ・その他：前年度に引き続き、写真図版を中心とする画集や図録類のデジタルアーカイブの構築に向け、『日本美術画報』を素材として、いかなる検索方法あるいは見せ方が効果的かつこれからの時代にふさわしいのかについて、協議を重ねた。 東京文化財研究所刊行物アーカイブの構築については、基幹のひとつとして各種目録情報を集約して格納するシステムの試作版として「東京文化財研究所刊行物アーカイブシステム」を作成した。東京文化財研究所関係刊行物の目次情報は、美術関係文献検索のデータベースと一体化して試験的に公開を始めた。また、誌面のデジタル化とデータ処理についても作業を続行中である。 以上に関連して下記の研究会3件を開催した。 (1)「アート・アーカイブの諸相」(企画情報部研究会、26年2月25日、東京文化財研究所セミナー室) 加治屋健司(広島市立大学)「美術アーカイブのなかの美術史」 上崎千(慶応義塾大学アート・センター)「アーカイブと前衛—表現の非永続性ephemeralityと資料体」 橘川英規(東京文化財研究所)「中村宏氏作成ノートに残された記録と資料—観光芸術研究所、東京芸術柱展を中心に」 加治屋・上崎・橘川「ディスカッション」 (2)「文化財アーカイブズ構想について」(東京文化財研究所総合研究会、26年3月4日、東京文化財研究所セミナー室) (3)『『みづゑ』のウェブ公開と美術アーカイブへの展望」(企画情報部研究会、26年3月25日、東京文化財研究所企画情報部研究会室)			
【実績値】 研究情報のウェブサイト上での公開1件 (①)			
【備考】 ①東京文化財研究所所蔵資料アーカイブズ『みづゑ』(試行版、創刊号～50号)			

自己点検評価調査

研No.1

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：情報化社会において専門的研究機関から発信される情報の意義が見直されている中であって、本研究は緊急性が高い。 独創性：通常の図書館や資料館にはない、よりきめ細やかな情報提供ないし総合的な情報発信を目指して当研究所ならではのオリジナリティのある発信方法を模索し、国立情報学研究所と連携しながら一部それを実現している。 発展性：文字情報や画像情報等、多様な資料の在り方に着目しており、常に応用性を重視して研究を進めている。 効率性：費用対効果を吟味しながら進めている。 継続性：過去と現在と未来をつなぐアーカイブを構想しており、一時的なものに終わらないよう十分に留意している。 正確性：単なるPDF配信に終わらない付加価値のある情報発信を実現している。						

2. 定量的評価

観点	研究情報のウェブサイト上での公開件数					
判定	A					
判定理由 研究情報のウェブサイト上での公開：東京文化財研究所所蔵資料アーカイブズ『みづゑ』（試行版、創刊号～50号）1件を公開している。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	国立情報学研究所との連携を図り、多種多様な文化財の研究情報について、効果的かつ有機的に蓄積して発信してゆくための手法を総合的に研究・開発し、計画3年目としては所期の成果を得られた。また、東京文化財研究所の全所的アーカイブズの構築に着手することができた。研究会を開催することで、より研究的な色彩を強めることができたことも特記しておきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	年度計画に沿って順調に成果をあげた。次年度はこれをふまえて『みづゑ』の公開件数を増やし、それと並行して図版中心の貴重書の公開方法についても検討を重ねて行きたい。また、本年度作成したシステムを拡張し、所内各所に分散・断片化している所蔵資料の目録情報をそこに集約することに取り組みたい。

業務実績書

研No.2

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化財の資料学的研究 ((1) - ①-イ)
【事業概要】 日本を含む東アジア地域における美術の価値形成の多様性を解明するために、近年の記録媒体や分析手法等の進展に対応しながら調査研究を行い、文化財を対象とする資料学的基盤を整備、確立する。併せて、その基盤を礎としながら国内外の研究交流を推進し、成果を広く一般に公開する。	
【担当部課】	企画情報部
【プロジェクト責任者】	文化形成研究室長 津田徹英
【スタッフ】 田中淳(企画情報部長)、山梨絵美子(副部長)、二神葉子(情報システム研究室長)、綿田稔(文化財アーカイブズ研究室長)、小林公治(広領域研究室長、塩谷純(近・現代視覚芸術研究室長)、小林達朗(主任研究員)、皿井舞(主任研究員)、江村知子(文化遺産国際協力センター主任研究員)、中野照男(客員研究員、大東文化大学非常勤講師)、三上豊(客員研究員、和光大学教授)、近松鴻二(客員研究員、国土舘大学非常勤講師)、吉田千鶴子(客員研究員、東京藝術大学非常勤講師)、	
【主な成果】 (1) 調査 東京文化財研究所が所蔵する明治期の書簡・手記を中心とする近代文書の判読と翻刻作業 (2) 美術史研究のためのコンテンツ形成 14世紀在銘彫刻作品のデータ入力と年表(棒目録)作成、中世絵巻詞書文字総覧のためのデータ入力 (3) 研究交流促進のための研究会の開催 植野健造氏(福岡大学教授)の招聘・研究会発表(25年9月24日) 鄭于澤氏(韓国東国大学校教授・同大学校博物館館長)の招聘・研究講演(25年10月4日) 染谷香理氏(東京藝術大学大学院)の研究会発表(25年11月26日) 佐藤全敏氏(信州大学准教授)の研究会発表(25年12月6日)	
【年度実績概要】 (1) 調査 東京文化財研究所が所蔵する7,400件の黒田清輝に宛てた書簡を目録と突き合わせ、内容検索に資することを念頭に入れて各書簡に何が書いてあるかの事項を充実させた。あわせて、特定の差出人(黒田清綱、小川一真)からの書簡を網羅的に集め、書簡の正確な翻刻を順次行うとともに、翻刻分には解題を付すように努めた。 (2) 美術史研究のためのコンテンツの形成 14世紀在銘彫刻作品のデータ入力と年表(棒目録)づくり 中世絵巻詞書文字総覧のためのデータ入力 東京文化財研究所が所蔵する今泉雄作『記事珠』の翻刻・訳注を進めた。 (3) 研究交流促進のための研究会の開催 25年9月24日 植野健三氏(福岡大学教授)の招聘・企画情報部研究会「新出資料紹介『第八回白馬会展覧会出品目録』」 25年10月4日 鄭于澤氏(韓国東国大学校教授・同大学校博物館館長)の招聘・研究講演「高麗仏画の表現—凝縮された美—」 25年11月26日 染谷香理氏(東京藝術大学大学院)の招聘・企画情報部研究会発表「版本・桓齊著『画傳幼学繪具彩色獨稽古』及び、写本『彩色童諭』について」 25年12月6日 佐藤全敏氏(信州大学准教授)の招聘・企画情報部研究会発表「観心寺如意輪観音像 再考」	
【実績値】 論文数 3件(①～③) 発表件数 2件(④、⑤)	
【備考】 論文 ①綿田稔「研究資料 国立ギメ東洋美術館蔵 大政威徳天縁起絵巻— 解題」『美術研究』410号、2013.9 ②綿田稔「研究資料 国立ギメ東洋美術館蔵 大政威徳天縁起絵巻— 詞書公刊・影印(上・中・下)」『美術研究』410～412号、2013.9～2014.3 ③田中淳「研究資料 黒田清輝宛小川一真書簡の翻刻と黒田清輝の写真観」『美術研究』412号、2014.3 発表 ④田中淳「華族たちの写真同人誌『華影』と黒田清輝宛小川一真書簡」企画情報部研究会2013.4.30 ⑤津田徹英「平安後期の飛天光背の展開をめぐる一滋賀・浄厳院像、同・西教寺像の実査を踏まえて」美術史学会東部例会2013.11.16.	

自己点検評価調査

研No.2

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	正確性	継続性	独創性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性： 国内外から研究者を招聘し、研究交流促進のための研究会を開催するなど、国際性、公共性、公開性に鑑みて十分に成果が認められた。 発展性・正確性・継続性・独創性： 全貌について知られていなかったフランス・国立ギメ東洋美術館蔵『大政威徳天縁起絵巻』について、全六巻を『美術研究』に影印（モノクロ図版）と解題ならびに詞書の全文翻刻を付して公刊した。また、従来内容が一般には十分知られていなかった、黒田清輝宛小川一真書簡について、影印（モノクロ）を付して翻刻し、あわせて、書簡のそれぞれに解題を付した。いずれの資料も影印を付すことで翻刻の正確性を期すことができ、あわせて、これまで十分に周知されていない資料の内容の詳細を提示できたことで、独創性ととも、今後の斯界の研究の発展性と継続性を期すことができ、十分に成果が認められた。						

2. 定量的評価

観点	論文数	発表件数				
判定	A	A				
判定理由 論文数・発表件数： 論文数、発表件数ともに、目標を達成したため。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	黒田清輝宛書簡を、影印と翻刻を対比的に配して、一点ずつに解題を付して行う資料紹介の手法は、正確性と継続性を見据え、今後、黒田清輝宛書簡のみならず文化財研究を行ううえでの近代文書の紹介のあり方として定型をなし得るものである。この形態を踏襲しつつ、次年度以降も資料翻刻・解題の充実に努めたい。あわせて、文化財研究の「今」を見据え、研究の発展性を念頭に置きつつ、研究交流促進のための研究会を、次年度も積極的に開催したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施されており、当該年度計画を100%達成したので順調と判定した。中期計画の趣旨に沿って次年度も調査、美術史研究のためのコンテンツの形成、研究交流促進のための研究会等の開催を行ってゆきたい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	近現代美術に関する交流史的研究((1)ー①ーウ)		
【事業概要】 日本を含む東アジア諸地域における近現代美術の研究資料の収集、整理、調査研究を行うとともに、その交流を明らかにする有効な視点と調査研究方法の開発を目指す。また、多様化する我が国の現代美術の動向に関する調査研究を行い、基礎資料を作成する。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	近・現代視覚芸術研究室長 塩谷 純
【スタッフ】 田中 淳(部長)、山梨絵美子(副部長)、城野誠治(専門職員)、中村明子(アソシエイトフェロー)、三上 豊(客員研究員、和光大学教授)、丸川雄三(客員研究員、国立民族学博物館准教授)			
【主な成果】 東アジア諸地域の近現代美術の研究資料収集、整理として、未公刊資料である黒田清輝宛書簡のデジタル画像作成を完了、併せて黒田作品の調査も行った。東アジア美術交流の調査研究では、米国の研究者による日中の彫刻概念の成り立ちについての講演を開催。我が国の現代美術の動向に関する調査研究としては、笹木繁男主宰現代美術資料センター寄贈資料及び美術評論家の故鷹見明彦氏旧蔵資料の整理・調査を進めた。			
【年度実績概要】 (1) 黒田清輝作品及び関連資料の調査 ・本年度に東京国立博物館へ寄贈された黒田清輝《グレーの原》、及び同《大磯鳴立庵》(個人蔵)の調査を行った。また当研究所が保管する黒田清輝宛書簡のデジタル画像作成を完了した。 (2) 現代美術資料の整理作業及びデータベース化作業 ・笹木繁男主宰現代美術資料センター寄贈資料の整理・調査を進めた。また美術評論家の故鷹見明彦氏旧蔵資料の整理を行った。 (3) 当所所蔵近現代美術資料データの公開促進についての調査 ・『日本美術年鑑』所載の物故者経歴データベース公開に向け、その分類についての再検討を行った。 (4) 矢代幸雄・ベレンソン往復書簡の翻刻・翻訳及び関連調査 ・矢代幸雄のベレンソン宛書簡の翻字を終えた。ベレンソンから矢代宛書簡については、ベレンソンの研究所を引き継いだイタリアのイタッティ・ルネサンス・ライブラリーと共同で翻刻を進める協議を行った。 (5) 東アジアを中心とする近代美術の交流に関する調査 ・25年6月5日、来訪研究員のスタンレー・アベ氏(米国、デューク大学教授)による講演会「中国彫刻」を想像する」を開催した。山梨・塩谷は25年6月にソウルで崔公鎬氏(韓国伝統文化大学校)・藤村真以氏(光云大学校)と研究協議を行い、田中は25年6月に東國大学校(ソウル)、25年12月に国立台湾大学(台北)での国際シンポジウムに参加し、発表を行った。			
			
スタンレー・アベ氏講演の様子			
【実績値】 論文数 2件 (①～②) 発表件数 4件 (③～⑥)			
【備考】 論文 ①塩谷純「歴史を学ぶ・楽しむ―幕末明治期の視覚表現から」 『日本美術全集 第16巻 幕末から明治時代前期 激動期の美術』 2013.10 ②田中淳「序論：萬鉄五郎 七変化―「口髭のある自画像」を中心に」 『萬鉄五郎 七変化』展図録 萬鉄五郎記念美術館 2013.11 発表 ③田中淳「モダニズムのなかの文人画―画家中川一政の「文人」像」 第48回国際学術シンポジウム「美術文化から見る韓日」 東國大学校日本学研究所 2013.6.21 ④山梨絵美子「時代を拓いた人―黒田清輝に迫る」長野県信濃美術館 2013.7.13 ⑤山梨絵美子「徳川慶喜の油絵を読む―幕府開成所と近代洋画」 静岡市美術館 2013.11.16 ⑥田中淳「移動する画家たち―1920年代の日本の岩手県の画家たち」 国際学術研究会「異郷與家郷 東亜美術史的伏流與激盪 1920-40」 国立台湾大学芸術史研究所 2013.12.6-7			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 4113

自己点検評価調書

研No.3

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性・独創性・発展性： 近年の東アジアにおける文化交流の深まりの中で、これまで不問に付されがちだった同地域の近代を研究対象とする意義は大きいと十分に成果が認められた。 継続性・正確性： 作品に比して等閑視されがちな諸資料についても、作家の営為を物語るものとして不断の収集整理及び調査研究を行ったため十分に成果が認められた。						

2. 定量的評価

観点	論文数	発表件数				
判定	A	A				
判定理由 論文数・発表件数 論文数、発表件数ともに、目標を達成した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	今年度は東アジアを対象とする研究において、当該地域の研究者のみならず米国の研究者も交えて研究を進めることができた意義は大きい。韓国での研究協議も、次年度の日本での研究会へと展開させる予定である。黒田清輝宛書簡のデジタル画像化完了についても、資料の読み起こしやデジタル公開といった、次のステップへの足がかりとしたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施しており、当該年度計画を100%達成したため順調と判定した。中期計画の趣旨に沿って次年度も東アジア諸地域の近現代美術の研究資料収集、整理及び我が国の現代美術の動向に関する調査研究を続行、充実させていきたい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	美術の表現・技法・材料に関する多角的研究((1)－①－エ)		
【事業概要】 様々な美術作品を構成する材料やそこに用いられた技法、ひいては表現、その制作過程、作品の成り立ち、生成されてから今日にどう至ったか、それがどのように受容されてきたか等を、関連書分野と連携しながら多角的に分析し、現在目の前にある「作品」ないし文化財に対するより深い理解を形成することを目指す。			
【担当部課】	企画情報部	【プロジェクト責任者】	広領域研究室長 小林 公治
【スタッフ】田中淳（部長）、山梨絵美子（副部長）、綿田稔（文化財アーカイブズ研究室長）、二神葉子（情報システム研究室長）、津田徹英（文化形成研究室長）、塩谷純（近・現代視覚芸術研究室長）、小林達朗（主任研究員）、皿井舞（主任研究員）、江村知子（文化遺産国際協力センター主任研究員）、中野照男（客員研究員・大東文化大学非常勤講師）			
【主な成果】 本研究は美術作品が基盤としている表現・材料・技法等を作品の観察、文献資料あるいは科学的手法による分析を実施しながら解明することを目的とする。本年度は絵画・工芸作品を中心に各地で作品調査を進めるとともに、日本の平安時代絵画や展覧会を通じた日本製輸出螺鈿漆器についての検討、またこれまで本プロジェクトで行ってきた絵画や世界各地の螺鈿漆器について発表を行った他、ウェブサイト上で公開している奈良時代の資料にあらわれた彩色語彙についてデータベースの増補を実施した。また今年度よりの新規事業として、当研究所が所蔵する文化財を撮影したガラス乾板のデジタル化作業を開始した。			
【年度実績概要】 ・調査 東京国立博物館との共同調査計画に基づき、絵画作品である「国宝・絹本着色普賢菩薩像」の調査を26年3月に実施したほか、日本国内螺鈿工房（横浜市内・奈良市内）及び個人所蔵コレクション調査（小田原市内）、ニューヨークのメトロポリタン美術館において朝鮮・日本・中国螺鈿漆器の調査、ソウルの国立中央博物館において高麗時代螺鈿漆器の調査を行った。また、滋賀県甲賀市「檜尾寺木造釈迦如来立像」（鎌倉時代）の透過X線撮影調査を行った。 ・研究会発表 本年度は、千手観音調査結果検討会（25年5月16日）、第47回オープンレクチャーにおける千手観音像調査成果及びアジアを中心として造られてきた螺鈿の歴史と系譜に関する講演（25年10月5日）、また第37回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会において、上記とは異なる視点により千手観音像調査成果による発表（26年1月11日）を実施した。 ・資料のデータ化 研究所への寄贈資料のうち、技法材料研究と特に関わりの深い久野健旧蔵資料及び秋山光和旧蔵資料（調査ノート・撮影画像など）のデジタル化・整理・入力を行った。また奈良時代資料にあらわれた彩色語彙についてデータベースの増補・公開を実施した。 また、今年度開始の新事業として、当部の他2室のプロジェクトと共同して、これまで研究所が蓄積してきた文化財を撮影したガラス乾板およそ21,500枚のデジタル化作業を始めており、今後ウェブによる公開を実施する。			
【実績値】	論文数 1件（①） 発表件数 4件（②～⑤） 調査件数 8件（国内6件、海外2件）（⑥～⑬） ガラス乾板のデジタル化数：約9,200枚		
【備考】 論文： ①小林達朗「美しい術―国宝千手観音像の場合」第37回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会プレ・プリント（26年1月11日） 発表： ②小林達朗「東京国立博物館蔵国宝本・千手観音像の表現」2013年度第4回企画情報部研究会（25年7月30日） ③小林達朗「平安仏画の表現―虚空蔵菩薩と千手観音像―」第47回オープンレクチャー「モノ／イメージとの対話」（25年10月4日） ④小林公治「螺鈿を訪ねて西へ東へ―5000年の世界史を探る―」第47回オープンレクチャー「モノ／イメージとの対話」（25年10月5日） ⑤小林達朗「美しい術―国宝千手観音像の場合」第37回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会発表（26年1月11日） 調査 ⑥小林公治 横浜芝山漆器研究会調査（横浜市内） 2013年4月23日 ⑦小林公治 個人所蔵近世近代螺鈿漆器熟覧調査（小田原市内） 2013年4月27日 ⑧小林公治 メトロポリタン美術館所蔵東アジア螺鈿漆器熟覧調査 2013年5月24日 ⑨小林公治 螺鈿工房調査（奈良市内） 2013年5月29日 ⑩津田徹英 滋賀県甲賀市「檜尾寺木造釈迦如来立像」（鎌倉時代）の透過X線撮影調査 2014年6月20日 ⑪塩谷純・小林公治 個人蔵近代彫刻撮影ガラス乾板調査 2013年7月26日 ⑫小林公治 韓国国立中央博物館所蔵高麗時代螺鈿漆器熟覧調査 2013年11月29日 ⑬小林達朗・江村知子・皿井舞・城野誠治 東京国立博物館絵画熟覧・光学調査 2014年3月26日			

自己点検評価調査

研No.4

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：様々な機会を捉え調査を実施し、また調査成果について速やかな公表を試みたため。 独創性：これまでに多様な調査対象や、創造的な見方・手法による調査等を実施できたため。 発展性：ここで行った研究手法は今後の様々な研究に向けた発展性を十分持つことが期待されるため。 継続性：調査や研究は単発的なものではなく、先年からの継続性を持つものであるため。 正確性：実施した成果公表や調査は実証的な確実性を持つものであるため。						

2. 定量的評価

観点	論文数	発表件数	調査件数	ガラス乾板のデジタル化数		
判定	A	A	A	A		
判定理由 論文数：論文での成果公開を行うことができたため。 発表件数：これまでの調査結果について多様な視点から、多様な対象に対する研究成果の公表が行えたため。 調査件数：時宜をとらえて様々な調査を行う努力を持てたことから。 ガラス乾板のデジタル化数：透過光デジタル撮影によるデジタル化という新たな方法を試験的に導入し開始したが、この方法により順調にデジタル化作業を進めることができたため。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	上記評価を総合的に捉えて A とした。来年度以降はより多くの成果公表や調査の実施に向けて努力したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	これまでの調査結果に基づいた研究成果の幅広い公表や、新たな調査が実施できたことなどにより、順調な実施状況だと評価できる。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	近畿を中心とする古寺社等所蔵の歴史資料等に関する調査研究((1)－②))		
【事業概要】 近畿地方を中心として、重要な古寺社や関連する旧家等が所蔵する歴史資料や書跡資料等について、継続的・悉皆的に整理・調書作成・写真撮影等の調査を行い、現存資料の把握に努め、成果を目録・データベース等により、また重要資料は翻刻して公開する。このような調査によって文化財研究の基礎を固めた上で、文化財の歴史的・特徴等を研究し、日本の歴史・文化の研究に資する。撮影した写真は焼き付けを作成し、研究者等の研究に供する。			
【担当部課】	文化遺産部	【プロジェクト責任者】	歴史研究室長 吉川 聡
【スタッフ】 小原嘉記(中京大学国際教養学部准教授・客員研究員)、渡辺晃宏(史料研究室長)、馬場 基(都城発掘調査部主任研究員)、山本 崇(都城発掘調査部主任研究員)、桑田訓也(史料研究室研究員)、山本祥隆(史料研究室研究員)、児島大輔(年代学研究室アソシエイトフェロー)、高田祐一(文化財情報係アソシエイトフェロー)、中村一郎(写真室主任)、栗山雅夫(写真室技術職員)、鎌倉綾(写真室技能補佐員)			
【主な成果】 奈良市教育委員会との連携研究の成果として、『大宮家文書調査報告書』を公刊した。大宮家文書は、鎌倉時代から江戸時代まで春日大社の神人だった大宮家に伝わる、中世・近世文書群であり、春日大社研究の基礎史料となり得るものである。また、唐招提寺が所蔵する資料を翻刻して『唐招提寺授戒帳』として刊行した。近世唐招提寺の授戒の実態・近世受戒僧の名を一覧できる基礎資料である。また、内山永久寺旧蔵の扁額が、宝治元年(1247)に藤原教家が筆を執った扁額であることを明らかにした。また、科学研究費補助金も充当して行った東大寺古文書調査について、科学研究費補助金の報告書を2冊公刊し、所蔵資料の目録等を公表した。			
【年度実績概要】 ・興福寺所蔵の書跡資料の調査を実施し、第117 函・二条家第1 函～第6 函の調書を作成した。また第106 函・109 函の写真を撮影した。 ・仁和寺所蔵の歴史資料の調査を実施し、御経蔵聖教第49 函～57 函の調書原本校正・写真撮影を実施した。 ・薬師寺所蔵の歴史資料の調査を実施し、第58 函・第59 函の調書作成と、第1 函～第5 函の目録校正、第25 函の写真撮影を実施した。 ・三仏寺所蔵の歴史資料の調査を実施し、第6 函・經典函等の調書を作成し、第5 函～第6 函の写真撮影を実施した。 ・唐招提寺所蔵の歴史資料の調査を実施し、宝蔵に所在する資料の調査を行った。また、資料紹介の報告書を刊行した。 ・東大寺所蔵の歴史資料の調査を、科学研究費補助金も充当して実施し、新修東大寺文書聖教第73 函～78 函の調査データ入力、第56 函の撮影等を行った。また、科学研究費補助金を用いて報告書を刊行し、所蔵資料の目録等を公表した。 ・奈良市教育委員会と連携研究の協定を結び、氷室神社の大宮家所蔵文書の未成巻文書の調査研究を実施して、報告書を刊行した。 ・奈良市佐紀町塚原家所蔵の歴史資料の調査を実施し、当該資料はその後、奈良文化財研究所に寄贈された。また奈良市水郷所蔵の歴史資料を調査した。さらに天理市の旧家所蔵の、内山永久寺旧蔵扁額の調査結果を論文にまとめた。			
			
内山永久寺旧蔵扁額			
【実績値】 刊行物・論文等数5 件 (①～⑤) (参考値)調査資料点数 興福寺：調書作成資料点数 333 点、写真撮影点数 41 点 仁和寺：調書等原本校正資料点数 432 点、写真撮影資料点数 460 点 薬師寺：調書作成資料点数 37 点、写真撮影資料点数 345 点 三仏寺：調書作成資料点数 110 点、写真撮影資料点数 522 点 東大寺：調査データ入力点数 246 点、写真撮影資料点数 557 点			
【備考】 刊行物・論文等 ①『大宮家文書調査報告書』2014.3 ②『唐招提寺授戒帳』2013.6 ③『科学研究費補助金 南都における廃仏毀釈後の資料動態に関する調査研究 研究成果報告書1』2014.3 ④『科学研究費補助金 南都における廃仏毀釈後の資料動態に関する調査研究 研究成果報告書2』2014.3 ⑤吉川聡・鈴木智大・海野聡・赤田昌倫・児島大輔「内山永久寺の扁額」『奈良文化財研究所紀要2013』2013.6			

内山永久寺旧蔵扁額

自己点検評価調査

研No.5

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	正確性		
判定	A	A	A	A		
判定理由 適時性：近畿を中心とする、世界遺産にも登録されるような古寺社等には、未だに調査・整理されていない歴史資料・書跡資料が数多く存在している。その内容を把握し、保存を図り、史料として利用できる状態にまで整理することは、極めて適時性が高い調査である。 発展性：これらの資料には、日本史を研究する上で重要な内容を持つものが多く含まれており、発展性がある。本年度は特に、大宮家文書・東大寺所蔵資料の目録を公表した。これらは今後の日本史研究の進展に寄与するものである。また、内山永久寺旧蔵扁額の性格を明らかにした。これは、資料の少ない内山永久寺研究の進展に寄与する成果である。 継続性：調査は着実に中断なく全容を把握する調査を実行しており、継続性に優れている。 正確性：調査資料の重要性に鑑みて、詳細・正確な調査を実施している。						

2. 定量的評価

観点	刊行物・論文等数					
判定	A					
判定理由 刊行物・論文等数：目標を上回った。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	興福寺・仁和寺・薬師寺・三仏寺・唐招提寺・東大寺の調査を実施した。また大宮家は奈良市と連携研究を行った。その他、奈良の旧家所蔵の資料調査も行った。そして、大宮家・唐招提寺・東大寺、さらには内山永久寺旧蔵資料について、調査成果を公表できた。特に、大宮家文書は中世春日大社関係文書を多く含む重要資料群である。また内山永久寺資料も、従来ほとんど知られていなかった扁額を、鎌倉時代のものと確定できた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業は、堅調に実現できたと考える。特に、数年にわたり実施した奈良市教育委員会との連携研究に基づいて、大宮家文書の目録を公表できた。他にも、唐招提寺・東大寺、さらには内山永久寺関係資料など、多くの資料・資料目録を公表したことは大きな成果である。しかしこれらの成果のほとんどは、長年の調査の積み重ねの結果が形になったものである。その公表時期がたまたま今年度に多く重なったが、今後はまた、新たな成果を生み出すための、地道な調査を継続して実施していく必要があるだろう。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	我が国の建造物及び伝統的建造物群に関する調査・研究(1)－③
【事業概要】 我が国の文化財建造物の保存・修復・活用に向けた歴史的建造物、伝統的建造物群及び近代化遺産等に関する基礎データを蓄積し、分析・研究を行うとともに、古代建築の今後の保存と復原に資するため、古代建築の技法についての再検証(調査研究)を行い、得られた成果を整理するとともに、一般公開を図る。	
【担当部課】	文化遺産部
【プロジェクト責任者】	文化遺産部長 林 良彦
【スタッフ】 鈴木智大(建造物研究室研究員)、箱崎和久(遺構研究室長)、黒坂貴裕(都城発掘調査部主任研究員)、番 光(遺構研究室研究員)、大林 潤(遺構研究室研究員)、海野聡(遺構研究室研究員)、井上麻香(遺構研究室アソシエイトフェロー)、中島咲紀(遺構研究室アソシエイトフェロー)、恵谷浩子(景観研究室研究員)、菊地淑人(景観研究室アソシエイトフェロー)、中島義晴(文化遺産部主任研究員)、成田 聖(前学芸室任期付研究員)	
【主な成果】 文化財建造物の保存修理に関する基礎データである所内保管資料の整理等の作業を行い、「建造物現状変更説明」については出版物として刊行・配布し、「ガラス乾板」については画像のデジタルデータ化により、一般公開を推進した。また、古代建築の技法に関する再検証作業を継続的に実施した。このほか、受託事業により、各種歴史的建造物の調査を行った。	
【年度実績概要】 ・所内で保管している文化財建造物保存修理時の「建造物現状変更説明」資料のうち、1931年度から1949年度分のWord文書化、図版調整を行い、その成果を刊行・配布した。また、同じく所内保管の文化財建造物等の撮影ガラス乾板(大阪府、兵庫県分)を整理して、画像をデジタル化した(デジタル化は外注)。また、上記ガラス乾板及び建造物保存図並びに同摺拓本資料について、外部への資料提供を実施した。 ・古代建築の技法に関する調査研究では、法隆寺所蔵の古材調査を2009年～12年度に引き続き実施した。本年度は、引き続きかつて法隆寺西院金堂に使用されていた部材について調査を行った。なお、調査にあたっては、年代学研究室の協力を得た。 ・海外関連事業として、日中韓の3国の文化財研究所における共同研究の一環として、2013年11月に平城宮跡資料館で、国際学術会議を開催した。『歴史的集落町並みの保存研究活用』のテーマで研究発表を行うとともに、総合討議を行った。 ・地域協力として、斑鳩町に残る歴史的建造物井上家住宅(旧北畠家住宅)の建築調査を行った。棟梁西岡檜光、明治20年の建築であることを明らかにした。 ・奈良県近代化遺産総合調査の調査員を務め、建築部門の調査、報告執筆を行った。	
【実績値】 公刊図書3件①②③、論文等9件④、学会等発表件数3件⑤ 保管建造物関係資料整理：写真乾板デジタル化640枚、現状変更資料入力等1931～1949年分 古代建築研究現地資料収集：法隆寺古材調査46回 保管建造物資料の外部者利用数：乾板写真4件221枚、建造物保存図5件105枚、摺拓本2件34冊	
【備考】 論文等 ①奈良文化財研究所『重要文化財建造物現状変更説明1931～1949』2014.3 ②奈良文化財研究所『集落町並みの調査と保存・活用 第5回日中韓建築文化遺産保存国際学術会議予稿集』2013.11 ③『ベトナム社会主義共和国 カイベイ市集落調査報告書』2014.3 ④箱崎和久「建築遺跡の整備と問題点」『奈良文化財研究所紀要2013』2013.6 ほか8件 ⑤林良彦「日本における木造建造物の類型と調査」ACCUSeminarsスリランカ ほか2件	



国際学術会議の開催風景

自己点検評価調査

研No.6

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：斑鳩町井上家住宅の調査は現在地方で盛んに行われている歴史的風致維持向上計画の策定に伴う建造物調査で、地方行政の施策に貢献する上で緊急性が高い。 独創性：古代建築の諸構法の研究は、研究所がこれまで継続してきた調査研究に基づき、これを発展させるため、法隆寺古材調査では「技術・技法」等の視点を加え、独創性のある研究内容といえる。 発展性：法隆寺古材調査は、古代建築の技法を知る上でまたとない資料であり、新たな視点での調査行い、成果を資料化することは、古代建築研究の展開に大きく貢献するものである。また、受託業務として行った兵庫県近代和風建築総合調査では、今後の近代和風建築の研究と保存に対して貢献をなす成果をあげた点で、高く評価できる。 効率性：限られた人員に対し十分な成果を出している。 継続性：文化財建造物保存修理事業等で作成された貴重な記録である「建造物現状変更説明」「ガラス乾板」の資料整理、デジタル化作業は近年継続的に実施しており、地味な作業ではあるが高く評価できる。 正確性：保管建造物関係資料整理、古代建築研究現地資料収集、保管建造物資料外部利用等を通じて、情報の正確な収集・整理・公開を行い、建造物の基礎的研究に大きく貢献した。						

2. 定量的評価

観点	公刊図書数	論文等数	学会等発表件数	保管建造物関係資料整理	古代建築研究現地資料収集	保管建造物資料外部利用数
判定	A	S	A	A	A	A
判定理由 公刊図書数：当初予定していた図書を3件刊行できた。 論文等数：目標の6件に対して9件に達した。 学会等発表件数：目標の3件に達した。 保管建造物関係資料整理：十分な成果が認められる。 古代建築研究現地資料収集：十分な成果が認められる。 保管建造物資料外部利用数：要請に基づき、十分に対応した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財建造物の保存修理に関する基礎データの整理等については計画通り実施でき、この継続的な実施によって、本事業の重要性が認知されるようになっている。奈良県近代化遺産総合調査で、県内の近代建築の具体相を究明できたことは、文化庁等の調査に寄せる期待に応えることになり評価できるとともに、将来実施する建築調査に反映できる。古代建築の研究に関しては、法隆寺古材調査は基礎的な作業であり、今後高く評価されるものと考えている。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	所内保管の建造物関係資料についての整理等作業、古代建築の諸構法に関する研究とも順調に進捗している。前者は地味な作業であるが、これを継続させることの重要性をさらにアピールさせたい。後者の研究は、研究所が蓄積した過去の研究成果を元にした本研究所ならではの研究であり、次年度以降、現場の作業を続けるとともに研究成果をまとめて公表して行く方向で本研究の実施にさらに力を注ぎたい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	無形文化財の保存・活用に関する調査研究(1)－④－1)		
【事業概要】 我が国の無形文化財、並びに文化財保存技術の伝承実態を把握し、その保護に資するため、伝承の基礎となる技法・技術の実態や変遷の調査研究、及び資料の収集を行い、現状記録の必要な対象を精査して記録作成を行う。			
【担当部課】	無形文化遺産部	【プロジェクト責任者】	副所長（部長兼務） 石崎武志
【スタッフ】 高桑いづみ(無形文化財研究室長)、飯島満(音声・映像記録研究室長)、菊池理予(研究員)			
【主な成果】 古典芸能の作曲法、染織技術を支える選定保存技術について調査を行い、無形文化遺産部所蔵音声・映像資料の整理、伝承の変化の大きい伝承芸能について実演記録を作成し、楽器に関して国際会議等で発表した。			
【年度実績概要】 ・世阿弥自筆能本等の詳細な調査を行い、世阿弥の作曲技法について一定の成果を得た。成果は楽劇学会大会、第37回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会などで公表した。また、能楽学会の企画に参画し、世阿弥作曲による《四季祝言》《敷島》の音楽復元も行った。成果は次年度の能楽学会機関誌に発表される。 ・工芸技術に関しては主に染織技術を支える選定保存技術について調査を行った。 原材料については熊本県日田市、栃木県鹿沼市、群馬県岩島地域において麻の栽培技術と麻剥ぎに関する調査を実施し、道具に関しては結城紬の機製造技術や刺繍針製造技術に関する聞き取り調査を行った。 また、江戸時代初期及び中期における染織関連文献から染織技術に関する項目について整理を進め、成果を報告書に掲載した。 ・部が所有するニットー長時間レコードについて「昭和初期上方落語の口演記録」と題する第8回無形文化遺産部公開学術講座を行った（25年10月5日東京国立博物館平成館大講堂）。 ・連続口演の機会が激減している講談について、一龍斎貞水師と神田松鯉師による実演記録を作成した。また、近年ではほとんど上演されなくなっている正本芝居噺（道具入り）について、林家正雀師による実演記録を作成した。			
			
林家正雀師による正本芝居噺の実演風景			
【実績値】 論文数 1件(⑦) 発表件数 6件(①～⑥)			
【備考】 学会等発表 ① 高桑いづみ「世阿弥作《四季祝言》《敷島》の復元」能楽学会第12回大会 2013. 5. 26 ② 高桑いづみ「[上ゲ歌] 形成試論」楽劇学会第21回大会 2013. 7. 14 ③ 高桑いづみ「実践としての謡—音楽としてのおもしろさはどこにあるのか」京都市立芸術大学伝音講座 2013. 11. 27 ④ 高桑いづみ「くり返すということ」第37回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会 2014. 1. 10 ⑤ 飯島 満「東京文化財研究所所蔵「特殊再生装置を要する音盤」」第8回公開学術講座 2013. 10. 5 ⑥ 菊池理予「染織技術を守るということ—文化財保護という立場から—」大妻女子大学創成工房、2013. 12. 13 論文 ⑦ 菊池理予「染織技法の分業に関する研究（一）」『無形文化遺産研究報告』第8号 2014. 3			

自己点検評価調査

研No.7

1. 定性的評価

観点	独創性	発展性	継続性	適時性		
判定	A	A	A	A		
判定理由 独創性：世阿弥自筆能本の音楽面での調査は、他では行い得ないものであり、その成果を広く公表した価値は大きい。 発展性：当研究所所蔵の音盤については以前より調査を進めており、過去の音盤の状況について様々な音源の発見につながっている。染織技法書の整理も今後の技法解明等に向けての基礎資料となるもので、今後の研究への発展が期待できる。 継続性：能楽の音楽的側面からの研究、音盤調査、工芸技術調査はいずれも以前から行っている独自の調査で、継続によりデータの蓄積や研究手法の発展がみられた。無形文化遺産分野において、継続研究から生み出される成果は大きい。 適時性：連続口演の減少している講談などの記録作成、工芸技術、選定保存技術で後継者のいない分野の調査は、現在行う事が急務の事業であり、将来の伝承へ向けてその意義は大きい。						

2. 定量的評価

観点	論文数	発表件数				
判定	A	A				
判定理由 論文数、発表件数：件数は十分である。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	上記の定性的評価、定量的評価に拠り、判定をAとした。今年度からは、新たに落語（正本芝居噺）の記録作成も実現させており、無形文化遺産に係る様々な調査・資料収集とあわせ、一層の充実に努めたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究、資料収集、成果の発表ともに計画通り実施されており、当該年度計画を100%達成している。

業務実績書

研No.8

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究((1)－④－2)		
【事業概要】 我が国の風俗慣習、民俗芸能、民俗技術等無形民俗文化財のうち、近年の変容の著しいものを中心に、その実態を把握するために資料収集と現地調査を行う。また、無形民俗文化財研究協議会を実施し、その成果を報告書にまとめる。さらに、これまで東京文化財研究所で収集し、保管している無形民俗文化財についての記録・資料の整理を行い、媒体転換等の必要な措置を講じるための準備を進める。			
【担当部課】	無形文化遺産部	【プロジェクト責任者】	副所長（部長兼務） 石崎武志
【スタッフ】 久保田裕道（主任研究員）、今石 みぎわ(研究員)、齊藤裕嗣(客員研究員)			
【主な成果】 民俗技術や風俗慣習、民俗芸能の伝承実態・伝承組織について現地調査と資料収集を行った。特に東北の被災地域における無形民俗文化財の現状調査は昨年度に引き続き重点的に行った。また、無形民俗文化財研究協議会を開催し、無形民俗文化財の保存と活用に関する現実的課題への対応を協議した。特に今年度はこれまで研究の進んでいなかった民俗技術の分野をテーマに取り上げ、関係者間の協議やネットワーク形成を図った。その成果は報告書にまとめ、関係者及び関係機関等に配布した。			
【年度実績概要】 ・無形民俗文化財に関する調査・資料収集 民俗技術の調査として「秋田のイタヤ箕製作技術」「越中福岡の菅笠製作技術」「小木のたらい舟製作技術」（以上国指定重要無形民俗文化財）及び東京都内の職人技術（台東区、荒川区、江戸川区等）に関して、伝承や保護の実態についての現地調査と資料収集を行った。また昨年度より継続テーマである削りかけ状祭具に関わる技術と風俗慣習の研究として、群馬県中之条町、吾妻町等で実施調査を行った。民俗芸能の調査としては、宮城県における震災被災地の伝承調査を継続している。また岡山県高梁市の松山踊りの調査を行った。 ・無形民俗文化財の公開状況に関する調査研究 民俗芸能学会飯田大会・第6回南信州獅子舞フェスティバル（長野県）、第62回全国民俗芸能大会（東京都）における民俗芸能等の公開状況調査を実施した。 ・研究集会の開催 25年11月15日（金）、第8回無形民俗文化財研究協議会を「わざを伝える―伝統とその活用―」をテーマに、東京文化財研究所において開催し、115名の参加を得た。4件の事例報告（「佐渡『小木のたらい舟製作技術』伝承の取り組みと課題」井藤博明／「越中福岡の菅笠保全に妙薬はあるのか―行政のサポートについて」徳田光太郎／「えどがわ伝統工芸産学プロジェクトの取組みについて」羽太謙一／「荒川区の無形文化財保護の取り組み―伝統工芸技術の保存・普及・継承事業を中心として」野尻かおる）及び1件の特別報告（「台東区の伝統産業事業について」浦里健太郎）をもとにコメンテーター2名（段上達雄、山崎剛）を含めた総合討議を行った。成果は『第8回無形民俗文化財研究協議会報告書』にまとめ、参加者及び関係者に配布した。 26年3月5日（水）、第2回無形文化遺産情報ネットワーク協議会を東京文化財研究所において開催。東北被災地域における無形文化遺産の復興支援に関わる様々な分野の関係者と共に今後の支援の在り方について協議した。			
【実績値】 論文数 4件（④～⑦） 発表件数 3件（①～③）			
【備考】 発表 ①今石みぎわ「アイヌと本州以南の祭祀具―イナウと削りかけ」特別講義もう一つの日本と出会う：アイヌ文化 東京造形大学 2013.7.4 ②今石みぎわ「無形文化遺産情報ネットワークの活動報告」連携研究会：文化遺産の復興に向けたミュージアムの活用のための基礎的研究―大学共同利用機関の視点から 国立民族学博物館 2013.6.11 ③久保田裕道「無形文化遺産情報ネットワーク」総合研究会 東京文化財研究所 2014.1.14 論文 ④今石みぎわ「出会いのトポス―描かれた山と人間」『遠野物語 遭遇と鎮魂』岩波書店 2014.3 ⑤久保田裕道「鎮魂の解釈をめぐる―タマフリとタマシズメと―」『宗教民俗研究』23 日本宗教民俗学会 2014.3 ⑥久保田裕道「日本民俗学の研究動向（2009-2011）民俗芸能」『日本民俗学』276 日本民俗学会 2014.2 ⑦久保田裕道「被災地における無形伝承の復興と情報ネットワーク」『共存学2 災害後の人と文化、ゆらぐ世界』弘文堂 pp.49-66 2014.2			

自己点検評価調査

研No.8

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	A	A	A		
判定理由 適時性：継承の危機にある無形民俗文化財の調査研究、記録は必要性、緊急性が高い。特に平成17年度から指定制度が始まった民俗技術に関する調査研究は遅れていることから調査研究や記録は急務であり、公共性に照らしても十分に成果が認められる。また無形文化遺産情報ネットワークは、東日本大震災で被災した無形民俗文化財の被災状況の把握と復興の点から必要性、緊急性が高く、社会的にもその成果は認められている。 独創性・発展性・継続性： 国内唯一の無形民俗文化財の研究部として、全国の関係者を集めて専門的観点から協議会を継続的に開催し、関係者のネットワーク構築を促進させていることは、無形民俗文化財の保護体制の整備・強化の観点から見て、その独創性、発展性、継続性を十分に評価できる。また被災地域における無形民俗文化財に関する調査・研究及び提言を率先して行ったことは、その独創性において十分に成果が認められる。						

2. 定量的評価

観点	論文数	発表件数				
判定	A	A				
判定理由 論文数・発表件数：論文数、発表件数ともに、十分である。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当初の計画通り事業を実施することができた。特に民俗技術の調査研究、記録、保存活用については研究協議会のテーマとしても取り上げ、重点的に実施したことにより、その重要性が一般にも認知されるようになったといつてよい。また昨年度から引き続いて行っている被災地域における無形民俗文化財の調査・記録の成果は、全国の継承が困難な無形民俗文化財の保存に際しても活用できるものであり、将来を見通した取組としても極めて重要である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施しており、当該年度計画を達成したため順調と判定した。次年度も中期計画の趣旨に沿って、無形民俗文化財の保存・活用に資する調査研究を続行する。また研究協議会についても、引き続き適時性や独創性を持ったテーマを選択し、開催する予定である。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	無形文化遺産保護に関する研究交流・情報収集((1)－④－3)		
【事業概要】 無形文化遺産保護に関わる国際的動向の情報収集を図り、アジアを中心とする海外の研究機関等との研究交流を実施し、国内外の無形文化遺産保護に貢献する。			
【担当部課】	無形文化遺産部	【プロジェクト責任者】	副所長（部長兼務） 石崎武志
【スタッフ】 高桑いづみ(無形文化財研究室長)、飯島満(音声・映像記録研究室長)、久保田裕道（主任研究員）、菊池理予(研究員)、今石みぎわ(研究員)			
【主な成果】 韓国国立文化財研究所無形文化遺産研究室との交流事業において、平成 23 年度に調印した合意書に基づき、研究員の相互派遣を内容とする研究交流を実施した。また関係する国際会議・シンポジウム等へ参加し、海外研究者への助言や調査協力を通して、無形文化遺産分野における国際的情報収集及び情報提供を行った。			
【年度実績概要】 ・韓国との交流事業では、平成 23 年度に調印した「無形文化遺産の保護に関する日韓研究交流合意書」に基づき、韓国国立文化財研究所から、同研究所無形文化遺産研究室の黄慶順学芸研究士を 25 年 4 月 17 日～29 日の間、同室の李叙源研究士を 25 年 5 月 21 日～6 月 3 日の間、無形文化遺産部に迎え、研究交流を実施した。日本側からは、25 年 6 月 16 日～30 日の間、今石みぎわ研究員を韓国に派遣し、韓国における無形文化財（工芸技術）の保護制度について調査研究を行った。 ・無形文化遺産分野の国際的情報収集では、以下の国際会議等に出席し、情報収集及び研究発表等を実施した。 25 年 4 月 11 日～15 日「東アジアの伝統的綱引き国際シンポジウム」大韓民国 唐津市 25 年 9 月 12 日～16 日「韓日国際管楽器フェスティバル」大韓民国 慶州市 25 年 11 月 20 日～24 日「第五回東亜細亜国際音楽考古学学会」大韓民国 釜山市 25 年 12 月 2 日～7 日「無形文化遺産保護条約第 8 回政府間委員会」アゼルバイジャン バクー ・25 年 4 月から 12 月にかけて、“Field Survey of the Intangible Cultural Heritage Safeguarding Efforts in the Asia-Pacific Region（アジア太平洋地域における無形文化遺産保護の取り組みについてのフィールド調査）”を、韓国ユネスコカテゴリー2 センターからの依頼により実施。その成果は 12 月に同センターから報告書として刊行された。 ・アジア太平洋無形文化遺産研究センターからの要請で、25 年 10 月 23 日に東ティモールの行政官一行の東京文化財研究所への視察を受け入れ、専門家向けの研修会を実施した。なお、アジア太平洋無形文化遺産研究センターとは、この研修会の実施にあわせ、今後の事業の進め方などについても協議した。			
			
李叙源研究士（韓国国立文化財研究所）との昭和村での調査（25 年 5 月 22 日）			
【実績値】 報告書 1 件(①) 発表件数 2 件(②～③)			
【備考】 報告書 ① International Information and Networking Centre for Intangible Cultural Heritage in the Asia-Pacific Region under the auspices of UNESCO, Department of Intangible Cultural Heritage, NRICPT, Intangible Cultural Heritage Safeguarding Efforts in Japan, Korea, 2013.12 発表 ② 高桑いづみ「現存する一節切—正倉院から 17 世紀初頭まで」韓日国際管楽器フェスティバル 2013.9.14 ③ 高桑いづみ「日本における出土鼓胴と古制の鼓胴について」第五回東亜細亜国際音楽考古学学会 2013.11.23			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京文化財研究所

処理番号 4143

自己点検評価調査

研No.9

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	A	A	A		
判定理由 適時性：大韓民国のユネスコカテゴリー2センターとの共同でアジア太平洋地域における無形文化遺産保護の取り組みについてのフィールド調査を実施し、その成果を報告書として刊行した。 独創性：日中韓の音楽考古学国際会議等で、日本側からの研究状況を発表し、研究交流を行った点は、当研究所が長年取り組んできたテーマの独自性を海外にも公開することとなった。 発展性・継続性：韓国国立文化財研究所との研究交流も第2期2年目を迎え、より積極的な研究交流へと発展しつつある。						

2. 定量的評価

観点	報告書	発表件数				
判定	A	A				
判定理由 報告書・発表件数：成果は十分である。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	韓国国立文化財研究所との研究交流は計画通りであり、それ以外の事業でも海外への発信を行うことができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施しており、当該年度計画を達成したため順調と判定した。韓国国立文化財研究所無形文化遺産研究室との研究交流の成果は3年後に報告書としてまとめる計画であり、それに向けて着実な実績を上げることができた。次年度も引き続き、幅広い分野で研究交流を行うよう、積極的に働きかけていきたい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	我が国の記念物に関する調査・研究（遺跡等整備）（(1)－⑤－ア）		
【事業概要】 遺跡等の整備に関連する国際的な動向も踏まえた資料収集・調査・整理等を行い、文化財の包括的保存管理を検討する一環として、遺跡等のマネジメントに関する研究集会を開催するとともに、個々の遺跡の現況に応じた適切な保存修理・整備に資する。			
【担当部課】	文化遺産部	【プロジェクト責任者】	文化遺産部長 林 良彦
【スタッフ】 中島義晴（文化遺産部主任研究員）、大平和弘（兵庫県立人と自然の博物館研究員、前遺跡整備研究室アソシエイトフェロー）、平澤 毅（景観研究室長）、菊地淑人（景観研究室アソシエイトフェロー）			
【主な成果】 「計画の意義と方法」を主題として遺跡等のマネジメントに関する研究集会を開催するとともに、過年度の成果について、『パブリックな存在としての遺跡・遺産』[平成 24 年度遺跡等マネジメント研究集会（第 2 回）報告書]を刊行・配布するなど、その普及等を行った。			
【年度実績概要】 ・国内外における遺跡の整備に関する調査研究活動の一環として、遺跡整備事例に関する現地調査・情報収集を実施した。 ・26年1月24、25日に、「計画の意義と方法」を主題とし、平成25年度遺跡等マネジメント研究集会（第3回）を遺跡整備・景観合同研究集会として平城宮跡資料館講堂で開催した。研究集会の開催趣旨等の他、講演3件、事例研究報告4件が発表され、これらを踏まえ討議を行った。 ・研究集会開催後、次年度にこの研究集会の報告書を編集・刊行する準備として、討議内容の整理等を進めた。 ・昨年度の研究集会「パブリックな存在としての遺跡・遺産」の成果について検討を加え、「奈良文化財研究所紀要2013」に報告するとともに、報告書を執筆・編集・刊行した。 ・全国の地方公共団体教育委員会文化財保護主管課等に対して、平成24年度刊行の報告書（『自然的文化財のマネジメント』、『遺構露出展示に関する調査研究』等）を配布するなど、過年度の成果の公表に努めた。		 平成 25 年度遺跡整備・景観合同研究集会	
【実績値】 研究集会開催数 1 回(①：参加者数 地方公共団体職員・民間事業者・ボランティア等、148 名) 刊行図書数 1 件(②) 論文等数 5 件(③) (参考値) 平成 25 年度遺跡整備・景観合同研究集会 参加者総数 148 名 アンケート回答 86 名（回収率約 58.1％） 大変有意義であった：44 人(51.1％)、有意義であった：37 人(43.0％)、普通であった：4 人(4.7％)、あまり有意義でなかった：1(1.2％)、有意義でなかった：0 人(0％)			
【備考】 研究集会 ①『遺跡整備・景観合同研究集会「計画の意義と方法」講演・報告資料集』 2014.1 刊行図書 ②『パブリックな存在としての遺跡・遺産』平成 24 年度遺跡等マネジメント研究集会（第 2 回）報告書 2014.1 論文等 ③平澤毅「パブリックな存在としての遺跡・遺産」『奈良文化財研究所紀要2013』 2013.6 他 4 件			

自己点検評価調査

研No.10

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	効率性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：遺跡の整備や文化的景観の保存に関する計画の意義と方法について検討した研究集会は、今日的な課題を扱ったものであり、時宜を得たものと言える。 独創性：遺跡の整備や文化的景観の保存に関する計画の意義と方法について、多様な分野からの講演・報告をもとに検討した研究集会は、これまでに無く独創的なものと言える。 発展性：研究集会は、22年度に開催した遺跡整備・活用研究集会（第5回）「地域における遺跡の総合的マネジメント」を基礎として、23年度「自然的文化財のマネジメント」、24年度「パブリックな存在としての遺跡・遺産」に引き続き、遺跡等のマネジメントに関する課題について発展的に検討を重ねている。 継続性：保存・活用に関する基礎的・応用的な検討を基礎としながら、研究集会の開催等を通じ、遺跡等のマネジメントについて継続的に検討を進めている。 効率性：研究集会の開催、報告書の刊行、論文の発表等をスケジュール通りに進めることができ、事業を効率的に実施できた。						

2. 定量的評価

観点	研究集会開催回数	刊行図書数	論文等数			
判定	A	A	A			
判定理由 研究集会開催回数：計画通り、研究集会を1回開催した。 刊行図書数：計画通り、1冊刊行できた。 論文等数：十分な成果が認められる。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当初の計画通り事業を実施した。特に、遺跡等マネジメント研究集会については、遺跡の整備等に関する計画の意義と方法を主題とし、近年の全国的な課題を検討した取組として極めて重要である。また、過年度研究集会の報告書を刊行し、遺跡の整備に関する論文等を発表しており、調査・研究の成果を公表している。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	遺跡等の整備に関する情報の収集・整理・公開の検討を様々な観点から進めることができた。特に、研究集会については、22年度に開催した遺跡整備・活用研究集会（第5回）「地域における遺跡の総合的マネジメント」を基礎として、23年度「自然的文化財のマネジメント」、24年度「パブリックな存在としての遺跡・遺産」に引き続き、「計画の意義と方法」を主題として検討した。これらによって、急速に変化していく社会構造・国民生活等と遺跡を含む記念物保護との関係を考慮しつつ、遺跡等のマネジメントに関する特に重要な諸課題について検討を行い、文化財の保存と活用を図るための調査・研究を推進できている。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	我が国の記念物に関する調査・研究(庭園)((1)ー⑤ーイ)		
【事業概要】 庭園史に関する文献調査及び国内外での現地調査の他、「庭園の歴史に関する研究会」の開催など、日本庭園に関する基礎的資料の検討を行い、併せて森・村岡・牛川資料の整理・研究を進める。			
【担当部課】	文化遺産部	【プロジェクト責任者】	文化遺産部長 林 良彦
【スタッフ】 中島義晴（文化遺産部主任研究員）、大平和弘（兵庫県立人と自然の博物館研究員、前遺跡整備研究室アソシエイトフェロー）、マレス・E・ベルナル（総合地球環境学研究所事務補佐員、客員研究員）、小野健吉（副所長）、エドワーズ・W.（中国科学院心理学研究所編集局事務担当、客員研究員）、青木達司（文化庁、前文化遺産部主任研究員）			
【主な成果】 中世の庭園・建築・文学・美術史などの研究に取り組んでいる研究者とともに「庭園の歴史に関する研究会」を開催し、その成果を報告書としてまとめた。奈良市における庭園の悉皆的調査に取り組み、寺院庭園の調査を行った。			
【年度実績概要】 ・25年11月2日に、大学などの外部研究者(庭園史学、建築史学、美術史学、考古学など)とともに「庭園の歴史に関する研究会」(テーマ：室町時代の将軍の庭園)を開催した。 ・上記の研究会の報告書『平成25年度庭園の歴史に関する研究会 室町時代の将軍の庭園』の執筆・編集・刊行を行った。 ・奈良市と連携研究協定を結び、奈良市における庭園の悉皆的調査に取り組み、寺院庭園について、アンケート及び現地調査を行った。 ・森蘊・村岡正・牛川喜幸の庭園等関係研究資料について、整理を進めた。 ・発掘庭園データベースについて、新たな事例収集を進めた。  奈良市における庭園の悉皆的調査の様子（薬師寺）			
【実績値】 研究会開催数：1回（①奈良文化財研究所；大学等研究者20名参加） 報告書等刊行件数：1件（②） 論文等数：6件（論文5件③、講演・発表等1件④）。			
【備考】 研究会 ①『平成25年度庭園の歴史に関する研究会 室町時代の将軍の庭園 資料集』 2013.11 報告書等刊行 ②『室町時代の将軍の庭園』平成25年度庭園の歴史に関する研究会報告書 2014.3 論文等 ③青木達司「禅宗寺院と庭園」『奈良文化財研究所紀要2013』 2013.6 他4件 ④中島義晴「近代奈良の庭園ー近年の調査報告から」2013.11			

自己点検評価調査

研No.11

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	効率性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：中世の庭園に関する研究会（テーマ：室町時代の将軍の庭園）を開催し、庭園史学、建築史学、美術史学、考古学などの外部研究者とともに、多面的に庭園史を考え、報告書にまとめたことは、テーマの発展性や今後の研究方法の在り方を考えても時宜を得たものであった。 独創性：研究会を開催し、研究発表と討論によって多面的に庭園史を検討し、幅広い観点からの考察と新たな課題の明確化を行ったことは、独創的であると言える。 発展性：今期中期計画では中世の庭園を研究対象としており、本年度の成果は来年度に行うこととしている戦国時代の庭園の研究へと発展させることが期待できる。 継続性：研究会の開催及び報告書の刊行の他、資料収集やデータの改訂に向けた作業等、昨年度から行ってきた事業を着実に進めることができた。 効率性：研究集会の開催、報告書の刊行、論文の発表等をスケジュール通りに進めることができたので、事業を効率的に実施できたと評価できる。						

2. 定量的評価

観点	研究会開催数	報告書等刊行件数	論文等数			
判定	A	A	A			
判定理由 研究会開催数：計画通り、研究会を1回開催し、研究を深めることができた。 報告書等刊行件数：計画通り、報告書を1冊刊行した。 論文等数：十分な成果が認められる。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当初の計画通り事業を実施した。また、今後の調査研究に関して取り組むべき具体的な課題を明らかにできた。特に、「庭園の歴史に関する研究会」を開催し、庭園史学、建築史学、美術史学、考古学などの外部研究者とともに、多面的に庭園史を考え、報告書にまとめたことは意義があった。また、庭園史及び歴史的庭園等の調査に関する研究成果の情報発信も着実に進めることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	庭園史に関する文献調査、庭園の現地調査、研究会の実施、日本庭園に関する基礎的資料のデータベース化の他、資料の整理についても、着実に進めることができた。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	我が国の記念物に関する調査・研究(国際研究交流)((1)－⑤－ウ)		
【事業概要】 不動産文化財に関連した研究成果について、米国・コロンビア大学との研究交流の下に、コロンビア大学にて講演を行う。			
【担当部課】	文化遺産部	【プロジェクト責任者】	文化遺産部長 林 良彦
【スタッフ】 小野健吉（副所長）、中島義晴（文化遺産部主任研究員）、大平和弘（兵庫県立人と自然の博物館研究員、前遺跡整備研究室アソシエイトフェロー）、海野 聡（遺構研究室研究員）、菊地淑人（景観研究室アソシエイトフェロー）、マレス・E・ベルナル（総合地球環境学研究所事務補佐員、客員研究員）、鈴木智大（建造物研究室研究員）、平澤 毅（景観研究室長）、恵谷浩子（景観研究室研究員）、田代亜紀子（国際遺跡研究室アソシエイトフェロー）			
【主な成果】 米国・コロンビア大学からのインターン（3名）受入の対応を行った。 米国・コロンビア大学において、日本の不動産文化財に係る講演2件を実施した。			
【年度実績概要】 ・25年5月27日から6月7日にかけて、Trisha Logan（コロンビア大学建築・計画・保存大学院アシスタントディレクター）、Tianchi Yang及びJee Eun Ahn（以上2名同大学院生）の3名のインターンを受け入れ、木造建築ならではの修理、補強等について理解が深まるように、日本における文化財修理現場の見学等を実施した。 ・25年9月17日に、米国・コロンビア大学において、コロンビア大学中世日本研究所及びコロンビア大学建築・計画・保存大学院と講演会を共催し、“Research on Large Diameter and Long Logs Used to Maintain Important Cultural Buildings in Japan” 及び “Matsuri in Japan’s Historic Districts: Using Traditional Festivals as a Driver in Local Communities” の2つの講演を行い、それぞれ、木造建築物修理における大規模な木材の需要と供給、高山を例として伝統的行事が地域の維持に果たす役割について発表した。			
			
		コロンビア大学での講演	
【実績値】 講演会開催数：1回（講演2件①，米国・コロンビア大学；約30名参加）			
【備考】 学会、研究会等発表 ①海野聡「Research on Large Diameter and Long Logs Used to Maintain Important Cultural Buildings in Japan」 他1件			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 4153

自己点検評価調書

研No.12

1. 定性的評価

観点	発展性	継続性				
判定	A	A				
判定理由 発展性：研究交流の一環として、今年度、コロンビア大学から初めてのインターン受入を実施できた。 継続性：米国・コロンビア大学との研究交流について、平成23年度からの事業を着実に進めることができた。						

2. 定量的評価

観点	講演会開催数					
判定	A					
判定理由 講演会開催数：計画通り、米国・コロンビア大学において、講演会を1回開催できた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当初の計画通り事業を実施し、不動産文化財等に関する研究成果の情報発信を着実に進めることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	米国・コロンビア大学との研究交流のもとに不動産文化財等に関連する研究成果の発表を計画通りに行い、併せて今後の研究交流事業の方向性等を確認できた。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	平城宮跡第一次大極殿院の発掘調査（(1)－⑥－ア）		
【事業概要】 古代都城の実体解明のため、平城宮・京跡、藤原宮・京跡、及び飛鳥地域等の発掘調査を実施するとともに、古代官衙・集落遺跡に関する研究集会、古代瓦に関する研究集会を実施し、報告書を刊行する。本プロジェクトでは、平城宮跡の発掘調査を行う。			
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長 小野 健吉
【スタッフ】 渡辺丈彦（都城発掘調査部主任研究員）、青木 敬（考古第二研究室研究員）、大澤正吾（考古第二研究室研究員）、海野 聡（遺構研究室研究員）、山本祥隆（史料研究室研究員）、諫早直人（考古第一研究室研究員）、中村一郎（写真室主任）、栗山雅夫（写真室技術職員）			
【主な成果】 礎敷広場・石敷列・幢旗の遺構等を検出し、また第一次大極殿院の大極殿院の様相解明と復原整備に活かしうる資料を得た。 これらの発掘成果を記者発表・現地説明会・刊行物により、広く公開した。			
【年度実績概要】 発掘調査面積は 476 m ² 、調査期間は 26 年 1 月 7 日～3 月 18 日。 ・基本層序 地表から造成盛土（1.1～1.6m）、床土（30～40 cm）、包含層（5～10 cm）、奈良時代後半の礎敷（5～15 cm）、奈良時代後半の整地（5～10 cm）、奈良時代前半の礎敷（5～10 cm）、地山の順。 ・主な検出遺構 奈良時代後半の幢旗の遺構を 2 列各 4 基確認した。また平城第 217 次調査（1990 年）で検出した平安時代初頭の石敷列が南に延び南端で東西方向の溝と接続することを確認した。また、第一次大極殿院東半を発掘した平城第 72 次調査（1971 年）で検出していた南北溝の中軸線を挟んだ西対称位置で、同様の南北溝を検出した。この間が奈良時代前半の大極殿院南門から大極殿に至る南北通路であることを確認した。 ・主な出土遺物 瓦片・土器片など ・調査所見 既往の第一次大極殿院の調査では、儀式に伴う幢旗の遺構は確認されてこなかったが、幢旗の遺構を 8 箇所を確認し、一部については断面観察を行い 3 本の柱を一つの掘方に立てることが、明らかとなった。今回は既往の調査区画と一部重複させているが、上記のような断面を確認したことで、既往の調査で礎敷状遺構としていた遺構が、幢旗の遺構であることが明確となった。また、奈良時代前半の南北通路を確認したことで、今後の整備に反映できる成果を得ることができた。			
			
		調査区全景（南西より）	
【実績値】 論文等数：1 件（①） 報道発表等件数：1 件。 記者発表；平成 26 年 3 月 6 日、現地説明会；平成 26 年 3 月 8 日、聴衆約 715 人。 （参考値） 出土遺物：瓦片 7 箱、土器片 2 箱など。 記録作成数：実測図 20 枚（A2 判）、遺構写真約 50 枚（4×5）、デジタル写真約 850 枚。			
【備考】 ①海野 聡ほか「第一次大極殿院の調査 一第 520 次」『奈良文化財研究所紀要 2014』奈良文化財研究所、2014. 6（予定）			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 4161-1

自己点検評価調査

研No.13

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	正確性		
判定	A	A	A	A		
判定理由 適時性：新たな発掘遺構や遺物を迅速に公開し、活用に供した。 発展性：蓄積された資料の整理に加え、当該区域ならびに他の都城遺跡の解明のための調査・資料作成を行った。 継続性：膨大な既存発掘成果に今回の新資料を加え、当該調査区域の性格付けを明らかとした。 正確性：新たな遺構・遺物を後世の歴史資料とすべく、正確な資料作成と公開に努めた。						

2. 定量的評価

観点	論文等数	報道発表等 件数				
判定	A	A				
判定理由 論文等数：当初の目標に沿って、遺構や遺物についての分析を含めた報告を『奈良文化財研究所紀要 2014』に掲載する予定である。 報道発表等件数：当初計画したとおり、記者発表を行い、また一般市民に発掘遺構を直接見てもらう機会として現地説明会を行うことができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	既往調査で確認できなかった幢旗の遺構について、必要十分な成果を得るとともに、適切な発掘調査現場運営を行うことができた。古代の儀式空間を考えるうえで発掘成果は非常に大きいと考えられる。また第一次大極殿院の南北通路の西側溝や礎敷広場を確認したことで、現在、国土交通省の計画している当該地区の復原整備計画に活かす資料を得ることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	高い学術的水準を維持した調査を実施し、計画通りに順調に成果をあげた。 第一次大極殿院の様相を明らかとするため、次年度、継続して、当該発掘調査区の西方の調査を計画している。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	平城京左京二条二坊十五坪の発掘調査（(1)－⑥－ア）		
【事業概要】 古代都城の実体解明のため、平城宮・京跡、藤原宮・京跡、及び飛鳥地域等の発掘調査を実施するとともに、古代官衙・集落遺跡に関する研究集会、古代瓦に関する研究集会を実施し、報告書を刊行する。本プロジェクトでは、平城京跡の発掘調査を行う。			
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長 小野 健吉
【スタッフ】 小池伸彦（考古第一研究室長）、神野 恵（都城発掘調査部主任研究員）、川畑 純（考古第三研究室研究員）、松下迪生（遺構研究室アソシエイトフェロー）、中村一郎（写真室主任）			
【主な成果】 北側の調査区では掘立柱建物を検出した。遺存する柱根の規模から大規模な建物の一部である可能性があり、また数度の建て替えがあることも判明した。これらから、平城京の宅地としては比較的大規模な建物群が存在していたことが明らかとなった。南側の調査区では三彩瓦を含む瓦溜まりを検出した。これまでも同坪では三彩瓦が出土しており、既往の調査成果と合わせて、きわめて特異な土地利用の実態が明らかとなった。			
【年度実績概要】 調査面積は計 461 m ² 、調査期間は 25 年 4 月 23 日～6 月 4 日。			
- 基本層序 上から、宅地造成土（約 1 m）、旧染織工場造成土（約 30cm）、耕土・床土（約 20 cm）、部分的に奈良時代の遺物を含む包含層と整地土（約 5～20 cm）、地山（黄灰色粘土・礫混じり橙色土・明灰シルト）。遺構は整地土上面で確認した。 - 主な検出遺構 奈良時代の掘立柱建物を少なくとも 2 棟検出し、これとは別に施釉瓦を含む瓦溜りを検出した。さらに複数の調査区にまたがる室町時代後半～江戸時代の流路を検出した。 - 主な出土遺物 奈良時代の遺物としては、土器・瓦に加え、鬼瓦を含む三彩瓦が出土した。近世の流路からは、箸や漆器、曲物等の木製品や鉄滓など鍛冶関連遺物等が出土した。 - 調査所見 当該地は染織工場の跡地であるが、遺構の遺存状況は比較的良好であることが判明した。既往の調査でも施釉瓦が出土するなど、奈良時代前半の有力者の邸宅や奈良時代後半の法華寺関連の施設の可能性が指摘されてきたが、今回の調査でもそれを裏付ける成果を得た。ただし、建物などの検出遺構が部分的であり、奈良時代の当該地の性格を特定するまでには至らなかった。また、室町時代後半～江戸時代には、当該地に集落が形成あるいは隣接していたことが明らかとなった。		 F 区で検出した施釉瓦を含む瓦溜り	
【実績値】 論文等数：2 件（①・②） （参考値） 出土遺物：軒丸瓦 36 点、軒平瓦 82 点、丸瓦・平瓦計 1098 kg、土器・土製品 15 点、木製品等 167 点、金属製品 3 点。 記録作成数：実測図 24 枚（A2 判）、遺構写真 100 枚（4×5）。			
【備考】 論文等 ①神野 恵「法華寺旧境内の調査（平城第 514 次）」『奈文研ニュース』No. 50、奈良文化財研究所、2013. 9 ②神野 恵ほか「左京二条二坊十五坪の調査 一第 514 次」『奈良文化財研究所紀要 2014』奈良文化財研究所、2014. 6（予定）			

自己点検評価調査

研No.14

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：当該地は平城宮周辺の重点地区であり、奈良時代後半には法華寺の推定地、奈良時代前半は藤原不比等邸の推定地として、学術的に極めて重要な場所である。染織工場から住宅への建て替えに先立って、比較的大規模に発掘調査ができた点で、適時性、効率性のうえで顕著な成果と言える。 独創性：7箇所及び調査区の設定は、遺構の全容把握においては問題があったが建物の有無や規模を推定するうえでは有効であった。当該坪の性格を考えるうえで、重要なデータを得たことは評価ができる。 発展性：既往の発掘調査の手法に則って調査を進め、成果をあげることができた。 効率性：7箇所に分かれた発掘区の調査を順次進め、効率的な調査を行うことができた。 継続性：既往の調査につながるものとして、当該地区の発掘調査を継続して行うことができた。 正確性：ほぼ恒常的に研究員を2名以上配置し、また部員による現場検討会を開催するなど、精査、計測とも十分な精度を確保した調査を行うことができた。						

2. 定量的評価

観点	論文等数					
判定	A					
判定理由 論文等数：調査の速報として、『奈文研ニュース』No. 50 に概要を紹介するとともに、調査終了後、『奈良文化財研究所紀要 2014』に遺構・遺物の分析を含めた報告を行う予定である。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	既往の発掘調査成果を踏まえ、効率的で正確な発掘調査を行うことができた。ただし、当該地区全域の発掘調査は困難であったことから、7箇所の小調査区に分けることとなったため、重要な遺構の全容を把握することは難しかった。今次調査の成果をふまえ、今後の周辺地区の発掘調査に取り組んでゆきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	平城宮周辺の重点地区の発掘調査として、十分かつ良好な成果を得ることができた。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	平城京右京一条二坊四坪の発掘調査（(1)－⑥－ア）		
【事業概要】 古代都城の実体解明のため、平城宮・京跡、藤原宮・京跡、及び飛鳥地域等の発掘調査を実施するとともに、古代官衙・集落遺跡に関する研究集会、古代瓦に関する研究集会を実施し、報告書を刊行する。本プロジェクトでは平城京跡の発掘調査を行う。			
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長 小野 健吉
【スタッフ】 小池伸彦（考古第一研究室長）、箱崎和久（遺構研究室長）、神野 恵（都城発掘調査部主任研究員）、渡辺丈彦（都城発掘調査部主任研究員）、馬場 基（都城発掘調査部主任研究員）、庄田慎矢（考古第一研究室研究員）、青木 敬（考古第二研究室研究員）、小田裕樹（考古第二研究室研究員）、川畑 純（考古第三研究室研究員）、山本祥隆（史料研究室研究員）、海野 聡（遺構研究室研究員）、松下迪生（遺構研究室アソシエイトフェロー）、中村一郎（写真室主任）、今西康益（研究支援課長）、三本松俊徳（宮跡等活用支援係係員）			
【主な成果】 平城京右京一条二坊四坪の学術調査。奈良文化財研究所の庁舎建て替えに伴う予備調査として、現庁舎の周辺に6箇所の調査区を設定した。このうち北方の1箇所の調査区で条坊遺構を確認し、遺構の遺存状況が比較的良好であることを確認した。南方の4箇所の調査区では、奈良時代～中世の遺物を含む沼状の堆積を確認し、奈良時代の遺構が失われていることが判明した。現庁舎を機能させたままでも可能な最大限の調査を行い、遺構の遺存状況を確認することができた。			
【年度実績概要】 6箇所の小調査区に分かれる。調査面積は計230㎡、調査期間は25年7月29日～9月13日。			
・基本層序 上から、庁舎建設時の盛土（1.2～1.6m）、旧耕土・床土（10～20cm）で、その下に奈良時代の遺物を含む包含層、あるいは奈良時代の整地土等、調査区によって異なる。 ・主な検出遺構 北東の調査区で、西一坊大路西側溝と、それと並行する南北溝を数条検出した。 南方の4箇所の調査区では、奈良時代から中世の遺物を含む沼状堆積層が厚く堆積している。奈良時代の遺構面は失われたとみられる。 ・主な出土遺物 沼状堆積層からは、植物遺体のほか、奈良時代の土器、中世の瓦器などが出土した。その他、瓦片が少量出土した。 ・調査所見 北方の調査区では、遺構面が比較的良好に遺存していることを確認し、想定位置で西一坊大路西側溝をほぼ想定通りの位置で検出した。これより北方では、既往の調査で南北柱穴列を発見しているが、今回の調査ではそれらの性格、ひいては右京一条二坊四坪の土地利用を明らかにするまでには至らなかった。また、南方には沼状の堆積が広がっていることが判明した。これにより奈良時代の遺構面は失われたとみられ、一条南大路に関する遺構は検出できなかった。この沼状堆積の性格については、調査面積が狭小のため、把握することができなかった。			
			
第518次調査の一部（北から）			
【実績値】 論文等数：1件（①） （参考値） 出土遺物：丸瓦・平瓦 コンテナ3箱、土器・土製品 コンテナ3箱、木製品等1点、金属製品2点。 記録作成数：実測図19枚（A2判）、遺構写真80枚（4×5）。			
【備考】 ①神野 恵ほか「右京一条二坊四坪の調査 ー第518次」『奈良文化財研究所紀要2014』奈良文化財研究所、2014.6（予定）			



第518次調査の一部（北から）

自己点検評価調査

研No.15

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：奈良文化財研究所の庁舎建て替えに伴う予備調査として、現段階でできる限りの調査を行い、新庁舎の設計業務へ成果を反映させることができた。 独創性：調査区は、条坊側溝などの遺構を既往の調査成果等をもとに推定して設定した。残念ながら、一条南大路に関する遺構は失われていたが、西一坊大路西側溝を検出し、平城京の条坊を知る上で貴重な資料を得た。 発展性：平城京の条坊遺構と沼状堆積を検出し、当該地の歴史的様相を知る上で貴重な資料を得ることができた。これをもとに、新庁舎建設に伴う本調査の計画を立案する予定である。 効率性：6箇所の調査区は、既往の発掘調査等から遺構を推定して設定し、最小限の調査区で最大の成果をあげることができるよう工夫した。また、調査に伴う事前の樹木伐採やアスファルトの除去等の準備作業も、きわめて効率的に行うことができた。遺構の実測では調査員を増員して調査時間の短縮を図った。 継続性：既往の調査に続き、右京一条二坊四坪の調査を行い、当該地の歴史的様相を把握することができた。 正確性：調査は毎日複数の調査員によって行い、また遺構・遺物を検討しながら発掘現場を進行させるなど、精度の高い調査を行うことができた。						

2. 定量的評価

観点	論文等数					
判定	A					
判定理由 論文等数：『奈良文化財研究所紀要 2014』に遺構・遺物の分析を含めた報告を行う予定である。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	緊急の発掘調査ながら、担当部局が連携しながら、調査区の設定、調査員の調整、作業員や重機の手配、樹木伐採、アスファルトの除去等の準備作業を行い、必要時には調査員を増員するなど、効率的な調査を行うことができた。この調査成果は、次年度に計画している当該地区における新庁舎建設に伴う本調査の計画・立案に活かしていきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	平城宮周辺の発掘調査として、十分かつ良好な成果を得ることができた。平城京周辺の歴史的様相解明のため、今回の成果を活かしながら今後も継続して周辺の調査に望みたい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	古代官衙、集落遺跡等に関する研究集会の実施、報告書の刊行（(1)－⑥－ア）		
【事業概要】 古代都城の実体解明のため、平城宮・京跡、藤原宮・京跡、及び飛鳥地域等の発掘調査を実施するとともに、古代官衙・集落遺跡に関する研究集会、古代瓦に関する研究集会を実施し、報告書を刊行する。本プロジェクトでは古代官衙、集落遺跡等に関する研究集会を行う。			
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長 小野 健吉
【スタッフ】 馬場 基（都城発掘調査部主任研究員）、黒坂貴裕（都城発掘調査部主任研究員）、大林 潤・海野 聡（遺構研究室研究員）、青木 敬（考古第二研究室研究員）、小田裕樹（考古第二研究室研究員）、小澤 毅（遺跡調査・技術研究室長）			
【主な成果】 (1)第17回古代官衙・集落研究集会を開催した（25年12月13・14日）。テーマは「長舎と官衙の建物配置」である。各地の官衙遺跡における長舎建物について、考古学、建築史学、文献史といった各方面から検討し、長舎の出現や展開や機能など多岐にわたる議論が活発に繰り広げられた。 (2)昨年度実施した研究集会の報告書を『奈良文化財研究所研究報告第12冊 塩の生産・流通と官衙・集落』として刊行した。			
【年度実績概要】 (1)第17 古代官衙・集落研究集会の開催(25年12月13・14日) 「長舎と官衙の建物配置」と題して実施した。発表内容は、大橋泰夫（島根大学）「長舎と官衙研究の現状と課題」、鈴木一議（樞考研）「近畿地方の長舎建物」、長 直信（大分市）「九州における長舎建物の出現と展開」、小宮俊久（太田市）「東北、関東地方における長舎と官衙」、大林 潤（奈文研）「長舎状遺構の構造的検討」、古市 晃（神戸大学）「文献史料からみた長舎と官衙」、小田裕樹（奈文研）「コメント」の計7本で、最後に黒坂貴裕（奈文研）の司会により活発な議論が行われた。開催に当たっては、予稿集及び長舎建物に関する資料集を制作した。			
(2)報告書の刊行 昨年度の研究集会の報告書を『奈良文化財研究所研究報告第12冊 塩の生産・流通と官衙・集落』として刊行した。論考6編にコメント及び討議録を収載し、総頁数は208頁である。		 第17回 古代官衙・集落研究集会の討論 (平成25年12月13・14日、於 奈良文化財研究所)	
【実績値】 報告書等数：2件（①・②） 収集資料数：1,333件 (参考値) 第17回古代官衙・集落研究集会 参加者総数137名 アンケート回答120（回収率約88%） 大変有意義であった：71、有意義であった：45、普通：4、あまり有意義でなかった：0、有意義でなかった：0			
【備考】 報告書等 ①『長舎と官衙の建物配置』第17回 古代官衙・集落研究会研究報告資料、奈良文化財研究所、2013.12 ②『奈良文化財研究所研究報告第12冊 塩の生産・流通と官衙・集落』奈良文化財研究所、2013.12			



1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：古代官衙や集落の研究を推進するうえで、適切なテーマ設定を行うことができた。 独創性：長舎というこれまでにない検討視座から、多様な議論を引き出した研究会を開催した。 発展性：官衙に数多く認められる長舎を集成し、古代官衙の成立と展開について一定の見通しを得たこと、政庁の機能まで議論したことなど、今後の官衙研究に与える影響は大きい。 効率性：研究集会の準備や報告書などの作成は、都城発掘調査部を中心に埋蔵文化財センターの助力も得ながら効率的に進めることができた。 継続性：当研究所の事業として例年通り研究集会を開催し、報告書も刊行できた。いずれも研究所内外の研究者の協力を得て、充実した内容となった。参加者からは、次年度以降も継続的に研究集会を開催し、報告書を刊行することに期待する意見が多く寄せられている。 正確性：研究集会に際して作成した長舎遺構資料集成は、長舎の類例について悉皆的な集成を行ったもので、研究に資する正確なデータを広く提供することが可能となった。研究集会自体においても、各発表者の報告と活発な討論を通じて官衙研究の成果と課題を共有することができた。						

2. 定量的評価

観点	報告書等数	収集資料数				
判定	A	A				
判定理由 報告書等数：昨年度の研究集会の記録と資料集を『奈良文化財研究所研究報告第12冊 塩の生産・流通と官衙・集落』として刊行することができた。報告編には6編の論文とコメント、研究集会における討論記録を収録した。考古と文献の両分野から共通テーマを論じる研究領域の広範さ、独創的な各論考の内容、さらに新出資料を多数紹介した点など、今後の活用が期待できる。 収集資料数：第17回古代官衙・集落研究集会「長舎と官衙の建物配置」に際して作成した簡易製本の『長舎遺構資料集成』では、古代官衙における長舎の悉皆的な事例集成を行った。集成した事例数は1,333例にのぼり、全国の膨大な事例を集成し、かつ俯瞰できるようになったことから、今後の古代官衙研究に資する十分な資料収集を行うことができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	研究集会には、例年以上に多くの参加者を得て、関心の高さがうかがえ、またアンケートの結果もおおむね好評であり、適切なテーマ設定ができたと考えている。地方自治体からの参加者の評価も高く、地方自治体職員どうしの情報交換・共有の場としての役割も帯びており、今後も継続的に研究集会を開催し、研究成果や収集資料を公表していきたい。 次年度以降も、今年度と同様の成果が上がるよう、適切なテーマ設定を行い、研究集会の開催と報告書刊行の継続を目指す。なお、報告書や予稿集等の編集作業は、次第に効率化が進捗しつつあるが、高い質の維持と強い継続力確保のため、さらなる効率化を目指していきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	例年以上に盛会であった研究集会での報告や討論を通じて、古代都城の分析に資する成果を得たのみならず、全国地方自治体職員等との調査・研究情報を交換する場として、古代都城研究の質的向上の一助ともなった。また、報告書の刊行によって毎年の研究成果を公表し、国民共有の財産となったことも含めて順調と判定した。ただし、研究集会に際する事例収集業務は、1,300例を超える膨大なものとなり、予定以上の業務量が発生してしまった。本研究集会及び報告書については、全国の自治体職員等からその継続を望む声も大きく、古代都城の分析にも大いに役立つものであり、今後も継続して事業を推進する必要がある。そのため、継続的かつ安定的な事業実施を担保するためにも、報告書編集作業ならびに研究集会準備の効率化を一層推し進めていきたい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	古代瓦に関する研究集会の実施、報告書の刊行 (1)－⑥－ア)
【事業概要】 古代都城の実体解明のため、平城宮・京跡、藤原宮・京跡、及び飛鳥地域等の発掘調査を実施するとともに、古代官衙・集落遺跡に関する研究集会、古代瓦に関する研究集会を実施し、報告書を刊行する。本プロジェクトでは古代瓦に関する研究集会を行う。	
【担当部課】	都城発掘調査部 (平城)
【プロジェクト責任者】	副所長 小野 健吉
【スタッフ】 清野孝之 (考古第三研究室長)、渡辺丈彦 (都城発掘調査部主任研究員)、今井晃樹 (都城発掘調査部主任研究員)、森先一貴 (考古第三研究室研究員)、石田由紀子 (考古第三研究室研究員)、川畑 純 (考古第三研究室研究員)、中川二美 (考古第三研究室アソシエイトフェロー)、南部裕行 (考古第三研究室アソシエイトフェロー)	
【主な成果】 (1) 第14回古代瓦研究会シンポジウムを開催した (26年2月8・9日)。テーマは「8世紀の瓦づくりⅢー平城宮式軒瓦の展開1 6225-6663系ー」である。シンポジウムでは、平城宮式軒瓦の主体をしめる 6225-6663 型式について、平城宮・京での出土状況、また各地における当該形式採用の経緯などについて多岐にわたる議論が活発に繰り広げられた。 (2) 第12回シンポジウム (平成23年度)、第13回シンポジウム (平成24年度) の成果を、『古代瓦研究Ⅵ』として刊行した。	
【年度実績概要】 (1) 第14回古代瓦研究会シンポジウムの開催 (26年2月8・9日) 「8世紀の瓦づくりⅢー平城宮式軒瓦の展開1 6225-6663系」と題して実施した。発表内容は、石田由紀子 (奈良研) 「平城宮の 6225-6663 型式軒瓦」、原田憲二郎 (奈良市) 「平城京の 6225-6663 型式軒瓦」、近藤康二 (堺市) 「摂河泉地域の 6225-6663 系式軒瓦」、松尾佳子 (岡山県) 「中国地方の 6225-6663 系式軒瓦」、大川敬夫 (静岡県) 「東海地方の 6225-6663 系式軒瓦」、森本 剛 (千葉市) 「関東地方の 6225-6663 系式軒瓦」の計6本で、2日目の総合討議では、清野孝之 (奈良研) の司会により活発な議論が行われた。開催に当たっては、予稿集を制作した。 	
(2) 報告書の刊行 平成23年度第12回シンポジウムと平成24年度第13回シンポジウムの報告書を『古代瓦研究Ⅵー大官大寺式・興福寺式・鴻臚館式軒瓦の展開一、一重園文系軒瓦の展開一』として刊行した。論考20編にコメント及び討議録を収載し、総頁数は418頁である。 第14回 古代瓦研究会シンポジウムの討論 (平成26年2月8・9日、於 奈良文化財研究所)	
【実績値】 報告書等数：2件 (①・②) 論文等数：4件 (③～⑥) (参考値) 第14回古代瓦研究会シンポジウム 参加者総数105名 アンケート回答55 (回収率約52.4%) 大変有意義であった：39、有意義であった：13、普通：1、あまり有意義でなかった：0、有意義でなかった：0	
【備考】 報告書等 ① 『8世紀の瓦づくりⅢー平城宮式軒瓦の展開1 6225-6663系』第14回シンポジウム予稿集、2014.2 ② 『古代瓦研究Ⅵー大官大寺式・興福寺式・鴻臚館式軒瓦の展開一、一重園文系軒瓦の展開一』奈良文化財研究所、2014.2 論文等 ③ 清野孝之「大官大寺の出土軒瓦」『古代瓦研究Ⅵー大官大寺式・興福寺式・鴻臚館式軒瓦の展開一、一重園文系軒瓦の展開一』奈良文化財研究所、2014.2 ④ 今井晃樹「興福寺出土の興福寺式軒瓦」『古代瓦研究Ⅵー大官大寺式・興福寺式・鴻臚館式軒瓦の展開一、一重園文系軒瓦の展開一』奈良文化財研究所、2014.2 ⑤ 石田由紀子「平城宮内出土の興福寺式軒瓦」『古代瓦研究Ⅵー大官大寺式・興福寺式・鴻臚館式軒瓦の展開一、一重園文系軒瓦の展開一』奈良文化財研究所、2014.2 ⑥ 渡辺丈彦「平城宮の重園文系軒瓦」『古代瓦研究Ⅵー大官大寺式・興福寺式・鴻臚館式軒瓦の展開一、一重園文系軒瓦の展開一』奈良文化財研究所、2014.2	

自己点検評価調査

研No.17

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：古代瓦研究を推進するうえで、適切なテーマ設定を行うことができた。 独創性：平城宮において主体を占め、かつ全国的にも多く分布する型式の軒瓦をテーマとしたことにより、中央と地方における瓦生産の共通点と差異をこれまで以上に明瞭にすることができた。 発展性：今回対象とした型式以外にも、平城宮で主体を占め、かつ全国的に広く分布する軒瓦は複数型式あり、それらを今後の継続的にテーマとすることにより、より多角的な視点で中央と地方とでの瓦生産のあり方について明らかにできる。その意味で、今回のシンポジウムの成果はその端緒となるものであり、大きな発展性をもつものと考えられる。 効率性：シンポジウムの準備や報告書などの作成は、都城発掘調査部を中心に効率的に進めることができた。 継続性：当研究所の事業として例年通りシンポジウムを開催し、報告書も刊行できた。いずれも研究所内外の研究者の協力を得て、充実した内容となった。参加者からは、次年度以降も継続的にシンポジウムを開催し、報告書を刊行することに期待する意見が多く寄せられている。 正確性：刊行したシンポジウム予稿集や報告書には、全国的な視野で特定型式の古代瓦の報告がなされており、研究に資する正確なデータを広く提供することが可能となった。						

2. 定量的評価

観点	報告書等数	論文等数				
判定	A	A				
判定理由 報告書等数：第14回シンポジウム予稿集『8世紀の瓦づくりⅢ－平城宮式軒瓦の展開1 6225-6663系』及び、平成23・24年度シンポジウムの成果を盛り込んだ報告書『古代瓦研究Ⅵ－大官大寺式・興福寺式・鴻臚館式軒瓦の展開一、一重園文系軒瓦の展開一』を当初の予定どおり、遅滞なく刊行することができた。 論文等数：『古代瓦研究Ⅵ－大官大寺式・興福寺式・鴻臚館式軒瓦の展開一、一重園文系軒瓦の展開一』では奈良文化財研究所の職員4名が当初予定どおり論文を執筆した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	シンポジウムには多くの参加者を得て、アンケートの結果もおおむね好評である。また、各地方自治体からの参加者の評価も高く、今後も継続的に研究集会を開催し、研究成果を公表することが望まれる。次年度以降もシンポジウムの開催と報告書刊行を継続する予定である。なお、報告書や予稿集等の編集作業は、次第に効率化が浸透しつつあるが、高い質の維持と強い継続力確保のため、さらなる効率化を目指していきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	シンポジウムでの報告や討論を通じて、古代瓦研究に資する成果を得たのみならず、全国地方自治体職員等との調査・研究情報を交換する場として、古代都城研究の質的向上の一助ともなった。また、報告書の刊行によって研究成果を公表し、国民共有の財産となったことも含めて順調と判定した。本研究集会及び報告書については、全国の自治体職員等からその継続を望む声も大きく、古代都城の分析にも大いに役立つものであり、今後も継続して事業を推進する必要がある。そのため、継続的かつ安定的な事業実施を担保するためにも、報告書編集作業ならびに研究集会準備の効率化を一層推し進めていきたい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	藤原宮跡の発掘調査（（1）－⑥－ア）		
【事業概要】 「飛鳥・藤原」地域は、我が国古代国家成立期の舞台であり、6世紀末から8世紀初めに至る間、政治・経済・文化の中心であった。本研究は、発掘調査を通じて古代国家の具体像を復元すべく学際的な調査研究を行うものである。その成果は広く公開し、遺跡の保存・活用についても取り組んでいる。藤原宮跡は我が国初の本格的都城を備えた宮殿遺跡であり、官衙地区については研究所発足当初から、中枢部については平成11年度以降、実態解明のための計画調査を実施している。			
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
【スタッフ】 清野孝之(考古第三研究室長)、今井晃樹(都城発掘調査部主任研究員)、山本 崇(都城発掘調査部主任研究員)、森川実(都城発掘調査部主任研究員)、大林 潤(遺構研究室研究員)、前川 歩(遺構研究室研究員)、大澤正吾(考古第二研究室研究員)、若杉智宏(考古第二研究室研究員)、桑田訓也(史料研究室研究員)、廣瀬寛(考古第一研究室研究員)、和田一之輔(考古第一研究室研究員)、荒田敬介(考古第二研究室アソシエイトフェロー)、南部裕樹(考古第三研究室アソシエイトフェロー)、山野ケン陽次郎(熊本大学助教、前考古第一研究室アソシエイトフェロー)、井上直夫(写真室再雇用職員)、栗山雅夫(写真室技術職員)			
【主な成果】 藤原宮朝堂院朝庭東北部の発掘調査を実施した。調査の結果、朝庭の礫敷広場、排水用の礫詰暗渠、礫敷上から掘り込む柱列などを検出し、さらに朝庭の下層において、藤原宮造営期の溝や大小の沼状遺構を確認した。朝庭の空間利用や藤原宮の造営過程を考える上で、貴重な手がかりを得た。			
【年度実績概要】 調査地：藤原宮朝堂院朝庭の東北部。昨年度の第174次調査区の北側。 目的：朝庭（礫敷広場）での空間利用のあり方の検討、礫敷下層における遺構の状況確認 調査期間：平成25年4月8日～26年3月19日 調査面積：1430㎡ 調査成果：藤原宮期の遺構 ①朝庭の礫敷広場と排水用の礫詰暗渠。 ②東西方向の柱列。柱間は3m（10尺）、18間分（54m）を検出。 柱穴は径30cm前後の不整円形を呈し、深さは約35cm。 礫敷上から掘り込まれており、調査区の東に延びる可能性がある。 藤原宮造営期の遺構 ③大小複数の沼状遺構を検出。 第2次整地（朝庭の本格的な整備にともなう整地）以前の遺構。 埋土には造営時の木材加工で生じたとみられる木屑の薄い層を挟む。 多量の瓦を一括投棄したとみられる瓦だまりを検出。 従来1つと考えていた沼状遺構が、複数の沼状遺構が隣接していたことが判明。			
			
			②東西方向の柱列 （西から）
【実績値】 発表件数：4件（論文等2件①・④、報道発表1件②、現地説明会1件③） （参考値） 出土遺物：軒瓦40点、丸平瓦コンテナ79箱、土器コンテナ14箱、金属製品2点、石器・石製品2点、炭3点、種実2点、骨4点、馬歯2点 記録作成数：遺構実測図50枚、写真〈4×5〉176枚、デジタル写真429枚 現地説明会来場者数：337人			
【備考】 発表 ①和田一之輔「藤原宮朝堂院朝庭の調査（飛鳥藤原第179次）」『奈文研ニュース』No.50 2013.9 ②奈良文化財研究所都城発掘調査部「藤原宮朝堂院朝庭の調査（飛鳥藤原第179次調査）記者発表資料」2013.12.19 ③奈良文化財研究所都城発掘調査部「藤原宮朝堂院朝庭の調査（飛鳥藤原第179次調査）現地説明会資料」2013.12.21 ④奈良文化財研究所都城発掘調査部「藤原宮朝堂院朝庭の調査（飛鳥藤原第179次調査）」『奈良文化財研究所紀要2014』2014.6（予定）			

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：発掘調査は、現在必要な課題を解明するために調査地を選定して実施したもので、適時性の面で十分に評価できると判定した。 独創性：藤原宮の造営から解体までの過程を解明することができた。 発展性：藤原宮中枢部の空間利用、造営過程の実態解明に関する成果を蓄積し、研究課題への新たな展望を得た。 効率性：発掘調査・室内調査は事前の計画に基づき、必要最低限の時間的・人的・設備的投資によって遂行した。 継続性：特別史跡藤原宮跡の全体解明のための長期継続的な計画調査であり、長年の調査実績を基礎とした質の高い調査を実施した。 正確性：発掘調査の成果は全て現地で記録した。その過程では外部研究者を招聘して調査データの科学性・正確性を期した。						

2. 定量的評価

観点	発表件数					
判定	A					
判定理由 発表件数：目標どおり、論文等、報道発表、現地説明会で4件の発表を実施することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本調査研究は、調査・記録・公開・発表等を適切に行い、定性的・定量的評価において全て所期の目標を達成した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査研究は、年度当初の計画通りに実施されており、かつ目標を順調に達成した。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	飛鳥地域発掘調査((1)ー⑥ーア)
【事業概要】 飛鳥・藤原地域は、我が国古代国家成立期の舞台であり、6世紀末から8世紀初めにいたる間、政治・経済・文化の中心であった。本研究は、発掘調査を通じて古代国家の具体像を復元すべく学際的な調査研究を行うものである。その成果を広く公開し、遺跡の保存・活用についても取り組んでいる。甘樫丘は、蘇我氏が邸宅を構えたことで知られ、本遺跡はその関連遺跡として、実態解明のための計画調査を実施している。	
【担当部課】	都城発掘調査部（藤原）
【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
【スタッフ】 清野孝之(考古第三研究室長)、今井晃樹・山本崇・降幡順子(以上、都城発掘調査部主任研究員)、大林 潤・前川 歩(以上、遺構調査室研究員)、和田一之輔(考古第一研究室研究員)、若杉智宏(考古第二研究室研究員)、荒田敬介(考古第二研究室アソシエイトフェロー)、山野ケン陽次郎(熊本大学助教、前考古第一研究室アソシエイトフェロー)、中村一郎(写真室主任)、栗山雅夫(写真室技術職員)、井上直夫(写真室再雇用職員)	
【主な成果】 第177次調査では、既往の調査区とは異なる谷地を調査し、7世紀代に谷の斜面を切土・盛土し、平坦面を造成していたことが明らかとなった。また、建物2棟、溝1条、炭溜3基、土坑群などを検出した。	
【年度実績概要】 甘樫丘は、飛鳥川の西岸に位置する標高145mほどの丘陵で、多数の谷が入り込む複雑な地形を呈している。国営飛鳥歴史公園甘樫丘地区の整備に伴うものである。 調査地：2011年度まで継続的に調査を行ってきた谷の北に位置する。 A区は丘陵の尾根上、B区はその東に降る斜面、C区はさらに東で南東に開く谷に位置する。 調査期間：2012年度に着手しA区・B区の調査は、2013年1月17日に終了。 C区は平成25年3月で中断。その後2013年6月～10月4日に調査終了、12月6日に埋戻しを完了。 調査面積：803㎡。 調査成果：谷の造成 谷の斜面を切土・盛土し、平坦面を造成していたことが判明。 調査区西半では、斜面地を谷の地形に合わせて地山を削り、高低差約2mの上下2段の段を造り出す。 上段の平坦面は、南半は幅2～3mで、北に向かって広がる。 下段は、切土に加え、谷の低い部分を埋め立て、東西20m以上、南北30m以上の広い平坦面を造り出す。 出土遺物や堆積状況などから、谷の埋め立ては一気に行われたとみられる。 検出遺構 掘立柱建物は調査区北部中央で検出。東西3間、南北3間の総柱建物 柱間寸法は1.5m、北側と南側の1間は1.2m このほか建物1棟、溝1条、炭溜3基、土坑群など 7世紀代の甘樫丘は、広範囲にわたって大規模な造成に伴う開発がなされていた可能性がより強くなった。	
 検出した総柱建物（北から）	
【実績値】 論文等数：2件（①②）、発表件数2件（報道発表数：1件（③）、現地説明会：1件（④）） 出土遺物（参考値） 軒瓦2点、丸平瓦1箱分、土器33箱分、木器・木製品1箱分、金属製品2点、その他獣骨16点、壁土・高師小僧1箱、炭化物1箱、種実1箱。 記録作成数 遺構実測図62枚、写真（4×5）92枚、デジタル写真241枚	
【備考】 ①大林潤「甘樫丘東麓遺跡の調査（飛鳥藤原第177次）」『奈文研ニュース』No.51 2013.12 ②大林潤他「甘樫丘東麓遺跡の調査－飛鳥藤原第177次」『奈良文化財研究所紀要2014』2014.6（予定） ③奈良文化財研究所都城発掘調査部「甘樫丘東麓遺跡の調査（飛鳥藤原第177次）記者発表資料」2013.9.5 ④奈良文化財研究所都城発掘調査部「甘樫丘東麓遺跡 飛鳥藤原第177次現地見学会資料」2013.9.7	

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 4161-7

自己点検評価調査

研No.19

1. 定性的評価

観点	適時性	継続性	発展性			
判定	A	A	A			
判定理由 適時性：これまで不明であった新たな谷地における遺跡状況の解明を迅速に実施した。 継続性：計画調査の継続による遺跡全容の解明を着実に実施した。 発展性：遺構の広がりを確認し、今後の調査への見通しを得た。						

2. 定量的評価

観点	論文等数	発表件数				
判定	A	A				
判定理由 論文等数：目標どおり、紀要等で調査成果2件を公表することができた。 発表件数：目標どおり、報道発表、現地説明会で2件の発表を実施することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	第177次調査では、計画調査の目的である新たな谷地の遺構のありかたを確認したことにより、甘樫東麓遺構の広がり、遺跡の全体像解明に向けての良好な資料を得ることができた。この調査により、甘樫東麓遺跡は広い範囲にわたって大規模な造成工事を実施していた可能性が高まった。今後の研究に有益な資料を得ることができたため。

4. 中期計画の実施状況の確認

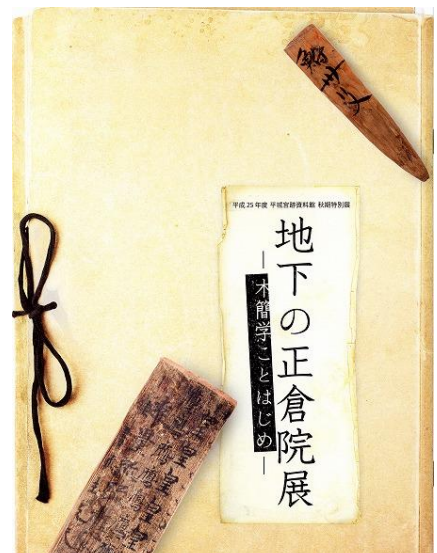
判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査研究は、年度当初の計画通り実施されており、新たな谷地の状況を確認し、全体のありかたを明らかにするとともに、整地ならびに周辺の土地利用の状況を確認したことで、甘樫丘東麓遺跡の性格、及び全体像解明に向けての目的を順調に達成した。

業務実績書

研No.20

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	平城宮・京跡の出土遺物と検出遺構の調査研究等（(1)－⑥－イ）		
【事業概要】			
国家の形成過程や当時の生活実態の解明に向けて、遺跡の発掘調査、出土品・遺構等に関する調査研究及び文化財建造物に関する基礎的調査研究を実施する。出土遺物及び遺構に関する調査、分析、復原的研究を総合的・多角的に実施し、整理が終了したものより順次公表を行う。			
【担当部課】	都城発掘調査部（平城）	【プロジェクト責任者】	副所長 小野 健吉
【スタッフ】			
小池伸彦・芝 康次郎・庄田慎矢・神野 恵・青木 敬・小田裕樹・渡辺丈彦・石田由紀子・川畑 純・渡邊晃宏・馬場 基・山本祥隆・箱崎和久・番 光・海野 聡・松下迪生(以上、都城発掘調査部)、中村一郎、栗山雅夫、鎌倉 綾(以上、企画調整部)、高妻洋成・脇谷草一郎・田村朋美・金田明大（以上、埋蔵文化財センター）			
【主な成果】			
本年度の発掘調査で出土した遺物や検出した遺構について、整理・分析研究、図面作成・写真撮影などの基礎作業を行い、今後の研究の基盤を整えるとともに、発掘調査の記者発表や現地説明会等に備えた。これらは平成 26 年度刊行予定の『奈良文化財研究所紀要 2014』の報告の準備ともなる。併せて、昨年度以前の発掘調査で出土した遺物や検出した遺構についても、整理・分析・調査を継続して実施した。			
【年度実績概要】			
・平成 25 年度の発掘調査による出土遺物の整理 平城宮・京跡で出土した木製品・金属製品・石製品・土器・土製品・瓦 磚類・木簡などの整理・分析研究、検出遺構の図面トレース・撮影写真の 整理・分析研究、及び出土遺物の科学的分析・保存処理は、発掘調査の基 礎作業であり、年間を通じて発掘調査と併行し、これを遅滞なく実施した。 関連する受託事業として行った発掘調査も、出土遺物や検出遺構の整 理・分析研究といった基礎作業の大半は本事業で行っている。このうち、 薬師寺十字廊の発掘調査（平城第 519 次）については、当初の予定通りに 『薬師寺-旧境内保存整備計画に伴う発掘調査概報Ⅱ-』を遅滞なく刊行し た。			
・過年度発掘調査出土遺物の整理と科学的保存処理 旧大乗院庭園の発掘調査報告書の刊行に向けて、平成 24 年度に引き続き 遺構と遺物の再整理・分析、報告書編集作業を実施した。 また、平城宮東区朝堂院地区の出土遺物・検出遺構についても、報告書 刊行に向けての再整理・分析を継続している。 さらに出土木製品を中心として、保存のための科学的処理を継続して実 施した。			
・『地下の正倉院展 ー木簡学ことはじめー』の開催と図録作成 これまでに平城宮内から出土した木簡の中から優品を選び、平城宮跡 資料館にて秋季企画展『地下の正倉院展 ー木簡学ことはじめー』（25 年 10 月 19 日～12 月 1 日）を開催し、広く公開した。これに伴って、展示解 説図録を作成した。			
【実績値】			
報告書等数：2 件（①②）			
【備考】			
報告書等			
①『薬師寺 ー旧境内保存整備計画にともなう発掘調査概報Ⅱー』薬師寺、2014. 3			
②『地下の正倉院展 ー木簡学ことはじめー』奈良文化財研究所、2013. 10			

『地下の正倉院展 ー木簡学ことはじめー』
展示図録



『地下の正倉院展 ―木簡学ことはじめ―』
展示図録

自己点検評価調査

研No.20

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	正確性		
判定	A	A	A	A		
判定理由 適時性：新たに出土・検出した遺物・遺構の資料的価値を明確にし、重要なものについては、発掘調査現場の記者発表や現地説明会等の機会に情報公開できるよう迅速に分析を行い、国民の文化財としての活用を図ることができた。 発展性：新たに出土した資料や検出した遺構の検討を通じ、より高度で精緻な古代史研究を推進するとともに、資料の分析にあたって新たな方法を追求することができた。 継続性：平城宮・京跡及び寺院遺跡の発掘調査を通じて得た膨大な歴史資料についての基礎的な分析と研究を継続することができた。 正確性：蓄積されている資料を正確に資料化し、歴史の事実を正確に把握することができた。						

2. 定量的評価

観点	報告書等数					
判定	A					
判定理由 報告書等数：当初予定の刊行物を順調に刊行できたことに加え、新しい成果、あるいは過去の調査成果・資料の分析をすすめ、適時公表することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	平城宮・京跡及び寺院遺跡で出土した膨大な考古資料・出土文字資料を継続的に整理・分析し、古代史研究上の様々な重要課題について、汎東アジア的な視点で検討を加えたこと、また刊行物等の当初予定通りに遅滞なく刊行できた。地道ではあるが、正確な歴史の事実を把握するために必要なこの事業を、次年度以降も着実に実行することが極めて重要である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	これまでの研究を基礎として、さらに新しい資料・方法を加味・活用して、研究を深化させることができた。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	飛鳥・藤原京跡出土遺物・遺構に関する調査研究等((1)ー⑥ーイ)		
【事業概要】 本年度の発掘調査により飛鳥・藤原京跡で出土した木製品・金属製品・石製品・動植物遺存体、土器・土製品、瓦磚類、木簡などの整理、分析研究、及び発掘遺構の図面・写真資料の整理・作成、分析作業を実施し、合わせて前年度までの発掘調査成果を報告書等で公開するための基礎的整理・分析・復原研究を行う。また、出土遺物の保存処理を継続的に実施する。			
【担当部課】	都城発掘調査部（藤原）	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査副部長 玉田芳英
【スタッフ】 清野孝之(考古第三研究室長)、今井晃樹、黒坂貴裕、森川実、降幡順子、山本 崇(以上、都城発掘調査部主任研究員)、諫早直人・廣瀬 覚(以上、考古第一研究室研究員)、大澤正吾・若杉智宏(以上、考古第二研究室研究員)、森先一貴(考古第三研究室研究員)、大林潤・前川歩(遺構研究室研究員)、桑田訓也(史料研究室研究員)、和田一之輔(考古第一研究室研究員)、荒田啓介(考古第二研究室アソシエイトフェロー)、南部裕樹(考古第三研究室アソシエイトフェロー)、井上直夫(写真室再雇用職員)、栗山雅夫(写真室技術職員)			
【主な成果】 本年度の発掘調査により出土した木製品・金属製品・石製品・動植物遺存体、土器・土製品、瓦磚類などの整理、分析研究、及び発掘遺構の図面・写真資料の整理・作成、分析作業を実施し、成果の一部を公表した。			
【年度実績概要】 ・本年度の発掘調査による出土遺物について 本年度、飛鳥・藤原京跡で出土した木製品・金属製品・石製品・動植物遺存体、土器・土製品、瓦磚類などの整理、分析研究、発掘遺構の図面・写真資料の整理・作成、分析作業及び、出土遺物の保存と保存処理は発掘調査研究の基礎作業であり、年間を通じての野外での発掘調査と並行して各研究室において計画的に遅滞なく実施した。成果の一部は、『奈良文化財研究所紀要 2014』等で公表する予定。 ・前年度までの出土遺物について 発掘調査成果を、計画中の『藤原京左京六条三坊発掘調査報告』等の報告書として公刊するための基礎的整理・分析・復原研究、出土遺物の保存処理を継続的に実施した。藤原京条坊に関連する発掘成果をデータ化する作業は、前年度に引き続いて実施した。 この他、坂田寺出土建築部材の整理及び写真撮影、高所寺池出土建築部材の保存処理、藤原宮西方地区出土木簡の整理、甘樫丘東麓遺跡（第 177 次）及び藤原宮朝堂院朝庭（第 179 次）の土壌分析、飛鳥寺出土の石製部材の調査、藤原宮出土瓦の胎土分析及び藤原宮朝堂院出土の鬼瓦と面戸瓦の調査を実施し、その成果の一部を『奈良文化財研究所紀要 2014』等で論文として公表する。また、木簡出土遺跡の集成や近年の木簡研究の動向など取りまとめて発表した。			
 藤原宮出土の鬼瓦の調査			
【実績値】 論文等数：4 件①～④ （参考値） 記録作成数：デジタル写真 1,390 枚			
【備考】 論文等 ① 降幡順子・森先一貴「藤原宮出土瓦の胎土分析」『奈良文化財研究所紀要 2014』2014.6(予定) ② 今井晃樹「藤原宮出土の鬼瓦と面戸瓦」『奈良文化財研究所紀要 2014』2014.6(予定) ③ 山本崇「近年の木簡調査研究の動向」『考古学ジャーナル』649、2013.11 ④ 奈良文化財研究所埋蔵文化財センター編（責任編集・山本崇）『埋蔵文化財ニュース第 154 号 全国木簡出土遺跡・報告書総覧Ⅱ』2014.2			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 4162-2

自己点検評価調査

研No.21

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：新出土資料を迅速に公開し活用に供した。 独創性：新たな資料分析方法を追究した。 発展性：蓄積された歴史資料を正確に資料化した。 継続性：膨大な歴史資料の基礎的分析研究と保存処理を実施した。 正確性：新出資料の正確な資料的性格と価値について公表した。						

2. 定量的評価

観点	論文数等					
判定	A					
判定理由 論文等数：過去の調査研究の資料を整理研究し、4件の論文、書籍等を公表することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	出土遺物・遺構についての整理調査を、野外での発掘調査と並行して遅滞なく計画通りに実施することができた。また、図書等の刊行を通じて、調査成果の公開も適切に行い得ることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	報告書作成のための遺物・遺構整理作業を、計画的に実施することができた。また、成果物の刊行も予定通りに行った。

業務実績書

研No.22

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	東アジアにおける工芸技術及び飛鳥時代の建築遺物等の研究（(1)－⑥－ウ）		
【事業概要】 飛鳥地域の壁画古墳についての調査研究を行うとともに、東アジアにおける工芸美術史・考古学研究の一環として、金属工芸関連遺物を中心とした資料の調査を行う。また、飛鳥時代木造建築遺物の調査として、山田寺出土部材の研究を行う。			
【担当部課】	飛鳥資料館	【プロジェクト責任者】	学芸室長 石橋茂登
【スタッフ】 丹羽崇史（学芸室研究員）、成田聖（前学芸室任期付研究員）			
【主な成果】 (1) キトラ古墳、高松塚古墳壁画に関する研究を継続した。 (2) 飛鳥寺塔心礎出土品の再整理を継続した。 (3) 川原寺裏山出土塑像の再整理を実施した。 (4) 日光男体山山頂出土鏡の分析を実施した。 (5) 山田寺出土部材の計測調査を継続した。			
【年度実績概要】 (1) 25 年 10 月 24 日に高松塚古墳壁画模写を作成した画家のうち今井珠泉氏から作成時の状況などを聞き取りした。25 年 12 月 16 日に高松塚古墳壁画模写の高精細デジタル撮影を行った。キトラ古墳壁画については平成 25 年度撮影の最新の壁画写真を用いて展示するとともにカタログを作成した。 (2) 昭和 31、32 年に奈良国立文化財研究所（当時）が行った飛鳥寺の発掘調査に際して、塔心礎から出土した資料を再分類し、種類ごとの員数等を確認する作業を行い、成果の一部を平成 25 年度春期特別展にて展示し図録を刊行した。その後、金属製品などの保存状況や形態などの基礎情報を整理する作業を継続した。 (3) 川原寺裏山出土塑像（明日香村所蔵、当館保管）について、保存状況や形態などの基礎情報を整理する作業を実施した。 (4) 栃木県日光二荒山神社の神体山である男体山山頂の祭祀遺跡から出土した青銅鏡について分析し、成果の一部をミニ企画展として公開し、研究図録を作成した。 (5) 第 2 展示室で展示している山田寺東回廊部材について、継続的に計測調査を行い、データを集積した。			
 高松塚壁画模写を見る今井画伯			
【実績値】 研究図録数 1 冊（①） 山田寺部材計測データ 1 年分 （参考値） カタログ 1（②） 図録 1（③）			
【備考】 研究図録 ①飛鳥資料館研究図録第 17 冊『日光二荒山神社中宮祠宝物館蔵鏡図録』2014. 3 カタログ ②飛鳥資料館カタログ第 29 冊『キトラ古墳壁画発見 30 周年記念 白虎 玄武 朱雀 青龍』2014. 1 図録 ③飛鳥資料館図録第 58 冊『飛鳥寺 2013』2013. 4			

自己点検評価調査

研No.22

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	A	A	A		
判定理由 適時性：高松塚壁画模写作成の関係者が高齢化・他界するなかで当時の状況の聞き取りができ、貴重な参考情報を得た。キトラ古墳壁画写真は特別公開カタログにあわせて最新画像を公表することができた。 独創性：飛鳥寺資料の再整理の成果を、研究と調査記録を総合した展示として紹介できたのは当研究所ならではの日光男体山出土青銅鏡のまとまった展示、分析はこれまでなく、貴重な機会となった。 発展性：飛鳥寺、川原寺の資料は今後の基礎資料となり、研究の進展に資する。古墳壁画・模写の精細な写真も実物にかわり広く公開活用され、研究の基礎資料となることが期待される。日光男体山出土品については銅鏡以外の出土品、あるいは他遺跡出土品との比較検討を進めるための資料ともなる。 継続性：東アジアの古代金工に関しては、17冊の研究図録を刊行している。また古墳壁画についても、資料の蓄積が進んでいる。						

2. 定量的評価

観点	研究図録数	山田寺部材計測データ				
判定	A	A				
判定理由 研究図録数：目標（年1冊以上）を達成できた。 山田寺部材計測データ：目標（1年分）を達成した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	出土品や部材データに関する着実なデータの蓄積とともに、最新の機器による精細な壁画・模写の写真撮影によって現状記録とともに公開活用の素材を整えることができた。外部所蔵の貴重な資料も分析するとともに展示企画、図録といった形で国民に情報提供や鑑賞の機会を与えるなど、多角的な展開をしている。今後も継続的に調査研究を続けるとともに資料館の活動に生かしていきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	データだけでなく、写真など各種の資料の蓄積も進み、研究図録の刊行も順調である。保存科学的分析や展示などともリンクした研究と成果発表を行っており、次年度以降も当研究所の体制を生かした総合的な研究を行っていききたい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡、墓制及び陶磁器に関する中国、韓国との共同研究及びカザフスタンへの研究協力 ((1)－⑥－エ)
【事業概要】 (1) 中国社会科学院との共同発掘調査成果の整理と次期共同研究への準備を行う。(2) 遼西地域東晋十六国期都城文化関連遺跡・遺物の調査を行う。(3) 鞏義市黄冶唐三彩窯跡等出土品の共同研究を実施する。(4) 日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究と発掘調査交流を、韓国国立文化財研究所と行う。(5) 国立カザフ大学との研究交流を行う。(6) 河南省文物考古研究所と河南省靈井遺跡出土細石刃石器群の研究協力を行う。	
【担当部課】	都城発掘調査部(平城)
【プロジェクト責任者】	副所長 小野 健吉
【スタッフ】 (1) 玉田芳英、今井晃樹(以上、都城発掘調査部)他5名(呉 炎亮・李 新全・華 玉冰・李 竜彬・李 霞)、栗山雅夫(企画調整部)、小澤 毅(埋蔵文化財センター) (2) 小野健吉、小池伸彦、清野孝之・川畑 純・諫早直人(以上、都城発掘調査部)、栗山雅夫(企画調整部)、他5名(呉 炎亮・李 新全・華 玉冰・李 竜彬・李 霞) (3) 玉田芳英、森川 実、降幡順子他6名(以上、都城発掘調査部)、難波洋三(埋蔵文化財センター)、丹羽崇史(企画調整部)他5名(孫 新民・白 宜鄭・李 勝利・邢 穎・梁 法偉) (4) 玉田芳英、清野孝之、馬場 基、青木 敬、廣瀬 寛、庄田慎矢、諫早直人、小田裕樹、石田由紀子(以上、都城調査部)、他24名(卓 京柏、朴 晟鎭、南 浩鉉、他) (5) 森本 晋、加藤真二(以上、企画調整部) (6) 加藤真二(企画調整部)	
【主な成果】 (1) 北魏洛陽城宮城における共同発掘調査の遺物整理作業、渤海・遼金代都城遺跡の踏査を実施した。 (2) 三官営子遺跡の踏査を実施。金嶺寺遺跡出土瓦・大板営子遺跡出土鉄製品・銅製品の調査を実施した。 (3) 唐三彩関連資料の調査を実施した。 (4) 日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究、発掘調査交流を実施した。 (5) カザフスタン関係資料の収集を実施した。 (6) 報告書原稿を河南省文物考古研究所に納品した。	
【年度実績概要】 (1) 25年8月に4名の研究員を河南省洛陽市に派遣し、北魏洛陽城宮城出土瓦を調査した。同年9月に黒龍江省、内蒙古自治区に研究員6名を派遣し、渤海～遼金代都城の遺跡踏査と遺物調査を実施した。 (2) 25年11月に4名の研究員を遼寧省瀋陽市・北票市・朝陽市に派遣し、三官営子遺跡の踏査と金嶺寺遺跡出土瓦20点余り、ならびに大板営子出土鉄製品・銅製品60点余りの調査を実施した。 (3) 25年6月に2名、9月に3名を派遣し、今後の協議及び河南省鄭州市・四川省にて唐三彩関連資料を調査した。11月に5名の研究員を河南省から招聘した。このほか、河南省出土唐三彩等の釉薬・胎土の分析を進め、結果は『華夏考古』に掲載の予定。 (4) 研究者7名を派遣し、2名を招聘した。25年11月8・9日にソウル市清溪川文化会館にて「日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究中間成果発表会」を開催し、5名を派遣した。発掘調査交流では各1名を約2ヶ月間、派遣・招聘し、研究報告会も実施した。 (5) カザフスタンの考古資料に関わる文献の収集を行った。 (6) 石器群の整理報告書を執筆し、25年11月に河南省文物考古研究所に原稿類を納品し、実測図などを返却した。	
【実績値】 論文等数：7件(①③④ほか4件)、報告書等数：1件(②)、口頭発表等数：8件(⑤ほか7件) (参考値) 記録作成数：(1) デジタル写真3,255カット、遺物実測図101点、(2) デジタル写真482カット、(3) 写真・調書等の記録多数	
【備考】 ①今井晃樹「漢魏洛陽城 北魏宮城西南隅の調査成果」『奈良文化財研究所紀要2013』2013.6 ②独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所／大韓民国国立文化財研究所『日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究』2014.2 ③小池伸彦「遼寧省文物考古研究所との共同研究」『奈文研ニュース』No.52、2014.3 ④小池伸彦「中国遼寧省文物考古研究所との共同研究」『奈良文化財研究所概要2014』2014.6(予定) ⑤馬場 基「東アジア文字文化研究の深化を目指して」日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究中間成果発表会 2013.11.8	



四川省における唐三彩の調査(平成25年9月)

自己点検評価調査

研No.23

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：成果報告を迅速に作成し、研究発表や論文、報告書等で速やかに公表を行った。韓国国立文化財研究所との共同研究は、計画の中間にあたるため、韓国にて中間成果発表会が行われ、日本側の成果を発表すると同時に研究の進展を確認することができた。 独創性：アジアの考古学に関する最新情報を入手・公開し、日本における事例との比較検討などを行うことができた。中国社会科学院との共同研究では、北魏洛陽城の出土瓦について、日本で長年培ってきた分析手法を取り入れて調査・研究を推進している。 発展性：海外の諸研究機関との密接な連携にもとづいた、日本文化の源流を探るための基礎的研究の蓄積をすることができた。河南省との共同研究は、再来年度から新たな計画に基づいた共同研究に入るが、それを見据えて調整を始めており、これまでの研究の蓄積を踏まえて次なるステップへ進もうとしている。 効率性：各事業では、数名の研究員を海外に派遣し、限られた時間内で効率的な資料収集を行うことができた。韓国の中間成果発表会は、前日入国、発表会後帰国という1泊2日の行程であった。大変効率的とも言えるが、予算が許せば、研究会後の意見交換などの時間も確保したかった。 継続性：各事業において、膨大な調査資料の詳細な調書作成や、高精細な写真撮影を継続的に実施し、資料の充実を図った。(6)の事業は今年度が最終年度であり、終了のための手続きを行うことができた。						

2. 定量的評価

観点	論文等数	報告書等数	口頭発表等数			
判定	A	A	A			
判定理由 論文等数：目標に沿うかたちで行うことができた。 報告書等数：予定したものを刊行することができた。 口頭発表等数：目標に沿うかたちで行うことができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中国、韓国を中心として、関係研究機関との密接な連携のもと、遺跡・遺物を考古学・文献史学・建築史など複数分野にまたがって調査し、相互の研究を向上させたほか、各事業を計画通りに実施することができた。 各事業とも、これまでの共同研究によって、日本の研究のみならず海外における研究の推進にも寄与している。また、人的な交流も熟成され、信頼関係は確固たるものとなりつつあり、それを活かしてさらなる研究を推進していきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	いずれの研究も計画通りに実施し、成果をあげることができたことから順調と判定した。 これらの国際共同研究は、都城発掘調査部を中心として担当している。(6)の事業は今年度が最終年度であり、来年度からは(1)～(4)を中心として研究を継続していきたい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化的景観及びその保存・活用に関する調査研究 ((1)～⑦)
【事業概要】 文化的景観及びその保護に関する基礎的・応用的な調査研究を推進するとともに、諸外国との比較のもとに、我が国の文化的景観保護に関する情報の収集・検討等を行う。また、過年度開催した研究集会の成果の取りまとめ及び公表を行うとともに、これまでの成果を踏まえつつ、文化的景観の学術及び保護に資する検討会を主催し、文化的景観の概念及び調査・計画手法等の体系化に取り組む。なお、例年開催の研究集会については、計画の策定と実施をテーマとして、遺跡等のマネジメントに関する研究集会と合同で開催する。	
【担当部課】	文化遺産部
【プロジェクト責任者】	景観研究室長 平澤毅
【スタッフ】 恵谷浩子（景観研究室研究員）、菊地淑人（景観研究室アソシエイトフェロー）、 広田純一（岩手大学教授・客員研究員）、小浦久子（大阪大学准教授・客員研究員）	
【主な成果】 文化的景観及びその保存・活用に関する調査・研究の一環として、「文化的景観学」検討会を開催したほか、現地調査等を行い、論文等を通じて成果を報告した。また、『World Heritage Papers 26』の翻訳作業等を進めた。	
【年度実績概要】 (1) 基礎的・体系的研究 ・「文化的景観学」検討会を、25年6月2日、8月3・4日、10月27日、26年1月26日、3月18日に開催し、文化的景観学の体系化に向けて検討を進めた。 ・諸外国との比較研究のため、フランスに関する現地調査を9月に行った。サン・テミリオン管轄区、ブルゴーニュ、シャンパーニュの現地調査のほか、ボルドー建築造園高等専門学校の専門家へのヒアリング等を行った。（紀要2014に報告の予定。） ・研究集会「テーマ「計画の意義と方法～」を、26年1月24・25日に、遺跡整備研究室と合同で開催した。特別講演1件と基調講演2件、2日目は報告4件と総合討議を行った。アンケート[回収率58%]では、94%から有意義であったとの回答を得た。 ・上記の研究集会に合わせ、『講演・報告資料集』（備考①）を作成したほか、昨年度開催した研究集会（第5回）の成果報告書（備考②）を刊行した。 ・『World Heritage Papers 26 World Heritage Cultural Landscapes: A Handbook for Conservation and Management』の翻訳作業等を進めた。	
(2) 文化的景観保護に関する現地調査・研究 ・重要文化的景観等に関する最新の情報を収集・整理し、関連情報とのリンクを付してウェブサイト上に公開した。 ・宇治市、四万十市等をフィールドに、それぞれの地方公共団体担当部局への協力を通じて、文化的景観の価値評価及び整備計画に関する検討を行った。 ・全国の文化的景観に関する協議等により、文化的景観の価値評価及び保護のあり方について検討を進めた。	
【実績値】 研究集会等開催数：6回 研究集会 1回①（遺跡整備研究室と合同開催、参加者数／地方自治体職員・研究者・民間事業者等、148名） 検討会開催数5回 刊行図書数：1冊② 論文等数：19件（講演・発表等9件③、論文等10件④）	
【備考】 研究集会 ①奈良文化財研究所『平成25年度遺跡整備・景観合同研究集会 計画の意義と方法～計画は何のために策定し、どのように実施するのか？～ 講演・報告資料集』2014.1 刊行図書 ②奈良文化財研究所『文化的景観研究集会(第5回)報告書 文化的景観のつかい方』2014.1 論文等 ③平澤毅「文化的資産としての名勝地」京都造園懇談会、2013.5 ほかに8件（詳細については統計表参照） ④恵谷浩子「文化的景観のつかい方」奈良文化財研究所紀要、2013.6 ほかに9件（詳細については統計表参照）	



「文化的景観学」検討会（25年8月3・4日）

自己点検評価調査

研No.24

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：研究集会及び「文化的景観学」検討会を通じて、2004年に創設された文化的景観保護制度の今日的な運用について、特に保存計画及び地域総合施策の観点から検討を深めたことは、極めて時宜に適っている。 独創性：現地調査を通じて保護手法に関する検討・提案を行い、文化的景観保護行政及びその学術研究の向上に貢献した。 発展性：国内事例に関する調査研究並びに文化的景観関連文献の翻訳及びフランスにおける取組の現地調査等を踏まえつつ、国内外の文化的景観に関する検討を発展的に進めた。 継続性：研究集会及び「文化的景観学」検討会のほか、現地調査や情報収集を通じて、従前の成果を踏まえつつ、文化的景観の保存と活用に関する継続的検討を進めた。 正確性：文化庁との連携の下に、国内の文化的景観に関わる情報の把握・収集及び現地調査において、詳細かつ正確な把握・検討・公開等を行った。						

2. 定量的評価

観点	研究集会等開催数	刊行図書数	論文等数			
判定	A	A	A			
判定理由 研究集会等開催数：研究集会については当初予定の1回を達成し、極めて好評であった。また、検討会については、5回開催し、文化的景観学の体系化に関する検討を進めることができた。 刊行図書数：計画通り1冊の報告書を刊行した。 論文等数：十分な成果が認められる。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	1：文化的景観に関する研究集会等の実施による保護行政や学術研究への貢献、2：宇治市、四万十川流域などを対象とした現地での調査研究、3：文化的景観に関する重要な海外文献の翻訳、4：報告書の刊行や学会・学術雑誌等での研究成果発表等、年度当初の計画を的確に遂行することができた。これらの調査研究の取組を発展・継続させ、さらに充実を図っていく必要がある。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	文化的景観に関する研究集会の開催や現地調査の実施等により、当初の計画通り研究を遂行することができた。特に、研究集会では、計画の策定と実施の観点から文化的景観保護の在り方を深め、また、現地調査・研究では、保存計画や整備・活用計画の策定について検討を進めることができた。 次年度以降、文化庁との連携・協力を深めつつ、「文化的景観学」検討会の取組を中心として、個別の課題に対する検討も重ね、文化的景観に関する学術上及び保護行政上の検討をさらに深めていくこととしている。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	遺跡データベースの作成と公開((1)－⑧－ア)		
【事業概要】			
官衙関係遺跡の指標や属性分析法の確立に関する研究等を継続し、資料収集とデータベース化を進めて順次一般公開するとともに、寺院遺跡の発掘調査で抽出すべき基本的属性についてのデータ収集と分析を行い、一般公開する			
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	遺跡・調査技術研究室長 小澤毅
【スタッフ】			
山中敏史（元文化遺産部長、客員研究員）、森本 晋（国際遺跡研究室長）、馬場 基（都城発掘調査部主任研究員）、青木 敬（考古第二研究室研究員）、小田裕樹（考古第二研究室研究員）、海野 聡（遺構研究室研究員）			
【主な成果】			
官衙関係遺跡の建物データについては、特に古代における長舎遺構を重点的に収集し、宮都や居宅・集落まで範囲を広げて全国的に網羅する『長舎遺構資料集成』を作成した。また、寺院遺跡の属性分析をふまえたデータベースを、九州から中部地方まで公開した。さらに、井戸のデータベースの対象を古代の遺跡全般に拡充して資料収集を行った。			
【年度実績概要】			
・ 平成24年度以前に刊行された古代の遺跡全般に関する報告書のめくり作業を行い、長舎遺構の資料を全国的に収集・整理した。 ・ 今年度で開催した第17回古代官衙・集落研究会「長舎と官衙の建物配置」の資料集成（①）を作成した。 ・ 報告書のめくり作業を行い、国府・郡衙・城柵やその他の官衙関係遺跡等の資料を追加収集・整理した。また、平成20年度までに刊行された古代寺院に関する報告書のめくり作業を行った。 ・ 新たに収集した官衙関係遺跡と古代寺院遺跡の資料をデータベース化し、新出資料も追加して一般公開した。 ・ 古代寺院遺跡の建物遺構を中心とした属性分析を進め、それにもとづく寺院遺跡データベース構造を作成して資料収集と整理を行い、中部地方以西のデータを奈良文化財研究所のウェブサイトで一般公開した。 ・ 平成21年度以前に刊行された古代の遺跡全般に関する報告書のめくり作業を行い、井戸のデータベースの作成・公開に向けた資料収集を実施した。			
			
		古代寺院建物データ入力画面（部分）	
【実績値】			
データベース入力・補訂件数			
官衙関係遺跡データベース：遺跡数約500件、文献データ約700件、建物データ約3,000件、画像データ約4,000件、井戸データ約100件			
古代寺院遺跡データベース：遺跡数約100件、文献データ約200件、建物データ約150件、画像データ約250件			
公開データ数：官衙関係遺跡：遺跡数約1,700件、文献データ約16,500件、建物データ約20,100件など			
古代寺院遺跡：遺跡数約1,300件、文献データ約14,200件、建物データ約3,000件など			
(参考値)			
研究会当日資料集：1件（①）			
【備考】			
①青木敬ほか編『長舎遺構資料集成』第17回古代官衙・集落研究会当日資料、2013.12.			

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性	正確性	独創性	
判定	A	A	S	A	A	
判定理由 適時性：近年需要が多い古代官衙関連遺跡と古代寺院遺跡のデータベースを充実させ、活用に供した。 発展性：必要な項目が生じた場合は追加するなど、データベースの改良に努めている。 継続性：機器の改良等を行い、被災地復興の調査にも役立っている。 正確性：新出資料の追加に加え、変更を生じた事項についても改定を行った。 独創性：属性分析の成果をふまえて、さまざまな分析に役立つ多彩な項目を設置している。						

2. 定量的評価

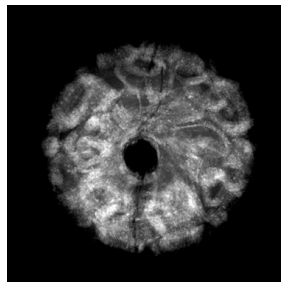
観点	データベース 入力・補訂件数	公開データ数				
判定	A	A				
判定理由 データベース入力・補訂件数： 毎年増加する官衙遺跡のデータ補填・追加入力、及び中部地方の古代寺院・井戸の入力を行い、目標を上回った。また、全国的に古代の遺跡全般における長舎遺構の資料を収集した。集成した事例数は約1,400例にのぼり、遺跡単位で図表にまとめた長舎遺構資料集成を作成するなど、十分な成果が認められる。 公開データ数：目標である55,000件を達成した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	データベース入力件数の目標値を大幅に上回ったほか、古代の遺跡全般における長舎遺構の資料収集とデータベース化を行い、資料集成を作成した。各地で官衙遺跡の調査研究にあたっている人々にとって、情報の共有化につながると同時に、遺跡から抽出すべき遺構の属性についての指標を提示するものであり、寄与するところが大きい。古代寺院遺跡のデータベースでは、中部地方以西のデータを一般公開できた。今後も、新発見の官衙関係遺跡データを継続的に収集・整理するとともに、全国に及ぶ古代寺院のデータベースを作成し、逐次公開していきたい。また、これにくわえて、発掘調査で検出例の多い井戸遺構についても属性分析を行い、整理・収集のうねデータベース化することにより、官衙関連遺跡の調査や建物遺構分析における新たな指標を示すことができるよう努めたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	官衙関連遺跡について、新出資料の補充を含めたデータベースの作成を着実に進め、一般公開するとともに、官衙以外の居宅や集落における長舎遺構についてもデータ収集を行い、データベースのいっそうの充実化を図っている。一方、平成21年度に構築した寺院遺跡のデータベースでは、中部地方以西のデータを網羅的に収集・整理してデータベース化し、一般公開することができた。今後は、官衙関連遺跡及び寺院データの収集とデータベース化を継続し、利用しやすいかたちでの一般公開をさらに推進していくことが必要である。また、古代の井戸についても、居宅や集落遺跡などに範囲を拡大してデータ収集を実施し、発掘調査や建物遺構分析における新たな指標を示すことができるよう努めたい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	出土遺物の材質構造調査、鉄製品及び木製品の埋蔵環境調査（(1)－⑧－イ）		
【事業概要】 標記プロジェクトに関して、(1) 考古遺物の非破壊非接触分析法としてのレーザーラマン分光法の応用研究、(2) 高エネルギーX線CT法及びX線CR法の応用研究、(3) 漆製遺物や塗装材料などの分析法の実用化とデータベース作成、(4) 鉄製遺物の埋蔵環境調査、(5) 文化財の収蔵・展示環境についての研究集会の開催、に取り組む。			
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】 脇谷草一郎（保存修復科学研究室研究員）、田村朋美（保存修復科学研究室研究員）、降幡順子（都城発掘調査部主任研究員）、赤田昌倫（保存修復科学研究室アソシエイトフェロー）佐藤昌憲（京都工芸繊維大学特任教授、客員研究員）、肥塚隆保（神戸女子大学非常勤講師、客員研究員）			
【主な成果】 (1) 鈹物の標準試料のラマンスペクトルを集積するとともに、顔料やガラス、石製遺物のラマンスペクトルを取得した。 (2) 遺跡から出土したトンボ玉のX線CR撮影及びX線CT撮影を実施することにより、製作技法を明らかにした。 (3) 木造建造物の塗装の彩色調査を行い、使用された色料について明らかにした。 (4) 金属製遺物出土遺跡の埋蔵環境調査を実施し、埋蔵環境が金属製品の腐食に与える影響の解明に取り組んだ。 (5) 「文化財の収蔵・展示環境」をテーマとした研究集会を開催した。			
【年度実績概要】 (1) 薬師寺東塔の彩色に用いられた赤色顔料についてレーザーラマン分光分析を実施し、鉛丹であることを明らかにした。また、福岡県糸島市三雲井原遺跡ヤリミゾ地区出土の黄緑色ガラス小玉に含まれる黄色顔料についてレーザーラマン分光分析を実施し、人工黄色顔料の錫酸鉛が用いられていることを明らかにした。 (2) 宮城県涌谷町追戸A－1横穴墓出土の斑点文トンボ玉などのX線CR撮影及びX線CT撮影を実施し、古墳時代の遺跡から出土するトンボ玉の施文方法や穿孔方法について明らかにした。 (3) 薬師寺東塔における各部材の彩色調査を行い、鉄系赤色顔料と鉛丹、黄土が使用されていたことを明らかにした。また、昭和の修理で再塗装された部材の展色剤には膠を使用したことを明らかにした。 (4) 鷹島神崎遺跡を対象として、鉄製遺物の劣化に及ぼす埋蔵環境の影響を検討するため、現地に暴露試験のための試料を設置するとともに、堆積物のpH及び酸化還元電位と海水中の温度及び溶存酸素（DO）を測定した。 (5) 「文化財の収蔵・展示環境」と題した研究集会を開催し、博物館や文化財行政における文化財の収蔵・展示環境の問題点や環境が文化財に与える影響と対策に関する最新の研究の動向について、情報交換と総合討議などを行った。			
			
斑点文トンボ玉のCR画像			
【実績値】 発表件数：8件（①～③） 論文等数：5件（④～⑥） 研究集会開催件数：1件（⑦）			
【備考】 発表 ①田村朋美「日本出土インド・パシフィックビーズの化学組成の時期変化に関する研究」日本文化財科学会第30回大会、2013.7.7 ②柳田明進・脇谷草一郎・高妻洋成「塩化鉄(Ⅱ)が付着した鉄製遺物の大気腐食に及ぼす湿度の影響」日本文化財科学会第30回大会、2013.7.7 ③田村朋美「韓国と日本において出土した鋳造ガラス玉の考古科学的考察」3rd International Symposium on Conservation of Cultural Heritage in East Asia、2013.9.6 他5件 論文等 ④田村朋美「松ヶ迫矢谷遺跡出土ガラス小玉の考古科学的研究」奈良文化財研究所紀要、2013.6. ⑤赤田昌倫・高妻洋成・神野恵「出土有機付着物の材料分析」奈良文化財研究所紀要、2013.6. ⑥高妻洋成・脇谷草一郎・田村朋美・赤田昌倫・番光・大林潤「法隆寺所蔵古材調査3—金堂古材の塗装分析調査—」奈良文化財研究所紀要、2013.6. 他2件 研究集会 ⑦研究集会「文化財の収蔵・展示環境」、発表件数：10件、参加人数：112名、開催日：2014.2.21.			

自己点検評価調査

研No.26

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：出土遺物の材質構造調査に非破壊的な手法が求められているなか、種々の調査機器を応用することで、より多様な遺物の材質構造調査が可能となり、古代の材料や技術に関する新しい知見を得ることができる。 また、平城宮跡など、遺物が埋蔵した状態で整備が行われる事例の増加にともない、埋蔵環境中での遺物の劣化機構の解明が求められている。 独創性：埋蔵環境中における鉄製品の腐食に関する基礎データを収集するため、海底遺跡をフィールドとして現地に暴露試験用の資料を設置するとともに、鉄製遺物の埋蔵環境を室内で再現した腐食実験を行った。このような手法を用いた海底遺跡を対象とした研究は他に類を見ない。 発展性：出土遺物の材質構造に関するデータを集積し、朝鮮半島などの近隣地域の類例との比較研究を発展させることで、生産地や交易関係を明らかにすることができた。 効率性：遺跡から大量に出土する玉類などの遺物に対しては、同時に多量の材質調査が可能な方法（AR法及びCR法）を適用することで、迅速な調査を実施した。 正確性：蛍光X線分析法とレーザーラマン分光分析法に加え、非破壊微小点X線回折分析など、複数の分析法を併用することで、精度の高い材質調査を行うことができた。						

2. 定量的評価

観点	発表件数	論文等数	研究集会開催件数			
判定	S	S	A			
判定理由 発表件数：目標件数2件を上回る8件を達成した。 論文等数：目標件数2件を上回る5件を達成した。 研究集会開催件数：目標件数1件を達成した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査研究事業を当初計画どおり順調に達成することができた。次年度は、翡翠や碧玉製品などにもラマン分光分析の応用範囲を広げていきたい。埋蔵環境調査に関しては、鷹島海底遺跡に本年度設置した暴露試験のデータ回収を行う予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年度の計画を当初の計画どおり実施できたことから、順調と判定した。次年度は、ラマン分光分析のさらなる応用範囲の拡大を予定している。埋蔵環境については、平城宮跡内および鷹島海底遺跡における環境調査を進め、これらの異なる埋蔵環境が遺物の劣化に及ぼす影響について検討を行う予定である。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	遺構の安定化方法を検討するための基礎データを収集 (1)－⑧－ウ)		
【事業概要】土質遺構や装飾古墳の安定した公開・展示を行うことを目的とした環境調査、ならびに維持管理技術の開発的研究の一環として、遺跡を構成する土、石材および空気における熱・水分移動を推定し、それらが形成する環境を予測する解析技術に関する研究、及び土質遺構露出展示、装飾古墳の公開・展示に関する実地試験に取り組む。			
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】 降幡順子（都城発掘調査部主任研究員）、脇谷草一郎、田村朋美（保存修復科学研究室研究員）			
【主な成果】 土質遺構の露出展示を実施予定の平城宮跡遺構展示館を調査フィールドとして、遺構土壌における熱・水分同時移動解析を行い、遺構土壌の適切な含水状態を維持し塩類析出を抑制するための環境条件、及び保護施設としての覆屋の仕様について検討した。ベトナムのタンロン皇城遺跡では遺構土壌の熱・水分移動特性に関する試験を行い、現地で実測調査を行った外界気象条件に基づき、埋め戻し保存法について検討した。ガランドヤ古墳では石室周辺の熱・水分同時移動解析を行い、石室内石材表面での結露発生を抑制するための手法として、石室内空気への熱源の使用、及び石室外の地盤を断湿材で覆うことの有効性を検討した。また、元町石仏では塩析出を抑制する手法を検討するため、最も重要な物性値である石材の透水性状について試験を行うとともに、磨崖仏表面への石材基質強化剤及び撥水剤使用の良否について検討した。			
【年度実績概要】 ・ 平城宮跡遺構展示館では、水の浸み出しと乾湿の繰り返し、あるいは蘚苔類の繁茂や塩類析出による劣化が認められる。そこで、展示館内の温熱環境調査とともに、保護施設としての覆屋の仕様の問題点を抽出し、熱水分移動解析から覆屋の改善方法について検討した。 ・ ハノイ市タンロン皇城遺跡において、遺構土壌の熱・水分移動特性に関する試験を実施した。さらに、現地で測定された外界気象条件の結果に基づき、遺構を露出展示した場合と埋め戻し保存した場合の遺構土壌の含水状態変化について数値実験を行い、埋め戻し保存の有効性を検討した。 ・ 日田市のガランドヤ古墳では、復元する墳丘によって石材表面の結露発生を抑制し、装飾の保存を図る手法の検討を進めている。今年度は、夏期と冬期における換気回数や、夏期の結露発生時期に石室内空気に対し熱源を使用することで結露発生を抑制する方法について検討したほか、石室外部の地盤面を断湿材で覆うことで、結露発生の危険性を大幅に抑制し得ることを示した。 ・ 大分市の元町石仏では、繰り返し析出する塩類によって、石仏表面の剥離が進行し、その対策が喫緊の課題となっている。今年度は、塩を含む水分が石仏内をどのように移動するのか検討するために、石仏を構成する石材の水分移動特性と、塩水を含んだ場合の水分特性曲線（含水率－水分ポテンシャルの関係関数）の変化について検討した。			
		 (上) 遺構展示館、(下) 法面における藻の成長と塩の析出	
【実績値】 発表件数：3件 (①～③) 論文等数：4件 (④～⑦)			
【備考】 ①桑原範好、銚井修一、脇谷草一郎、小椋大輔「平城宮跡遺構展示館における露出展示遺構の劣化に関する研究」日本建築学会近畿支部、2013. 6. 16 ②桑原範好、銚井修一、脇谷草一郎、小椋大輔「平城宮跡遺構展示館における露出展示遺構の劣化に関する研究」日本建築学会、2013. 8. 30 ③石崎武志、脇谷草一郎、青木繁夫、溝口勝「ハノイ、タンロン皇城遺跡の土遺構の保存に関する調査研究」土壌水分ワークショップ、2013. 12. 21 ④桑原範好、銚井修一、脇谷草一郎、小椋大輔「平城宮跡遺構展示館における露出展示遺構の劣化に関する研究」2013年度日本建築学会近畿支部研究発表会、『2013年度日本建築学会近畿支部研究発表会予稿集』2013. 6 ⑤桑原範好、銚井修一、脇谷草一郎、小椋大輔「平城宮跡遺構展示館における露出展示遺構の劣化に関する研究」2013年度日本建築学会大会、『2013年度日本建築学会大会予稿集』2013. 8 ⑥石崎武志、脇谷草一郎、青木繁夫、溝口勝「ハノイ、タンロン皇城遺跡の土遺構の保存に関する調査研究」土壌水分ワークショップ、『土壌水分ワークショップ2013予稿集』2013. 12 ⑦脇谷草一郎、高妻洋成「史跡ガランドヤ古墳の保存に関する研究－石室保護施設の設置による結露性状変化の検討－」『奈良文化財研究所紀要2013 奈良文化財研究所、2013. 6			

自己点検評価調査

研No.27

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：遺跡の公開・活用が推進される現在において、適切な環境下で遺跡の安定性の維持を図りつつ、観覧に供する技術の開発は不可欠のものである。 独創性：本研究では、整備後に生じる遺構の劣化を予測し、それを回避しうる適切な環境を制御することで、遺構保存を実現することを目的としており、土や石材の強化処置を主とする既往の手法とはコンセプトを異にするものである。 発展性：個々の遺構を取り巻く環境は千差万別であるが、乾湿の繰り返しや塩類析出などの劣化要因は普遍的なものである。したがって、本研究から得られた知見は広く汎用性を有する。 効率性：フィールド調査で使用する機材は、取り巻く環境を異にする様々な遺跡で使用可能のものであることから、設備的投資の効率は高いと考える。 正確性：恒常的な高湿度環境など、継続的な環境調査は過酷な条件下で行われることが多いが、それらに対する耐性を備えた測定器具類を選定しており、得られたデータは十分な正確性を有すると考える。また、数値解析結果を実測値と比較することで、解析モデルの妥当性について十分な検討を行っている。						

2. 定量的評価

観点	発表件数	論文等数				
判定	A	A				
判定理由 発表件数：目標を達成した。 論文等数：目標を達成した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査研究事業を当初の計画通り順調に達成することができた。次年度はさらに詳細な二次元の熱・水分同時移動解析を引き続き実施し、装飾古墳石室内の結露を抑制する環境制御法を検討するとともに、実測調査の結果と比較して、解析解の妥当性を検討する。さらに今年度は、新たに平城宮跡遺構展示館を研究フィールドとして調査研究を開始した。この土壌について熱や水分移動特性の試験を実施するほか、保護施設としての覆屋における問題点の抽出、数値解析に基づくその改善方法の提案などを行う予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業を当初の計画通り順調に達成することができたことから、順調と判定した。次年度の土質遺構の保存に関する研究では、土中水の水質や遺構土壌と接する室空気の温度湿度から塩類析出の詳細なメカニズムを検討しつつ、それらの析出を抑制する環境制御法について検討する予定である。また平城宮跡遺構展示館のように、覆屋の改修により遺構の状態を改善し得ると考えられる遺構について、数値解析に基づき、改善方法の提案を行う。装飾古墳の保存では、数値解析を応用して、一般公開の実施時期など文化財の公開・活用に資する知見の提供も目標として研究を進めたい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化財デジタル画像形成に関する調査研究 ((2) -①)
【事業概要】 本研究では、着色仏画、彩色壁画・油彩画・日本画などを対象とし、文化財研究に資するデジタル画像の形成方法及びその応用のための手法（表示・出力）を開発し、広範な活用の方向性を研究する。	
【担当部課】	企画情報部
【プロジェクト責任者】	広領域研究室長 小林 公治
【スタッフ】 田中淳（企画情報部長）、山梨絵美子（副部長）、二神葉子（情報システム研究室長）、塩谷純（近・現代視覚芸術研究室長）、綿田稔（文化財アーカイブズ研究室長）、小林達朗（主任研究員）、皿井舞（主任研究員）、城野誠治（専門職員）、早川泰弘（保存修復科学センター分析科学研究室長）江村知子（文化遺産国際協力センター主任研究員）	
【主な成果】 脆弱な材料で構成されている我が国の貴重な文化財に対して最先端の光学調査を行うことによって得られた高精細画像や特殊撮影画像を分析研究し、さらにその公開による広範な利用を目指して、本年度は宮内庁三の丸尚蔵館との共同調査研究として春日権現験記絵、奈良国立博物館との共同調査研究として国宝當麻裏板曼荼羅（當麻寺所蔵）他の調査・撮影を実施した。この他、経年変化で判読不能となったジアゾ式湿式青焼コピーの撮影による復元研究を継続して行った。	
【年度実績概要】 本年度実施した他機関との共同調査研究 ・宮内庁三の丸尚蔵館（「春日権現験記絵」第8・13巻の調査） 可視光線マルチショット撮影、赤外線撮影（上下両方向）、蛍光撮影、蛍光X線撮影 ・奈良国立博物館（国宝「當麻裏板曼荼羅」の調査） 可視光線6ショット分割撮影・部分拡大撮影、赤外線分割撮影、蛍光写真分割撮影 ・奈良国立博物館（大徳寺伝来 重文「五百羅漢図」の調査） 可視光線全図・部分図撮影 なお、この他に奈良国立博物館との研究協議会を1回実施した。 各種文化財の光学調査 ・平等院鳳凰堂西面扉絵 日想観（平等院所蔵） 近赤外線撮影、蛍光撮影、カラー撮影 ・この他、所内外からの依頼を受け、以下16件の文化財光学調査を実施した。 ①二十五菩薩来迎図、②絵金屏風、③源氏物語図屏風、④黒田清輝「グレーの原」・「婦人像」、⑤「大磯鳴立庵」、⑥日本銀行貴賓室内ビロード友禅及び格子天井、⑦ミャンマー国内寺院、⑧牽牛子塚古墳夾紵棺破片、⑨素描「青年像」、⑩小石川後楽園螺鈿机、⑪落合左平次道次背旗、⑫白杵磨崖仏、⑬バンコク・ラチャプラディット寺院扉部材、⑭鎌倉市内出土漆塗り籠手、⑮菱田春草「賢首菩薩」、⑯研究・分析資料 成果の公表 ・これまでの調査研究成果のうち、佐野市立吉澤記念美術館所蔵 伊藤若冲筆「菜蟲譜」、平等院鳳凰堂西面扉絵 日想観 について本年度報告書を刊行したほか、昨年度調査を実施した萬鉄五郎「自画像」について、萬鉄五郎記念美術館「萬鉄五郎七変化」展図録『わが内なる自画像 萬鉄五郎 七変化』及びパネル展示で成果の一部を公開した。 退色劣化したジアゾ式湿式青焼コピーの復元研究 ・戦前から昭和40年代頃まで事務文書複製などに盛んに使用されたいわゆる青焼コピーは時間の経過と共に退色し、その記載内容の判読が不能となる。昨年度実施した撮影による簡便な復元手法の開発のより普遍的な復元技術開発のため、今年度も引き続き研究を行った。	
【実績値】 発表件数 1件(①)、調査成果の公表数 3件(②～④)、光学調査撮影件数 15件	
【備考】 発表件数： ①江村知子「人物の細部表現から見た「群れとしてののかたち」」第37回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「かたち」再考―開かれた語りのために―セッション1趣旨説明、東京文化財研究所、2014年1月10日 調査成果の公表： ②萬鉄五郎記念美術館『わが内なる自画像 萬鉄五郎 七変化』2013.11 ③東京文化財研究所『伊藤若冲 菜蟲譜 光学調査報告書』2014.3 ④東東京文化財研究所 平等院鳳凰堂西面扉絵 日想観 光学調査報告書 2014.3	



当麻寺本堂での調査風景

自己点検評価調査

研No.28

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：所内外の様々な要望に対する調査を実施でき、また調査成果の公表が期待されるため。 独創性：当研究所の光学的調査は、長年の調査経験に裏付けられたマルチショット・デジタル撮影などの多様な光学調査技術を駆使したものであることから。 発展性：こうした研究手法は今後の様々な研究で利用可能な汎用性を持つことから。 継続性：こうした調査や研究は先年度より継続的、かつ発展的に行っているため。 正確性：実施した調査研究内容はデータの再現性を備えており再検討が可能なため、十分な確実性を持つと言えるため。						

2. 定量的評価

観点	発表件数	調査成果の公表数	光学調査撮影件数			
判定	A	A	A			
判定理由 学会等での発表件数：充実した発表を行うことができたため。 調査成果の公表数：調査成果については多数の報告書の発刊によって十分な結果が得られたと考えられるため。 光学調査撮影件数：調査については所内外の様々な対象に対する調査を行えたため。						

3. 総合的評価

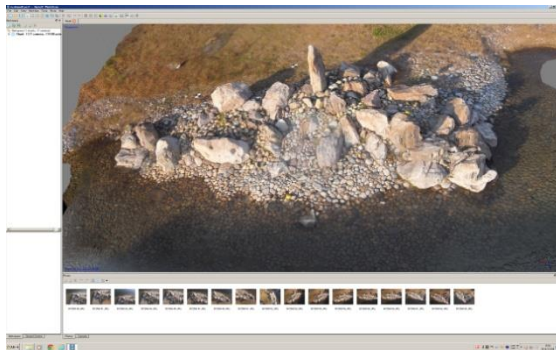
判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	内容の充実した成果発表を行うことができ、また十分な成果を上げることができたためAとした。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年度は積極的な調査を実施でき、また印刷媒体による成果の公表も十分に行えたことからほぼ順調であると評価する。来年度も引き続き調査や成果の公表に努めたい。

業務実績書

研No.29

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化財の測量・探査等に関する研究 ((2)－②)		
【事業概要】文化財保護に資する研究を主眼として、発掘調査の際の測量・計測による記録方法の高度化、非破壊的手段である探査による地下遺構の把握、その他遺跡を対象とした各種の研究法の開発と試験、活用方法の検討を行う。			
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	遺跡・調査技術研究室長 小澤毅
【スタッフ】 金田明大（埋蔵文化財センター主任研究員）、西村康（ACCU 奈良事務所長・客員研究員）、西口和彦（桜小路電機、客員研究員）			
【主な成果】 (1) 三次元レーザースキャナーによる遺構・遺物計測の精緻化と迅速化を検討し、実用化を達成した。 (2) 簡便で廉価な写真計測法を導入して試験を行い、実用化への見通しを確立した。 (3) アレイ式地中レーダー探査を導入し、探査試験を実施した。 (4) 磁気探査機器の計測の高速化及び多プローブによる同時測定試験を行い、必要な機器の開発を進めた。 (5) 各地の依頼により、計測及び探査を実施した。			
【年度実績概要】 (1) 三次元レーザースキャナーの計測試験を積極的に実施し、平城宮・京の調査や福島県の震災復興調査の現場において実際に計測し、図化を行った。従来に比べて省力化、精細化を達成した。 (2) 写真計測法については、従来の 2 手法に加えて 4 種類の写真計測法の精度や作業効率、成果品の文化財記録における良否を検討し、有効な手法の検討を絞りつつある。また、文化財の記録に特化した計測の作業フローを確立するため、問題点とその解決方法に関しても検討を進めた。 (3) 科学研究費の補助を受けて、アレイ式の地中レーダー探査機器を導入した。これについても平城宮及び東大寺で試験的な計測を行った。 (4) 日本の磁気探査は傾斜地などで行われることが多く、作業の迅速化を図ることが困難であった。こうした課題を解決する方法を検討し、実際の遺跡で試験的な計測を実施して成果を得た。今後は作業の問題点を抽出し、いっそうの洗練化を図る予定である。また、多プローブによる同時測定試験も実施し、開けた環境にある遺跡についても磁気探査の有効性の検討を進めている。 (5) 平城宮、東大寺東塔・西塔、薬師寺食堂、斑鳩大塚古墳、キトラ古墳（以上、奈良県）、鳩山窯跡（埼玉県）、十五郎横穴（茨城県）、窯下窯（岐阜県）、鬼の岩屋古墳（大分県）において遺跡探査を行った。また、平城宮大極殿、東院庭園、東大寺西塔、薬師寺東塔、薬師寺食堂、キトラ古墳（以上、奈良県）、専称寺、大悲山石仏（以上、福島県）において遺構や現状の三次元計測を実施した。遺物については、平城宮出土資料や山内清男考古資料などを中心に計測試験を行った。			
			
平城宮東院庭園の写真計測試験成果			
【実績値】 探査件数：10 件 計測件数：8 件 発表件数：2 件 (①・②) 論文等数：2 件 (③・④)			
【備考】 ① 金田明大「震災復興に伴う遺跡調査への計測技術の利用にむけて」日本測量協会、2013. 4. 17 ② 金田明大「アレイ式探査機による遺跡探査迅速化の試行」日本文化財科学会 2013. 7. 7 ③ 金田明大「アレイ式探査機による遺跡探査迅速化の試行」『日本文化財科学会第 30 回大会研究発表要旨集』2013. 7 ④ 金田明大「掘らずに土の中をみる―遺跡探査の応用と成果―」『遺跡をさぐり、しらべ、いかす―奈文研 60 年の軌跡と展望―』2013. 9			

自己点検評価調査

研No.29

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：両技術とも文化財の保護に不可欠のものであり、問い合わせや依頼件数が増加している。 独創性：機器の改良やワークフローの改善の基礎的な検討は達成しつつある。 発展性：両技術ともに今後の遺跡調査に不可欠のものであり、実際の運用法などのさらなる発展が期待されている。 効率性：探査機器の計測の効率化やレーザースキャナーの高速化など、従来に比べると飛躍的に向上している。今後 も解析などの作業の迅速化を進めたい。 継続性：独法化以前の研究室の研究資産を引き継ぎつつ、その研究の蓄積をふまえて、現在の課題に合わせるかたち で研究を進めている。						

2. 定量的評価

観点	探査件数	計測件数	発表件数	論文等数		
判定	S	A	A	A		
判定理由 探査件数：依頼件数が極めて多いが、これらの依頼の多くを他の研究機関や企業へ配分し、昨年までの課題であった 試験研究的な要素の高い対象のみに絞ることができた。この結果、試験的な探査を大学や他研究機関と連 携しながら進めることができた。目標である5件を大きく上回っているため、Sとした。 計測件数：依頼件数が多く、今後いかに普及を図るかが課題となっている。 発表等数：目標である2件を達成している。 論文等数：依頼に関連したものが多く、当初の計画を十分に達成している。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	探査では、地域ごとの環境条件に応じた手法の確立を目的に昨年度まで積極的に推進してきたが、 反面、技術の検討や開発に充てる人的・予算的な余裕が失われていた。今年度はこれらを大きく整理 し、試験的な作業を進めることができた。計測については新たに効果的な手法の検討が好成績を残し ており、今後文化財の特性に応じた方法の確立を目的に研究を推進したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画を上回って達成しているものが多く、順調と判定する。改善すべき個所や基礎的な技術に関す る検討と試験を行う時間の確保が昨年度に比して可能となり、課題となっていた試験を行うことがで きた。また、東日本大震災に伴う復興関係の調査など喫緊の課題に、本研究で培ってきた技術を早期 投入することが要請されており、実際の支援に活用できたことは大きな成果であろう。科学研究費補 助金で導入した機器とあわせて、次年度以降も基礎研究に研究資源を傾注したい。研究補助者の減少 と補充に対応して、夏以降やや研究が停滞した。研究を推進する人材の育成も急務である。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	年輪年代学研究((2)－③)		
【事業概要】 出土遺物、建造物、美術工芸品等の木造文化財に対して年輪年代法による年代測定を中心とする調査・研究を実施し、考古学、建築史学、美術史、歴史学研究に資する。とりわけ、当研究所で開発したマイクロフォーカスX線CTやデジタル画像による調査手法は、非破壊を原則とする文化財調査に有効であるため、調査対象の拡充と活用を図り、これらの研究成果を公表する。また、自然木の年輪年代学的基础研究の他、木造文化財の樹種同定調査を行う。			
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	埋蔵文化財センター長 難波洋三
【スタッフ】 大河内隆之（埋蔵文化財センター主任研究員）星野安治（年代学研究室研究員）、児島大輔（年代学研究室アソシエイトフェロー）、伊東隆夫（南京林業大学特別招聘教授、客員研究員）、光谷拓実（総合地球環境研究所元客員教授、客員研究員）、藤井裕之（奈良県教育委員会日々雇用職員、客員研究員）			
【主な成果】 6都府県下 10 遺跡の出土木製遺物、4 県下 4 棟の木造建造物、2 ヶ国 7 府県下 10 件の木造美術工芸品、3 県下 3 件の自然木について、年輪年代調査と樹種同定調査を実施した。このうち、1 件の出土木製遺物及び 1 件の美術工芸品に対してマイクロフォーカスX線CT装置による調査を実施したほか、木製ではない 3 件の出土遺物の内部構造把握のため、同装置による非破壊検査を行った。また、これらの調査・研究成果の一部を論文等、学会等発表において公表した。			
【年度実績概要】 ・ 考古学・建築史・美術史といった多分野にわたる 24 件の木造文化財を対象とした年輪年代調査及び樹種同定調査を行った。 ・ このうち法隆寺金堂古材調査では、年輪数が多く、部材表面でデジタル画像による非破壊年輪計測ができる 100 点以上の部材を悉皆的に調査した。当初材だけでなく中近世の修理部材についても対象とし、法隆寺金堂の建立年代及び建立後の修理の経過を推定する資料を得ることを目的とした。 ・ 暦年標準パターンの年代的・地域的拡充を行うため、現生木及び自然埋没木を対象とした基礎データの蓄積を継続した。 ・ 切片の採取が困難な美術工芸品について、マイクロフォーカスX線CT装置を用いた非破壊での樹種識別を目指し、基礎的な検討を行った。 ・ デバイスの交換により高解像度・高出力化が図られたマイクロフォーカスX線CT装置を用いて、既存の装置では不得手であった保存処理済出土木製遺物への応用を行うとともに、ガラス製遺物及び骨製遺物等の非破壊での内部構造把握などに一定の成果を得た。 ・ 以上の調査・研究成果の一部を、論文等及び学会等における口頭発表やポスター発表において公表した。			
			
			個人蔵百万塔の調査風景
【実績値】 論文等数：3 件（①～③） 発表件数：3 件（④～⑥）			
【備考】 論文等 ① 児島大輔「福寿寺から大養徳国光明寺へー東大寺前身寺院に関する二三の問題ー」『てら ゆき めぐれ 大橋一章博士古稀記念美術史論集』2013. 4 ② 吉川聡、鈴木智大、海野聡、赤田昌倫、児島大輔「内山永久寺の扁額」『奈良文化財研究所紀要 2013』2013. 6 ③ Junko Kitagawa, Toshiyoshi Fujiki, Kazuyoshi Yamada, Yasuharu Hoshino, Hitoshi Yonenobu, Yoshinori Yasuda 'Human impact on the Kiso-hinoki cypress woodland in Japan: a history of exploitation and regeneration' Vegetation History and Archaeobotany, 2013. 12 発表等 ④ 星野安治、米延仁志、安江恒、野堀嘉裕、光谷拓実「下北半島産ブナ標準年輪曲線を用いた夏気温復元の可能性」日本地球惑星連合 2013 年大会、2013. 5. 23 ⑤ 星野安治、大山幹成、米延仁志「秋田県森吉家ノ前 A 遺跡出土材を用いた年輪考古学的研究」日本地球惑星連合 2013 年大会、2013. 5. 23 ⑥ 星野安治「深見池年縞堆積物のクロスデーティング」深見の池調査研究発表会、2013. 11. 10			

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：建造物や木彫像の解体修理、あるいは木製遺物の出土に際して迅速に対応することができた。 独創性：年輪年代法は、対象木材の年代を1年精度で測定することができ、実用化されている自然科学的年代測定法の中でも卓越した方法と言える。 発展性：マイクロフォーカスX線CT装置の能力向上により、対象試料を拡大するなど、その利用価値を多角的に高めている。 効率性：デジタル画像による調査手法を活用し、調査点数の向上を図ることができている。 継続性：暦年標準パターンの拡充を行うため、全国各地の様々な時代の年輪データを継続的に収集している。 正確性：照合が成立し公表している年代は、統計学的にも極めて正確性が高い。						

2. 定量的評価

観点	論文等数	発表件数				
判定	A	A				
判定理由 論文等数：目標を達成した。 発表件数：目標を達成した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的、定量的に目標を上回る実績を残すことができたため、Aと判定した。デジタル画像を用いた手法による調査点数の増大、またマイクロフォーカスX線CT装置の活用による対象試料の多様化により、迅速かつ正確な対応がより強く求められてきているため、次年度は調査・研究のいっそうの効率化を図ることで、適時的に応えられる体制を整えたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査・研究事業をほぼ計画通り遂行できており、順調と判定した。今後は、年輪データの蓄積、適応樹種の拡大、さらにはマイクロフォーカスX線CT装置の活用といった継続的かつ発展性のある調査・研究事業をこれまで以上に推進していきたい。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	動植物遺存体による環境考古学的研究(②－④)		
【事業概要】 動植物遺存体による環境考古学的研究を継続的に実施する。また、各種計測機器とマイクロスコープを活用して出土骨に残る加工痕の観察方法を確立し、骨角器製作技術や動物解体技術の研究を推進する。さらに、これまで国内の遺跡で開発してきた微細遺物選別法の実践を行い、東アジア、環太平洋世界の中での農耕・牧畜の起源や動植物利用に関する比較研究を行う。			
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	埋蔵文化財センター長 難波洋三
【スタッフ】 山崎 健（研究員）、松井 章（前埋蔵文化財センター長、客員研究員）、丸山真史（前橿原考古学研究所非常勤職員、客員研究員）、菊地大樹（前アソシエイトフェロー・客員研究員）			
【主な成果】 震災復興事業に伴う発掘調査に対する支援を行うとともに、幅広い時代の動植物遺存体の分析を進め、その研究成果を国内外の学会や研究会において発表した。また、学会、大学、博物館等での発表・講演のほか、環境考古学に関わる展示にも協力するなどの社会貢献を行った。研究の基礎となる標本を継続的に収集・作製した。			
【年度実績概要】 ・ 東日本大震災の復興事業に伴う発掘調査に対する支援を継続的に行った。波怒棄館遺跡（宮城県）では迅速かつ効率的な発掘調査を可能にするために現地で作業を実施し、堂の前遺跡（岩手県）では出土した動物遺存体の整理作業を行った。 ・ 南鴻沼遺跡（埼玉県）、丸山B遺跡（東京都）、六反田南遺跡（新潟県）において、動物遺存体の調査方法や整理作業に関する指導助言を行った。 ・ 小竹貝塚（富山県）、内田貝塚（愛知県）、膳所城跡（滋賀県）、雲宮遺跡（京都府）、難波宮跡、大坂城跡（以上、大阪府）などから出土した動物遺存体を分析して、報告書を執筆した。 ・ 藤原宮朝堂院朝庭、平城宮跡東院地区、西大寺旧境内（以上、奈良県）において、古環境復原を行った。 ・ 継続的に実施している現生標本の収集と公開では、東アジアで展開している蒙古系統のウマの成獣（雌雄）と幼獣の動物骨格標本を収集し、国内外からの標本見学に対応した。 ・ 研究成果の発信として、日本動物考古学会、日本植生史学会、古代学研究会、日本中国考古学大会、Society for American Archaeology などの学会で発表を行った。 ・ 社会還元や普及事業として、平城宮跡資料館、飛鳥資料館、神戸市埋蔵文化センター、中学生の職場体験、親子のための奈文研たんけんツアーなどで、一般向けの企画展や講演を行った。			
			
		宮城県波怒棄館遺跡における復興支援	
【実績値】 論文等数：9 件（①・②） 発表件数：12 件（③～⑤）			
【備考】 論文等 ①山崎健ほか「同位体化学分析を実施するための事前調査—破壊分析における事前調査の有効性—」『奈良文化財研究所紀要 2013』2013. 6 ②山崎健・丸山真史・菊地大樹ほか「脊椎動物遺存体」『小竹貝塚発掘調査報告』2014. 3 ほか 7 件 発表等 ③山崎健「生業研究からみた晩期前半の社会」東海縄文研究会シンポジウム、2013. 7. 20 ④山崎健「東日本大震災の復興事業に伴う発掘調査に対する支援の現状報告」日本動物考古学第 1 回大会、2013. 11. 16～17 ⑤山崎健・松井章「動物考古学における現生標本の管理と公開」第 28 回日本植生史学会大会、2013. 11. 30 ほか 9 件			

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	S	A	A	A		
判定理由 適時性：国や地方公共団体からの要請を受け、発掘調査や整理事業、報告書作成において環境考古学に関する協力や助言を行い、動物遺存体の分析も数多く担当した。特に今年度は、震災復興事業に伴う発掘調査の緊急の支援要請があり、円滑な復興と埋蔵文化財保護の両立が重要課題であったため、継続的に被災地へ赴いて支援作業に従事したことから、Sとした。 独創性：幅広い時代の動植物遺存体の研究を進めて、動物や植物の利用史を考古学から明らかにした。 発展性：非接触三次元レーザースキャナーによる現生骨格標本や出土動物骨の計測・測定を実施した。 継続性：研究の基礎となる現生標本を、継続的に収集・作製・管理している。						

2. 定量的評価

観点	論文等数	発表件数				
判定	A	A				
判定理由 論文等数：当初の計画通りに、査読誌を含む論文等を刊行した。 発表件数：当初の計画通りに、学会や研究会において研究発表を行った。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	定性的評価に関しては、復興支援を行いながら、幅広い時代の動物遺存体の調査研究を進めるとともに、研究の基礎となる標本の収集を積極的に進めることができた。定量的評価に関しては、動物考古学や環境考古学について、国内外で数多く論文等や学会発表を行った。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年度も多くの学会や研究会などで講演や研究発表を行い、これまでに上げた成果を紹介してきた。復興事業に伴う調査は次年度以降も行われるため、継続的に支援していく。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化財のカビ被害予防と対策のシステム化についての研究((3)－①)		
【事業概要】 高温多湿な我が国において、文化財のカビの問題は非常に深刻である。2011 年の大震災によって津波などで被災した文化財をはじめ、年々大規模燻蒸が難しくなっている博物館などの施設、さらに歴史的建造物等の環境制御が難しい場所において大規模被害を起こさないような予防法、系統的な対応について具体的な流れを示し、普及を目指す。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	生物科学研究室長 木川りか
【スタッフ】 佐藤嘉則（研究員）、佐野千絵（保存科学研究室長）、犬塚将英（主任研究員）、吉田直人（主任研究員）、早川典子（主任研究員）、森井順之（主任研究員）、小野寺裕子（研究補佐員）、岡田健（センター長）、藤井義久（客員研究員・京都大学教授）、小峰幸夫（客員研究員・（公財）文化財虫菌害研究所研究員）、間瀬創（客員研究員・三重県立博物館学芸員）、トム・ストラング（カナダ保存研究所上級保存科学者）			
【主な成果】 (1) 本年度は津波被災民俗資料や写真等の微生物被害についての調査研究を行った。津波被災文化財に発生した微生物は共通して高い塩耐性があることを確認し、洪水などの淡水の被災より微生物被害が起きにくい傾向にはあるが、速やかな応急処置が必要であることを報告した。 (2) 環境制御が難しい屋外の装飾古墳などにおいて、浮遊・付着微生物制御のためのモニタリングや除菌清掃の機会を活用し、最適な微生物対策についての検討を行った。			
【年度実績概要】 (1) 津波で被災した紙資料などの文化財の微生物被害について、昨年度から微生物被害の状況や、劣化原因となっている微生物の種類に関する調査を進めてきたが、今年度はさらに対象とする文化財を広げ民俗資料や写真等の調査を進めるとともに分離された微生物の水分活性や耐塩性など、生理的性質についても調査を実施した。海水被害では含まれる塩によってある程度微生物被害が遅延するものの耐塩性の菌群を中心に被害が起こることを確認し、凍結保存のような速やかな初期対応が必要であることを学会・論文等で報告した。 (2) カビを分解する酵素を応用した文化財の汚れの除去方法の研究に生物科学研究室として参加した。カビの種類によって溶菌酵素が異なることから、本年度は対象となるカビの種類に最適な酵素かつ文化財材質に影響を及ぼさない酵素の選定を進めた。 (3) 津波被災文書の応急処置法のひとつとして研究を進めているスクウェルチ法によって、どの程度海水由来の塩が除去できるかについて検討をすすめた。風乾による脱水処理と比べるとスクウェルチ法では一定量の塩分の除去効果が確認された。 (4) 古墳環境において、浮遊菌・付着菌量のモニタリングを行い、除菌清掃といった微生物制御対策の最適化について評価し、知見をまとめた。さらに石材や装飾を被覆・劣化する原因微生物や観覧者に健康被害を及ぼす可能性のある微生物についても調査を進めた。 (5) 学会で成果を発表し、紀要、学術雑誌などに研究成果を公表した。また昨年度の研究成果については国際研究集会のプロシーディングスにも英文で成果を公表した。			
 古墳環境での微生物調査			
【実績値】 論文数 2 件 (①、②、) 発表件数 2 件 (③、④)			
【備考】 論文 ① Sato, Y., Aoki, M., and Kigawa, R. (2014) Microbial deterioration of tsunami-affected paper-based objects: A case study, International Biodeterioration & Biodegradation ,88, pp.142-149 ② 小野寺裕子・古田嶋智子・佐藤嘉則・稲葉政満・木川りか：津波等海水に浸水した紙資料のスクウェルチ・ドライイング法—処理後の塩分残留量の調査結果について—、『保存科学』53、2014. 03 発表 ③ 佐藤嘉則・木川りか・青木睦・赤沼英男・大林賢太郎：津波被災した紙質文化財等から分離した微生物の諸性質、文化財保存修復学会第 35 回大会 2013. 7. 20-21 ④ 木川りか・喜友名朝彦・立里臨・佐藤嘉則・杉山純多：キトラ古墳石室における微生物制御：石室から分離された微生物の紫外線（UV）耐性試験結果について、文化財保存修復学会第 35 回大会、2013. 7. 20-21			



古墳環境での微生物調査

自己点検評価調査

研No.32

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	S	A	A	A
判定理由 適時性：被災文化財の微生物劣化の現象の調査・対策の策定については、緊急かつ必要なテーマであり、結果を国内の学会や海外の論文誌などに公開してきたため、十分に成果が認められる。 独創性：被災文化財の津波による生物被害についての詳細な研究成果は国内外にほとんどなく、新規性の高いデータを得ているので、成果が認められる。 発展性：得られたデータは、被災文化財の津波による生物被害に対応するうえで極めて貴重であり、今後の応用性が高いと考えられるので、十分に成果が認められる。 効率性：微生物の調査や試験には、相当な時間と労力を要するが、現在のスタッフで最大限の成果を達成したと考えている。 継続性：実施しなければならない生物劣化関係の調査、検体数は膨大であり、できうる限りの質を保ちながらデータを出してきているので、十分に成果が認められる。 正確性：検討方法や実験については、十分な技術と分析を行い、正確なデータを提供した。						

2. 定量的評価

観点	論文数	発表件数				
判定	A	A				
判定理由 論文数：検討結果について速やかに公表することができた。 研究発表件数：主要なテーマについて検討結果をすぐに公表することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	被災文化財の津波による生物被害への対応など、発展性・応用性をもって進めており、成果の公表も順調であり、総合的にAと判定した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画していたテーマについて、成果が認められた。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化財の保存環境の研究((3)ー②)		
【事業概要】 異常な高温・低温など最近の異常気象は文化財を展示収蔵する施設内の環境にも影響を与え、様々な問題を生じている。環境データや材料の水分特性など基本的なデータを用いた環境シミュレーションを行い、文化財の保管環境を考慮した博物館の省エネ化に関する研究を行う。また、展示ケース等から放散する汚染ガス対策の研究を行い、文化財収蔵空間で使用可能な材料を選択する試験法の試案をまとめる。総合的に文化財の保存環境の向上に資する。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	保存科学研究室長 佐野千絵
【スタッフ】 犬塚将英（主任研究員）、吉田直人（主任研究員）、木川りか（生物科学研究室長）、佐藤嘉則（研究員）、呂俊民（客員研究員）、北原博幸（客員研究員・（株）トータルシステム研究所長）、間瀬創（客員研究員・三重県立博物館学芸員）、古田嶋智子（研究補佐員）、林美木子（研究補佐員）			
【主な成果】 本年度は主に気流解析と温湿度測定と比較を行い、気流解析の有効性を評価した。また、熱・換気回路網シミュレーションにより、改修工事が温湿度環境に与える影響について評価した。また、展示ケース建築材料のうち、コーキング剤について、放散速度を実測した。これまでに得られた内装材料の結果と合わせて、望ましい形の実験用の実大展示ケースを試作し、実スケールでの試験と評価を行うための準備を整えた。			
【年度実績概要】 ・コンピュータシミュレーションによる展示ケース内の温湿度分布と気流の解析 空調をすることができない蔵を文化財の収蔵施設として用いている美術館にて、温湿度測定・解析することにより、現状の把握と高湿度に対する対策の検討を行った。また、平成26年に開館を予定している三重県立博物館の壁付き展示ケース内の気流解析を行い、展示ケース内の温湿度測定結果との比較を行って、解析の有効性を評価した。熱・換気回路網シミュレーション（NETS）により、空調を行うことができない収蔵庫の温湿度解析を行い、耐震工事後の温湿度環境に与える影響を定量的に評価した。この研究結果は来年度、香港で開催される International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works2014 大会にて発表を行う予定である。 ・展示ケース製作材料であるコーキング剤からの放散ガスの実測及び実大展示ケースの試作 コーキング材料について、有機酸及びアンモニア放散速度を実測した。この結果もあわせて、昨年度までに放散速度を実測した展示ケース内装材料（仕上げクロス、合板、ガラスコーキング材料）を用いて、材料の由来のわかる状態（入手時期、保管状況などの詳細情報）を用いて実験した。 また JIS で性能評価法が定まっていないパッシブ型空気清浄剤の性能評価について、放散速度と温度の相関を利用して展示ケース全体の「見かけの放散速度」を得てパッシブ型空気清浄剤の設置の有効性を定量的に判断できる手法を提唱し、既存の美術館の空気清浄化について2年間の実測を基礎に、新手法で評価可能であることを実証した。			
右図：ガス放散速度実測済材料で作った展示ケースでの実験			
・美術館、博物館の環境調査の実施 国指定文化財の公開のための館内環境調査を中心に館内環境改善に関する相談を受け、改善のための助言を行った。 ・研究成果の速やかな公開 文化財保存修復学会などの年次大会において研究成果を発表した。また得られた成果を、当研究所紀要『保存科学』を中心に速やかに公開した。 これまでの研究の中間報告として、「濃度予測と空気環境清浄化技術の評価」の研究会を開催し、主に学芸員を対象に、内装材からの放散ガスの実態やその清浄化技術を解説し、最新情報を提供した(26年1月27日、発表者：3名、外部からの参加者数：93名)。			
【実績値】 論文数 2件（①、②） 発表件数 3件（③～⑤） 研究会 1回			
【備考】 論文 ① 佐野千絵・古田嶋智子・呂俊民：展示ケース内有機酸の低減対策の評価法、『保存科学 53』、2014. 3 ② 呂俊民・古田嶋智子・佐野千絵：展示ケース内有機酸濃度のギ酸/酢酸比、『保存科学 53』、2014. 3 発表 ③ 佐野千絵・古田嶋智子・呂俊民：展示ケース内有機酸量の季節変化と吸着シートによる対策の事例、文化財保存修復学会第 35 回大会、2013. 7. 20-21 ④ 古田嶋智子・呂俊民・林良典・佐野千絵：文化財展示収蔵施設に用いられる内装材料の空気質への影響 その 3—コーキング材からの放散ガス、文化財保存修復学会第 35 回大会、2013. 7. 20-21 ⑤ 呂俊民・古田嶋智子・佐野千絵：展示ケース内の有機酸濃度の解析、文化財保存修復学会第 35 回大会、2013. 7. 20-21			

自己点検評価調査

研No.33

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	S	A	A	A
判定理由 適時性：博物館展示ケース内装材料についての基礎データ収集が終了した。公共性、緊急性が高く、十分に成果が認められた。 独創性：JISでは評価法が定まっていないパッシブ型の吸着剤について新しい評価法を提唱した。独創性が高く、十分に成果が認められた。 発展性：得られた成果を応用し、実大展示ケースの試作を行い、次年度にかけて空気清浄化の評価が可能になった点で、極めて高い成果と発展性が認められた。 効率性：実際に展示ケース作成に使われる資料を効率的に系統的に入手しており、効率的に業務進捗があった。 継続性：コーキング材料試験を終えたことで展示ケースに用いられる材料全てを網羅でき、信頼性の高いシミュレーションを実施できる状況となり、研究の継続性を担保した。 正確性：各使用材料の使用面積について正確に把握しており、気中濃度とシミュレーション濃度が精度よく合致し、十分な成果が認められた。						

2. 定量的評価

観点	論文数	発表件数	研究会			
判定	A	A	A			
判定理由 論文数：パッシブ型の吸着剤の評価について、新手法で性能評価する論文をまとめ、計測方法についても簡易法と精密法の比較検討する報告をまとめた。 発表件数：汚染ガスの放散速度の温度依存性を利用して、展示ケース内の汚染ガス濃度をシミュレーション予測できることを実証するなど、重要な発表を行った。 研究会：プロジェクトの3年目にあたることから、これまでの研究成果を振り返る研究会を開催し、今後の研究進捗方針の微修正を加えるなど、効率的な研究見直しを行った。研究成果は高い評価を得た。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	空気の汚れは目に見えないため、一般には検知されにくく、専門性の高い研究である。今年度までの成果で『展示ケース内の空気質』について定量的に評価し、将来の濃度予測ができるようになり、研究会での評価は非常に高かった。次年度以降はより廉価な清浄化対策について検討する予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	コンピュータシミュレーションによる展示ケース内の温湿度分布と気流の解析、展示ケース製作材料であるコーキング剤からの放散ガスの実測及び実大展示ケースの試作、美術館、博物館の環境調査の実施、文化財保存修復学会、文化財科学会、室内環境学会、建築学会等の年次大会において研究成果を発表、紀要『保存科学』への成果掲載、研究会の開催など、年次計画をすべて完了した。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化財の材質及び劣化調査法に関する研究((3)－③－ア)		
【事業概要】 小型可搬型機器によるその場分析、及び非破壊非接触技術による診断・解析手法の確立と実資料への応用を行う。絵画や彩色文化財に使われている顔料・染料の同定や褪色の評価、あるいは金属製文化財の材質調査や腐食生成物の分析などに関する調査手法の確立を行い、調査結果の蓄積と成果公開を行う。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	分析科学研究室長 早川泰弘
【スタッフ】 岡田健（センター長）、佐野千絵（保存科学研究室長）、木川りか（生物科学研究室長）、吉田直人（主任研究員）、犬塚将英（主任研究員）、佐藤嘉則（研究員）、三浦定俊（客員研究員、(公財)文化財虫菌害研究所理事長）、城野誠治（企画情報部専門職員）			
【主な成果】 基礎的研究として、小型可搬型機器によるその場分析の適用性向上を目的に機器や治具の改良等を行い、分析対象とする文化財の適用範囲の拡大を図った。また、応用的研究として、平安～江戸期の日本絵画の彩色材料調査、及び工芸品等の材質調査を積極的に進め、データの解析と蓄積を図った。さらに、これまでに小型可搬型機器を用いて実施した光学調査の成果をまとめ、調査報告書を刊行した。			
【年度実績概要】 5年計画の第3年度として、以下に示す成果を得た。また、これまでの調査研究成果に関する報告書を刊行した。 (1) 小型可搬型機器に関する基礎的研究 ・その場分析への適用性を向上させるために、ハンディ型蛍光X線分析装置の改良や新たな設置治具の製作を行った。安全かつ迅速に高位置・低位置において垂直・水平いずれの方向にも分析調査が実施できる状況を達成した。 ・小型分光器による可視反射スペクトルと蛍光スペクトルの高精度測定を実現するために、測定システム、測定条件等の検討を行った。また、蛍光寿命測定による材料分析、状態分析の可能性についても検討した。 ・X線透過撮影に関して、現地調査に適応したX線照射装置固定用治具の設計を行った。また、現地調査においてイメージングプレートによる撮影をより効果的に行うための高遮光性ケース材料の検討を行った。 (2) 応用的研究 ・平安～江戸期の日本絵画の彩色材料調査、工芸品等の材質調査を積極的に進め、調査結果の詳細な解析を行うとともに、絵画技法・絵画材料に関する技術的・美術史的な解釈、金工品や漆工品に関する材料学的な議論を進めた。国宝平等院鳳凰堂西面扉絵（平等院）、春日権現験記絵巻（宮内庁三の丸尚蔵館）などの絵画に関する光学調査を実施するとともに、平等院所在の国宝鳳凰像、梵鐘、露盤宝珠、飾金具等の金工品に関する材質調査を実施し、データ解析を行った。 ・漆喰壁画や江戸期版画等の絵画資料に使われている染料などの有機質彩色材料に関し、可視分光スペクトル等の基礎データをベースにした分析調査及びデータ解析を行った。 ・X線透過撮影による手法を用いて、仏像、漆工芸品、絵画等の構造調査を行った。 (3) 調査研究成果に関する報告等 ・これまでに実施した絵画や金属製品等の調査結果に対し、論文2件、学会発表2件の公表を行った。また、これまでに光学調査を実施した伊藤若冲「菜蟲譜」（佐野市立吉澤記念美術館所蔵）、及び平等院鳳凰堂西面扉絵「日想観図」に関する報告書を刊行した。			
【実績値】 論文数 2件（①、②） 発表件数 2件（③、④） 報告書 2件（⑤、⑥）			
【備考】 論文 ①早川泰弘、城野誠治：蛍光エックス線分析装置による伊藤若冲 菜蟲譜の彩色材料調査、『保存科学53』、2014.3 ②早川泰弘：平等院鳳凰堂の装飾金具および梵鐘の材料調査、『鳳翔学叢10』、2014.3 発表 ③早川泰弘 他3名：ハンドヘルド蛍光X線分析装置によるウズベキスタン国立歴史博物館所蔵資料の材料調査、日本文化財科学会第30回大会、2013.7.6-7 ④早川泰弘 他2名：国宝平等院鳳凰堂内西面扉絵日想観の下地層について、文化財保存修復学会第35回大会、2013.7.20-21 報告書 ⑤「伊藤若冲「菜蟲譜」光学調査報告書」、2014.3 ⑥「平等院鳳凰堂西面扉絵「日想観図」光学調査報告書」、2014.3			

自己点検評価調査

研No.34

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：文化財資料の科学調査が定着しつつある状況において、その高度化を目的としたタイムリーな研究である。 独創性：調査機器に関する基礎研究から実資料調査に至る応用研究まで、広範囲な研究を行っている。 発展性：光学調査の結果を解析することで、美術史学・金属学等との連携が行えるなど発展性は大きい。 効率性：運営費交付金以外に他機関からの調査派遣依頼などに基づき研究を推進している。 継続性：種々の作品を系統的に調査することで、単一作品の調査だけでは見出せない情報を顕在化できる。 正確性：複数の調査手法を取り入れることで科学的客観性を担保している。						

2. 定量的評価

観点	論文数	発表件数	報告書			
判定	A	A	A			
判定理由 論文数：保存科学誌に成果を発表した。 発表件数：日本文化財科学会等で研究発表を行った。 報告書：研究成果報告書（非売品）2冊を刊行した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	基礎的研究と応用的研究を両輪として研究推進を図っており、短期的及び長期的視野の両面において、的確な進捗がなされている。作品を所蔵する博物館・美術館・社寺等からの信頼を増大すべく、共同調査の実施や、調査結果の解析・公開を積極的に行った。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	研究計画の第3年度として、基礎的研究から応用的研究への比重を高め、博物館・美術館・社寺等でのその場分析の実施を推進した。また、論文投稿・学会発表及び調査報告書の刊行という形で、成果の公開を積極的に進め、東文研の技術力・信頼性をアピールすることに努めた。調査データや画像等の蓄積も着実に進んでおり、これまでに膨大な調査結果が収蔵されている。今後は、この膨大なデータの保管・維持・活用方法について、システム化・予算化を進めることが必要である。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	ミリ波イメージングにかかる基礎実験及び装置の改良等（(3)ー③ーイ）		
【事業概要】 ミリ波イメージング及びテラヘルツ分光イメージングにより文化財を対象とした測定に必要となるデータを収集するための基礎実験を行う。さらに、文化財に用いられている材料のテラヘルツ分光スペクトルの収集を行う。			
【担当部課】	埋蔵文化財センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学研究室長 高妻洋成
【スタッフ】 脇谷草一郎（保存修復科学研究室研究員）、田村朋美（保存修復科学研究室研究員）、降幡順子（都城発掘調査部主任研究員）			
【主な成果】 サブミリ波イメージングにより、絹本著色の掛軸の層構造に関する非破壊調査を行った。フレスコ画試験体の層構造の検出に関する核磁気共鳴法とテラヘルツ分光イメージングの比較研究を行った。			
【年度実績概要】 ・ サブミリ波イメージングによる調査に関しては、Picometrix 社製 T-Ray4000 を用いて、掛軸の調査を行った。発信周波数の領域は 0.2～1.4 THz（テラヘルツ）の範囲で、レンズには焦点距離 3 inch のものを用いた。分解能は 0.1mm とした。 ・ 絹本著色の掛軸である春日曼荼羅に対するサブミリ波イメージングにより、表面と裏面の両面に対して測定を行うことで、裏彩色の存在を推定できることを明らかにした。研究成果を Asia-Pacific Microwave Photonics Conference 2013 にて発表した。 ・ ポンペイ等のフレスコ技法を再現したモデル壁画試料を、THz 波及びポータブル NMR（核磁気共鳴）装置により観測し、両者を比較した。その結果、表面付近を三次元で短時間に観測するには THz 波が優れているが、NMR は、一点での情報であっても、支持体表面から絵画層までの層の位置を示すことができることが確かめられた。得られた研究成果を文化財保存修復学会にて発表した。 ・ これまで実施してきた文化財の材料調査へのテラヘルツ波イメージングの応用事例を総括し、3rd International Symposium on Conservation of Cultural Heritage in East Asia にて発表した。			
【実績値】 発表件数：3 件（①～③） 論文件数：3 件（④～⑥）			
【備考】 発表 ①M. Kim, K. Fukunaga and Y. Kohdzuma, "Application of Terahertz Wave Imaging Technique to Structural Survey of a Historical Painting on Silk", Asia-Pacific Microwave Photonics Conference 2013, 22-24 April 2013. ②福永香, W. Zia, T. Meldrum, B. Bluemich, 高妻洋成, 「テラヘルツ波および核磁気共鳴法による壁画の構造調査」文化財保存修復学会第 35 回大会、2013. 7. 20～21. ③高妻洋成, 福永香, 建石徹, 金旻貞「文化財の材料調査へのテラヘルツ波イメージングの応用」, 3rd International Symposium on Conservation of Cultural Heritage in East Asia, 5-6 September 2013. 論文等 ④M. Kim, K. Fukunaga and Y. Kohdzuma, "Application of Terahertz Wave Imaging Technique to Structural Survey of a Historical Painting on Silk", Proceedings of Asia-Pacific Microwave Photonics Conference 2013, 2013. 4 ⑤福永香, W. Zia, T. Meldrum, B. Bluemich, 高妻洋成「テラヘルツ波および核磁気共鳴法による壁画の構造調査」『文化財保存修復学会第 35 回大会研究発表要旨集』2013. 6 ⑥高妻洋成, 福永香, 建石徹, 金旻貞「文化財の材料調査へのテラヘルツ波イメージングの応用」, 3rd International Symposium on Conservation of Cultural Heritage in East Asia, 2013. 9			



春日曼荼羅のテラヘルツ分光イメージング



春日曼荼羅のテラヘルツ分光イメージング

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 4332

自己点検評価調査

研No.35

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：絵画の漆喰層や裏打ちなどの層構造及び状態を可視化できる非破壊非接触調査法として開発されている。 独創性：サブミリ波イメージングをポータブル型NMRと比較した。 発展性：ミリ波及びサブミリ波は、その周波数帯に応じて検出深度や解像度が異なるため、調査目的に応じた適用が可能である。 効率性：検出器の感度を向上させたことにより、文化財を対象とした調査時間の短縮を行うことができる。 正確性：サブミリ波イメージングにより、掛軸の裏彩色及び表具の構造を明瞭にとらえることができた。						

2. 定量的評価

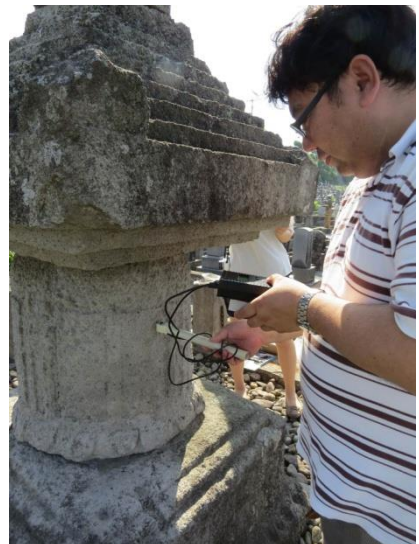
観点	発表件数	論文件数				
判定	S	S				
判定理由 発表件数：目標である2件を超える3件を達成した。 論文件数：目標である2件を超える3件を達成した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	異なる分析装置との比較研究を行うことにより、文化財の表面付近における構造調査に対するサブミリ波イメージングの有効性を確認することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年度の計画を当初の計画どおり実施できたことから、順調と判定した。分析作業は継続して行っており、本年度は染料のテラヘルツ分光スペクトルの収集に着手した。次年度以降はさらに染料の分析を進めるとともに、文化財資料の材料分析への応用を進める予定である。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	周辺環境が文化財に及ぼす影響評価とその対策に関する研究((3)－④)		
【事業概要】 屋外に位置する木造建造物及び石造文化財を対象に、文化財劣化要因となる周辺環境の影響評価手法や劣化診断手法を確立する。また、木造建造物の修復材料について実験室及び現地曝露試験による評価を行う。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	修復材料研究室長 朽津信明
【スタッフ】 早川典子（主任研究員）、森井順之（主任研究員）、岡田健（センター長）			
【主な成果】 石造文化財や木造建造物など屋外にある文化財について周辺環境計測を行った。また、その結果に基づく劣化要因の解明、周辺環境影響の軽減手法及び修復材料・技法の開発・評価を行った。詳細には、(1)磨崖仏の保存環境制御に関する現地試験及び石造文化財劣化と周辺環境影響に関する調査、(2)積雪寒冷地における木造建造物の保存環境に関する調査を実施した。			
【年度実績概要】 (1)石造文化財： 臼杵磨崖仏において、表面の剥落片に対してより長期間接着可能な材料選定に向けて実験を継続した。また、赤碕塔では蜂の巣状剥離を起こしている石塔の状態調査や周辺環境調査を実施し、劣化箇所と現地卓越風の関係を突き止めることができた。また、各地の大名墓など近世石造文化財の調査では、墓標に入った塗装の劣化と覆屋有無など周辺環境との関係を確認することができた。 また、臼杵磨崖仏では凍結防止策としての覆屋閉鎖実験を行い、その成果から今回の保存修理工事において開口部にシャッター等が取り付けられることとなったが、海外における冬期凍結防止策について、覆屋閉鎖以外の方法を取っているかの情報収集のため、ヘレンキームゼー城（ドイツ）、ブイヨン城（ベルギー）にて調査を行った。その結果、ドイツではWinter Shelter との呼び名で屋外彫刻に一時的な覆屋を設置しているが、それは例外的なもので、ベルギーでは欠損部のモルタル充填など、まだパッシブコントロールが行われていない現状を確認した。			
(2)木造建造物： 積雪寒冷地における木造建造物の保護のために設置された覆屋について、木材やガラスなど覆屋材質の違いが保存環境にどのように影響するのか、温湿度・照度・紫外線強度の現地連続観測を行った。引き続き測定を継続していくが、透明覆屋では温湿度や紫外線強度の変化が確認されるなど、今後劣化状態を確認するうえで有用なデータが得られた。また、これらの成果は次年度発表を行う予定である。			
			
赤碕塔における蒸発量調査			
【実績値】 論文数：4 件（①～④）、発表件数：4 件（⑤～⑧）			
【備考】 論文 ①KUCHITSU, Nobuaki : Deterioration of stone monuments by epiphytes in relation with environmental factors 第 36 回文化財の保存および修復に関する国際研究集会報告書 2014. 2 ②MORII, Masayuki : Method for cleaning epiphytes on stone monuments 第 36 回文化財の保存および修復に関する国際研究集会報告書 2014. 2 ③朽津信明：日本における岩刻画の保存—フゴッペ洞窟の例を中心に— 日韓共同研究報告書 2013. 5 ④森井順之：九州装飾古墳の保存環境調査 日韓共同研究報告書 2013. 5 発表 ⑤朽津信明、森井順之、伊藤広宣、山路しのぶ、神田高士：臼杵市・下藤キリシタン墓地における遺構の凍結防止策 文化財保存修復学会第 35 回大会 2013. 7. 20-21 ⑥朽津信明：中世石造物に見られる彩色顔料の特徴について 日本文化財科学会第 30 回大会 2013. 7. 6-7 ⑦森井順之、朽津信明、川口孝、時元省二、松田英之：磨崖和霊石地蔵の修復 第 3 回東アジア文化遺産保存国際シンポジウム 2013. 9. 5-6 ⑧森井順之：大分・臼杵磨崖仏における次期保存修理に向けた調査研究—磨崖仏の劣化とその対策— 地盤遺産シンポジウム 2014. 2. 4			

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：臼杵磨崖仏や菅尾磨崖仏では現在覆屋改修が進められており、現場に適切に対応できている。 独創性：劣化した文化財自身を処理するのではなく、環境制御により対処する方向性は独創的である。 発展性：赤碕塔の蜂の巣状剥離の要因として突き止めた卓越風との関係については、ほかにも適用可能である。 効率性：多くの調査研究事例を知ることで効率的な研究を推進している。 継続性：屋外文化財の覆屋について現在でも問い合わせが多くある中で、研究継続が求められている。 正確性：屋外文化財の劣化原因調査や保存環境調査において、写真撮影や実測などを重視するとともに、向きや植生など周辺環境条件も現地で確認することで、劣化と周辺環境の相関について正確な記述を心がけている。						

2. 定量的評価

観点	論文数	発表件数				
判定	A	A				
判定理由 論文等：石造文化財の劣化、生物被害対策に関して国際研究集会で発表した内容を論文にまとめた。 発表件数：屋外文化財の凍結対策や保存環境に関して各種学会で発表できた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	石造文化財の保存状態とその周辺環境の相関について様々な事例を確認でき、劣化防止策としての環境制御の可能性について有益な情報を得た。また、木造建造物の覆屋の効果について保存科学的調査を継続できた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画通り順調に進めることができた。特に石造文化財については、赤碕塔の事例にもあるように周辺環境をより注意深く観測することが求められることが分かったため、今後の調査にも活かしていきたいと考える。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化財の防災計画に関する研究((3)－④)		
【事業概要】 自然災害による文化財被害は甚大であり、復旧には多大な労力と時間を要する。我が国では自然災害の発生予測が難しいうえ、発生後すぐの救援はほぼ不可能である。そのため、「減災」の方向性を探ることが求められている。本研究課題では「地震・津波」を対象に下記の調査研究を進め、文化財の減災に必要な研究成果を提供する。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	修復材料研究室長 朽津信明
【スタッフ】 早川典子（主任研究員）、森井順之（主任研究員）、北野信彦（伝統技術研究室長）、中山俊介（近代文化遺産研究室長）、岡田健（センター長）、佐野千絵（保存科学研究室長）、木川りか（生物科学研究室長）、佐藤嘉則（研究員）、犬塚将英（主任研究員）、吉田直人（主任研究員）、山内和也（文化遺産国際協力センター保存計画研究室長）			
【主な成果】 平成 25 年度は、(1)東日本大震災被災文化財に関する研究では、福島県の要請に応じて旧警戒区域内での文化財救援活動を継続し、新たに福島県被災文化財等救援事業の実施を実現した。宮城県では、同県被災文化財等保全連絡会議との連携を図りつつ、救援文化財一時保管場所について温湿度・生物環境に関する調査を実施した。また、津波水損文化財を対象に修復方法に関する実験研究を行った。(2)文化財の地震対策に関する研究では、東大寺戒壇堂建物の常時微動調査、石造文化財について石造多層塔の現地調査や石灯籠の振動台実験を行った。			
【年度実績概要】 (1)東日本大震災被災文化財に関する研究では、震災後 3 年を経過する中、福島県旧警戒区域内からの文化財救出と被災文化財の安定収蔵に向けた調査研究を継続実施した。 - 東京電力福島第一原子力発電所事故により設定された警戒区域内の文化財を救援するため、平成 24 年度に被災文化財等救援委員会が活動を行ったが、完了しなかった富岡町・双葉町の両歴史民俗資料館からの救出と資料館以外の個人住宅等からの救出を実現するため、東京文化財研究所単独で福島県被災文化財救援対策本部と連携して活動を続けるとともに、新たな枠組みとして国立文化財機構が中心となり実施する救援事業を発足させた。年度末までに全ての資料館からの救出活動を完了し、来年度以降福島県が独力で活動を継続するための基盤構築に貢献した。 - 一時保管施設の保存環境調査：宮城県石巻文化センター救援文化財の一時保管施設となっている旧石巻市立湊第二小学校校舎内の保存環境調査（温湿度、浮遊菌等）を行った。同県被災文化財等保全連絡会議との連携を図り、その他の一時保管施設の状況について情報を収集した。また、その成果の一部について学会発表を行った。 - 鹿嶋市龍蔵院の仏画では、過去の修理に伝統的材料を用いず、そのため今回の震災によって特徴的なダメージが発生した。そのような被災文化財の応急処置・修復に関する研究を進めた。 (2)文化財の地震対策に関する研究では、東日本大震災にて多数の被害報告があった石灯籠を対象に、特に地面との接触方法に関して振動台実験による評価を行った。また、野田神社宝篋印塔（今治市）など石造文化財の現地調査を実施し、地震対策の必要性について考察した。塑像・乾漆像の調査については、既に転倒予測を行った東大寺戒壇堂安置の塑造四天王立像について、戒壇堂建物の耐震性を把握するため常時微動調査を行った。			
			
一時保管施設の保存環境調査（石巻市）			
【実績値】 論文数：1 件（①）、発表件数：1 件（②）			
【備考】 論文 ①朽津信明：活動支援班報告 東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会平成 24 年度報告書、2013.5 発表 ②森井順之、犬塚将英、岡田健、及川規、木暮亮、芳賀英実、小谷竜介：石巻文化センター被災文化財一時保管場所の温湿度環境について、文化財保存修復学会第 35 回大会、2013.7.20-21			

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：東日本大震災から3年が経過した中で、将来に向けての防災対策の構築はますます急務となった。 独創性：海水によって水損した文化財に用いられた多様な材料に対して、保存処置の方法を実践的に開発した。 発展性：次の災害に備えるために必要な調査研究を進めることができた。 効率性：石造文化財の地震対策や救援活動など大きな課題に対して少ない人員で対応した。 継続性：東日本大震災以来、一貫して救出活動・保全対策・将来の防災対策を連続した事項として捉え、研究を継続している。 正確性：的確な情報収集をもとに適切な情報判断を行い、科学的根拠をもとに具体的な対策や方法を構築し、文化財の所有者や自治体の文化財担当者に伝えている。						

2. 定量的評価

観点	論文数	発表件数				
判定	A	A				
判定理由 論文数：東日本大震災被災文化財救援事業についてまとめ、大災害が将来起こったときに参考となる資料を作成した。 発表件数：現在被災文化財が抱える問題である一時保管環境について広く情報を提供すべく、被災文化財の一時保管施設環境に関する報告を行った。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	東日本大震災による被災文化財の保存修復について、今必要とされている保存修復に関する調査研究を進められた。福島県における文化財救出支援体制の構築に大きく貢献した。また、石造文化財の地震対策では石灯笼の地震時挙動についてより詳細に明らかにするとともに、塑像・乾漆像の地震対策についても、東大寺戒壇堂において建物の常時微動調査を行うことで、建物の地震対策の必要性を喚起した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究では、中期計画策定時に想定していなかった東日本大震災の発生を承け、災害発生時の対応とその結果への検証を経て、具体的な事例をもって将来にわたる防災対策の構築を行うことになった。この3年間の蓄積をもとに、残された2年間でその成果をまとめることになる。個別のテーマとしては、いまだ有効な地震対策が講じられていない石灯笼など石造文化財について、地震時挙動を明らかにしていきたい。建造物が建てられている地盤から見た建築内部の文化財が地震時に受ける震動の影響についての研究も着々と実験と考察を積み重ねている。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化財の放射線対策に関する研究((3) -④)		
【事業概要】			
平成 23 年 3 月の東日本大震災により発生した福島県の原子力発電所の事故により被曝した文化財の現状把握、調査手法、移動方法、除染方法等に関する研究が急務となった。また、万が一再度同様の放射線災害が発生することがあってはならないが、今回の災害が実際に発生したことを認識して、放射線災害から文化財を守るための、事前準備、常時監視のあり方、事故時の緊急対応等に関する研究が必要となった。本プロジェクトでは、東京文化財研究所が中心になり、国立文化財機構の保存担当の職員、美術館関係者、福島県の関係者及び放射科学の専門家と一緒にこれらの研究を行い、文化財を放射線から防御するための対策に関して基本的な考え方をまとめることを目的とする。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	副所長 石崎 武志
【スタッフ】			
岡田健（センター長）、佐野千絵（保存科学研究室長）、早川泰弘（分析化学研究室長）、木川りか（生物科学研究室長）、朽津信明（修復材料研究室長）、北野信彦（伝統技術研究室長）、中山俊介（近代文化遺産研究室長）、吉田直人（主任研究員）、犬塚将英（主任研究員）、早川典子（主任研究員）、佐藤嘉則（研究員）、森井順之（主任研究員）、降幡順子（奈良文化財研究所主任研究員）、神庭信幸（東京国立博物館保存修復課長）、浅湊毅（京都国立博物館保存修理指導室長）、谷口耕生（奈良国立博物館保存修理指導室長）、今津節生（九州国立博物館博物館科学課長）、松本透（東京近代美術館副館長）、村上博哉（国立西洋美術館学芸課長）、山本智代（全国美術館会議）、丹野隆明（福島県）、伊藤匡（福島県）、松田隆嗣（福島県）、杉崎佐保恵（福島県）、桧垣正吾（東京大学アイソトープ総合センター助教）、葉袋佳孝（武蔵大学基礎教育センター教授）、久保謙哉（国際基督教大学理学研究科教授）			
【主な成果】			
平成 25 年度は、(1) 放射線量の測定方法、環境評価等に関する研究では、ワーキンググループ会議を 3 回開催し、放射線被害に関する危機管理マニュアル案を作成した。(2) 汚染状態の現状把握と除染方法等に関する研究では、福島県で現地調査を開催するとともに、ワーキンググループ会議を開催して、文化財の除染に関する基本的な考え方をまとめた。これらの結果に関して、プロジェクトチーム会議及び研究会で議論を行い、文化財を放射線から防御するための対策に関して基本的な考え方をまとめた。			
【年度実績概要】			
本年度は、放射線量の測定方法、環境評価等に関する WG 1 と汚染状態の現状把握と除染方法等に関する WG 2 を設置し、具体的に活動を進めた。博物館・美術館等の文化財施設には、危機管理マニュアルとして放射線被害に関してはないので、WG 1 では、危機管理マニュアル作成のための会議を 3 回開催した。また、WG 2 は、福島県での現地調査を兼ねて 1 回開催した。また、PT 会議は 2 回開催した。			
26 年 2 月 12 日に、東京文化財研究所会議室で、「文化財の放射線対策に関する研究会」を行った。参加者は、50 名であった。プログラムは、1) 研究会の趣旨説明（東京文化財研究所副所長 石崎武志）、2) 除染に関する基本的な考え方（東京大学助教 桧垣正吾）、3) 福島県立美術館での放射線対策について（福島県立美術館学芸課長 伊藤匡）、4) 放射線量の測定方法、環境評価等に関する WG 1 活動報告（東京文化財研究所保存修復科学センター 佐野千絵）、5) 除染方法等に関する WG 2 活動報告、（同 佐野千絵、北野信彦）、6) 総合討論が行われた。総合討論は、活発に行われ有意義なものであった。			
26 年 2 月 13 日には、「文化財の放射線対策に関する調査研究プロジェクトチーム会議」が開催され、今後の方針が議論され、作成した危機管理マニュアル案を東京文化財研究所ウェブサイトで公開し、広く意見を求めた。			
			
仏像の除染作業の様子		研究会での講演の様子	
【実績値】			
研究会 1 回、ワーキンググループ会議 4 回、プロジェクトチーム会議 2 回 危機管理マニュアル案作成 1			
【備考】			

自己点検評価調査

研No.38

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性			
判定	S	A	A			
判定理由 適時性：平成23年3月の東日本大震災により発生した福島県の原子力発電所の事故により被曝した文化財の現状把握、調査手法、移動方法、除染方法等に関する研究が急務である。 独創性：文化財の除染方法などの研究は過去になく新規性がある。 発展性：放射線被害に関する危機管理マニュアル案を作成することができた。また、文化財を放射線から防御するための対策に関して基本的な考え方をまとめた。						

2. 定量的評価

観点	研究会	ワーキンググループ 会議	プロジェクトチーム 会議	危機管理マニュアル 案作成		
判定	A	A	A	A		
判定理由 研究会：26年2月12日に、東京文化財研究所会議室で、「文化財の放射線対策に関する研究会」を開催した。 ワーキンググループ会議：予定通り4回開催することができた。 プロジェクトチーム会議：予定通り2回開催することができた。 危機管理マニュアル案作成：放射線被害に関する危機管理マニュアル案を作成できた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	放射線量の測定方法、環境評価等に関する研究では、ワーキンググループ会議を3回開催し、放射線被害に関する危機管理マニュアル案を作成した。また、汚染状態の現状把握と除染方法等に関する研究では、福島県で現地調査を開催すると共に、ワーキンググループ会議を開催して、文化財の除染に関する基本的な考え方をまとめた。これらの結果に関して、プロジェクトチーム会議及び研究会で議論を行い、文化財を放射線から防御するための対策に関して基本的な考え方をまとめることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	平成23年3月の東日本大震災により発生した福島県の原子力発電所の事故により被曝した文化財の現状把握、調査手法、移動方法、除染方法等に関する研究が急務となったため、東京文化財研究所が中心になり、国立文化財機構の保存担当の職員、美術館関係者、福島県の関係者及び放射科学の専門家と一緒に検討を進めたものである。短期間で、放射線被害に関する危機管理マニュアル案及び、文化財の除染に関する基本的な考え方をまとめることができた。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化財における伝統技術及び材料に関する調査研究((3)－⑤)		
【事業概要】 我が国ではこれまで和紙、糊、膠、漆、顔料などの伝統的な文化財修復材料が劣化の程度や修復技術者の経験をもとに長年使われてきた。これら文化財に使用される伝統技術及び材料や保存修理で使用する合成樹脂の物性、製作技法、利用法に関する調査・分析・評価及び開発を行い、修理現場での応用を図る。以上の内容に即した研究会を開催する。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	伝統技術研究室長 北野信彦
【スタッフ】 朽津信明（修復材料研究室長）、早川典子（主任研究員）、吉田直人（主任研究員）、犬塚将英（主任研究員）、佐藤嘉則（研究員）、本多貴之（客員研究員、明治大学理工学部専任講師）、加藤雅人（文化遺産国際協力センター主任研究員）			
【主な成果】 本年度は中期計画の3年目にあたり、伝統的な文化財建造物の塗装材料である漆塗装や乾性油塗料などの過去の塗装修理に関する基礎資料の蓄積を図るとともに、その実績を塗装修理作業の実践的な施工指導に役立てた。また、これまであまり注目されてこなかった欄間木彫等の凹凸がある部材の塗装彩色の劣化メカニズムの解明や伝統技術及び材料の調査、現状維持修理方法の策定、復元レプリカの作成を伴う資料活用方法の模索などの調査研究にも着手した。合成樹脂に関する調査では、過去使用した建造物塗装のうちで合成樹脂を使用した際の劣化状態の調査と、伝統素材である膠材料を強化するため、合成樹脂とブレンドした際の塗膜の状態を理解するための基礎実験を継続した。また、第7回文化財における伝統技術及び材料に関する研究会を開催した。			
【年度実績概要】 ・引き続き、建築文化財に使用する塗装材料の耐候性向上に向けた基礎実験を進めるとともに、PY-GC/MS 分析装置を用いた塗装材料をはじめとする各種修復材料の基礎分析を進めた。このような調査実績を日光東照宮陽明門や厳島神社反橋、平等院鳳凰堂における塗装修理などの実践的な施工計画に役立てた。 ・引き続き、研究所が所蔵する表具裂見本の絹布関係資料について、個々の資料の絹の折状態や繊維の拡大顕微鏡画像の取り込みを行い、基礎データを集積した。さらに、伝統材料である各種顔料の標品試料に関する粒子観察及び分析を伝統材料として使用するための資料整理を開始した。 ・我が国で使用された伝統技術や材料を理解するために、京都市平安京三条四坊十町跡出土の一括の漆器未製品、鎌倉市大倉幕府跡出土の漆塗金属製籠手や漆器、一宮市博物館所蔵仁王胴具足などの分析調査を行った。 ・「文化財建造物における木彫彩色の保存・修理・資料活用」というテーマで、25年9月26日に東京文化財研究所の会議室で第7回文化財における伝統技術及び材料に関する研究会を開催し、定員30名のところ計53名の参加を得た。 講演：1.「本会の趣旨」：北野信彦（東京文化財研究所）、2.第Ⅰ部『瑞巖寺本堂の欄間彩色の修理と資料活用』：「瑞巖寺本堂欄間の調査と保存」：酒巻仁一（文化財建造物保存技術協会）、「資料活用をめざした光造形樹脂レプリカの作成」：運天弘樹（凸版印刷総合研究所）・北野信彦（東京文化財研究所）、3.第Ⅱ部『日光東照宮の木彫彩色の保存と修理』：佐藤則武・手塚茂幸（日光社寺文化財保存会）、4.参加者全員「総合討論」			
【実績値】 論文数 3件（①～③）、発表件数 2件（④、⑤）、研究会開催数 1回（参加者数：53名）、報告書 1冊（⑥）、			
【備考】 論文 ①北野信彦：文化財建造物における伝統的な塗装材料と施工上の問題点、『塗装工学』第48巻11号、2013.11 ②北野信彦・本多貴之：仁王胴具足にみられる桃山文化期の一塗装技術、『保存科学53』、2014.3 ③北野信彦・小檜山一良・竜子正彦・本多貴之・宮腰哲雄：桃山文化期における輸入漆の調達と使用に関する調査（Ⅲ）－日本国内の出土漆器における輸入漆塗料の使用事例－、『保存科学53』、2014.3 発表 ④北野信彦・小檜山一良・竜子正彦・本多貴之・宮腰哲雄：桃山文化期における輸入漆の調達と使用に関する調査（Ⅲ）、第30回日本文化財科学会、弘前大学、2013.7.6 ⑤北野信彦・吉田直人・運天弘樹・伊藤利憲・篠塚慶介・酒巻仁一・伊奈仁：桃山文化期欄間彩色の保存と資料活用に関する基礎的調査、文化財保存修復学会第35回大会、東北大学、2013.7.20-21 報告書 ⑥『文化財における伝統技術及び材料に関する調査研究報告書2013年度』東京文化財研究所、2014.3			

自己点検評価調査

研No.39

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：日光東照宮陽明門、平等院鳳凰堂、厳島神社反橋など、具体的な文化財建造物で実施されている塗装修理や、鎌倉市大倉幕府跡出土漆塗籠手や京都市中世漆器などの保存処理施工方法の策定に調査結果を反映させた。 独創性：過去の塗装材料や彩色材料の調査方法として、PY-GC/MS 分析法をさらに応用し、日光東照宮陽明門の東西壁壁画や仁王胴具足の肌色塗装などからを分析した結果、これまでほとんど注目されてこなかった西洋油画的な技法が確認された。また、はじめて輸入漆塗料を使用した桃山文化期の出土漆器も日本国内で確認した。 発展性：本プロジェクトでは特に風雨に晒されて劣化が著しい文化財建造物の塗装彩色の修理や、脆弱な漆塗料や有機質材料を伴う複合材料からなる考古資料を研究対象としている。これらの材質・技法に関する分析調査やその結果を考慮した手板試料の劣化促進実験を伴う基礎調査結果の蓄積は、今後国内のみならず海外においても同様の劣化が著しい文化財の保存修復方法の策定処に応用できるものと考え、調査結果の資料化とこれまでの成果の公表を積極的に行った。 効率性：これまで開発した分析手法は、基本的には現有施設と人員を使用することで比較的多くの分析試料を短期間に結果が出せること、さらにはこの結果を実際の保存修復作業の現場にも生かせることが確認された。 継続性：実際の文化財建造物における塗装彩色修理や考古資料の保存処置は、タイトな期間内に比較的安価で効率よく実施することが基本である。本プロジェクトの成果は幾つかの保存修復の現場の作業に効率よく反映されており、今後も継続する予定である。						

2. 定量的評価

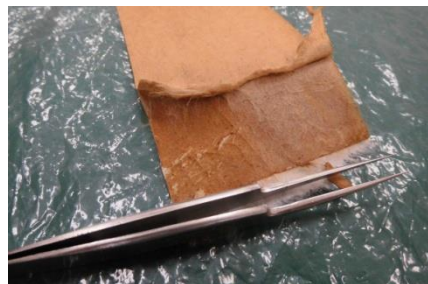
観点	論文数	発表件数	研究会開催数	報告書		
判定	A	A	A	A		
判定理由 論文数、発表件数、研究会開催数、報告書：いずれも当初計画の目標に達成した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財建造物に使用する屋外塗装や彩色材料の歴史資料に関する調査研究や物性・耐候性試験を行い、実際の塗装修理の現場の施工に役立てた。絹などの表具裂見本や各種顔料のデータベース化、文化財の修復材料などに関して有益な基礎的知見を収集することができた。さらにこの成果の一部を研究会や講演会などを通じて公表した。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本プロジェクトで実行している手法や調査結果の有用性が修理現場に応用されるなど、当初の計画通り有効性が明らかになってきた。それに伴い重要な知見の蓄積とこれらの一部を報告書と研究会報告の形で公開及び纏めることができた。そのため、計画の実施状況は順調である。次年度も引き続き、基礎的知見の蓄積と資料調査結果のデータベース目録化を推進する予定である。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査研究及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化財修復材料の適用に関する調査研究（(3)－⑤）		
【事業概要】 文化財修復においては、使用する材料及び手法の適切な適用が修復後の作品の状態を大きく左右する。本プロジェクトでは、文化財の種類を問わず修復に用いられる材料について、修復現場での具体的な使用を念頭に材料の分析及び評価を行い、個々の材料について分野にとらわれず横断的な研究を行うことで、最適な使用方法や使用条件の確立を目指す。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	修復材料研究室長 朽津信明
【スタッフ】 早川典子（主任研究員）、北野信彦（伝統技術研究室長）、中山俊介（近代文化遺産研究室長）、木川りか（生物科学研究室長）、森井順之（主任研究員）、佐藤嘉則（研究員）、本多貴之（客員研究員、明治大学理工学部専任講師）、酒井清文（客員研究員）、岡田健（センター長）、加藤雅人（文化遺産国際協力センター主任研究員）、山下好彦（任期付研究員）、楠京子（アソシエイトフェロー）、山田祐子（アソシエイトフェロー）			
【主な成果】 絵画修復材料に関する化学分析、クリーニング方法の検討実験を行った。建造物修理材料の現地曝露試験とその評価を開始した。工芸品の調査としてベトナム漆の現地調査を行った。			
【年度実績概要】 ・ 絵画修復材料の物性に関する分析を行った。本年度はフノリについて、その種類による分子構造解析を行った。また、抽出温度による粘度と分子量の差異についても、細かく温度変化を行い、測定した。また、澱粉の老化を利用した接着剤の調整方法についても化学分析を行った。これらの成果について学会発表した。 ・ 古代に典籍類に使用されていた大豆を原料とすると推定される接着剤について、初めて実資料の赤外分光分析を行い、併せて比較試料を複数作成分析することで、客観的なデータを提示した。 ・ 過去に接着剤として使用されたポリビニルアルコールに関してその劣化機構の分子構造解析を行った。 ・ 絵画修復材料としては、人工劣化絹の改良についても対象とし、紫外線や湯洗浄を用いた質感の改良について実験を行い、学会発表した。 ・ クリーニングに酵素を適用する手法を検討した。 ・ 建造物の木材空隙部分の充填材料としてエポキシ樹脂を主成分とするパテ材を検討し、厳島神社において現地曝露を行なった。また、表面の変色を軽減するため、主成分の改良とともに表面処理方法についても検討し、各種の曝露試験を開始した。 ・ 産地の異なる漆の調査を行った。技法や試料を調査してきたタイとミャンマーと比較するためにベトナムにおける漆の調査を行った。技法、材料、道具等について現在の状況と、過去の作品について現地で調査した。			
			
		酵素を利用した小麦糊の除去検討	
【実績値】 論文数 1 件 (①)、発表件数 7 件 (②～⑧)			
【備考】 論文 ①報告：典籍類に使用された「豆糊」の赤外分光分析（早川典子）『保存科学 53』、2014. 3 発表 ②老化を利用した小麦デンプン糊の接着力調整に関する研究（早川典子、君嶋隆幸、畠中芳郎）文化財保存修復学会第 35 回大会、2013. 7. 21、東北大学 ③絵画修理に用いる膠に関する考察（岡泰央、小笠原具子、早川典子、富沢千砂子）文化財保存修復学会第 35 回大会、2013. 7. 21、東北大学 ④Characterization of Fukuro-Funori and Ma-Funori through NMR spectroscopy " Nguyen Thu Ha, Noriko Hayakawa, Riichiro Chujo, Seiichi Kawahara、高分子討論会、2013. 9. 11、金沢大学 ⑤" Structural Characterization of MaFunori Extracted from Red Seaweed through NMR Spectroscopy " Nguyen Thu Ha, Noriko Hayakawa, Seiichi Kawahara, Riichiro Chujo、NMR 研究会、2013. 5. 17、東京工業大学 ⑥壁画修復処置に用いる接着材料への酵素の影響（貴田啓子、早川典子、佐藤嘉則、大河原典子、和田朋子、五十嵐圭日子、木川りか、川野邊渉）文化財保存修復学会第 35 回大会、2013. 7. 21、東北大学 ⑦剥落止めに用いる膠の処理方法について（早川典子、富沢千佐子、岡泰央、奈良真一、小笠原具子）文化財保存修復学会第 35 回大会、2013. 7. 21、東北大学 ⑧絹本文化財の修復材料としての劣化絹の研究 -電子線照射と紫外線照射の併用-（山田祐子、早川典子、坪倉早智子、岡泰央、川野邊渉）文化財保存修復学会第 35 回大会、2013. 7. 21、東北大学			

自己点検評価調査

研No.40

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：現在修復を行っている建造物や装演作品を念頭に研究を遂行し、得られた成果を随時反映させてきた。 独創性：酵素の適用や、作成条件による材料の調整など、従来にはない観点からの調査研究を行った。 発展性：本研究の成果は、実際の文化財修復への活用を念頭に行われており、現場において様々な発展が可能である。 効率性：所内の横断的なメンバーにより研究を分担し、他機関からの調査派遣依頼などに基づき研究を推進しており、効率よく推進することができる。 継続性：文化財修復材料に関する基礎的研究と現場への適用研究との両者を連携づけ、十分な成果を得られている。 正確性：複数の分析手法、多岐にわたる修復材料を網羅し、科学的客観性を確保している。						

2. 定量的評価

観点	論文数	発表件数				
判定	A	A				
判定理由 論文数：保存科学等に豆糊に関する報告を掲載するした。 発表件数：膠、澱粉糊、紫外線劣化絹等について文化財保存修復学会で報告し、また、ポリビニルアルコールやフノリに関する化学分析を文化財保存修復学会や高分子討論会において発表した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財修復に使用されている材料について、広範囲に網羅した研究を行い、それぞれについて科学的な分析評価を行うことで現場での適用方法の可能性を広げた。実際の修復現場で、これらの成果が具体的に活用され始めており、基礎研究を遂行しながら、具体性、発展性の高い研究を行っている。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画に基づき、文化財修復現場での適用を念頭に材料の精査を遂行できている。今年度の成果をもとに、さらに発展させた研究を行う予定である。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	近代の文化遺産の保存修復に関する研究 ((3) -⑥)		
【事業概要】 近代の文化遺産は、絵画、彫刻、木造建造物など従来の文化財とは、規模、材質、製造方法などに大きな違いがあるため、その保存修復方法や材料にも大きな違いがある。本研究では、近代の文化遺産の保存修復を行う上で必要とされる材料と技術について調査研究を行う。具体的には、大型構造物の劣化機構の解明とその修復方法の究明、航空機、船舶、鉄道車両などの保存修復上の問題点とその解決方法の究明を目指している。			
【担当部課】	保存修復科学センター	【プロジェクト責任者】	近代文化遺産研究室長 中山俊介
【スタッフ】 朽津信明（修復技術研究室長）、早川典子（主任研究員）、森井順之（主任研究員）、池田芳妃（研究補佐員）、小堀信幸（客員研究員・（公財）船の科学館）、横山晋太郎（客員研究員）、長島宏行（客員研究員・（一財）日本航空協会）、堤一郎（客員研究員・中央大学非常勤講師）			
【主な成果】 (1) 服飾品：明治維新以降急速に普及した洋服、建築物や列車（御料車など）の室内装飾に使用された裂地などの保存と修復及び活用に関して、また、それまで服飾には使用されてこなかった材料を使った服飾品の保存手法等に関して関係者を招き、研究会を開催し、美術的な位置づけや技術的問題点に関する保存と修復手法について、発表、討論を行い、保存や修復に関する理解を深める事ができた。 (2) 屋外展示物：屋外展示されている大型構造物、鉄道車両や航空機などの文化財の防錆対策のため、試験片を使った屋外暴露試験にて、塗装仕様と劣化速度の相関についても調査した。 (3) 建造物・構造物：佐渡金銀山遺跡、長崎県端島（軍艦島）、山口県萩市や静岡県伊豆の国市の反射炉など、史跡指定地に建つ建造物や構造物の保存や修復に関する研究を行った。 (4) 報告書：昨年度の研究会をまとめた報告書を刊行した。			
【年度実績概要】 (1)服飾品/テキスタイル： ・明治維新以降急速に普及した洋服、建築物や列車（御料車など）の室内装飾に使用された裂地などの保存と修復及び活用に関して、また、それまで服飾には使用されてこなかった材料を使った服飾品の保存手法等に関して国内の博物館で保存や修復を担当している専門家や海外の博物館において同様に保存や修復を担当している専門家を招き、美術的な位置づけや技術的問題点に関する保存と修復手法について、発表、討論した研究会を25年11月22日に東京文化財研究所地階セミナー室にて実施した。 ・ヨーロッパにおいて、服飾品の保存と修復に関する現状をイギリスの V&A 美術館、大英博物館、王立海洋博物館、スイスのアベッグ財団、フランスのパリ装飾美術感、シュバリエ修復所などにおいて調査を実施しさらに関係者と情報交換を実施した。 (2)屋外展示物： ・ドイツ及びポーランドの産業遺産を往訪し、産業遺産の保存理念や、周囲との関係を考慮した保存手法や修復手法の現地調査を実施した。 ・屋外展示されている鉄道車両や航空機などの金属を主体とする文化財の防錆対策のために試験片を作成し日本6ヵ所に置いて暴露実験を実施し、塗装の劣化と屋外環境との相関について調査を実施した。 (3)建造物・構造物：新潟県佐渡市の佐渡金銀山遺跡、静岡県伊豆の国市韮山反射炉、山口県萩市の反射炉や長崎県長崎市端島など、史跡指定地内の建造物や構造物の保存と修復に関する研究会を実施するとともに現地調査も実施した。 (4)報告書：『御料車の保存と修復及び活用』を製作し配布した。 (5)その他：航空機関連の設計図面あるいは明治後期から大正期、昭和初期にかけて記録された関連資料などの保存の一環としてデジタル化を行うなど貴重な資料を後世に遺すべく現地で状態を調査し保存手法の研究を実施した。			
【実績値】 報告数 2件 (①、②)、発表件数 2件 (③、④)、報告書刊行数 1件 (⑤)			
【備考】 報告 ①中山俊介：Regarding Oil Paint Used in Modern Japanese Architecture、Oil Paint Used in Modern Japanese Architecture、pp.5-15、2014.3 ②中山俊介：御料車の保存と修復及び活用、『御料車の保存と修復及び活用』、pp.5-14、2014.3 発表 ③中山俊介：近代テキスタイルの保存と修復、近代的スタイルの保存と修復に関しての研究会、2013.11.22 ④中山俊介：近代木製家具の修復技法及び材料に関する調査研究、文化財保存修復学会第35回大会、2013.7.20 報告書 ⑤『御料車の保存と修復及び活用』、東京文化財研究所 2014.3			

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：「明治日本の産業革命遺産-九州・山口と関連地域」が世界遺産登録候補リストに記載された今年度、史跡指定地内の産業遺産の保存・修復理念の作成は急務であり、時代に即した研究テーマとして取り上げた。 独創性：これまでに保存修復のために研究された事が無い素材で製作されている服飾品などの保存と修復をテーマにした研究会を実施した。 発展性：服飾品などの調査研究に関連してヨーロッパを往訪し、関係者への調査、取材を元に、日本ではあまり取り上げられていない服飾製品などの修復手法を学ぶ事が出来た。また、今後の研究につながる人脈形成ができた。 効率性：テーマを決めた調査を実施する事で、国内外の多くの関係者と人脈ができ、また、専門性の高い調査研究協力依頼にも対応してもらえる様になった。 継続性：屋外保存された金属製文化財の暴露実験は長期にわたる金属製文化財保存の維持に貢献する。また、航空関連資料のデジタル化を行う事により、長く情報を保存する事が可能となる。 正確性：今年度は、服飾品等や屋外展示物というテーマをそれぞれ諸外国の保存状況に関して現地調査を実施した。これによって、正確に問題を認識し、解決策へつなげる事が可能となった。						

2. 定量的評価

観点	報告数	発表件数	報告書刊行数			
判定	A	A	A			
判定理由 報告数、発表件数、報告書刊行数：いずれも十分な成果を得た。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	近代文化遺産の保存・修復と活用について、各種の現地調査を実施することができた。その現地調査を通じて、現状の把握、解決すべき問題点なども新たに把握することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	今中期計画では新しい材料の保存手法や修復手法の調査研究あるいは屋外展示物などの保存理念や修復理念と言ったものをどのように考えていけばよいのかを調査研究している。新たな材料関係では、今年度注目した服飾品などや、以前に取り上げた音声映像の記録メディアに使われている合成樹脂などの保存手法や修復手法等の調査研究、また屋外保存されている金属製文化遺産の保存状態調査、史跡指定地内に建つ建造物・構造物の保存や修復理念の構築など調査研究を進めており重要な成果が期待できると考えている。また、研究会を通じて新たな知見を得ると共に、多くの研究者との連携も可能となった。次年度も本年度の成果を元にさらに調査研究を発展させることが可能となった。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力（(4)－①）		
【事業概要】 本事業は、我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施するもので、本事業では文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関して技術的に協力している。			
【担当部課】	保存修復科学センター 文化遺産国際協力センター	【プロジェクト責任者】	保存修復科学センター長 岡田健
【スタッフ】 佐野千絵（保存修復科学センター保存科学研究室長）、木川りか（生物科学研究室長）、早川泰弘（分析科学研究室長）、朽津信明（修復材料研究室長）、北野信彦（伝統技術研究室長）、吉田直人（主任研究員）、犬塚将英（主任研究員）、佐藤嘉則（研究員）、早川典子（主任研究員）、森井順之（主任研究員）、酒井清文（客員研究員）、川野邊渉（文化遺産国際協力センター長）、加藤雅人（主任研究員）、山田祐子（アソシエイトフェロー）、楠京子（アソシエイトフェロー）、大河原典子（客員研究員、日本画家）、前川佳文（客員研究員、壁画保存修復士）			
【主な成果】 高松塚古墳壁画については、壁画表面のクリーニングを継続実施するとともに、微生物による彩色の汚損被害について、効果が期待される酵素群の利用に関する研究を継続して進めた。キトラ古墳壁画については、墓室壁面から取り外した壁画の再構成作業実施にあたり、裏打ち材料の選定、強度の評価等に関する研究を行った。25年9月の古墳施設整備作業（埋め戻し）までの間、石室・小前室などの温湿度の計測、古墳周辺の気象観測を実施した。両古墳壁画に用いられている材料に関して、各種機器による分析調査とマクロ撮影による状態調査を行った。			
【年度実績概要】 ○高松塚古墳壁画 生物・環境調査：国宝高松塚古墳壁画仮設修理施設の修理作業室等において、定期的に害虫トラップを設置し、浮遊菌調査を実施し、環境の清浄度を確認するモニタリングを継続実施している。修理作業室とそれ以外の修理施設内各所における温湿度の測定も継続して行っている。昨年度、作業室で再びチャタテムシが捕獲されたことから、チャタテムシに関する詳細な調査を実施するとともに、温湿度状況との関連を検討した。25年8月までは施設内の湿度が高かったが、25年8月の空調機のメンテナンスを経て、この湿度上昇の問題が解消されたことを確認した。 修復研究：壁画クリーニングの有効な材料として採用を検討している酵素について、壁画の構造である漆喰や顔料、修復材料への影響評価を行い、酵素を使用する場合の修復材料を選択して実際の修復処置に適用した。高松塚古墳及びキトラ古墳の壁画に使用されている石灰漆喰を、石材への密着性や強度、現実的な施工手順といった面から捉え、材料の特定や調合分量を考慮した上での再現を目指した研究を行った。 材料技法調査：奈良文化財研究所との共同により、壁画に対する可視近赤外分光光度計・蛍光X線分析装置による顔料の分析調査、及びマクロ撮影による状態調査を実施した。 ○キトラ古墳壁画 生物・環境調査：25年9月下旬に開始されたキトラ古墳施設の整備作業（埋め戻し）までの間、古墳石室内、小前室の点検を継続し、温湿度の計測、及び古墳周辺の気象観測を実施して、観測データのバックアップを取り、管理の体制を敷いた。 修復研究：漆喰の再構成を行うために、充填材や接着剤の適用方法を検討した。また、再構成にあたって構成後の表面高さ等の作成方法についても複数の材料と工法を検討し、文化庁及び修復技術者と協議した。 材料技法調査：奈良文化財研究所との共同により、壁画に対する可視近赤外分光光度計・蛍光X線分析装置による顔料の分析調査、及びマクロ撮影による状態調査を実施した。 ○その他 ・25年8月18日から25日に行われた文化庁による国宝高松塚古墳壁画仮設修理施設・キトラ古墳石室一般公開、及び26年1月18日から26日に行われた同修理施設一般公開に際して毎回5名の研究員が対応して協力した。 ・高松塚古墳壁画・キトラ古墳壁画の保存に関連して文化庁が実施している「古墳壁画の保存活用に関する検討会」に事務局として、またその下に設置されている「装飾古墳ワーキンググループ」に委員及び事務局として参加した。 ・福岡県うきは市珍敷塚古墳及び日岡古墳で装飾古墳の保存環境調査を継続実施した。珍敷塚古墳では保存庫内の温湿度計測を継続するとともに、うきは市が定期的に実施するモニタリングへ指導助言を行った。日岡古墳では、冬季に発生する保存施設の内壁の結露への対策を講じるため、保存施設の壁面温度の計測を行った。茨城県ひたちなか市虎塚古墳については、一般公開時の点検作業等へ協力した他、石材表面に発生した微生物バイオフィルムの解析とUV照射による除去方法の検討を行った。この他、各地の装飾古墳の保存に関して、助言等を行い、貢献した。			
【実績値】 助言件数 46件、研究報告2件（①②）			
【備考】 ① 木川りか他「キトラ古墳石室における微生物制御：石室から分離された微生物の紫外線（UV）耐性試験結果について」『文化財保存修復学会第35回大会発表要旨集』pp.184-185 ② 貴田啓子、早川典子他「壁画修復処置に用いる接着材料への酵素の影響」『同』pp.268-269			

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：キトラ古墳の石室封鎖に際し、奈良文化財研究所の考古学調査と連携し、環境調査を適切に実施した。 独創性：保存科学、修復技術、美術史学の総合的見地から、壁画材料に関する考察を進めることができた。 発展性：各地の装飾古墳の保存・活用に関して、積極的に助言・提言を行うことができた。 効率性：修理施設の環境管理等に迅速に対応することができた。 正確性：客観性のある研究成果をもとに適切な材料選択を行い、修復作業に反映させることができた。						

2. 定量的評価

観点	助言件数	研究報告				
判定	A	A				
判定理由 助言件数： 国宝高松塚古墳壁画仮設修理施設及びキトラ古墳石室の維持管理に関して、常に現地担当との連携を取り、的確な判断により作業の進行を助けている。修復作業に関しても随時現地へ赴き、詳しく状況を理解し、適切な助言を行っている。 研究報告：調査研究について2件の報告を上げることができ、十分な成果が認められる。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	材料調査班・修復班の連携が効率よく図られ、相互の成果を活用し、さらに修理室の環境についても文化庁・奈良文化財研究所との連携のもと適切な管理体制を取っている。キトラ古墳の石室封鎖という段階を迎え、奈良文化財研究所の考古学調査との連携のもと、現状の環境調査を実施した。壁画保存のための確かな体制が形成され、全体としてますます良好な作業を行っている。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	修理施設の環境問題に対する迅速な対応や、酵素を使用するのに適切な修復材料に関する研究の推進と実際の作業への応用など、安全性・正確性を確保しながら実施している。奈良文化財研究所との連携が一段と強化されつつある。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関する技術的協力((4)－①)
【事業概要】 本事業は、我が国の文化財保護政策上重要かつ緊急に保存及び修復の措置等を行うことが必要となった文化財について、国・地方公共団体の要請に応じて、保存措置等のために必要な実践的な調査・研究を迅速かつ適切に実施するもので、文化庁が行う高松塚・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関して技術的な協力を行った。	
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)
【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
【スタッフ】 廣瀬 覚、青木 敬、降幡順子、若杉智宏、荒田敏介、南部裕樹(以上、都城発掘調査部)、辻本与志一、脇谷草一郎、高妻洋成、田村朋美、赤田昌倫(以上、埋蔵文化財センター)、井上直夫、栗山雅夫(以上、企画調整部)、肥塚隆保(元副所長、客員研究員)、石崎武志、早川泰典、吉田直人、佐野千絵、三浦定俊(以上、東京文化財研究所)、青柳泰介、水野敏典(奈良県立橿原考古学研究所)、岡林孝作(奈良県教育委員会)、相原嘉之(明日香村教育委員会)	
【主な成果】 文化庁が進める国宝高松塚古墳壁画の保存・活用に関する事業が円滑かつ適正に遂行するよう協力した。キトラ古墳では、史跡整備にむけて、墓道部の最終的な考古学的調査や記録作業を実施した。また、古墳の保存、活用、整備の方向性を検討するにあたり、技術的な支援・協力を行った。	
【年度実績概要】 (1)高松塚古墳 ・石室解体に伴う発掘調査成果の活用にかかる事業として、石室周囲の版築層の剥ぎ取りパネルを展示公開資料として再加工した。剥ぎ取りパネルを展示空間に沿った形状、大きさに整えるとともに、パネル内に石室空間を擬似的に表現し、見学者にわかりやすい形に仕上げた。完成したパネルは飛鳥資料館の古墳コーナーに設置した。 ・同じく石室解体に伴う発掘調査成果の整理・活用にかかる事業として、古墳構築過程、石室解体作業の3次元アニメーション、及びそのモデル作成を行った。今年度は、昨年度短編が完成したことを受けて、長編作成作業に着手した。必要となるモデルを追加作成するとともに、古墳構築過程に関しては長編アニメーションを完成させることができた。 ・壁画の保存修復(劣化原因)について、蛍光X線分析による壁画の材料調査、デジタルアーカイブスキャニングによる記録画像、分光分析による顔料調査などを実施した。 ・25年8月・26年1月の高松塚古墳壁画修理施設の一般公開に際しては、解説員として研究員(延べ21人)を派遣した。 ・装飾古墳の保存・管理の現状を把握するため、奈良文化財研究所が所蔵する装飾古墳の調査・保存整備に関連する報告書類の文献調査を実施した。 (2)キトラ古墳 ・キトラ古墳では、墳丘整備にむけた墓道部の最終的な考古学的調査として、3次元レーザー測量、写真撮影、版築土層剥ぎ取り作業などを実施した。 ・保存施設の記録として、覆い屋内外の3次元レーザー測量を実施した。 ・覆い屋の解体作業に先立ち、墓道部分の埋め戻し作業を実施した。 ・2週間に1回、研究員による古墳石室内等のカビ点検作業を実施した。緊急時には現地において応急的な処置にあたり、文化庁に状況を報告した。 ・報告書未掲載資料の歯牙及び人骨片87箱のうち、24箱分について強化処置及び仮保管ケースを作成した。 ・壁画の保存修復に資する情報を得るために、蛍光X線分析を用いた壁画の材料調査、デジタルアーカイブスキャニングによる記録画像、THz波を用いた漆喰層調査、分光分析による顔料調査などを実施した。 ・高松塚古墳壁画修理施設の公開と同時に実施された25年8月の石室一般公開に際しては、解説員として研究員(延べ13人)を派遣した。	
【実績値】 研究発表3件(①～③)、報道発表1件(④)、論文数3件(⑤～⑦)	
【備考】 ①福永香・高妻洋成・W.Zia・T.Meldrum・B.Blumich「テラヘルツ波および核磁気共鳴法による壁画の構造調査」文化財保存修復学会第35回大会2013.7.21 ②降幡順子・早川泰弘・辻本与志一・赤田昌倫・脇谷草一郎・田村朋美・高妻洋成・肥塚隆保・吉田直人・杵津信明・早川典子・江村知子・佐野千絵・岡田健・三浦定俊・宇田川滋正・建石徹「高松塚古墳壁画の材料調査-蛍光X線分析法による下地漆喰に関する調査(5)-」日本文化財科学会第30回大会2013.7.6 ③赤田昌倫・吉田直人・高妻洋成・降幡順子・脇谷草一郎・田村朋美・辻本与志一・岡田健・杵津信明・江村知子・早川典子・宇田川滋正・建石徹「キトラ古墳壁画の材料調査2-玄武像の可視分光分析調査-」日本文化財科学会第30回大会2013.7.6 ④奈良文化財研究所ほか「特別史跡キトラ古墳の調査(飛鳥藤原第178-6次)記者発表資料」2013.12.5 ⑤若杉智宏「キトラ古墳の調査」『奈文研ニュース』No.49、2013.6 ⑥玉田芳英「キトラ古墳との30年」『奈文研ニュース』No.51、2013.12 ⑦赤田昌倫「高松塚古墳壁画の色彩に関する材料調査報告～東壁西壁の女子群像における赤色と黄色の可視分光分析から～」『奈良文化財研究所紀要2014』2014.6	

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：キトラ古墳の史跡整備にむけ、墓道部の考古学的調査と埋め戻し作業を適切に行った。 独創性：保存科学、考古学の双方の立場から、壁画古墳の保存・整備・活用に助言を行った。 発展性：壁画・装飾古墳や緊急性を有する文化財の保存・活用に対する新たな方向性を示すことができた。 効率性：キトラ古墳石室の点検及び考古学的調査・埋め戻し作業を迅速に実施することができた。 継続性：整理・分析作業を引き続き遂行し、今後の保存・活用にむけた成果を得た。 正確性：発掘調査の成果を再現動画の作成や古墳整備に反映させることができた						

2. 定量的評価

観点	研究発表	報道発表	論文数			
判定	A	A	A			
判定理由 研究発表：高松塚・キトラ古墳の壁材材料調査の成果を目標に沿うかたちで3件発表できた。 報道発表：社会的に関心の高い調査成果について適時に公表することができた。 論文数：高松塚・キトラ古墳の保存・活用に資する学術的成果を論文にまとめ、目標の3本を発表することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	高松塚古墳の発掘調査成果の整理・検討、壁画の分析調査が進み、また、キトラ古墳墓道部の最終的な調査及び埋め戻し作業が完了したことにより、今後の保存・活用・整備等の事業が円滑に進むものと期待できる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	高松塚・キトラ両古墳の保存・活用に関する業務を遂行し、重要かつ緊急性を有する文化財の今後の保存・活用に対して大きく貢献することができた。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	国土交通省が行う国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地の調査及び保存・活用に関する技術的協力((4)－②)		
【事業概要】 本事業は、国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区公園予定地内に所在する檜隈寺の全体像を明らかにすべく、遺跡周辺の調査を行うものである。檜隈寺は、我が国の国家成立期の舞台である飛鳥における古代寺院として重要な遺跡であり、中心部は史跡に指定されている。この遺跡の実体解明及び保存整備に資するため、2008 年度より発掘調査を実施している。			
【担当部課】	都城発掘調査部(藤原)	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
【スタッフ】 黒坂貴裕(都城発掘調査部主任研究員、森先一貴(考古第三研究室研究員)、南部裕樹(考古第三研究室アソシエイトフェロー)、井上直夫(写真室再雇用職員)、栗山雅夫(写真室技術職員)			
【主な成果】 本年度は檜隈寺の塔の南北軸線上にあたる位置 (A 区) と回廊東南隅 (B 区) の調査区を設定した。 A 区では古代の建物や溝、B 区でも中世と思われる建物を検出した。			
【年度実績概要】 本調査は、国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区の整備事業に関わる事前調査である。調査地は、明日香村南西部の丘陵上に位置し、この丘陵上には、渡来系氏族である東漢氏の氏寺と考えられる檜隈寺が存在する。 調査地 : 檜隈寺の塔の南北軸線上にあたる位置 (A 区) と回廊東南隅 (B 区) 調査期間: 平成 26 年 1 月 9 日～3 月 17 日 調査面積: 280 m ² 調査成果: A 区 古代と推定される掘立柱建物 2 棟、中世の掘立柱建物 1 棟、掘立柱堀 1 基、溝 2 条、土坑 2 基 古代と推定される建物は中心伽藍の建物の方位の振れと一致する。 B 区 掘立柱建物 3 棟、土坑 4 基、溝 2 条 いずれも中世の遺構と考えられる。 出土遺物: 瓦、土器、金属製品などがある。			
			
A 区の遺構検出状況			
【実績値】 (参考値) 論文数: 1 件 出土遺物 軒瓦 42 点、丸平瓦 109 箱、土器 5 箱、鉄製品(鉄釘・鉄鎌・刀子など)6 点、 記録作成数 遺構実測図 26 枚、写真 (4×5) 64 枚、デジタル写真 90 枚、デジタルメモ写真 367 枚			
【備考】 ・森先一貴「檜隈寺周辺の調査(飛鳥藤原第 180 次調査)」『奈良文化財研究所紀要 2015』2015. 6(予定)			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 4421

自己点検評価調査

研No.44

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	継続性			
判定	A	A	A			
判定理由 適時性：国営公園整備事業の事前調査として迅速に対応した。 発展性：檜隈寺周辺の遺構状況の解明について、古代から中世までの重要な資料を得た。 継続性：20年度から檜隈寺周辺の全体像復元にかかわる継続的な調査を計画通り実施した。						

2. 定量的評価

観点						
判定						
判定理由						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本調査では、檜隈寺の伽藍が完成した7世紀後半の資料のみならず、これまで不明であった中世の檜隈寺の動向が確認できる資料、及び今後の整備計画・調査計画において土地利用状況に関わる重要な資料を得た。檜隈寺の成立や寺域などの解明、歴史的変遷に関わる重要な成果が得られた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査は、年度当初の計画通りに実施されており、国営公園整備事業に関わる事業に伴い、檜隈寺の全体像復元、歴史の解明に向けて、有益な資料を得ることができた。

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	農林水産省が行う大和紀伊平野土地改良事業大和平野県営飛鳥工区2号幹線の調査及び保存活用に関する技術的協力((4)－③)		
【事業概要】 飛鳥・藤原地域は、我が国古代国家成立期の舞台であり、6世紀末から8世紀初めにいたる間、政治・経済・文化の中心であった。本研究は、地方公共団体と連携し、発掘調査を通じて古代国家の具体像を復元すべく学際的な調査研究を行うものである。その成果を広く公開するとともに、遺跡の保存・活用についても取り組んでいる。			
【担当部課】	都城発掘調査部（藤原）	【プロジェクト責任者】	都城発掘調査部副部長 玉田芳英
【スタッフ】 清野孝之(考古第三研究室長)、大林潤(遺構研究室研究員)、若杉智宏(考古第二研究室研究員)、前川歩(遺構研究室研究員)、山野ケン陽次郎、(熊本大学助教、前考古第一研究室アソシエイトフェロー)、井上直夫(写真室再雇用職員)、栗山雅夫(写真室技術職員)			
【主な成果】 大和平野支線水路等改修工事に伴う発掘調査で、対象地は藤原京右京七条一坊および藤原宮外周帯(橿原市上飛驒町)にあたる。調査区は、幅約1.5m（一部2.4m）、南北約110mで、調査面積は182㎡である。その結果、古代の素掘溝を検出し、記録した。			
【年度実績概要】 調査地は藤原京右京七条一坊及び藤原宮外周帯にあたる。調査区は、幅約1.5m（一部2.4m）、南北約110mで、調査面積は182㎡である。発掘調査期間は25年8月5日～9月13日である。 今回の調査で検出した主な遺構は、東西溝4条、南北溝1条である。 調査区中央付近では東西溝を2条確認した。2条のうち、南側の溝は、飛鳥藤原第63次調査で確認した東西溝SD6510から西に3mの位置にあたり、SD6510の延長部の可能性がある。北側の溝は、その位置関係から、六条大路の南側溝である可能性が高い。 調査区北側では東西溝を2条確認した。位置関係や溝の大きさから、2条のうちどちらかが、六条大路の北側溝であると考えられる。 調査区北側では南北溝を1条確認した。北でやや東にふる直線的にのびる溝で、南北30mにわたり検出した。検出位置は、西一坊大路東側溝の想定位置とほぼ一致しており、この南北溝は、西一坊大路東側溝の可能性が高い。 本事業は、水路付け替え工事に伴う発掘調査で、狭隘な調査範囲ではあったが、上記のように埋蔵文化財に関する情報を最大限に引き出し、必要となる記録類の作成を迅速に進めることができた。 なお、調査終了後も調査地外の水路改修工事区域の立会を実施し、遺構状況の確認を行った。			
			
調査区北側完掘状況（北から）		調査区中央付近完掘状況（南から）	
【実績値】 論文等数：2件（①・②） （参考値） 出土遺物：土器・土製品3箱、軒瓦3点、瓦2箱、銅銭1点 記録作成数：遺構実測図19枚、写真（4×5）8枚、デジタル写真90枚			
【備考】 論文等 ①若杉智宏「藤原京右京七条一坊の調査（飛鳥藤原第178-2次）」『奈文研ニュース』No.51、2013.12 ②奈良文化財研究所都城発掘調査部「藤原京右京七条一坊の調査（飛鳥藤原第178-2次）」『奈良文化財研究所紀要2014』2014.6（予定）			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良文化財研究所

処理番号 4431

自己点検評価調査

研No.45

1. 定性的評価

観点	適時性	継続性				
判定	A	A				
判定理由 適時性：開発行為に対して迅速に対応し、地方公共団体の文化財行政に協力した。 継続性：飛鳥・藤原地域に関する遺跡情報の収集のために、調査を継続して行った。						

2. 定量的評価

観点	論文等数					
判定	A					
判定理由 論文等数：目標どおり、研究所紀要において成果を発表することができる予定である。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	緊急の案件に対して、迅速かつ適切に対応し、地方公共団体の行う埋蔵文化財行政に対して協力することができた。この調査によって藤原京に関する遺跡のデータを収集し、蓄積することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	緊急性を要する事前調査に効率よく対応し、藤原宮並びに飛鳥・藤原地域についての基礎資料を継続的に蓄積している。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-1

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究((5)-①)		
【事業概要】 収蔵品・寄託品・それらの関連品及び今後収集・展示の対象となりうる文化財を調査研究し、併せて保存・展示・公開に関する調査研究を進める。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 田良島 哲
【スタッフ】 荒木臣紀（保存修復課環境保存室主任研究員）、井出浩正（調査研究課考古室研究員）、池田宏（上席研究員）、伊藤嘉章（学芸研究部長）、伊藤信二（学芸企画部教育普及室長）、井上洋一（学芸企画部企画課長）、恵美千鶴子（調査研究課書跡・歴史室アソシエイトフェロー）、遠藤楽子（学芸企画部出版企画室研究員）、小野真由美（列品管理課貸与特別観覧室主任研究員）、小山弓弦葉（調査研究課工芸室主任研究員）、勝木言一郎（学芸企画部出版企画室長）、川村佳男（列品管理課平常展調整室研究員）、神庭信幸（保存修復課長）、鬼頭智美（学芸企画部国際交流室長）、木下史青（学芸企画部デザイン室長）、救仁郷秀明（列品管理課登録室長）、小泉恵英（学芸企画部博物館教育課長）、後藤健（東京国立博物館特任研究員）、小林牧（学芸企画部広報室長）、佐々木佳美（列品管理課登録室アソシエイトフェロー）、澤田むつ代（特任研究員）、品川欣也（調査研究課考古室研究員）、島谷弘幸（副館長）、白井克也（列品管理課平常展調整室長）、鈴木希帆（列品管理課登録室アソシエイトフェロー）、鈴木みどり（学芸企画部博物館教育課ボランティア室長）、鈴木晴彦（保存修復課保存修復室アソシエイトフェロー）、高橋裕次（学芸企画部博物館情報課長）、竹内奈美子（調査研究課工芸室長）、田沢裕賀（調査研究課絵画・彫刻室長）、塚本磨充（調査研究課東洋室研究員）、土屋貴裕（列品管理課平常展調整室研究員）、土屋裕子（保存修復課保存修復室長）、富田淳（列品管理課長）、橋本英将（調査研究課考古室研究員）、平河智恵（保存修復課保存修復室アソシエイトフェロー）、古谷毅（列品管理課主任研究員）、松嶋雅人（学芸企画部企画課特別展室長）、松本伸之（学芸企画部長）、三田覚之（調査研究課工芸室研究員）、村田良二（学芸企画部博物館情報課情報管理室長）、山下善也（調査研究課絵画・彫刻室主任研究員）横山梓（学芸企画部企画課特別展室研究員）、米倉乙世（保存修復課保存修復室アソシエイトフェロー）、和田浩（保存修復課環境保存室主任研究員）			
【主な成果】 収蔵品・寄託品・それらの関連品及び今後・収集・展示の対象となりうる文化財と、それらに関連する資料等について、美術史学・歴史学・考古学・博物館学等の多様な見地から調査研究を行い、その成果を学会・研究会・学術雑誌・書籍等に発表・公開した。			
【年度実績概要】 ・内外の学会・研究会等で研究成果を発表した。 ・学術雑誌等に各種の論考を掲載するとともに、著作を刊行した。			
【実績値】 ・学会・研究会等発表件数：76 件 ・論文等掲載数：134 件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-1

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：学界動向に留意するとともに、社会的な関心や展覧会と関連付けて研究を行っている。 独創性：当館のコレクションは国内外に類例のないもので、常に新規の知見を見出している。 発展性：蓄積されてきたコレクションに対する知見をもとに、新たな視点を持った研究を行っている。 効率性：所蔵品の管理や展示・外部への貸出等、他業務に多く時間を割かれながらも、成果を蓄積している。 継続性：各研究員の長期にわたる学術的関心をもとに研究を行っている。 正確性：実証に基づいた確実な研究を行っている。						

2. 定量的評価

観点	学会・研究会等 発表件数	論文等掲載数				
判定	A	A				
判定理由 学会・研究会等発表件数、論文等掲載数： いずれも研究機関の規模（研究員の人数）と業務の繁多を考慮した上で、適切な成果をあげている。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	科学研究費等の獲得も増加し、それらの調査研究を基礎とした研究成果を順次公開できている。また、各ジャンルにわたり、学術情報の公開を行っている。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	研究計画に基づき、順調に進捗している。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-2

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 特別調査法隆寺献納宝物(第35次)「金工品」((5)-①)		
【事業概要】 東京国立博物館では、法隆寺献納宝物について、昭和54年より、35次にわたって献納宝物の調査を館内及び館外の専門研究者とともに共同で行ってきた。本事業は全ての研究者に対して、画像や概要など研究のための情報を提供することを目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課絵画・彫刻室長 田沢裕賀
【スタッフ】 松本伸之(学芸企画部長)、伊藤信二(学芸企画部博物館教育課教育普及室長)、酒井元樹(保存修復課保存修復室研究員)、三田覚之(調査研究課工芸室研究員)、内藤榮(奈良国立博物館学芸部工芸考古室長)、永井洋之(奈良国立博物館学芸部工芸考古室アソシエイトフェロー)、末兼俊彦(京都国立博物館学芸部工芸室研究員)、望月規夫(九州国立博物館学芸部文化財課アソシエイトフェロー)、西川明彦(宮内庁正倉院事務所)			
【主な成果】 国宝 水滴1合・墨台1基・匙3本(法隆寺献納宝物)についての実見調査を実施した。			
【年度実績概要】 26年3月17日東京国立博物館内にて、各研究員が作品を実見調査したのち、それぞれの材質、制作技法、様式、制作年代、伝来などについて、検討会を行った。その結果、従来考えられてきた様式や制作年代について、再検討を加える必要があるとの結論に達した。			
			
国宝 水滴・墨台・匙(法隆寺献納宝物) 調査風景			
【実績値】 調査回数 1回			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：本調査は、これまで継続的になされてきた法隆寺献納宝物調査の未報告作品に対するものであり、近年重要文化財指定を受けた作品を対象としているため。 独創性・発展性：国宝であるにもかかわらず、これまで本格的な調査がなされておらず、詳細な論考などもなかった作品に焦点をあて調査を実施したため。 効率性：調査者はいずれも日本及び東洋の金工を研究対象とする専門家であり、問題点の所在、調査すべきポイントの見極め、作品の取り扱いなどに習熟しており、効率的に調査を行うことができた。 継続性：昭和54年から35年間調査を継続して行っている。また、次年度以降に本調査の成果を含め調査概要『金工品』として刊行する予定である。 正確性：調査者はいずれも日本及び東洋の金工を研究対象とする専門家であり、極めて専門性の高い見地から調査を行うことができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数					
判定	A					
判定理由 調査回数：予定通りの調査を行うことができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	金工の美術史、技術史を研究分野とする研究者による、極めて専門性の高い見地から行われた調査であり、従来知られていなかった知見を数多く得ることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	昭和54年から35年間調査を継続して行っている調査であり、これまで調査対象として取り上げられてこなかった国宝作品を対象とし精査することができた。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-3

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 特別調査「書跡」(第11回)((5)-①)		
【事業概要】 館書跡収蔵品の中で、平安時代から江戸時代にわたる歌書、物語、願文など和様の書跡類を調査する。この分野ではすでに平安時代の作品を中心とした図版目録『日本書跡篇 和様I』を刊行しているが、その後の新規収集品及び鎌倉時代以降の作品を対象とする。特に古筆切となっている断簡類の原典特定作業、使用された料紙の種類、書写年代の比定を行うとともに、法量計測、高精細画像撮影など基礎データを収集し今後の研究に便宜を図る。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 田良島 哲
【スタッフ】 島谷弘幸（東京国立博物館副館長）、高橋裕次（博物館情報課長）、恵美千鶴子（調査研究課書跡・歴史室アソシエイトフェロー）、羽田聡（京都国立博物館学芸部研究員）、丸山猶計（九州国立博物館文化財課主任研究員）、酒井芳司（九州国立博物館企画課展示室研究員）、渡部史之（九州国立博物館博物館科学課アソシエイトフェロー）、西山厚（奈良国立博物館学芸部長）、吉川聡（奈良文化財研究所文化遺産部歴史研究室長）、高梨真行（文化庁美術学芸課文化財調査官）			
【主な成果】 当館で所蔵・収集した書跡分野に属する古筆切と文化庁所蔵の書跡・典籍 計56点について、作品の名称、古筆切としての通称、制作年代、形状、界線について確認した。断簡は原典推定をし、可能な限り『国歌大観』の収載番号との照合を行った。合わせて原装丁の推測、使用された料紙の紙質分析の検討も合わせて行った。今回の調査対象について記載文字を可能な限り解読し書誌情報を収集した。また対象全件について法量を計測した。なお、本年度はスケジュールの都合により調査会場が狭隘であったため、高精細画像の撮影は実施しなかった。			
【年度実績概要】 当館の収蔵にかかる書跡分野の作品及び文化庁所蔵の作品の内、主として南北朝時代以降の掛軸装の古筆切、卷子装・帖装の作品、について次の項目について調査を実施した。1, 名称・通称の検討、2, 筆者の真贋・伝称筆者などの検討、3, 制作年代、4, 元装丁の推測、5, 形状性質の確認、6, 本紙の法量計測、7, 出典の推定、8, 使用料紙の分析、9, 界線の分析、10, 記載文字の判読、11, 書誌情報の確認 調査対象:B-10 詩懷紙など 56点 調査日 :26年1月30日(木)～31日(金)。			
			
調査の状況			
【実績値】 調査件数: 56点 調査日数: 2日間 調査作成: 56枚 (参考値) 調査人数:参加者 16人日(のべ)			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-3

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：館蔵品の収集がある程度まとまった適切な段階で実施しているため。 独創性：館蔵品を対象とした詳細な調査で、他では実施できないため。 発展性：調査成果は今後の目録の刊行等につながるため。 効率性：必要最小限の経費で実施しているため。 継続性：館蔵品の調査を毎年蓄積しているため。 正確性：各参加者の専門性を活かして、正確な調査内容となっているため。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	調査日数	調書作成			
判定	A	B	A			
判定理由 調査件数：所期の件数を調査した。 調査日数：所期の日数の調査を行った。 調書作成：今後の研究に十分な調書の作成を行った。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	今後の研究に必要な件数と内容の文化財の調査を実施している。おおよその対象は調査ができたので、平成26年度以降、成果を目録として公開するために、情報の点検等を進める。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査は、所蔵文化財の持つ情報を詳細に把握し、公開するためのものである。近年の調査の実施によって、和様の書跡のうち新規収蔵品及び南北朝・室町時代の作品に関する詳細情報が順調に蓄積されつつある。今後は成果の再確認を行うとともに、目録等の公開に向けた準備を行う。

業務実績書

中期計画の項目	4	文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	4)	特別調査「工芸」第5回(5)－①
【事業概要】 東京国立博物館における文化財のうち、金工・刀剣・陶磁・漆工・染織等工芸分野の特別調査。独立行政法人国立文化財機構の国立博物館4館及び文化庁の工芸担当者が集まり、同じ専門分野の研究者が同時に作品調査を行う。複数の専門家の目で同時に同じ作品を調査することにより、精度の高い成果が得られる。また各機関の研究者が集まることで、最新の研究結果を反映させた知見を共有できる。今後の研究の進展や、展示内容の向上に結びつけることを目的とする。なお、担当研究員の育児休暇や特別展関係業務を鑑み、今年度は金工・漆工の調査会を行うこととする。		
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】 調査研究課工芸室長 竹内奈美子
【スタッフ】 松本伸之（学芸企画部長）、伊藤信二（学芸企画部博物館教育課教育普及室長）、酒井元樹（保存修復課保存修復室研究員）、永島明子（京都国立博物館学芸部列品管理室主任研究員）、内藤榮（奈良国立博物館学芸部工芸考古室長）、永井洋之（奈良国立博物館学芸部工芸考古室アソシエイトフェロー）、末兼俊彦（京都国立博物館学芸部企画室研究員）、川畑憲子（九州国立博物館学芸部企画課文化交流展室研究員）、望月規史（九州国立博物館学芸部文化財課研究員）		
【主な成果】 東京国立博物館の金工・漆工の列品について、最新の研究結果を反映させた知見を共有することができた。金工調査では、対象列品の用途を探る手掛かりや制作年代について議論を深め、制作当初の用途や組み合わせに関する新たな可能性も指摘され、今後の検討方針が明確になった。漆工調査では、香道具の中でも不定形な様相を示す香簞笥をとりあげ、香道具の融通無碍なあり方について認識を深めた。また同時に、香道具に用いられた加飾技法や材料の多様性が浮かび上がる結果となった。		
【年度実績概要】 ・金工調査 実施期間 26年3月17日(月) 法隆寺献納宝物など金工列品7件について、宮内庁正倉院事務所より保存課保存科学室長・西川明彦氏を迎えて調査を実施した。調査対象の一部である水滴(N-81)、墨台(N-80)、匙(N-82)は、いずれも古来より著名でありながらも、当初の用途や制作年代などに関して検討の余地を残しており、今回の調査会では、これらの点に関して実作品の詳細な調査に基づく意見交換が行われた。そのうち、水滴内面に塗られた漆が用途を探る手掛かりとなる可能性があること、墨台は正倉院宝物と同じ奈良時代の作例とみられること、3本の匙のうち1本は花形皿(N-118)と元来は一具であった可能性が指摘され、今後の検討方針が明確になった。 ・漆工調査 実施期間 26年2月27日(木)・28日(金) 漆工列品のうち継続的に香道具をテーマとし、今年度は昨年度に続き、引出しの中に細々とした道具類や多種多様な香木片を収める、簞笥形式の作品5件をとりあげて調査を実施した。中でも今回は秋草蒔絵香簞笥(H-455)や水藻蒔絵香簞笥(H-521)などのように、小さな引き出しをもうける形式の作例が含まれており、小型の引き出しを複数収めることが香簞笥の一つの特徴ととらえられるという結論をみた。ただし簞笥全体の形状に特段の法則性はみられず、それゆえに香木を収める香簞笥には汎用の提簞笥を用いた場合が多いことを再確認し、香道具の形式にとらわれない融通無碍な性質について、認識を深めた。また破紗綾形蒔絵香簞笥(H-75)は文様を表わすのに型紙を用いたと推測され、水藻蒔絵香簞笥(H-521)は鮫皮とよばれるエイの皮を用いるなど、加飾技法や材料の多様性も、香道具の特色の一つとして浮かび上がった。さらに内に収められた香包には、しばしば香木の由緒伝来が記載されており、内容品の情報が香道具研究に役立つ可能性が指摘された。		
		
金工調査風景		漆工調査風景
【実績値】 調査回数 2回 調査日数 3日 調査員 10名 調査対象作品 12件		
【備考】		

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：工芸分野では美術や考古、歴史などの分野より研究者が不足しており、研究推進の緊急性が高く、本事業は時宜に適っているため。 独創性、効率性、正確性：工芸各分野の研究者がそれぞれ複数揃う国立文化財機構ならではの事業であり、本年度も各機関の同じ専門分野の研究者が集まることで、最新の研究結果を反映させた知見を共有し、議論を深めることができた。 継続性、発展性：本年度の調査事業は、5回目の実施となり継続して行うことができた。これにより、今後の研究推進や展示公開に向け寄与するところは大きいと考えるため。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査日数	調査員	調査対象作品		
判定	A	A	A	A		
判定理由 調査回数：計画通り、金工・漆工それぞれの調査会を実施した。 調査日数：計画通り、それぞれ1～2日にわたる調査を実施した。 調査員：金工・漆工分野は、各機関専門家がそれぞれ全員揃って調査を行った。 調査対象作品：各分野の調査において極めて効率良く、相当数の作品を調査できた。金工調査は希少な奈良時代の伝世品を対象としたため、例年より作品件数を限定し、討議に多く時間を割いた。漆工調査の対象作品は1件に多数の内容品を含むため比較的に作品件数は少ないが、実際には多岐にわたる多数の作品の調査を行っている。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	各機関の同じ専門分野の研究者が集まることで、最新の研究結果を反映させた知見を共有し、議論を深めることができた。今後の研究推進及び展示公開に寄与するところが大きい。また分野ごとに分かれて作品調査を実施するため効率性も高く、相当数の作品を調査している。今後は刀剣・染織分野についても調査を行っていくことが望ましく、26年度以降も継続する必要がある。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り作品調査を実施することにより、研究を推進し、その成果が展示公開の向上に寄与している。本事業のような調査会を次年度以降も継続的に行っていくことにより、工芸分野の文化財に関する研究の推進を図る。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	5) 特別調査「彫刻」第3回 ((5) -①)		
【事業概要】 社寺所蔵の仏像、神像、肖像彫刻を調査し、調査研究報告、論文等の研究活動に結び付け、あるいは寄託の増加、特別展等の企画につなげて展示の質の向上を図る。 当館所蔵の東洋彫刻、それに関連した作品を調査し、図版目録東洋彫刻篇の出版、論文等の執筆、展示に反映させる。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課東洋室長 浅見龍介
【スタッフ】 丸山士郎（学芸企画部博物館教育課教育講座室長）、小泉恵英（学芸企画部博物館教育課長）、稲本泰生（客員研究員・京都大学准教授）、原田あゆみ（九州国立博物館主任研究員）			
【主な成果】 建仁寺西来院の調査において蘭溪道隆坐像の制作年代、作者が判明、像内に鎌倉時代と推定できる肖像彫刻の頭部前面を発見した。 六道珍皇寺の小野篁・冥官・獄卒立像の調査において制作年代と作者が判明した。 当館東洋彫刻の調査において時代不詳とされていた作品を北斉時代・6世紀の作と判定した。			
【年度実績概要】 ・建仁寺開山堂、同寺塔頭のうち西来院、興雲庵、正伝永源院、清住院、六道珍皇寺の調査を行い、西来院、六道珍皇寺で上記の発見があったほか、興雲庵の伝観音菩薩坐像、清住院の十一面観音菩薩坐像が南北朝時代の康俊周辺の仏師の作であることがわかった。頂相彫刻は各寺に複数あったが、清住院の蘭洲良芳坐像、正伝永源院の無涯仁浩坐像、靈源院の中巖円月坐像が南北朝時代の作、その他の像は頭部が後補あるいは、全面的に補修しているものであった。 ・ベトナム国立歴史博物館所蔵の日本彫刻の調査をハノイで行った。阿弥陀如来立像2軀のうち1軀は昭和19年に東京国立博物館とフランス極東学院が美術品の交換を行った際に日本から送られたものである。調査の結果、鎌倉時代・13世紀半ばころの優品と見られた。他の1軀はベトナム側では江戸時代の作とされていたが、これも鎌倉時代・13世紀の作だった。このほか能狂言面5面も東京国立博物館から送ったものであり、調査・撮影を実施した。 ・当館所蔵の東洋彫刻の調査では従来時代不詳としていた作品の中に6世紀から8世紀の作品を多数見出すことができた。これらは汚れた作品、自立しない作品もあり、活用するためにはクリーニング、展示具の作成が必要である。展示に活用できる作品が見出せたことは価値が高い。			
 建仁寺西来院蘭溪道隆坐像像内納入の肖像彫刻頭部			
【実績値】 調査回数12回、調査日数20日、調査員5名、調査対象作品125件			
【備考】 特別展『栄西と建仁寺』図録に建仁寺調査の成果を掲載。			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：東洋彫刻の所蔵品に関する情報公開、資産の有効活用、国際性などから時宜にかなっているため。 独創性：金属製品、石造品などの材質分析も行っており、新たな視点を提供できるため。 発展性：研究の基礎資料としての情報量を多く取得し、多くの研究者に多数の視点を提供できるため。 効率性：作品の大小によって1日の調査件数は異なるが、効率的に実施できているため。 継続性：調査方法を確立しており、同様の方法で対象を広げて実施できるため。 正確性：細部の写真撮影を行い検証可能にしている。材質分析は誤差を想定し、開示する情報の正確性を確保しているため。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査日数	調査員	調査対象作品		
判定	A	A	A	A		
判定理由 調査回数：2ヵ月に一度の定期的な調査のほか、出張の調査も実施しており実績が上がっている。 調査日数：他の仕事との兼ね合いから、十分に満足できる数字である。 調査員：中国・朝鮮の作品調査に実績のある調査員を複数得ている。 調査対象作品：調査は効率よく進めており、対象とした作品数も満足できる数字である。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	東京国立博物館東洋館の展示の充実につながった。次年度は調査した作品を収録した図版目録を刊行する予定である。これに合わせて特集陳列を行うことも検討したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	次年度の図版目録刊行のめどが立ち、展示に活用できる作品を新たに多数見出すことができた。また、作品の保存状態を把握し、今後の修理計画の立案も可能になった。当館の展示計画のみでなく、独立行政法人国立文化財機構の中でどのように活用していくかを京都・奈良・九州の国立博物館彫刻担当研究員と協議・検討したい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	6) 特別調査 屏風の箔地についての光学的調査研究 ((5)－①)		
【事業概要】 近年絵画作品の金・銀の使用に関して、当館収蔵の作品を調査対象として光学的調査を行ない、時代の特徴等美術史的観点から考察を行う。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課絵画・彫刻室長 田沢裕賀
【スタッフ】 神庭信幸(保存修復課長)、荒木臣紀(保存修復課主任研究員)、松嶋雅人(学芸企画部企画課特別展室長)、山下善也(調査研究課絵画・彫刻室主任研究員) 本田光子(調査研究課絵画・彫刻室任期付研究員)			
【主な成果】 国宝「花下遊楽図屏風」の幔幕や衣装について蛍光X線分析による絵具調査を行い、これまで行ってきた箔地調査の結果を踏まえて検討した。蛍光X線分析により、現在茶色に見える部分や黒い部分に銀が使われていることを確認し、それにより江戸時代初期の狩野派作品が金から銀への嗜好へと変わる可能性を検討した。			
【年度実績概要】 ○蛍光X線分析による国宝「花下遊楽図屏風」調査 ・茶色や黒に見える彩色を目視により子細に観察し、銀ではない部分と銀により彩色が行われたが酸化・硫化により変色した部分があるのではないかと推定した。 ・蛍光X線分析装置を用いてそれぞれの箇所の成分調査を行った。 ・分析により銀や硫黄が成分に含まれている部分のあることを確認した。 ・現状は銀ではなく暗い色調に変色した絵具に見える部分を当初の色彩に再現して検討し、この作品のイメージを再度検討した。			
			
蛍光X線分析装置によるデータ計測		「花下遊楽図屏風」調査風景	
【実績値】 作品調査等回数 4 回 (事前調査検討会 1 回、蛍光X線分析調査 2 回、分析結果検討会 1 回) 収集データ数 11 箇所 69 データ			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-6

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	S	A	S	S	A	
判定理由 適時性：近年の美術史研究では、日本絵画における金や銀の使用方法に対する関心は高く、データ蓄積の必要性も極めて高いため。 独創性：光学機器による金・銀箔の研究は、実物を対象として行う必要があり当館の収蔵品から重要な表現を持っているものを選んで調査を行うことに意味があるため。 発展性：今回の方法では、目視により予想されたが確定的ではなかった判断を、科学的にも証明するものであり、他の作品にも発展的に応用できる研究方法の確立が可能であるため。 効率性：作品を事前調査により美術史的観点から選ぶことで、効率のよい調査ができたため。 正確性：これまで継続的に行ってきた光学的調査をもとに、必要な機材を新たに構成したことで、数値化によるデータ収集ができた。						

2. 定量的評価

観点	作品調査等回数	収集データ数				
判定	A	B				
判定理由 作品調査等回数：調査対象作品を「花下遊楽図屏風」とし、絵具や、銀の判断に必要なデータ集積を行うことができた。 収集データ数：他業務との関係から1回の調査に時間的制約があったため、必要箇所のみのデータ採集にとどまった。業務の調整を行うことで、1回あたりの収集数を増やすことでより発展的研究を行いたい。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	茶色や黒色の部分に、絵具ではなく銀が用いられていることが確認され、現在落ち着いたイメージを持つ国宝「花下遊楽図屏風」が、当初は銀を多用した爽やかで明るい色調の作品であったことがわかった。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	昨年までは、金地屏風のみを対象とした金箔使用の調査を行ってきたが、必要とされた最終実験を行うための機材が故障し、実験を行うことができなくなった。そのため、同一条件を前提としたデータを集約しての考察を行うことができなくなった。本年度は、新たな機材により実験が可能となり、総合化を行わなくても調査成果を得ることの出来る研究課題とした。それにより個別の作品を対象として調査し、成果に結びつける実験体制をつくることができた。 次年度以降も継続して、作品を調査する体制が確立した。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	7) 油彩画の材料・技法に関する共同調査 ((5)－①)		
【事業概要】 本研究は東京藝術大学との共同研究で平成20年度から開始し、平成24年度に継続の手続きを行い、続行しているものである。東京国立博物館所蔵の油彩画約150件の中から、明治期を中心とした約50件を調査対象としている。東京藝術大学大学院油画保存修復研究室はこれまで大学所蔵の明治期油彩画について調査研究を続け、多数の成果を公表している。この度の共同調査の目的は、高精細デジタルカメラを使用した顕微鏡写真、普通光写真、赤外線写真、紫外線蛍光写真、透過デジタルX線写真、蛍光X線分析等の科学的調査を通し、当館所蔵の油彩画に使用された材料と技術に関するデータ構築を行い、これまで芸大が集積したデータと比較を可能にすることである。それによって、今後我が国の初期油彩画の技法的解明、あるいは歴史的解明が一層進展するものと考ええる。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長 神庭 信幸
【スタッフ】 木島隆康(東京藝術大学大学院教授)、西川竜二(東京藝術大学大学院助教)、田沢裕賀(調査研究課絵画・彫刻室長)、土屋裕子(保存修復課保存修復室長)、荒木臣紀(保存修復課主任研究員)			
【主な成果】 平成20年11月から開始した本調査は、3年間の調査期間の締結を更新し、さらなる調査を進めている。本年度調査が終了した作品は、9点である。			
【年度実績概要】 平成25年度に調査が終了した作品（これまでに調査した作品の追加調査も含む）は、①A-698 風景、②A-705 風景、③A-708 海の風景、④A-715 シバの女王とソロモン王、⑤A-716 ジャニー・ディーンズ[※]の肖像、⑥A-10045 形見の直垂(虫干)、⑦A-11240 漁夫、⑧A-11295 花、⑨A-11753 酢川にかかる常盤橋、以上9点。			
			
油彩画の調査風景			
【実績値】 調査回数 : 5回 調査作品数 : 9点			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-7

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：展示への活用に資する時宜を得た調査であるため。 独創性：当館保有の油彩画に関して初めての総合調査であるため。 発展性：明治期に油彩画に関して他館との比較研究が可能になるため。 効率性：計画的な調査を実施した。 正確性：調査内容は目的とするメニューを確実に行うことができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査作品数				
判定	A	A				
判定理由 調査回数、調査作品数：全て当初予定通りの優れた成果を上げることができたと考える。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	東京国立博物館が所蔵する油彩画コレクションは、東京藝術大学の同時期の作品群を補完する意味でその存在は大きい。これまで光学的調査が不十分であったため、芸大作品と材料や技術に関する科学的な比較が困難であったが、一連の調査によって徐々に可能になってきている。特にX線透過画像、デジタル顕微鏡画像などの詳細なデータ間の比較によって、作品の特性のみならず、関係性などについても新たな検討ができる状態が整いつつある。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施されており、当該年度計画を100%達成。『MUSEUM』での発表はなかったが、現在準備中である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	8) 漆塗籠棺残片の保存に関する共同研究((5)－①)		
【事業概要】 水漬状態の漆塗籠棺残片(J-39374)のミクロ及びマクロ的な構造を理化学的に調査分析し、合わせて過去の処置事例を検討しながら、水漬状態の資料に対する乾燥方法を確定し、具体的に乾燥処理を行うことを目的とした事業である。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長 神庭 信幸
【スタッフ】 齊藤孝正（学芸研究部上席研究員）、古谷毅（列品管理課主任研究員）、和田浩（保存修復課環境保存室長）、橋本英将（調査研究課考古室研究員）、川村佳男（列品管理課平常展調整室研究員）、市元 壘（九州国立博物館企画課研究員）、永嶋正春（国立歴史民俗博物館情報資料研究系客員教授）、今津節生（九州国立博物館学芸研究部博物館科学課長）、高妻 洋成（奈良文化財研究所埋蔵文化財センター保存修復科学研究室長）、北野信彦（東京文化財研究所保存修復科学センター主任研究員）、望月幹夫（当館客員研究員）、松井敏也（筑波大学准教授・当館客員研究員）			
【主な成果】 ・漆塗籠棺残片の保管履歴を整理し、現状を確認した。 ・理化学的調査分析の計画を策定した。 ・断片の乾燥処置方法について検討した。			
【年度実績概要】 ・第1回全体会議・調査会の開催 開催日：平成25年1月30日 出席者：齊藤・神庭・古谷・和田・橋本・川村・市元・今津・高妻・永嶋・北野 議事：研究経過報告(神庭)、関係資料報告(古谷)、学識経験所見報告(今津・高妻・永嶋・北野)、報告・協議総括(神庭)。理化学的調査分析についての協議及び、日程を決定した。 ・水浸保管中の漆残片の保存状態、形状などについて定期的な点検調査を実施した。			
			
水浸保管中の漆残片			
【実績値】 調査回数 16回 水浸保管中の漆残片の保存状態の調査を継続的に実施した。 調査研究会1回 神庭信幸、齊藤孝正、古谷毅、和田浩、橋本英将、川村佳男、市元 壘、永嶋正春、今津節生、高妻洋成、北野信彦が参加して、乾燥処置法についての検討を行った。			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-8

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	正確性				
判定	A	A				
判定理由 適時性：緊急性が高く、事業完了後は公開を目指した事業を実施した。 正確性：理化学的調査で得られたデータに基づく修理計画立案を目的とする事業を実施した。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査研究会 回数				
判定	A	A				
判定理由 調査回数：年度内に十分な内容を伴う調査を予定通り実施した。 調査研究会回数：予定通り1回の研究会を開催し、本格的修理に向けた検討を実施した。						

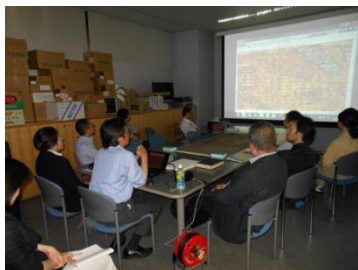
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本格的な保存処理の実施前に、漆塗籠棺残片の構造、材質の検討を実施した。現状では、漆の年代計測、漆の微細構造の解析などがまだ残っているが、それらは次年度に実施できるように調整中である。それらの点を除けば、予定通りに保存のための事前調査は進行し、修理に必要な成果を得ている。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	漆塗籠棺残片の制作技法と修理方法の検討は順調に進み、次年度には修理に着手できる見通しがついていた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	9) 東京国立博物館所蔵仏教絵画の高精細画像による共同調査 ((5) -①)		
【事業概要】 東京国立博物館所蔵の仏教絵画を対象として、東京文化財研究所のもつ高精度のデジタル画像調査による共同調査を行い、仏教絵画の価値認識を深め、劣化しない長期保存可能な最高レベルの記録を作成し、作品の保護に寄与することを目指す。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課絵画・彫刻室長 田沢裕賀
【スタッフ】 沖松健次郎（保存修復課保存修復室主任研究員）、小林達朗（東京文化財研究所主任研究員）、城野誠治（東京文化財研究所専門職員）、小林公治（東京文化財研究所広領域研究室長）、江村知子（東京文化財研究所主任研究員）、皿井舞（東京文化財研究所主任研究員）			
【主な成果】 平成 24 年度に高精細デジタル画像撮影を行った国宝「千手観音像 A-10506」について東博・東文研両機関研究員による検討会を開催し、撮影画像をもとに「千手観音像」に用いられた技法を詳細に観察、検討した結果、截金上にさらに彩色が加えられているとみられることなど、従来認識されてこなかった細部の技巧についての知見を深めることができ、今後の平安仏画の美的表現の研究・公開に資するに足る重要な資料を得た。また、来年度も継続的に調査と検討を行うために国宝「普賢菩薩像 A-1」の高精細デジタル画像撮影を行った。			
【年度実績概要】 ・ 国宝「千手観音像」について 平成 24 年度に高精細デジタル画像撮影を行った TIFF 高精細画像 23 点、閲覧用ファイル(JPEG 画像等による Zoomify 形式) 23 組を受け入れ、調査成果の共有化を図った。 同画像をもとに東博・東文研両機関研究員による検討会を 25 年 5 月 16 日に東京文化財研究所において開催した。 検討会の成果は、小林達朗（東京文化財研究所企画情報部主任研究員）が、25 年 10 月 4 日に東京文化財研究所第 47 回オープンレクチャーで「平安仏画の表現―虚空蔵菩薩像と千手観音像」ならびに、26 年 1 月 11 日に第 37 回東京文化財研究所文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「「かたち」再考―開かれた語りのために」で「美しい術―国宝千手観音像の場合」と題して発表した。 ・ 国宝「普賢菩薩像」について高精細デジタル画像撮影を行った。			
			
東京文化財研究所における検討会		国宝「普賢菩薩像」撮影風景	
【実績値】 検討会回数 1 回（「千手観音像 A-10506」25 年 5 月 16 日 於東京文化財研究所） 作品調査回数 1 回（「普賢菩薩像 A-1」26 年 3 月 26 日 於東京国立博物館） 研究発表回数 2 回 作成データ量 TIFF 高精細画像 23 点、JPEG 画像等による Zoomify 形式 23 組（「千手観音像 A-10506」）			
【備考】 本年度は、このプロジェクトによって得られた「千手観音像」の画像資料に基づいて東京文化財研究所スタッフ（小林達朗）による研究成果の公表が行われ、充実したものとなった。			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-9

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	S	S	S	S	A	S
判定理由 適時性：日本美術史研究において重要な作品を対象とし、現在最高レベルの調査技術を用いているため。 独創性：同機構内で貴重な文化財を管理するスタッフと最高レベルの高精細画像調査技術を持つスタッフが相互に補完しつつ重要な表現を持っているものを対象に選んで研究を行っているため。 発展性：細部の調査、認識による研究は、仏教絵画以外にも発展的に応用できる研究方法であるため。 効率性：作品を良く知るスタッフにより、美術史的観点からポイントを絞った調査準備が行われており、効率のよい調査ができたため。 継続性：異なる機関のスタッフによる共同研究のため、調査・検討の時期調整に困難が生じたが、来年度も継続的に調査をする準備段階を確立できたため。 正確性：最高レベルの高精細画像調査技術による調査が可能であったため。						

2. 定量的評価

観点	検討会回数	作品調査回数	研究発表回数	作成データ量		
判定	S	A	S	S		
判定理由 検討会回数：東京国立博物館、東京文化財研究所のプロジェクトスタッフ以外にも、呼びかけを行い、非常に多くの参加者による充実した意見検討が行われ、従来認識されてこなかった細部の技巧についての知見が得られた。 作品調査回数：本年度検討対象とした国宝「千手観音像」については、高精細画像調査が昨年度に行われており、本年度には、来年度のための国宝「普賢菩薩像」について、高精細画像調査が行われ、来年度の準備を果たすことができた。 研究発表回数：研究成果を得ることができたので、研究者、一般を対象とした研究発表をそれぞれ行うことができた。 作成データ量：TIFF 高精細画像 23 点を記録し、JPEG 画像等による Zoomify 形式による 23 組の閲覧用画像を共有することができた。						

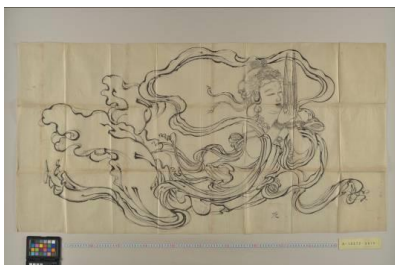
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
S	高精細デジタル画像撮影の成果を美術史研究に反映させることで、より客観的研究体制を確立している。次年度も継続的に調査を行う準備ができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
達成	本年度は、共同研究をはじめて3年度目にあたる。個別作品の研究としても重要なプロジェクトであるが、調査作品数を増やし、研究を蓄積していくことで、日本の仏教絵画に対する広範な視点による研究を導き出すことが可能になると考える。次年度も継続的に調査を行うことで、より正確性の高い研究を目指していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	10) 板谷家を中心とした江戸幕府御用絵師に関する総合的研究(科学研究費補助金)((5)-①)		
【事業概要】 平成21年度東京国立博物館に一括寄贈された約1万件に及ぶ板谷家伝来資料について、デジタル撮影、データ整理を行い、データベース作成・公開への準備を進める。また、各古文書・絵画資料の画題や原本、伝来等について調査するとともに、板谷家作品を所蔵する機関にて現存作品調査を実施。これにより伝来資料について、資料そのものと現存作品との比較という両面から理解を深め、その成果を公開する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課絵画・彫刻室長 田沢裕賀
【スタッフ】 池田宏(上席研究員)、富坂賢(前保存修復課保存修復室長、小野真由美(列品管理課貸与特別観覧室主任研究員)、塚本鷹充(調査研究課東洋室研究員)、金井裕子(学芸企画部企画課特別展室研究員)、山下善也(調査研究課絵画彫刻室主任研究員)			
【主な成果】 伝来資料について、2,791点(5,012カット)の撮影を終了するとともに、並行して下絵と関連する原作品の確認など知見の整理、絵画資料の調査、古文書の翻刻を行った。また、スタッフによる研究会を開いたのに加え、本年度は資料中に下絵類の見出された新潟県浦佐毘沙門堂(普光寺)山門の障壁画調査(25年8月28・29日)及び撮影を行った。			
【年度実績概要】 ・伝来資料のデジタル撮影、データ整理 作品保存とデータベース公開のため、伝来資料のデジタル撮影、データ整理を、週2日行った。 ・調査の実施 東京国立博物館所蔵の住吉家、板谷家作品の調査を行った。また25年度は新潟県浦佐毘沙門堂(普光寺)(25年8月28・29日)での調査を実施し、実測や撮影等の詳細な調査をもとに下絵と比較し、下絵等の資料が山門障壁画の密接な関係があることを確認した。 ・研究会の実施 25年8月27日東京国立博物館内で、下絵と関連する作品確認の成果として、浦佐毘沙門堂(普光寺)山門の障壁画調査を前提とした寺院壁画関連下絵を対象として調査研究会を行った。			
 板谷家伝来資料撮影風景  資料整理保管状況  板谷家伝来資料(飛天下絵)			
【実績値】 研究会回数 1回(25年8月27日) 外部調査回数 1回(25年8月28・29日) 画像データ作成点数 2,791点 5,012カット			
【備考】			

【書式B】

(様式2)

施設名 東京国立博物館
自己点検評価調査

処理番号 4511-10

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	S	A	A	B	
判定理由 適時性：近年の御用絵師研究の進展に寄与する研究であるため。 独創性：総数1万点を超える御用絵師資料の総括的研究は、これまでになされていないため。 発展性：住吉家（本年調査を実施）・狩野家など板谷家以外の御用絵師の活動と連動した研究により、様々な研究が可能となるため。 効率性：これまで御用絵師研究に関わってきた研究者の協力を得て効率の良い調査がなされているため。 正確性：下絵・粉本等の画題検討を手分けして行い、不明部分に関しては、研究会で課題を出し合って精度を高めているが、総量が多いこと、特別展開連業務が年度後半に集中したこともあり、一部には遅れも見られるため。						

2. 定量的評価

観点	研究会回数	外部調査回数	画像データ作成点数			
判定	B	A	A			
判定理由 研究会回数：館内での検討会と年度前半の研究会は行われたが、年度末の研究会が開催できなかったため。 外部調査回数：回数は1回であるが、これまで紹介されることのほとんどなかった浦佐毘沙門堂（普光寺）山門障壁画調査を行い、板谷家伝来資料との関連を確認することができた。 画像データ作成点数：当初目標であったデジタル撮影、データ整理作業、古文書解読などの調査を定期的に行い、本年度は1月あたり約230点の撮影を行った。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	撮影等については本年度の当初目標をほぼ達成した。作品調査は、当初京都方面を予定していたが、浦佐毘沙門堂（普光寺）山門下絵の可能性があると推測されたため、本年は調査先を浦佐毘沙門堂に変更し、成果を得ることが出来た。他業務との関係から年度末の研究会開催は難しい状況にあるが、来年度の早い時期での研究会開催に向けて、次年度以降の作品調査（来年度は京都方面）の予定を作成し準備に入っている。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施されており、当該年度計画を達成した。 1万点を超える膨大な資料の撮影、データ整理に、平成25年度は3人の整理作業補助員、1人のカメラマンで当館研究員とともに作業にあたった。次年度以降につづく調査研究の基盤はできているが、最終年度のデータ集約作業の負担を減らすために、次年度はデータ整理の速度を速めることを目的とした人員増加体制を確立する。来年度は、京都方面の関連作品調査を行うために、年度前半にこれまで蓄積した作品情報集約のための研究会を開催することとしている。 引き続きこれらのデータをもとに各資料に関する情報を精査し、3年後の公開に向けて、利便性の高いデータベースの作成を追及していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	11) 中世聖徳太子絵伝の図様展開に関する調査研究(科学研究費補助金)((5)－①)
【事業概要】 本研究は日本における古代中世の大画面説話画の中でも、画題として比較的早い時期から成立し、多く描かれた主題のひとつである聖徳太子絵伝について、現存諸作品の詳細な調査に基づき、社会的・文化的・宗教的な動向や、他の説話画制作の状況も踏まえた上で、どのように図様が展開したのかを明らかにしようとするものである。	
【担当部課】	学芸研究部
【プロジェクト責任者】	保存修復課保存修復室主任研究員 沖松健次郎
【スタッフ】 伊藤信二(学芸企画部博物館教育課教育普及室長)、土屋貴裕(列品管理課平常展調整室研究員)、小林達朗(東京文化財研究所企画情報部主任研究員)、谷口耕生(奈良国立博物館学芸部保存修理指導室長)、朝賀浩(文化庁美術学芸課主任文化財調査官)、石川知彦(龍谷ミュージアム教授)、村松加奈子(龍谷ミュージアム研究員)、阿部泰郎(名古屋大学教授)	
【主な成果】 聖徳太子絵伝は現在 40 件ほどが知られており、それらは想定される享受環境の違いによって画面形式や図様・画面構成に違いがあり、制作集団の違いも想定されている。各々の作品群の詳細な分析と、他の関連作品との比較検討を行なうため、館蔵品、寄託品、及び館外作品の調査研究を進めた。あわせて、太子絵伝と密に関わる中世太子伝諸本から各年代の事蹟を比較参照できるよう、データ化を行った。	
【年度実績概要】 (1) 中世聖徳太子絵伝の作品調査 本研究は中世聖徳太子絵伝諸本に描かれた各場面の比定、大画面説話画をはじめとする中世絵画との比較、中世太子伝との照合を進めるが、その基本となるのが綿密な作品調査である。本年度は、太子絵伝の作例では、昨年度に調査を行った大蔵寺所蔵の二幅の作例と図様が類似する、米国・メトロポリタン美術館所蔵作品の調査を行った。また、同館調査の折に関連する中世仏画や、当館にて 25 年 4 月 9 日から 6 月 2 日まで開催された「国宝 大神社展」の折に宮曼茶羅や参詣曼茶羅をはじめとする、中世説話画を考える上で欠かせない関連作例の調査を進めることができた。 ・聖徳太子絵伝 二幅 鎌倉時代 13 世紀 米国・メトロポリタン美術館 ・迎接曼茶羅 鎌倉時代 1300 年頃 米国・メトロポリタン美術館 ・春日曼茶羅 鎌倉時代 13 世紀 米国・メトロポリタン美術館 ・春日若宮像 南北朝時代 14 世紀 米国・メトロポリタン美術館 ・愛染明王像 鎌倉時代 14 世紀 米国・メトロポリタン美術館 ・不動明王像 米国・個人像 ・大威徳明王像 米国・個人像 ・善導大師像 米国・個人像 ・重文 琴弾宮縁起絵 鎌倉時代 14 世紀 香川・観音寺 ・重文 山王宮曼茶羅 鎌倉時代 14 世紀 奈良国立博物館 ・重文 日吉曼茶羅 鎌倉時代 14 世紀 奈良・大和文華館 ・鹿島立神影図 南北朝一室町時代 14 世紀―15 世紀 奈良・春日大社 ・重文 白山三社神像 鎌倉時代 13 世紀 石川・白山比咩神社 3 年目の次年度では、米国・メトロポリタン美術館本に関係のある橘寺本、四天王寺本、瑞泉寺本などの作例の調査が課題である。 (2) 中世太子伝諸本の事蹟データベースの作成 聖徳太子伝諸本のうち、活字化されていない影印本を中止にして、本文のデータベースを作成中。来年度へ継続する。 (3) 中間報告の発表 本研究が対象とする作品のうち、法隆寺献納宝物聖徳太子絵伝(国宝本)と(四幅本)に関しては、協力者の一人である阿部泰郎(名古屋大学教授)と共に、「法隆寺の聖徳太子伝を絵説く 二つの太子絵伝障子絵伝 四幅絵伝 絵解きの試み」と題して、その成果の一部を講演会(於・いかるがホール)で発表した。 また、四幅本については『法隆寺献納宝物特別調査概報 34』『聖徳太子絵伝(四幅本)2』にその成果の一部を盛り込んで刊行した。	
【実績値】 作品調査件数 13 件 中間報告の発表件数 1 件	
【備考】	

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：従来体系的な検討の試みられなかった聖徳太子絵伝の研究を進める必要性は高いため。 独創性：絵画史のみならず、工芸、有職の知見から研究を進めるため。 発展性：聖徳太子絵伝のみならず、他の大画面説話画の今後の研究にも寄与するため。 効率性：限られた時間の中で、効率的にデータ収集を行えた。 継続性：本研究は5ヵ年計画で進めており、次年度以降も継続的に研究を進めるための整備を行えた。 正確性：中世太子伝の比較検討のための対照表により、各事跡はより正確に把握することができるため。						

2. 定量的評価

観点	作品調査件数	中間報告の 発表件数				
判定	B	A				
判定理由 作品調査：太子絵伝そのものは当初の計画よりも少なく、1件にとどまったため。しかし、関連作品は予定より多くの調査を実施することができた。 中間報告の発表：聖徳太子絵伝（四幅本）に関しては、今後の調査研究の基礎資料として大いに活用されることが期待されるため。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	2年目である本年度は、太子絵伝の作例では調査件数は少なかったが、中世太子絵伝の様々な系統への影響が大きいと考えられるメトロポリタン美術館本を調査することができたことは収穫大であった。次年度はメトロポリタン美術館本に関連する作品を中心に調査を行う。文献は、昨年度に引き続きデータ化を進め、次年度も引き続きデータ化作業を行う。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究は描かれた事跡の特定のみならず、その図様が選択された背景を中世太子伝などの文献や社会的背景から考究するものであり、研究の基盤を徐々に整えつつあることは次年度以降の研究推進に大きく利するものとする。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	12) 光学的調査に基づく高雄曼荼羅の研究（科学研究費補助金）（(5)- ①）。		
【事業概要】 本研究では高雄曼荼羅（京都・神護寺所蔵）の重要性を考え、その研究推進を図るために、最先端の撮影技術を用いた高精細デジタル画像及び赤外線画像の撮影を全面的に行う。さらに新たな高雄曼荼羅研究の端緒と成せるよう、研究者それぞれが絵画・彫刻・工芸等の専門性を生かし、空海と彼を取りまく仏教美術を考察するのに重要と思われる観点を取り上げて調査・研究を行うものである。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸企画部長 松本伸之
【スタッフ】 丸山士郎（学芸企画部博物館教育課教育講座室長）、伊藤信二（学芸企画部博物館教育課教育普及室長）、澤田むつ代（特任研究員）、沖松健次郎（保存修復課環境保存修復室主任研究員）、和田浩（保存修復課環境保存室長）、安藤香織（徳川美術館学芸員）			
【主な成果】 昨年度までに撮影した高雄曼荼羅の画像合成等作業を完了した。高雄曼荼羅の表現・技法を考えるために、その製作と同時期の作品が残る中国山西省の五台山の寺院の調査及び韓国の密教美術の調査を実施した。			
【年度実績概要】 高雄曼荼羅の金剛界と胎藏界各幅について、カラー画像 8000 万画素 315 カット、赤外線画像 4000 万画素 432 カットの撮影を昨年度までに完了し、それらの分割撮影画像の合成作業を進めてきた。今年度もその作業を引き続き行い未完成成分を完了させた。これによって高雄曼荼羅全体について、これまで出版された画像と比較して、格段に精度が高く、金銀泥も明確に表れた画像が得られ、今後の研究には有益な基礎資料となった。 研究成果発表の講演会（26 年 6 月）の準備を進めるとともに、出版社と協議して、来年度以降に研究報告書の刊行を目指すことになり、レイアウトについて検討を始めた。 高雄曼荼羅製作と同時期の遺品が残る中国山西省の五台山内の寺院（南禅寺・広済寺、菩薩頂・顯通寺・竹林寺・金閣寺・仏光寺(以上、山西省忻州市)）と五台山伝来作品を保管する山西博物院(山西省太原市)において調査を実施し、写真資料等を作製した。 また、韓国の国立中央博物館で関連作品の調査を実施した。 電子顕微鏡による高雄曼荼羅の剥落片の調査を実施し、金泥線が金、銀泥線が硫化銀であることを確認した。			
 高雄曼荼羅の赤外線画像 黒い線が銀製線			
【実績値】 画像合成等作業：768 画像（赤外線画像） 関連作品調査：2 ヲ所(中国山西省五台山、韓国国立中央博物館) 電子顕微鏡調査：8 サンプル			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-12

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：本研究で得られる高雄曼荼羅の細密な画像は多様な研究分野にとって非常に有効であり、必要性が高い。 独創性：本研究では高雄曼荼羅とアジアの広い地域の仏教美術を比較検証する研究であり、中国・韓国での調査を実施することができたため。 発展性：高雄曼荼羅全体を俯瞰できる合成画像は今後、広く研究に活用できると見込まれるため。 効率性：本年度は画像処理などで研究協力者を依頼して効率的な研究推進に努めた。 継続性：昨年度までに撮影した画像の処理を終えた。昨年度実施したインド調査に引き続き、中国、韓国調査を実施できた。 正確性：大幅である高雄曼荼羅全体を俯瞰できる高精細画像を作成することが出来た。金泥と銀泥の科学的調査を実施した。						

2. 定量的評価

観点	画像合成等 作業数	関連作品調査	電子顕微鏡調査			
判定	A	A	A			
判定理由 画像合成等作業数：必要な全ての作業を終えることができたため。 関連作品調査：効率よく十分な調査ができたため。 電子顕微鏡調査：効率よく調査を進める為に必要十分な数を確保できたため。						

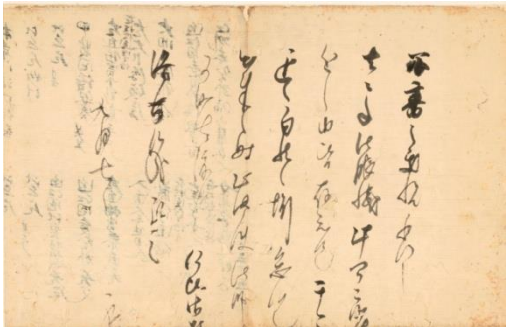
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本研究の最重要事項である高雄曼荼羅の撮影、画像合成等作業を全て完了することができた。また高雄曼荼羅をアジアという視点で捉えなおすという研究に着手し、そのための中国・韓国調査を実施することができたため。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当初の予定通り、縦横4メートルを終える大幅全体について高精細画像を作成することが出来た。高雄曼荼羅をアジアの中で位置づけるという新たな研究視点からの調査研究も行った。本研究の成果を発表する講演会に日程を決め（平成26年6月）、研究成果報告書刊行の準備も始めた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	13) 古筆切紙背の史料学的研究 (学術研究助成基金助成金) ((5) -①)		
【事業概要】 古筆切の紙背（裏面）には、典籍や記録の断簡が見られることがある。判読の困難という要因もあり、これまで学術的に注目されることがほとんどなかったが、デジタル画像処理技術の普及によって、紙背の内容を把握することが可能となってきた。この研究は、既知の手鑑等に収載されて伝わった希少な古筆切の中から紙背を持つものを集成し、その史料学的な評価と研究の方法を確立することを目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 田良島 哲
【スタッフ】 島谷弘幸（東京国立博物館副館長）			
【主な成果】 ・平成23年度・24年度に蓄積したデータ等をもとに、古筆切紙背の伝存状況や特質について考察を行った。 ・当館で長期借用している古筆手鑑2件（3帖）と京都国立博物館所蔵の手鑑1件（1帖）について高精細画像の撮影を行い、データを蓄積した。			
【年度実績概要】 昨年度までに調査や写真撮影を行った資料を精査しながら、古筆切紙背の伝来状況や特質を探った。 すでに、東博所蔵の手鑑の中に解体された同一の典籍に属する複数の紙背文書を貼り込んでいる例を見出していたが、昨年度から今年度にかけて調査した手鑑の中にも同一寸法の典籍の料紙が複数の場所に貼り込まれている例が認められた。これにより、特に書状については、同一典籍の紙背文書に筆跡にふさわしい伝称筆者名を付して配置することが、手鑑編纂の一つの手法であることが、かなり確実に言えるようになった。この事実は手鑑自体の成立過程やその素材となる典籍の伝来について、研究上手がかりを与えるものと考えられる。			
			
裏面に典籍断簡のある書状切の例			
【実績値】 （参考値）写真撮影 4帖			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-13

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：古筆切の素材が豊富に公開されつつあり、網羅的な研究をするには適当な時期であるため。 独創性：これまでの古筆切研究には見られない視角からの研究であるため。 発展性：国文学など既存の分野だけでなく、歴史学等他の分野への応用が可能であるため。 効率性：必要最小限の経費で研究を執行するよう務めているため。 継続性：毎年度、継続して研究素材の拡充を図っているため。 正確性：研究に必要な情報を的確に記述するように努めた。						

2. 定量的評価

観点						
判定						
判定理由						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	研究の問題意識に対して肯定的な素材が集積されている。館蔵品以外の手鑑についても画像データの蓄積に努めた。本研究は25年度までであるので、調査成果をもとに平成26年度中に論文の形で学術誌等に公表する予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当館蔵品に関する情報を蓄積して、研究成果が館業務に寄与している。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	14)「家形埴輪の群構成と階層性からみた東アジアにおける古墳葬送儀礼に関する基礎的研究」(学術研究助成基金助成金) ((5)－①)		
【事業概要】 日本古代国家形成期である古墳時代の葬送儀礼を家形埴輪の群構成と階層性から分析・研究する。特に東アジア農耕社会の集落建築や家形造形品との比較・検討から、古墳時代社会の安定と成長に大きな役割を果たした古墳葬送儀礼とその背景にある古墳時代他界観(世界観)を解明するための基礎研究の確立を目的とする。 また、これまでの科学研究費補助金C(2000～2002 年度)・同 B(2005～2007 年度)の調査・研究成果と併せ、総合研究報告書の作成準備を進める。			
【担当部課】	学芸研究部列品管理課	【プロジェクト責任者】	主任研究員 古谷 毅
【スタッフ】 犬木 努(大阪大谷大学 文学部教授)			
【主な成果】 科学研究費補助金C・B(2000～2002・2005～2007 年度)による調査・研究成果に基づき、研究会を開催し、各地の主要古墳出土埴輪群の分析結果を検討すると共に、古代窯業生産体制に関する先行研究の分析・検討を行った。また、本年度は主に韓国・大邱市で嶺南文化財研究院と共同研究会を実施し、韓国・国立中央博物館所蔵家形土器の調査を実施した。			
【年度実績概要】 本年度は、日本古代史研究者を含む研究協力者と共に、25 年 5 月、26 年 2 月に、東京都・大阪府にて研究会を開催し、これまでの調査成果の確認と問題点を検討・分析した。また、25 年 6 月に韓国で家形埴輪の研究成果を公開し、その歴史的意義について韓国出土の家形土器と比較・検討し、討論を行った。このほか、科学研究費補助金C・B(2000～2002・2005～2007 年度)の研究成果を含む、総合的研究報告書の内容・構成と体裁、及び作成スケジュールの検討・打合を進めた。 資料調査としては、近畿地方の主要古墳出土資料(大阪府)を重点的に進めたほか、韓国出土家形土器の調査を行なった。既存調査資料の整理に関しては、写真・データ等の整理・分析を実施し、これまでの調査成果で収集した撮影画像のデジタル化を進めた。東京国立博物館所蔵埴輪資料の調査準備に関しては、館内における存在確認事業等の影響で今年度も実施に至らなかった。			
 日韓共同研究会 共催者(嶺南文化財研究院 朴升圭院長)による挨拶風景 〔於：韓国・国立大邱博物館〕			
【実績値】 ○調査日数 :5 日間 ・調査件数 : 約 3 0 件 ・主な調査資料 : 韓国内出土家形土器(韓国・国立中央博物館蔵)、大阪府内出土埴輪(大阪府文化財センター蔵) ○研究会日数 :3 日間 ○論文等公開件数 4 件(備考①～④) (参考値) ○フィルムデジタル化 : 約 16, 000 画像			
【備考】 論文等 ①犬木 努「下総型埴輪の風景―形態変化・工人編制・分布域―」『埴輪研究会誌』第 17 号、埴輪研究会、1～37 頁、2013 年 5 月 ②古谷 毅「家形埴輪研究史と研究成果および課題―機能と性格―」『韓日家形土器・埴輪の比較と歴史的意義』(韓日家形土器・埴輪共同研究会 発表要旨集)韓国・嶺南文化財研究院・東京国立博物館科学研究費(基盤 C)研究会、60～70 頁、2013 年 6 月 15 日 ③犬木 努「日本における古墳葬送儀礼と埴輪について」『韓日家形土器・埴輪の比較と歴史的意義』(韓日家形土器・埴輪(하니와) 共同研究会 要旨集)韓国・嶺南文化財研究院・東京国立博物館科学研究費(基盤 C)研究会、116～126 頁、2013 年 6 月 15 日 ④古谷 毅「大型古墳と中小古墳 ―再整理から見た七観古墳の意義―」『第 4 回百舌鳥古墳群講演会「巨大古墳あらわる―履中天皇陵古墳を考える―」 発表要旨集』大阪府・堺市、15～37 頁、2014 年 2 月 2 日			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	A	A	B	S	A
判定理由 適時性：既存の科学研究費補助金による調査・研究成果の公開性において需要性・必要性があり、早期の公開を目指しているが、今年は館内事情で十分な緊急性には応えていない。 独創性：古墳時代労働編制研究の視角を中心にして発想・着想しており、埴輪研究においてはオリジナリティ及び新規性には優れていると思われる。 発展性：円筒埴輪中心であった従来の埴輪研究の多様性・汎用性に裨益し、研究視角の面からは先史考古学及び古墳時代・古代史研究に与える応用性などに一定の成果があると思われる。 効率性：日本古代史研究者を含む多数の研究協力者を得ており、予算運用の時間的・人的投資について有効であると思われる。一方、設備的投資については、消耗品を含めてほとんど行っていない。 継続性：これまで交付された科学研究費補助金による調査・研究成果を継承し、期間は適正で、質・内容・量ともに従来の調査・研究例を上回っており、本研究テーマの資料的基盤を構築する基礎性に優れている。 正確性：実測図の作成はほとんど行っていないが、数値・データに関してはすでに写真撮影だけでも 30,000 カットを超えており、達成値・網羅性については従来の調査・研究事例に類似する成果は見られない。						

2. 定量的評価

観点	調査日数	研究会日数	論文等公開件数			
判定	C	B	B			
判定理由 調査日数：館内事情で十分な日数を実施できなかった。 研究会日数：日本古代史研究者を含む多数の研究協力者を得て、最低限の研究会を開催した。 論文等公開件数：公開性に鑑みても、さらに努力が求められると思われる。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	継続性については変更の必要が認められないと考えられるため、他の定性的・定量的評価により判定。研究計画の達成度については、補足調査と調査精度の向上をさらに高める必要があり、東京国立博物館所蔵資料(列品)の整理・分析は今年度不十分であった。繰越の承認を得たことによって、より研究予算運用の効率性・適時性を高め、研究会ではさらに研究・分析視角に関する発展性・独創性の拡充・確立を図り、最終年度として成果報告書をまとめ刊行したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	有形文化財の収集・保管に関しては、列品の整理・分析及び学術的評価に関する十分な考古学的情報、及び展示・解説(論文・講演・ニュース等)・出版等を通じた当館における文化財(列品)の公開に資する調査・研究として比較的十分な蓄積を行ったと考えられる。このほか、定性的・定量的評価により判定した。改良・改善点は3.総合的評価のように、より高度な効率性・適時性及び発展性・独創性の確立を図ることを目標として、最終年度の計画へ反映させる予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	15) 絵巻の＜伝来＞をめぐる総合的研究（科学研究費補助金）（(5)－①）		
【事業概要】			
本研究は、絵巻の研究を従来顧みられることのなかった伝来や鑑賞歴といった作品の付属情報から捉え直し、推進する。研究にあたっては、絵巻の伝来、鑑賞歴に関わる情報を収集・蓄積した上で、絵巻が今日に至るまでにどのような軌跡を経て伝世したのかという、各作品の通時的な歴史性に配慮し、絵巻という媒体全体を視野に入れた総合的な分析を行うことを最終的な目標として設定する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課平常展調整室研究員 土屋貴裕
【スタッフ】			
【主な成果】			
本年度前年度に引き続き、絵巻の伝来、鑑賞歴といった情報を収集するため、古代中世の文献資料に記載された絵巻関係資料の抜き出しとデータ化を進めた。また、東京国立博物館所蔵絵巻模本の調査を進め、主に近世に制作された模本から作品所蔵情報を得る基盤を整えた。同時に、近代における作品の移動等に関する情報を収集するため、東京文化財研究所所蔵の売立目録の調査を開始し、そこに記載された情報のデータ化を進めた。			
【年度実績概要】			
(1) 文献資料記載絵巻関係資料の抜き出しとデータ化 本研究が主な対象とする古代中世絵巻の伝来、鑑賞情報を得るためには、日記、古記録等の文献資料を博捜し、そこに記載された本文を整理する必要がある。抜き出しにあたっては、絵巻のみならず仏画、肖像画、屏風等、絵画関係の記事をピックアップし、本年度はおおよそ 21 タイトルの文献資料から約 1200 件の記事を抜き出し、その一部をデータ化した。			
(2) 東京国立博物館所蔵絵巻模本の調査 絵巻模本の多くは近世に作られたが、その制作に際して、所蔵者や伝来等の情報が記されている場合がままある。本研究では、東京国立博物館所蔵絵巻模本の悉皆調査を目指し、目録の整理、撮影、所蔵者や伝来、模写者等の情報を収集すべく、模本リストの整理に着手した。調査順は列品番号順を基本として進め、本年度は狩野晴川院他模本など約 50 件の調査を行うことができた。			
(3) 売立目録の調査 (1)と(2)が前近代における絵巻情報の収集と整理であるのに対し、近代における作品の移動等を追うため、売立目録に記載された絵巻の調査を進めた。とりわけ、東京文化財研究所には国内有数の売立目録が所蔵されており、その全てから、絵巻を中心とするやまと絵の情報を抜き出し、PDF化を進める準備を整えた。本年度は、1350 タイトルの目録から約 5500 件の情報を抜き出した。			
(4) 調査・研究の展示での公開 上記の調査・研究の成果を踏まえ、25 年 7～8 月の間、東京国立博物館特別 1 室において「特集陳列 断簡一掛軸になった絵巻一」を開催し、リーフレットを作成した。また、本研究テーマに関連する論文等を 3 件公表した。			
【実績値】			
絵巻伝来関係資料の抜き出し件数（未データ化含む） 約 1200 件 絵巻模本の調査件数 約 50 件 売立目録の調査件数 約 5500 件 展示への反映 1 件 論文等の成果公開 4 件(①～④)			
【備考】			
①土屋貴裕「歌仙絵がうまれたとき」（「和歌と美術」展図録、島根県立石見美術館、25 年 4 月 20 日） ②土屋貴裕「祖師のおもかげ―「華嚴宗祖師絵伝」元曉絵 試論―」（加須屋誠編『図像解釈学―権力と他者―（仏教美術論集 4）』竹林舎、25 年 4 月 25 日） ③土屋貴裕『断簡一掛軸になった絵巻―』（東京国立博物館特集陳列リーフレット、25 年 7 月 17 日） ④土屋貴裕「失われた絵巻を求めて―絵巻模本の底力―」（「クリーブランド美術館展―名画でたどる日本の美―」展図録、26 年 1 月 15 日）			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-15

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：従来顧みられることのなかった伝来や鑑賞歴といった作品の付属情報から捉える本研究の意義は大きい ため。 独創性：作品の付属情報のみならず、文献資料、売立目録の情報により多角的に研究を推進する本研究の独創性は高 いたため。 発展性：絵巻研究のみならず、仏画、肖像画をはじめとする絵画の研究にも寄与することができるため。 効率性：限られた時間の中で、効率的にデータ収集を行えたため。 継続性：前年度までの計画を引き続き継続して調査研究を進めることができた。次年度もさらなる展開を目指す。 正確性：データに関しては、入力時、入力後の二度確認を行うことで、資料の正確性を期した。						

2. 定量的評価

観点	関係資料の 抜き出し件数	絵巻模本の 調査件数	売立目録の 調査件数	展示への反映	論文等の 成果公開	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 関係資料の抜き出し：当初の計画よりも、多くの件数を実施することができた。 絵巻模本の調査：当初の計画よりも、多くの件数を実施することができた。 売立目録の調査：当初の計画よりも、多くの件数を実施することができた。 展示への反映：一般にも開かれた研究成果の公開を行うことができた。 論文等の成果公開：本研究にかかわる論文を、当初の計画よりも多く公表することができた。						

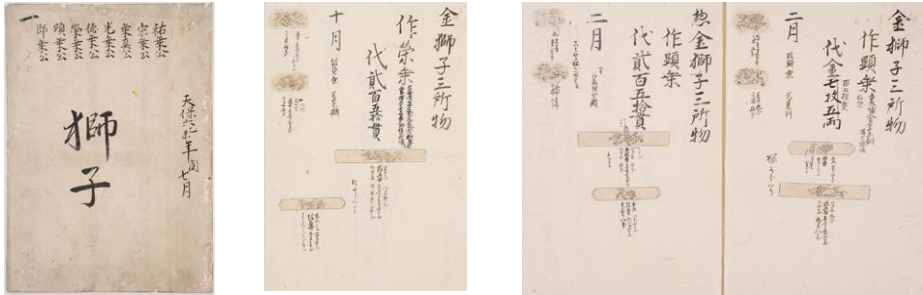
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	先年度に引き続き本年度も、文献資料記載絵巻関係資料の抜き出しとデータ化、絵巻模本の調査、 売立目録の調査という、本研究推進にあたっての基礎作業を着実に進めることができた。あわせて、 成果公開を展覧会という形で一般向けに行なうこともでき、論文等も多く公表することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究は絵巻の研究を作品のみならず、その付帯情報から総合的にとらえるべく進めてきたが、研 究開始当初の計画に沿ったデータ収集を行うことができた。また、絵巻模本の調査もリストはおおむ ね整理することができた。最終年度である次年度も、リストと作品との照合、撮影をさらに進め、現 在構築中のデータベースでの公開や、総合的な成果公開を推進する。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	16) 刀装具一派後藤家の鑑定 極帳（鑑定控）の整理に基づく鑑定の様相と価値付けの考察(科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金) (5) - ①)		
【事業概要】 本研究は、東京藝術大学附属図書館が所蔵する後藤家文書の調査などによって、近世最大の刀装飾具一派であった後藤家の鑑定活動と、同家の作品の価値付けの様相を具体的に捉えるものである。後藤家では刀装具制作とともに、祖先の作品の鑑定も行っており、その結果は後藤家文書のうち「極帳」という鑑定控に記録されていた。本研究では、極帳を含む後藤家文書の撮影を行い、鑑定された作品のリストを作成し、現存作品との照合を可能な限り進める。そして、その作業から鑑定基準などの鑑定の様相を考察し、近世における工芸品の価値付けの実際を考察する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課保存修復室研究員 酒井元樹
【スタッフ】			
【主な成果】 本年度は前年度に引き続き、後藤家文書の撮影を行った。また、翻刻作業を継続し、極帳の理解を深めた。			
【年度実績概要】 ・後藤家文書の撮影 後藤家文書 27 冊について撮影を行った。 ・後藤家文書の翻刻とその理解 極帳の部分的な翻刻作業を継続して行い、専門用語の検討など史料内容の理解を進めた。 翻刻を進めつつ、同家の鑑定行為の開始時期やその着眼点、さらに鑑定依頼者の身分など注意して検討を行った。			
 平成 25 年度撮影 後藤家文書極帳（獅子 天保 6 年（1835）～安政 2 年（1855））			
【実績値】 データ収集件数 撮影文書数 27 冊 撮影カット数 1,252 カット			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：前年度に引き続き後藤家文書の撮影を行ったため。 独創性：専門用語の理解など、現在使用されていない用語について理解を深められたため。 発展性：鑑定依頼者の身分の傾向などが明らかになりつつあり、本文書が歴史学に広く資することができる史料と改めて確認できたため。 効率性：極帳を計画通り 1,200 カット撮影できたため。 継続性：継続的に翻刻作業ができたため。 正確性：今年度撮影された画像は、前年度撮影されたそれと同一条件で撮影され、適切な色彩補正が行われ、また、ナンバリングがなされたなど管理のための処置もなされたため。						

2. 定量的評価

観点	データ収集件数					
判定	A					
判定理由 データ収集件数：計画通り約 1,200 カットの史料撮影を行ったため。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	計画通りに史料の撮影を行い、その内容について検討を行い、極帳について理解が深められたため。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	史料の撮影は計画通りに遂行し、その検討もある程度できたため。次年度は、史料検討を継続して行い、できる限り公開性のある成果に結びつけたい。

業務実績書

中期計画の項目	4) 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	17) 近現代における古日本染織の移動とコレクション形成に関する基礎的研究（科学研究費補助金）（(5)－①）		
【事業概要】 本研究は、近現代に形成された古日本染織コレクションがいつ、どのような形態のものが、どのような経路で、どのような形状の変化を伴いながら移動し、コレクションとして集積されたのかを調査することによって、染織史研究の基盤となる古日本染織コレクションの形成過程を明らかにし、古日本染織が近現代に形成された美術史の中でどのように価値付けられたのかを明らかにする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課工芸室主任研究員 小山弓弦葉
【スタッフ】			
【主な成果】 本年度は、伝統的な日本染織の技法や制作工程などを調査し、本研究における調査研究のための資料を収集した。また、ニューヨーク・メトロポリタン美術館で開催された東洋染織の展覧会、ブルックリン美術館に所蔵される東洋染織コレクション、フランス・パリ個人宅の東洋染織コレクション、リヨン染織美術館に所蔵される日本染織コレクションを調査した。本年度は特に、大正期、昭和初期にかけて国外で蒐集された古日本染織コレクションのデータを集積し、その傾向等の分析を行った。			
【年度実績概要】 ・25 年 7 月には、京都の友禅染作家及び伝統織物作家、和刺繍作家、沖縄の伝統織物作家、紅型染作家の工房を訪ね、日本の伝統的な染織技法とその工程について調査し、古日本染織の特色に関する研究資料を収集した。 ・25 年 8 月には、金沢の加賀友禅作家及び仙台の伝統織物作家の工房を訪ね、日本の伝統的な染織技法とその工程について調査し、古日本染織の特色に関する研究資料を収集した。 ・25 年 9 月には、根津美術館に所蔵される東洋染織コレクションの一部を調査し、大正期から昭和初期に根津嘉一郎が蒐集したと考えられる古日本染織について調査・研究を行い、そのデータを集積した。 ・25 年 12 月 29 日から 26 年 1 月 3 日にかけて、ニューヨークで調査を行った。メトロポリタン美術館で開催された東洋染織（古日本染織を含む）の展覧会「Interwoven Globe; The worldwide Textile Trade, 1500-1800」を見学し、染織のコレクションと移動に関する最新の研究成果を調査した。また、ブルックリン美術館に所蔵される東洋染織コレクションの一部（古日本染織を含む）を調査し、その結果、主要な古日本染織コレクションが戦前に海外で活躍した日本の古美術商・山中商会から入手したものであることが判明した。 ・26 年 2 月 2 日から 9 日にかけて、フランスで調査を行った。パリ・個人宅で所蔵される東洋染織コレクションの中から古日本染織コレクションの一部を調査した。その中に、日本の古美術商・野村正治郎が蒐集した古日本染織が 1 点含まれていた。また、リヨン染織美術館に所蔵される日本染織コレクションの一部を調査し、当館に所蔵される寄贈コレクションと同じコレクターであるアルセーヌ・アンリー氏が蒐集した古日本染織コレクションの内容について詳細に調査を行った。 ・以上の調査で得た写真及び調査内容はファイルメーカーに画像と連動させて入力し、今後の研究の基盤となるデータとした。			
 リヨン染織美術館での調査風景			
【実績値】 データ集積件数 206 件 内訳 日本の伝統染織技術に関する研究資料データ 9 件 根津美術館所蔵古日本染織コレクションの調査データ 3 件 メトロポリタン美術館展覧会出品作品に関する調査データ 121 件 ブルックリン美術館所蔵古日本染織コレクションの調査データ 12 件 パリ・個人宅所蔵古日本染織コレクションの調査データ 5 件 リヨン染織美術館所蔵古日本染織コレクションの調査データ 56 件			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：内外のコレクションがほぼ、博物館等公共施設で管理されることとなり、調査しやすい時期である。 独創性：内外における網羅的な古日本染織コレクションの調査は本調査が初の試みである。 発展性：調査をすすめる過程で、未知の古日本染織コレクションに関する情報が集積可能となった。 効率性：1～2箇所を集中的に調査するため、それぞれのコレクションについて網羅的にデータを集積できる。 継続性：新たなコレクション情報をもとに、引き続き調査課題が生まれ、継続的な調査がのぞまれる。 正確性：実地に赴いての現物調査なので、自分で作品を見て、必要な調査データを確認できる。						

2. 定量的評価

観点	データ集積件数					
判定	A					
判定理由 データ集積件数：国内外における古日本染織コレクション研究に必要な正確性の高い調査データを網羅的に集積した。						

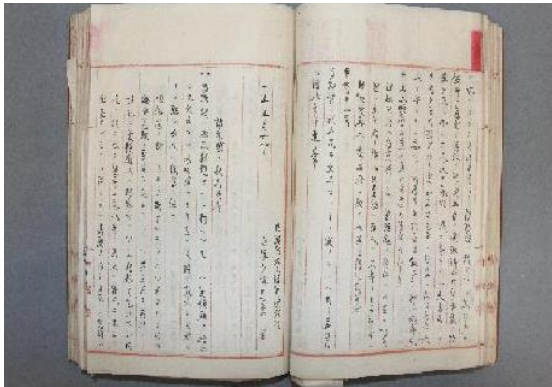
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本年度は、データ集積件数は昨年度よりも少なかったが、古日本染織研究者によって調査研究が全くなされていなかった海外博物館施設の古日本染織コレクションに着手することができた。その結果、想定外に多くの古日本染織コレクションが欧米の博物館施設に所蔵されているという情報や、そのコレクションの蒐集履歴や時期に関する特色なども明らかとなり、新たな研究課題も生まれた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究事業によって、本年度は、国内の古日本染織コレクションについては、実業家・根津嘉一郎によるコレクションの調査が進められた。また、海外に流出し、蒐集されることになった古日本染織コレクションの中で、未調査の古日本染織コレクションのうち、ブルックリン美術館及びリヨン染織美術館の調査が実現したほか、事前調査の際に得た情報以外の古日本染織コレクションも存在が多数あることが把握できた。次年度以降は、本研究費によって得られた情報を元にさらに調査の幅を広げ、次年度以降の研究課題へと発展させていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	18) 寄贈品に見る草創期の博物館におけるコレクション形成と美術品の移動(学術研究助成基金助成金)((5)-①)		
【事業概要】 本研究は、博物館における寄贈品と寄贈者に関する情報から明治初期の美術品の移動について明らかにすることを目的とする。東京国立博物館の館史資料から寄贈品・寄贈者に関する情報を抽出し、データベースを作成する。その上で寄贈者についての調査を行い、研究課題の考察、データの活用方法の検討を行う。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課登録室アソシエイトフェロー 三輪紫都香
【スタッフ】			
【主な成果】 東京国立博物館の収蔵品のうち、寄贈品、もしくは寄贈品の可能性があるものについて抽出し、エクセルデータを整理した。館史資料の調査により、寄贈に関する情報が収集された。 また、寄贈者情報の整理により、研究対象としている博物館創設から明治19年にかけての寄贈者のうち昨年度調査にて判明していた292名の生没年・職業等の判明事項の更新と、今年度新たに判明した713名の生没年・職業等の事項をすべてではないが判明させることができた。			
【年度実績概要】			
(1) 館史資料の精査 東京国立博物館創設から明治19年に至るまでの寄贈品に関わるデータを、電子化された収蔵品情報である「新列品管理簿」から抽出し、対象収蔵品について過去の台帳である「美術品台帳」、「列品記載簿」を参照して誤記訂正や未記録の部分の調査を行った。また、「列品録」に記された寄贈品に関する項目を調査した。必要に応じて該当箇所の撮影も行った。 さらに、寄贈の仕組みについて「例規録」「東京帝室博物館例規類纂」を用いて寄贈品の受け入れから登録・管理に至る手続き等についての流れをまとめた。			
(2) 館外に収蔵される館史資料の精査 国立国会図書館に収蔵される明治39年～41年に編纂された「東京帝室博物館列品目録」、明治13～15年に編纂された「博物館列品目録」から、各分野の収蔵品のうち、寄贈に関する情報を読み取り、データベースへの反映を行った。			
(3) 寄贈者に関する調査 前項の資料の調査に並行して寄贈者の基本データを収集する作業を行った。前項で東京国立博物館への寄贈者と寄贈品のデータをもとに寄贈者ごとに寄贈品をまとめ、氏名・住所・寄贈年から人物事典の検索、地方史の書籍や東京国立博物館の職員録を用いての検索を行った。その他寄贈者に関係する文献を検索した。			
			
館史 585『例規録 明治10・11年』より 「第26号 博物館献品及出品ノ件」			
【実績値】 人物データベース新規作成件数 713件 (参考値) 調査日数 10日、作業補助員依頼 53日			
【備考】 ①館史研究会にて「博物館草創期の寄贈について」報告(平成25年12月26日) ②論文「寄贈品に見る草創期の博物館におけるコレクション形成」を東京国立博物館研究誌『MUSEUM』へ投稿(平成26年5月以降)予定)			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	C	A	B
判定理由 適時性：本研究によって得られたデータベースはこれまでに認識されてこなかった寄贈者に関する情報を多分に含んでおり、今後の研究によって新たな発見を期待できるデータと考えられるため。 独創性：寄贈品・寄贈者というまとまりで収蔵品を捉えることにより、現状では無名の人物についても調査により詳細が判明する事例がみられるなど、独創性による成果が得られていると考えられる。 発展性：館史に関する資料を検索する中で、現在は収蔵品から除外されているものの情報も何件か発見することができ、現在の収蔵品という枠を超えて博物館への寄贈者を明らかにできた。 効率性：作業補助スタッフを依頼し、作業を進めているところであるが、昨年度の遅れを消化しきれていない状況であり、時間的投資が不足しているため。 継続性：継続してデータ整理、調査を行っており、基本的な資料の検索や修正箇所の抽出が行われている。 正確性：予定していたデータの反映は正確に行われているが予想より調査対象となる人物が多く、より多くの文献にあたる余地が残されているため。						

2. 定量的評価

観点	人物データベース 新規作成件数					
判定	B					
判定理由 人物データベース新規作成件数：予測していた寄贈者に関するデータは順調に収集できているが、予想より多くの寄贈者が明らかになっており、各個人についてより詳細な調査により情報を更新する必要がある。						

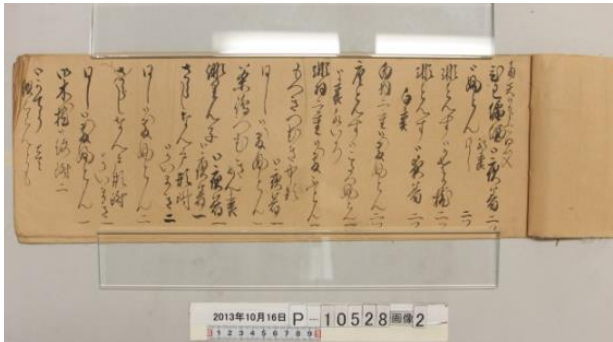
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	作業補助スタッフを依頼し、継続して調査・データ整理を行っているが、昨年度の代表者の産休・保育時間取得により当初の計画と比較してやや遅れがみられる。また、予想よりも該当する寄贈者が多く明らかになったため、個々人の詳細な調査が行き届いていないと感じている。今年度で計画していた期間は終了するが、今後も継続してデータの充実に努めたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	作業補助スタッフを依頼し、継続して調査・データ整理を行ってきたが、昨年度及び今年度の代表者の産休・保育時間取得により当初の計画と比較して若干の遅れがみられる。また、予想よりも該当する寄贈者が多く明らかになったため、個々人の詳細な調査が行き届いていないと感じている。今年度で計画していた期間は終了するが、今後も継続してデータの充実に努めたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	19) 武家女性の衣生活に関する基礎的研究(学術研究助成基金助成金)((5)－①)
【事業概要】 明治時代以降の社会変動の中で、旧大名家の多くは財産を手放し、各家に代々伝えられてきた什物類や作成されてきた文書類などは、現在、それぞれ別の機関に所蔵されることとなった。本研究は、江戸時代の大名家文書の染織品に関する記録と実物染織品とを相互に検証し、武家女性の生活の中で、衣服の用いられてきた時・場所・人物・目的などを明らかにする。特に武家の染織品研究の土台となる、染織品に関する大名家文書のデータベースの作成を重要課題とする。	
【担当部課】	学芸研究部
【プロジェクト責任者】	列品管理課登録室アソシエイトフェロー 佐々木佳美
【スタッフ】 【主な成果】 本年度は、昨年度来進めてきた大名家文書のデータベースの作成を引き続き行うとともに、大名家文書の収集・翻刻を行った。また武家伝来の染織品の実物調査を行い、最終年度の史料と実物資料との分析・考察に備えた。さらに関連資料として公家伝来の染織品関連文書の調査・収集を行った。	
【年度実績概要】 ・染織品に関する記録を持つ大名家文書のデータベースの作成 昨年度までに基礎的な情報を整理・入力した、全国に収蔵される大名家文書のうち史料の伝存状況が良好な165件について、各機関の刊行する資料目録を用いて、文書史料の中から染織品に関する記録を抽出・入力し、データの集積をさらに進めた。 ・染織品に関する記録を持つ大名家文書の資料収集と解読 東京・国文学研究資料館、東京・明治大学博物館、福井県立図書館、熊本大学寄託永青文庫所蔵の収蔵する大名家文書の調査を行った。調査には、デジタルカメラによる記録撮影を行い、資料収集を行った。また収集した文書の内容は翻刻を行い、データの入力を進めた。 ・武家伝来の実物染織品の調査 福井市立郷土歴史博物館、リオン織物装飾芸術博物館において、大名家伝来の小袖等服飾品の調査を行い、デジタルカメラによる記録撮影を行った。 ・大名家伝来染織品に関する周辺資料の収集 東京国立博物館所蔵の正親町家伝来（公家）の染織品関連文書の調査、撮影を行った。収集した文書の内容は翻刻を行い、データの入力を進めた。	
 打掛 福井市立郷土歴史博物館蔵  『順姫様御婚礼之節御召物覚』東京国立博物館蔵	
【実績値】 ・大名家文書データベース入力・整理 : 165 件 ・資料収集（撮影） : 60 件 - 内訳・・・大名家文書資料収集（撮影）：35 件（1105 カット） - 武家伝来染織品調査（撮影）：14 件（278 カット） - 武家伝来染織品周辺関連資料（撮影）：11 件（216 カット）	
【備考】	

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-19

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	B	A	A	A	B
判定理由 適時性：武家染織に関する基礎的な資料として大名家文書のデータ整備は必要性が高いため。 独創性：文字資料と実物資料とを照合するという意味で、研究方法としては最も基本的な手法であるため。 発展性：大名家文書のデータベースは武家染織の研究を行う上で、様々な利用・展開が可能であるため。 効率性：限られた時間の中で、効率的にデータ収集を行った。 継続性：本研究は3年計画で進めており、最終年度も継続的に研究を進めるための整備を行った。 正確性：大名家文書のデータベースは、入手可能な染織品に関する記録をほぼ網羅している。						

2. 定量的評価

観点	大名家文書 データベース 入力・整理	資料収集 (撮影)				
判定	A	A				
判定理由 大名家文書データベース入力・整理： 対象資料について網羅的な情報収集が行えた。また集積データの精度を上げることができたため。 資料収集（撮影）：対象資料について、質・量ともに十分な収集ができたため。						

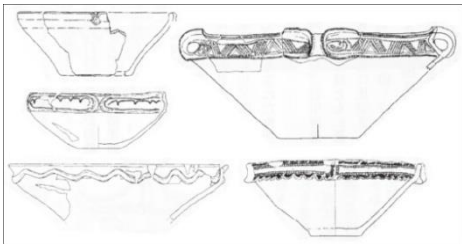
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本年度は、本研究の基盤となる染織品の記録を持つ大名家文書のデータベースについて、ほぼその入力を終えた。また、データ整理と入力を継続的に行うことで、集積データの精度を上げることができた。これにより、大名家文書の効率的な資料収集が実現できた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	本年度は、染織品の記録を持つ大名家文書のデータベースについて、ほぼ入力作業を終えることができ、本研究の最重要課題がほぼ達成された。これにより、大名家文書の効率的な資料収集を行うこともできた。当初、本研究は24～26年度の3ヵ年の予定で、最終年度となる26年度は、すでに収集した大名家文書の内容分析を進めるとともに、文書資料と対応する実物染織品の調査を重点的に行い、文字資料と実物資料との相互的な考察を進める予定であったが、研究員の異動により、25年度末にて終了となった。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	20) 縄文時代における浅鉢形土器の研究 (学術研究助成基金助成金) ((5)-①)		
【事業概要】 日本先史時代における社会構造の研究をテーマとする。縄文時代中期 (BC3000～2000 年) の東日本域の浅鉢形土器の型式学的検討と具体的な機能の検討に基づく、縄文社会における地域集団間の交渉史の解明を目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課考古室研究員 井出浩正
【スタッフ】			
【主な成果】 本年度は文献の悉皆調査 (発掘調査報告書等) による、遺跡出土の浅鉢のデータベース化と資料調査 (実見・計測・観察など) を実施した。			
【年度実績概要】 (1) 遺跡出土浅鉢のデータベース化 ・ 文献 (発掘調査報告書等) の悉皆調査と文献複写作業 ・ 対象地域の発掘調査報告事例の精査及び出土事例の集積・分析 (対象地域: <u>東京都・神奈川県・千葉県・埼玉県・群馬県・栃木県・茨城県・長野県・新潟県・福島県</u>) ※下線部は今年度データベース化が概ね完了した地域			
			
		データベース化資料の一例	
(2) 浅鉢の実見・計測・観察: 資料の実見と肉眼観察 ・ 神奈川県平塚市立博物館 (25 年 8 月実施) ・ 群馬県立歴史博物館 (25 年 9 月実施) ・ 茨城県立歴史館 (26 年 1 月実施) ・ 長野県茅野市尖石縄文考古館 (26 年 2 月実施)			
		資料調査風景 (群馬県立歴史博物館)	
【実績値】 調査…文献調査回数: 10 回 資料調査回数: 4 回 成果発表: 0 件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-20

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	A	A	B	B	A
判定理由 適時性：すでに資料の蓄積と解析手法があり、新たな研究視点を導入する時期にふさわしいため。 独創性：研究対象として注目されていない資料群のデータベース化が進んでいるため 発展性：データベース化によって当該資料の定量的・総括的な研究展開が見込めるため。 効率性：限られた時間枠の中で、網羅的な対象地域のデータベース化を実施しているため。 継続性：データベース化が着実に進んでいるため。 正確性：悉皆的調査（データベース化）と分析（型式学的検討）による確実性が高い手法であるため。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	資料調査	成果発表			
判定	B	B	F			
判定理由 調査回数：ほぼ計画通りに調査を実施できたため。 資料調査：ほぼ研究計画通りだが、一部の地域で新出資料のデータベース化が未了。 成果発表：研究計画作成以降の新出資料の増加に伴う全体的な成果発表までに至らなかったため。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	ほぼ計画通りだが、研究計画作成以降の行政発掘調査等による新出資料の増加により、それらのデータベース化が一部未了となり、全体的な成果発表までには至らなかった。そのため一年間の研究期間の延長を申請し、次年度にそれらのデータベース化と分析を継続し、総括的な成果発表を行う予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	ニカ年の研究期間のニカ年目に当たる本年度は、当初の研究計画については概ねスケジュール通りに作業を進めることができた。研究計画書作成以降に発生した新発見の資料については、増加分のデータベース化を含めて継続的に実施し、次年度中にそれらを含めた成果発表を行いたい。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-21

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	21) 創立 150 周年へ向けた館史編纂のための基礎的な資料整理と調査((5)-①)		
【事業概要】 平成 34 年度の東京国立博物館創立 150 年へ向けて、『東京国立博物館 150 年史』を編纂するために、業務文書や刊行物等を収集、整理し、今後の編纂事業の基礎資料として内容の調査を行う。平成 25 年度は館内から収集した文書類に加え、過去に収集し整理を必要とする文書類を編年、分類し利用の便宜に供するための内容目録を作成する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 田良島 哲
【スタッフ】 鷲塚麻季（調査研究課主任研究員）、高橋裕次（学芸企画部博物館情報課長）、保坂裕興（客員研究員・学習院大学教授）			
【主な成果】 ・館内各所から収集した、館史関係の文書記録・刊行物類を整理して目録を作成し、今後の館史編纂の利用に供することができるようにした。 ・創立 100 周年時に収集され、一部の情報が付与されていた文書記録類について、詳細な目録を作成した。			
【年度実績概要】 ・アルバイト 1 名を採用し、定期的に資料整理作業を行った。 ・整理・調査するべき内容については客員研究員と協議して、適切な項目を設定した。 ・平成 24 年度に収集整理した資料について、文書タイトル等の項目の目録への入力を継続した。 ・創立 100 周年時に収集された資料の一部について、必要な情報を補充し、その他の資料と同様な形式の目録を作成した。 ・整理した資料のうち特徴的なものについて、館内職員を対象に説明会を開催した。			
			
調査・整理を終え、中性紙の封筒に収納した館史資料			
【実績値】 調査日数：78 日			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-21

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：創立 150 周年へ向けて、いち早く着手している。 独創性：当館は日本最古・最大級の博物館で、他にはない資料を対象としているため。 発展性：調査成果は今後の館史編纂に十分に反映されるため。 効率性：必要最小限の経費で実施しているため。 継続性：調査内容を標準化し、今後の継続的な調査に備えているため。 正確性：アーカイブズ学の専門家の指導を仰ぎ、方法・内容の正当性と正確さを確保しているため。						

2. 定量的評価

観点	調査日数					
判定	A					
判定理由 調査日数：執行可能な予算及び業務量の範囲で、最大の日数の調査を実施した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	平成 24 年度の本研究開始時に引き継いだ資料について、今後の編纂に必要な情報の調査を実施するとともに、既存の資料について追加的な情報の整備を行った。平成 26 年度以降検討する編纂計画に反映する。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画 I-4-(1)-②「我が国の歴史、文化の究明及び理解の促進等を図るため、歴史資料・書跡資料等に関する調査・研究を実施する」を反映した事業として適切に実施している。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	22) 東日本大震災による被災文化財の保存修復と文化財の防災に関する研究((5)－①)		
【事業概要】 2011年3月11日に発生した東日本大震災によって津波被害に遭った文化財の保存修復についての保存環境、安定化処理、本格修理に関する調査研究を行い、被災資料の保全を図るとともに今後想定される自然災害に対する有効な手立てを開発することを目的として実施する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課長 神庭信幸
【スタッフ】 和田浩(保存修復課環境保存室長)、荒木臣紀(保存修復課環境保存室主任研究員)、土屋裕子(保存修復課保存修復室長)			
【主な成果】 環境に関しては①環境の計測、②計測結果の評価、③評価に基づく改善による環境改善の方策を確立した。安定化処理に関しては被災した全ての資料は脱塩、殺菌、除菌のための脱塩処理が必要であることが判明した。本格修理に関しては修理後の状態の推移を観察できる方法論が必要であることが明確になった。			
【25年度実績概要】 環境：25年度は、前年度に策定した計画に基づき、引き続き環境保全活動を実施するとともに、活動の恒常化を図ることが主な内容である。①環境の計測、②計測結果の評価、③評価に基づく改善、という順で実践し、①→②→③を何度も繰り返しながら、徐々に保管環境の安定化を目指した。連続した温湿度記録によって各部屋の特性が明らかになりつつある。しかしながら、現実的な特徴を理解するのは連続データを数年にわたって採取する必要がある、今後の調査記録が肝心である。また、生物生息調査、空気成分調査についても次年度以降定期的に行うことによって、全体的な傾向を把握することが可能になる。今年度はそのための実施計画と配置計画と位置付けている。			
			
生物生息調査のためのトラップの準備			
安定化処理：染織資料は軽度の処置で博物館の展示にふさわしい状態に安定化させられる染織関連品が7割を占めることが今回の調査で明らかになった。次年度に追加の調査を実施して全体の状況を把握したのち、安定化処理及び本格修理に関する考え方、処理を急ぐ資料の優先順位、具体的な処置内容の仕様を策定する計画である。カツラ資料は、全てのカツラについて状態調査を完了した。基本的に、全ての作品を外部専門家によって修理する必要がある。次年度に、安定化処理及び本格修理に関する考え方、処理を急ぐ資料の優先順位、具体的な処置内容の仕様を策定する計画である。漆器資料は、次年度に追加の調査を実施して全体の状況を把握したのち、安定化処理及び本格修理に関する考え方、処理を急ぐ資料の優先順位、具体的な処置内容の仕様を策定する計画である。			
本格修理：今回の被災内容から考えて、本格的な処置を行った後の経過観察は、資料の保存状況を確認する上で極めて重要な点である。したがって、油彩画資料のキャンバス裏面は常に観察が可能な状態であることが相応しく、そのためルースライニングや裏打ちなどといったキャンバス裏面を完全に覆う処置は可能な限り避ける方針で臨んでいる。また、大型資料の修理には、そのサイズに応じた大型の修理施設と設備が必要となる。資料の移動などの点も考え合わせると、可能な限り県内の施設で修理を実施することが望ましく、資料にとっても安全であると考ええる。			
【実績値】 研究会発表件数 4件 文化財保存修復学会第35回大会、仙台(25年7月20日)「陸前高田市立博物館における一時保管環境の改善過程」 文化財保存修復学会第35回大会、仙台(25年7月20日)「被災文化財等救援活動における資料保存処理トリアージの重要性」 文化財保存修復学会第35回大会、仙台(25年7月20日)「被災文化財等救援活動における保存修理―東京国立博物館修理室での油彩画等保存修理活動―」 2013 東アジア文化遺産保存国際シンポジウム、韓国慶州(25年9月5、6日)「津波で被災した資料の一時保管環境の改善過程」			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-22

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：自然災害による文化財への影響が懸念される今日、その具体的な解決策を探る研究として効果が高いため。 独創性：保存環境、安定化処理、本格修理の保存プロセスを構築し、具体的な方法論や材料を提示できたことは優れた成果であるため。 発展性：今後の同様な自然災害に対して成果の活用が大いに期待できるため。 効率性：臨床保存分野において調査診断、予防、修理の専門家がそれぞれの役割を明確に発揮して行った研究であるため。 正確性：専門家がそれぞれの立場から研究に参画し、的確なデータを得ることができた。						

2. 定量的評価

観点	研究会発表 件数					
判定	A					
判定理由 研究会発表件数：予定通り、成果の波及効果が期待される学術団体において公表することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	いずれの調査研究も、被災現地における実物資料と現実の環境に対してなされたものであり、同様な問題を抱える他機関あるいは他地域において極めて有用な基礎的成果を得ることができたと考える。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施されており、当該年度計画を100%達成。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	23) 博物館における国際的な資料流通を素材とした明治期の文化交流史に関する基礎的研究 (科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金) ((5)-①)		
【事業概要】 本研究は、幕末期における西欧の博物館との接触から、維新後における博物館の創設を経て、帝室博物館の成立に至る明治期を中心とした博物館史を、世界史的な視野で再構成するための基礎的な資料調査と研究を、特に所蔵品の流通に着目して行おうとするものである。 対象地域としてドイツ、イギリス、オーストラリアを選び、三カ年にわたって当時の文書や交換・寄贈された文化財を調査する。 あわせて、館史資料の撮影を進め、館史資料の公開・共有を目指す。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課平常展調整室長 白井克也
【スタッフ】 伊藤嘉章（学芸研究部長）、田良島哲（学調査研究課長）、鬼頭智美（学芸企画部企画課国際交流室長）、土屋裕子（保存修復課保存修復室長）、遠藤楽子（学芸企画部企画課出版企画室研究員）			
【主な成果】 初年度の研究対象であるドイツに関連して、ベルリンとライプツィヒにおいて文化財の交換先や寄贈元における資料の調査を行った。 また、同館との交流のきっかけである 1873 年ウィーン万国博覧会に関する調査の必要性から、ウィーンにおいて関連文書や関連文化財を調査した。 これらに関連して、研究遂行のための海外諸機関の担当者との協力体制を構築した。 館史資料のデジタル撮影にも着手し、釈読も進めた。			
【年度実績概要】 ・現地調査 ベルリン東洋美術館 日本と交換された文化財の調査 ライプツィヒ民族学博物館 ウィーン万博時及びその当時収蔵された日本の文化財調査 日本との交流にかかわる文書調査 オーストリア国立図書館 ウィーン万博時の「出品撮影アルバム」の調査 オーストリア国立公文書館 ウィーン万博にかかわる明治天皇や佐野常民にかかわる文書などの調査 ウィーン応用美術館 ウィーン万博時にもたらされた日本の文化財調査 ウィーン民族学博物館 ウィーン万博時に収蔵された日本の文化財調査 ウィーン美術史美術館 ウィーン万博時に収蔵された日本の文化財調査 ・館史資料の調査 ウィーン万国博覧会以後の経過などに関する釈読 ・館史資料の撮影 『列品録』を中心として、館史資料の撮影に着手し、次年度以降の撮影の方向性を定める ・研究会の開催 研究代表者・研究分担者による研究成果の共有のため勉強会を開催			
			
			エロスとプシュケ (G-1308) ライプツィヒ民族学博物館寄贈
【実績値】 現地調査回数 2 回 デジタル撮影枚数 約 18,000 コマ			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-23

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	S	A	A	A	A
判定理由 適時性：日本の国際化を近代にさかのぼって跡付ける内容であり、時宜にかなっている。 独創性：博物館資料の国際的な交流を時代背景とのかかわりから再認識しようとするものであり、新たな研究方法といえる。 発展性：館史資料の精密なカラー画像の公開を目指しており、今後の研究に貢献するところが大きい。 効率性：東京国立博物館における館史資料の整理の成果のほか、他機関における研究成果を利用している。 継続性：研究代表者・研究分担者のこれまでの研究成果を踏まえ、発展させたものである。 正確性：館史資料の撮影を高い精度と高率で進めたほか、研究成果の一部を論文として公表した。						

2. 定量的評価

観点	現地調査回数	デジタル撮影枚数				
判定	A	A				
判定理由 現地調査回数：現地調査を十分に行うことができた。 デジタル撮影枚数：目標を上回るペースで撮影を行うことができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本年度予定していた現地調査、館史資料のデジタル撮影、館史資料の釈読などを滞りなく終えることができたうえ、国内外の関連分野の研究者との意見交換などにより、今後の研究の展望をひらくことができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年度は予定していた調査・撮影を滞りなく終えるとともに、明治初年の博物館資料の国際交流においてウィーン万国博覧会が果たした意義を再認識でき、かつウィーン万博にかかわる調査をも並行して実施できたので、予定していた調査内容についてより深く理解することが可能になり、今後の調査を円滑に進めることができるようになった。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	24) 中世から近代における日本絵画の受容環境の復元的考察（科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金）（(5)－①）		
【事業概要】 中世から近代までの日本絵画を照らす照明の状況を大きな指標ととらえ、まず＜現代の展示空間における光＞が、どのような状況にあるのかを把握する。そして制作された当時、絵画がどのように受容されていたのかを考察しながら、＜歴史的な光＞を先進的照明機器によって復元することで、絵画の展示の手法を拡張しようとするものである。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課特別展室長 松嶋雅人
【スタッフ】 和田浩（保存修復課環境保存室長）、矢野賀一（学芸企画部企画課デザイン室主任研究員）、土屋貴裕（列品管理課平常展調整室員）			
【主な成果】 東京国立博物館展示室における既存照明具を用いた主に照明環境に関する展示環境の現状を把握するため、各展示室の諸データを計測、収集した。合わせて現状における種々の先進照明器具の仕様を精査し、照明実験を通して文化財への影響等を調査した。それらの実験、調査結果をもとに、絵画の制作当時の状況を復元的に考慮しながら、有機EL照明を用いた展示を実施した。			
【年度実績概要】 (1) 東京国立博物館展示室において、輝度カメラ、サーモグラフィーを用いて、既存照明器具で構成される展示照明環境の現状分析を行った。 (2) 東京国立博物館敷地内、奈良・依水園等の屋外光の計測、調査を行い、展示室内との比較資料となる自然光のデータ収集を行った。 (3) 研究協力社のもとの、LED照明、有機EL照明器具の先進装置を調査、実験を行った。 (4) 調査、実験成果をもとに有機EL照明を用いた展示照明によって実際の文化財展示に反映させた。			
 屏風作品への有機EL照明の効果		 油画作品への有機EL照明の効果	
【実績値】 (1) 東京国立博物館展示室の照明環境の測定・・・6回 (2) 館外施設（屋外、寺院）の計測調査・・・2回 (3) 先進照明器具の調査、実験等・・・3回 (4) 展示への反映・・・2回（①～②）			
【備考】 ①「クリーブランド美術館展―名画でたどる日本の美」（26年1月15日～2月23日 東京国立博物館） ②特別展「支倉常長像と南蛮美術―400年前の日欧交流―」（26年2月11日～3月23日 東京国立博物館）			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	正確性		
判定	S	S	A	A		
判定理由 適時性：各展示施設における既存の照明器具から先進器具への転換が数多くなされている現状において、本研究は極めて緊急性、公共性が高く、また数多くの計測資料は国内のみならず、国外施設との比較材料として極めて有効である。 独創性：美術史、展示デザイン、保存科学各分野を統合した本研究は、これまでに他に類をみない。 発展性：本研究の実測データ、その効果の多様性は、今後の文化財展示に様々な示唆、影響を与える。 正確性：展示室の既存照明環境の計測、照明実験等による計測数値、並びにデータを種々、多数収集することで、正確性を期すことができ、実証的な展示環境の把握が可能となった。						

2. 定量的評価

観点	展示室の照明環境の測定	館外施設の計測調査	先進照明器具の調査、実験等	展示への反映		
判定	A	A	A	A		
判定理由 展示室の照明環境の測定：絵画作品の形状、素材について各種の測定が実施できた。 館外施設の計測調査：展示環境との比較において、極めて有効な計測値を得ることができた。 先進照明器具の調査、実験等：既存器具との比較とともに、その有効性を把握することができた。 展示への反映：調査研究の成果をもとに、実際の展示に先進照明器具を用い、高い展示効果が得られた。						

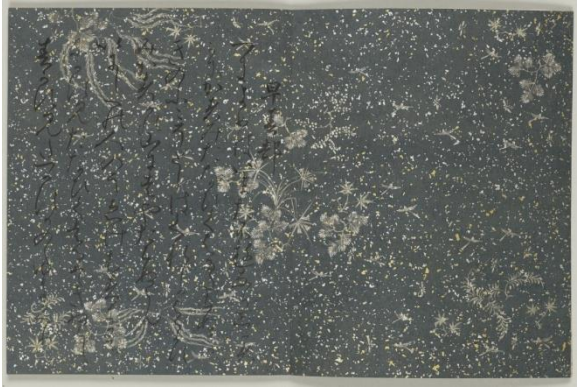
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	今年度は、既存展示環境の現状把握を行い、先進的照明器具を有効に利用し、美術史、展示デザイン、保存科学の各分野を統合した調査研究を行い、各観点における種々の実験、計測を実施できたことで、実証的で、より先進的な展示環境を構築する諸資料を収集することができた。 次年度にはさらに広範囲における展示環境の数値、データを収集し、これまでにない展示環境の提示が実現できるよう理論構築を進めたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	現状における展時室等の展示環境の調査を十全に行うことができ、さらに各種の先進照明器具の検討を実施したことで、展示への反映も可能となった。 次年度以降、さらに諸環境における計測値を多数収集し、文化財の展示環境におけるこれまでにない新たな提言を持つべく実験、調査、検討を続けたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	25) 模写資料における書の受容・鑑賞に関する基礎的研究(学術研究助成基金助成金)((5)－①)		
【事業概要】 本研究は模写資料を調査することによって、書の受容や鑑賞の歴史を明らかにしようとするものである。東京国立博物館の蔵する模写資料の調査を実施し、写真撮影をして、ホームページ上で画像を公開する。また関連作品の調査、関連資料のデータ収集を行なうことから、個別研究も進めていく。東京国立博物館においては、模写資料に関する展示を企画し、模写を通じた鑑賞を提示するとともに、多様な鑑賞のあり方を示す。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課書跡・歴史室アソシエイトフェロー 恵美千鶴子
【スタッフ】 島谷弘幸(副館長)、太田彩(宮内庁三の丸尚蔵館・主任研究官)			
【主な成果】 本年度はまず東京国立博物館が所蔵する模写資料の調査と撮影を実施した。その画像を東京国立博物館の画像情報システムへ登録を行うとともに、前年度撮影して未登録だった「平家納経(模本)」575点の画像登録をした。他館や各地所蔵者への調査も実施し、聞き取り調査や関連データの収集を行うとともに、関連データの入力も行なった。			
【年度実績概要】 - 東京国立博物館所蔵の模写資料の調査研究 東京国立博物館が所蔵する書の模写資料(作品)の調査を行い、高精細デジタル画像による撮影を行った。 - 他館が所蔵する模写資料の調査研究 京都・陽明文庫所蔵分の調査と撮影、広島・厳島神社所蔵の資料閲覧と担当者との情報交換を実施した。 - 模写資料の画像の登録 撮影した画像のうち公開できるものについては、東京国立博物館の画像情報システムに登録した。また、前年度中に撮影済みであった「平家納経(模本)」575点の高精細デジタル画像の登録も行った。これらの画像は、システムの更新によってインターネット上に公開される予定である。 - データ収集と入力 関連する歴史的資料や参考資料のデータを収集し、デジタルデータ化を行った。 - 研究成果の公開 模写資料や書の鑑賞・受容に関する研究論文を発表した。また、来年度は、東京国立博物館の総合文化展において研究成果を公開する展示である特集「国宝再現－田中親美と模写の世界」を開催することが決まった。  「本願寺本三十六人家集 家持集(模本)」			
【実績値】 - 調査件数 64 件 ・ 撮影点数 591 点(東京国立博物館所蔵分)、363 点(他館所蔵分) - 画像登録点数 1,166 点(以前撮影済みで本年度登録のみの画像あり) ・ 関連データ収集点数 2,219 点 - 関連データ入力点数 6920 点 ・ 研究論文発表件数 3 件			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	S	S	A	A	A	A
判定理由 適時性：撮影した画像はいずれインターネットでの公開がされるものであり公共性・公開性が高いといえる。 独創性：模写資料を研究対象として焦点を当てることはこれまでほとんど行われなかった。撮影されることも少なかった資料群を撮影し公開することは独創的であるといえる。 発展性：模写資料によって個別研究も進めるが、資料の画像公開をすることで、各研究分野に新たな研究材料を提示することができた。 効率性：既存の施設やシステムをそのまま利用しているため、効率的に調査研究と撮影、画像登録を進めることができた。 継続性：本研究は責任者がすでに進めていた研究内容であり継続して蓄積することができた。また、基礎的なデータ収集を十分に進めることができた。 正確性：撮影と画像登録、データ収集を速やかに進めることができ、研究論文の発表もできた。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	撮影点数	画像登録点数	関連データ 収集点数	関連データ 入力点数	研究論文 発表件数
判定	A	A	A	A	A	S
判定理由 調査件数：東京国立博物館の所蔵品を中心に十分に調査を行うことができた。 撮影点数：東京国立博物館のみならず他の所蔵者の分も撮影することができた。 画像登録点数：画像公開のための登録を撮影した分はすべて登録することができた。 データ収集点数：歴史的社会的関連資料のデータ収集、他の所蔵者からのデータ収集も実施できた。 データ入力点数：関連資料のデータ入力を十分に行うことができた。 研究論文発表件数：1年に1件を目標値としていたため、目標値を大幅に上回る論文発表ができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	模写資料の撮影と画像登録を着実に行うことができた。また、研究成果を報告する論文を発表することもできた。次年度以降もこの水準を保って研究を遂行していきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本年度は計画通りに研究を進めることができた。次年度は日常の作業の中でさらに効率的に研究計画を進められるようにしたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 有形文化財に関する調査及び研究推進		
プロジェクト名称	26)江戸幕府による自然史科学の萌芽と御用絵師の役割に関する研究(学術研究助成基金助成金) (5)-①)		
【事業概要】 自然観察によって自然の原理や根源を求めていこうとする動向は、我が国においては博物学として江戸時代にすでにその兆しが見られた。江戸幕府による本草学や博物学の興隆は、江戸中期、特に享保年間（1716-36）以降と考えられてきた。しかし本事業では、その萌芽の時期を江戸初期すなわち 17 世紀に求めるべく、狩野探幽筆「草花写生図」及び狩野常信筆「草花魚貝虫類写生図」を調査するものである。これら膨大な写生図を調査することで、江戸初期の幕臣や御用絵師らによって、自然観察や諸産物の集成といった科学的視点が牽引され、その後に享保年間以降の本草学や博物学の興隆が導き出されたことを明らかにしたい。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課貸与特別観覧室 主任研究員 小野真由美
【スタッフ】 松島仁（徳川文化財団 特別研究員）			
【主な成果】 狩野探幽筆「草花写生図」及び狩野常信筆「草花魚貝虫類写生図」の全ての注記（1030 件）をデータ化し、写生図の制作背景を考察した結果、探幽を踏襲した常信によって、幕府主導の写生図制作が行われたことが明らかになりつつある。特に写生図制作に関わった幕臣や藩主、特に水戸藩家臣、そして人見竹洞などの儒学者、金地院などの社寺についてその詳細（32 件）が明確になった。			
【年度実績概要】 ・ 狩野探幽筆「草花写生図」及び狩野常信筆「草花魚貝虫類写生図」の基礎的調査。 上記の作品について全ての画像を撮影し、注記（年紀、地名、人名等）や法量をデータ化した。 ・ 狩野探幽の諸作品にみられる写生図の影響についての調査。 探幽筆「四季花鳥図」四幅（永平寺所蔵）、探幽筆「寿老人・松鶴・竹鶴図」（黒田家伝来・福岡市美術館所蔵）、探幽縮図（京都国立博物館所蔵）を調査し、探幽の写生図と本画との関連を考察した。 ・ 狩野常信の生涯と写生図制作の関連についての調査。 『古画備考』などの画史類によって常信の画業を年譜化し、その画業と写生図との関連を調査した。 ・ 宮廷における写生図制作の調査。 常信と交友のあった近衛家熙や錦小路頼庸の日記を調査し、宮廷における本草学と写生図制作の関連を考察した。			
			
狩野常信筆「草花魚貝虫類写生図」所収「元禄四年(1691)九月十日 人見竹洞より」（東京国立博物館所蔵）			
【実績値】 ・ 研究会回数 3 回（5 月、6 月、7 月 於東京国立博物館） ・ 作品調査回数 3 回（7 月 福井・永平寺、9 月 京都国立博物館、10 月 福岡市美術館） （参考値） ・ 古記録の調査 4 回（5 月・6 月 筑波大学付属図書館、5 月 国立公文書館、6 月 東京大学史料編纂所）			
【備考】 ①小野真由美「近衛家と典薬頭・錦小路頼庸—その日記にみえる絵事について—」『MUSEUM』646、平成 25 年 10 月 ②小野真由美「狩野常信筆「草花魚貝虫類写生図巻」の制作背景—所収写生図の年代順の動向と被写体の提供者について—」『東京国立博物館研究紀要』49、平成 26 年 3 月			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：本年度は狩野常信筆「草花魚貝虫類写生図巻」29巻全ての画像を撮影し、公開することができた。これによって美術史、歴史学、博物学、自然史などの諸分野の研究者による資料の活用が可能となった。 独創性：これまで江戸初期（17世紀）における自然観察の事例は実証されていなかったが、本事業は狩野常信筆「草花魚貝虫類写生図巻」に着目することで、江戸初期における博物学の萌芽の様相や、そこに関わった幕府の状況について新知見を得た。そしてその成果を論文として当館研究紀要にて発表した（【備考】②）。 発展性：狩野常信筆「草花魚貝虫類写生図巻」の画像及び注記の情報は、幕臣や藩主の名が記され、かつ江戸初期における動植物の生態を詳しく知ることのできるものである。それらは美術史のみならず歴史学や博物学などの諸分野に資する内容であり、応用性や多様性のある研究成果となった。 効率性：本事業で撮影した画像データを、当館ウェブサイトの「画像利用」とリンクさせて公開するとともに、博物館の画像データの充実を図ることができた。今後は注記データを画像データとリンクさせるべく、さらなる充実を図る。 継続性：狩野派、特に木挽町狩野派関連の写生図は江戸時代末まで数多く描かれており、現存作品も多い（東京藝術大学等）。本事業は今後関連作品の調査へと発展すべく、データの構築を行っている。本年度の研究対象は江戸時代の写生図のなかで、最も膨大で多彩な内容であり、今後の作品調査の基礎となるものである。 正確性：狩野探幽筆「草花写生図」及び狩野常信筆「草花魚貝虫類写生図巻」全てのデータ化を行ったが、それは悉皆的なもので、先行研究が行ったような部分的な調査ではなく網羅されたものとなっている。そのため正確で客観性のある研究成果が得られたといえる。						

2. 定量的評価

観点	研究会回数	作品調査回数				
判定	A	A				
判定理由 研究会回数：春期に研究会を重ねることができたため、狩野探幽筆「草花写生図」と狩野常信筆「草花魚貝虫類写生図巻」について、責任者とスタッフ間での共通の作品理解が深まり、各自が秋期以降にまとめた研究成果とその発展につながった。 作品調査回数：初年度である本年度は、「四季花鳥図」四幅（永平寺所蔵）など狩野探幽の重要作例を積極的に調査することができた。これによって探幽と常信の写生図制作に対する意識の差が明らかとなり、常信の写生図の制作背景や意図がより明確となった。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	春期から計画的に調査とデータ構築を行い、研究の柱となる狩野探幽筆「草花写生図」及び狩野常信筆「草花魚貝虫類写生図」のデータ化を行うことができた。さらに常信については、その制作背景、すなわち幕府との関連を実証することができた。今後は探幽との関連、常信が同時代や次世代に与えた影響など、多角的な研究へと発展させたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
達成	狩野探幽筆「草花写生図」及び狩野常信筆「草花魚貝虫類写生図」の網羅的調査が計画通りに達成され、更に幕府の儒学者（人見竹洞）、官医（人見泌大）、典薬頭（錦小路頼庸）など関連人物へと新たな研究を進めた（【備考①】）。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-27

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	27) 神像表現における物語性に関する研究（学術研究助成基金助成金）（(5)-①）		
【事業概要】 本研究は、多くの神像は固有の物語（伝承・信仰）を背景に製作されたという視点に立つもので、表情や仕草を読み解き、姿にこめられた意味を探ることを目的にする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸企画部博物館教育課教育講座室長 丸山士郎
【スタッフ】			
【主な成果】 東京国立博物館で開催された「国宝 大神社展」出品作品を中心に、作品調査を実施し、関連する文献資料の収集・分析も行った。			
【年度実績概要】 「国宝 大神社展」（於東京国立博物館）出品の彫刻・絵画作品の調査を実施し、調書・写真資料を作製するとともに、彩色顔料の蛍光X線分析調査を実施した。特に重要な作品についてはカメラマンに委託して高精細デジタル撮影を行った。 神像の信仰・伝承等に関する網羅的な文献調査を2件について実施した。			
			
彩色顔料の蛍光X線分析調査			
【実績値】 調査作品数：彫刻30件、絵画8件 文献調査作品数：2件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-27

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性			
判定	A	A	A			
判定理由 適時性：近年神像彫刻研究への関心が高まっており、調査結果はその推進に寄与することができる。 独創性：神像彫刻の表現を固有の物語（伝承等）から考察する視点はこれまでになく、新たな成果が期待できる。 発展性：未紹介作品の調査を実施できたので、その成果は今後の神像研究に活用できる。						

2. 定量的評価

観点	調査作品数	文献調査 作品数				
判定	A	A				
判定理由 調査作品数：展覧会出品作品25件を含む30件の調査を実施し、予定通りの成果を挙げることができた。 文献調査作品数：近世の地誌類を含めた調査対象作品に関連する広い範囲の文献調査を実施した。						

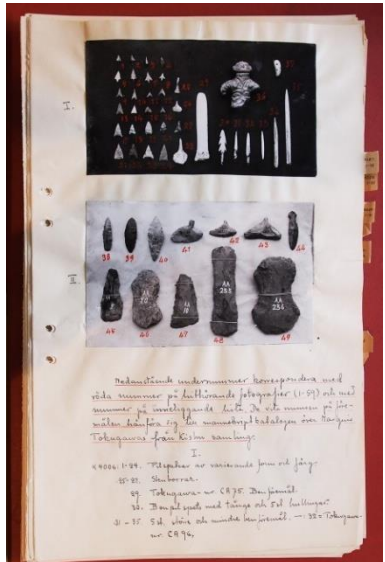
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	予定通りの作品・文献調査を実施することが出来た。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	今年度の研究実施計画どおり展覧会出品作品を中心に、作品調書、写真撮影、蛍光X線分析、文献調査を実施した。来年度は、引き続き同様の調査を実施するとともに、それらの成果を基にした論文を執筆する。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	28) 視覚表現とコレクションの形成に見る縄文土器の美術的受容に関する研究(科学研究費補助金)((5)－①)		
【事業概要】 日本美術における考古遺物の受容の実態については未だ明らかにされていない。しかしながらそこには、考古学と美術のそれぞれの様式観の違いや、日本の前衛芸術への影響を考察する上での重要な問題が含まれている。そこで、本研究では考古遺物及び古美術品を管理する東京国立博物館における研究を軸に、近世から現代までの描かれた遺物や蒐集行為について調査を行い、日本美術における考古遺物の受容過程を明らかにする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課登録室アソシエイトフェロー 鈴木希帆
【スタッフ】			
【主な成果】 東京国立博物館所蔵の資料のほか、根岸家(個人考古遺物収集家・熊谷市)、吉見百穴(比企郡吉見町)、東北歴史博物館、静岡市美術館、ストックホルムの東洋美術館(スウェーデン)で調査及び資料収集を行った。本研究成果は、東京国立博物館での展示(特集陳列「うつす・つくる・のこすー日本近代における考古資料の記録ー」)や茅野市美術館での口頭発表、大学研究紀要での論文発表により一般に公開した。			
【年度実績概要】 ・遺物の蒐集に関する調査 国内では、東京国立博物館(以下本館)所蔵の重要文化財の埴輪の旧蔵者で遺物の蒐集家として著名な根岸家にて、考古遺物や古写真の調査を行い、本館資料との関係性について研究を行った。そのほか東北歴史博物館の古物収集に関する展示を見学した。これらの研究成果の一部は本館での展示により公表した。海外では、ストックホルムの東洋美術館及び東洋美術図書館において、本館所蔵の紀州徳川家旧蔵の縄文土器と関係のある縄文土器の調査を行った(図1)。これにより、昨年度のフランスでの調査で明らかになった、縄文土器への明治期から昭和初期にかけての民族学的な関心からさらに進めて、昭和初期の日本国内とヨーロッパの先史芸術観を検証する材料を収集することができた。 ・近代における描かれた遺物に関する調査 本館所蔵の、遺跡が描かれた大型油絵(大正時代作)や古墳時代の人物の復元図(昭和初期作)などの遺跡や遺物に関係する絵画作品を調査し、博物館における美術と考古学の関係について考察した。そのほか静岡市美術館で開催された明治期の洋画表現に関するシンポジウムに参加した。調査の過程では、絵葉書などの考古学特有の視覚表現媒体の活用にも着目し、資料収集を進めた。本調査成果は、本館における展示やブログ、列品解説により公表した。			
			
		図1 スtockホルム東洋美術館所蔵の紀州徳川家旧蔵考古遺物の調査	
・研究発表等 論文発表では、昨年度の調査報告を兼ねて、論文「ギメ東洋美術館所蔵の縄文土器ーフォリー神父蒐集品の調査報告を兼ねて」『武蔵野美術大学研究紀要 第44号』を刊行した(備考①)。講演では、信州大学の依頼により、茅野市美術館において西洋美術史や作家などと超領域の縄文土器に関する対談を行った(備考②)。ほかに、調査地の熊谷市において、根岸友山・武香顕彰会の依頼により根岸家資料についての講演を行った(備考③)。展示では、当館の「特集陳列 うつす・つくる・のこすー日本近代における考古資料の記録ー」において、研究成果を公表した。			
【実績値】 ・調査件数 5件(調査件数国内4件、国外1件)・写真撮影点数 約1,000枚・研究発表等 4件(論文発表1件①、講演2件②・③、展覧会1件④)			
【備考】 ①論文発表:「ギメ東洋美術館所蔵の縄文土器ーフォリー神父蒐集品の調査報告を兼ねて」『武蔵野美術大学研究紀要 第44号』平成26年3月1日刊行(査読有) ②招待講演・対談:「線を遊ぶ、語る ～縄文から現代まで～」(茅野市美術館)信州大学人文学部芸術コミュニケーション分野、茅野市美術館 主催 平成25年11月23日(鈴木希帆、松本透(近現代美術史、東京国立近代美術館副館長)、伊藤理佐(漫画家)、金井直(西洋美術史、信州大学准教授)ほか) ③招待講演:「東京国立博物館所蔵の《群集横穴図》と《埴輪 短甲の武人》について」(熊谷市)根岸友山・武香顕彰会 主催 平成25年12月1日 ④展覧会:「特集陳列 うつす・つくる・のこすー日本近代における考古資料の記録ー」(東京国立博物館)平成25年9月10日～10月20日			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：館内の調査や展覧会の運営と調査出張の時期を調整し、適時に行うことができたため。 独創性：美術の枠組みで縄文土器及び考古遺物を扱い研究する点に新規性があるため。 発展性：海外の学会誌への投稿依頼が来るなど、研究が国外からも注目されているため。 効率性：東京国立博物館において美術史、考古学双方の研修者の協力を得て、研究が順調に進んでいるため。 継続性：昨年度の調査研究を踏まえた資料の収集と、講演や論文の発表が続けられているため。 正確性：目標として掲げていた今年度の調査件数を達成し、成果を一般に公開することで、科学研究費を用いた研究が有効になされたため。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	写真撮影点数	研究発表等			
判定	A	A	A			
判定理由 調査件数：縄文土器や日本考古遺物に関する国内外の資料の特別観覧及び調査が順調に進められた。 写真撮影点数：海外の博物館の所蔵品を含め、希望資料を当初の予定通り撮影することができた。 研究発表等：当初の予定通りに展覧会を開催し、査読付紀要への論文発表を行い、研究成果を公表することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本年度は前年度の経験をふまえて資料調査と研究成果の発表が順調に進んだ。特に本館の所蔵品と関係する海外の日本考古資料を調査できたことにより、考古コレクションの管理と移動についてより広い視野での研究が進み、近代における国内外の先史造形観についての基礎研究を行うことができた。これにより、次年度に行う研究成果の発表の準備が整った。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	今年度は科研費研究の完成年度であるが、当該年度計画は概ね達成することができた。次年度は、日々の業務との連携を図り、収集した資料のデータベース化を進め、館内外の査読誌や海外の学術雑誌などに論文を発表していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	29) 日本における「美術」概念の再構築－語彙と理論にまたがる総合的研究（科学研究費補助金）（(5)-①）		
【事業概要】 近代日本が西洋から受容した「美術」は自らの美意識とは異質な分類枠のものであり、それらの作品は西洋とは異なる価値基準によって定義され、記述されるべきものである。 真正の日本の「美術」概念を再構築する場が生成するために、“概念としての「美術」”にかかわる先行研究の成果を踏まえて、日本の「美術」を語る体系全体とそれに従う作品記述の語彙を再検討する。それによりどのように日本美術を捉え、どのような記述がふさわしいのかを理論的に探究する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸研究部長 伊藤嘉章
【スタッフ】 山崎剛（金沢美術工芸大学教授）、並木誠士（京都工芸繊維大学教授）、佐藤道信（東京芸術大学教授）、鈴木浩之（金沢美術工芸大学准教授）、横溝廣子（東京芸術大学准教授）、森仁史（金沢美術工芸大学教授）、後小路雅弘（九州大学教授）、北澤憲昭（跡見学園女子大学教授）、山梨絵美子（東京文化財研究所企画情報部副部長）、青木美保子（京都女子大学准教授）			
【主な成果】 本研究の基礎を固めるものとして、「美術」概念の検討成果の確認、記述の現場からの論点の吸収、海外研究者との討議、検討項目の絞込みを本年度の課題とした。そのために、東京文化財研究所、九州大学、石橋美術館、でそれぞれのテーマによる研究会を開催した。これによって、近代美術、古美術、あるいはアジアにおける「美術」の概念についての検討を行なった。			
【年度実績概要】 ・本年度実施した研究会 本研究では、近代、古美術、海外（欧米）、海外（アジア）といったそれぞれの分野での「美術」概念というものを検証していくことが基本となる。これに向けて分野別の研究会として下記2件を開催した。 ・26年1月26日 近代部会研究会（東京文化財研究所） ・26年2月25日、26日 アジア部会研究会（九州大学・石橋美術館） 近代部会の研究会では、「東京藝術大学資料館所蔵品目録編纂作業について 青木茂」、「矢代幸雄の日本美術品分類－美術研究所の作品・文献カード分類と日本美術年鑑の分類を中心に 山梨絵美子」「近代美術資料の枠組みと総合資料 鯨井英伸」という発表が行われ、近代における日本での「美術」概念の形成について検討が行われた。 ・基礎研究 基礎研究としては、明治期の美術概念を知る資料として、東京国立博物館の列品区分の変遷、内国勸業博覧会の出品区分の変遷等の資料を集成した。			
 近代部会研究会（東京文化財研究所）			
【実績値】 研究会実施回数 2回（①～②）			
【備考】 研究会実施 ①近代研究部会 26年1月26日 ②アジア部会研究会 26年2月25日、26日			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-29

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性		
判定	A	A	A	A		
判定理由 適時性：研究代表者らは先に日本の工芸・デザイン作品の検索システム構築を行う中で、西洋で形成された体系や用語のみでそれらを行うことの問題に直面した。今後の研究の進展には日本の「美術」のために新たな美術概念の構築を必要不可欠である。 独創性：この分野の研究は日本の工芸・デザインの個別研究から生まれてくるものではなく、近代美術史の進展により、近代における西洋美術概念の導入が明らかになることで、初めて生まれた問題意識である。 発展性：今回の研究では、近代のみでなく、古美術や、日本だけでなく、アジア美術についてもその研究を広げようとするものであり、発展性は大きい。 効率性：本研究の採択が年度半ば過ぎという状況の中で、研究の共通理解の形成のために、分野別の研究会を行った。これらは次年度以降の研究に向けて効率的な積上げを行った。						

2. 定量的評価

観点	研究会実施回数					
判定	A					
判定理由 研究会実施回数：次年度以降の研究の基礎となる、分野別の研究会を東京、福岡で実施した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	採択決定が年度後半であったが、次年度以降の円滑な研究の進展に向けて、基礎となる研究が進められた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	近現代部会、アジア部会を中心に研究会、基礎データの集成が進みつつある。次年度以降はさらに古美術部会、海外研究者との検討会を実施していくことができる。これらを進める中で、それぞれの部会の検討を進め、さらには、日本美術、東アジア美術についての新たな美術概念の研究を進めることができる。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-30

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	30) 描いた女性たちに関する研究－桃山時代から明治・大正期まで（科学研究費補助金）（5）－①)		
【事業概要】 桃山時代から明治・大正期までの女性画家に関して、その実態を文献・作品の両面から明らかにし、造形的・社会的・文化的特質と意義を考察する。制作の目的、制作を可能とした社会的な要件、女性であることと表現内容との相関関係、また、各時代の価値観・倫理観が女性の行動に及ぼした影響等も分析しつつ、歴史的な社会における視覚的イメージを表現することの意味について考察する。合わせて、女性の作画に関するデータベースの作成も目指す。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課絵画・彫刻室長 田沢裕賀
【スタッフ】 山下善也（調査研究課絵画・彫刻室主任研究員）、仲町啓子（実践女子大学文学部教授）			
【主な成果】 前年度に引き続き、実践女子大学の科研メンバーと協力し、京都国立博物館で、金戒光明寺寄託の池玉瀾の襖絵等の調査（25年8月15日）を行うとともに、女性画家に関するデータ収集に協力し、外部研究者と連携した質の高い研究を行うことができた。次年度以降、外部との協力により当館所蔵の女性画家資料に対する研究を進める準備体制も確立した。			
【年度実績概要】 ・女性画家作品の調査 (1) 当館所蔵の清原雪信・奥原晴湖などの作品調査を行った。 (2) 京都国立博物館で、池玉瀾筆「西湖図襖」（金戒光明寺蔵、京都国立博物館寄託）4面等の作品調査を行った。 (3) 実践女子学園香雪記念資料館で「河辺青蘭—浪華の女性画家—」出品作品の調査を行った。 ・女性画家の作品制作の背景を考察 個々の調査作品の制作背景について、順次調査を行った。 ・研究会 実践女子学園香雪記念資料館で行われた大阪の女性画家（河辺青蘭）に関する研究会に参加し、意見交換を行った。			
【実績値】 研究会参加回数 1回 （25年12月7日 於香雪記念資料館） 作品調査回数 2回 （京都国立博物館、香雪記念資料館）			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-30

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	S	A	A	A	B
判定理由 適時性：女性芸術家に対する現代的関心が高いため。 独創性：女性画家を総合化した画家としての社会的要因にまで踏み込んだ研究はなされていないため。 発展性：各時代の価値観・倫理観が女性の行動に及ぼした影響等、社会における視覚的イメージ表現の意味について研究を広げることができるため。 効率性・継続性：実践女子学園香雪記念資料館は、これまでも女性画家研究を行ってきた。データの蓄積もあり、研究成果にもとづいた研究が可能であり、成果を展示の形で公開できるため。 正確性：女性画家の作品研究はこれまであまり行われていなかった。そのため、科学研究費の代表者である仲町氏を中心に多くの作品の調査作業を進めたが、質的判断に供しえる基準作品の選定段階にまだあるため。						

2. 定量的評価

観点	研究会参加回数	作品調査回数				
判定	A	A				
判定理由 研究会参加回数：実践女子学園香雪記念資料館で開催された研究会（本年度開催の研究会は1回）に参加し、女性が絵を描く背景としての書画会に関する意見交換を行うことができた。 作品調査回数：京都国立博物館で、江戸時代の代表的な女性画家である池玉瀾について、代表作である「西湖図襖」（金戒光明寺蔵、京都国立博物館寄託）4面等の調査を行うことができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	昨年度秋から本格化した。それ以前から研究を始めており、十分な調査を進めることができた。また、外部との調査協力体制も確立し、所蔵品を含めより広範な調査計画が進行中である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	実践女子学園香雪記念資料館で行われた研究会、実践女子大学との共同の調査に参加し、外部との調査協力体制が確立した。当館所蔵品を含めより広範な調査計画が進行中である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	31)「武装具の集積現象と古墳時代中期社会の特質」(科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金)(5-①)
【事業概要】 古墳時代は、象徴的な器物の授受を通じて、王権中枢が地域社会との関係を構築した時代である。5世紀の古墳時代中期には、武器と武具とを組み合わせた武装具が、王権から地域社会(首長)へと配布される象徴的器物であった。 本研究は、武装具が古墳に集積する現象に注目して、古墳時代中期社会の特質を描き出すことを目的とする。奈良県円照寺墓山1号墳の出土資料を事例として取り上げ、武装具が集積することの意味を「王権」「地域」「東アジア」という3つの視座から検討する。	
【担当部課】	学芸研究部
【プロジェクト責任者】	列品管理課主任研究員 古谷 毅
【スタッフ】 上野 祥史(国立歴史民俗博物館 研究部考古研究系・准教授)、齋藤 努(国立歴史民俗博物館 研究部・教授)、坂本 稔(同 研究部・准教授)、橋本達也(鹿児島大学 総合研究博物館・准教授)、杉井 健(熊本大学 文学部・准教授)、阪口英毅(京都大学 文学研究科・助教)、諫早直人(奈良文化財研究所 都城発掘調査部・研究員)、川畑 純(同 都城発掘調査部・研究員)、高橋 工(大阪市博物館協会 大阪文化財研究所・難波宮調査事務所長)、清水和明(同 大阪文化財研究所・事務企画課長)、鈴木一有(浜松市教育委員会 学芸員)、西嶋剛広(宮崎市教育委員会 学芸員)	
【主な成果】 今年度は、東京国立博物館において円照寺墓山1号墳出土資料を整理して、基礎情報を提示するために実測調査を進めた。また、その情報を基礎として「武装具の集積現象」を比較検討し、研究を推進した。	
【年度実績概要】 本年度は、25年5月・8月・9月・11月・12月、26年2月に東京国立博物館において研究会を開催し、資料整理及びこれまでの調査成果の確認と問題点を検討・分析すると共に、実測調査を進めた。また、検討会では研究報告を行い、論点の整理とその共有を図り、「武装具の集積現象」の検討に向けた準備を進めた。 調査資料に関しては、研究協力者を雇用して、写真・データ等の整理・分析を実施した。	
	
調査風景〔於：東京国立博物館〕	
【実績値】 ○調査日数 :25日間 ・調査件数 : 約25件 ・主な調査資料 : 奈良県円照寺墓山1号墳出土資料・京都府久津川車塚古墳出土資料(東京国立博物館蔵) ○研究会日数 :2日間 ○論文等公開件数3件(①～③)	
【備考】 論文等 ①古谷 毅「忠清南道 公州 水村里古墳群出土金銅製装身具についての韓日製作技術の比較」『公州 水村里遺跡発掘10周年記念 国際学術シンポジウム 発表要旨集』韓国・忠南歴史文化研究院、335～367頁、平成25年9月25日 ②古谷 毅「大型古墳と中小古墳 一再整理から見た七観古墳の意義」『第4回百舌鳥古墳群講演会「巨大古墳あらわる―履中天皇陵古墳を考える―」発表要旨集』大阪府・堺市、15～37頁、平成26年2月2日 ③古谷 毅「日本原始・古代の武具と馬具」『平成25年度 千葉市遺跡発表会 要旨』千葉市教育委員会 埋蔵文化財調査センター、22～35頁、平成26年2月22日	

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	B	A	A	A	S	S
判定理由 適時性：当館所蔵資料(列品)の調査・研究成果の公開性において需要性・必要性があり、早期の公開を目指しているが、今年は十分な調査を実施することができた。 独創性：古墳時代鉄製武器・武具・馬具研究史を踏まえて発想・着想しており、鉄製武器武具馬具研究においてはオリジナリティ及び新規性には優れていると思われる。 発展性：写真や簡略な実測図中心であった従来の武器武具馬具研究の多様性・汎用性に裨益し、研究視角の面からは古墳時代及び金属器研究に与える応用性などに一定の成果があると思われる。 効率性：調査を進めており、また実測調査に先立ち研究協力者を雇用して資料の事前整理を進めており、予算運用の時間的・人的投資について有効であると思われる。一方、設備的投資については、消耗品を含めてほとんど行っていない。 継続性：これまで交付された各種科学研究費補助金による調査・研究成果を継承し、期間は適正で、質・内容・量ともに従来の調査・研究例を上回っており、本研究テーマの資料的基盤を構築する基礎性に優れている。 正確性：従来この規模の資料群では、実測図の作成はほとんど行なわれていないが、作成した実測図はすでに100枚を超えており、達成値・網羅性については従来の調査・研究事例に類似する事例は見られない。						

2. 定量的評価

観点	調査日数	研究会日数	論文等公開			
判定	A	B	B			
判定理由 調査日数：十分な日数を実施した。 研究会日数：最低限の研究会を開催した。 論文等公開：論文等数は、公開性に鑑みてもほぼ適当な分量と思われる。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	継続性については変更の必要が認められないと考えられるため、他の定性的・定量的評価により判定。研究計画の達成度については、調査回数は十分であり、調査精度の向上をさらに高めたい。東京国立博物館所蔵資料の整理としても顕著な成果が挙げられている。次年度以降は、より研究予算運用の効率性・適時性を高め、研究会をさらに開催し、さらに発展性・独創性の拡充・確立を図りたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	有形文化財の収集・保管に関しては、列品の整理・分析及び学術的評価に関する十分な考古学的情報の整理・資料化、及び論文発表・講演等を通じた当館における文化財(列品)の公開に資する調査・研究として十分な蓄積を行ったと考えられる。このほか、定性的・定量的評価により判定した。改良・改善点は、より高度な効率性・適時性及び発展性・独創性の確立を図ることを目標として、次年度の計画へ反映させる予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	32)「三次元計測を応用した青銅器製作技術からみた三角縁神獣鏡の総合的研究」(科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金)(5-①)
【事業概要】 古墳時代前期を代表する遺物である「三角縁神獣鏡とは何か」について三次元計測技術を応用して製作技法から考えることを目的とする。舶載三角縁神獣鏡と仿製三角縁神獣鏡の対比を中心に、それを取りまく倭鏡、中国鏡、銅鐸の同一文様をもつ青銅器を分析対象として、量産技法から相互関係を分析する。そのための手段として精密三次元計測データによる客観的で詳細な分析を用いる。そして、肉眼観察では扱うことが不可能であった青銅器表面の微細な鋳型の傷や、面的な変形、収縮についての新しい情報を得ることで、これまででない製作技法の解明を進める。 さらに、青銅器製作技術から「舶載」と「仿製」三角縁神獣鏡の技術的系譜を明らかにすることも目的とする。	
【担当部課】	学芸研究部
【プロジェクト責任者】	列品管理課主任研究員 古谷 毅
【スタッフ】 水野敏典(奈良県立橿原考古学研究所 調査課総括研究員)、菅谷文則(奈良県立橿原考古学研究所 所長)、奥山誠義(奈良県立橿原考古学研究所主任研究員)、北井利幸(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 主任学芸員)	
【主な成果】 既存の東京国立博物館所蔵資料の調査成果の公開と、調査データ・写真の整理・分析を行った。	
【年度実績概要】 本年度は、日本考古学協会で研究成果を発表・公開した。 また、奈良県立橿原考古学研究所において、研究を行うための調査機材確保し、三次元計測器の導入を行った。 加えて、これまでの研究成果(科学研究費補助金 基盤研究(A):課題番号 25284161・平成 18 年度～平成 21 年度、基盤研究(A):課題番号 25284161・平成 14 年度～平成 16 年度)において調査した東京国立博物館所蔵の主要古墳出土銅鏡のデータ・写真の整理・分析を行い、今後の研究資料の整備を図った。 ただ、一部スタッフの都合で、研究会・調査等を計画通りに進めることはできなかった。	
	
文様の面的な違いをもつ異なる「同範鏡」(目録番号 37) 左) 佐味田宝塚鏡(東京国立博物館蔵)、右) 黒塚古墳 22 号鏡(奈良県立橿原考古学研究所蔵)〔①2014 年文献より〕	
【実績値】 ○調査日数 : 3 日間 ・調査件数 : 約 10 件 ・主な調査資料 : 三角縁神獣鏡・日本列島製漢式鏡(東京国立博物館蔵) ○研究会日数 : 1 日間 ○論文等公開件数 1 件(①)	
【備考】 論文等公開 ①水野敏典・奥山誠義・古谷毅「三次元計測による三角縁神獣鏡『同範鏡』の立体的差違の研究(ポスターセッション)」 『日本考古学協会第 79 回総会研究発表 要旨』9 頁、平成 25 年 5 月 26 日	

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	C	A	A	C	A	A
判定理由 適時性：既存の科学研究費補助金による調査・研究成果の公開性において需要性・必要性があり、早期の公開を目指しているが、今年度は一部スタッフの都合で、十分な緊急性には応えていない。 独創性：三次元計測データの解析・応用研究を目的に発想・着想しており、従来の青銅器研究においてはオリジナリティ及び新規性には優れていると思われる。 発展性：肉眼観察が中心であった従来の青銅器研究の多様性・汎用性に裨益し、研究視角の面からは原始・古代金属器研究、及び弥生・古墳時代の考古学研究に与える応用性などに一定の成果があると思われる。 効率性：予算運用の計画は時間的・人的投資について有効であると思われるが、今年度は一部スタッフの都合で、達成したとはいえない。なお、設備的投資については、今後の研究を進める基盤を形成した。 継続性：これまで交付された科学研究費補助金による調査・研究成果を継承し、期間は適正である。また、従来の研究で得たデータは、本研究テーマの資料的基盤を形成していて基礎性において優れている。 正確性：数値・データに関してはすでに従来の研究で基盤を形成しており、達成値・網羅性については従来の調査・研究事例に類似する成果は見られない。						

2. 定量的評価

観点	調査日数	研究会日数	論文等公開件数			
判定	C	C	C			
判定理由 調査日数・研究会日数：今年度は一部スタッフの都合で十分な日数を実施できなかった。 論文等公開件数：公開性に鑑みても、さらに努力が求められると思われる。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	継続性については変更の必要が認められないと考えられるため、他の定性的・定量的評価により判定。研究計画の達成度については、調査とデータ分析の質をさらに高める必要があるが、今年度は研究代表者の健康上の問題で十分に達成したとはいえない。来年度はより研究予算運用の効率性・適時性を高め、研究会で分析視角に関する発展性・独創性の拡充・確立を図り、さらに調査を進めたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	有形文化財の収集・保管に関しては、列品の整理・分析及び学術的評価に関する十分な考古学的情報の発表等を通じて、当館における文化財(列品)の公開に資する調査・研究として蓄積は実施できたと思われる。このほか、定性的・定量的評価により判定した。改良・改善点は3.総合的評価のように、今後の計画遂行とより高度な効率性・適時性及び発展性・独創性の確立を図ることを目標として、次年度計画を策定する予定である。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-33

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	33) 木彫像の樹種識別技術の高度化 (科学研究費補助金) ((5)-①)		
【事業概要】 木彫像の樹種判別に非破壊分析手法、顕微手法を応用した精密分析手法を導入することにより、種レベルでの正確な樹種を特定する研究。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	保存修復課環境保存室長 和田浩
【スタッフ】 安部久 (森林総合研究所主任研究員)、渡邊宇外 (千葉工業大学准教授)、渡辺憲 (森林総合研究所研究員)、石川敦子 (森林総合研究所主任研究員)、久保智史 (森林総合研究所主任研究員)			
【主な成果】 美術史的研究の見地から時代や様式が定まっている多数の木彫像を対象として、揮発成分のサンプリングおよび分析と近赤外分光分析を行うことができた。データの蓄積を継続することで、木材標準試料との比較によって樹種同定の精度を上げられる一定の目途が立った。			
【年度実績概要】 国内木彫像等の調査 以下の国内各所において木彫像の調査を実施し、形状・構造・彩色に関する調書の作成、木片試料採取、像の撮影を行った。 ・東京国立博物館 (25 年 5 月 23 日) 大神社展出品作品群 (一括) の調査を実施した。 ・東京国立博物館 (25 年 7 月 10 日) 東京国立博物館所蔵作品 (1 軀) の調査を実施した。 ・静岡県南禅寺 (25 年 6 月 21 日、9 月 4 日) 南禅寺が所蔵する木彫像群 (一括) の調査を実施した。 ・長野県正覚院 (25 年 10 月 26 日) 正覚院が所蔵する木彫像群 (一括) の調査を実施した。			
			
大神社展出品作品 調査の様子			
【実績値】 国内調査回数 5 回			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4511-33

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	独創性					
判定	A					
判定理由 独創性：非破壊分析で樹種同定を試みるという着想が独創的であるため。						

2. 定量的評価

観点	国内調査回数					
判定	A					
判定理由 国内調査回数：国内調査を遅滞なく計画通りに実施することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	木彫像の調査を数多く、また、遅滞なく計画通りに実施することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当初の計画通り進捗した。今年度の成果を踏まえて次年度計画においても同様に進めていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	34) 在欧日本仏教美術の基礎的調査・研究とデータベース化による日本仏教美術の情報発信（科学研究費補助金）（5）－①）		
【事業概要】 在欧博物館が所蔵する日本仏教美術作品の悉皆調査を行う。それらのコレクションの流通経路も調査し、作品自体のデータと合わせて、英語と日本語による画像付データベースを作成して公開する。欧州と日本相互の研究成果の交換を可能にし、在欧における日本美術史研究や日本観の研究を促進するとともに、今後の欧州における日本関係美術品の活用を進を図る。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	副館長 島谷弘幸
【スタッフ】 伊藤信二(学芸企画部博物館教育課教育普及室長)、丸山士郎(学芸企画部博物館教育課教育講座室長)、小山弓弦葉(調査研究課工芸室主任研究員)			
【主な成果】 ケルン市立民族学博物館において、日本仏教美術作品の悉皆調査を実施した。それらの調査結果をデータ入力し、データベースを作成している法政大学の担当者に入稿した。また、欧州から画像による調査依頼を受け、各担当者で検討し、依頼館に返答するとともに、データベースに加えた。さらに、東京国立博物館が所蔵する欧州博物館の図録等より、該当する日本仏教美術作品の抜き出しを行なった。			
【年度実績概要】 (1) 欧州博物館にて悉皆調査 今年度は、ドイツ・ケルン市立民族学博物館にて調査を実施した。 (2) 調査のデータ入力と入稿 在欧日本仏教美術データベースは、本研究課題をとりまとめている法政大学が作成している。東京国立博物館担当者が関わった調査に関する資料は、データ入力をした上で、法政大学の担当者に随時入稿した。 (3) 関連データの収集 東京国立博物館の資料館には、欧州博物館を紹介する図録等が所蔵されている。それらの図録等から、本研究課題の調査対象となる日本仏教美術作品に関するデータを抜き出した。 (4) 研究成果の公開 データベースはすでに公開されており、随時更新している。また、本年度は、英語による出版物にて研究成果論集を刊行した(ドイツにて出版)。			
 ドイツ人が所蔵する 日蓮曼荼羅			
【実績値】 ・ 調査件数 30 件 ・ データ入稿件数 30 件 ・ 関連データ収集件数 50 件 ・ 研究論文件数 2 件			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	S	A	B	S	A
判定理由 適時性：欧州博物館が所蔵する日本仏教美術のデータベース化は、欧州と日本の研究者相互の国際交流ともなり、必要性も高い。 独創性：欧州博物館所蔵の日本仏教美術を画像付データベースで広く公開することは、これまで知られていなかった作品や公開されてこなかった作品を研究対象として知らしめることができる。 発展性：画像付データベースの公開により、日本における仏教美術研究の対象を広げるのみならず、欧州における日本美術研究を促進することができる。 効率性：欧州博物館への調査が一年で一度しか実施できなかったが、日本において基礎的データ収集を進めることができた。 継続性：本研究は、すでに法政大学で数年来進めてきているもので、画像付データベースも公開済みである。調査結果はすみやかにデータ入力してデータベースとして公開できる状況である。 正確性：すでにデータベース本体が完成しているため、調査結果はすみやかにデータベースに流入することができる。データベースは、日本仏教美術研究者に活用できるものとなっている。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	データ入稿件数	関連データ収集件数	研究論文件数		
判定	B	A	A	A		
判定理由 調査件数：欧州の博物館において現地調査を目標通りに実施することができた。 データ入稿件数：調査を実施した結果についてすみやかにデータ入力して入稿することができた。 関連データ収集件数：東京国立博物館において関連作品の資料収集を充分に進めることができた。 研究論文：研究成果を論文として公開することができた。						

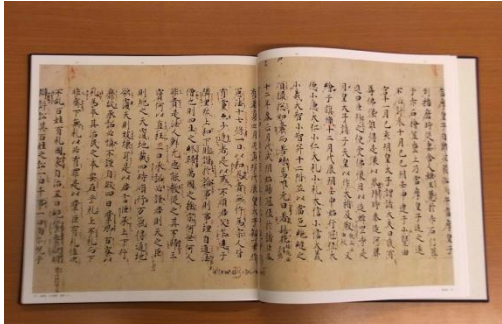
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	継続してきた研究課題であり、本年度の調査対象である欧州博物館での悉皆調査も効率的に進めることが出来た。画像付データベースはすでに公開しており、本年度の調査結果も随時データ入稿している。研究成果は論文としても発表することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	欧州博物館での調査実施など、計画通りに進行している。画像付データベースは所蔵館ならびに研究協力者へのパスワード配布による公開だが、欧州においても日本においても、今後はデータベース自体の普及につとめていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進。
プロジェクト名称	1) 訓点資料としての典籍に関する調査研究 ((5) -①)
【事業概要】 漢文を訓読するために施された訓点の資料は、漢籍が比較的少なく、その大半が仏典である。主に平安時代や鎌倉時代を中心とした仏典に施された訓点によって、当時の日本人がどのように本文を理解していたか、或いは当時の日本語の有り様が知られることになる。ことに当館は、国内トップレベルの写経コレクションを有していることから、専門の学識者を客員研究員に迎えつつ、それらの調査研究を行い、その成果を研究者や一般に還元する。	
【担当部課】	学芸部
【プロジェクト責任者】	上席研究員 赤尾栄慶
【スタッフ】 宇都宮啓吾（大阪大谷大学教授・客員研究員）、羽田聡（主任研究員）	
【主な成果】 館蔵品のうち、重要文化財『観自在菩薩如意輪瑜伽法要』及び重要文化財『南海寄帰内法伝』を中心とした調査を踏まえて、宇都宮啓吾が「十一世紀における天台宗山門派谷流のヲコト点について」（『訓点語と訓点資料』132）という論文にまとめて、報告を行った。赤尾・羽田は、館蔵品で訓点資料として知られる、国宝『日本書紀』二卷（岩崎本）と国宝『日本書紀』（吉田本）のデジタル撮影を行い、書誌解題を付して全巻を原寸大カラー図版での書籍を出版した（勉誠出版）。	
【年度実績概要】 - 調査を年間10回実施し、重要な部分は写真撮影を行った。 - 漢字文化圏の訓読現象をも視野に入れていることから、25年7月及び8月に韓国の口訣学会のメンバーとの意見交換及び検討会を実施した。 - また25年8月には、大谷大学所蔵の『三国祖師伝絵』の調査を行い、その図様の調査と賛文に付された訓点の調査を行った。 - 当館の編集になる、国宝『日本書紀』二卷（岩崎本）と国宝『日本書紀』（吉田本）の出版（勉誠出版）のための調査を実施し、解題を付した書籍の出版を行った。	
	
『京都国立博物館編 国宝 岩崎本日本書紀』（図版部分）	
【実績値】 - 調査 10回 - 国際交流 2回 - 論文 1回(①) - 研究成果公開（出版） 2回(②)	
【備考】 論文 ①宇都宮啓吾「十一世紀における天台宗山門派谷流のヲコト点について」（『訓点語と訓点資料』132） 研究成果公開（出版） ②赤尾栄慶、羽田聡 当館の編集になる国宝『日本書紀』二卷（岩崎本）と国宝『日本書紀』（吉田本）の出版 ほか1回	

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	持続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：館蔵品2件について、原寸大カラー図版の書籍の編集を行い、出版し、研究者及び一般に公開した。 独創性：宇都宮論文において、比叡山における訓点の創始に関する新たな視点を提供した。 発展性：原寸大カラー図版の書籍の編集を行い、出版したことにより、国語学・歴史学などの研究者に全巻の情報を提供した。 効率性：赤尾・羽田の研究成果を付しつつ、民間の出版社からの出版を実現した。 継続性：1年間に2冊の大きな書籍の出版を行った。 正確性：国語学・書誌学を中心とした解説及び料紙の紙質（楮紙）に関する最新の成果を提供した。						

2. 定量的評価

観点	調査	国際交流	論文	研究成果公開 (出版)		
判定	B	A	A	S		
判定理由 調査：毎月の調査が実施できなかった。 国際交流：韓国の口訣学会との国際交流会を2回実施した。 論文：宇都宮1回 論文発表は1回であったが、査読のある学会誌に掲載した。赤尾・羽田は、研究成果公開のための解題を執筆することとした。 研究成果公開(出版)：当初、予定していなかったが、民間の出版社から解題を付した館蔵品の書籍を2冊出版し、契約による収入も得られた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査10 国際交流2 論文1 研究成果公開(出版)2回をこなし、研究成果の公開(出版)によって、全巻を繙くことができないような書跡の全貌を公開することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施されており、調査をふまえた研究成果が公開できた。当該年度計画を100%達成。

【書式B】
(様式1)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-2

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 彫刻に関する調査研究(科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金) ((5)-①)		
【事業概要】 京都国立博物館に保管及び寄託される仏像を中心とした彫刻作品の調査、研究。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 浅湊 毅
【スタッフ】 井上一稔（同志社大学文学部教授・客員研究員）、田中健一（大阪大谷大学専任講師・調査員）			
【主な成果】 ・科学研究費補助金基盤研究（B）「多数尊より構成される仏教尊像に関する調査研究」の研究代表者として、寺院及び博物館における彫刻作品の調査を研究分担者とともに行った。 ・来年度再開する新館（平成知新館）の彫刻展示室における展示計画の立案を行った。			
【年度実績概要】 ・京都国立博物館が保管、あるいは社寺より寄託を受けている彫刻作品の調査及び写真資料の収集を、新たに行うとともに、新規寄託作品の増加につとめた。 ・社寺、個人宅など、館外に所在する彫刻作品の調査・撮影を行った。 ・来年度再開する新館（平成知新館）の彫刻展示室における展示計画の立案を行った。 ・下記の科学研究費補助金による調査に研究代表者、研究分担者ないしは研究協力者として参加し、調査研究を行うとともに、それぞれに関し成果を公表した。 ①東南アジア史における絶対年代と相対年代の統合に関する研究（研究協力者） 研究代表者：桃山学院大学 深見純生 国内における研究会に参加し上記のテーマに基づいて意見交換及び情報収集を行った。 ②5～9 世紀東アジアの金銅仏に関する日韓共同研究（研究分担者）研究代表者：大阪大学 藤岡穰 国内及び韓国において作品調査を行うとともに、当館館蔵品調査に際して便宜を図った。 ③多数尊より構成される仏教尊像に関する調査研究（研究代表者） 神奈川県立金沢文庫において研究分担者らと共同で称名寺ご所蔵の十大弟子に関して作品調査を行うとともに、当館寄託の釈迦如来立像についてX線透過撮影を行い、詳細なデータの収集につとめた。 ・仏教美術研究上野記念財団助成研究会主催のシンポジウム「上代南山城における仏教文化の伝播と受容」にパネリストとして出席した。 ・上記調査研究において、客員研究員の井上一稔氏、調査員の田中健一氏の協力を得た。			
【実績値】 調査：5 回(南山城調査 1 回、科研による調査 4 回) 論文等執筆：論文 3 本、新聞連載 6 回（京都新聞・京都国立博物館所蔵 名品手帳） 講演：計 4 回(講座 2 回、シンポジウム 2 回)			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：仏像に関する関心が一般にたかまっており、世間の需要にもかなう研究といえる。 独創性：多数の尊像から構成される群像の研究は、彫刻史上でこれまでほとんど行なわれてこなかったテーマである。 発展性：自己の研究のみで完結するものではなく、喫緊及び将来の展覧会へとつながる調査研究である。 効率性：保存修理所の業務や新館建設に関わる業務、京都大学における講義などの多岐にわたる併任業務があるなか、限られた時間で効率的な調査研究を行なった。 継続性：展覧会のための調査もそれで終わるものではなく、さらなる展覧会へとつながるものである。 正確性：調査の成果を論文、シンポジウム等で速やかに公開し、関係者の意見を広く聞くようにつとめた。						

2. 定量的評価

観点	調査	論文等執筆	講演			
判定	A	A	A			
判定理由 調査：展覧会のための調査に加え、3種類の科研による調査にも予定回数（各1回）以上に参加することができた。 論文等執筆：当初より予定の論文集に1本の論文を執筆し、それ以外に日蓮宗関連の概説書に2本の論文を執筆した。 講演：当初予定の遊び展で1回の講演以外に、外部で1回の講演と、シンポジウムで2回の発表を行った。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	展覧会、調査、研究、論文執筆、講演、いずれの面でも積極的に行い、一定の成果をあげることができた。また将来の展覧会計画に関しても新たに計画立案を行うことができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	目的は達成することができた。それに加えて昨年度からの継続として外部資金（科学研究費補助金費基盤研究B）を代表者として獲得することができた。

【書式B】
(様式1)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-3

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進。		
プロジェクト名称	3) 出土・伝世古陶磁に関する調査研究 ((5) -①)		
【事業概要】 日本国内で伝世・出土した陶磁器について総合的に調査を実施し、博物館の所蔵品・寄託品の充実を図ると共に、最新の調査・研究成果を展示や講演会などに反映させる。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	工芸室長 尾野善裕
【スタッフ】			
【主な成果】 野崎家塩業歴史館（岡山）で伝世古陶磁の調査を行い、72 件の調書を作成すると同時に記録写真の撮影を行った。			
【年度実績概要】 所蔵陶磁の悉皆調査を依頼されている野崎家塩業歴史館の所蔵品調査を延べ 2 日実施し、デジタルカメラでの資料写真撮影と共に、調書の作成を行った。最も力を割いた野崎家塩業歴史館での調査は、これまで調査の手が及んでいなかった膨大な資料群の情報化に主眼があり、それ自体は必ずしも研究として独創性を持つものではないが、文化財の保護・調査・研究上必要不可欠な基本情報の整備として行っており、2 つ目の土蔵の調査を完遂した。そのほか、過去の研究蓄積に基づいて、研究発表と論文執筆に務めた。			
【実績値】 調書作成件数 72 件 調査日数（館外） 延べ 2 日 成果公表（研究発表数 2 回(①②)、論文等執筆件数 3 件(③～⑤)）			
【備考】 研究発表 ①「京都から見た〈山茶碗〉編年」東海土器研究会プレシンポジウム、豊橋市民センター、2013 年 7 月 13 日 ②「京都から見た〈山茶碗〉編年～空白の 14・15 世紀をめぐって～」第 2 回東海土器研究会、田原市崙山会館、2013 年 11 月 2 日 論文執筆 ③尾野善裕（共著）「織部焼はいつ流行したのか」『特別展：国宝「卯花塙」と桃山の名陶—志野・黄瀬戸／瀬戸黒・織部—』三井記念美術館、2013 年 9 月 ④尾野善裕「京都から見た〈山茶碗〉編年」『東海土器研究会プレシンポジウム資料集「渥美窯編年の問題点」』東海土器研究会、2013 年 7 月 ⑤尾野善裕「京都から見た〈山茶碗〉編年～空白の 14・15 世紀をめぐって～」『第 2 回東海土器研究会 渥美窯編年の再構築』東海土器研究会、2013 年 11 月			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	B	A	A	C	
判定理由 適時性：所蔵品・寄託品の充実や、最新の調査・研究成果を展示や講演会などに反映させることは、博物館として常時行うべき当然の業務と考えるため、Aと評価する。 独創性：基礎情報の収集自体に独創性は乏しいため、Bと評価する。 発展性：過去、調査成果を特別展覧会（『魅惑の清朝陶磁』）に盛り込んでおり、今後も展覧会などを通して調査成果の広範な活用が見込めるため、Aと評価する。 効率性：昨年の一当たりの調査作成件数 35 件を上回る 36 件を達成しているため、Aと評価する。 継続性：他業務の繁忙化により、これまで継続的に行ってきた野崎家塩業歴史館の調査も、わずか2日しか実施することができなかったため、Cと評価する。						

2. 定量的評価

観点	調査作成件数	調査日数	成果公表			
判定	C	C	B			
判定理由 調査作成件数：72 件は、昨年の 1/4 にも満たないため、Cと評価する。 調査日数：独立行政法人化後、日常業務が繁忙化する中でも、昨年は 10 日もの調査が実施できたが、僅か2日に減少したためCとする。 成果公表：基礎データの蓄積も進まず、平常展示館閉鎖中のため、館内での成果公表ができていないうらみはあるものの、過去の蓄積を利用して成果公表に務めたのでBと評価する。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	独創性は乏しい事業だが、調査成果の蓄積が展覧会や講演会などの博物館事業の内容充実に貢献するものであることは明らかであり、調査自体を進めるべきであるのも関わらず、他業務繁忙課の中で調査日数を確保することができておらず、基礎データの蓄積が進まなかった。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
一部要注意	過去の研究蓄積によって、成果公表には務めているものの、新規データの蓄積が進んでおらず、研究の先細りが懸念される。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進。		
プロジェクト名称	4)-1 特別展観「遊び」に関する調査研究 ((5) -①)		
【事業概要】 特別展観「遊び」(25 年 7 月 13 日～8 月 25 日)に関する調査研究 特別展観「遊び」の準備に際し、遊びの概念を哲学、言語学、人類学、民俗学の見地から検討し、展示室の構成に合わせたテーマを考え、当館収蔵品から一般観覧者が親しみやすい作品を選び、各テーマに分類した。写真のないものは新たに撮影を行い、個々の作品に解説を加え、遊びに関する小論を添えて図録を編集した。また、秀吉の子、棄丸の玩具船の構造を分析し、模型を作成した。同時に京都国立博物館本館(明治時代・重文)の内壁の清掃方法を検討した。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	列品管理室主任研究員 永島明子
【スタッフ】 青山杏子(企画室事務員)、赤尾栄慶(上席研究員)、浅湊毅(保存修理指導室長)、池田素子(列品管理室アソシエイトフェロー)、大原嘉豊(企画室主任研究員)、岡田愛(列品管理室技術職員)、尾野善裕(工芸室長)、金井杜道(学芸部調査員)、河合優香(教育室事務補佐員)、鬼原俊枝(列品管理室長)、呉孟晋(列品管理室研究員)、小林亜姫(企画室事務補佐員)、坂口さとし(列品管理室事務補佐員)、末兼俊彦(企画室研究員)、友田直子(教育室事務補佐員)、羽田聡(企画室研究員)、水谷亜希(教育室研究員)、宮川禎一(考古室長兼企画室長)、宮本晋吾(列品管理室事務補佐員)、山川曉(教育室長)、山下善也(前連携協力室長)、山田知佳(国立民族学博物館管理部総務課)、山本英男(美術室長)			
【主な成果】 遊びとひとこととで言っても、神仏に捧げた歌や踊り、社寺への参詣、酒宴、遊山、遊楽、琴棋書画のような文人趣味、聞香、闘茶、双六、投扇、楊弓、貝合わせなどの室内競技、からくり人形、カルタ、凧揚げなどの遊戯など、人の営みは多岐にわたり、美術品は、過去の裕福な人々のそうした遊びの記録、記憶ともいえるものである、という視点を基に収蔵品を見直すことができた。玩具船についてはカラクリの構造を想定できた。本館内壁の清掃方法も確立できた。			
【年度実績概要】 ・遊びの概念を研究し、研究職員のあいだで認識を共有し、収蔵品 128 件を選抜。 ・個々の作品の解説を執筆するにあたり、担当研究員が作品を再検討し、画像のないものを新規に撮影。 ・これまで展示することの少なかった作品を研究する機会となった。(例えば、初公開となった館蔵品、推定ドイツ製の銅製の虫形の置物が、農商務省商品陳列館の陳列品であったことの追跡など。) ・妙心寺の寄託品である棄丸の玩具船の構造を観察し、模型を作成した結果、からくり構造があったことを確認できた。 ・保存科学の立場から、展示会場として利用している明治時代の建造物の内壁を清掃する方法を検討し、実施した。 ・以上の成果を一般来館者に還元することができた。			
			
玩具船模型検討風景		新規撮影風景	
			
		展覧会図録	
【実績値】 ・出品作品 128 件 ・新規撮影作品 46 件(102 カット)			
【備考】 展覧会図録「特別展観 遊び」京都国立博物館編集・発行 2013 年 7 月(B5 判・並製本・総 156 頁・作品 128 件)			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	B	S	A	A
判定理由 適時性：展覧会のための調査研究であるため、公共性や公開性は極めて高いが、需要・必要性、緊急性はそれほど高くない。図録では作品名称・時代・所蔵のみならず、小論や章解説等をも英訳したので国際性も備えているといえるためAとした。 独創性：遊びの概念を掘り下げ、美術品を見直す展覧会はこれまでにないという点でオリジナリティ、発想・着想、新規性は顕著な成果が認められるかもしれないが、準備期間も短く、収蔵品のための事業であるため卓越性のある成果を得られたとは言い難いためSではなくAとした。 発展性：遊びの概念の多様性にそって美術品を配置すること自体は無限の発展性があるといえるが、当館で同じ作業を繰り返すことはおそくない。しかし、以前、当館で実施した動物をテーマにした展覧会のように、他館の活動での応用性・汎用性、影響性などを考慮すると概ね成果が認められると思われ、Bとした。 効率性：短い準備期間に、限られた既存の人的・設備的資源を用いて行った事業としては極めて顕著な成果が認められたと考えSとした。 継続性：展覧会に向けた期間限定の調査研究としては、メディア各社にも取り上げてもらえるような質的、量的な成果をあげられたと考える。個々の作品を画像とともに解説するという基礎性も備えているためAとした。 正確性：当館の収蔵作品を担当する全分野の研究者が関わり、一般観覧者に公開できる成果を128件の作品について実現しており、数値的にも網羅性という観点からも十分な成果を上げたと考えAとした。						

2. 定量的評価

観点	出品作品	新規撮影作品				
判定	A	A				
判定理由 出品作品・新規撮影作品： 遊びの概念を掘り下げ、かつ個々の作品の魅力を味わうのに必要にして十分な作品数を集めることができ、その3分の1に当る作品数について、初めて印刷物に掲載する画像を撮影することができたため十分な成果を挙げたと判定。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	短い準備期間に、決められた空間に合わせて、収蔵品のみを用いて、ひとつのテーマを掘り下げ、かつ一般観覧者が楽しめる内容をまとめ、収蔵品の研究を進めることができた。日本美術の素養のない海外からの来館者でも十分に楽しめる内容であったにもかかわらず、人的・時間的・予算的制限のため完全和英二カ国語図録を作れなかった点には改善の余地がある。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画のとおり、決められた日付に合わせて一定水準の内容をまとめることができ、収蔵品の活用や収蔵品に関する資料の蓄積も図れたため、年度計画を100%達成できたと考える。

【書式B】
(様式1)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-4-2

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進。		
プロジェクト名称	4)-2 特別展覧会「魅惑の清朝陶磁」に関する調査研究(学術研究助成基金助成金)((5)-①)		
【事業概要】 特別展覧会「魅惑の清朝陶磁」(25年10月12日～12月15日)に関する調査研究 平成25年度事業として予定している特別展覧会『魅惑の清朝陶磁』の開催に向けて、出品候補作品の選定を進めるべく、日本国内で伝世・出土した清朝陶磁と、清朝陶磁の影響下に製作された日本陶磁を広く調査し、展覧会内容の充実を図る。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	工芸室長 尾野善裕
【スタッフ】 岡田愛(列品管理室員)、谷口愛子(京都工芸繊維大学特任准教授・調査員)、梶山博史(兵庫陶芸美術館学芸員・調査研究支援ボランティア)、森下愛子(泉屋博古館分館学芸員・調査研究支援ボランティア)			
【主な成果】 研究成果の公表として計画した特別展覧会『魅惑の清朝陶磁』展示作品の調書212件を作成すると共に、図録・資料用写真の撮影に務めた。			
【年度実績概要】 ・平成25年度に開催を計画している特別展覧会「魅惑の清朝陶磁」に向けて、出陳作品の選定を進めるため、候補作品を所蔵している個人宅・今右衛門古陶磁美術館・香蘭社・角屋保存会・田中本家博物庫・古美術商・彦根城博物館・静嘉堂文庫美術館・徳川美術館・大阪歴史博物館・大阪市立美術館などにて作品調査を行った。 ・出陳作品の図録・資料用写真約270枚を撮影した。 ・永年にわたって作品を寄託してこられた個人所蔵者2名から、展示候補作品を含む60件に及ぶ作品の寄贈を受けた。 ・展覧会準備の過程で知りえた新情報に基づいて、積極的に成果公表を行うべく、図録に論文1本(①)を掲載したほか、陶磁専門誌に1本(②)を寄稿し、特別展への観客動員に務めた。			
【実績値】 調査日数(館外) のべ24日 調書作成件数 212件 新規寄託品数 57件 論文等数 2本(①、②) (参考値) 図録・資料用写真枚数 約270枚			
【備考】 論文等 ①尾野善裕「清朝陶磁と日本」『特別展覧会 魅惑の清朝陶磁』読売新聞社 ②尾野善裕「清朝官窯と近世日本」『陶説』第728号 日本陶磁協会			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	S	A	
判定理由 適時性：平成25年度の特別展覧会開催に向けて、必要不可欠。ゆえにAと評価する。 独創性：これまで、美術史研究の上では殆んど注目されてこなかった日本伝世の中国清朝陶磁を意識的に採り上げ、出土品とも比較できるように構成した展覧会は過去開催されたことがなく、展覧会の企画自体は十二分に独創性を持つものにできると自負している。 発展性：過去、等閑視されてきた日本伝世の中国清朝陶磁の存在が周知されれば、新たな作品の発見につながる確率が高い。 効率性・継続性：展覧会出陳作品の半数以上について、写真撮影を行う必要があったが、極めて短期間の間にそれを効率的に完遂し、270枚に及ぶ高解像度写真を撮影することができたため、効率性をS、継続性をAと評価する。						

2. 定量的評価

観点	調査日数	調査作成件数	新規寄託品数	論文等数		
判定	A	A	A	A		
判定理由 調査日数・調査作成件数：特別展覧会を開催するべく、優先的業務として取り組み、必要かつ十分な数を確保できたのでAと評価する。 新規寄託品数：昨年の寄託品数22件をはるかに上回る57件の寄託を受けることができ、これにより展覧会の開催に向けて業務を大きく前進させることができたため、Aと評価する。 論文等数：科学研究費の交付を受けた調査研究事業としては、調査成果を展覧会図録に反映させると共に、陶磁専門誌に1本(②)を寄稿し、特別展への観客動員に務めることができたので、Aと評価する。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	今年度最大の目標であった、中間報告としての特別展覧会の開催に無事こぎつけることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査の進捗は極めて順調であり、対外的な成果公表についても実現できている。

【書式B】
(様式1)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-4-3

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進。		
プロジェクト名称	4)-3 特別展覧会「南山城の古寺巡礼」に関する調査研究 ((5) -①)		
【事業概要】 特別展覧会「南山城の古寺巡礼」(26年4月22日～6月15日開催予定)に関する調査研究 平成26年4月22日～6月15日の開催予定である特別展覧会「南山城の古寺巡礼」に関して、展覧会出陳予定作品の調査研究を行う。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	企画室長 宮川禎一
【スタッフ】 呉 孟晋(列品管理室研究員)、末兼俊彦(企画室研究員)			
【主な成果】 京都府南部南山城地域に立地する古寺、海住山寺・笠置寺・岩船寺・浄瑠璃寺・神童寺・蟹満寺・寿宝寺・観音寺・一休寺・禅定寺を調査対象として文化財の調査を行い、その成果をもとに特別展覧会の準備を進めた。			
【年度実績概要】 25年度中に出品交渉を行った寺院美術館を記すならば、まず上記の南山城地域所在の古寺院10寺のほか、醍醐寺・金胎寺・仁和寺・真輪院・西寿寺・鶯瀧寺・御霊神社・興聖寺・袋中庵・安楽寿院・法性寺・勸修寺・大和文華館・大阪市立美術館・奈良国立博物館・木津川市教育委員会・京田辺市教育委員会・井手町教育委員会・京都府埋蔵文化財調査研究センター・京都大学総合博物館である。いずれの寺院機関へも直接訪問して出品のお願いをし、作品の調査をし、写真の提供・撮影もあわせてお願いした。 展覧会への作業は順調に進行しており、26年4月からの展覧会に全て間に合う予定である。			
【実績値】 出品予定作品数 137件 出陳予定機関数 30ヵ所 (参考値) 国宝・重要文化財件数 28件(国宝2件、重要文化財26件)			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-4-3

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	B	A	A	B	
判定理由 適時性：平成26年4月22日～6月15日に開催される展覧会にあわせた準備で適時であった。 独創性：今まで取り上げられることの少なかった南山城地域の古寺伝来文化財に焦点をあてた独創的な展示であるため。 発展性：展覧会準備を通じて近隣寺院の文化財の情報が集まり展示に厚みが加わった。 効率性：京都近郊の寺院であり、アクセスが容易なため再調査などが順調に行うことができた。 継続性：今後の社寺調査の方向性を考えることができた。						

2. 定量的評価

観点	出品予定作品数	出陳予定機関数				
判定	A	A				
判定理由 出品予定作品数：予定していた作品数120件を超える140件ほどの出陳作品の承諾を得た。うち、指定品件数は国宝2件、重要文化財26件である。 出陳予定機関数：基本10ヶ寺のほか約20箇所から出陳の許可を得た。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	概ね予定した作品の出陳が叶ったが、観音寺の本尊十一面観音立像（国宝）や浄瑠璃寺の秘仏吉祥天立像の出陳ができなかったことがやや残念である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	ほぼ順調に作品選定が進んでおり、意図どおりの展覧会が開催できる予定である。

【書式B】
(様式1)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-5

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進。		
プロジェクト名称	5) 収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究 (5) -①)		
【事業概要】 館蔵品・寄託品・それらの関連品及び今後収集・展示の対象となりうる文化財を調査研究し、あわせて保存・展示・公開に関する調査研究を進める。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長 村上 隆
【スタッフ】 尾野善裕（工芸室長）、山川 暁（教育室長）、浅湫 毅（保存修理指導室長）、永島明子（列品管理室主任研究員）、水谷亜希（教育室研究員）、羽田 聡（企画室主任研究員）			
【主な成果】 館蔵品・寄託品・それらの関連品及び今後収集・展示の対象となりうる文化財と、その周辺領域に関して、美術史・歴史学・考古学・博物館学等の各見地から調査研究を実施し、各種学会等・学術雑誌等でその研究成果を発表した。			
【年度実績概要】 ・研究会等で発表を行った。 ・学術雑誌他出版物に論文等を掲載した。			
【実績値】 ・学会・研究会等発表件数：5 件 ・論文等掲載数：30 編			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4512-5

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：特別展覧会との関連のものを重視しつつ研究を行っているため。 独創性：京都に伝わる当館収蔵品・寄託品を素材とした研究を重点的に行っているため。 発展性：魔鏡に代表される今後の発展が期待される研究を多く行っているため。 効率性：平常展示館準備など他の業務に多く時間を割かれながらも、多くの研究を実施しているため。 継続性：当然のことであるが各研究者は継続して研究、成果発表を行っているため。 正確性：調査は綿密に行い確実な記録に基づいた研究を行っているため。						

2. 定量的評価

観点	学会・研究会等 発表件数	論文等掲載数				
判定	A	A				
判定理由 学会・研究会等発表件数：研究機関の規模及び業務の繁多を考慮した上で、十分な成果をあげている。 論文等掲載数：研究機関の規模及び業務の繁多を考慮した上で、十分な成果をあげている。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	十分な調査研究成果の公開を行い、絵画・書跡・工芸・考古・歴史資料などの各ジャンルにわたり、最新の学術情報を盛り込んだ情報を発信しえた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	研究計画に基づき、順調に進捗している。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 館蔵品・寄託品等の基礎的・総合的調査を進め、展示内容の充実と適切な収集につなげる。 ((5)－①)		
【事業概要】 社寺・団体・個人等所蔵の文化財に関する情報を恒常的に収集して新規購入・寄贈・寄託候補作品をリストアップし、綿密な調査に基づく調書を作成して陳列品鑑査会に付議し、コレクションの充実を図る。新収蔵品はもちろんのこと、既存の館蔵品・寄託品についてもより詳しく調査し、その成果を名品展や特別展・特別陳列等に反映させる。調査に際しては積極的に客員研究員・調査員の助言を仰ぎ、客観的で信頼度の高い成果を得ることに努める。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	部長 西山 厚
【スタッフ】 岩田茂樹（美術室長）、内藤栄（工芸考古室長）、吉澤悟（情報サービス室長）、岩井共二（教育室長）、宮崎幹子（資料室長）、谷口耕生（保存修理指導室長）、野尻忠（企画室長）、清水健（主任研究員）、岩戸晶子（列品室員）、斎木涼子（教育室員）、北澤菜月（美術室員）、山口隆介（情報サービス室員）、永井洋之（工芸考古室員）、原瑛莉子（企画室員）			
【主な成果】 仏教美術や奈良に縁の深い文化財を中心に、当館の収蔵品として相応しいものを、新たに館蔵品・寄託品に加えることができた。全ての文化財の受け入れに当たっては、詳細な現品調査に加え、日頃の研究成果を取り入れた文化財調書を作成した。受け入れた文化財は、名品展において可能な限り積極的に展示して、成果を広く一般に還元するとともに、調査を通じて培われた研究蓄積は各種刊行物に反映させた。			
【年度実績概要】 ・購入 3 件、寄贈 25 件、寄託 49 件を受け入れるにあたり、綿密な調査に基づく調書を各担当研究員が作成した。 ・木造阿弥陀如来立像（浄教寺蔵）の寄託を受け、名品展「珠玉の仏たち」で 25 年 9 月 20 日～26 年 3 月 31 日の間、展示した。 ・木造善導大師坐像（當麻寺念佛院蔵）、木造薬師如来坐像（見徳寺蔵）及び金銅仏 7 件（個人蔵）の寄託を受け、名品展「珠玉の仏たち」で 25 年 12 月 25 日～26 年 3 月 31 日の間、展示した。 ・個人蔵の春日若宮祭礼図・鷹狩図屏風の寄託を受け、特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」（会期：25 年 12 月 7 日～26 年 1 月 19 日）」で展示した。 ・客員研究員及び調査員の助言を仰ぐための調査会を 28 回実施した。			
			
			木造薬師如来坐像（見徳寺蔵）
【実績値】 購入・寄託に向けた文化財調書の作成枚数 77 件分 展示への反映 11 回 客員研究員・調査員の調査回数（延べ人数） 28 回（31 人）			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：寄託・購入・寄贈とも、時宜に適ったものを受け入れることができた。 独創性：当館が得手とする仏教美術品を、新出資料も含めて多数調査し、受け入れることができた。 発展性：新出資料を受け入れたことは、今後の研究の発展が大いに期待できる。 効率性：研究員数も予算も限られている中で、数多くの調査を作成し、文化財の寄託等を受け入れることができた。 継続性：当館が50年以上にわたり活動の中心に据えてきた仏教美術研究の基礎に基づき、調査・収集・展示をできた。 正確性：購入・寄贈のために作成した文化財調査書は、外部委員による審査においても了承される的確な内容であった。						

2. 定量的評価

観点	購入・寄託に向けた 文化財調査書 作成枚数	展示への反映	客員研究員・ 調査員の調査回数			
判定	S	A	A			
判定理由 文化財調査書作成枚数：新規に受け入れた文化財の件数が例年（22年度21件、23年度16件、24年度16件）より多い77件であり、その全てについて調査書を作成できた。 展示への反映：展示会場の広さに制限が多いなかで、受け入れた文化財のうち11件を年度内に展示できた。 客員研究員・調査員の調査回数：限られた時間のなかで、28回の調査会を実施できた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	仏教美術及び奈良関係の文化財を中心としたコレクションの充実や、館蔵品・寄託品の有効な活用に向けた調査と研究は、これらの分野における調査・研究・展示において主導的な役割を果たしてきた当館にとって、最も基本的な活動の一つである。本年度も、これまでと同様、質・量ともに、上述のような社会的要請に応えるに十分な実績を上げることができた。次年度以降も同様の研究活動を継続していくことが当館の責務である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	文化財調査に基づく館蔵品・寄託品の計画的収集や効果的な展示など、有形文化財の保存と活用を促進するという目標に沿って、文化財の基礎的かつ総合的な調査を着実に進め、成果を積極的に公表している。中期計画の当該項目に対しては、現在のところ順調に進展している。次年度以降も現状の業務サイクルを展開することで、実績を蓄積していく。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2) 館蔵品・寄託品研究の基礎となる文化財調査を積極的に実施する。(⑤)－①)
【事業概要】 文化財の調査及び研究活動を、歴史学・考古学・美術史学といった各研究員の専門分野に沿い、個人もしくはグループを単位として、仏教学・国文学・文化人類学等の周辺学問分野にも目配りした幅広い視野に立って実施する。その研究成果は、当館の展示活動に反映するとともに、展示に直結する館蔵品・寄託品研究にも反映させ、口頭発表や執筆物によって積極的に公表する。	
【担当部課】	学芸部
【プロジェクト責任者】	部長 西山 厚
【スタッフ】 岩田茂樹（美術室長）、内藤栄（工芸考古室長）、吉澤悟（情報サービス室長）、岩井共二（教育室長）、宮崎幹子（資料室長）、谷口耕生（保存修理指導室長）、野尻忠（企画室長）、清水健（主任研究員）、岩戸晶子（列品室員）、斎木涼子（教育室員）、北澤菜月（美術室員）、山口隆介（情報サービス室員）、永井洋之（工芸考古室員）、原瑛利子（企画室員）、佐々木香輔（資料室員）	
【主な成果】 各研究員がそれぞれの専門分野に沿って文化財調査を実施し、その成果は展示・刊行物・講座における文化財解説等に反映された。調査・研究活動にあたっては、これを個人単位で展開するだけではなく、研究分担者・連携研究者として各種科研に参画するなど、外部の研究プロジェクトにも積極的にに関わり、より広い視野に立って学界に貢献する実績を上げた。	
【年度実績概要】 - 各研究員が各々の専門分野に沿って文化財調査を実施し、その成果を特別展・特別陳列・名品展における会場パネル解説等と、各展示図録掲載の解説等に反映させた。 - 毎月1回、講堂で実施するサンデートークにおいて、各研究員が各々の専門分野に沿った、多彩な調査と研究の成果の一端を発表した。 - 各研究員が各々の専門分野に沿った文化財調査を実施し、その成果の一端を「奈良国立博物館だより」、読売新聞の連載「奈良博手帖」、特別展「當麻寺」「みほとけのかたち」「正倉院展」会期中の新聞連載での展示品解説で紹介した。 - 十一面観音立像（海龍王寺）を同寺において調査・撮影した（25年4月16日、5月9日・16日～18日） - 海住山寺が刊行する『海住山寺の美術』の編集に全面的に協力し、現地調査等を実施した（25年8月1日） - 東大寺での経巻聖教調査に参加した（25年6月28日） - 法華寺において仏像を調査した（25年11月28日） - 科学研究費「近江の古代中世彫像の基礎的調査研究」（基盤研究(B)24320032）に研究分担者として参画。 - 科学研究費「多数尊から構成される仏教尊像に関する調査研究」（基盤研究(B)24320034）に研究分担者として2名参画。 - 科学研究費「東大寺史の総合的再構成」（基盤研究(B)24320129）に研究分担者として参画。 - 科学研究費「平安時代の『大般若波羅蜜多經』遺品の総合的調査と歴史研究資料としての資源化」を研究代表者として主宰。	
	
『海住山寺の美術』誌面	
【実績値】 口頭発表（うちサンデートーク実施回数12回）19回、論文等発表本数11本（①～⑪）、新聞等掲載の作品解説13回	
【備考】 ①岩田茂樹「キンペル美術館・快慶作木造釈迦如来立像について」『MUSEUM』646号、10月15日 ②岩田茂樹「海住山寺の彫刻－近年の調査の成果から、平安時代を中心に－」『海住山寺の美術』、海住山寺、10月26日 ③内藤栄「華籠を持った飛天」『薬師寺』第一七六号、法相宗大本山薬師寺、6月 ④内藤栄「鳳凰堂と金色堂－雲中供養菩薩の有無をめぐる－」平等院鳳凰堂平成修理完成記念『天上の舞 飛天の美』、サントリー美術館、11月 ⑤野尻 忠「万昆嶋主解（天平宝字二年七月二十八日）（紙背 写千巻経所食物用帳断簡）（口絵解説）」、『正倉院文書研究』、11月10日 ⑥吉澤悟「古代火葬墓の変遷」『事典 墓の考古学』、吉川弘文館、5月30日 ⑦吉澤悟「墓塔の成立と変遷」『事典 墓の考古学』、吉川弘文館、5月30日 ⑧清水健「特別講演 『那智瀧図』に迫る」『第5回熊野学フォーラム－熊野を描く神品をめぐる－一国宝『那智瀧図』聖性！報告書』、新宮市教育委員会、3月 ⑨斎木涼子「平安時代の護国国会」『年中行事・神事・仏事 生活と文化の歴史学2』、竹林舎、4月 ⑩斎木涼子「中世的天皇像の形成－仏教・神祇と金輪聖王－」『歴史の理論と教育』一三九、名古屋歴史科学研究会、7月 ⑪斎木涼子「後七日御修法」『週刊 新発見！日本の歴史』平安時代2、朝日新聞出版、9月	

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：當麻曼荼羅が完成して 1250 年の節目の年に特別展「當麻寺」を開催し、調査成果を反映した図録を刊行するなど、時宜に適った研究を発表できた。 独創性：「装飾文様のかたち」など、当館の長年の蓄積に基づかなければ成し得ない研究発表を実施できた。 発展性：特別展「當麻寺」に関わる各所での文化財調査は、新たな資料の発見もあり、今後の研究の進展が期待される。 継続性：美術史学の研究者を継続的に擁する当館ならではの研究発表、例えば「描かれた仏像―靈驗仏のかたち」などを実施することができた。 正確性：各刊行物での執筆物に対し、内容の信頼性を疑うような批判がなされたことはなく、その正確性は高い水準で保たれていると言える。						

2. 定量的評価

観点	口頭発表	論文等 発表本数	新聞等掲載の 作品解説			
判定	A	A	A			
判定理由 口頭発表：当初計画どおり毎月 1 回のサンデートークを実施するなど、各研究員の専門性を生かした文化財研究の成果を公表できた。 論文等発表本数：必要な論文を的確に発表することができた。 新聞等掲載の作品解説：展覧会事業にも対応しながら、着実な実績をあげられた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	仏教美術及び奈良関係の文化財を収蔵する当館にとって、各研究員各種文化財を調査しそれぞれの専門分野の観点から研究を展開・進化させることは、展示内容の充実に直結する重要な活動である。今年度も多数の文化財調査及び研究活動を企画し、また参画することができた。次年度以降も、これまでの実績に甘んずることなく、継続的に本事業を展開していく。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	今年度は多数の文化財を調査することができた。調査は、当館研究員の深い学識と経験に裏付けられた高度なものであり、仏教美術及び奈良関係の文化財調査においては当館の活動は他者の追随を許さない高いレベルにある。こうした調査は、中期目標に掲げる「研究の推進」のために不可欠の基礎作業であり、地に足のついたこれらの仕事が当館の展示活動にも多大なる影響を及ぼす。次年度以降も、この研究体制を維持することができれば、着実な研究成果を積み上げることができる。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4) 平安時代の大般若経を総合的に調査し、歴史資料としての資源化を進める(学術研究助成基金助成金)(5)－①)		
【事業概要】 平安時代に日本で書写された『大般若波羅蜜多經』(略して「大般若經」とも)の網羅的な調査を通じて、当該期における写經の形態的特徴を明らかにするとともに、写經遺品から得られる情報を歴史学の研究資料として利用するための基盤を構築しようとするものである。平安時代のなかでも9～11世紀のものは情報の共有が不足しているため、本研究ではその時代に書写された『大般若波羅蜜多經』の基礎データの蓄積に重点を置く。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	企画室長 野尻忠
【スタッフ】 齋木涼子(教育室員)、永井洋之(工芸考古室員)、佐々木香輔(資料室員)			
【主な成果】 平成25年度は、安倍小水麻呂願經と呼ばれる貞観13年(871)の願文を持つ大般若経を集中的に調査した。スタッフ一同で協力し、125巻を巻頭から巻末まで全て開いて調書を取るとともに、写真撮影して今後の追加調査や報告書刊行に備えた。調査の過程では、各巻によって料紙や書風に相当の差異のあることが認識され、全体像を把握するための基本情報を獲得することができた。			
【年度実績概要】 ・当館に寄託されている大般若経(安倍小水麻呂願經)(慈光寺所蔵)の調査会を、年度内に9回実施し、125巻を調査した。 ・25年7月27日、五島美術館において奈良・平安時代の文字資料を調査した。 ・26年1月15日、正倉院文書や木簡、典籍など奈良・平安時代の史料を調査した。 ・26年2月17日、東洋文庫において安倍小水麻呂願經の僚巻を調査した。また、あわせて8世紀末の大般若経(魚養経)の原本も調査した。			
			
大般若経(安倍小水麻呂願經)調査会 26年1月24日			
【実績値】 文化財調書作成枚数 125巻 発表論文・講演等 2回(①～②)			
【備考】 発表論文講演等 ①野尻 忠「金光明最勝王経(百済豊虫願經)書誌解題」、総本山西大寺編『国宝 西大寺本 金光明最勝王経 天平宝字六年百済豊虫願經』、勉誠出版 ②野尻 忠「古文書めぐり 奈良国立博物館の古文書」、『古文書研究』76号			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：これまで九世紀の写経に関する研究は前後の時代に比べて手薄であり、調査と研究の進展が望まれていた。 独創性：長く研究の必要性が認識されながら、着手されていなかった安倍小水麻呂願経の全巻調査に、初めて本格的に取り組んだ。 発展性：本研究で出した成果は、同時代の他の写経研究の参考に資するであろうし、前後の時代の大般若経調査にも有用な情報を提供し、研究の発展に繋がることが期待される。 継続性：古写経研究は、当館がこれまでも一貫して取り組んできたものであり、今後もその方針は変わらない。今回の調査で培ったノウハウは、今後も継続予定の写経原本調査に生かされることが期待される。 正確性：多数巻の写経調査であるが人数を多くは動員せず、限られた研究者による調査作成に徹しているため、調査の正確性は高い。加えて、写真撮影は調査と照合しながら進めており、再チェックの機能も果たしている。さらに、調査は後日、プロジェクト責任者による再確認も実施している。						

2. 定量的評価

観点	文化財調査 作成枚数	発表論文・講演等				
判定	S	A				
判定理由 文化財調査作成枚数：当初は全140巻を3年かけて調査する予定であったが、1年で125巻に達したため、特に優れた成果をあげていると言える。 発表論文・講演等：研究成果を複数回発表することができた。						

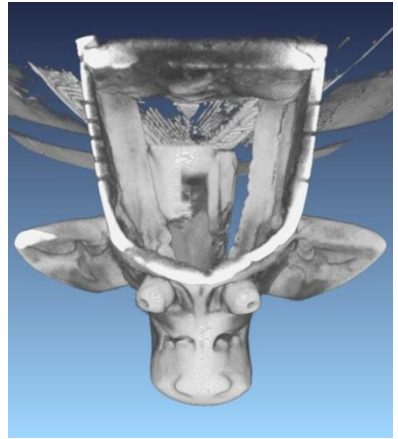
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	平安時代写経史研究において、すでにある程度の蓄積がある12世紀は措くとして、それ以外の9～11世紀については、このプロジェクトが初めての本格的研究と言えよう。そのなかで、9世紀のまとまった写経として著名な安倍小水麻呂願経を集中的に調査できたことは、大きな成果をあげたと言える。次年度に向けては、残りの巻数を調査し、さらに流出分の調査も本格的に開始することを目標とし、調査の精度をさらに上げることを改善点としたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	上記のとおり本研究は順調に成果をあげている。中期計画の「文化財に関する調査及び研究の推進」における本研究の役割としても、重要な成果をあげたと言える。次年度も、このペースでの調査と研究を進める。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1) X線CTスキャナによる青銅器・彫刻・漆工などの構造技法解析((5)－①)
【事業概要】 日本国内で最も優れた中国古代青銅器コレクションである住友コレクションを所蔵する泉屋博古館の所蔵品 180 点を中心に、日本国内で所蔵されている中国古代青銅器を調査する。古代中国青銅器の鑄造技術の解明のための採り得る方法として、①X線CTスキャナ調査、②3次元計測による調査、③3次元プリンタによる造形出力、④鑄造実験による検証を実施する。	
【担当部課】	学芸部博物館科学課
【プロジェクト責任者】	課長 今津節生
【スタッフ】 谷豊信（学芸部長）、河野一隆（企画課文化交流展室長）、市元壘（企画課特別展室主任研究員）、鳥越俊行（文化財課資料登録室主任研究員）	
【主な成果】 泉屋博古館の所蔵品を中心にX線CT、3Dデジタイザ、三次元プリンタ等の科学調査機器を用いて、中国古代青銅器の内部構造データを系統的に集積したデジタルアーカイブを構築した。この研究成果を中国国内の研究者に公開するために、中国科学院自然科学史研究所と協力して編集を進めた。	
【年度実績概要】 ・CT調査や3Dデジタイザによる精密三次元計測を実施した。得られた成果は、文化交流展の展示に活用している。 ・中国古代青銅器の鑄造技法の解明 西周初頭（紀元前11世紀後半）と考えられる饗簋（とうてつもんき）を調査した。持ち手と器本体との接続部分をみると、接合痕跡は無く、完全に一体で鑄造したと考えられる。ところが、同時代に製作された日癸罍（にっきらい）には器本体から出ホゾのような突起があり、さらに出ホゾと持ち手との間にごくわずかな隙間が存在することが確認できた。 このことから同時代の青銅器の持ち手の製作技術に2種類の方法が存在することが明らかになった。 ・技術史的成果 日癸罍のような、あらかじめ製作しておいた持ち手を本体の鑄型にはめ込んで全体を鑄造する方法は、これまで戦国前期に製作された鼎（てい）で知られるのみであった。今回の調査でこの方法が戦国時代から5百年ほど遡る西周初頭の段階で、すでに採用されていたことが確認できた。	
	
饗簋文簋の持ち手の構造	
【実績値】 調査回数：6回 資料収集数：12点 学会研究会等発表：1件（①）	
【備考】 学会研究会等発表 ①「X線CT（3D-CT）を用いた文化財の状態調査」東アジア文化遺産学会 25年9月4日	

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4514-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：CT調査は形状や保存状態の把握に大きな効果がある。 独創性：我が国の博物館で唯一、非破壊で文化財の構造調査や三次元計測、三次元造形を行うことができる。 発展性：X線CT・3Dデジタイザ・三次元プリンタによる調査研究は適用範囲が広く、得られる結果も多様である。 効率性：X線CT・3Dデジタイザ・三次元プリンタは短時間でデータを取得できるので時間的投資効果が大きい。 継続性：非破壊で採取した計測データを基に、短時間で内容豊富な質の高い基礎情報を蓄積することができる。 正確性：X線CTでは文化財内部の構造を約0.2mm、3Dデジタイザでは0.02mmの高精度で記録することができる。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	資料収集数	学会研究会 等発表			
判定	A	A	A			
判定理由 調査回数：計画通り実施することができた。 資料収集数：予定通り実施することができた。 学会研究会等発表：計画通り実施することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化交流展示室で展示した泉屋博古館など中国古代青銅製品について調査を実施することができた。次年度も、展示借用計画と連動して計画的な調査を実施したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当初計画にそって研究内容の水準を保ちながら順調に遂行している。引き続き外部資金を積極的に活用しながら研究を継続したい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2) 平成 20 年度に開催した特別展「工芸のいま 伝統と創造」の成果を基礎とした九州・沖縄の伝統工芸作家についての継続的かつ発展的な調査研究((5)－①)
【事業概要】 九州・沖縄における伝統工芸作家の創作活動についての継続的調査研究である。無形文化財としての伝統技術と、そこから生まれる新たな創作について、それぞれの作家の取り組みを調査する。これまで調査を行ってきた作家の調査を継続するとともに、新たな作家を調査対象に加えていく。	
【担当部課】	学芸部
【プロジェクト責任者】	部長 谷豊信
【スタッフ】 原田あゆみ（企画課特別展室主任研究員）、池内一誠（交流課主任研究員）、遠藤啓介（展示課研究員）、望月規史（文化財課アソシエイトフェロー）	
【主な成果】 平成 25 年度西部工芸展、日本伝統工芸展、西部染織作家展など、本年度開催の工芸展において作品調査を行った。また、伝統工芸の技術や素材をわかりやすく紹介するための体験プログラムの開発のため、博多人形や久留米絣等の工芸作家の工房を訪れ、制作方法や使用素材について調査を行った。	
【年度実績概要】 ・久留米絣工房の調査においては、工房を離れた場所で展開可能な体験プログラムについて調査を行い、藍の生葉を使用した染織体験実施の際の素材や用具、実施方法について検討を行った。 ・博多人形工房の調査を元に、未就学児向けの人形絵付け体験プログラムの展開方法について考察し、26 年 2 月に実施した館ボランティア主導による体験プログラム実施に反映させた。	
 博多人形工房の調査風景 (絵付けの実際を見学)	
【実績値】 調査回数 7 回 作家に関する調査 4 回（久留米絣、博多人形） 全体的な状況調査 3 回（西部工芸展、日本伝統工芸展、西部染織作家展） 展示への反映 17 件 体験型展示室「あじっぱ」における九州・沖縄の染織作品展示 （久留米絣 5・琉球絣 3・宮古上布 2・喜如嘉の芭蕉布 2・紅型 3・首里織 2）	
【備考】	

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4514-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：染織・人形の作家の調査を通じて、作家の現時を知ることができ、必要不可欠の調査をすることができた。 独創性：博多人形の調査は従来行われておらず、今後の成果が期待できる。 発展性：作家の調査を通じて、変化していく作品をとらえることができた。 効率性：限られた時間・研究員で調査できることを最大限行った。 継続性：伝統工芸展開催以降、長期にわたる調査研究を行っており、十分に成果が認められる。 正確性：全体的な状況調査を行っており、主要な工芸分野の動向を把握することができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	展示への反映				
判定	B	A				
判定理由 調査回数：目標の8割の調査を実施することができた。 展示への反映：目標を達成することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	九州・沖縄の伝統工芸の調査は、伝統工芸の継承者から伝統工芸の発展に寄与するものと高く評価されている。 博多人形という新しい分野の調査を開始し、教育普及プログラム開発やボランティア活動と連動させることにより、新たな展開への道を開いた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	平成20年度に開催した工芸展の成果を継承し、さらに広がりをもつことができた。本年は調査対象の分野がやや限られた感があり、陶芸・金工などの分野についてもさらなる調査が必要である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 日本の中世の工芸、特に茶道具に関する調査研究((5)－①)		
【事業概要】 毎年行われるトピック展示「茶の湯を楽しむ」を行うにあたって、それに伴う日本の中世から近世にかけての茶道具（特に陶磁器、漆器、金工、染織など）の基礎的な研究を行う。煎茶の普及に大きな役割を果たした売茶翁没後 400 年の本年は、抹茶と並んで日本の喫茶文化を特徴付ける煎茶に焦点を当てた。特に、京都・萬福寺伝来の煎茶具や九州ゆかりの煎茶具を調査し、その展示を行う。			
【担当部課】	展示課	【プロジェクト責任者】	展示調整室研究員 遠藤啓介
【スタッフ】 望月規史（文化財課アソシエイトフェロー）			
【主な成果】 九州各地に残る煎茶具をクローズアップすることで、これまであまり注目されてこなかった資料の掘り起しができた。特に、竹田市立歴史資料館所蔵資料は、九州出身の文人として知られる田能村直入（たのむらちよくにゅう）の煎茶趣味を、目に見えるかたちで紹介することができた。また、奈良大学博物館所蔵の板木については、これまで紹介されることが少なかった資料であるが、本展の展示においてひろく観覧をしてもらう契機となった。			
【年度実績概要】 ・4 階文化交流展示室（関連 11 室）にて、トピック展示「茶の湯を楽しむVI 特別編 煎茶の世界」を行った。その結果、我が国の喫茶文化の解明に資する展示を行うことができた。また、茶道具の展示のみにとどまらず、黄檗宗との関係、江戸時代の出版文化が果たした役割などにも注目することで、煎茶をとりまく世界とその魅力について、広く紹介することができた。 ・また、黄檗文化を研究する各地の研究者や、煎茶道の家元から大きな反響があり、様々な意見交換の機会を得ることができた。例えばそれは、萬福寺文華殿で黄檗宗を総合的に研究している田中智誠氏や、奈良大学で江戸時代の版本研究を推進している永井一彰氏、煎茶文化の大家として知られる大槻幹郎氏など、普段の博物館活動ではなかなか知りえる機会のない方々との交流を果たすことができる契機とすることができた。			
			
展示室風景			
【実績値】 調査回数 8 回 於：萬福寺（2）、京都国立博物館、高取友仙窟、奈良大学、煎茶美風流、鍋島報效会、竹田市立歴史資料館 展覧会数 1 回 トピック展示「茶の湯を楽しむVI 特別編 煎茶の世界」25 年 10 月 1 日～12 月 1 日 報告書・図録等 2 件（リーフレット及び紹介記事①～②）			
【備考】 リーフレット ①「茶の湯を楽しむVI 特別編 煎茶の世界」展示解説リーフレット（25 年 10 月） 紹介記事 ②「一碗から始まる風雅の世界」『目の眼』10 月号（25 年 9 月 2 日）			



展示室風景

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4514-3

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	S	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：煎茶道の祖、売茶翁没後 400 年の記念の年に展覧会を開催することができた。 独創性：茶道具だけでなく、煎茶普及に版本が果たした役割について紹介することができた。 発展性：煎茶の魅力を多くの来館者に知ってもらい、続編を希望する声を多数頂いた。 効率性：文化交流展示の枠組みのなかで、遅滞なく作業を進めることができた。 継続性：萬福寺はじめ各所のご所蔵者からご厚意を受け、今後も当館の活動に理解を得ることができた。 正確性：限られた予算枠の中で、可能な限りの調査を行うことができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	展覧会数	報告書・図録等			
判定	A	A	A			
判定理由 調査回数：ご所蔵者からの様々なご配慮により、計画通り実施することができた。 展覧会数：滞りなく計画通り実施することができた。 報告書・図録等：所定の計画通り実施することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	「売茶翁没後 400 年」という煎茶の歴史における記念の年に展覧会を開催することができ、極めて時宜に叶った調査研究となった。また、煎茶の企画自体、開館以来初めての試みであり、多くの注目を集めることができた。この企画を通じて得られた知見や各ご所蔵者との信頼関係は、次年度における調査研究を、更に発展させるための基盤となるものである。

4. 中期計画の実施状況の確認

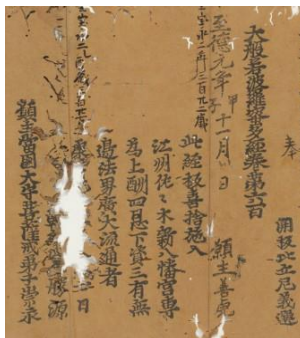
判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	茶道具に関する調査研究は、これまで行ってきた抹茶だけでなく、煎茶の世界にまで広がりをみせるものとなった。このことは、中世工芸の様相を明らかにするばかりでなく、それが近世においてどのような影響を与えているのかにまで及ぶ調査結果を得るまでに至っている。我が国で展開した工芸の魅力や喫茶文化の豊かさを解明する上で、本年度は多くの成果を得ることができた。

【書式B】
(様式1)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4514-4

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4) 中世大般若経の史料学構築に向けての基礎的研究（学術研究助成基金助成金）（(5)－①）		
【事業概要】 日本中世の大般若経に関する資料を収集し、日本史研究に資する。このため、既刊史料を広く検索するとともに、主要な大般若経や料紙の調査、大般若経関連遺跡の調査を実施する。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	前保存修復室長 藤田励夫
【スタッフ】 森實久美子（企画課特別展室研究員）			
【主な成果】 大般若経の漢訳を行った玄奘三蔵の関連遺跡を調査した。特に訳経事業が行われた大慈恩寺の調査では、事業の行われた故地を調査することができた。カリフォルニア大学バークレー校東アジア図書館所蔵の「崇永版」大般若経は、600巻がほぼ完存しているもので、中世版本大般若経研究にとって極めて貴重である。これらの全巻調査を実施できた意義は大きい。また、前年度に引き続き、史料集から基礎史料を収集した。			
【年度実績概要】 ・中国・唐時代に玄奘三蔵が大般若経の訳経事業を行った、中国・西安の現地調査を実施した。主な調査先は、訳経事業が行われた大慈恩寺、玄奘の墓塔のある興教寺、陝西省博物館、西安博物院、碑林博物館である。 ・カリフォルニア大学バークレー校東アジア図書館所蔵の「崇永版」大般若経の調査を実施した。当該大般若経は、本研究の主要な対象である「崇永版」大般若経の一揃えであり、三井家に伝来していたものである。過去に川瀬一馬氏が存在することだけを紹介したことがあるが、その後、全点の調査を実施したのは初めてのことである。調査では、全巻を巻頭から巻末まで通して通覧し、版心、版木長、料紙、奥書等、総合的な調査を実施した。 ・本調査結果は、論文にまとめて公開を予定し、史料のデータベース化を図る予定であったが、プロジェクト責任者の異動により、本年度は実施できなかった。今後は、本研究で得られた成果をもとに、本務の合間をぬって論文等の作成を行う予定である。			
 カリフォルニア大学 バークレー校東アジア図書館 所蔵 「崇永版」大般若経 巻第六百 刊記			
【実績値】 調査回数 2 回 （中国・アメリカ） 図録 1 件 海外展「日本文化」展図録（ハノイ開催） 資料収集 200 点			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4514-4

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	B	A
判定理由 適時性：現在、個別の大般若経に関する研究が盛んであり、本研究は、これらを集大成するものである。 独創性：東アジア図書館所蔵「崇永版」大般若経、全点の調査を実施したのは初めてのことである。 発展性：基礎史料を丹念に収集したので、これらの詳細な分析により、大きな発展が期待できる。 効率性：大量の史料を、補助員の協力を得ながら効率よく収集できた。 継続性：研究代表者が、科学研究費が活用できない職場へ異動してしまった。 正確性：基礎史料を精密に収集した。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	図録	資料収集			
判定	A	A	A			
判定理由 調査回数：研究費執行可能期間は5ヵ月間しかなかったが、着実に調査を実施できた。 図録：予定通り、刊行することができた。 資料収集：短い期間であったが、史料集の検索を実施した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	現在、個別の大般若経研究が盛んに行われている中、基本史料の収集をほぼ終えることができた意義は大きい。加えて貴重な大般若経の実地調査や関連遺跡の調査も併せて実施できたことは大きな成果である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	基本史料の収集が進んだことにより、今後、これらの分析によって研究を飛躍的に進めることができる。また、実地調査を行った大般若経については、その成果を公表し、学会に貴重な情報を提供することができる。

【書式B】
(様式1)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4514-5

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	5) 九州南島の先史時代の資料に関する調査研究((5)-①)		
【事業概要】 九州の対外交流の特質を考える上で、奄美・琉球等の南島は大変重要な地域と位置付けられている。とりわけ奄美地域の縄文文化は、九州本土と同系統と位置づけられる。しかし、相対的な様相が異なることも事実である。従って、当該地域の縄文土器のあり方を調査・研究することは、南島全体の縄文時代の交流を知る手がかりとなる。			
【担当部課】	展示課	【プロジェクト責任者】	課長 赤司善彦
【スタッフ】 志賀智史(博物館科学課保存修復室主任研究員)			
【主な成果】 近年になって、徳之島と喜界島で個人が縄文時代の土器や石器を多数採集されていることがわかった。そこで、両町の教育委員会の協力を得て、実物資料を実見した。また、当館で詳細な調査を行うため、資料を搬入した。調査の成果を紹介し、採集された資料の歴史的意義を紹介するために文化交流展示室において展示を実施した。			
【年度実績概要】 ・現地での事前調査の段階で、徳之島の資料は天城町歴史資料館に寄託され、整理が進んでいたが、喜界町の資料は個人宅に保管されているままだったので、所蔵者の協力を得て関連資料について写真撮影と採取地を記入した遺物カードを作成した。 また、詳細に調査をするために当館に輸送し、まずは文化交流展示室において、南島で採集された縄文時代遺物の意義について紹介する展示を実施した。 縄文研究者も交えた検討会を26年2月2日に実施した。 調査 館内 2回 現地 2回 展示 文化交流展示室(25年4月23日～12月23日)			
【実績値】 調査作成枚数 195枚(土器135・石器6・陶磁器29・貝製品7・陶器6・骨12) 調査回数 4回			
【備考】			



文化交流展示室での展示

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4514-5

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：九州の古代文化の成立を考える上で、南島ルートの境界領域のあり方は必要な研究である。 独創性：奄美大島以外の喜界島や徳之島の縄文時代資料はこれまで、調査が行われておらず、今回が初めてである。 発展性：琉球へ至る交流のルートを解明する手がかりとなる。 効率性：訪問して調査するのではなく、一括して借用し館内で調査することで、出張回数を減らすことができた。 継続性：ほぼ出土資料の全てをカードにすることができ、将来の研究の基盤が確立できた。 正確性：縄文土器の専門家を共同研究に加えたことで信頼性が増した。						

2. 定量的評価

観点	調書作成枚数	調査回数				
判定	A	A				
判定理由 調書作成枚数：カード作成数（195枚）を予定通り実施することができた。 調査回数：計画通り実施することができた。						

3. 総合的評価

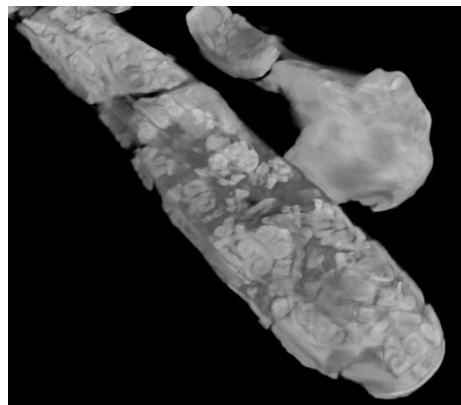
判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	計画通り調査を実施することができ、その成果を展示において来館者に紹介することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査研究は、当初計画に沿って研究内容の水準を保ちながら順調に遂行している。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進								
プロジェクト名称	6) 和泉市久保惣記念美術館の収蔵品の調査研究((5)-①)								
【事業概要】 和泉市久保惣記念美術館が所蔵する中国古代青銅器コレクションを中心に、古代中国青銅器の鑄造技術の解明のためにX線CT、3Dデジタイザ、三次元プリンタ等の科学調査機器を用いて科学調査を実施する。									
【担当部課】	学芸部博物館科学課								
【プロジェクト責任者】	課長 今津節生								
【スタッフ】 谷豊信（学芸部長）、今津節生（博物館科学課長）、河野一隆（企画課文化交流展室長）、市元壘（企画課特別展室主任研究員）、鳥越俊行（文化財課資料登録室主任研究員）									
【主な成果】 X線CT、3Dデジタイザ、三次元プリンタ等の科学調査機器を用いて、中国古代青銅器の内部構造データを集積したデジタルアーカイブを構築した。本年度は帯鉤・殷周青銅器を中心に、肉眼観察と計測画像を対照させながら、青銅器の内部構造について分析を行い、鏽に覆われて見えなかった象嵌文様などを発見することができた。また、以前より実施している住友コレクション（京都・泉屋博古館）の成果と比較対照を行って、青銅技術の広がりを確認した。									
【年度実績概要】 ・当館の展示に借用する文化財を中心として、CT調査や3Dデジタイザによる精密三次元計測、蛍光X線分析調査を実施した。得られた成果は文化交流展の展示に活用している。 ・帯鉤のCT調査 本年度の調査では、帯鉤と殷周青銅器を対象として、肉眼観察と共に画像解析を実施した。帯鉤については鉄製帯鉤の鏽の下から肉眼では全く確認できない金線を象嵌した文様を検出することに成功した。 ・中国青銅器のCT調査 殷周青銅器では脚や持ち手など青銅器本体から伸びる立体造形の接続状況に着目して分析を行った。その結果、脚の内部まで全て無垢でつくるものと中子を挿入して円筒状に金属湯をまわすものの2種類が存在することを確認した。また、中子と外型とを固定するための構造物（スパーサー）についても、器表面の観察から推定するだけであったが、より具体的な位置を確認することができた。 ・蛍光X線分析調査 一部については蛍光X線分析を行った。これらは肉眼による観察のみでは組成不明と思われる部分を対象として分析した結果、中国古代の帯鉤及び青銅器として異質なものは見当たらなかった。 また、精密三次元計測や蛍光X線分析の成果を総合することによって、修理や作品の内部構造などの情報を得ることができた。これらについては、大阪・和泉市久保惣記念美術館と共同して成果を共有している。									
【実績値】 <table border="0"> <tr> <td>調査回数</td><td>3回</td></tr> <tr> <td>分析点数</td><td>10点</td></tr> <tr> <td>展覧会数</td><td>2回</td></tr> <tr> <td>学会研究会等発表</td><td>1件（①）</td></tr> </table>		調査回数	3回	分析点数	10点	展覧会数	2回	学会研究会等発表	1件（①）
調査回数	3回								
分析点数	10点								
展覧会数	2回								
学会研究会等発表	1件（①）								
【備考】 学会研究会等発表 ①「X線CT（3D-CT）を用いた文化財の状態調査」東アジア文化遺産学会 25年9月4日									



帯鉤のCT画像

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：国内・海外の研究者から注目を集めた。特徴ある博物館との連携研究として先駆的な研究である。 独創性：中国青銅器の構造研究に非破壊的手法を本格的に導入した最新の研究である。 発展性：調査資料の増加により世界に例のないデジタルアーカイブに発展している。 効率性：従来に比較して短時間でデータを取得できるために、時間的投資、人的投資が少ない。 継続性：X線CTは文化財の内部構造を非破壊で三次元的に調査できる唯一の方法である。 正確性：0.1mmの精度で記録することができ、正確である。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	分析点数	展覧会数	学会研究会等発表		
判定	B	A	A	A		
判定理由 調査回数：少ないが、おおむね目標である。 分析点数：できうる分析は全て終了している。 展覧会数：展示期間も長く、目標を達している。 学会研究会等発表：計画通り実施することができた。						

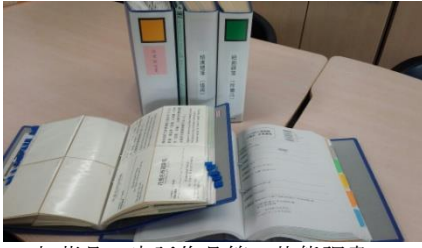
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本研究に使用している調査研究機器は、世界的に最も優れた装置の一つとして高く評価されている。大阪・和泉市久保惣記念美術館との連携研究の他に中国古代青銅器の著名なコレクション（住友コレクション）を有する泉屋博古館との共同研究も進んでいる。また、中国科学院との研究者の連携研究も進めている。次年度はさらに多くの資料を調査すると共に、蓄積したデータの活用を進めたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当館では、文化財を外部の博物館から借用して展示することが多いので、展示借用の際に、最新機器を用いて共同研究を進めている。すでに、これまでの研究協力において国内外の博物館や研究機関と共同研究が進んでいる。次年度はさらに連携を進めて共同研究を実施していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	7) 収蔵品・寄託品及び関連品に関する調査研究((5)-①)
【事業概要】 館蔵の近世絵画 18 件を前後期の二期に分けて展示する。館蔵絵画を特集したトピック展示としては 23 年度の水墨画に続く 2 回目の企画である。本展では、これまでまとめて公開する機会がなかった近世絵画を、前期「屏風絵の世界」、後期「海外との文化交流」という二つのテーマに沿って展示するとともに、図録は出陳しない作品も掲載して所蔵目録としても使用できる物として制作し、収蔵品を広く紹介する。	
【担当部課】	学芸部
【プロジェクト責任者】	部長 谷豊信
【スタッフ】 鷲頭桂（企画課特別展室研究員）、畑靖紀（文化財課資料管理室主任研究員）、森實久美子（企画課特別展室研究員）、荒木和憲（文化財課資料登録室主任研究員）、河野一隆（企画課文化交流展室長）	
【主な成果】 館蔵近世絵画の調査研究を行い、その成果を公開するものとして、トピック展示「館蔵近世絵画名品展」を開催した。また、展覧会開催に際し、展覧会図録と所蔵品（近世絵画）目録を兼ねるものとして『館蔵近世絵画名品展』（96 頁）を作成した。当館では毎年絵画作品を購入するなど収蔵品を増やしているが、その全容を公開する機会はなく、ごく一部を特別展図録やデジタルアーカイブで紹介するのみにとどまっている。その課題に対し、本図録では出陳しない作品も含めて所蔵する近世絵画の画像、作品情報を掲載し、広く一般に公開した。	
【年度実績概要】 25 年度上半期 ・館蔵の近世絵画の作品調査及び資料収集を行った。 ・所蔵品の新規撮影を行った（約 30 件）。 ・絵画（所蔵品、借用、寄託等）の題箋の整理とデータベース化を行った（約 150 件）。 25 年度下半期 ・館蔵の近世絵画の作品調査及び資料収集を行った。 ・本年度購入となった新収蔵品及び修理を行った作品の新規撮影を行った（約 30 件）。 ・展覧会準備のための図録作成、展示造作の検討を行った。 ・調査の成果を公表する場として、トピック展示『館蔵近世絵画名品展』（26 年 2 月 25 日～5 月 18 日）を開催した。 ・館蔵近世絵画の状態調書を、博物館科学課、文化財課の助言を得て作成・整備した（約 60 件）。	
 トピック展示「館蔵近世絵画名品展」 展示室風景  収蔵品・寄託作品等の状態調査、 修理報告書、題箋等の整備状況	
【実績値】 展覧会数 1 回 ・トピック展示「館蔵近世絵画名品展」（前期：26 年 2 月 25 日～4 月 6 日 後期：26 年 4 月 8 日～5 月 18 日予定） 展覧会図録 1 件 『館蔵近世絵画名品展』 ミュージアムトーク 2 回（26 年 3 月 11 日、18 日）	
【備考】	

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4514-7

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：長期に及ぶ調査成果を迅速に公開することができた。 独創性：展示や図録の制作にあたっては広く一般に分かりやすくするよう努めた。 発展性：調査の成果をトピック展示として、広く一般に公開することができた。 効率性：時間的、人的、設備的に効率よく調査を進めることができた。 継続性：長期に及ぶ調査成果を十分に反映した展覧会を実施することができた。 正確性：展覧会に加えてミュージアムトークを頻繁に実施することで、幅広くその成果を公開することができた。						

2. 定量的評価

観点	展覧会数	展覧会図録	ミュージアム トーク			
判定	A	A	A			
判定理由 展覧会数：館蔵近世絵画に関する調査成果を、展覧会を通じて公開することができた。 図録発行件数：展覧会の成果及び当館の収集活動を図録にまとめて公開することができ、目標を達成することができた。 ミュージアムトーク：計画通り実施することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当館が開館より収集してきた近世絵画の調査成果を、展覧会や図録等を通じて包括的に紹介することができた。また、所蔵品の管理・展示に欠かすことのできない状態調書の作成や題箋の整備などを行った。 文化財の収集は今後も継続するものであり、引き続き基礎的な研究を継続していく予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り調査が実施され、当初の目標を達成することができた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	8) 西光寺梵鐘の総合調査((5)-①)		
【事業概要】 福岡市早良区の西光寺に所在する梵鐘は、九州において観世音寺鐘（太宰府市）に次ぐ古さを誇る古代鐘である。しかし、これまで殆どその存在は知られておらず、実見する機会は稀であった。そこで当プロジェクトでは、長期で借用を行い、その間に各種科学分析や写真撮影、またその成果をもとに展示を行い、この梵鐘の調査研究成果とともに広く紹介することに努める。			
【担当部課】	学芸部文化財課	【プロジェクト責任者】	アソシエイトフェロー 望月規史
【スタッフ】 鳥越俊行（文化財課資料登録室主任研究員）、輪田慧（博物館科学課環境保全室研究補佐員）			
【主な成果】 西光寺梵鐘を、25年7月23日から12月8日まで展示した。その間、所蔵者の許可を得て露出展示とし、更に蛍光X線分析や3次元実測を行って、科学的な観点からの調査を初めて実施することができた。この調査結果をもとに、成分組成を明らかにし、更には3次元立体プリンタを用いた詳細なレプリカを作成した。（鐘全体 1、陽鑄銘部分 1）また、作成したレプリカは、ご所蔵者に寄贈し、次年度継続の借用許可を得ることができた。			
【年度実績概要】 ・梵鐘を吊るして詳細に表面観察をしたことで、内面部分に中子（なかご）の分割線の痕跡が残っていることを新たに確認した。 ・蛍光X線調査により、梵鐘の成分組成を明らかにした（銅 87-91%、錫 4-7%、鉛 4-7%）。 ・3次元デジタルアナライザを活用することにより、実測を行い、梵鐘を立体的に把握することが初めて可能となった。 ・3次元実測のデータをもとに、立体プリンタを活用して精巧なレプリカを作成した。なおレプリカは、梵鐘全体を大小1つずつ、また鐘身池の間に陽鑄された銘文部分を1つ製作した。 ・展示に際して専用の展示台を作成し、所蔵者の了解を得た上で露出展示を行うことができた。 ・展示期間中は露出展示としたため、展示中でも研究者による熟覧が可能となり、各地から調査希望を受けることができ、梵鐘研究の進展に資することができた。 ・展示終了後、梵鐘を新規で撮影し、高精度の資料写真を得ることができた。 ・上記の調査をもとに、展示会場にてミュージアムトークを開催し、多くの来館者にこの梵鐘の魅力について解説を行うことができた。 ・上記調査をもとに、次年度に行う梵鐘の音響調査の基礎データを年度内に集約することができた。			
【実績値】 調査回数 6回（表面観察2回、蛍光X線分析1回、3次元実測2回、写真撮影1回）			
【備考】			



梵鐘の調査風景（3次元デジタルアナライザによる実測）

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：ご所蔵者からの要望を満たし、かつ調査結果を踏まえて「特別公開」として特集展示をすることができた。 独創性：大型梵鐘の3次元実測と立体レプリカの作成は日本初の成果である。 発展性：今回蓄積したデータとノウハウをもとに、他の梵鐘の実測とレプリカを作成することができる。 効率性：博物館の館内という安定した環境のなかで、十全な設備と時間をかけて安全に作業することができた。 継続性：次年度においても借用を継続し、音響調査などを行う計画を立てている。 正確性：各科学分析では、詳細なデータをとることができた。その結果、レプリカを作成することにつながった。						

2. 定量的評価

観点	調査回数					
判定	A					
判定理由 調査回数： 2度にわたる詳細な表面観察により、梵鐘内部の中子継ぎ目痕を発見し、製作技法について新たな知見を得た。また、蛍光X線分析では、複数個所から成分組成のデータを取得できた。3次元実測では、梵鐘の外側と内側を一度ずつ測定し、詳細なデータを得ることができた。また、写真撮影では、各部位ごとに高精細な画像を撮影することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本年度における梵鐘調査は、全ての観点において十分な成果を出すことができた。また、次年度に向けて既に展示計画や調査の準備を遅滞なく進めている。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	I-2「文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信」、I-3「我が国における博物館の中核として博物館活動全体の活性化に寄与」、I-4「文化財に関する調査及び研究の推進」、I-6「情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信」、I-7「地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上」に資する事業である。 すなわち、I-2：次年度以降も借用の許可を得ているため、展示を通じてひろく公開することができる。I-3：類例のない極めて貴重な古代の梵鐘を、専用の展示台に乗せて露出の状態で展示をすることで、高い展示効果を期待することができる。I-4：不明な点の多い古代鐘に対して、充実した館内諸設備を用いて計画的に調査を行う事が可能である。I-6：調査研究成果は、展示のなかで解説パネルへ適宜反映させている。また、音響調査の準備も行っており、その成果も展示に取り入れる予定である。I-7：館内の安定した環境にあるため、劣化や破損の恐れが少ない。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1) 館蔵の漢籍・洋書に関する基礎的研究 ((5)-②)
【事業概要】 東京国立博物館が所蔵する漢籍・洋書に関する書誌学的調査である。これらは、博物館草創期の明治時代初期に、文部省より引き継いだ江戸幕府旧蔵資料を中心とする資料群より形成されている。また洋書には江戸幕府旧蔵資料の他にも、ドイツ人医師シーボルトより献納された 308 冊を含んでいる。貴重図書として保管されてきたこれらの詳細調査を実施し、その学術的意義を明らかにすることを目的とする。	
【担当部課】	学芸研究部
【プロジェクト責任者】	学芸企画部博物館情報課長 高橋裕次
【スタッフ】 田良島 哲(調査研究課長)、住広昭子(学芸企画部博物館情報課情報資料室専門職員)	
【主な成果】 (1) 漢籍は、江戸幕府旧蔵資料である医学関係を中心とする調査が一段落したため、昨年より全体の調査に着手し、計 30,000 冊のうち、昨年度は 10,694 冊、本年度は 300 冊の書誌学的調査を終了し、写真撮影を実施した。 (2) 洋書については、シーボルト献納本 308 冊について、修理のための調査を行い、あわせて洋書の主なものについて写真撮影を実施した。	
【年度実績概要】 (1) 漢籍には、経年によって劣化や綴じ糸の欠失しているものが多い。調査では書誌データを図書館システムに入力するとともに、保存状態の把握につとめており、必要に応じて糸綴じの手当を行うことを検討中である。26 年 2 月～3 月にかけて、漢籍のなかから 5 点を選び、資料館閲覧室内において解説を付けて展示を行った。 (2) 洋書については、全体の書誌データを図書館システムに入力する作業が終了している。シーボルト献納本 308 冊について、今後の修理を前提として、保存状態を把握するための調査を行った。	
	
「黄帝内经素問」	
【実績値】 調査件数 漢籍 300 冊、洋書 308 冊 データ入力点数 漢籍 300 冊、洋書は昨年終了 写真撮影点数 漢籍 50 冊 (3798 カット)、洋書 12 冊 (3788 カット)	
【備考】 +	

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：これまでは科研費による部分的な調査にとどまっていたが、閲覧の申請も増えていることから、本格的な調査を開始したため。 独創性：他機関では、まとまった江戸幕府旧蔵資料に関する書誌学的調査はまだ行われていないため。 発展性：東博所蔵分の調査の進展により学術的意義が明らかになりつつある。 効率性：書誌データを図書館システムに登録することで、情報公開が促進されたため。 継続性：進捗は順調であり、計画的に全ての漢籍、洋書を調査する予定である。 正確性：横断検索が可能であり、相互にデータの確認をしているため、より精度の高いものになっている。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	データ 入力点数	写真撮影点数			
判定	A	A	S			
判定理由 調査件数、データ入力点数：書誌データとともに、保存状態の把握を行っており、今後、綴じ糸などの手当を計画的に行うための準備が整った。 写真撮影点数：撮影は内容など希少性のあるものから行っている。保存上の理由から、半開きの状態で1頁ずつ撮影するなど、慎重を要する作業である。進捗は良好で、漢籍50冊（3798カット）、洋書12冊（3788カット）と、目標としていた1500点を遙かに上回る点数を達成することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	東京国立博物館の所蔵する漢籍、洋書について、書誌データを作成し、図書館システムに入力した。これによって、保存上の理由から閲覧に供することのできない資料であっても、書誌データを伴う画像によってその詳細を公開できるようになったことは大きな進展である。現在、撮影した画像とともにウェブサイトで広く公開するための準備を進めている。昨年度に漢籍の調査をほぼ終了したのを契機に、主要な作品に関して解題を作成するなど、学術的情報の提供に努めている。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	漢籍・洋書ともに、その保存状況をほぼ把握することができた。原装を残している貴重な図書を、後世に永く伝えていくためには、必要最小限な処置によって現状を維持し、形状や大きさに応じた配架を行うなどの配慮が必要である。現在、保存修復課と連携して、修復作業を行っており、次年度も引き続き、適切な保存方法について検討していく予定である。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-2

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 東洋民族資料に関する調査研究 ((5) -②)		
【事業概要】 東京国立博物館が所蔵する約 3500 件の東洋民族資料を対象として、総合的な調査研究を行う。従来の台帳の記載内容を踏まえながら形状、材質のほかに、旧蔵者がつけた札や箱書きの内容や保存状態など実際の観察を通してしか分からない情報を、画像とともに一括してデータベース化する。これにより、研究・陳列・保管・修理などに必要な基礎情報をより充実した形で整備する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課平常展調整室主任研究員 川村佳男
【スタッフ】 丸山清志（客員研究員）			
【主な成果】 東洋民族の収蔵品の展示を、昨年までの調査で得られた知見にもとづき、東洋館 13 室で 2 回実施した。内容は次の通りである。 ・「台湾の海の民－タオ族の伝統文化－」（25 年 10 月 1 日～26 年 1 月 13 日） ・「メラネシアの宗教彫刻」（26 年 1 月 15 日～26 年 4 月 13 日予定） また、台湾のパイワン族の生活及び宗教儀礼に関わる資料の詳細な調査を実施した。調査で得られた知見は、将来のパイワン族に関わる展示案の作成に資する予定である。			
【年度実績概要】 ・文献収集 客員研究員と協力し、日本及び台湾でこれまでに発表、出版された、タオ族及びパイワン族の民族資料に関連する報告書、研究論文、書籍を収集し、今年度調査内容の絞込みを行った。 ・熟覧調査の実施 25 年 7 月に東京国立博物館においてタオ族及びパイワン族の民族資料の熟覧調査を実施した。これにより当該民族資料の①形状品質、②保存状態、③来歴、④用途等に関する基礎的なデータを収集することができた。 ・展示 東洋館 13 室で 25 年 10 月 1 日から 26 年 1 月 13 日にかけて「台湾の海の民－タオ族の伝統文化－」を、26 年 1 月 15 日から 4 月 13 日（予定）にかけて「メラネシアの宗教彫刻」を実施した。			
			
「台湾の海の民－タオ族の伝統文化－」展示の一部			
【実績値】 調査回数：2 回。作品調査件数：75 件。関連展示回数：2 件。撮影点数：約 120 カット。			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	S	A	A	B	B	A
判定理由 適時性：これまで東京国立博物館において活用されることが極めて少なかった台湾とメラネシアの民族資料の魅力を調査・展示によって積極的に再評価・発信することができた。これは東京オリンピック開催が決定するなど、我が国の国際性がこれまで以上に問われるようになった昨今の時勢にかなうものとして、高く評価される。 独創性：得られた知見のうち、展示でどの部分をより魅力的かつ分かりやすく伝えるのかを意識しながら本プロジェクトを進めた。その結果、タオ族の民族資料では「海との関わり」、メラネシアの民族資料は「精霊・祖霊信仰」をテーマの柱とする明確な内容の展示を構築することができた。 発展性：これまでの調査による知見の着実な蓄積により、当分野でより多彩な展示内容を実現できるようになった。 効率性：プロジェクトに従事する時間配分の仕方をさらに改善できる余地がある。 継続性：プロジェクトに従事した期間が夏に集中したため、全体として継続期間にややムラが生じた。 正確性：タオ族、パイワン族などテーマごとに関連資料を悉皆的に調査した。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	作品調査件数	関連展示回数	撮影点数		
判定	B	A	A	A		
判定理由 調査回数：目安としていた調査回数におおむね達成した。 作品調査件数：タオ族、パイワン族の暮らしと信仰に関わる民族資料を予定通り調査した。 関連展示回数：今年度を実施できる限りの展示回数に達した。 撮影点数：目安としていた撮影点数を若干上回った。						

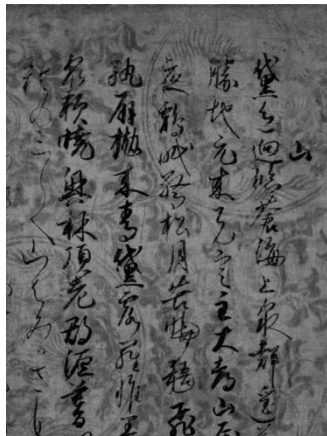
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	これまで蓄積させてきた基礎的なデータベースをもとに、タオ族、パイワン族といったテーマごとに知見を掘り下げ、展示という具体的な成果の公開につなげるサイクルが軌道にのりつつある。次年度も新規テーマの調査と展示を継続的に実施することで、本プロジェクトの一層の充実が求められる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	昨年度までに実施したタオ族やメラネシアの民族資料に関わる調査の成果を、今年度の東洋館13室におけるふたつの展示で結実させることができた。次年度も東洋館13室での新たな展示ソフトの開発につながる東洋民族分野の調査を継続する。次年度は今年度と同程度の業務量が見込まれるため、本プロジェクトの数値目標は今年度並みに設定する。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3) 東アジアの書道史における料紙と書風に関する総合的研究(科学研究費補助金) ((5)-②)
【事業概要】 国内外に所蔵される東アジアの書道史に関わる作品について、1点ごとに詳細な書誌や伝来などの情報と、デジタル画像を収集する。さらに、科学機器を用いて、料紙の技法、変遷、使用法を検証するとともに、時代による書風の特徴やその変化などを調査研究する。また、個々の作品に関する歴史的・文学的調査も進める。これらによって、書の作品を、料紙と書風という二つの側面から解明し、複合的・総合的なデータ作成を行う。	
【担当部課】	学芸研究部
【プロジェクト責任者】	副館長 島谷弘幸
【スタッフ】 神庭信幸(保存修復課長)、高橋裕次(博物館情報課長)、富田淳(列品管理課長)、和田浩(保存修復課環境保存室長)、荒木臣紀(保存修復課主任研究員)、恵美千鶴子(調査研究課書跡・歴史室アソシエイトフェロー)、赤尾栄慶(京都国立博物館上席研究員)、羽田聡(京都国立博物館学芸部企画室研究員)	
【主な成果】 前年度に引き続き、装飾料紙を用いた古筆・典籍を中心に、書風と料紙分析ほか多角的な調査を、東京国立博物館や中国・香港大学、香港芸術館等で実施してきた。また、これまでの調査で撮影したデジタル写真や、調査結果のデータ入力と整理を進めた。本年度は研究期間の最終年度にあたるため、本研究成果の報告書を京都・思文閣出版より出版した。	
【年度実績概要】 (1) 東京国立博物館所蔵の装飾料紙作品の調査とデータ化 東京国立博物館が所蔵する装飾料紙作品の調査とデータ化を行った。	
(2) 特別展に関する作品の調査とデータ化 今年度に東京国立博物館で開催した特別展「和様の書」において、本研究と関係の深い作品が一堂に展示された。その展示準備を兼ねて、関係作品の調査と関係資料のデータ化を行った。	
(3) 成果の公開 ・特別展「和様の書」において、本研究成果をわかりやすく示すために、装飾料紙が一覧できるようなパネル展示を行った。特別展に関連する印刷物においても本研究成果を発表した。 ・本館の総合文化展においても、3室(宮廷の美術)において、本研究成果に関連する装飾料紙の展示を行った。 ・研究論文や講演において、本研究成果を発表した。 ・本研究成果のうち、装飾料紙の文様紹介を中心とした図版(文様が判りやすいようにコントラストを強めて紹介したもの)と、研究成果報告論集を掲載する出版物を思文閣出版より刊行した。	
	
重文 和漢朗詠集 卷下(益田本)	
【実績値】 ・調査件数 約 50 件、写真撮影点数 約 500 点、データ入力点数 約 200 点 ・研究会発表件数 9 件 ・論文掲載件数 16 件 ・成果公開件数 21 件(展示 18 件、特集陳列 1 件、特別展 1 件、成果報告書刊行 1 件)	
【備考】 研究会などでの発表：島谷弘幸「陽明文庫所蔵の宸翰について」(陽明文庫講座)平成 25 年 9 月 21 日 ほかに 8 件 論文掲載：島谷弘幸「和様の書の魅力」(『聚美』8 号、青月社、平成 25 年 7 月)ほかに 15 件	

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	S	A	A	S	A
判定理由 適時性：中国他海外での調査の実施により国際性が高く、展示や研究発表などで公開に努めたため。 独創性：基礎的なデータ収集にあわせて、料紙の科学的調査や歴史的調査など複合的に進めたため。 発展性：収集した調査データは総合的であり、新たな研究視点をもたらすものであるため。 効率性：通常の業務の中で調査研究を効率よく進めていく体制が確立しているため。 継続性：基礎研究からあわせて、すでに7年間の調査を実施しており、様々なデータを蓄積してきているため。 正確性：総合的研究として複合的なデータを収集できており、研究論文や研究発表などで着実に公開もしているため。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	写真撮影点数	データ入力 点数	研究会発表 件数	論文掲載件数	成果公開件数
判定	A	A	A	B	A	A
判定理由 調査件数：継続的に進めてきている研究のため調査方法も確立し、確実に調査を進めることができた。 写真撮影点数：日常的に効率的な調査を実施することにより調査写真の撮影も確実に進んでいるため。 データ入力点数：調査結果のデータ入力、関係資料のデータ入力も効率的に実施できた。 研究会発表件数：目標を少し達成することができなかった。 論文掲載件数：様々な媒体に、調査内容の成果を論文として発表することができた。 成果公開件数：当館での特別展で本研究成果を発表できたことは特に大きい成果といえる。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本研究は継続的に行う調査により、効率が上がっている。その成果の公表についても、論文や展示等で確実に進め、また、研究成果の報告論集を刊行することができた。7年間継続してきた研究成果は、今後の展示や研究論文で引き続き発表していく予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	すでに7年継続している研究のため、日々の業務の中で効率よく研究を進めることができている。また、博物館における人脈を生かして、国内外において、あまり公開されていない作品なども調査対象とすることができた。今後も、より多くの情報収集に努めていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4) 東アジアにおける繡仏の基礎的研究(科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金)((5)－②)		
【事業概要】 本研究は、刺繍により仏教尊像や仏教的主题を表した「繡仏」について、日本中世～近世期を中心に、同時期の中国・朝鮮半島など東アジアの作例をも視野に収めつつ、現存作例の調査にもとづいて図像・技法・様式を分析することで、仏教絵画史および染織史の観点から同時代繡仏を総合的・体系的にとらえることを目的とするものである。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	学芸企画部博物館教育課教育普及室長 伊藤信二
【スタッフ】 塚本鷹充（調査研究課東洋室研究員）、土屋貴裕（列品管理課平常展調整室研究員）、高木結美（学芸企画部企画課特別展室アシリエイトフェロー）			
【主な成果】 研究開始年度である本年度は、国内外の繡仏の所在情報を網羅的に収集するため、各種刊行物やウェブサイト上に公開されているデータを博搜し、また国内外の関連分野の研究者にも広く情報提供を呼びかけ、現時点での現存作例数を再確認することに努めた。さらに、国内外に所在する日本中世～近世期及び同時期の中国の作例の実見調査を実施することで、図像・材質技法・様式の詳細な分析を行った。これらの調査によって得られた繡仏の現存作例に関する、法量・図像・材質・技法・銘文・箱書・関連情報などを整理し、成果報告書の刊行や公開に向けて基礎データを作成、集積した。			
【年度実績概要】 (1) 国内外の繡仏の所在に関する情報収集 本研究は第一に、日本中世～近世期及び同時代東アジア繡仏の現存作例を掌握したうえで、重要と目される作例を可能な限り網羅的に調査することが大前提となる。そのため各種刊行物やウェブサイト上に公開されているデータを博搜、また国内外の関連分野の研究者に情報提供を呼びかけるなどの情報収集作業を精力的に行った。その結果、国内外に所在する繡仏に関する情報についてある程度網羅し、現時点での現存作例について再確認することができたと言える。 (2) 繡仏現存作例の作品調査 (1)によって得た情報を基に、国内に所在する日本中世～近世期及び同時期の中国の作例の実見調査を行った。この際、仏教的主题以外の刺繍作品もいくつか対象に加えることで、主に材質・技法の観点から繡仏の調査及び分析を進めることができた。本年度作品調査を行った繡仏作例については以下のとおりである。 ・刺繍阿弥陀三尊図 1 幅 鎌倉時代 アメリカ・メトロポリタン美術館 ・刺繍阿弥陀三尊名号 1 幅 鎌倉時代 アメリカ・メトロポリタン美術館 ・刺繍千手観音図 1 幅 室町時代 アメリカ・メトロポリタン美術館 ・刺繍准胝観音図 1 幅 明時代 アメリカ・メトロポリタン美術館 ・刺繍釈三尊図 1 幅 明時代 静岡・修善寺 ・刺繍阿弥陀名号 1 幅 鎌倉～南北朝時代 京都・宝鏡寺（奈良博寄託） ・刺繍善導図 1 面 室町時代 奈良・当麻寺 ・刺繍阿弥陀三尊来迎図 1 幅 南北朝時代 奈良国立博物館 ・刺繍種子阿弥陀三尊図 1 幅 南北朝時代 奈良国立博物館 ・刺繍阿弥陀三尊来迎図 1 幅 室町時代 個人蔵 ・刺繍種子阿弥陀三尊図 1 幅 鎌倉時代 京都・永観堂禅林寺 ・刺繍阿弥陀三尊来迎図 1 幅 室町時代 岡山・誕生寺  メトロポリタン美術館での調査風景 (3) 繡仏現存作例にかかる詳細情報の基礎データ化 (1)(2)によって得られた繡仏の現存作例に関する、法量・図像・材質・技法・銘文・箱書・関連情報などを整理し、成果報告書の刊行や公開に向け、基礎データを作成、さらにデータの充実を図った。情報をデータ化することにより、調査作例の図像・材質技法・様式をグルーピングすることが可能となり、地域的・時代的・主題的特色を総合的に踏まえた分析及び来年度以降の調査研究課題を洗い出すことができた。			
【実績値】 繡仏作品の調査件数 約 20 件 調査作品デジタル画像撮影件数 約 800 枚 繡仏現存作例の作品情報データ化件数 約 90 件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-4

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：日本中世～近世期と比定される繡仏について現存作例を網羅するという作業は従来ほとんど行われてこなかったため、本研究の意義は大きい。 独創性：繡仏現存作例について図像・技法を詳細に分析し、様式編年化する本研究の独創性は高いため。 発展性：染織研究のみならず、仏画をはじめとする絵画ひいては仏教美術の研究にも寄与することができるため。 効率性：限られた時間の中で、効率的にデータ収集を行えたため。 継続性：研究開始年度に基礎データを整備することで、来年度以降の調査研究課題を洗い出すことができたため。 正確性：データ作成に関しては、入力後、確認者を替えて複数の確認を行うことで、資料の正確性を期したため。						

2. 定量的評価

観点	繡仏作品の調査件数	デジタル画像撮影件数	繡仏作品情報データ化件数			
判定	A	A	A			
判定理由 繡仏作品の調査件数：当初の計画よりも、多くの件数を実施することができた。 調査作品デジタル画像撮影件数：当初の計画よりも、多くの件数を実施することができた。 繡仏作品情報データ化件数：当初の計画に基づき研究の基盤となるデータを作成することができた。						

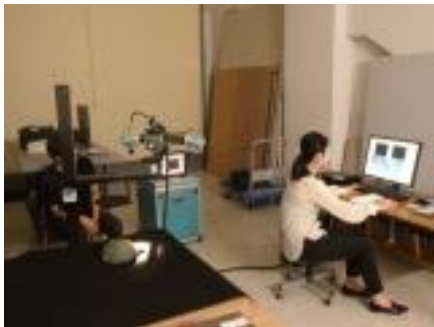
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	日本中世～近世期の繡仏を中心に、同時期の中国など東アジアの作例をも視野に収めつつ、現存作例の所在を網羅するという作業は従来ほとんど行われてこなかったこともあり、本研究の意義は極めて大きいと言える。本年度は、繡仏現存作例の所在について網羅的に情報を収集し、さらに重要作例を実見調査することで、本研究推進にあたって基盤となるデータを作成することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	研究開始年度である本年度は、日本中世～近世期及び同時代東アジア繡仏の現存作例について掌握することに努めたが、重要作例についての作品調査もあわせて着実に進めることができた。本研究は当初の研究計画に則り概ね順調であり、基本的な研究基盤を整えつつある。また、調査によって得た詳細情報を整理し作成した基礎データ及びデジタル画像は、繡仏を東アジア仏教美術史に体系的に位置づける本研究にとって極めて重要な情報と考える。次年度以降も引き続き、繡仏に関するデータ収集及び作品調査を進めていく予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	5) 極薄青銅器の製作技術解明－中国金属工芸史を再構築するための基盤研究((5) -②)		
【事業概要】 厚さ1mmに満たない青銅製容器が、戦国時代（前5世紀）以降の中国で急速に普及していった。その製作技術を3Dスキャン、蛍光X線元素分析装置などの光学機器の使用を含む多角的な分析と製作実験により解明することで、中国金属工芸史の再構築につながる基盤研究を実施する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	列品管理課平常展調整室主任研究員 川村佳男
【スタッフ】 松本伸之（学芸企画部長）、和田浩（保存修復課環境保存室長）、矢野賀一（学芸企画部企画課デザイン室主任研究員）、谷豊信（九州国立博物館学芸部長）、赤沼潔（東京藝術大学教授）			
【主な成果】 当館が所蔵する中国考古の極薄青銅器について、3次元計測を4回、蛍光X線分析を1回、分光計測を1回それぞれ実施するとともに、並行して新たな知見の整理を行った。また、泉屋美術館（25年11月7日）、和泉市久保惣記念美術館（25年11月8日）、寧楽美術館（25年12月1日）、出光美術館（26年2月7日）などで極薄青銅器の熟覧調査と写真撮影を実施した。加えて、東京藝術大学では合計6回の鑄造実験を行い、異なる条件設定で約100点の鑄造サンプルを製作した。鑄造サンプルに対しても蛍光X線分析と分光計測を1回ずつ実施することで、作品に対する分析データとの比較研究を進める足掛かりを得ることができた。			
【年度実績概要】 ・館内所蔵極薄青銅器に対する調査及び分析 館所蔵作品に対して熟覧調査のほか、3次元計測・蛍光X線分析・分光計測といった光学的手法による分析を6回実施した。 ・館外における調査の実施 山口県立萩美術館・浦上記念館（25年8月3日）、泉屋美術館（25年11月7日）、和泉市久保惣記念美術館（25年11月8日）、寧楽美術館（25年12月1日）、出光美術館（26年2月7日）で関連作品の熟覧調査を行った。 ・サンプルの鑄造実験及び分析 東京藝術大学で極薄青銅器のサンプルの鑄造実験を5回実施した（25年8月7日、8月30日、9月30日、26年2月17日、2月24日）。鑄造で得られた鑄造サンプルに対して、当館で蛍光X線分析・分光計測をそれぞれ1回ずつ実施した。 ・研究成果の公開 日本中国考古学会大会（25年12月14日～15日 駒澤大学）にて「漢代青銅器の工人集団類別－温酒尊を例にして－」をポスター発表し、研究成果の一部を公開した。			
			
三次元計測の作業風景		鑄造実験の作業風景	
【実績値】 館内作品調査・分析実施回数：6回。館外作品調査実施回数：5回。サンプルの鑄造実験回数：5回。鑄造実験で得られたサンプルの点数：約100点。研究成果の公開回数：1回。			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-5

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	S	A	B	A	B
判定理由 適時性：近年の中国古代金属工芸史研究の進展に寄与するものであるため。 独創性：極薄青銅器について、初めて系統的・多角的な視野で取り組んだ本格的な研究であるため。 発展性：本研究による知見が蓄積されれば、古代中国以外の時代や地域に展開した類例との比較検討が可能となるため。 効率性：三次元計測や鋳造実験など極薄青銅器に対して初めて試みた内容の項目が多く、当初は試行錯誤の連続であったため。また、計測機器に故障が生じ、修理が完了するまで当初の計画変更を余儀なくされたことがあったため。 継続性：開始して1年間で質・量ともに良好な基礎的データを得ることができたため。 正確性：計測機器の予期せぬ故障により、分析の実施回数が目標数値をやや下回ったため。						

2. 定量的評価

観点	館内作品調査・分析実施回数	館外作品調査実施回数	サンプルの鋳造実験回数	鋳造実験で得られたサンプルの点数	研究成果の公開回数	
判定	B	A	A	S	B	
判定理由 館内作品調査・分析実施回数：目標としていた回数におおむね達成したため。 館外作品調査実施回数：当初から予定していた館外の作品調査を完了したため。 サンプルの鋳造実験回数：学生が休暇に入る夏と冬にアルバイトを雇い集約的に実験を行うことで、目標に達したため。 撮影点数：目安としていた撮影点数を若干上回ったため。 鋳造実験で得られたサンプルの点数：予定を大きく上回る数の鋳造サンプルを得ることができたため。 研究成果の公開回数：学会で研究発表を実施したが、年度内に論文発表を行うことはできなかったため。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	初年度に蓄積された基礎的なデータは、極薄青銅器と鋳造サンプルのあいだにおける観察・分析結果の相互比較を次年度に展開させていくうえで、重要な足掛かりとなるものである。さらに、次年度はCTスキャンによる内部構造の解析、館外作品に対する分析、鋳造サンプルに対する加工実験などの作業項目を加えることで、本研究の一層の充実を図る。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	3カ年計画の初年度は、初めこそ経験の乏しさや計測機器の不調に見舞われたものの、トータルで見れば順調に作業を進めることができたといえる。今後、作業の効率性を向上させることで、質・量ともにいっそう充実した成果を得ることが可能となる。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	6) 仁寿舍利塔の信仰と荘厳に関する総合的調査研究 (科学研究費補助金) ((5) - ②)
【事業概要】 隋文帝が中国全土に建立した仁寿舍利塔の起塔地と関係遺物に関する現地調査を実施し、仁寿舍利塔の信仰と荘厳の全体像の具体的な解明を目的とする事業である。	
【担当部課】	学芸研究部
【プロジェクト責任者】	保存修復課環境保存室長 和田浩
【スタッフ】 加島勝(大正大学教授)、松本伸之(学芸企画部長)、東野治之(奈良大学教授)、岡林孝作(奈良県立橿原考古学研究所総括研究員)、泉武夫(東北大学教授)、長岡龍作(東北大学教授)、大島幸代(龍谷大学龍谷ミュージアム助教)	
【主な成果】 中国各地において現地調査を行い、仁寿舍利塔起塔寺院に関する多くの地理的データ及び、文献的資料を多数収集することができた。	
【年度実績概要】 ・文献収集 中国側研究者と協力し、中国国内でこれまでに発表、出版された、仁寿舍利塔起塔寺院跡から出土した遺物の報告書、研究論文、書籍を収集し、今年度調査地点の絞り込み、現地との連絡調整、旅程の決定を行った。 ・中国現地調査の実施 25年8月に中国側研究協力者の協力のもと、西安市、乌鲁木齐市、库尔勒市、において計10日間に及ぶ現地調査を実施した(写真)。これにより現地における①仁寿舍利塔起塔寺院に関する地理的データ、②仁寿舍利塔出土遺物と隋代関連遺物、③関連岳廟、等に関する詳細なデータを収集することができた。	
	
中国・新疆における現地調査の様子	
【実績値】 調査日数(中国) 10日	
【備考】	

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-6

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	独創性					
判定	A					
判定理由 独創性：中国の造形美術を通して浮かび上がる信仰と思想について総合的な見地から考察を加える基礎を構築した。						

2. 定量的評価

観点	調査日数 (中国)					
判定	A					
判定理由 調査日数(中国)：遅滞なく計画通りに実施することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中国の造形美術を通して浮かび上がる信仰と思想について総合的な見地から考察を加える基礎を構築でき、地理的データが相当数収集できた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当初の計画通り進捗した。今年度の成果を踏まえて次年度計画においても同様に進めていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	7) 中国典籍日本古写本の研究(科学研究費補助金)((5)-(2))
【事業概要】 日本学術振興会科学研究費助成事業 基盤研究(A)(研究代表者 高田時雄)による研究で、平成25年度から5か年継続予定である。日本国内に所蔵されている日本古写中国典籍を網羅的に調査し、その総目録を作成することを主たる目的としている。	
【担当部課】	調査研究課
【プロジェクト責任者】	調査研究課長 田良島哲
【スタッフ】 高田時雄(京都大学人文学研究所教授)、高橋智(慶應義塾大学附属研究所斯道文庫教授)	
【主な成果】 東京国立博物館所蔵の中国典籍古写本の調査を行うとともに、館内において、研究会を開催し情報の共有に務めた。	
【年度実績概要】 ・研究代表者 高田教授、研究分担者 高橋智 慶應義塾大学教授と、研究の進め方について打ち合わせを行った。 ・当館所蔵の中国典籍古写本9件について、研究代表者、研究分担者、連携研究者等12名が参加し、詳細な調査と意見交換を行った。 ・26年1月25日に当館黒田記念館セミナー室において、研究会「中国典籍日本古写本研究の現在」を開催した。5名が研究報告を行い、約25名の出席があった。	
	
調査対象の中国典籍日本古写本の例：重要文化財 蒙求残巻	
【実績値】	
【備考】	

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-7

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性			
判定	A	A	A			
判定理由 適時性：中国典籍研究は、国際的な必要性が高くなっており、時宜を得た研究計画である。 独創性：世界的にも希少性の高い古写本を研究対象としており、他では困難な研究である。 発展性：人文学各分野の基礎となる資料を構築する研究であり、広い範囲に影響を与える。						

2. 定量的評価

観点						
判定						
判定理由						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	研究分担者として、必要十分な参画を行っている。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当館関係の文化財については順調に調査が進められている。今後の年次で残余のものについても順次調査を行う。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	8) 5～9世紀東アジアの金銅仏に関する日韓共同研究((5)-②)		
【事業概要】 中国・朝鮮・日本で5～9世紀に造られた金銅仏を対象とし、製作技法、図像、様式の調査を行なう。データを集積し、各地域、時代でどのような特色あるいは共通点があるかを探る。材質、技法、図像、様式の比較検討によって当時の国際関係を考察する。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課東洋室長 浅見龍介
【スタッフ】 岩田茂樹（奈良国立博物館学芸部美術室長）、浅湫毅（京都国立博物館学芸部保存修理指導室長）、関内鑽、権江美（以上、韓国国立中央博物館）			
【主な成果】 日本古代の金銅仏でヒ素や鉛を含むもののあることがわかった。銅製品では亜鉛との合金、いわゆる真鍮が古代に存在することが明らかになったのは大きな成果である。			
【年度実績概要】 ・韓国において、金銅仏及び同時代に造られた石造あるいは瓦磚製の彫刻もあわせて調査を実施した。金銅仏についてはマイクロSCOPEによる撮影、蛍光X線分析を行った。 ・根津美術館において七連枝仏を調査し、7 軀の小像・光背の蛍光X線分析によって錫と鉛を検出するもの、さらに亜鉛を検出するものがあった。この像の場合作風と考え合わせて亜鉛が検出されたものは新しい時代の補作と判断された。 ・東京国立博物館法隆寺献納宝物のうち 10 軀の調査を実施。調書、細部写真（マイクロSCOPEによる写真を含む）、蛍光X線分析を行った。これらのデータを日韓の研究者が共有し、意見交換を行った。			
			
仏三尊像 宿水寺址出土 国立大邱博物館（韓国）			
【実績値】 調査回数 3 回、調査日数 8 日、調査対象作品数 42 件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-8

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：東アジアを視野にした研究を韓国の研究者とともにしており、国際的であるため。 独創性：金銅仏の金属組成を蛍光X線分析により測定している。これを制作年代等の判断に用いているが、データの蓄積により、製作地の推定につながる可能性があり、期待度が高いため。 発展性：対象地域、時代は広く、その間の国際関係を知ることができる可能性があるため。 効率性：金銅仏の蛍光X線分析、マイクロスコープによる観察、撮影、調書作成を分担してしており、効率が良かったため。 継続性：小金銅仏の遺品は多く、欧米の博物館に所蔵される作品も含めれば継続して行う必要性が高い。 正確性：データは検証可能な形で記録しており、報告段階で種々の条件を提示して正確を期することができるため。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査日数	調査対象作品			
判定	A	A	A			
判定理由 調査回数：調査に3回参加しており、満足できる数字である。 調査日数：韓国出張を含め8日を数え、満足できる数字である。 調査対象作品：40件を超え、満足できる数字である。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中国の作品、朝鮮半島の作品、日本の作品のそれぞれの特色と共通点がかなり認識できた。朝鮮半島の簡略化した形の原形である中国の作品を見ることができたためである。また、東京国立博物館所蔵の法隆寺献納宝物の多様性もあらためて知ることができた。 来年度はさらにその多様性の理由、中国・朝鮮作品がそれぞれの国の作品というだけでなく、どの地方でできたかまで考察することを目指したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	東京国立博物館の研究員としては、館蔵品の研究が責務である。この研究に参加することによって、法隆寺献納宝物の金銅仏の研究に様々な視野を得ることができている。 今後もこの研究が実施する各地の調査に参加し、さらに視野と見識を深め、館蔵品の研究につなげたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	9) 東アジアにおける木彫像の樹種と用材観に関する調査研究(科学研究費補助金) (5)-②)		
【事業概要】 日本における木彫技法の変革や鎌倉時代新様式の確立にともなう用材観の変化及び形成に関する調査研究、及びその用材観に東アジア世界が及ぼした影響に関する調査研究を行う事業である。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課東洋室長 浅見龍介
【スタッフ】 丸山士郎(博物館教育課教育講座室長)、和田浩(保存修復課環境保存室長)、岩佐光晴(成城大学文芸学部教授)、小澤正人(成城大学文芸学部教授)、能城修一(森林総合研究所木材特性研究領域チーム長)、藤井智之(八ヶ岳中央農業実践大学校長)、安部久(森林総合研究所木材特性研究領域主任研究員)、金子啓明(興福寺国宝館長)			
【主な成果】 国内木彫像等の調査によって、多数の木片試料等を得ることができた。今後の樹種同定によって用材観の変化・形成に関する重要な知見が得られると予想される。			
【年度実績概要】 国内木彫像等の調査 以下の国内各所において木彫像の調査を実施し、形状・構造・彩色に関する調書の作成、木片試料採取、像の撮影を行った。 ・東京国立博物館(25年5月23日) 大神社展出品作品群(一括)の調査を実施した。 ・東京国立博物館(25年7月10日) 東京国立博物館所蔵作品(1 軀)の調査を実施した。 ・静岡県南禅寺(25年6月21日、9月4日) 南禅寺が所蔵する木彫像群(一括)の調査を実施した。 ・長野県正覚院(25年10月26日) 正覚院が所蔵する木彫像群(一括)の調査を実施した。 ・福岡県八女市桁山(25年12月22日) 八女市桁山に生育するカヤの古木(県指定天然記念物)の調査を実施した。  八女市桁山のカヤ古木			
【実績値】 国内調査回数 6回			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-9

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	独創性	効率性	継続性			
判定	A	A	A			
判定理由 独創性：「用材観」という概念から独創的に着想に至った研究であるため。 効率性：異分野(美術史、保存科学、木材科学)の研究者が共同で遂行する複合領域的研究であるため。 継続性：10数年来継続している木彫像の樹種に関する研究を受け継ぐ事業であるため。						

2. 定量的評価

観点	国内調査回数					
判定	A					
判定理由 国内調査回数：国内調査を十分に実施することができた。						

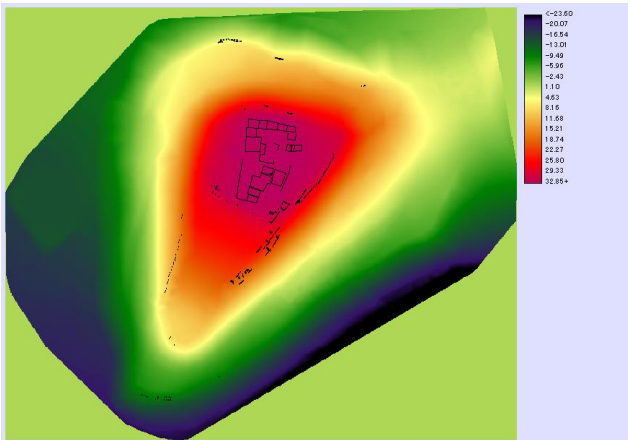
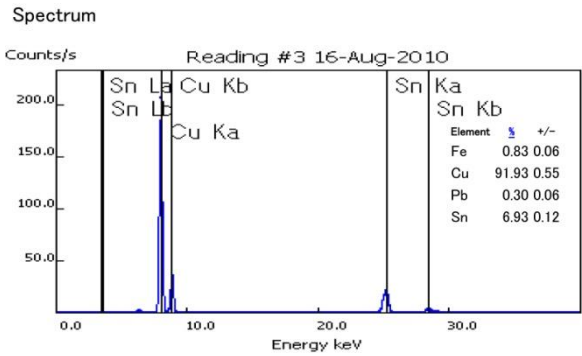
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	「用材観」という概念の発祥と形成について解明するための木彫像等の調査を十分に実施することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当初の計画通り進捗した。今年度の成果を踏まえて次年度計画においても同様に進めていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進																	
プロジェクト名称	10) 古代イスラエルの墓制と他界観に関する総合的研究（科学研究費補助金）（(5)-②）																	
【事業概要】 古代イスラエルにおける墓制と他界観について、宗教学、文献史学、考古学、文化財科学の観点から総合的に研究することを目的とする。文献の検討を中心として進められているユダヤ教・キリスト教の成立と発展を物質文化の面からも補完することを目指すものである。																		
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課考古室研究員 橋本英将															
【スタッフ】 月本昭男（立教大学教授）																		
【主な成果】 今年度は当初予定していたイスラエル共和国下ガリラヤ所在のテル・レヘシュ遺跡の調査に参加することができなかったため、2010年度までの調査に関する発掘調査報告書に関する作業を実施した。具体的には現地で実施した蛍光X線分析による元素同定データの整理を行った。また、西アジアに関する金属生産に関する文献の調査、及び発掘調査報告書掲載予定の下原稿の執筆を実施した。																		
【年度実績概要】 (1) 取得済みの蛍光X線による元素同定データの整理 2010年度までの調査で出土し、現地でハンドヘルド蛍光X線分析計により実施した元素同定データについて、蛍光X線スペクトル、及び検出元素の整理を行った。 (2) 関連文献の調査 元素同定データの解釈において参考とするため、イスラエル及び西アジア全般における金属生産史に関する文献の調査を行った。 (3) 上記(1)、(2)の成果をもとに、予定されている発掘調査報告書用に文章及び図表類の整理を行った。																		
		 <table border="1"><thead><tr><th>Element</th><th>Sn</th><th>Kb</th></tr></thead><tbody><tr><td>Fe</td><td>0.83</td><td>0.06</td></tr><tr><td>Cu</td><td>91.93</td><td>0.55</td></tr><tr><td>Pb</td><td>0.30</td><td>0.06</td></tr><tr><td>Sn</td><td>6.93</td><td>0.12</td></tr></tbody></table>		Element	Sn	Kb	Fe	0.83	0.06	Cu	91.93	0.55	Pb	0.30	0.06	Sn	6.93	0.12
Element	Sn	Kb																
Fe	0.83	0.06																
Cu	91.93	0.55																
Pb	0.30	0.06																
Sn	6.93	0.12																
【実績値】 データ整理作業・・・11件 文献調査・・・5件 報告書下原稿執筆・・・2件																		
【備考】 なし																		

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-10

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：文献史学・宗教学の成果が考古学的な発掘調査により論証または再検証される事例が増えつつあるため。 独創性：研究対象へのアプローチに考古学・文化財科学の視点を積極的に導入しているため。 発展性：複数の遺跡が重層的にかさなる複合遺跡の調査をすすめており、将来的に当地の通じてきな発展へ迫れると期待されるため。 効率性：蛍光X線分析計を現地に持ち込み測定し、データを持ち帰ったことにより、日本国内でも整理と解釈の作業が可能となったため。 継続性：資料は発掘調査の年度ごとに追加され、分析データの蓄積が今度も期待されるため。 正確性：自然科学分析を援用した調査を実施しており、出土遺物の材質などについて肉眼での観察より厳密であるため。						

2. 定量的評価

観点	データ整理 作業	文献調査	報告書下原稿 執筆			
判定	A	A	A			
判定理由 データ整理作業：2010年度までに実施した元素同定データの整理が完了したため。 文献調査：入手を予定していた元素同定データの解釈に有用な研究文献を入手できたため。 報告書下原稿執筆：継続している発掘調査報告書の担当部分について、元となる原稿が当初予定よりも早いスケジュールで執筆できたため。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	予定されていた、イスラエルでの夏季発掘調査に、本務との関係および現地情勢との兼ね合いから参加を見合わせたため、本来の計画を変更せざるをえなかったため。また、代替策として、取得済みの分析データの整理作業がすみ、報告執筆へむけた各作業に一定の進展がみられたため。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	本来の計画である発掘調査への参加を実施しなかったことから、計画自体の再検討が必要となった。次年度以降は発生した進捗の遅れを取り戻すための調査の実施に重点を置きたい。ただし、今後予定されている発掘調査報告書作成へむけての作業を進展させることができたのは一定の成果である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	11)南宋絵画史における仏画の位相—都と地域、中国と周縁—(科学研究費補助金)((5)－②)		
【事業概要】 従来まで特殊なジャンルと思われていた南宋時代の仏教絵画を中国絵画史のなかに位置づける試みを行う。そのために従来の南宋絵画史を批判的に検証し、さらには日本、中国、アメリカ等に所蔵される、異なった位相の南宋絵画を包括的に調査する。また、文献的調査についても継続的に行い、作品と文献の両面から、南宋時代における仏教絵画、ひいては仏教文化の具体的な様相を明らかにする。			
【担当部課】	学芸研究部	【プロジェクト責任者】	調査研究課東洋室研究員 塚本麿充
【スタッフ】			
【主な成果】 (1)作品調査：東京国立博物館所蔵品、関西を中心とする美術館、及び中国での現地調査を含む作品調査を行った。 (2)事業：アメリカでの学会参加、作品調査を行った。 (3)成果：論文と研究発表、講演の形で公開することができた。			
【年度実績概要】 (1)東京国立博物館所蔵品、寄託品等の調査 所蔵作品の調査を行った。これらの成果は、「元時代の道釈画の名品「四睡図」を中心に」(東洋館 8 室、25 年 7 月 2 日～8 月 4 日)、「特集陳列 江戸時代が見た中国絵画」(本館特別 1 室、2 室、25 年 5 月 1 日～6 月 16 日)で展示するとともに、研究の成果を、6 月 11 日、10 月 12 日に開催された列品解説、講演等で一般むけに公開することができた。 (2)アメリカ所蔵作品の調査及び学会発表 26 年 2 月にアメリカ・シカゴで CAA 学会で発表した。ついで、シカゴ美術館、メトロポリタン美術館、プリンストン大学美術館にて調査を行い、大きな知見を得た。			
【実績値】 口頭発表 4 回(①～④) 論文 5 本(⑤～⑨) 撮影カット数 約 1000 枚 成果の公開 2 回			
【備考】 口頭発表 ①2014 年 2 月 12 日、Maromitsu Tsukamoto, "Remodeling Chinese Paintings in Edo Japan: Chan Yue's Arhats and Their Restructuring as Triptychs", College Art Association 102nd Annual Conference, Chicago ②2014 年 1 月 11 日、「中国絵画史における「人格」と「かたち」—呉彬「山陰道上図巻」と価値評価の構造」：「第 37 回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「かたち」再考—開かれた語りのために—」(於：東京文化財研究所) ③2013 年 6 月 25 日、「江戸時代中国書畫收藏」(於：台湾師範大学藝術史研究所) 中文 ④2013 年 6 月 13 日(木)、「矢代幸雄とシックマン—20 世紀における中国絵画観の変容」：「美術と宝物の相関性についての比較美術史的研究」分科ワークショップ「コレクション、宝物から美術へ—東アジアの視点から」：「中国の宮廷コレクションと目録」(於：東京大学) 論文 ⑤「矢代幸雄とシックマン—20 世紀における中国絵画観の変容」『B I』Vol. 7、2014 年、35—48 頁 ⑥「中国宮廷コレクションと目録 —「舍利感應記」から「龍図閣瑞物目録」へ—」『仏教美術論 第 5 巻 機能論』竹林舎、2014 年、13—27 頁 ⑦「中国絵画の至宝をめぐる旅」『上海博物館 中国絵画の至宝』図録、東京国立博物館、2013 年、13—171 頁。 ⑧“Frictions in Universal Contexts and Individual Values: Chinese Paintings at the Toyokan”, Orientations, Volume 44, Number 5, June 2013, pp. 40—47. ⑨「江戸時代所見之中國繪畫—狩野畫派的摹本製作與中國畫史研究」『典藏古美術』、第 248 期、2013 年 5 月、162—169 頁 そのほか ・「栄西の入宋—南宋社会からのまなざし—」『栄西と建仁寺』東京国立博物館、2014 年 3 月 ・「中国の絵画」「日本独自の美意識—足利将軍の東山御物」「中華文明再編への情熱—乾隆帝のコレクション」ほか(『東京国立博物館東洋館 東洋美術をめぐる旅』平凡社、2013 年 1 月) ・「クリーブランド美術館の中国絵画コレクションと日本」『クリーブランド美術館 名画でたどる日本の美』東京国立博物館、138—139 頁、2014 年 1 月			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：今年度はアメリカを中心に作品調査を行い、シカゴ、ニューヨーク、プリンストン大学美術館において、大変大きな知見を得ることができた。 独創性：研究の蓄積によって、今後の発展性、継続性についても道筋をつけることができた。 発展性：東京国立博物館の所蔵品との比較研究が可能となり、独創性ととも、大変適時性を得た調査となったといえる。 効率性：調査とその公開を促進する効率性を確保することができた。 継続性：今後の継続性にも大きな指針が得られた。 正確性：論文の発表において、文献資料からも、作品調査の正確性を期することができた。						

2. 定量的評価

観点	口頭発表	論文	撮影カット数	成果の公開		
判定	A	A	A	A		
判定理由 口頭発表・論文：今年度は論文、学会発表ともに十分な成果を得ることができた。 撮影カット数：、調査、撮影作品数については十分であった。 成果の公開：データ入力についても十分な蓄積を得ることができた。また、成果の公開についても、今年度は研究会での発表以外にも、2回にわたって一般向け講演を行っており（2013年10月12日、「中国絵画史の正統と異端－上海博物館の名品から－」（於：東京国立博物館）、2013年6月11日、「中国絵画？日本絵画？－馬遠「寒江独釣図」と日本－」（於：東京国立博物館））、成果の公開についても十分であったと考える。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	より包括的な中国仏教文化の理解を目指と、士大夫を中心とする文人文化との接点を模索するため、さらなる調査が必要である。特に今後、江南・四川地域の寺観の調査、日本やアメリカのさらなる作品調査が急務である。あわせて、東京国立博物館所蔵品の調査、及び文献的な調査も継続し、研究にさらなる万全を期していきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	最終年度としては順調に計画を行うことができたと言える。次年度でその成果は総合文化展、特別展の開催等でも活用していくことが期待される。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	12)-1 海外展「青山杉雨のコレクションと書」に関する調査研究((5)-②)
【事業概要】 海外展「青山杉雨のコレクションと書」(25年4月20日～7月2日)に関する調査研究 24年7月18日から9月9日まで東京国立博物館で開催した特別展「青山杉雨の眼と書」の出品作品のうち、中国書跡20件、中国絵画20件、日本書跡(青山作品)42件を精選し、25年4月20日から5月26日まで上海博物館で開催した海外展の調査研究。	
【担当部課】	学芸企画部
【プロジェクト責任者】	学芸研究部列品管理課長 富田淳
【スタッフ】 島谷弘幸(副館長)、田良島哲(学芸研究部調査研究課長)、塚本鷹充(学芸研究部調査研究課研究員)、鍋島稲子(台東区立書道博物館主任研究員・客員研究員)	
【主な成果】 平成24年度に当館にて開催した特別展「青山杉雨の眼と書」の海外展であるため、作品の調査及び選定は前年度までに終了している。本年度は25年4月に新たに貸与する作品に関する補足調査を行い、また効果的な陳列、論考の執筆、講演会、安全な梱包、輸送、展示、撤収、返却を行った。	
【年度実績概要】 - 調査及び展覧会の実施で得られた作品の状態に関する知見をもとに、軽量の梱包資材を効果的に用いた安全な梱包方法を考え、東京から上海への文化財の輸送に備えた。その結果、無事に作品の移動、展示、返却を完了することができた。 - メールのやり取りによって上海博物館スタッフと打合せを重ね、効果的な会場レイアウトを策定した。 - 開幕に先立ち、現地ボランティアに事前のギャラリートークを行った。 - 展覧会図録『漢韻和風 青山杉雨の収蔵と書法作品』作成にあたり、東博版を抄訳する上での助言をした。 - 中国書跡、中国絵画については、新たな出陳作の解説を執筆した。 4本の論考を『MUSEUM 博物館之友』に発表した。 25年4月20日、上海博物館大講堂で講演会を2回行った。	
	
会場風景	
【実績値】 展示への反映 1回 論文等数 7本(日本側執筆論文数4本①～④、中国側執筆論文数3本) 関連講座 2回 展示作品 80点 公刊図書 1件 237ページ	
【備考】 論文 ①「青山杉雨の生涯」、富田淳、『MUSEUM 博物館之友』「日本書道之美、漢韻和風」、上海博物館編、鳳凰出版伝媒股份有限公司、2013年5月。 ②「青山杉雨の素顔」、鍋島稲子、『MUSEUM 博物館之友』「日本書道之美、漢韻和風」、上海博物館編、鳳凰出版伝媒股份有限公司、2013年5月。 ③「日本書法と審美」、島谷弘幸、『MUSEUM 博物館之友』「日本書道之美、漢韻和風」、上海博物館編、鳳凰出版伝媒股份有限公司、2013年5月。 ④「日本近現代書法と展覧会」、島谷弘幸、『MUSEUM 博物館之友』「日本書道之美、漢韻和風」、上海博物館編、鳳凰出版伝媒股份有限公司、2013年5月。 公刊図書 ⑤『漢韻和風 青山杉雨の収蔵と書法作品』、上海博物館編、上海書画出版社発行、2013年4月。	

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-12-1

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：日中国交正常化 40 周年に開催することができた。 独創性：青山杉雨の書と創作の基盤となった中国書画の双方を展示した。 発展性：前年の出陳作から精選し、新たに幾つかの中国書画を加え、会場面積に相応しい数とした。 効率性：短時間のうちに少人数で順調に開催できた。 継続性：前年の展示に引き続き開催することができた。 正確性：展示計画にのっとり実施し、事故もなく終了できた。						

2. 定量的評価

観点	展示への反映	論文等数	関連講座	展示作品数	公刊図書	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 展示への反映：実作と所蔵作品をバランス良く選び、作品の持ち味を十分に引き出す展示ができた。 論文等数：新たに貸与する作品の調査を行い、釈文に反映させつつ、日本側論文数 4 本、中国側論文数 3 本と、複数の論文を発表できた。 関連講座：午前・午後にあわせて 2 回の講座を開催し、研究の成果を十分に伝えることができた。 展示作品数：展示会場を考慮しながら、青山杉雨の人となりやを彷彿とさせる作品 80 点を選ぶことができた。 公刊図書：237 ページに及ぶ図録を刊行した。						

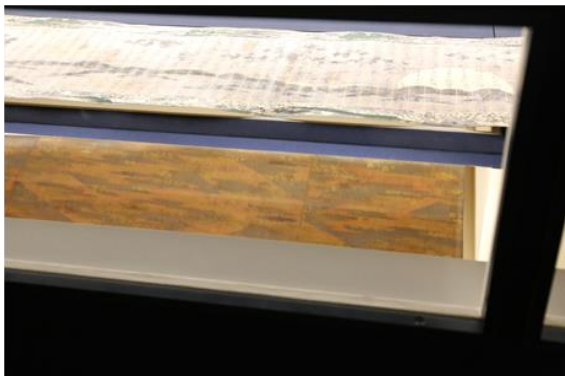
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	前年度に行った展覧会の成果をふまえて、限られた時間の中で、会場の事前調査を反映させ、また前年度の成果をふまえて、充実した展示を行うことができた。会場に合わせた作品を選別し、図録・公開講座などと併せて、青山杉雨の人となりやを効果的に伝えることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施されており、当該年度計画を達成しえたため。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	12)-2 特別展「和様の書」に関する調査研究((5)-②)
【事業概要】 特別展「和様の書」(25年7月13日～9月8日)に関する調査研究 平成25年7月13日～9月8日に開催した特別展「和様の書」の展示を充実させるための調査研究。 展示においては、平成19～21年度科学研究費補助金・基盤研究(B)「東アジアの書道史における料紙と書風の基礎的研究」、平成22～25年度の基盤研究(A)「東アジアの書道史における料紙と書風の総合的研究」の成果をもとに行った事前調査によって作品を選定し、その寸法や内容にもとづく分類を経て配置案を作成する。さらに、調査によって、和様の書の魅力とは何かを具体的に検討する。	
【担当部課】	学芸企画部
【プロジェクト責任者】	博物館情報課長 高橋裕次
【スタッフ】 田良島哲(学芸研究部調査研究課長)、恵美千鶴子(学芸研究部調査研究課書跡・歴史室アソシエイトフェロー)	
【主な成果】 - 事前調査では、これまでの研究によって得られた新知見にもとづき、それぞれの作品において、料紙と書風のあり方がどのように関連しているかという、和様の書としての位置づけを明らかにした。 - 三跡を中心とする名品をとおして、和様の書の成立とその後の展開などの全貌を明示し、日本人の好みや感性を反映した書の美しさを、多くの人々に伝えることができた。 - 展示では、卷子、冊子など平面的な作品について、拡大画像やわかりやすい内容のパネルを後方壁面の随所に配置したことにより、書のさまざまな魅力をクローズアップして示すことができた。	
【年度実績概要】 - 前年度に行った事前の調査によって、これまで未公開であった数点を確認し、展示することができた。 重要文化財 書状 藤原行成筆、陣定定文案 藤原行成筆、古今和歌集(修学院切)など個人蔵の作品の調査 - そのほかにも下記の作品の調査を前年度行った。 国宝 大手鑑など 京都・陽明文庫、国宝 三休白氏詩巻 大阪・正木美術館、国宝 書状(離洛帖) 東京・畠山記念館、国宝 平家納経 広島・厳島神社、重要美術品 書状(頭弁帖) 広島 ふくやま書道記念館 など - わかりやすい展示にするために、95字解説のほかに、鑑賞のポイントを示すパネルを作成した。 - 国宝「平家納経」をはじめ、本紙の裏などに施された美しい装飾をあわせて鑑賞できるようにしたことで、書と料紙が融合した和様の書の特質を理解していただくための効果的な展示が可能となった。	
 	
解説パネルなど 「平家納経」の展示	
【実績値】 展示への反映 1回・作品調査 8回(24年度までに行った調査回数)・論文数 5本(①～⑤)	
【備考】 論文 ①高橋裕次「料紙よりみた和様の書」(『聚美』第8号) ②同「和様の書の料紙について」(特別展「和様の書」図録) ③田良島 哲「王朝貴族の書と信仰―藤原行成を中心に」(特別展「和様の書」図録) ④恵美千鶴子「和様の祖「小野道風」受容史」(『聚美』第8号) ⑤同「「和様の書」鑑賞の歴史」(特別展「和様の書」図録)	

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-12-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性		
判定	A	S	A	A		
判定理由 適時性：展覧会の直前に、主要作品の一つである『御堂関白記』がユネスコの世界記憶遺産に登録されたことで、関心が高まり、文化財の鑑賞において理解を深めていただくきっかけとなった。 独創性：国宝となっている全ての手鑑をできるだけ広げて展示したことは、これまでにない新しい試みであった。また、「平家納経」では、表裏に金銀や革手などの装飾が施してあるため、裏を鏡で見えるように工夫した展示ケースを作成し、内部に有機EL照明を採用して、その装飾の様子をより鮮明にご覧いただくことができた。 発展性：和様の書の見しさを、書と料紙の両方から理解していただける展示となり、今後の書に関わる企画立案に生かせる内容となった。 効率性：展示方法や作品の組み合わせを十分に検討した結果、毎週の展示替えを効率よく実施することができた。						

2. 定量的評価

観点	展示への反映	作品調査	論文数			
判定	A	A	A			
判定理由 展示への反映：多彩な展開や、日本人の美意識の変遷など、和様の書のもつ多くの魅力を、展示に反映することができた。 作品調査：これまで体系的な展示が行われていなかった世尊寺の書について、8回の作品の調査を実施したことで、和様の特徴を示す多くの作品を一堂に集め、展示することができた。 論文数：調査の成果を具体的に示した5本の論文を、図録や雑誌などに掲載することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	作品調査、展示方法の検討などを効率的に実施したことで、一般にわかりにくといわれている書に親しんでいただける展示が実現し、鑑賞者の文化財に関する深い理解を促すことができた。また他館との連携についても今後さらに発展させることによって、新たな調査や展覧会におけるさまざまな取り組みにつなげていきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	科学研究費補助金による研究や、事前調査の成果を十分に展覧会に反映することができた。本展を一つのステップとして、今後の調査、研究をさらに充実させることができるようにしていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	12)-3「上海博物館 中国絵画の至宝」に関する調査研究(5)-②
【事業概要】 特別展「上海博物館 中国海外の至宝」(25年10月1日～11月24日)に関する調査研究 平成25年10月1日(火)～同年11月24日(日)に開催された、特別展「上海博物館 中国絵画の至宝」出品する作品の選定と調査を実施し、安全な輸送と、展示内容の充実を図る。	
【担当部課】	学芸企画部
【プロジェクト責任者】	学芸研究部列品管理課長 富田淳
【スタッフ】 塚本鷹充(学芸研究部調査研究課東洋室研究員)	
【主な成果】 一級文物18件をふくむ、北宋から明清にいたる絵画、40件を調査した。状態を確認し、安全な輸送についての計画を立てるとともに、普段は公開されていない題跋や印章、付属品などについても、調査を行った。	
【年度実績概要】 ・上海博物館研究員等の助言を得ながら、25年2月27～3月2日、25年7月4日～5日にかけて、作品の調査を行い、候補作品を選定した。その結果、40件のきわめて質の高い、上海博物館を代表する名画の出品につながった。 ・出国手続きに困難は生じたが、そのほかの作業では安全な作品輸送と展示を行うことができた。 ・題跋や印章、絹、紙本の状態など、従来の写真図版ではわからない詳細な部分を観察することで、作品の根幹となる情報を得ることができ、安全な輸送と、図録及び釈文編執筆の基礎とすることができた。 ・図録では、論文2本、コラム5本を掲載することができた。あわせて、題跋、印章等の釈文をあつめた「釈文編」を出版することができた。図録は最終日に売れ切れるほど好評で、また、記念講演会(2回)、外部講師を招いてのギャラリートーク(4回)も、多くの参加者があった。	
	
上海博物館での調査風景	
【実績値】 ・調査回数 現地研究者との打合せ 3回、現地調査 40件 ・公刊図書 1冊(①) ・論文数等 論文2本②～③、コラム5本(④～⑧) ・関連講座 記念講演会(2回)(⑨～⑩)、ギャラリートーク(4回)(⑪～⑭) ・展示への反映 1回 他館との連携 1回	
【備考】 公刊図書 ①東京国立博物館編『上海博物館 中国絵画の至宝』および『釈文・印章編』(東京国立博物館 25年10月) 公開論文、コラム ②李維琨「千年の絵画 画壇の金字塔―「上海博物館 中国絵画の至宝」によせて―」 ③塚本鷹充「中国絵画の至宝をめぐる旅」(以上、論文) ④富田淳「徽宗皇帝の宣和装と七つの璽印」 ⑤富田淳「乾隆皇帝の題詩―銭選の「浮玉山居図巻」」 ⑥富田淳「清朝における王冕「墨梅図」の由来」 ⑦富田淳「康熙帝を欺いた? 男一高士奇の『江村書画目』」 ⑧塚本鷹充「日本と中国の中国絵画観の差異―元代文人画の評価をめぐる―」(以上、コラム) 以上(『上海博物館 中国絵画の至宝』25年10月) 記念講演会 ⑨塚本鷹充「中国絵画史の正統と異端―上海博物館の名品から―」(25年10月12日) ⑩李維琨「唐寅山水画の視覚形式―『春游女几山図』を例に―」(25年10月12日) ギャラリートーク「上海博物館の中国名画 私の見方」 ⑪湊信幸(10月11日)、⑫宮崎法子(10月25日)、⑬塚本鷹充(11月8日)、⑭板倉聖哲(11月22日)	

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-12-3

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	効率性	発展性		
判定	A	S	A	A		
判定理由 適時性：本展覧会は 2010 年に上海博物館で開催された「千年丹青」展の交換展として企画されたもので、東洋館のリニューアルオープンにあわせて開催された時期的な意義は大きいものがある。 独創性：一級文物 18 件という高品質の展覧会は、今までの上海博物館が海外で行ってきた中国絵画展でも最高レベルのものである。 効率性：短期間のうちに多くの調査を実施することができた。 発展性：今後、上海博物館との学術協力や展覧会協力など、より一層の交流の拡大が期待できる。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	公刊図書	関連講座	論文数等	展示への反映	他館との連携
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 調査回数：現地研究者との打合せ 3 回、現地調査 40 件と、短期間のうちに多くの調査を実施することができた。 他館との連携：現地研究者との連携を十分にとることができた。 公刊図書：充実した図版と論考を掲載したことにより、上海博物館の名品図録としてのみならず、中国絵画通史としての性格を持つことで一般の方々にも好評をばくし、完売するほどの高評価を得た。 関連講座：記念講演会（2 回）、ギャラリートーク（4 回）を実施した。通常よりも多く解説の機会を設けることで、一般の方々がわかりにくい中国絵画についても、親しみをもっていただけの工夫をした。 論文数等：論文 2 本、コラム 5 本を発表した。通常よりも丁寧な解説を心がけることで、一般の方々にはなかなかわかりにくい中国絵画についても、親しみをもっていただけの工夫をした。 展示への反映：安全な輸送、展示と、わかりやすい解説を行うことができた。 他館との連携：現地研究者との連携を十分にとることができた。						

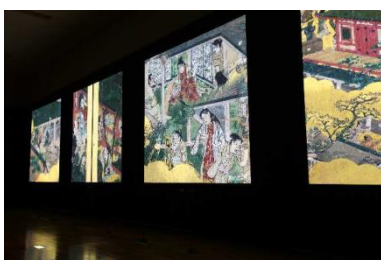
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	上海博物館の協力を得て、もっとも重要な宋元時代の名品を調査できたのみならず、それを最新の研究成果とともに展示することができた。また事前の調査研究を活用して、展示を工夫した結果、観客からも大きな好評を得ることができ、講演会などの付帯事業も好評であった。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	時機に合った展覧会を企画し、好評のうちに閉幕して、安全に返却することができた。開催過程において若干の困難は生じたが、今後の展覧会活動にさらに大きな成果が得られることが期待できる。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	12)-4 特別展「京都一洛中洛外図と障壁画の美」に関する調査研究((5)-②)		
【事業概要】 特別展「京都一洛中洛外図と障壁画の美」(25 年 10 月 8 日～12 月 1 日)に関する調査研究 平成 25 年 10 月 8 日～12 月 1 日に開催した特別展「京都一洛中洛外図と障壁画の美」の展示を充実させるための調査研究。 特に、他に類を見ない障壁画の立体的な展示手法を検討するために実施した事前調査とともに、文化財の展示と映像展示を融合させ、特別展会場において適切に示すために映写実験を行う。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	企画課特別展室長 松嶋 雅人
【スタッフ】 金井裕子(企画課特別展室研究員)			
【主な成果】 ・京都二条城において建造物、並びに障壁画の作品調査を実施したことで、通常の展覧会では実施することが困難である室内構造を立体的に再現する展示に反映することができた。 ・超高精細映像 4 K の映写実験を展示会場等、実際の展示に即した状況で実施したことで、展示映像を文化財展示と適切に融合させて提示することができた。			
【年度実績概要】 ・京都・二条城において建造物とともに障壁画の作品調査を行って詳細な寸法と作品状態を把握し、それらの諸データを施工計画に活かし、展示会場内において、文化財に負担のない適切な展示手法を検討した。 ・二条城の障壁画の実物大模型により、効果的な照明を施す実験を行った。 ・「洛中洛外図屏風 舟木本」の鑑賞にあたり理解を促すために、展示会場内で拡大映写する映像展示のための内容並びに場面選択のための検討、並びに映写実験を行った。 ・超高精細映像 4 K の龍安寺石庭映像について展示会場において映写実験を行った。			
 二条城障壁画の立体的展示  「洛中洛外図屏風 舟木本」の映像展示  超高精細映像 4 K の龍安寺石庭映像			
【実績値】 ・京都二条城の調査(建造物、並びに障壁画) 2 回 ・二条城障壁画の実物大模型による照明実験 1 回 ・「洛中洛外図屏風 舟木本」の拡大映写における内容選択の検討、並びに映写実験 5 回 ・超高精細映像 4 K の龍安寺石庭映像の会場における映写実験 2 回 ・展示への反映 1 回			
【備考】 超高精細映像 4 K の龍安寺石庭映像については、一般社団法人 全日本テレビ番組製作社連盟「第 30 回 ATP 賞」の特別賞を受賞した。			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-12-4

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性		
判定	A	S	A	B		
判定理由 適時性：映像展示における先鋭的、先進的映像機器の利用によって文化財の鑑賞において深い理解を促すことができた。 独創性：本展における二条城障壁画の立体的な再現展示は、これまで類をみない規模のものである。 発展性：文化財展示の鑑賞理解を促す映像展示は、さまざまな分野で利用される展覧会が今後、増加すると予測される。 効率性：映像展示においては、現状においては設備的投資に関し大きな負担がかかる。						

2. 定量的評価

観点	文化財調査回数	照明実験回数	映写内容選択の検討、並びに映写実験回数	会場における映写実験回数	展示への反映	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 文化財調査回数：建造物室内の現地調査、障壁画の作品調査を2回実施したことで、適切に展示に反映できた。 照明実験回数：1回の実験結果により、通常の展示物より大画面となる展示面に対して適切に照明を施すことができた。 映写内容選択の検討、並びに映写実験回数：内容検討を経て、5回の映写実験を行ったことにより、文化財の見所を適切に示すことができた。 会場における映写実験回数：2回の実験により、障壁画の展示と融合する適切な映像展示を行うことができた。 展示への反映：総計84面の二条城障壁画を上下2段に展示するなど、画期的な展示手法を提示することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	作品調査、映像試写実験をともに効率的に実施したことで、文化財展示と先進的な映像展示とが適切に融合したかたちで提示することができ、鑑賞者にとっては文化財に対する深い理解を促すことができたと考える。今後は、映像展示のみならず、展示におけるさまざまな手法を検討していきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査並びに実験の成果を十分に展覧会に反映することができた。 本展を指標としながらさらなる調査、研究へとつなげていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	12)-5「クリーブランド美術館展—名画でたどる日本の美」に関する調査研究((5)-②)		
【事業概要】 特別展「クリーブランド美術館展—名画でたどる日本の美」(26年1月15日～2月23日)に関する調査研究 平成26年1月15日～2月23日に開催した「クリーブランド美術館展—名画でたどる日本の美」の展示を充実させるための調査研究。 現地における作品調査をクリーブランド美術館、並びに九州国立博物館研究員とともに行う。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	企画課特別展室長 松嶋 雅人
【スタッフ】 土屋貴裕(学芸研究部列品管理課平常展調整室)、塚本鷹充(学芸研究部調査研究課東洋室員)、本田光子(学芸研究部調査研究課絵画・彫刻室任期付研究員)、畑靖紀(九州国立博物館)、森實久美子(九州国立博物館)、鷺頭桂(九州国立博物館)			
【主な成果】 ・クリーブランド美術館(アメリカ)において、収蔵品の作品調査を行い、本展出品作品の選定を行った。本年度の作品調査は、24年度に行った現地調査に引き続いたものである。			
【年度実績概要】 ・クリーブランド美術館(アメリカ)において収蔵品の作品調査を行い、作品に関わる歴史的事項などのこれまでに知られていない知見をもとに本展に51件の日本、中国、西洋の絵画を出品した。 ・図録作成にあたり、新たな知見を得た作品調査の成果を鑑賞者へよりわかりやすく説明することを踏まえ、九州国立博物館と分担して5本の論文を執筆した。 ・作品の調査を踏まえて、クリーブランド美術館、九州国立博物館と分担執筆して作品解説を充実したものとした。			
			
作品調査			
【実績値】 ・作品調査 1回(参考:24年度調査 1回) ・論文数 5本(九州国立博物館2本の分担執筆含む) ・解説数 51件(クリーブランド美術館4件、九州国立博物館23件の分担執筆含む) ・展示への反映 1回			
【備考】 図録掲載の論文 総論「日本絵画の奥義」松嶋雅人 各論「約束された救済の情景」土屋貴裕 附論「クリーブランド美術館の中国コレクションと日本」塚本鷹充			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	効率性			
判定	A	A	A			
判定理由 適時性：本展は当館とクリーブランド美術館の交換展にあたり、双方の館において作品調査を行うことができ、適切に展覧会を準備することができた。 独創性：作品調査を十全に行ったことで、800年にわたる体系的な日本絵画史の流れを追うことのできる展覧会となった。 効率性：限定された機会であった作品調査に関わらず、適切な出品作品を選定することができた。						

2. 定量的評価

観点	作品調査	論文数	解説数	展示への反映		
判定	A	A	A	A		
判定理由 作品調査：1回（参考・24年度調査 1回）の調査であったが、本展への出品作品だけでなく、クリーブランド美術館の収蔵である日本絵画作品を広く作品調査できた。 論文数：展覧会図録に日本絵画史における各時代、各流派等、幅広い内容の論文5本を掲載することができた。 解説数：展覧会図録に各作品の見所、特徴を示した作品解説51件を掲載することができた。 展示への反映：作品調査を踏まえたことで、よりわかりやすい作品の紹介を行うことができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	限られた回数による作品調査であったが、充実した内容の調査を行うことができ、クリーブランド美術館とも種々の意見交換をすることで、作品理解を深め、その内容を展示に際しても適切に反映させることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	作品調査の成果を十分に展覧会に反映することができた。 本展をもとに海外における日本美術の調査研究へとつなげていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	12)-6 海外展「伝統の再創造：日本の近代美術」に関する調査研究((5)-②)		
【事業概要】 海外展「伝統の再創造：日本の近代美術」(26年2月16日～5月11日開催)に関する調査研究 平成26年2月11日～5月11日開催の海外展「伝統の再創造：日本の近代美術」の展示を充実させるための調査研究。 本年度は現地における会場状況の調査を行う。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	企画課特別展室長 松嶋 雅人
【スタッフ】 土屋貴裕(学芸研究部列品管理課平常展調整室)			
【主な成果】 ・クリーブランド美術館(アメリカ)において展覧会会場の調査を行った。本年度の調査は、クリーブランド美術館スタッフとともに24年度に行った当館における出品作品選定のための作品調査と、アメリカにおける施設の現地調査に引き続いたものである。			
【年度実績概要】 ・クリーブランド美術館(アメリカ)において展覧会会場の調査を行った。会場環境の状況とともにその特性、特色に関する知見をもとに本展に出品される当館列品の55件の日本の近代美術作品についての適切な作品情報をクリーブランド美術館側に供出した。 ・本展図録作成にあたり、2本の論文を執筆した。 ・前年度に行った作品調査を踏まえて、クリーブランド美術館への来館者にとって日本絵画の理解が容易となるよう作品解説を充実したものとした。			
			
現地調査		当館における作品調査	
【実績値】 ・作品調査 1回(参考・24年度調査 1回) ・論文数 2本 ・解説数 55件			
【備考】 図録掲載の論部 “Japan’s Dream of Modern Art” 松嶋雅人 “The Development of Calligraphy in Japanese Modernism” 島谷弘幸			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-12-6

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	効率性				
判定	A	A				
判定理由 適時性：本展は当館とクリーブランド美術館との交換展実施にあたり、双方の館において各収蔵品の作品調査を行うことができ、適切に展覧会を準備することができた。 効率性：限定された機会であった調査に関わらず、適切な出品作品を選定することができた。						

2. 定量的評価

観点	作品調査	論文数	解説数			
判定	A	A	A			
判定理由 作品調査：1回（参考・24年度調査 1回）の調査であったが、本展への出品作品だけでなく、クリーブランド美術館の収蔵作品を広く作品調査できた。 論文数：展覧会図録に日本近代美術史における概説、近代書跡に関わる適切な内容の論文2本を掲載することができた。 解説数：展覧会図録に各作品の見所、特徴を示した作品解説55件を掲載することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	限られた回数による施設調査、並びに作品調査であったが、充実した内容の調査を行うことができ、クリーブランド美術館とも種々の意見交換をすることで、作品理解を深め、その内容を展示に際しても適切に反映させることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	施設調査、作品調査の成果を十分に展覧会に反映することができた。 本展をもとに海外における日本美術展実施における調査研究へとつなげていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	12)-7 特別展「人間国宝展一生み出された美、伝えゆくわざ」に関する調査研究((5)-②)
【事業概要】 特別展「人間国宝展一生み出された美、伝えゆくわざ」(26年1月15日～2月23日)に関する調査研究 日本工芸会及び文化庁が主催する日本伝統工芸展が平成25年に第60回を迎えた。その記念特別展として、文化庁及び日本工芸会の全面的な協力を得て、平成24年度より準備が進められた。平成25年春から、全国の博物館など所蔵先へ出品交渉及び作品調査を当館の工芸担当者が中心に行い、展示方法、講演会、広報の効果的な手段などについて検討する。	
【担当部課】	学芸企画部
【プロジェクト責任者】	学芸研究部調査研究課工芸室 主任研究員 小山弓弦葉
【スタッフ】 室瀬和美(公益社団法人日本工芸会副理事)、近藤都代子(文化庁伝統文化課主幹)、伊藤嘉章(学芸研究部長)、高橋裕次(学芸企画部博物館情報課長)、竹内奈美子(学芸研究部調査研究課工芸室長)、伊藤信二(学芸企画部博物館教育課教育普及室長)、酒井元樹(学芸研究部保存修復課保存修復室研究員)、横山 梓(学芸企画部企画課特別展室研究員)、三田覚之(学芸研究部調査研究課工芸室研究員)	
【主な成果】 伝統工芸に携わってきた重要無形文化財保持者(人間国宝)を工芸担当者が個別に調査・研究し、特別展にふさわしい物故の作家104名の代表作を1点ずつ選出した。伝統がどのように発展を遂げ、現代に伝えられたのかを、国宝・重要文化財といった古典の名品と比較研究し、展示することによって観覧者にも日本の伝統工芸をわかりやすくした。人間国宝作家の名作を一堂に会することによって、日本の伝統工芸の卓越したわざの美を改めて周知する機会となった。	
【年度実績概要】 (1) 人間国宝作家の作品を所蔵する美術館・博物館施設、及び個人宅へうかがい、作品を実見し調査することによって、それぞれの作家の代表作で特別展にふさわしい名品を選択した。物故人間国宝作家の作品105件(刀剣研磨・手漉和紙など作品を展示できない工芸技術は未展示)、古典の名品40件(国宝6件、重要文化財13件、重要美術品3件を含む)、全145件の作品を、当館の所蔵品、及び、全国の美術館・博物館の所蔵品により構成して展示し、一般公開した。 (2) 展覧会は全3章から構成され、平成館3、4室を展覧会会場として展示した。 (3) 現役の人間国宝作家には、各工芸担当者が個別にインタビューを行い、制作の工程や姿勢などを調査した。その調査内容をふまえ、26年1月15日～1月31日までの平日の開館日には、毎日午後1時半より2時まで、特別展会場にて、現役の人間国宝作家によるギャラリートーク(出品作品解説)が行われた。 (4) 26年1月26日(日)、26年2月16日(日)には、本展にかかわる伝統工芸に関する調査内容が一般人や学童にも理解できるよう、日本工芸会に属する作家により、親子向けのワークショップが行われた。 (5) 人間国宝作家に関する調査研究によって、伝統工芸への関心や広がりが高く世界に広がりつつある実情があきらかとなった。そのことを広く一般に周知すべく、26年1月25日(土)には記念シンポジウム「伝統工芸の21世紀を考える」、26年2月1日(土)にはトークイベント「日本の工芸を語る」が行われた。	
  調査風景画像	
【実績値】 展示への反映：1回、作品調査の回数：50回、執筆論文数：2本(①～②)、執筆コラム数：3本(③～⑤) 執筆解説数：198点、発表回数：13回(ギャラリートーク、シンポジウム、トークイベント)	
【備考】 論文(以下、論文・コラムともに特別展「人間国宝展」図録に掲載) ①小山弓弦葉：「人間国宝展」への祈り ②室瀬和美(日本工芸会)：日本の工芸文化 日本工芸会の役割とこれから コラム ③酒井元樹：刀剣研磨 ④高橋裕次：和紙 ⑤近藤都代子(文化庁)：重要無形文化財制度について	

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：日本伝統工芸展 60 回記念に当たる平成 25 年度にふさわしい時期に人間国宝が制作した伝統工芸の粋を一堂に会する機会となった。 独創性：人間国宝作家の作品だけではなく、古典の名品と並べて展示することにより、伝統のあり方を問う展示は、これまでにない画期的な発想であった。 発展性：日本の伝統工芸の卓越したわざの美を広く一般に啓蒙する機会となり、伝統工芸を志す作家にとっても、日本工芸の優れた技術を学び、今後の制作に発展させていく好機となった。 効率性：全国からの集荷、返却、展示方法や展示替の組合せを検討し、これらを効率よく行うことができた。 継続性：当館における現代工芸の展覧会は初めての試みであったことから、これまで交際のなかった美術館・博物館や所蔵者と関係を持つ機会となった。 正確性：調査の成果を展覧会、図録、ギャラリートーク、シンポジウム、トークイベントなど多彩なイベントで一般に広く、正しく伝えることができた。						

2. 定量的評価

観点	展示への反映	作品調査回数	論文執筆数	執筆コラム数	執筆解説数	発表回数
判定	A	A	A	A	A	S
判定理由 展示への反映：古代より現代にまで伝わる日本の卓越した伝統工芸のわざの美を物故人間国宝作家 104 名の作品によって広く一般に周知することができた。 作品調査回数：当館に所蔵される人間国宝作家の作品だけではなく、全国の美術館・博物館の所蔵作品を、当館の工芸担当者が分担して 50 回にわたり調査した。 執筆論文数：当館から 1 本、日本工芸会から 1 本、日本の伝統工芸に関する論文を図録に掲載した。 執筆コラム数：当館の担当者 2 名及び文化庁担当者 1 名により、日本の伝統工芸に関するコラムを一般に分かりやすく、3 本のコラムにして図録に掲載した。 執筆解説数：陶芸・染織・漆芸・金工・木竹工・人形・諸工芸の担当者が分担して、最新の調査内容を反映させた作品解説を 198 点執筆し、図録に掲載した。 発表回数：通常のシンポジウム、トークイベントなどのほか、当館特別展では初めて、外部の解説者によるギャラリートークを 13 回も行った。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当館で初めて行われる現代工芸の展覧会に際し、当館の所蔵品の中核をなす、国宝・重要無形文化財を含む古典の名品を併せて展示することにより、伝統の歴史を古代から現代にまでたどるという、前代未聞の展覧会を開催することができた。この新たな試みにより、今後の展覧会企画にもより広い視野が広がる可能性が生まれた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良、改善計画、次年度計画への反映
順調	調査の成果を展覧会に十分に反映することができた。この展覧会を機に、日本工芸の伝統とその歴史の変遷に関するさらなる調査研究へ発展させていきたいと考えている。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	12)-8 特別展「支倉常長像と南蛮美術—400年前の日欧交流—」に関する調査研究((5)-②)		
【事業概要】 特別展「支倉常長像と南蛮美術—400年前の日欧交流—」(26年2月11日～3月23日)に関する調査研究 平成26年2月11日～3月23日に開催した特別展「支倉常長像と南蛮美術—400年前の日欧交流—」の展示を充実させるための調査研究。 「支倉常長像」を展覧会開催前に調査するとともに、「南蛮人渡来図屏風」「世界図屏風」という本展出陳作の作品調査を行う。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	学芸研究部列品管理課平常展調整室 研究員 土屋 貴裕
【スタッフ】 松嶋雅人(企画課特別展室長)			
【主な成果】 「支倉常長像」に関しては、本展開催前に本作が展示されていた仙台市博物館において展示状況、作品状態を点検し、作品輸送等に関して関係者との協議を行った。あわせて、作品の細部描写等を詳細に観察し、リーフレット等配布物の原稿執筆のための基礎資料とした。「南蛮人渡来図屏風」「世界図屏風」に関しても同様に、デジタル撮影を含む調査研究を進めた。			
【年度実績概要】 ・仙台市博物館において「支倉常長像」の展示状況、作品状態を点検し、作品輸送等に関して関係者との協議を行った。これらにより、安全な輸送、展示が実現し、展示ディスプレイに関しても事前に詳細な打ち合わせを行なうことができた。 ・仙台市博物館における「支倉常長像」の事前調査により、画像では確認しにくい画面細部の観察を行うことができた。その結果、特に衣装や刀装など、本図を特徴づけるモチーフに関する知見を深めることができ、より充実した解説を執筆することができた。 ・「南蛮人渡来図屏風」「世界図屏風」に関しても、展覧会開催前にデジタル撮影、細部の観察、館蔵品を中心とした関連作品の調査研究を行うことができた。 ・これらの成果を総合し、合計8ページの小冊子(リーフレット)を作成することができた。			
			
仙台市博物館での事前調査		会場風景(内覧会時)	
【実績値】 作品調査 3回 小冊子掲載解説 5本 会場作品解説 5件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-12-8

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	効率性				
判定	A	A				
判定理由 適時性：支倉常長の渡欧から約 400 年後に当たる平成 25 年度に本展覧会を開催することができた。 効率性：本展開催にあたり、事前に作品調査を行うことができ、適切な展覧会の準備、展示が実現した。						

2. 定量的評価

観点	作品調査	小冊子 掲載解説	会場作品解説			
判定	A	A	A			
判定理由 作品調査：展覧会開催前に、入念な事前調査 3 回を実行することができた。 小冊子掲載解説：作品の制作背景を説明した分かりやすい解説やエッセーを 5 本、小冊子に掲載することができた。 会場作品解説：5 件の作品解説のみならず、時代背景を説明する解説なども掲示することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	限られた期間における調査研究であったが、十分な事前調査とその成果を踏まえた充実した内容の展覧会を開催することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	作品調査の成果を十分に展覧会に反映することができた。 本展をもとに、日本や海外の文化交流を紹介する展覧会開催や、調査研究へとつなげていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	12)-9 特別展「栄西と建仁寺」に関する調査研究((5)-②)		
【事業概要】 特別展「栄西と建仁寺」(26年3月25日～5月18日)に関する調査研究 平成26年3月23日～5月18日開催の特別展「栄西と建仁寺」の展示作品選定と図録執筆のための調査研究。 建仁寺山内の文化財に関しては、すでに京都国立博物館が平成12・13年度に詳細な調査を行い、平成14年に展覧会を行っている。今回はその展覧会とは違う視点を加味するために、九州など京都に限らない広い地域を対象とし建仁寺派以外の寺院の文化財も加えた作品調査を行い、その成果を展覧会とする。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	学芸研究部調査研究課 絵画・彫刻室長 田沢 裕賀
【スタッフ】 高橋裕次(博物館情報課長)、齊藤孝正(上席研究員)			
【主な成果】 ・建仁寺派以外の寺院や美術館の調査により禅宗の立場以外の観点から栄西の著述を研究し、展覧会に反映させることができた。 ・京都・六道珍皇寺や長崎・春徳寺などを含んだ調査により、京都の禅院としてだけでは捕らえきれない建仁寺派の文化的様相を示すことができた。 ・「蘭溪道隆像」(西来院)、小野篁像(六道珍皇寺)の像内調査により、前者では古い「蘭溪道隆像」像の頭部があることが確認され、後者では銘札・墨書銘が見出されたことで、作者・制作年を明らかにすることが出来た。			
【年度実績概要】 ・建仁寺派寺院の所蔵作品調査を行って、展覧会のテーマ・展示会場内構成を検討し、会場設営を適切なものとした。 ・作品の状態調査に基づいて六道珍皇寺所蔵作品の修理助言を行った。 ・名古屋市立博物館等の寺院以外の保管資料を調査し、建仁寺派諸寺院の作品と関連づけることで、新しい栄西のイメージを提示する展示とすることができた。			
 展示会場風景  長崎・春徳寺での作品調査  「蘭溪道隆像」(西来院) 像内納入物			
【実績値】 ○調査回数 25回 (内訳) ・建仁寺山内調査(本坊ならびに塔頭)10回 ・建仁寺以外の建仁寺派寺院調査5回・建仁寺派以外の寺院調査4回 ・博物館等公立施設における保管作品調査6回 ○展示作品点数183件 ○論文等数 12本 (内訳)・論文数 6本・小論文6本 ○解説数183件			
【備考】 総論 ・栄西と建仁寺の品々 田沢裕賀 各論 ・栄西の事跡と建仁寺の建立 高橋裕次・栄西以後の建仁寺 浅見龍介・海北友松の伝記と作風—建仁寺の友松筆障壁画の位置づけ 田沢裕賀・建仁寺ゆかりの宝物—工芸品 齊藤孝正・建仁寺とお茶 齊藤孝正 コラム ・建仁寺 四頭茶会 齊藤孝正・栄西の入宋—南宋社会からのまなざし 塚本麿充・蘭溪道隆坐像像内納入の頭部残欠 浅見龍介・正伝院に伝来した二つの肖像画をめぐる 田沢裕賀・正伝院障壁画(狩野山楽筆)を復元する 山下善也・六道珍皇寺の小野篁・冥官・獄卒立像 浅見龍介			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-12-9

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性		
判定	S	S	A	A		
判定理由 適時性：栄西禅師の800年遠忌にあわせることで、通常では展示公開が許可されない作品を特別に借用することが出来た。 独創性：禅宗史の側から以外の栄西像を提示した。また、建仁寺派寺院の所在地域との関連性に着目した。 発展性：禅宗あるいは中世仏教をテーマとした研究に基礎的資料を提示したことで研究の深化に重要な役割を果たした。 効率性：研究成果を展示に効率よく反映させることができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	展示作品点数	論文等数	解説数		
判定	S	A	A	A		
判定理由 調査回数：建仁寺派の協力により、通常は調査を許されない祖師像の像内調査などを含んだ各寺院の作品調査を19回、ならびに博物館等公立施設における保管作品調査6回を実施したことで、成果を展示に反映した充実した内容となった。 展示作品点数：会場の大さを考慮し、テーマ理解にふさわしい観賞が出来る作品点数を考慮した構成とすることができた。 論文等数：展覧会図録に栄西・建仁寺の特徴を理解するのに適切な内容の論文12本を掲載することができた。 解説数：展覧会図録に各作品の見所、特徴を示した作品解説183件を掲載することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	共催の建仁寺派との調整により効率的に作品調査を行ったことで、作品の安全性を考慮しつつ、新発見の成果を取り入れた建仁寺の文化的特徴と作品に対する鑑賞者の理解を深める展示を行うことが出来た。

4. 中期計画の実施状況の確認

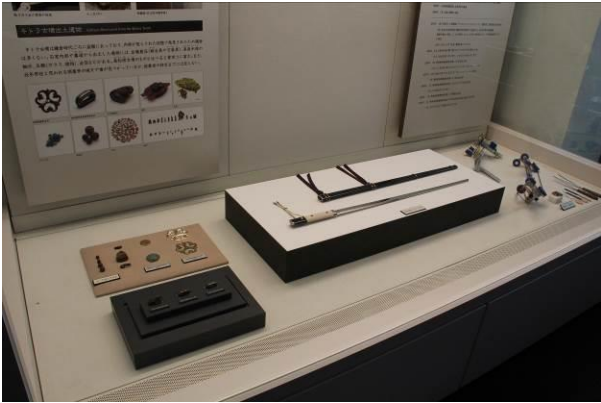
判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査並びに実験の成果を十分に展覧会に反映することができた。 本展を指標としながらさらなる調査、研究へとつなげていきたい。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-12-10

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	12)-10 特別展「キトラ古墳壁画」に関する調査(5)-②)		
【事業概要】 特別展「キトラ古墳壁画」(26年4月22日～5月18日開催予定)に関する調査研究 平成26年4月22日～5月18日開催予定の特別展「キトラ古墳壁画」の開催に向けて、出品候補作品の選定を進めるべく、作品調査等を広く行い、展覧会内容の充実を図る。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	上席研究員 齊藤孝正
【スタッフ】 井上洋一(企画課長)、橋本英将(学芸研究部調査研究課考古室研究員)			
【主な成果】 国宝高松塚古墳壁画仮設修理施設においてキトラ古墳壁画の修理進行状況や現状を確認し、展示可能な壁画を検討するとともに、飛鳥資料館にて出土遺物等の調査を実施した。合わせて共催者とも協議を行った。			
【年度実績概要】 ・25年8月21日、10月17、18日、11月18日、26年1月25、26日、30日に修理施設・飛鳥資料館・奈良文化財研究所にて、壁画及び専用展示ケース、出土遺物等の現地調査を実施した。調査の結果、展示予定の壁画5点については輸送・展示に関して問題がないことを確認し、展示する古墳壁画を5点確定した。また専用展示ケースについても性能は当館での展示において十分に使用できることを確認に、当館へ輸送することとした。 ・出土遺物については状態が安定している10件を確認し、展示リストを確定することができた。 ・以上の成果により、壁画5点については専用ケースにて十分なケース間の空間を確保し、免震台を用いて安全に展示できるよう会場設営を実施する予定である。			
			
飛鳥資料館展示中の出土遺物等の調査			
【実績値】 ・現地調査及び協議回数 5回 ・共催者との打ち合わせ等回数 14回			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-12-10

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	S	A	A	A	
判定理由 適時性：修理による壁画面再構成を前に移動可能な壁面を調査することができた。 独創性：地元以外での最初の公開は、当館でなければ実施し得ないものであるため。 発展性：本展覧会の実績をもとに、キトラ古墳壁画以外の古墳壁画についても比較調査等が可能であり、特別展等の可能性を検討することができるため。 効率性：限られた準備期間と予算のなかで、効率よく調査・協議を実施することができたため。 継続性：再度のキトラ古墳壁画そのものの展示は難しいと思われるが、出土遺物等は継続して調査研究を進めることが可能であり、高松塚古墳出土遺物等と比較展示も検討することができるため。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	打ち合わせ・ 検討会回数				
判定	A	A				
判定理由 調査回数：限られた期間のなかで、5回の現地調査及び協議を実施することができた。 打ち合わせ・検討会回数：共催者との間で14回にわたる協議・情報交換を行う場を設けることができた。 この結果、展覧会を実施するのに十分な協議・情報交換等を行うことができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	限られた時間の中で、充実した内容の調査・協議等を行うことができ、共催者の一つである文化庁とも綿密に連携を取ることができた。この関係をさらに発展させ、新たな調査及び展覧会へとつなげていきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査・協議の成果を十分に展覧会の内容に反映することができた。平成26年度の本展覧会開催施に向け、引き続き調査、研究を進めていきたいと考えている。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	12)-11 特別展「台北 國立故宮博物院—神品至宝—」に関する調査研究((5)－②)
【事業概要】 特別展「台北 國立故宮博物院—神品至宝—」(26年6月24日～9月15日開催予定)に関する調査研究 平成26年6月24日～9月15日まで開催される特別展「台北 國立故宮博物院—神品至宝—」に出陳される作品の出品交渉及び調査研究。	
【担当部課】	学芸企画部
【プロジェクト責任者】	学芸研究部列品管理課長 富田淳
【スタッフ】 島谷弘幸(副館長)、竹内奈美子(学芸研究部調査研究課工芸室長)、川村佳男(学芸研究部列品管理課主任研究員)、小山弓弦葉(学芸研究部調査研究課工芸室主任研究員)、塚本鷹充(学芸研究部調査研究課東洋室研究員)	
【主な成果】 出品交渉を重ねて作品を決定し、分野ごとに作品の調査を開始した。効果的な陳列、安全な輸送などについて検討した。出陳作品にかかわる伝来などの関連資料を収集した。	
【年度実績概要】 - 会場構成を踏まえながら、台北故宮博物院のコレクションを代表する名品について、25年4月・8月に出品交渉を行った。 25年11月に工芸、12月に絵画・書跡、26年1月に中国絵画・中国書跡・中国工芸・中国考古・図書文献の作品を実見して保存状態を確認し、効果的な陳列や安全な輸送について、故宮博物院の研究員と検討を加えた。また、分かりやすい展示のためにパネル画像や周辺資料の提供を依頼した。	
	
作品調査風景	
【実績値】 - 出品交渉2回、作品調査3回。 - デザイナーとのディスプレイ検討会、5回。	
【備考】	

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-12-11

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	S	A	A		
判定理由 適時性：日本における開催が長年にわたって切望されてきた国立故宫博物院の名品を公開する。 独創性：開催自体が画期的な展覧会である。独自の観点から形成されてきた皇帝コレクションの特別な意味を伝える作品を選定した。 発展性・継続性：調査の成果は今後の展覧会の企画立案に寄与するだけでなく、研究上も貴重なものである。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	検討会				
判定	A	A				
判定理由 調査回数：2回にわたる出品交渉を重ねて多くの名品を出陳できることとなり、3回の作品調査では先方の研究員から貴重な情報を提供していただいた。 検討会：作品の特性を考慮しながら、会場への落としこみを5回にわたって検討し、皇帝コレクションの魅力を伝える構成となった。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	会場を踏まえ、皇帝コレクションの特別な意味を伝える国立故宫博物院の名品を選定しえた。調印後の限られた時間の中で、作品の調査を開始できた。安全な輸送と、効果的なディスプレイについて、検討をできた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	日本で初めて開催される国立故宫博物院の名品展としてふさわしい作品を選定し、2014年の実施に向けて予定通り調査を開始できた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	12)-12 特別展「日本国宝展」に関する調査研究((5)－②)		
【事業概要】 特別展「日本国宝展」(26年10月15日～12月7日開催予定)に関する調査研究 平成26年10月の開催を予定している特別展「日本国宝展」の展示予定作品の調査研究。 ワーキンググループによる事前の作品選定に基づき、作品の所有者に対する出品交渉及び作品の所在・状態調査を実施する。また関係者との協議を行う。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	博物館教育課教育普及室長 伊藤 信二
【スタッフ】 田良島哲(学芸研究部調査研究課長) 丸山士郎(博物館教育課教育講座室長) 沖松健次郎(学芸研究部保存修復課保存修復室主任研究員) 品川欣也(学芸研究部調査研究課考古室研究員)			
【主な成果】 ・出陳交渉に併せて作品の所在・保存状態を調査するとともに、安全な運搬・展示、効果的な展示方法などについて検討し、展覧会の内容充実に大きく寄与することができた。			
【年度実績概要】 ・仏像、仏画、工芸品、考古資料、歴史資料、建造物のうちいずれも国宝に指定されている貴重な作品について、「信仰」「祈り」というテーマから、作品を厳選した。 ・出陳交渉とともに、作品の調査を19回実施し、作品が現在どのような状況で保管されているか、展示に耐えうる保存状態であるか、どのように移動させるかといった点について再確認した。 ・作品を安全に移動・梱包・搬送・展示する方法、及び効果的に構成・展示する方法について検討を行った。			
			
奈良・元興寺での作品状態調査・搬送検討会			
【実績値】 ○出陳交渉及び現地調査 19回 ○協議会・検討会回数 7回 (内訳) ・共済者との協議 5回 ・展示会場デザイン検討会 2回			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-12-12

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	効率性	継続性		
判定	A	A	A	A		
判定理由 適時性：自然災害や経済状況から「こころの時代」が叫ばれる現代、人々が求める「祈り」の造形という観点から、国宝の世界を再構築するというテーマ設定を行った。 独創性：「信仰」というテーマから国宝の作品を厳選し、ジャンルを超えた展示構成を検討した。 効率性：テーマに沿ってあらかじめ国宝作品を選定することで、文化財所蔵者の理解も得やすく、スムーズな作品調査にもつながった。 継続性：平成26年10月の展覧会開催は無論のこと、今後も研究や展示活用が大いに期待される貴重な国宝の数々について、多くの情報を得ることができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	協議会・ 検討会回数				
判定	A	A				
判定理由 調査回数：全国各地に所在する国宝作品について、19回にわたり精力的な出陳交渉及び現地調査を実施することができた。 協議会・検討会回数：共催者や施工業者など関係者との間で定期的に7回の協議会を行い、運営体制に関して共通理解を得ることができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	国宝作品の安全な搬送・展示及び作品研究、充実した展覧会構成、効率的かつスムーズな展覧会の運営体制など、展覧会開催に向けて着実な成果を挙げることができた。実績を分析し、見出された問題点の解消につとめたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査並びに協議会・検討会の成果を、着実に展覧会開催のステップとして積み上げることができた。平成26年度の展覧会開催に向け、引き続き精力的な調査・協議を進めたい。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-12-13

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	12)-13 特別展「みちのくの仏像」に関する調査研究((5)-②)		
【事業概要】 特別展「みちのくの仏像」(27年1月14日～4月5日開催予定)に関する調査研究 平成27年1月14日(水)から4月5日(日)に開催される、特別展「みちのくの仏像」に出品する東北6県の仏像の選定と調査を実施し、安全な輸送と、展示内容の充実を図る。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	博物館教育課教育講座室長 丸山士郎
【スタッフ】 浅見龍介(学芸研究部調査研究課東洋室長)			
【主な成果】 東北6県のうち、岩手・宮城・福島・山形の出品予定作品の出品交渉を終え、一部は作品調査も実施した。うち2件については、作品所在場所の温湿度の調査を実施した。次年度も継続的調査を引き続き実施予定である。			
【年度実績概要】 ・東北歴史博物館学芸員等の助言を得ながら、出品候補作品を選定した。 ・候補作品の約7割の出品交渉を終えた。 ・一部の作品所在地の温湿度調査を実施した。 ・作品自体の調査にとどまらず、寺の民俗学的な行事の調査も実施し、展覧会図録の執筆や講演会のための資料収集をした。			
			
福島・勝常寺 薬師如来坐像(国宝)			
【実績値】 ○現地調査 延べ14寺社、作品所在地の温湿度調査 2箇所 ○現地研究者との打合せ 3回			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4521-12-13

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	効率性	発展性		
判定	A	A	A	A		
判定理由 適時性：本展覧会は東日本大震災の復興支援を目的とするもので、記憶が薄れてきたいま実施する意義は大きい。 独創性：東京で東北の仏像に的を絞った展覧会は初めてであり、その魅力を伝える貴重な機会となる。 効率性：短期間のうちに多くの調査を実施することが出来た。 発展性：展覧会初出品作も含め、東北地方の重要な仏像が展示されるので、今後の研究に大きく寄与する。作品所在地の温室度の継続的調査のデータは今後の展覧会にも活用可能である。						

2. 定量的評価

観点	現地調査	現地研究者との打合せ				
判定	A	A				
判定理由 現地調査：短期間のうちに現地調査延べ14寺社、作品所在地の温湿度調査2箇所と、多くの調査を実施することができた。 現地研究者との打合せ：現地研究者との打合せを3回行い、現地研究者との連携を十分にとることができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	震災復興支援という時機に適った目的と今までになかったテーマの展覧会を企画し、出品交渉・作品調査も順調に実施することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	時機に適った展覧会を企画し、準備が順調に進んでいる。残りの作品の調査を進めるとともに、調査結果をもとに写真撮影・解説・論文の執筆を進めることができる。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1) 中国・韓国などアジア諸国の文化財に関する調査研究 (5) - ②)
【事業概要】 日本の仏教美術の源流たるアジア大陸の文化財に関する調査と研究を実施する。当館の展示活動は、日本だけでなく中国・韓国を含むアジア地域までを視野に入れており、この研究成果は展示に反映して積極的な発信に努めるものとする。調査と研究にあたっては、アジア諸国の研究者との交流、意見交換、さらには共同作業を実施し、日本の文化財との比較検討や相互理解などに資するとともに、将来の展示活動等に向けた情報を収集する。	
【担当部課】	学芸部
【プロジェクト責任者】	部長 西山 厚
【スタッフ】 岩田茂樹（美術室長）、内藤栄（工芸考古室長）、吉澤悟（情報サービス室長）、岩井共二（教育室長）、宮崎幹子（資料室長）、谷口耕生（保存修理指導室長）、野尻忠（企画室長）、清水健（主任研究員）、岩戸晶子（列品室員）、斎木涼子（教育室員）、北澤菜月（美術室員）、山口隆介（情報サービス室員）、永井洋之（工芸考古室員）、原瑛莉子（企画室員）	
【主な成果】 学術交流協定を締結している中国・韓国の博物館との間で職員の派遣・受け入れを実施し、活発な研究交流・情報交換を実施した。	
【年度実績概要】 ・学術交流協定を結んでいる韓国国立慶州博物館から2名の研究員を各1ヵ月間招聘し、当館からは同館へ1名を1ヵ月間派遣して、研究交流・情報交換した。また、お招きしたうち1名の方には、国際研究集会（26年2月27日）において、古代青銅器をテーマとする口頭報告を担当していただいた。 ・学術交流協定に基づき、中国上海博物館から3名の職員を10日間招聘し、当館からは同館へ3名を10日間派遣して、研究交流・情報交換した。 ・学術交流協定を結んでいる中国河南博物院から2名の職員を1ヵ月間招聘し、当館からは同館へ2名を約1ヵ月間派遣し、研究交流・情報交換した。 ・韓国国立慶州博物館から学芸研究室長を招聘し、展示と文化財研究について意見交換を行った（25年10月）。 ・当館研究員2名を韓国に派遣し、遠願寺址・浄恵寺址他を調査した（26年1月）。 ・科学研究費「南宋絵画史における仏画の位相」（基盤研究(B)23320033）に研究分担者として参画。 ・科学研究費「東インド新発掘の仏教遺跡と出土遺品に関する研究」（基盤研究(B)50065934）に研究分担者として参画。 ・月例のサンデートークにおいて、当館研究員が「飛鳥仏の源流をたどる」「幸せの国ブータンの仏教美術」のテーマで研究発表した。	
	
国際研究集会	
【実績値】 研究員等海外派遣人数 8名 海外研究者等受入人数 8名 研究会・講座等発表回数 2回	
【備考】	

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：国際情勢が刻々と変化する今時において、中国や韓国など周辺諸国の研究機関と引き続き交流し、相互理解の深化を図ることができた。 独創性：当館は、中国の中では比較的日本との交流が少ない河南博物院に、交流事業の重点を置いている。 発展性：韓国からの招聘研究者による研究発表会を実施し、今後の研究発展に資することができた。 継続性：10年以上の実績を持つ中国上海や韓国慶州との学術交流を引き続き実施し、継続性に厚みを持たせることができた。 正確性：サンデートークでの研究発表は、内容の正確性を保っており、聴講者からの評価も高い。						

2. 定量的評価

観点	研究員等海外派遣人数	海外研究者等受入人数	研究会・講座等発表回数			
判定	A	A	A			
判定理由 研究員等海外派遣人数：学術交流協定に基づき、順調な成果をあげた。 海外研究者等受入人数：学術交流協定に基づき、順調な成果をあげた。 研究会・講座等発表回数：各研究員の地道な研究成果を複数回発表することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	奈良に立地し、仏教美術を文化財の収集・展示・研究活動の中核に据えている当館にとって、アジア諸地域の文化財に対する調査と研究は、展示活動の充実を図る上で欠かせない業務である。文化財の調査にあたっては所有者との信頼関係が肝要であるが、特に海外機関の場合は信頼関係の構築に時間と手間がかかる。当館は、この認識に基づき、学術交流協定を海外機関と結び、長期にわたる交流を続けてきており、研究や展示にこれまでも反映してきた。本年度も継続的な交流を実行し、順調な成果をあげることができた。次年度以降も同様の関係を継続したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	学術交流協定に基づく中国・韓国への研究員の派遣等を通じて、アジア諸地域の有形文化財に関する基礎的かつ総合的な研究を遂行し、将来の展示に向けた資料の蓄積を進めている。次年度以降も、将来的に開催を目指している特別展「百済（仮）」や「中国遼寧省遼代仏教文物展（仮）」に向けて、当該地域との交流及び当該地域での文化財調査を継続していく。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2) 日本とアジア諸国の文化交流に関する調査研究 ((5)-②)
【事業概要】 「国宝 鑑真和上展」「聖地寧波—日本仏教1300年の源流」(平成21年)、「大遣唐使展」(平成22年)など、日本とアジア諸国の文化交流をテーマとする展示活動を展開してきた奈良国立博物館の実績を重視して、国内外所在の渡来文化財及びその影響の濃厚な文化財の調査、そして日本アジア間の文化交流に関する諸事象を対象とした研究を実施し、その成果を展示や刊行物に反映させる。	
【担当部課】	学芸部
【プロジェクト責任者】	部長 西山 厚
【スタッフ】 岩田茂樹(美術室長)、内藤栄(工芸考古室長)、吉澤悟(情報サービス室長)、岩井共二(教育室長)、宮崎幹子(資料室長)、谷口耕生(保存修理指導室長)、野尻忠(企画室長)、清水健(主任研究員)、岩戸晶子(列品室員)、斎木涼子(教育室員)、北澤菜月(美術室員)、山口隆介(情報サービス室員)、永井洋之(工芸考古室員)、原瑛莉子(企画室員)	
【主な成果】 名品展の展示替えに備えて、各研究員が出陳品に関する調査と研究を実施し、その成果を展示キャプションに反映させた。また、今年度で開催した各種のシンポジウム等においては、各研究員の専門分野を生かしながら、当該項目の日亜文化交流の視点に立った研究成果を発表した。	
【年度実績概要】 ・名品展「珠玉の仏たち」の「中国・朝鮮半島の金銅仏」コーナーに、新たに新規寄託の7件を展示し、研究内容を展示キャプションに反映させた。 ・学術シンポジウム「綴織當麻曼荼羅」を開催し(25年4月27日)、当館研究員が「當麻寺における綴織當麻曼荼羅」のテーマで研究報告したほか、パネルディスカッションに2名が参加しコメントした。 ・第42回夏季講座「仏教美術へのいざない」を開催し(25年8月20日～22日)、当館研究員3名が「仏像の荘厳」「仏像の心とかたち」「仏像に会う」のテーマでそれぞれ研究発表した。 ・正倉院学術シンポジウム2013「鑑真和上と正倉院宝物」を開催し(25年10月27日)、当館研究員が「鑑真和上の書状」のテーマで研究発表したほか、パネルディスカッションに研究員2名が参加しコメントした。 ・月例のサンデートークにおいて、当館研究員が「図像から彫像へ—宋本図像と二軀の文殊菩薩像—」のテーマで研究発表した。 ・第二回国際シンポジウム「高麗時代 蒲柳雜樹水禽文螺鈿描金香箱」研究(於：韓国国立中央博物館、25年11月30日)において、当館研究員が「正倉院宝物と百濟文化」のテーマで研究発表した。 ・科学研究費「5～9世紀東アジアの金銅仏に関する日韓共同研究」(基盤研究(A)70314341)に研究分担者として参画。 ・科学研究費「東アジア仏教美術における聖地表象の諸様態」(基盤研究(B)70252509)に研究分担者として参画。	
 夏季講座「仏教美術へのいざない」会場風景	
【実績値】 講座・研究会等発表回数 7回 展示への反映 7回	
【備考】	

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：鑑真和上 1250 年御遠忌の年に、関連のシンポジウムを開催し研究発表できた。 独創性：新たに展示した中国の金銅仏は、当館ならではの仏教美術研究の基礎があったからこそ可能となった研究成果の公開である。 発展性：アジア全体の中での日本仏教美術の位置づけに関する研究は、未開拓の部分も多く、今後の発展が期待される分野であるが、当館研究員は当該分野で積極的に研究成果を発信できている。 継続性：当館の名品展は、コーナーとして「中国・朝鮮半島の金銅仏」が立てられているように、一貫して日本だけでなくアジア諸国まで視野に入れて企画されている。 正確性：研究成果公表の場である展示において、その内容は専門分野以外の研究員によるチェックを経ており、高い正確性が保たれている。						

2. 定量的評価

観点	講座・研究会等 発表回数	展示への反映				
判定	A	A				
判定理由 講座・研究会等発表回数：当館が主催したシンポジウムにおいて、各研究員が専門分野に立って研究発表し、十分な成果をあげた。 展示への反映：展示会場の広さが限られるなかで、7 回にもわたって、このテーマの研究成果を展示に反映することができた。						

3. 総合的評価

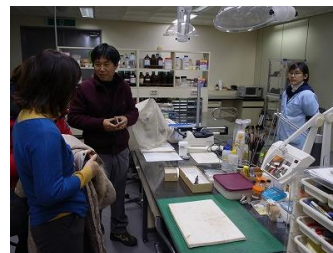
判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	奈良に立地し、仏教美術を文化財の収集・展示・研究活動の中心に置いている当館にとって、日本とアジア諸国の文化交流という観点からの研究を実施することは、最も基本的な課題と考えられる。本年度も、各種のシンポジウムで積極的に研究成果を公開することができた。また、展示活動でも当該テーマの研究に基づいて、新たに文化財の寄託を受け、展示に反映することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	仏教美術の源流たるアジア諸国の文化に目配りし、特に相互の「文化交流」という観点から、文化財研究を着実に進め、その成果を研究発表等で公表することができた。次年度以降も、将来に開催を計画している特別展「百済（仮）」や「中国遼寧省遼代仏教文物展（仮）」に向け、単なる海外博物館の所蔵品紹介にとどまらない、アジアと日本の文化交流の視点に立った展示内容となるよう、調査の充実と研究の深化を進めていく。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1) 朝鮮半島、三国時代の考古・美術に関する調査研究 ((5)－②)
【事業概要】 百済・新羅・高句麗の三国時代の文化を中心とした朝鮮半島の文化財について、日韓共同で考古分野を中心に美術・工芸等の分野での調査研究を実施するものである。現地で実物資料を実見することを基本にするが、同時に我が国に将来された文化財を当館のX線CTなどの科学機器を利用した分析をすすめる。この成果は、平成26年度に開催予定の「日本発掘展」(仮称)で活用する。	
【担当部課】	展示課
【プロジェクト責任者】	課長 赤司善彦
【スタッフ】 谷豊信(学芸部長)、今津節生(博物館科学課長)、渡部史之(博物館科学課アソシエイトフェロー)、河野一隆(企画課文化交流展室長)、市元壘(企画課特別展室主任研究員)、楠井隆志(展示課展示調整室主任研究員)、鳥越俊行(文化財課資料登録室主任研究員)、岸本圭(展示課主任研究員)、進村真之(展示課主任研究員)、八尋智之(交流課主任研究員)	
【主な成果】 (1) 韓国の2つの国立博物館との間で、研究交流を実施して、実物資料の活発な共同調査や情報交換を行った。 (2) 九州内の朝鮮半島から伝来した資料等についての調査を実施した。 (3) 百済武寧王と縁の深い佐賀県加唐島での韓国研究者との共同での現地調査を行った。 (4) 7世紀の国宝宮地嶽古墳出土金銅装大刀について、朝鮮半島の金工技術との関わりを明らかにすることができた。	
【年度実績概要】 (1) ・韓国公州博物館の研究員2名とともに、国内所在の朝鮮半島と倭国と深く関わる考古遺物について25年7月29日～8月11日までの2週間、13箇所の国内所蔵機関を訪問して、共同での調査を実施した。 ・韓国国立中央博物館の研究員2名とともに、26年3月7日に当館と九州歴史資料館で百済と関わる考古遺物(福岡県内出土考古資料)について調査を行った。 ・当館研究員2名(考古・保存)が、韓国国内の日本と関連の深い遺跡や遺物を25年11月25日～12月7日までの2週間にわたって調査を実施した。 ・当館研究員2名が百済の遺物について、公州博物館・扶余博物館、中央博物館で調査した。 (2) ・宮崎県立西都原考古博物館の学芸担当職員と合同で、対馬島内の韓国との関わりのある文化財について、当館へ輸送しX線CTスキャナー等による分析を行った。また、合同での調査成果の検討会を行った。 (3) ・25年9月14・15日の2日間、韓国国立公州大学の教授・副教授とともに佐賀県加唐島の武寧王生誕地の現地調査と、周辺海域から島の地形や眺望を再確認する共同調査を実施した。 (4) ・宮地嶽古墳出土金銅装大刀は、7世紀に日本で制作されたと考えられるが、その金工技術を探るための調査を実施し、大刀の復元模造を制作した。	
【実績値】 調査回数 7回(韓国との共同調査) ・韓国国内での調査4回 ・日本国内での調査3回 X線CT分析 3件(宮崎県内出土考古資料・大分県出土考古資料・福岡県内出土考古資料) 学会研究会等発表 1件(①) 論文等 1件(②)	
【備考】 学会研究会等発表 ①「九州の中の百済及び渡来人の文化」 駐福岡韓国総領事館主催「九州の中の韓国文化」(25年12月5日) 論文 ②「ダンワラ古墳出土金銀錯嵌龍文鉄鏡の基礎的研究―製作技法と文様構成を中心として―」 『東アジア古文化論攷』(26年3月21日)	



韓国博物館の保存処理施設での調査風景

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4524-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：日韓では領土問題等の難しい時期にあっても、文化交流を推し進めることができた。 独創性：資料を目の前にして共同で調査できたので、異なる観点で調査することができた。 発展性：日韓の文化財に対する背景の違いや考え方の違いを知ることができたことは有意義である。 効率性：相互に2週間という比較的長い期間で調査を行うことができた。 継続性：今回は2回目の試みであったため、かなり気を遣う場面が多かったが、調査を実施できた。 正確性：韓国国立公州博物館の協力により、正確なデータを得ることができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	X線CT分析	学会研究会等 発表	論文等		
判定	A	A	A	A		
判定理由 調査回数：計画通りに実施することができた。 X線CT分析：目標を達成することができた。 学会研究会等発表：計画通り実施することができた。 論文等：予定通り実施することができた。						

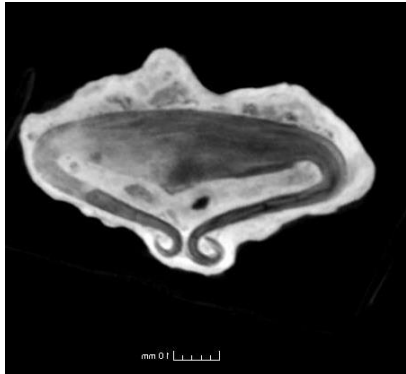
3. 総合的評価

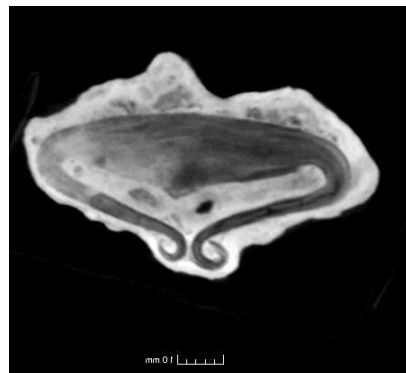
判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	計画通り調査を実施することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り調査が実施され、当初の目標を達成することができた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2)九州における対外交流文化財の保存と活用に向けた研究基盤の創設（科学研究費補助金）（(5)－②)		
【事業概要】 九州はその地政学的特質から日本列島の窓口としてアジアや西洋の文化や技術をいち早く受け入れてきた。そのため、九州には対外交流に関連する文化財が多く残されている。本研究では、九州及びその周辺諸国・地域に所在する対外交流に係る文化財を対象とする。九州に東西南北4つの方向から流入した文化の中から代表的な事象を選んで調査を展開する。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長 今津節生
【スタッフ】 谷豊信（学芸部長）、赤司善彦（展示課長）			
【主な成果】 本年度は南ルートの対沖縄・鹿児島、及び、西ルートの長崎・佐賀の対外交流文化財及びメキシコの関連文化財を中心にして現地調査を実施した。さらにこれらの文化財を移動して最新鋭のデジタル計測機器を活用した科学調査を実施した。この科学調査の結果をふまえて、学際的な研究チームによる実物調査を実施することにより、これまでにない高精度のデジタル情報を網羅したアーカイブを構築している。			
【年度実績概要】 ・北ルートの長崎県松浦市鷹島の海底遺跡から発見された元寇関連遺物に関する調査については、X線CT調査を実施し、錆と泥に覆われた遺物の立体形状を明らかにした。その中から中国北方民族が特徴的に使用する「火打ち金」を発見した。この成果は新聞等で報道された。 ・南ルートの調査として、沖縄のグスクの影響下にある鹿児島県与論島与論城のアーカイブ調査及び、喜界島採集縄文資料調査を実施した。また、近世の首里及び那覇を描いた絵図の調査を実施した。調査先として、那覇市歴史博物館、沖縄県立図書館、沖縄県立公文書館を調査した。那覇市内において、沖縄の研究者と絵図史料に関する研究会を開催した。 ・西ルートとして、南蛮屏風や南蛮漆器をはじめ、近世初期における日本と海外との交流を物語る作品を調査した。 ①南蛮屏風が成立する前提となった唐船図、②初期の作品を中心とする南蛮屏風、③日本の屏風と関わりの深い西洋・中国の美術、④上記と関わりの深い南蛮漆器などを取り上げた。本年度はメキシコに所在する。日本美術からの影響を受けた作品について現地調査した。また、西洋文化の影響を受けた蘭学資料の調査として、武雄鍋島家資料のうち文書・記録類、典籍類、設計図類、器物類の調査を実施した。本年度内に当該資料の調査を完了し、詳細目録を作成し、武雄市図書館・歴史資料館及び当館で共有することで、今後の保存と活用を図ることを目標に実施している。			
 長崎県鷹島海底遺跡から発見された中国北方民族が使用した「火打ち金」のX線CT画像			
【実績値】 調査件数 11 件 収集資料数 200 点 論文 1 件(①) (参考値) 新聞等報道 1 件			
【備考】 論文 ① 「博物館研究におけるX線CT活用の可能性」『東風西声』第9号、九州国立博物館（26年3月31日）			



長崎県鷹島海底遺跡から発見された中国北方民族が使用した「火打ち金」のX線CT画像

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4524-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	S
判定理由 適時性：九州各地には対外交流関連文化財が多く残されており、当博物館が中心となって研究に取り組む必要がある。 独創性：高精度の情報を網羅したデジタルアーカイブを構築することで、画期的な博物館情報を蓄積する。 発展性：高精度デジタル計測機器を用いた科学調査を実施して、汎用性の高い高精度の情報を網羅できる 効率性：高精度の情報を基に文化財の保存状態、内部構造・材質技法を網羅した情報を効率的に取得できる。 継続性：対外交流文化財の基礎調査として、本研究を契機に各機関と連携して発展的に展開することができる。 正確性：高精度デジタル計測機器を用いた調査であり、世界最高レベルの信頼性を得ることができる。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	収集資料数	論文			
判定	A	A	A			
判定理由 調査件数：計画通り実施できた。 収集資料数：目標を達成できた。 論文：計画通り実施できた。						

3. 総合的评价

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	多様な九州の対外交流文化財について11の研究テーマを設定して研究を実施している。本年度は南ルート of 対外交流文化財調査として沖縄・鹿児島 of 文化財について調査を実施することができた。また、西ルート of 長崎・佐賀 of 調査については、近世初期における日本と海外との交流を物語る作品を調査することができた。今後は海外研究機関との国際協力を更に進める必要がある。北ルート of 長崎県松浦市鷹島の海底遺跡から発見された元寇関連遺物に関する調査については、研究成果が新聞等で報道された。以上のように、本研究は順調に進んでいる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査研究は、当初計画に沿って、研究内容の水準を保ちながら、順調に遂行していると考えられる。引き続き外部資金を積極的に活用しながら、他の研究機関・博物館・教育委員会と連携しながら調査研究を継続し、目標を達成したい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3) 武雄市図書館・歴史資料館所蔵の鍋島家資料の調査研究((5)-(2))
【事業概要】 本事業は、武雄市図書館・歴史資料館が所蔵する武雄鍋島家資料のうち、蘭学関係資料（文書・記録類、典籍類、設計図類、器物類）の調査を24～25年度の2ヵ年計画で実施するものである。調査結果をもとに、管理・学術研究に有用な詳細目録を作成し、両館で共有することで、同資料の保存に資するとともに、展覧会事業において積極的に活用することを目的とする。	
【担当部課】	学芸部文化財課
【プロジェクト責任者】	資料登録室主任研究員 荒木和憲
【スタッフ】	
【主な成果】 本年度は、武雄鍋島家資料のなかから約1,100点の蘭学関係資料の抽出・調査・目録化作業を達成し、2ヵ年計画での調査事業を完了することができた。また、前年度の調査事業の成果を反映させた展覧会を、当館及び武雄市図書館・歴史資料館との共同事業として開催し、展覧会の関連事業も積極的に実施することができた。	
【年度実績概要】 ・武雄鍋島家蘭学資料の抽出・調査・目録化 武雄鍋島家資料は日本有数の蘭学資料の宝庫であり、個々の資料に関する学術的価値は高く評価されてきたが、既存の簡易目録では、蘭学資料の全体像を把握することはできなかった。本年度は他機関から調査協力を得ながら、約1,100点の抽出作業及び調査・目録化作業を行い、前年度からの2ヵ年で蘭学資料約2,000点の目録化を達成した。 ・武雄鍋島家蘭学資料に関する展覧会の実施 前年度調査の成果を反映させたトピック展示「江戸のサイエンスー武雄蘭学の軌跡ー」展（会期：25年4月16日～7月7日、会場：当館文化交流展示室）を武雄市図書館・歴史資料館との共同主催事業として開催し、同時に武雄市図書館・歴史資料館主催の企画展「武雄鍋島の蘭学」（会期：25年4月1日～6月2日、会場：同館企画展示室）も開催された。上記トピック展示に関連する成果として、図録の発行、講演会の開催、ミュージアムトークの実施が挙げられる。 武雄市教育委員会の呼びかけで、武雄市民（市職員・公民館・商工会議所・女性団体・小中学生・歴史研究会等）の観覧ツアーが企画され、計11回の市民向けミュージアムトークを実施したことは特筆される。	
 モルチール砲  トピック展示 「江戸のサイエンス」	
【実績値】 調査回数：6回 調査資料点数：約1,100点 展示への反映：1回 トピック展示「江戸のサイエンスー武雄蘭学の軌跡ー」展（会期：25年4月16日～7月7日） 図録：1件 トピック展示図録「江戸のサイエンスー武雄蘭学の軌跡ー」 講演回数：2回 ミュージアムトーク：14回 一般対象ミュージアムトーク回数：3回 武雄市民対象ミュージアムトーク回数：11回	
【備考】	

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4524-3

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	S	A	A	A
判定理由 適時性：学術的価値の高い公共の文化財の保存・活用に資するものである。 独創性：蘭学資料を個別の関心にもとづき個々に分析するのではなく、その総体を把握することに努めた。 発展性：調査事業を展覧会事業と連動させ、調査成果を市民に還元した。 効率性：限られた調査回数・人数で目標を達成した。 継続性：2ヵ年計画で計画的に実施した。 正確性：約2,000点の蘭学資料の詳細目録を作成した。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査資料点数	展示への反映	図録	講演回数	ミュージアム トーク
判定	A	A	A	A	A	S
判定理由 調査回数：概ね当初計画のとおり成果を収めた。 調査資料点数：当初の見積点数約1,000点を上回り、多くの蘭学資料の抽出に成功した。 展示への反映：計画通り実施できた。 図録：予定通り刊行できた。 講演回数：計画通り実施できた。 ミュージアムトーク：武雄市民対象のミュージアムトーク（11回）は当初計画になかったもので、本事業の発展的な成果である。						

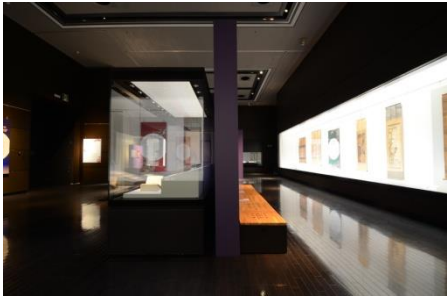
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	2ヵ年事業の最終年度となる本年度事業では、調査事業・展覧会事業ともに概ね当初目標を達成し、一部は目標以上の成果を収めることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	地域の博物館・美術館等との連携による調査研究・展覧会事業であり、I-2「文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信」、I-3「我が国における博物館の中核として博物館活動全体の活性化に寄与」、I-4「文化財に関する調査及び研究の推進」、I-6「情報資料の収集・整備及び調査研究成果の発信」、I-7「地方公共団体への協力等による文化財保護の質的向上」に資する事業である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	4) 神戸市立博物館所蔵の江戸時代の対外交渉に関連する作品の調査研究((5)-(2))
【事業概要】 本事業は、25 年度上半期に施設の改修工事のため休館することが決定していた神戸市立博物館の全面的な協力を得て、その世界有数の南蛮・紅毛美術コレクションの調査を行う。そして、その調査の成果を、トピック展示「視覚革命！異国と出会った江戸絵画―神戸市立博物館名品展」として共同開催し、図録を制作して広く紹介する。	
【担当部課】	学芸部企画課
【プロジェクト責任者】	特別展室研究員 鷲頭桂
【スタッフ】 畑靖紀（文化財課資料管理室主任研究員）、河野一隆（企画課文化交流展室長）、川畑憲子（企画課交流展室主任研究員）	
【主な成果】 (1) 神戸市立博物館の近世美術コレクションの調査研究を行った。 (2) 本調査研究の成果として、展覧会を神戸市立博物館と共同開催した。 (3) 展覧会の開催により、長崎が中国や西洋との文化交流の窓口になって発展した江戸時代の美術について、観覧者に多くの情報を提供することができた。	
【年度実績概要】 ○24 年度 ・神戸市立博物館にて、所蔵品の調査（約 30 点）を行った。また、神戸市立博物館学芸員とともに展覧会に出品する作品を選定し、展示方法についての意見交換を行った。 ○25 年度 ・展覧会の図録を制作するために、概論・各論や作品解説等の準備を神戸市立博物館学芸員と共同で進めた。また、出品される作品の追加調査（約 20 点）や新規撮影を行った。 ・本調査研究の成果として、トピック展示「視覚革命！異国と出会った江戸絵画―神戸市立博物館名品展」（25 年 7 月 17 日～9 月 23 日）を開催し、展覧会図録を発行した。 ・会期中に、以下の講演会を実施した： 「奥行きの発見―18～19 世紀の日本の洋風表現」岡泰正氏（神戸市立博物館 展示企画部長・学芸員） 「舶載蘭書と洋風画」勝盛典子氏（神戸市立博物館学芸員） ミュージアムトーク 2 回開催 上記を通して、外国との交流が生み出した江戸時代の美術文化について広く紹介する機会を設けた。 ・トピック展示の広報を効果的に行うため、総務課、太宰府市に依頼し、その主導のもとトピック展広報印刷物及び特別展広報印刷物を太宰府市の全 44 行政区にポスター、チラシを配付する体制づくりに協力した。（太宰府市 44 行政区、配布物約 2,500／展覧会）	
 展示室におけるミュージアムトーク風景	
 展示室風景	
【実績値】 調査回数 2 回 調査資料数 絵画、工芸作品など 約 50 点 報告書・図録等 1 件 トピック展示図録『視覚革命！異国と出会った江戸絵画―神戸市立博物館名品展』 展示への反映 1 回 トピック展示「視覚革命！異国と出会った江戸絵画―神戸市立博物館名品展」（25 年 7 月 17 日～9 月 23 日） 講演会等 4 回	
【備考】	

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4524-4

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：神戸市立博物館の休館に時期が重なることで貴重な作品を数多く借用し公開することができた。 独創性：来場者が作品の特徴を最も理解し楽しめるよう、事前に模型による展示実験を行う等展示に工夫を凝らした。 発展性：神戸市立博物館の収集方針は当館と近似しており、本事業を通して館蔵品や常設展示への知見も多く得た。 効率性：時間的、人的、設備的に効率よく調査を進めることができた。 継続性：本事業を通して得た知識や情報が、当館の所蔵品研究や収集、展示にも非常に有益である。 正確性：神戸市立博物館の協力により、正確な調査を行うことができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査資料数	報告書・図録	展示への反映	講演会等	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 調査回数：計画通りに実施することができた。 調査資料数：目標を達成することができた。 報告書・図録等：予定通りに刊行することができた。 展示への反映：計画通りに実施することができた。 講演会等：計画通りに実施することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	計画通り調査を実施することができ、展覧会にその成果を十分に反映させることができた。また、図録・講演会・ワークショップ・イベント等によりその成果を広く公表することができた。 トピック展開催にあたり、広報を効果的に行うため、総務課、太宰府市の協力を得て、広報物を配付する体制づくりを行った。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り調査が実施され、当初の目標を達成することができた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	5) 中国・山東省荷澤出土の螺鈿箱(高麗経箱)に関する調査研究(学術研究助成基金助成金)((5)-②)
【事業概要】 22 年秋、中国山東省荷澤の工事現場で発見された一艘の木船から、螺鈿箱(いわゆる高麗経箱)をはじめとして、漆器、陶磁器、玉器、金属器、硬貨など 117 点の遺物が見つかった。本研究は、この沈没船遺物、なかでも螺鈿箱に焦点をあて、いまだ未解明である制作技法や、制作年代などについて、科学分析や伝世品との比較調査を通じて明らかにし、高麗螺鈿の歴史的な展開を捉えることを目標とするものである。	
【担当部課】	学芸部企画課
【プロジェクト責任者】	文化交流展室主任研究員 川畑憲子
【スタッフ】	
【主な成果】 (1) 調査対象とする螺鈿箱の調査分析を、他作例と比較しながら多角的に進めることができた。 (2) 螺鈿器及び関連漆器の調査を広範囲に行うことにより、今まで知られていなかった比較作例を数多く集めることができた。 (3) 調査の過程で明らかになった新たな検討課題について、考察を深めるための資料を得ることができた。	
【年度実績概要】 (1) 本年度は、初年度で行った調査をさらに進めるとともに、次年度の総括に向けて、調査データを整理し、新たな検討課題について考察をすすめることに努めた。 具体的には、国内外に所蔵される高麗螺鈿器及び関連作品について、さらに広範囲に、作品調査を行った。 (2) 本年度、調査に訪れたおもな所蔵先は、東京国立博物館、徳川美術館、個人(東京)、大英博物館、メトロポリタン美術館などである。調査では、高麗螺鈿器のみならず、同じく出土遺物である宋元漆器までも調査対象とし、当初の計画よりも多くの貴重な作例データを集積することができた。さらには、調査データをもとに国内外の研究者と議論を交わし、研究を深めることができた。 (3) 文献資料をあらためて博捜し、他の遺物や他の出土事例とも合わせて検討し、高麗螺鈿の制作地及び制作年代について、これまでの定説を再検討することができた。	
【実績値】 調査回数 8 回(国内 4 ヲ所、海外 4 ヲ所) 収集資料数 漆器ほか 約 200 点 研究者海外派遣数 2 回	
【備考】	



菊唐草螺鈿箱(大英博物館)

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4524-5

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：高麗螺鈿の制作技法や制作年代について検討する、必要な課題に取り組むことができた。 独創性：高麗螺鈿の初めての出土遺物であり、広く知見を得ることができた。 発展性：調査を通して得られた知見を、展示を通して、広く一般に公開することができた。 効率性：時間的、人的、設備的に効率よく調査を進めることができた。 継続性：期間、質・内容において充実した成果を得ることができ、基礎的なデータを集積することができた。 正確性：各所蔵者の協力により、正確な調査を行うことができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	研究者 海外派遣数			
判定	A	A	A			
判定理由 調査回数：計画通りに実施することができた。 収集資料数：目標を達成することができた。 研究者海外派遣数：計画通りに実施することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	計画通りに研究をすすめることができ、次年度の総括に向けて、調査データを整理し、新たな検討課題について考察をすすめることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り調査が実施され、当初の目標を達成することができた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	6) タイにおける異文化の受容と変容－13 世紀から 18 世紀の対外交易品を中心として－（科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金）（(5)－②）		
【事業概要】 本研究は美術史的視点に立脚して、13～18 世紀のタイにおける異文化の受容とその展開を探り、文化交流の実相を浮かび上がらせることを目的とする。タイにおける異文化の受容と変容を明らかにするために、交易品に着目してその関係資料を横断的に調査する。これまでに知られていた資料の理解を深め、新出資料も加えた基礎資料集成を行うとともに、それぞれの資料について正しい評価を行う。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	特別展室主任研究員 原田あゆみ
【スタッフ】 研究分担者：小泉恵英（前企画課長）、末兼俊彦（京都国立博物館学芸部企画室研究員）、 研究協力者：藤田励夫（前博物館科学課保存修復室長）、猪熊兼樹（文化庁伝統文化課調査官）、佐藤留実（五島美術館学芸員）、續伸一郎（堺市博物館学芸課主査）、後藤恒（福岡市美術館学芸員）			
【主な成果】 上記研究分担者及び研究協力者は、タイ王国文化省芸術局の協力を得て、タイでの現地調査を行った。特に、日本からタイに伝わった交易品に関しては、これまで調査が難しいとされていた王宮内博物館の調査をすることができた。調査地としては国立博物館資料に加え、プライベートコレクションの調査を通し、新しい情報を得ることができた。調査の成果については、同プロジェクト報告会にて発表し、交易品に関する日本側の記録の一部を英訳して現地に還元した。			
【年度実績概要】 ・25 年 4 月 23 日～25 日 仏教美術・歴史班 13 世紀の文化財について調査及び現地共同研究者と調査報告会、次回調査協議。 ・25 年 6 月 4 日～14 日 日本国内にてタイ共同研究者と在日タイ文化財について調査及び調査報告会。 ・25 年 11 月 6 日～8 日 工芸班(染織) シンポジウム「Weaving Royal Traditions Through Time」参加、バンコク国立博物館染織調査を通し交易染織についての情報を得た。 ・25 年 11 月 9 日 現地共同研究者と調査報告会及び本研究を基盤に 29 年開催を目指した展覧会についての協議。 ・25 年 11 月 6 日～10 日 工芸班（金工・陶磁器）王室博物館、芸術局収蔵庫、バンコク国立博物館、バンコク及び近郊のプライベートコレクションの調査を行い、日本由来文化財及び変容について調査、意見交換を行った。 ・25 年 12 月 14 日～15 日 歴史班 江戸時代、堺市に伝来したタイ仏画に関する調査として国立美術館及びその周辺で同系統の仏画調査を行った。堺市に伝わった（戦時下に焼失）仏画に関する記録を英訳し、現地共同研究者との情報共有を行った。 ・25 年 12 月 28 日～26 年 1 月 2 日 民族班 北タイにてタイ族の伝統的生活様式に関する調査を行った。外来文化と在来文化の差異について、現地共同研究者と意見交換を行った。 ・26 年 1 月 31 日～2 月 5 日 仏教美術班 13 世紀から 18 世紀のタイ仏教美術に関する調査を行った。現地共同研究者と本年度の共同調査の報告を行った。			
 在日タイ文化財調査（萬福寺）  在タイ日本文化財調査（王宮博物館）  調査報告会及び展覧会協議 （バンコク国立博物館）			
【実績値】 調査回数 8 回（海外：7 回 国内：1 回） 調査報告会回数 4 回（海外：3 回 国内：1 回）			
【備考】			



在日タイ文化財調査（萬福寺）



在タイ日本文化財調査（王宮博物館）



調査報告会及び展覧会協議（バンコク国立博物館）

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	S	A	S	B	A	A
判定理由 適時性：本研究は29年の日タイ修好条約130周年事業特別展の基礎となるため、公共性、国際性、緊急性、公開性ともに適している。 独創性：これまで一部に知られながら、具体的な調査がなされていなかった日本から伝わった文化財とタイ社会に及ぼした影響について正当な評価を行っている。 発展性：本研究の成果は日本のみならず、タイ側に還元することができる。また、展覧会という形で公開することで両国の文化理解を深めることが期待される。 効率性：調査は日、タイの共同調査を基本としており、調査成果を共有することができる。しかし、一度に長く滞るできないため、効率性にはやや欠ける。 継続性：本共同研究は19年から始まる当館とタイ芸術局の交流事業が基礎となっており、29年の展覧会を目指し10年という長い期間で計画的に進められている。 正確性：広い分野にわたる調査を展開している。ただし、データベースを構築するための各分野の調査対象は、今後増やしていく必要がある。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査報告会回数				
判定	A	A				
判定理由 調査回数：本年度は、分野ごとに班分けして調査に臨んだため調査回数は増えたが、分野ごとに集中して調査することができた。 調査報告会回数：日本、タイ双方の研究者が揃って、報告会を重ねることができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	プロジェクト2年目の本年は前年に続き、協力者との連携を十分にとり、新知見を得ることができた。日タイ双方揃って報告会を重ねることで、計画的な共同調査を行うことができた。また、調査成果を現地に還元することで、研究者との信頼関係を深め、今後の展開も順調と見込まれる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	予定していたタイ現地での調査を遂行することができた。日タイ双方で、調査研究のための問題点や課題を洗い出し、次年度の対処体制を整えている。29年に展覧会を計画し、それに向けて長期的な視野で研究協力体制を結ぶことができた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	7) ベトナムと我が国との間の文化財を通じた交流についての調査研究((5)-②)
【事業概要】 ベトナム国立歴史博物館（ハノイ市所在、以下ベトナム歴博）所蔵の日本文化財を調査研究し、その成果を当館も共催に加わる文化庁海外展「日本文化」展（会場はベトナム国立歴史博物館、26年1月16日～3月9日）に反映させる。特に、昭和18年に日本からフランス極東学院に寄贈された日本文化財の調査に重点を置く。	
【担当部課】	展示課
【プロジェクト責任者】	主任研究員 岸本圭
【スタッフ】 谷豊信（学芸部長）、原田あゆみ（企画課特別展室主任研究員）、藤田励夫（前博物館科学課保存修復室長）	
【主な成果】 - ベトナム歴博所蔵の日本文化財を、同博物館の担当者と共に調査し、多くの新たな知見を得た。 - 文化庁海外展「日本文化」展で69件の文化財を展示し、ベトナムと日本の交流についても紹介した。 - ベトナム歴博編集の展覧会図録に、今回の展示に至る両国の取り組みについて寄稿した。 - ベトナム歴博と意見交換を行いつつ調査を進め、交流を深めることができた。	
【年度実績概要】 - 文化庁海外展「日本文化」展では縄文時代から江戸時代にかけての日本の文化と歴史に関する文化財を展示した。日本から輸送した文化財が53件、ベトナム歴博所蔵品が16件である。 - 昭和18年に当時の東京帝室博物館がフランス極東学院に寄贈した日本の美術工芸品（極東学院交換品）31件は、これまで行方不明とされていた。調査の結果、ベトナム歴博に、能面、刀の鐔など21件が現存していることを確認した。 - このうちの15件を「古美術交換一守り伝えられた文化財」と題するコーナーで展示し、第二次大戦後の苦しい状況下でベトナムの人々が日本の文化財を守り伝えてきたことを紹介した。 - 日本関連の文化財は極東交換品の他、博物館独自の収集品もあり、交換品の可能性のあるものを含め記録の作成を行った。 - ベトナム歴博ではこれまで日本文化財の研究はほとんど行われておらず、今回の調査は先方から高く評価されている。 - 調査の結果、鎌倉時代の阿弥陀如来像は非常に優れた作風であると評価され、今後日越共同で修理を行う方針を定めた。	
【実績値】 調査回数 3回 調査資料数 30点	
【備考】	



文化庁海外展「日本文化」展
極東学院交換品展示状況

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4524-7

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：日越外交関係樹立 40 年にあたる年でもあり、注目された。 独創性：これまでの日越交流を交換品から紐解こうとするこれまでにない取り組みである。 発展性：日越の交流を物語る文化財であり、今後の交流の際にも象徴的に活用が期待される。 効率性：特別展の打合せの訪越の際に合わせて実施した。 継続性：今回の調査で基礎的な情報の把握ができ、今後の調査・活用等の指針が整理できた。 正確性：工芸分野の担当が調査し、正確な所見が作成された。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査資料数				
判定	A	A				
判定理由 調査回数：訪越のタイミングに合わせて効果的に調査・意見交換を行うことができた。 調査資料数：ベトナム国立歴史博物館の協力で限られた時間の中で多くの作品の調査を行うことができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	日越外交関係樹立 40 年という記念すべき年に展示・調査を実施することができ、成果を発信する上で効果的であった。調査を通してベトナム側と交流を深めることができ、今後の展開が期待できる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査・調査成果の公開は、計画通り実施することができた。

【書式B】
(様式1)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4524-8

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	8) 中世～近世初期の対馬宗氏領国に関する基礎的研究（学術研究助成基金助成金）（(5)－②）		
【事業概要】 本研究は、中世～近世初期における対馬宗氏領国の特質を、日本列島の政治史、とりわけ中央政権との関連性のなかで連続的にとらえ、もって日本・朝鮮両国の国境地域に存立する宗氏領国の主体性・従属性のありかたを明らかにしようとするものである。			
【担当部課】	学芸部文化財課	【プロジェクト責任者】	資料登録室主任研究員 荒木和憲
【スタッフ】			
【主な成果】 本年度は中世～近世初期の対馬宗氏領国に関する史料の調査・収集・整理を重点的に行った。具体的には、東京大学史料編纂所・国立公文書館・長崎県立対馬歴史民俗資料館で原本・写本・写真版を閲覧・調査し、写真撮影・複写・筆写等による収集を行った。収集史料の翻刻・整理・データベース化を行うとともに、関連図書の収集を進め、刊本等からの関連史料の抽出・データベース化も行った。			
【年度実績概要】 ・室町幕府関係史料の調査 東京大学史料編纂所・国立公文書館で調査を実施した（25年6月）。史料編纂所架蔵写真帳及び国立公文書館所蔵の写本類のなかから、室町幕府政所執事伊勢氏・執事代蜷川氏関係の史料を中心に閲覧し、従来知られていない対馬宗氏領国関係史料を検出した。 ・中世壱岐関係史料の調査 東京大学史料編纂所で調査を実施した（25年6月）。壱岐日高氏関係史料を含む「松浦文書類」（写本）を調査し、『平戸市史』歴史史料編1所収の翻刻の誤りを正した。随時、刊本等にもとづき中世壱岐関係史料の検出を行い、前記の「松浦文書類」とあわせて、全文データベースを作成した。 ・対馬宗家文庫史料の調査 長崎県立対馬歴史民俗資料館で調査を実施した（25年11月）。宗家文庫史料のなかから、宗家の家譜・系図類、及び宗家菩提寺国分寺関係史料を中心に原本を閲覧し、全冊の写真撮影を行った。あわせて同館に所蔵される新出の中世文書の調査を行い、全点の写真撮影と簡易目録の作成を行った。			
【実績値】 調査回数：2回 収集史料数：75点 収集図書数：46冊			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4524-8

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	B	A	A
判定理由 適時性：国際交流史研究は近年活発化している分野である。 独創性：中世～近世初期の宗氏領国・日朝交流を連続的に把握する研究は他にない。 発展性：日朝交流史研究にとどまらず、広く国際交流史研究に資するものである。 効率性：通常業務の繁忙により、時間的投資が制約された。 継続性：制約された時間のなかで、最大限の成果を収めた。 正確性：正確なデータにもとづくデータベースを作成した。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集史料数	収集図書数			
判定	B	A	A			
判定理由 調査回数：通常業務の繁忙により、調査回数が当初予定を下回った。 収集史料数：当初予定通り関係史料の調査・収集を行った。 収集図書数：当初予定通り関連図書の収集を行った。						

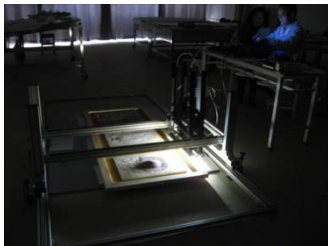
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当初計画通りの調査成果を収めることができた。 次年度は調査の調査成果を収めることができた。 次年度は調査回数を十分に確保することで、より充実した成果を収めることを期する。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究は、日本列島と朝鮮半島との交流の窓口であった対馬をフィールドとする調査研究であり、中期計画「日本の文化財及び日本文化に影響を与えたアジア諸地域の有形文化財に関する基礎的かつ総合的な調査・研究を行う。」の趣旨に適うものである。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	9) 契丹壁画墓の集成と公開-唐滅亡後の東アジアにおける国家形成過程の視覚的理解-(科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金)((5)-②)		
【事業概要】 唐滅亡後の東アジアにあって、中国北方に覇をとらえた遊牧民族国家契丹（遼）は、中国文化や仏教を継承する一方、契丹文字を創出するなど文化的な自立を示している。こうした契丹国家形成における重層性を考えるのに、当時の社会構造を視覚的に示す、内蒙古自治区内所在の契丹壁画墓壁画を研究・記録/集成し、公開のための環境整備と新しい展示手法を検討する。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	課長 臺信祐爾
【スタッフ】 今津節生（博物館科学課長）、市元壘（企画課特別展室主任研究員）、畑靖紀（文化財課資料管理室主任研究員）			
【主な成果】 ・3年間にわたる研究期間中に行う共同研究の内容について、内蒙古博物院及び内蒙古文物考古研究所と協議し、協約書を締結した。 ・京都大学工学部井手亜里教授の協力を得て、内蒙古博物院で修復作業中の壁画資料30点について、日本より持ち込んだ機材で高精細画像データを取得した。 ・現地で取得した高精細画像データを、パソコンを利用して閲覧、分析ができるようデータ整備を行った。 ・現地の研究者と意見交換を行うとともに、既知の契丹壁画墓に関する発掘報告書などの情報を集積した。			
【年度実績概要】 ・日本文化の形成をアジア史的観点から再構築することを使命としている当館は、唐滅亡後の東アジアの文化交流の実像について、2004年より、中国内蒙古文物考古研究所と内蒙古博物院と、契丹研究をケーススタディとして共同で進めてきた。こうした実績をもとに、契丹壁画墓に関する本計画を円滑に実施するための協約書を締結した。 当該分野の研究で著名な東潮徳島大学名誉教授と面談協議するとともに、情報を収集した。 ・内蒙古博物院構内で修復処理中の壁画資料30点について、高精細画像データを作成するとともに、現地研究者との意見交換を実施した。 大容量の高精細画像データを持ち帰り、必要に応じデータファイルを統合するとともに、パソコンでも閲覧や処理ができるようデータ処理を行った。			
 内蒙古博物院における 高精細壁画画像記録調査			
【実績値】 海外出張回数 2回 出張人数 延べ6人 取得データ数 30点（切り取り壁画30点について高精細画像データを作成した。） 上記高精細画像データを、パソコンで閲覧、分析ができるようデータを整備した。			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4524-9

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	正確性		
判定	A	A	A	A		
判定理由 適時性：現地でなければ見ることが難しい壁画の高精細画像データを作成し、研究に活用することができる。 独創性：調査記録に切り取り壁画をはめ込み、墳墓内空間を復元することができる。 発展性：一般の人が入ることは基本的にない墳墓内空間を実寸大で復元することで、臨場感がある。 正確性：高精細画像データをスキャナーで作成するため、レンズ収差などのない正確な画像が集成される。						

2. 定量的評価

観点	海外出張回数	出張人数	取得データ数			
判定	A	A	A			
判定理由 海外出張回数、出張人数、取得データ数： 最小の回数及び人数で現地に赴き、効率的な協議及び調査を行うとともに、高精細画像データ取得作業を実施できたため、今後の作業及び記録について見通しが立った。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	計画通り調査を実施することができ、順調に成果を挙げている

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査研究は、当初の計画に沿って、順調に成果を挙げている。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	10) 水中遺跡の保存活用に関する調査研究（文化庁受託事業）（(5)-②）		
【事業概要】 我が国は、海外との交流によって歴史文化を育んできた。この直接の担い手が船であるが、近年も長崎県鷹島神崎の海底遺跡から沈没した元寇船が発見されるなど、海中には多くの船体や遺跡が存在すると思われる。こうした水中遺跡は、海外との交流を語る貴重な文化遺産であるが、水中という特殊な立地条件にあるため、その調査や保存活用の手法が確立されていない。そこで水中遺跡の保存活用について国内外の取組について調査研究を行う。			
【担当部課】	展示課	【プロジェクト責任者】	課長 赤司善彦
【スタッフ】 谷豊信（学芸部長）、臺信祐爾（企画課長）今津節生（博物館科学課長）、志賀智史（博物館科学課保存修復室主任研究員）、河野一隆（企画課文化交流展室長）、進村真之（展示課主任研究員）			
【主な成果】 海外の水中遺跡についての取組状況を取りまとめるために、現地を訪問し調査を行った。当該国の機関の担当者と膝を交えた直接のやりとりは、表面だけでは把握できない、その国の海に対するとらえ方や歴史感あるいは地方自治のあり方、国民の感心度合いなどを理解することができた。水中遺跡の保存と活用の課題を整理することができた。また、水中遺跡をどのように魅力的に展示するのかという課題についても、これまでにない展示ケースを作成することができた。			
【年度実績概要】 (1) 諸外国の水中遺跡の調査と保存活用に関する取組み状況調査 主にアジア・オセアニア地域を対象として現地調査や、関係者を招聘する等、水中遺跡の一連の課題を調査した。 オーストラリア 現地調査 25年9月30日～10月5日 中国 現地調査 25年11月12日 韓国 現地調査 26年1月14～16日 イギリス、オランダ 現地調査 26年2月11～13日 (2) 国内の水中遺跡の把握調査 水中遺跡の発見は主に漁で引き揚げられる遺物がその契機となっている。その実態について調査した。 現地調査 3回 長崎県松浦市鷹島町 25年7月17日 長崎県松浦市鷹島町 25年10月15～17日 鹿児島県宇検村 25年11月21・22日 (3) 国外関連資料の収集 大韓民国の国立海洋文化財研究所を中心に、主要な海外の諸機関を対象にして、課題についての印刷物の中から必要なものを翻訳している。 韓国、タイの文献。 (4) 博物館での水中遺跡の活用手法（展示）の調査検討・展示の試み 平常展示室で、鷹島海底遺物の展示について新しい試みを行っている。 ・てつはう実物展示と透明液晶を活用した動画コンテンツを紹介する展示ケースの制作を行っている。 ・伊万里湾海底地形模型を3次元プリンターで出力製作するために、海底地形のDEMデータを制作した。			
西オーストラリア海事博物館での打ち合わせ 			
【実績値】 海外調査 4回 国内調査 3回 海外招聘 1回 (参考値) 文化庁との打ち合わせ 9回			
【備考】			

西オーストラリア海事博物館
での打ち合わせ

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4524-10

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：鷹島海底遺跡で船体が確認され、国民的な話題となっており、これからの方向性を定めるための調査である。 独創性：水中遺跡の内外の取組状況の把握は、まとまったものとしてこれまでなされたことがない。 発展性：水中遺跡に調査研究のガイドライン作成につながる研究と期待できる。 効率性：翻訳業務等、委託できるものは外部に業務をお願いするなど、コストを意識した業務遂行となった。 継続性：アジア・オセアニアの主な水中遺跡に取り組んでいる国の状況を把握することができた。 正確性：各国のデータを刊行物によって基礎資料を作り、実際に訪問して関係者と面談したことで、正確な内容を収集することができた。						

2. 定量的評価

観点	海外調査	国内調査	海外招聘			
判定	A	A	A			
判定理由 海外調査：計画通り実施することができた。 国内調査：計画通り実施することができた。 海外招聘：予定通り実施することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本研究によって我が国の水中遺跡のこれからの取り扱いを考えるための基礎資料を集積することができた。今後はヨーロッパ諸国の把握に努めたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査研究は、計画に沿って順調に遂行している。引き続き外部資金を積極的に活用しながら研究を継続し、広く研究成果を普及させたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	11) 特別公開「江上波夫の眼 ことばとかたち」に関する調査研究((5)-②)		
【事業概要】			
文化勲章受章者で考古学者・東洋学者の江上波夫（1906－2002 年）は、ユーラシア全域を研究対象とし、多数の海外調査を主導し多くの成果を挙げてきた。戦前のオロンスム（現中国内蒙古自治区）における元時代のキリスト教会堂遺跡や明時代のチベット仏教関連遺跡に係わる研究ならびに発掘調査成果は世界的な評価を得た。オロンスム関連遺跡に加え、生涯を通じて形成した膨大な個人コレクションのうち各地の言語や美術・考古作品を選んで紹介する。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	課長 臺信祐爾
【スタッフ】			
【主な成果】			
オロンスムにおけるネストリウス派キリスト教遺跡やカトリック教会堂遺跡に係わる遺物、平面図、キリスト教信者の墓石の拓本や遺物類（元代）、及びチベット仏教関連の拓本や遺物類など（明代）について実物資料を調査した。漢字による文字資料の拓本類多数から代表的な作品を選定した。楔形文字、シリア文字、アラビア文字、パスパ文字、モンゴル文字、契丹文字、女真文字、満州文字、ハングルなどの資料を調査し、展示内容を確定した。			
【年度実績概要】			
- 戦前のオロンスム調査に係わる拓本類、瓦・陶磁片資料、写真資料、平面図等の実物資料について、東京大学東洋文化研究所・東京大学総合研究博物館・横浜ユーラシア文化館で調査した。431 年のエフェソス公会議において異端とされたキリスト教ネストリウス派が唐代の中国に伝来し、13 世紀元時代のモンゴル族の間で信仰されていたことを示す貴重な実物資料から代表的な作品を選んで展示した。 - 古代オリエント博物館・横浜ユーラシア文化館で西アジア関連遺物を、また、横浜ユーラシア文化館等で漢字を中心とする文字資料の拓本や細密画などを調査し、展示作品を選定した。 - 明代の軍人で宦官の鄭和による南海遠征（1405－1433 年の間に 7 回）により、中国とアフリカ東海岸が直接結ばれたが、これはヨーロッパ諸国による大航海時代に約 70 年先行するものである。中国からアフリカを含む地図上の航海路を図示するとともに茅元儀著の『武備志』に掲載された航路図を横に連続して並べることによって、来館者の理解を助けるパネル作成について検討し、掲出した。 - 九州ではなかなか実物を目にすることがないウル第 3 王朝時代の楔形文字による粘土板をはじめ、東アジアで用いられた契丹文字、女真文字、満州文字など各種の文字資料について調査し、陳列用の作品を選定した。			
			
鄭和航路図・『武備志』図版 （鄭和による 7 回におよんだ南海下りの航路と図版をパネルとして掲出した。）			
【実績値】			
調査回数及び調査資料数 9 回 140 点			
東京大学東洋文化研究所 2 回 資料 30 点調査			
東京大学総合研究博物館 2 回 資料 30 点調査			
古代オリエント博物館 2 回 資料 30 点調査			
横浜ユーラシア文化館 3 回 資料 50 点調査			
【備考】			
江上波夫の紹介、展示する代表的な作品と基礎的情報を掲載したチラシ（A3 二つ折り）を作成頒布した。 （25 年 11 月 1 日）			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4524-11

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：ユーラシアを研究対象とした江上波夫が体現した国際性を、その旧蔵品から明確に示した 独創性：ユーラシア各地で用いられた言葉にかかわる文字資料を文献だけでなく焼き物などにも見いだした。 発展性：エジプトで生まれた信仰がローマ文化圏で変容しつつ受け入れられたことを実物資料で示せた。 効率性：調査対象機関が限られていたため、効率的に調査できた。 正確性：展示作品に関する所蔵機関による基礎的な先行研究があり、学術的な位置づけはなされていた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査資料数				
判定	A	A				
判定理由 調査回数・調査資料数： 旧蔵品のうち、オロンスム資料と文字資料を所蔵する主な所蔵機関を網羅するとともに、すでに基礎的な先行研究のある作品を中心に十分な数の資料を調査することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	楔形文字やアラビア文字等西アジアの文字及び漢時代から明時代に記された漢字、シリア文字、アラビア文字、モンゴル文字、契丹文字、女真文字、ハングル、満州文字など東アジア文化圏で用いられていた文字を一度に展示して、来館者に興味を持ってもらうとともに、古代の人々が作り出した様々な作品を通して、ユーラシアの広がりを感じてもらうことができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当初計画の通り実施することができた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進。		
プロジェクト名称	1) 近畿地区（特に京都）社寺文化財の調査研究(科学研究費補助金)（(5) -③）		
【事業概要】 科学研究費補助金による「南山城の歴史と仏教文化に関する総合的研究」の3年目として、引き続き京都府南部寺院の文化財調査を行う。そのデータ整理を進めた。さらにその研究成果の発表の場として、京都国立博物館の特別展覧会「南山城の古寺巡礼」展のため文化財の追加調査・撮影等を行い。調査成果の公表の準備を進めた。展覧会は平成26年4月22日～6月15日を予定している。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	企画室長 宮川禎一
【スタッフ】 村上隆(学芸部長)、山本英男(美術室長)、尾野善裕(工芸室長)、山川暁(教育室長)、浅鍬毅(保存修理指導室長)、鬼原俊枝(列品室長)、大原嘉豊(主任研究員)、羽田聡(主任研究員)、永島明子(主任研究員)、呉孟晋(研究員)			
【主な成果】 京田辺市酬恩庵（一休寺）の文化財調査によって未公表の一休禅師の遺品類が見つかった。また金工作品の中でも東南アジアあるいは中国由来の鉄鐘が発見された。さらに原在明筆の庭園図（近世）についてはその絵画表現方法に極めて特異な作品が存在することが明らかとなった。さらに木津川市教育委員会が所蔵する神雄寺出土品の調査で特殊な塑像の破片を確認した。その他様々な新知見を得ることができた。			
【年度実績概要】 ・前年度までの文化財調査成果（調査カード）の整理作業、パソコンへのデータ入力作業を行った。 ・京田辺市の酬恩庵（一休寺）での文化財調査で約200点の作品を調査した。 ・酬恩庵の調査で染織・金工・絵画などで従来知られなかった文化財が発見され詳細な調査を行った。 ・木津川市教育委員会での考古遺物の調査で高麗寺跡・蟹満寺・梅谷瓦窯・山城国分寺跡・神雄寺跡出土品約50点を詳細に観察し、撮影も行った。 ・京都府埋蔵文化財調査研究センターにおいて馬場南遺跡（神雄寺跡）出土遺物約20点の調査を行った。 ・京都大学総合博物館で木津川市山城町の椿井大塚山古墳出土の三角縁神獣鏡など5面の青銅鏡の調査を行った。 ・京田辺市教育委員会において堀切7号墳出土の人物埴輪1点の調査と撮影を行った。 ・調査で撮影した写真の整理を行った。		 一休寺方丈での一休禅師木像の調査撮影風景	
【実績値】 調査点数：約300点 撮影文化財点数：約150点 データ入力件数：約1000点			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4532-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	B	A	B	A	A
判定理由 適時性：京都周辺社寺の文化財調査は寺院側からも調査の要請が強かった。 独創性：多様な方面からの文化財調査であり仏像のみのような調査ではなかった。 発展性：海住山寺様からの情報で山下の未公開彫刻作品の調査などができた。 効率性：京都国立博物館から遠くはないので、調査を継続的・効率的に行うことができた。 継続性：調査3年目であり、引き続き質の高い調査を行うことができた。 正確性：データの蓄積が行われ報告書に向けての客観的情報が整理できた。						

2. 定量的評価

観点	調査点数	撮影文化財 点数	データ入力 件数			
判定	S	S	A			
判定理由 調査点数：調査目標数200点のところ、実績300点ほどの文化財の調査が行えたので充分である。 撮影文化財点数：目標の100点を超えて約150点が撮影できた。 データ入力件数：目標の700件を超えて1000件のデータ入力が行えた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	引き続き木津川流域の寺院の文化財調査が進展したことは評価できる。また古墳や寺院跡から出土した銅鏡や古瓦類の調査も進展したことは評価できる。さらに派生寺院の調査もいくつか実施できた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	今回の科学研究費補助金による調査成果の公開としては平成26年4月22日～6月15日の京都国立博物館での特別展覧会「南山城の古寺巡礼」がひとつ。これは順調に準備が進んでいる。一方、文化財の全てをリスト化した「報告書」についてはやや遅延が予測される。

【書式B】
(様式1)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4532-2

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進。		
プロジェクト名称	2) 近世絵画に関する調査研究 ((5) -③)		
【事業概要】 当館に保管及び寄託される作品を中心とした近世絵画に関する調査研究を行う。再開する平常展示の展示替え計画にあたっての情報整理、基盤固めを行う。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	前連携協力室長 山下善也
【スタッフ】 奥平俊六（大阪大学大学院教授・客員研究員）、橋本寛子（神戸大学助手・調査支援ボランティア）、吉田智美（同志社大学大学院生・調査支援ボランティア）、森光彦（京都市学校博物館学芸員・調査支援ボランティア）、大橋あきつ（京都大学大学院生・調査支援ボランティア）、浦上彩音（京都大学大学院生・調査支援ボランティア）			
【主な成果】 特別展覧会「狩野山楽・山雪」図録内容に一部反映させた。			
【年度実績概要】 ・年 2 回、当館近世絵画担当研究員が客員研究員の奥平俊六氏及び調査支援ボランティア等とともに主として館蔵品・寄託品のうち、近世絵画について、調査・調書作成・撮影・意見交換等を行った。			
			
善導寺寄託 「三十三観音図 山口雪溪筆」 3 3 幅の調査			
【実績値】 調査回数 2 回 収集資料数 100 点 調査概報 12 件（出品 83 件中）			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4532-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：続々と入ってくる寄託品の調査を、できるだけ遅れずに実施した。 独創性：文化財・美術史を学びに京都に集まる学生や地元の学芸員のマンパワーを活かした。 発展性：調査の手法を学んだ学生たちが、将来、現場で活躍することが期待される。 効率性：人海戦術により、大量の資料も効率よく調査できた。 継続性：寄託等で作品は増えていくので、継続性は極めて高い。 正確性：調書作成・撮影等、充分に行うことができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	調査概報			
判定	C	A	A			
判定理由 調査回数：責任者が特別展覧会を担当していたため、昨年度と比較して調査の回数が半減した。 収集資料数：1回あたりかなり集中して行い、調査点数を増加させた 調査概報：特別展覧会「狩野山楽・山雪」図録内容に一部反映することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	近世絵画の館蔵品・寄託品についての調査研究及び関連情報収集は、ほぼ順調に進んでいる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	近世絵画担当研究員と客員研究員との協力により、近世絵画の館蔵品・寄託品に関する情報収集・整理が進み、調査研究はほぼ順調に実施されている。

業務実績書

中期計画の項目	4. 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 漆工芸に関する調査研究(科学研究費補助金) ((5)-③)		
【事業概要】 科学研究費補助金(若手研究(A))「内外伝世品の調査ならびに比較に基づく京都製蒔絵の歴史的研究」の一環として、国内外の蒔絵の伝世品を調査し、既知の基準作と比較し、また伝世の経緯を伝える史料を研究することによって、近世から近代への微妙な様式変化や、京都とそれ以外の地域の蒔絵の差異を見極めることを目標と定め、京都の蒔絵史を捉えることを目的とする。また海外の所蔵者や研究者との交流を深め、将来の共同研究の在り方を探る。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	列品管理室主任研究員 永島明子
【スタッフ】			
【主な成果】 昨年度までの成果の一部を当館研究紀要に発表することができた。オランダのライクスミュージアム、スペインのマドリッド国立装飾美術館、イギリスのV&A美術館、フランスのルーヴル美術館、パリ装飾美術館、コンピエーニュ・アントワヌ・ヴィヴネル美術館などで漆器を調査し、特に19世紀パリの漆器コレクションの実例を詳しく知ることができた。日本の研究者が調査に赴くことで、所蔵館の担当者たちの日本漆器に対する関心が高まり、異なる所蔵館のあいだで共同の展覧会を模作する動きも生じてきており、有意義な研究交流を行えた。			
【年度実績概要】			
・年度当初に昨年度までの成果の一部を当館研究紀要『学叢』に「十八世紀フランスの蒔絵熱：蒔絵層の剥ぎ取りと高度な模造の実例集」として発表することができた。同時に副次的な成果の一部として「ゴータ・フリーデンシュタイン城美術館蔵画帖：明治政府よりエディンバラ公アルフレッドへの贈答品」を水谷亜希研究員と共著で発表することができた。 ・オランダでは80年以上行方不明だった17世紀のヨーロッパ向け大型櫃の名品を含め、ライクスミュージアムが所蔵する漆器数十点を調査し、V&Aで調査予定の作品の類似品などのデータをとることができた。 ・スペインではマドリッド国立装飾美術館において、スペインの修道院や教会に伝えられてきた南蛮漆器を一堂に集めた特別展を見学し、同館における関連作品の調査し、また個人所蔵家の自宅や古美術商の店舗においても漆器を調査した。いずれもここ数年の海外研究者との交流の結果、実現した調査である。 ・イギリスでは、万国博覧会の時代を中心とした膨大なコレクションを誇るV&A美術館の収蔵庫における漆器調査を進め、先方に京都国立近代美術館の中尾優衣氏の同行をご許可いただき、同館が準備中の展覧会への協力も果たすことができた。 ・フランスでは、昨年度に引き続き、ルーヴル美術館が所蔵するティエールの漆器コレクションを調査し、その全貌を把握することができた。これについては来年度の研究紀要にて報告する。コンピエーニュでの調査も二年めにしてほぼ全体を見通せた。パリ装飾美術館では同館の学芸員もほとんど見ることがなかった漆器の調査であったため、質問を多く受け、研究交流にもなった。また、コンピエーニュの収蔵品との共通性が発覚し、両館の学芸員たちから、19世紀の漆器収集家たちについて、将来、共同の展覧会を行えないかとの提案もあり、引き続き連絡を取り合い、情報交換に努めることになった。 ・なお、本年度招聘予定であった海外研究者は、所属機関の都合により、来年度来日することになった。			
			
パリ装飾美術館における調査風景 (フランス人学芸員3人が同席)		V&A美術館蔵「年中行事蒔絵団扇形箱」の調査写真	
【実績値】			
調査作品数 501件 撮影カット数 5662カット			
【備考】			
「十八世紀フランスの蒔絵熱：蒔絵層の剥ぎ取りと高度な模造の実例集」『学叢』35号、京都国立博物館編、2013年：pp.19-24および107-132。 「ゴータ・フリーデンシュタイン城美術館蔵画帖：明治政府よりエディンバラ公アルフレッドへの贈答品」『学叢』35号、京都国立博物館編、2013年：pp.5-16および51-86(共著)。			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4532-3

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	B	S	S
判定理由 適時性：現代の京漆器の担い手たちからの要請もあって企画された事業。海外調査や海外の研究者たちとの交流や情報交換を実施。 独創性：輸出漆器のデータから国内の漆器生産の状況を知る手法の独創性が認められて科研の助成対象となった。 発展性：調査結果をその場で所蔵者に還元。今後の展示や執筆物に活かされる情報を収集した。 効率性：調査後の資料を整理する時間を昨年度にも増してとれていない。非常に限られた時間の中で通訳やコーディネータを使わず海外調査を実施した。 継続性：昨年からの継続事業。研究の大枠は十数年来、一環して続く。比較データの蓄積を行った。 正確性：システマチックな調査と顕微鏡画像を含む比較データの蓄積を行った。						

2. 定量的評価

観点	調査作品数	撮影カット数				
判定	A	A				
判定理由 調査作品数、撮影カット数： 限られた時間と予算の中で正確なデータを収集するという観点から十分に成果を認めうる数値を達成している。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	招聘者の都合で計画の変更があったものの、本研究計画の最終年である来年度中に招聘を実現できる見込みであり、年二回の海外調査の機会を最大限に活かし、海外研究者との交流を一段と深めることができたため、順調と判断する。来年度には今年度の研究成果の一部を発表することができるだろう。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	おおむね計画通りに実施されており、当該年度計画を達成している。

【書式B】
(様式1)

施設名 奈良国立博物館

処理番号 4543-1

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1)-1 特別展「武家のみやこ 鎌倉の仏像 ー迫真とエキゾチシズム」に関する調査研究((5)-④)		
【事業概要】 特別展「武家のみやこ 鎌倉の仏像-迫真とエキゾチシズム-」(26年4月5日～6月1日開催)に関する調査研究 26年4月5日～6月1日に開催する特別展「武家のみやこ 鎌倉の仏像 ー迫真とエキゾチシズム」の内容を固めるため、調査研究を行う。			
【担当部課】 学芸部美術室 学芸部情報サービス室	【プロジェクト責任者】 室長 岩田茂樹 室員 山口隆介		
【スタッフ】 岩井共二(教育室長)、宮崎幹子(資料室長)、谷口耕生(保存修理指導室長)、清水健(主任研究員)、佐々木香輔(資料室員)／(外部研究者)内藤浩之(鎌倉国宝館副館長補佐)、高橋真作(同・学芸員)、和澄浩介(同・嘱託学芸員)			
【主な成果】 出品候補作品の調査と出品交渉、関連資料の調査研究を行った。			
【年度実績概要】 ・特別展への展示を予定している作品の多くが寄託されている鎌倉国宝館において、約50件の作品につき作品の保存状態を含めた調査を行った。 ・特別展に出陳を予定する作品の所蔵者を訪問し、出品交渉を行った。 (鎌倉国宝館寄託分) 円応寺・光触寺・鶴岡八幡宮・建長寺・浄妙寺・浄智寺・円覚寺・神武寺・明月院・荏柄天神社・長谷寺(その他) 常楽寺・浄光明寺・極楽寺・東慶寺・来迎寺・光厳寺・長安寺・覚園寺			
			
特別展 図録		特別展示チラシ	
【実績値】 調査回数：12回 調書作成数：87件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良国立博物館

処理番号 4543-1

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	S	A	A
判定理由 適時性：26年4月5日～6月5日に開催される特別展のための調査であり、公共性・公開性を満たす。 独創性：奈良に限らず、鎌倉以外の地で開催される初めての鎌倉地方の彫刻の展覧会であり、独創性は大きい。 発展性：今後の奈良・京都の彫刻との比較により、大きなテーマへと展開できる。 効率性：作品の多くが寄託される鎌倉国宝館の学芸員との共同調査が実施でき、効率的であった。 継続性：今後の東日本の彫刻研究につながるテーマであり、継続性が期待できる。 正確性：個々の作品の調書を個別に作成したので、調書に正確を期すことができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調書作成数				
判定	A	A				
判定理由 調査回数：調査の必要な作品を網羅できた。 調書作成数：87件は十分な数である。						

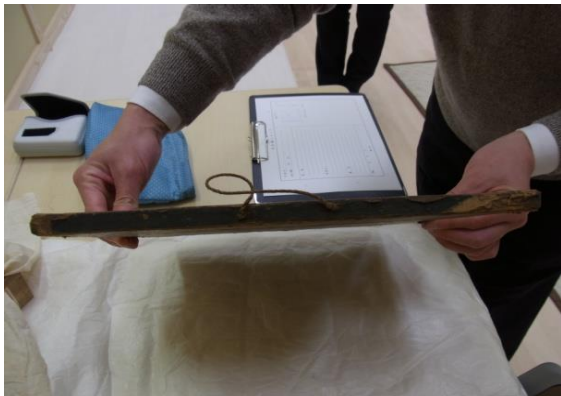
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	展覧会に対する外部からの問い合わせや期待の声も多く、今後の彫刻研究に大きく寄与するものとして高く自己評価する。この評価を今後の活動に資したい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	展覧会の実施に向けて、調査を着実に進めることができた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2)-1 特別陳列「お水取り」に関する調査研究((5)－④)
【事業概要】 南都諸社寺等における文化財の調査、宗教文化に関する調査の一環として、奈良において著名な伝統行事の一つである、東大寺二月堂修二会（お水取り・毎年三月に催行）に関する調査・研究を行い、その成果を毎年恒例開催となっている特別陳列「お水取り」に反映させる。	
【担当部課】	学芸部教育室
【プロジェクト責任者】	室員 齋木涼子
【スタッフ】 西山厚（学芸部長）、岩田茂樹（美術室長）、内藤栄（工芸考古室長）、野尻忠（企画室長）、岩井共二（教育室長）、宮崎幹子（資料室長）、谷口耕生（保存修理指導室長）、吉澤悟（情報サービス室長）、岩戸晶子（列品室員）、清水健（企画室員）、北澤菜月（情報サービス室員）、山口隆介（美術室員）、永井洋之（工芸考古室員）、原瑛利子（企画室員）、佐々木香輔（資料室員）	
【主な成果】 例年恒例となっている、特別陳列「お水取り」開催に向け、出陳を前提とする文化財の調査を行った。	
【年度実績概要】 ・特別陳列「お水取り」開催に向け、展覧会担当者1名が、出陳を前提とする古文書の調査を東大寺にて行った。特に、東大寺が所蔵する修二会関係文書、重要文化財「二月堂修中練行衆日記」について、従来調査・出陳を行っていない巻・冊に対し、具体的な調査を行い、内容を検討した。その結果、新たな出陳候補となる作品が見いだされたものの、今年度より修二会関係文書が修理に入るため、修理が終了し次第、来年度以降の展示に活用することを提案した。 ・特別陳列「お水取り」開催に向け、展覧会担当者2名が、出陳を前提とする文化財（古文書除く）の調査を東大寺にて行った。東大寺が所蔵する修二会（お水取り）関係の文化財、特に民俗資料的な作品を中心に調査し、従来寺内・寺外ともに展覧会等において展示・出陳されたことのない新たな作品を見出し、平成25年度特別陳列「お水取り」への出陳を実現した。	
 出陳作品「懸板」  調査時の様子	
【実績値】 ・作品調査回数（人数×日数の延べ回数） 4回 ・新聞等掲載の作品解説 2回 ・講座等発表回数 2回	
【備考】	

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：奈良の著名な伝統行事、東大寺二月堂の修二会（お水取り）の時期に合わせ（行事期間 26 年 3 月 1 日～14 日）、特別陳列「お水取り」を開催するなど、時宜にかなった研究を公表した。 独創性：東大寺関係者への聞き取り、東大寺所蔵品の詳細な調査など、当館独自の調査成を実施した。こうした文化財調査は、今後の伝統行事研究への大きな礎となるものである。 発展性：修二会のような行事に関わる文化財の調査は、今後の伝統行事研究への大きな礎となるものである。 継続性：奈良の古社寺への調査を継続的にを行っている当館でなければできない、新たな文化財発見などを得た。来年度以降も、修二会（お水取り）をテーマとした特別陳列を計画しており、調査研究の蓄積が期待される。 発展性：調査などにより、展覧会図録、展示内容を正確なものとすることができた。						

2. 定量的評価

観点	作品調査回数	新聞等掲載の作品解説	講座等発表回数			
判定	A	A	S			
判定理由 作品調査回数： 展覧会の学術面における充実・深化を図るべく、情報交換・内容検討・協議等を行う場を、必要十分な回数、設けることができた。 新聞等掲載の作品解説： 新聞紙面等における出陳作品の紹介についても、十分な実績をあげた。 講座等発表回数： 特別陳列「お水取り」開催中、修二会（お水取り）に関連する公開講座を例年 1 回予定しているが、今年度は 2 回開催することができた						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	仏教美術及び奈良に関連する文化財を展示活動の中核に据えている当館にとって、当該ジャンルに関連する多彩かつ魅力的な展示の企画立案・実施は、社会からの要請が最も強い業務の一つである。このような認識から特別陳列「お水取り」の内容を充実させ、かつそれを学術的な裏付けを伴ったものとするべく、設定した展覧会のテーマに沿った調査研究を展開してきた。本年度は、新たな出陳作品の調査を中心に十分な実績を挙げることができた。次年度以降も将来の企画展示の充実に向けて同様の業務を継続し、着実に成果を挙げていく必要がある。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	特別陳列「お水取り」の企画立案から開催に至るまでの過程における調査研究を、「仏教美術及び奈良を中心とした有形文化財の、基礎的かつ総合的な調査研究を行う」という計画に沿うよう展開しており、その点において順調に実績を積み重ねている。次年度も、同特別陳列の開催に向けた調査研究を行う予定であり、これを円滑に遂行し、確実な成果の蓄積へと導く業務のサイクルが、すでに確立されている。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2)-2 特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」に関する調査研究(⑤-④)		
【事業概要】 南都諸社寺における文化財の調査、宗教文化に関する調査の一環として、奈良の伝統行事である「春日若宮おん祭」に関する調査・研究を行い、その成果を毎年恒例となっている特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」に反映させる。			
【担当部課】	学芸部情報サービス室	【プロジェクト責任者】	室長 吉澤 悟
【スタッフ】 西山厚（学芸部長）、岩田茂樹（美術室長）、内藤栄（工芸考古室長）、北澤菜月（ボランティア室員）、清水健（企画室員）、谷口耕生（保存修理指導室長）、永井洋之（企画室員）、原瑛利子（企画室員）、幡鎌一弘（天理大学おやさと研究所研究員）、松村和歌子（春日大社宝物殿主任学芸員）			
【主な成果】 本年の特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」では、これまでに注目されたことのなかった「大和士：やまとさむらい」の実態を、新史料の公開も含めて取り上げ、広く紹介することができた。			
【年度実績概要】 - プロジェクト責任者及び展覧会担当者が、春日大社及び天理大学の幡鎌氏と共同して、奈良県内に在住する旧大和士家と懇談、先祖の活動の聞き取りや所蔵する文化財の調査等を行った。その結果、新撰組山崎丞の手紙や天誅組の伴林光平の掛け軸など新出史料を旧家から借用・展示紹介することができた。 - 旧大和士家の所蔵する「大宿所春日若宮祭式事件並品書」（明治3年）を借用、展示したが、おん祭研究におけるその史料の重要性に鑑み、今年の展示図録では「参考資料」として同書の前頁を写真掲載することにした。 - 今年のテーマ「大和士」は、春日大社が発行する「第 878 回 春日若宮おん祭」パンフレットでも特集が組まれて、また地元情報誌「ならら」でも総力特集するなど、神社と地域と博物館が連動して一つの話題を盛り上げることになった。これは春日大社をベースに密接な人的交流により実現した「波」であり、博物館の調査・研究の良きモデルを提起できたと考える。			
			
史料調査時の様子		同展で展示した「随兵甲冑」	
【実績値】 - 図録発行部数 1,800 部 - 新出史料の紹介数 19 件 - 作品調査回数（人数×日数の延べ回数） 8 回 - 新聞等への作品解説 3 回 - 講座等の発表回数 1 回			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適宜性：春日大社の若宮おん祭の実施に併せて行われる恒例の展示である。特に今年はおん祭の当日を無料観覧日として、観覧者の倍増をはかり、この祭のすばらしさを多くの方に伝えることができた。 独創性：恒例の展示部分に、新規のテーマ「大和土」を盛り込むことで、これまで注目されてこなかった、おん祭を支えてきた人々の苦勞と誇りを示すことができた。 発展性：新出の史料を多く紹介できたことは、今後のおん祭研究の基礎の一部をなすものと思われる。また、春日大社と天理大学の協力・連携を密にしたことも、今後の調査研究を円滑化するものと思われる。 効率性：春日大社と旧大和土家の、いずれも奈良県内から展示品を借用したため、輸送は効率的であり、会場造作も大がかりなものではなく経済効率も高かった。 継続性：「おん祭と春日信仰の美術」は今回で8回目である。前回まで7回を担当した者から、今回は新たに別の担当者が引き継いで実施している。春日大社との交流もつつがなく、旧来の枠組を継承しつつ、新規の発想を加えることで、さらなる継続性を確保している。 正確性：館内職員の活動だけではなく、大学や神社の第一線の研究者の見解を容れ、実地指導も受けながら展示品の選定や解説、展示等を行った。図録掲載の解説は、当該分野では最も高い水準をもつと考えられる。						

2. 定量的評価

観点	図録発行部数	新出史料の紹介数	作品調査回数	新聞等への作品解説	講座等の発表回数	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 図録発行部数： 新出の史料を含めた図録を1,800部発行した。巻頭には総論と各論を1本ずつ掲載し、さらに巻末には参考資料として重要史料の全頁掲載を行い、質の高い図録とした。 新出史料の紹介数、作品調査回数： 春日大社や手向山八幡社、及び旧大和土家4軒の所蔵品を調査し、未公開の史料をこれまで以上に多く見い出すことができた。 新聞等への作品解説・講座等の発表回数： 数値的には例年並みである。ただし、今年は正規の講座でなく、おん祭当日に参集した観覧者にギャラリートーク的な臨時的展示解説を行い、新出史料を中心とした解説を数回行っている。						

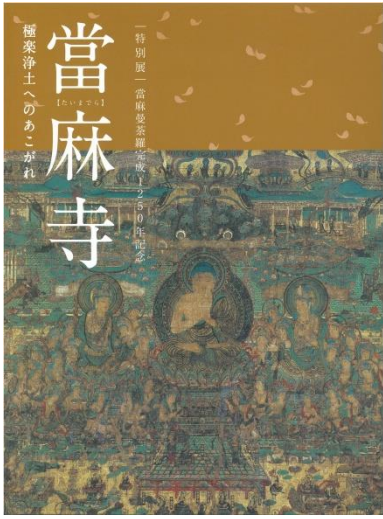
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	奈良に関連する文化財を展示活動の中核に据えている当館にとって、「おん祭と春日信仰の美術」の毎年開催に伴う調査研究は非常に重要な意味をもつ。ことに本件に関しては、春日大社と当館の間で強い信頼関係が築かれていることが前提となっている。今年は主担当者を交替しての取り組みであったが、新出史料の発掘に成功するなど、例年に劣らぬ成果を上げることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」は今年で8回目を迎えたが、その実施は「仏教美術及び奈良を中心とした有形文化財の、基礎的かつ総合的な調査研究を行う」という計画に沿って行われており、順調に実績を積み重ねていると言える。この特別陳列は春日大社との協議によって次年度以降も継続する予定であり、積年の蓄積は当館のみならず奈良における大きな財産になるものと期待される。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2)-3 当麻曼荼羅完成 1250 年記念特別展「当麻寺—極楽浄土へのあこがれ—」に関する調査研究 ((5)－④)
【事業概要】 特別展「当麻寺—極楽浄土へのあこがれ—」(25 年 4 月 6 日～6 月 2 日)に関する調査研究 奈良諸社寺等における文化財の調査、宗教文化に関する調査の一環として、奈良・当麻寺の重宝であり日本の浄土信仰上重要な位置を占める国宝綴織当麻曼荼羅を中心に、当麻寺及び当麻曼荼羅に関わる文化財の調査・研究を行い、特別展「当麻寺—極楽浄土へのあこがれ—」の展示内容に反映させるとともに、今後の事業に資する基礎調査を行う。	
【担当部課】	学芸部美術室
【プロジェクト責任者】	室員 北澤菜月
【スタッフ】 西山厚(学芸部長)、岩田茂樹(美術室長)、内藤栄(工芸考古室長)、宮崎幹子(資料室長)、谷口耕生(保存修理指導室長)、野尻忠(企画室長)、吉澤悟(情報サービス室長)、岩井共二(教育室長)、清水健(企画室員)、岩戸晶子(列品室員)、斎木涼子(教育室員)、山口隆介(美術室員)、永井洋之(工芸考古室員)、原瑛莉子(企画室員)、佐々木香輔(資料室員)	
【主な成果】 特別展開催のために行われてきた調査研究に基づき特別展を開催するとともに、展覧会開催中にも写真撮影を含む調査研究を行い、展示品に関する基礎データの集積を行うことができた。	
【年度実績概要】 ・展覧会開催以前から続けてきた調査研究の成果は、特別展図録収録の総論、各論、作品解説、及び図版に反映することができた。 ・特別展に伴い多くの関連作品を借用することがかない、事前に詳細な調査ができなかった作品について、写真の撮影や基礎的調査を行った。またその成果を新聞等掲載の作品解説や、展覧会期間中に開催した学術シンポジウム及び公開講座の際に発表することができた。	
 特別展図録	
【実績値】 ・特別展図録刊行 4,000 部 ・論文等 9 件 ・作品調査回数(人数×日数延べ回数) 25 年度 50 回 ・新聞等掲載の作品解説 4 回 ・公開講座、学術シンポジウム発表回数 7 回	
【備考】	

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：綴織當麻曼荼羅完成1250年という記念の年であったからこそ、通常公開されることのない重要な作品を展示公開することが出来た。そのため、作品を所蔵する寺院と来館者の、双方の需要をかなえることができた。 独創性：奈良の古代寺院の一つである當麻寺をテーマにした特別展は、過去に例がなく、日本の信仰史上で重要な位置を占める當麻寺を紹介する初めての企画として、当館に相応しくまたオリジナリティのある内容であった。 発展性：特別展前及び開催期間中の調査研究の成果は今後の当館の活動に資するものとして発展性が認められる。 効率性：當麻寺の所蔵品を主として展示を行ったため、出陳交渉を節減し効率的な特別展を開催をすることができた。 継続性：當麻寺展に関する調査研究は、展覧会開催の3年前より開始し、當麻寺所蔵寺宝の悉皆的な調査を行うことができた。その調査結果の上で特別展を開催するとともに、会期中にも継続した調査研究を行い、今後の当館の展示や調査研究に資する基礎的データを集積することができた。 正確性：調査研究に基づく最新の研究成果を展示や図録、公開講座に反映することができた。						

2. 定量的評価

観点	特別展 図録刊行	論文等	作品調査回数	新聞等掲載の 作品解説	公開講座等	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 特別展図録刊行：調査研究の成果を反映した内容の図録を4,000部刊行することができた。 論文等：企画したとおり、調査研究をもとにした学術的に高度な論文が執筆された。 作品調査回数：企画したとおり、展覧会期間中も主要作品の詳細な撮影や調査を行った。 新聞等掲載の作品解説：予定した通り、調査研究の成果を反映した解説を掲載することが行われた。 公開講座等：予定した通り、調査研究の成果を反映した公開講座やシンポジウムを行うことができた。						

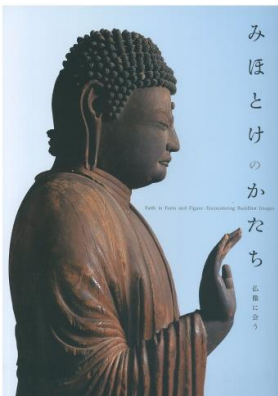
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	仏教美術及び奈良に関連する文化財を展示活動の中核に据えている当館にとって、当該ジャンルに関連する多彩かつ魅力的な展示の企画立案・実施は、社会からの要請が最も強い業務の一つである。このような認識から、奈良の文化財として非常に重要な綴織當麻曼荼羅を所蔵する當麻寺の展覧会は当館に相応しく、開催に向けた調査研究を展開し、これを実現するとともに、今後活用できる基礎的データを集積することがかなった。今後も将来の企画展の充実に向けて同様の業務を継続し、着実に成果を上げていく必要がある。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	特別展の企画立案から開催、及び会期中の調査研究は、「仏教美術及び奈良を中心とした有形文化財の、基礎的かつ総合的な調査研究を行う」という計画に沿うように展開しており、その点において順調に実績を積み重ねている。次年度も企画展のテーマに沿って同様に調査研究を展開し、同レベルの成果を得ることが見込まれる。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2-4) 特別展「みほとけのかたちー仏像に会うー」に関する調査研究((5)ー④)		
【事業概要】 特別展「みほとけのかたちー仏像に会うー」(25年7月20日～9月16日)に関する調査研究 館蔵品・寄託品を中心に、仏像の魅力を再検討するための調査研究			
【担当部課】	学芸部教育室	【プロジェクト責任者】	室長 岩井共二
【スタッフ】 西山厚(学芸部長)、岩田茂樹(美術室長)、内藤栄(工芸考古室長)、野尻忠(企画室長)、宮崎幹子(資料室長)、谷口耕生(保存修理指導室長)、吉澤悟(情報サービス室長)、斎木涼子(教育室員)、岩戸晶子(列品室員)、清水健(主任研究員)、北澤菜月(教育室員)、山口隆介(美術室員)、永井洋之(工芸考古室員)、原瑛莉子(企画室員)			
【主な成果】 特別展開催にあたり、館蔵品・寄託品等の調査・撮影を行い、その成果を、展示会場内の解説や各種刊行物等に反映させた。			
【年度実績概要】 ・平成25年5月から6月にかけて、館蔵品・寄託品の出陳品のうち、未刊行の作品や、写真原板のないものについては、当館写場にて、新規撮影を行った。展示テーマに関連した部分図など図録掲載に必要な撮影もあわせて行った。 ・平成25年5月から6月にかけて、館蔵品・寄託品を調査し、採寸を行い、その成果に基づいて展示台の高さや会場構成を検討し、展覧会の重要命題である「仏像の魅力をわかりやすく提示する展示」に反映させた。 ・展覧会のテーマに沿って、仏像の形状や材質の詳細を調査し、図録解説、コラム等の文章に反映させた。			
			
展覧会会場風景		特別展図録	
【実績値】 作品調査撮影件数 40件 図録刊行数 10,000部 公開講座開催 2回 展覧会連動企画「夏季講座 仏教美術へのいざない」開催 1回 論文等 3件(①～③)			
【備考】 論文等 ①西山厚「仏像に会う」(図録『みほとけのかたちー仏像に会う』掲載) ②岩井共二「聖なるもの形としての仏像」(図録『みほとけのかたちー仏像に会う』掲載) ③コラム「仏像の服装」ほか14編(図録『みほとけのかたちー仏像に会う』掲載)			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：仏像ブームと言われる昨今、仏像の魅力を伝える展覧会構築が求められていた。 独創性：仏像の種別・年代によらない仏像紹介という既存の展示にはない新規性を探求した。 発展性：仏像の多様性の紹介するためのパネル・バナー等を用いて、より明解な説明を行うなど、今後の展示法に応用可能な展示手法を確立した。 効率性：館蔵品・寄託品を中心に外部借用をせず輸送費や出陳交渉時間を節減し効率よく運営した。 継続性：名品展の展示などにおけるテーマへ応用できるため。 正確性：館蔵品・寄託品の調査研究に基づく最新の見解を展示解説や刊行物に反映させた。						

2. 定量的評価

観点	作品調査 撮影件数	図録刊行数	公開講座開催	展覧会連動企画 「夏季講座」開催	論文等	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 作品調査撮影件数：図録に必要な図版写真の撮影と調査を実施し、図録刊行に反映させた。 図録刊行数：調査撮影を反映した内容の図録を10,000部刊行することができた。 公開講座開催：展覧会内容に即した講座を開催し、定員数の受講者を得た。 展覧会連動企画「夏季講座」開催：展覧会内容に即した講座を開催し、定員数の受講者を得た。 論文等：展覧会構築のための調査研究の成果をもとに執筆した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	仏教美術及び奈良に関連する文化財を展示活動の中核に据えている当館にとって、当該ジャンル類に関連する多彩かつ魅力的な特別展の企画立案・実施は、社会からの要請がもっとも強い業務の一つである。このような認識から特別展の内容を充実させ、かつそれを学術的な裏付けを伴ったものとするべく、設定した展覧会のテーマに沿った調査研究を展開してきた。本年度は、当該年度及び次年度以降に開催予定の展覧会に関わる研究活動を作品調査中心に進め、質量両面において大きな実績を上げることが出来た。次年度以降も将来の企画展示の充実に向けて業務を継続し、着実に成果を上げていく必要がある。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	作品調査に基づく館蔵品・寄託品の計画的収集や効果的な展示など、有形文化財の保存と活用を促進するという目標に沿って、作品の基礎的かつ総合的な調査を着実に進め、成果を積極的に公表している。当該項目については確実に実績を上げることのできる体制と業務サイクルがすでに確立されており、次年度以降も同様の活動を継続し、同レベルの成果を得ることが見込まれる。

【書式B】
(様式1)

施設名 奈良国立博物館

処理番号 4543-3

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 特別展「正倉院展」に関する調査研究((5)－④)		
【事業概要】 特別展「第65回正倉院展」(25年10月26日～11月11日)に関する調査研究 毎秋恒例の「正倉院展」を最も重要な事業の一つに位置づけている奈良国立博物館の運営方針に沿って、正倉院宝物に関する調査研究活動を行い、その成果を展示や刊行物等に反映させる。			
【担当部課】	学芸部工芸考古室	【プロジェクト責任者】	室長 内藤 栄
【スタッフ】 西山厚(学芸部長)、岩田茂樹(美術室長)、内藤栄(工芸考古室長)、野尻忠(企画室長)、岩井共二(教育室長)、宮崎幹子(資料室長)、谷口耕生(保存修理指導室長)、吉澤悟(情報サービス室長)、斎木涼子(教育室員)、岩戸晶子(列品室員)、清水健(主任研究員)、北澤菜月(情報サービス室員)、山口隆介(美術室員)、永井洋之(工芸考古室員)、原瑛莉子(企画室員)、佐々木香輔(資料室員)			
【主な成果】 正倉院宝物に関連する調査研究を積極的に進め、その成果は当館が編集・刊行した展覧会図録『第65回正倉院展』に掲載されたのに加え、「正倉院展」会場での解説パネル類、新聞連載記事、講座・シンポジウムにおける口頭発表等に反映された。			
【年度実績概要】 ・「第65回正倉院展」開催に際し、同題の展覧会図録(和文及び英文)を編集・刊行した。出陳宝物調査資料の精査に基づいて各人が執筆した原稿を当館研究員全員で討議・吟味し、内容を確定した各個解説を掲載した。同図録には当館研究員の執筆した関連論考(「宝物寸描」)2篇も掲載した。会期中には新聞紙上で当館研究員執筆による宝物紹介記事を連載し、公開講座では当館研究員1名が研究成果を披露した。また当館が企画運営した正倉院学術シンポジウム2013「鑑真和上と正倉院宝物」(於：奈良県新公会堂、25年10月27日)でも研究員1名が正倉院宝物に関連する研究成果を発表し、討論に参加した。			
 「第65回正倉院展」図録			
【実績値】 展覧会等図録刊行 2冊 講座・研究会等発表回数 2回(正倉院展講座1、正倉院シンポ1) 論文等発表本数 2本(①～②)			
【備考】 論文等発表 ①谷口耕生「漆金薄絵盤(香印坐)の製作をめぐって」(図録『第65回正倉院展』掲載) ②野尻 忠「計帳手実を読む～但波吉備麻呂、四十年の歩み」(図録『第65回正倉院展』掲載)			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：正倉院宝物が一般公開される唯一の機会であり、長年にわたり毎年観覧する人も多く需要、公共性も高い。近年中国、韓国などアジア諸国からの見学者も増えている。 独創性：毎年開催されるが展示される宝物は毎年変わり、また近年テーマ性も強くなっている。正倉院宝物を鑑賞できる機会は他になく、独自性は高い。 発展性：65回を迎えたがマンネリにならないよう、展示方法の工夫、新しいファンの開拓、学校教育との連携など、種々の試みを行い、成果が上がった。 効率性：宝物の収蔵場所から当館までの距離は近く、時間的、物理的にも効率が高い。また、他の特別展に比べ学芸部全員で取り組み体勢ができていているため、業者に依存する割合が低い。 継続性：毎年秋に開催しており、学芸部職員の宝物に対する知識、研究態度、そして扱い方法の熟練度は高い。毎年来館する固定のファンは多い。 正確性：正倉院事務所が発表する基礎的な成果を展覧会や図録に反映している。図録は可能な限りの写真、データを掲載しており、学術的にも充実している。						

2. 定量的評価

観点	展覧会等 図録刊行	講座・研究会等 表等回数	論文等発表 本数			
判定	A	A	A			
判定理由 図録等刊行：開催した特別展で図録を刊行できた。 講座・研究会等発表回数：当該研究の成果を反映した口頭発表を実施することができた。 論文等発表本数：当該研究の成果を盛り込んだ文章を各種公表することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	かつて平城京がおかれた奈良には、独特の魅力に富んだ地域色豊かな文化が形成され、開花した。そこには当館が展示・調査研究の主軸としている仏教美術の枠に収まりきらない要素が、多分に含まれている。また奈良時代の日本に開花した文化の高い水準と国際性を、最も雄弁に物語る存在である正倉院宝物を、毎年恒例の「正倉院展」で展示する館として、当館は世界でも唯一無二の存在である。これら諸点に鑑み、正倉院宝物及び奈良という地域に密着した文化財の調査研究を展開し、その魅力を掘り起こして展示・刊行物等で広く紹介する活動を行ってきたが、本年度もこれまで同様、質量両面において十分な実績を挙げることができた。次年度以降も同様の業務を継続し、着実に成果を挙げていく必要がある。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	正倉院宝物や奈良という地域に密着した文化財に関する調査研究は、「仏教美術及び奈良を中心とした有形文化財の、基礎的かつ総合的な調査研究を行う」という計画の趣旨にきわめてよく適合するものであり、その成果の展示等への反映も要請度の高い業務である。本年度は恒例の正倉院展開催時の刊行物や講座・シンポジウム、各展覧会の図録等において優れた成果を公表することができ、順調に実績を挙げることができた。次年度以降も同レベルの成果を得ることができるよう、この方面における調査研究活動を継続的に実施していかなければならない。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4) 綴織當麻曼荼羅（當麻寺蔵）、信貴山縁起絵巻（朝護孫子寺蔵）の調査など、東京文化財研究所と共同で仏教美術の光学的調査研究を実施し、作品の材料・技術等の解明に寄与する。（(5)－④）		
【事業概要】 奈良国立博物館と東京文化財研究所との間で締結した協定書に基づき、両機関の共同研究として仏教美術作品の光学的調査を実施し、使用材料、製作過程等について検討するとともに、高精細デジタルコンテンツを作成する。光学的調査は、高精細フルカラー画像の作成、可視光励起による高精細蛍光画像の作成、高精細反射近赤外線画像の作成、高精細透過近赤外線画像の作成、蛍光X線による非破壊分析、を実施する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	部長 西山 厚
【スタッフ】 【奈良国立博物館学芸部】岩田茂樹(美術室長)、内藤栄(工芸考古室長)、野尻忠(企画室長)、岩井共二(教育室長)、宮崎幹子(資料室長)、谷口耕生(保存修理指導室長)、吉澤悟(情報サービス室長)、斎木涼子(教育室員)、岩戸晶子(列品室員)、清水健(主任研究員)、北澤菜月(ボランティア室員)、山口隆介(情報サービス室員)、永井洋之(工芸考古室員)、原瑛莉子(企画室員)、佐々木香輔(資料室員)、【東京文化財研究所】田中淳(企画情報部長)、綿田稔(文化財アーカイブズ研究室長)、早川泰弘(分析科学研究室長)、城野誠治(専門職員)			
【主な成果】 (1)前年度に実施した国宝 綴織當麻曼荼羅（當麻寺蔵）の調査画像データの分析を進め、重要関連作品である裏板曼荼羅（當麻寺本堂厨子安置）及び貞享本當麻曼荼羅の高精細カラー画像・近赤外線画像の撮影を実施した。 (2)大徳寺五百羅漢図の総合調査報告書の刊行に備え、京都国立博物館寄託分の大徳寺本 20 幅について追加調査を実施し、さらに画絹組織及び各幅の主題に関する検討会を重ねた。			
【年度実績概要】 (1)前年度に実施した国宝 綴織當麻曼荼羅（奈良・當麻寺蔵）の調査で得られた画像データの詳細な検討を加えるとともに、宮内庁正倉院事務所染織担当研究員と綴織當麻曼荼羅原本の再調査を実施してその綴織組織の現状確認を行った。併せて関連重要作品である當麻寺本堂安置の裏板曼荼羅及び貞享本當麻曼荼羅について、高精細カラー画像及び近赤外線画像の撮影を実施した。 (2)平成 23 年度に刊行した『大徳寺伝来五百羅漢図 銘文調査報告書』の成果を踏まえ、大徳寺五百羅漢図に関する総合調査報告書の年度内刊行を目指して研究会を重ねた。さらに同報告書に掲載するために東京文化財研究所のカメラマンとともに大徳寺五百羅漢図のうち京都国立博物館寄託分の 20 幅について追加調査・撮影を実施した。さらに画絹組織の特色を明らかにするために、新たに撮影した画絹の顕微鏡写真について検討を重ね、併せて各幅の絵画技法や画題・出典など美術史的立場からの研究会も実施した。			
高精細デジタルカメラを用いた 大徳寺五百羅漢図撮影（25 年 7 月 3 日於京博）			
【実績値】 調査回数 4 回：25 年 4 月 27 日、5 月 29 日、7 月 3 日、10 月 9 日 調査作品数 3 件 22 点： 国宝 綴織當麻曼荼羅（當麻寺蔵）1 幅 裏板曼荼羅（當麻寺蔵）1 面 五百羅漢図（大徳寺蔵）20 幅 研究会開催件数 4 回： 奈良国立博物館で 25 年 7 月 22 日、12 月 21 日 東京文化財研究所で 25 年 8 月 23 日、26 年 1 月 12 日			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性:調査成果を特別展の展示内容や文化庁復原模写事業等に着実に反映させることができた。 独創性:可視光励起による蛍光画像撮影等、文化財への応用が進んでいない最新の光学機器を用いた調査を実施した。 発展性:仏教絵画における顔料・絵画技法の解明を進めるため、光学的調査で得られた基礎データを蓄積した。 効率性:当初計画どおり綴織当麻曼荼羅及びその重要関連作品である裏板曼荼羅の調査も年度内に実施することができた。 継続性:東京文化財研究所と締結した協定に基づき、平成17年度から継続的に調査を実施している。 正確性:最新の光学機器を用いてデータを収集し、得られた成果をもとに検討会を重ねて報告書作成の準備を進めた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査作品数	研究会開催件数			
判定	A	A	A			
判定理由 調査回数 : 計画的に4回・4日間にわたる調査を実施した。(目標:3~4回程度) 調査作品数:日本古代及び中国宋代仏教美術を代表する文化財3件について調査を実施した。(目標:2~3件) 研究会開催件数:東京と奈良でそれぞれ研究会を実施し、収集データの検討を重ねた。(目標:2~3回)						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本年度は、前年度から調査を進めてきた当麻寺所蔵の国宝綴織当麻曼荼羅について、関連作品と併せて継続的な調査を実施することができた。とりわけ最新鋭の光学機器を用いた調査の実施により、従来は不明だった文化財の材質や構造を明らかにすることができ、また文化財の保存・修理を将来行う上での指針となる詳細な現状記録を残すことができた。また、共同研究のメンバー以外にも当該作品を総合的に評価するために外部の研究者を招聘して調査を実施するとともに、調査によって得られたデータをもとに研究会を行った。特に本年度は、高精細カラー画像や近赤外線画像、顕微鏡写真などを用いて綴織当麻曼荼羅及び関連作品の綴織組織の分析を中心に実施し、基礎的データの収集に努めたが、次年度にはさらに追加調査を重ねていくことで分析の精度を高め、報告書の刊行につなげた。また大徳寺五百羅漢図の追加調査を実施して、当初の計画どおり年度内を目指して同五百羅漢図の総合調査報告書の刊行準備を進めることができた。なお本年度については、調査前・調査後の検討会を綿密に行った結果、従来は1週間程度かかっていた1回あたりの調査実施期間を1日程度に圧縮して、スムーズな日程調整を実現し、作品自体への負担を軽減することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業は、その進捗度、従来の水準を維持しつつ比較的堅調に実現できたと考える。 調査研究については、今後もこのペースを維持しつつ、報告書・目録作成やデータベースの公開に力を注ぎたい。

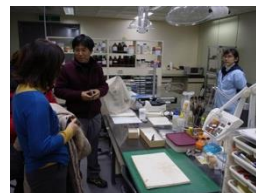
【書式B】
(様式1)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-1

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 日本とアジア諸国との文化交流に関する調査研究((5)－⑤)		
【事業概要】 当館がコンセプトに掲げているアジアとの交流について、関係諸国とのさまざまな形での研究活動を進め、これを展覧会や研究報告の形などで示していく。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	課長 臺信祐爾
【スタッフ】 藤田励夫（前博物館科学課保存修復室長）、原田あゆみ（企画課特別展室主任研究員）、赤司善彦（展示課長）、渡部史之（博物館科学課アソシエイトフェロー）、遠藤啓介（展示課研究員）、望月規史（文化財課アソシエイトフェロー）、川畑憲子（企画課文化交流展室主任研究員）、市元壘（企画課特別展室主任研究員）、末兼俊彦（京都国立博物館研究員）、猪熊兼樹（東京国立博物館研究員）、山田均（名桜大学国際学群教授）、常松幹雄（福岡市経済観光文化局埋蔵文化財調査課調査第1係長）			
【主な成果】 韓国国立公州博物館との学術交流協定に基づき、当館研究員2名を派遣し、木浦・羅州・公州、ソウルの遺跡・博物館の調査を実施した。韓国から3名を日本に招聘し、共同調査を実施した。 タイ王国文化省芸術局の協力を得て、仏教美術・歴史・工芸・民族分野の現地調査と調査報告会をタイで実施するとともに、我が国江戸時代の堺市に伝来した仏画などに関する国内調査成果をタイ側と共有した。			
【年度実績概要】 ・韓国国立公州博物館との協定に基づく調査では、百済の文化に関連する遺物の調査を実施し2名が参加した。この調査は26年に予定されている「百済と古代日本」展の予備調査にも位置づけられるものである。なお国立公州博物館からは3名を招聘し、我が国において百済由来の古墳出土資料の調査を行った。また、韓国国立中央博物館の研究員2名を招聘し、福岡県船原古墳の出土品を共同で調査した。 ・タイ王国文科省芸術局の協力を得て、王室博物館、芸術局収蔵庫、バンコク国立博物館、バンコク及び近郊のプライベートコレクションの調査を実施することができたのは特筆すべき成果である。 ・日タイの研究者の連携を深めつつ、研究成果を共有することができた。			
【実績値】 調査回数 10回（海外：8回 国内：2回） 研究員海外派遣数 延べ17名 研究員受入数 延べ13名 研究報告回数 4回（海外：3回 国内：1回）			
【備考】			



韓国公州博保存処理施設における意見交換

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	S	A	A		
判定理由 適時性：近々予定されている特別展の内容検討のために、研究員が自由に意見交換することができた。 独創性：国際的な視野に立った共同調査は、博物館レベルとしては他にあまり例がなく先駆的な活動であるため。 発展性：研究の成果を展覧会という形で広く一般に示すことによって、両国の文化交流が深められる。 継続性：開館前後から、展覧会開催を前提として行ってきたプロジェクトである。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	研究員海外派遣数	研究員受入数	研究報告回数		
判定	A	A	A	A		
判定理由 調査回数：順調に回数を重ねている。 研究員海外派遣数：当該分野の専門的研究者を十分に派遣している。 研究員受入数：当該分野の意見交換に十分な研究員を受け入れている。 研究報告回数：研究成果を広く一般に公開している。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	計画に基づき、順調な進行状況にある。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	現地研究者との協議を重ねながら、順調に予定を消化している。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2)-1 特別展「中国 王朝の至宝」に関する調査研究((5)-⑤)		
【事業概要】 特別展「中国 王朝の至宝」(25年7月9日～9月16日)に関する調査研究 夏王朝から宋時代にわたる歴史と文化について、それぞれの時期に栄えた二つの王都や地域に着目し、その理解促進を図るとともに、いわゆる「中国史」における新たな視座を構築する。本調査は特別展「中国 王朝の至宝」に関連するものであり、特別展開催年にあたる本年を研究最終年とし、その成果は本特別展及び関連講演会などで公開される予定である。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	特別展室主任研究員 市元壘
【スタッフ】 谷豊信(学芸部長)			
【主な成果】 25年7月9日から9月16日かけて、特別展「中国 王朝の至宝」を開催した。いわゆる「中国王朝」について、これまでの画一的な中原王朝史観の見直しを図るべく幅広い地域から資料を収集し、一堂に会する機会を設けたことで、「中国王朝」についてはより幅広い視野で議論すべきことがより明瞭となった。会期中は、講演会や新聞紙面連載を行い、個別の作品ならびに王朝の流れに関して発表した。また、会期が夏休み期間中であつたこともあり、子ども向けのワークショップの開催やガイドブックの作成に力をいれ、幅広い層による王朝の至宝の理解促進につとめた。			
【年度実績概要】 ・25年7月13日(土)に当館ミュージアムホールを会場として谷学芸部長により「中国王朝 栄華を極めたのは誰だ」と題した講演会を開催した。本講演は、谷が図録でも言及している中国史を通底する意匠について、展示作品を中心に紹介するものであり、聴講者の好評を得た。 ・25年7月20日(土)には市元壘が「中国 王朝の至宝を10倍楽しく見る方法」と題して講演を行った。従来の通史的な流れに拘泥せずに文化の継承と変容のありかたについて紹介するものであり、聴講者の好評を得た。 ・25年8月3日(土)に当館ミュージアムホールを会場として稲畑耕一郎早稲田大学教授による講演会「皇帝たちの中国―ファースト・エンペラーからラスト・エンペラーまで―」を開催し、皇帝と王朝の関係についての講演を行った。聴講を事前申込み制にしたところ予測を上回る応募数であり、当該テーマの関心の高さがうかがえた。 ・夏休み期間中ということもあり、子ども向けのワークショップ「跪射俑に変身～段ボールで鎧作り～」の開催やガイドブック「夏休みの朋友」の作成など、研究成果をより平易なかたちで公開することができた。 ・本研究の成果公開をかねた特別展「中国 王朝の至宝」では、従来の中国史に対する認識として大半を占めていた、いわば駅伝でたすきをつなぐような王朝交代劇を発展的に検証することで、同一時期における複数地域の相互作用の重要性を明らかにした。またそれを展示で示しえたという点で極めて意義深いものとなった。			
【実績値】 展示への反映 1回 特別展「中国 王朝の至宝」 25年7月9日～9月16日 (62日間) 図録 1件 特別展図録「中国 王朝の至宝」			
【備考】			



ワークショップ風景

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-2-1

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：中国に対する関心が高まっている時期に開催した。 独創性：3次元プリンタを用いた展示補助品など、当館ならではの取り組みを盛り込んだ。 発展性：これまでの調査研究をもとに、展示手法や教育普及の面で新たな取り組みを実施した。 効率性：限られた予算のなかで効率的に研究成果を発信した。 継続性：中国の各地から文物を集め展示したことで、今後研究を深めていく上での足がかりが各所にできた。 正確性：それぞれの文物について、制作時期など十分に考慮して展示に反映させることができた。						

2. 定量的評価

観点	展示への反映	図録				
判定	A	A				
判定理由 展示への反映：計画通り、実施することができた。 図録：予定通り刊行することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	来館者数の面で当初の予測を上回り、研究成果を十分に還元することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査研究は、中期計画に沿うものであり、当初の計画通り実施することができた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2)-2 特別展「尾張徳川家の至宝」に関する調査研究((5)-(5))		
【事業概要】 特別展「尾張徳川家の至宝展」(25年10月12日～12月8日)に関する調査研究 特別展「尾張徳川家の至宝展」の開催に向けた準備として、徳川家に伝来した書跡、絵画、漆工、金工、染織、陶磁器等にわたる作品の調査研究を行った。国宝「源氏物語絵巻」をはじめとする尾張徳川家に伝わった約1万数千点の作品は、公益財団法人徳川黎明会が設立した徳川美術館が管理している。このプロジェクトでは、徳川美術館の全面的な協力のもと、実物作品の調査を行う。			
【担当部課】	展示課	【プロジェクト責任者】	主任研究員 酒井芳司
【スタッフ】 荒木和憲(文化財課資料登録室主任研究員)、川畑憲子(企画課特別展室主任研究員)、鷺頭桂(企画課特別展室研究員)			
【主な成果】 尾張徳川家は、江戸時代に徳川将軍家に次ぐ格式を誇った最高の大名家である。従って尾張徳川家に伝来した道具類は、江戸時代における大名文化を伝える品々のなかでも、最高水準の作品が数多く伝えられている。このプロジェクトでは徳川美術館の協力を得て、所蔵する作品の概要を把握し、その水準の高さを認識することができたとともに、その成果をふまえて尾張徳川家に伝来した作品を一堂に紹介する機会につなげることができた。			
【年度実績概要】 - 数ある江戸時代の大名家のなかで最高の家格を誇った尾張徳川家には、徳川家康の遺品を頂点とする格調高い大名道具が数多く伝来した。本展は徳川美術館の協力を得て、出品件数226件という、まとまった形で最高水準の大名文化の遺品を見ることができるまたとない機会をつくることができた。 - 徳川家康の遺品には、足利将軍家、織田信長、豊臣秀吉の遺愛の品が多く含まれている。この展覧会では一般に広く知られた天下人が愛した名品の数々を紹介し、その人物の息吹を来館者に感じていただく機会とすることができた。 - 徳川美術館の収蔵品を代表する二つの国宝、源氏物語絵巻と初音の調度は徳川美術館でも期間限定でしか展示されない名品である。この一般に関心も高い二件の国宝を、期間を限定して特別に公開することができた。なかでも源氏物語絵巻は徳川美術館でも帖をかえながら、毎年1週間しか公開されない作品である。これを2週間ずつ、計4週間公開できたことは、本作品のすばらしさを実物によって広く知っていただく機会となった。 25年8月4日 徳川美術館にて展示会場図面検討に係る作品調査、25年10月1日～5日 徳川美術館にて作品借用作業に係る作品調査、25年12月13日～14日 徳川美術館にて作品返却作業に係る作品調査を行った。			
【実績値】 調査回数 3回 図録 1冊 「徳川美術館 尾張徳川家の至宝」 展示への反映 1回 特別展「尾張徳川家の至宝」展 25年10月12日～12月8日(50日間) (参考値) 出品件数 226件			
【備考】			



徳川美術館全景

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：九州ではみることが難しい国宝を期間限定で特別公開することにつながられたため。 独創性：特別展開催に伴い最高水準の大名文化の遺品を調査研究できたため。 発展性：名品を伝える大名家は他にも存在するので、今回の調査で得た経験は今後活用することができるため。 効率性：企画段階から徳川美術館と協働で作業を進めたので、効率よく展覧会を実施できたため。 継続性：開館以来、特別公開「初音の調度」で協力を得ていたが、さらに今後の協力体制を強めることができたため。 正確性：書跡、絵画、漆工、金工、染織、陶磁器等にわたる作品を網羅的に調査することができたため。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	図録	展示への反映			
判定	A	A	A			
判定理由 調査回数：必要にして十分な回数の調査ができたため。 図録：展覧会開催に必要な図録1冊を刊行できたため。 展示への反映：計画通り実施することができたため。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	尾張徳川家の知名度や出品作品の質の高さにより、十分な調査成果の蓄積と展覧会の動員につながることができたが、特別展開催に伴い最高水準の大名文化の遺品を調査研究できたため。次年度以降、さらに独自の展覧会につながる調査研究をしつつ、かつ来館者も確保できるようにすることが課題である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	徳川展準備のため、質の高い文化財を調査及び研究することができたため。次年度以降、今後ともこのような調査研究体制の安定的な継続と充実が、質が高く、かつ来館者動員につながる展覧会の開催に資することになると考える。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2)-3 特別展「国宝 大神社展」に関する調査研究((5)-(5))
【事業概要】 特別展「国宝 大神社展」(26年1月15日～3月9日)に関する調査研究 特別展「国宝 大神社展」は、神社本庁をはじめ日本全国の神社の全面的な協力を得て、神社の宝物や日本の神々に関する文化財を総合的に展覧するものである。本調査は特別展「国宝 大神社展」に関連するものであり、特別展開催年にあたる本年を本事業の最終年とし、その成果を本特別展及び関連講演会などで公開・還元する。	
【担当部課】	展示課
【プロジェクト責任者】	主任研究員 楠井隆志
【スタッフ】 臺信祐爾(企画課長)、富坂賢(文化財課長)、赤司善彦(展示課長)、今津節生(博物館科学課長)、秋山純子(博物館科学課環境保全室研究員)、志賀智史(博物館科学課保存修復室主任研究員)、渡部史之(博物館科学課アソシエイトフェロー)、河野一隆(企画課文化交流展室長)、鳥越俊行(文化財課資料登録室主任研究員)、原田あゆみ(企画課特別展室主任研究員)、川畑憲子(企画課文化交流展室主任研究員)、森實久美子(企画課特別展室研究員)、鷺頭桂(企画課特別展室研究員)、畑靖紀(文化財課資料管理室主任研究員)、丸山猶計(文化財課資料登録室主任研究員)、望月規史(文化財課アソシエイトフェロー)、進村真之(展示課主任研究員)、酒井芳司(展示課主任研究員)、遠藤啓介(展示課研究員)、岸本圭(展示課主任研究員)	
【主な成果】 26年1月15日から3月9日かけて、特別展「国宝 大神社展」を開催した。奈良・手向山八幡宮の錦貼神輿など福岡会場のみ出陳作品については、事前に現地調査を実施して輸送方法や展示手法などの検討・研究に役立てた。 会期中、講演会や新聞紙面における作品紹介記事の連載を行った。また関連事業として、街で見かけた狛犬をWEB投稿してもらう「狛犬目撃情報」企画の実施、会場内での教育普及企画の展開を行い、幅広い層に対する本展の集客及び理解促進に努めた。	
【年度実績概要】 ・25年4月から6月にかけて本展東京展が開催されたが、その展示・撤収作業に可能な限り立会し、作品の調査はもちろん保存状態の事前把握に努め、福岡展のための安全な作品の借用・輸送・展示に活かすことができた。 ・展示作品のうち福岡・宮地嶽神社所蔵の「金銅装頭椎太刀」については、2年前より当館にて復元模造制作にむけての調査研究・制作事業を実施してきたが、成果品を本展会場に展示し、展示品の理解促進に活用した。また、その成果については、26年2月9日福岡市内で開催された地域講演会「よみがえった宮地嶽古墳黄金の太刀」(展示課長赤司善彦)にて公開し、市民にも還元・披露した。 ・関連事業として、街で見かけた狛犬をWEB投稿してもらう「狛犬目撃情報」企画の実施し、投稿情報はウェブサイト上だけでなく、館内でも紹介した。また、会場内ではおみくじに倣った「神社まめちしき」の配布を行い、展示作品と関連のある豆知識を提供し、幅広い層に対する本展の集客及び神社文化の理解促進に努めた。	
 福岡・宮地嶽神社所蔵「金銅装頭椎太刀」復元模造の展示風景  教育普及企画「おみくじ風まめちしき」の配布  WEB投稿企画「狛犬目撃情報」の館内における紹介	
【実績値】 調査回数 15回 奈良・手向山八幡宮「錦貼神輿」現地調査および輸送方法の検討 25年5月21日、東京国立博物館における作品調査 25年5月7日、6月3日～6日、福岡・宮地嶽神社所蔵「金銅装頭椎太刀」復元模造作成のための研究会開催、会期中の作品調査(所蔵者からの依頼も含む) 展示への反映 1回 特別展「国宝 大神社展」26年1月15日～3月9日(47日間) 図録 1件 特別展図録「国宝 大神社展」(東京国立博物館と共同執筆・編集) 講演会等 6回 特別講演会1回、連続講座2回、地域講演会3回	
【備考】 論文 ① 酒井芳司「神話と『古事記』『日本書紀』」(特別展図録「国宝 大神社展」各論 25年4月9日) ② 楠井隆志「『国宝大神社展』福岡展へのいざなひ」(『月刊若木』第774号 25年12月1日)	

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-2-3

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	S	A	S	A	S	
判定理由 適時性：伊勢神宮式年遷宮直後の開催であり、神社に対する関心が高まっている時期に開催した。 独創性：九州島内からの出品を増やすなど、地域に立脚した当館ならではの取り組みを盛り込んだ。 発展性：これまでの調査研究をもとに、展示手法や教育普及の面で新たな取り組みを実施した。 効率性：限られた予算のなかで効率的に研究成果を発信した。 継続性：各地の神社との信頼関係を構築することができ、今後の神社関係文化財の研究を深めていく足掛かりとすることができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	展示への反映	図録	講演会等		
判定	A	A	A	A		
判定理由 調査回数：計画以上に実施することができた。またその成果を展示という形で市民に公開・還元した。 展示への反映：計画通り、実施することができた。 図録：予定通り刊行することができた。 講演会：計画通り実施し、大きな反響を得た。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	計画通り調査を実施することができ、展覧会にその成果を十分に反映させることができた。また、図録・各種講演会・イベント等によりその成果を広く公表することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り調査が実施され、当初の目標を達成することができた。将来同様な展覧会を企画するにあたって今回の調査研究の成果や取り組みを生かしていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2)-4 特別展「華麗なる宮廷文化 近衛家の国宝展」に関する調査研究((5)-⑤)		
【事業概要】 特別展「華麗なる宮廷文化 近衛家の国宝展」(26 年 4 月 15 日～6 月 8 日開催予定)に関する調査研究 特別展「華麗なる宮廷文化 近衛家の国宝展」の開催に向けた準備として、近衛家に伝来した書跡、絵画、漆工、金工、染織、彫刻、陶磁器等にわたる作品の調査研究を行う。ユネスコ世界記憶遺産に登録された国宝「御堂関白記」をはじめとする近衛家に伝わった約 20 万点の作品は、公益財団法人陽明文庫が管理しているが、通常、一般には公開されていない。このプロジェクトでは、陽明文庫の全面的な協力のもと、実物作品の調査、写真撮影などを行う。			
【担当部課】	展示課	【プロジェクト責任者】	展示調整室主任研究員 酒井芳司
【スタッフ】 丸山猶計(文化財課資料登録室主任研究員)、荒木和憲(文化財課資料登録室主任研究員)、市元壘(企画課特別展室主任研究員)、渡部史之(博物館科学課アソシエイトフェロー)			
【主な成果】 摂関政治の全盛期を築いた藤原道長自筆の日記である国宝「御堂関白記」の道長自筆本 14 巻のうち、6 巻をユネスコ世界記憶遺産登録後、初めて九州で公開することが実現した。近衛家は摂政・関白として国政を主導してきた藤原氏の嫡流であり、このために「御堂関白記」も近衛家に伝わった。この他、江戸時代の近衛家を代表する文化人である信尹と家熙の業績についても詳しく調査した。			
【年度実績概要】 ・国宝「御堂関白記」を 25 年 6 月のユネスコ世界記憶遺産登録後、初めて九州で公開することが実現し、摂関政治の全盛期を築いた道長自筆の日記によって、摂関政治の実態や平安時代以来の宮廷文化を広く一般に紹介する機会につなげることができた。 ・近衛家は皇室とのゆかりが深く、伝来品の中には、道長の外孫・後朱雀天皇から幕末の孝明天皇にいたる歴代天皇自筆の書状など(宸翰)が数多く存在する。天皇は宮廷の頂点にあって、宮廷文化を主導しており、その筆跡は「書の王者」とも呼ばれる。今回の展覧会では、気品あふれる天皇の書を九州で初めてまとまって紹介することが可能となった。 ・近衛家の伝来品には、天皇の書ばかりではなく、三蹟と呼ばれた平安時代の能書、小野東風、藤原佐理、藤原行成の作品と伝えられる筆跡があり、また和歌を大成した藤原定家の書も存在する。これら三蹟や定家の書を数多く紹介することも、本展覧会において実現させることが可能となった。 ・近衛家の歴代当主には、その時代を代表する文化人を多く輩出した。なかでも、寛永の三筆の一人として知られる信尹は書の世界に桃山時代らしい新風を吹き込んだ。また家熙は伝来の品を中心に古典を研究し、伝来品を優れた美意識によって修復したり、模写を作成したりして、保存に尽力した。この二人の業績を明らかにできた。 ・25 年 12 月 20 日 陽明文庫にて書跡・絵画作品調査、26 年 2 月 4 日 陽明文庫にて写真撮影に伴い、歴史資料・彫刻作品調査、26 年 3 月 7 日 陽明文庫にて漆工・染織作品調査を行った。			
【実績値】 調査回数 3 回 (参考値) 展覧会への陽明文庫所蔵品の出品件数 105 件(他機関所蔵品を含めると 114 件)			
【備考】			



陽明文庫における調査風景

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：25年6月にユネスコ世界記憶遺産に登録された国宝御堂関白記を特別公開することにつながられたため。 独創性：通常一般に公開されていない作品を特別展に伴い調査研究をできたため。 発展性：名品を伝える公家の家は他にも存在するので、今回の調査で得た経験は今後に活用することができるため。 効率性：企画段階から陽明文庫と協働で作業を進めたので、効率よく展覧会の準備を行えたため。 継続性：質の高い伝来の名品を数多く調査して展示する企画につなげることができたため。 正確性：書跡、絵画、漆工、金工、染織、陶磁器等にわたる作品を網羅的に調査することができたため。						

2. 定量的評価

観点	調査回数					
判定	A					
判定理由 調査回数：必要にして十分な回数の調査ができたため。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	近衛家伝来の作品の質の高さにより、十分な調査成果の蓄積ができ、通常一般に公開されていない作品を特別展に伴い調査研究できたため。次年度以降、独自の展覧会を企画しつつ、かつ来館者も確保できるようにすることが課題である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	近衛展準備のため、質の高い文化財を調査および研究することができたため。次年度以降、今後ともこのような調査研究体制の安定的な継続と充実が、質が高く、かつ来館者動員につながる展覧会の開催に資することになると考える。

【書式B】
(様式1)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-2-5

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2)-5 特別展「クリーブランド美術館展－名画でたどる日本の美」に関する調査研究((5)-⑤)		
【事業概要】 特別展「クリーブランド美術館展－名画でたどる日本の美」(26年7月8日～8月31日開催予定)に関する調査研究 平成26年度開催の特別展覧会「クリーブランド美術館展－名画でたどる日本の美」にむけて、作品の出品交渉、出品候補作品の調査研究及びクリーブランド美術館の強みである教育普及部門のヒアリングを行う。 また、その成果を公開するものとして、特別展図録を制作する。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	特別展室研究員 鷲頭桂
【スタッフ】 畑靖紀(文化財課資料管理室主任研究員)、西島亜木子(企画課アソシエイトフェロー)、森實久美子(企画課特別展室研究員)			
【主な成果】 (1) 特別展覧会「クリーブランド美術館展－名画でたどる日本の美」の作品を確定するとともに、展示・作品解説・各論執筆にむけた作品の調査研究(約60件)を実施できた。また、作品の撮影を実施した。 (2) 特別展図録を制作した。			
【年度実績概要】 (1) ・クリーブランド美術館の収蔵庫、調査室、修復施設にて、出陳候補作品(約60件)の調査研究、撮影を行った(2名、3日間)。 ・クリーブランド美術館のエデュケーション事業の視察を行った(1名、3日間)。 (2) ・特別展「クリーブランド美術館展－名画でたどる日本の美」の図録執筆、編集を行った(3名)。(26年1月15日発行)			
			
調査風景			
【実績値】 調査回数 1回 研究者海外派遣回数 1回 調査作品件数 約60件 報告書・図録等 1件 「クリーブランド美術館展－名画でたどる日本の美」(26年1月15日発行)			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-2-5

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：クリーブランド美術館のコレクションが九州でまとまって公開されるのは、今回が初めてである。 独創性：準備中のクリーブランド美術館展は、九州で初めて公開される作品を多く含む。 発展性：クリーブランド美術館の作品が一堂に介することで、在米の優れた日本美術に一般の関心を向けることができる。 効率性：東京国立博物館、クリーブランド美術館との情報共有により、順調に進んでいる。 継続性：質量ともに多くの資料を収集できた。 正確性：クリーブランド美術館の所蔵品について正確なデータを得ることができ、展覧会に向けた準備を整えた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	研究者海外派遣回数	調査作品件数	報告書・図録		
判定	A	A	A	A		
判定理由 調査回数／研究者海外派遣回数： 計画通り、クリーブランド美術館を訪問し、出品交渉、出陳作品の確定、作品調査を行うことができた。 調査作品件数：多くの文化財の調査と写真撮影を行うことができた。 報告書・図録：調査研究により新知見を得ることができ、その成果を図録に反映することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	展覧会準備のため、十分な資料調査ができた。意義ある展覧会開催が期待できる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	展覧会開催の準備に必要な資料は、ほぼ8割以上は収集できた。次年度の「クリーブランド美術館展―名画でたどる日本の美」を開催するに十分である。

【書式B】
(様式1)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-2-6

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2)-6 特別展「台北 國立故宮博物院－神品至宝－」展に関する調査研究((5)-⑤)		
【事業概要】 特別展「台北 國立故宮博物院－神品至宝－」(26年10月7日～26年11月30日開催予定)に関する調査研究 平成26年度開催の特別展「台北 國立故宮博物院－神品至宝－」展にむけて、國立故宮博物院(台北)が所蔵する資料を調査研究する。			
【担当部課】	学芸部文化財課	【プロジェクト責任者】	資料管理室主任研究員 畑靖紀
【スタッフ】 谷豊信(学芸部長)、原田あゆみ(企画課特別展室主任研究員)、丸山猶計(文化財課資料登録室主任研究員)、川畑憲子(企画課文化交流展室主任研究員)、遠藤啓介(展示課研究員)、市元壘(企画課特別展室主任研究員)、森實久美子(企画課特別展室研究員)、望月規史(文化財課アソシエイトフェロー)			
【主な成果】 國立故宮博物院を訪問して、25年11月28日、12月16日から19日まで、及び26年1月20日から24日まで、展覧会について協議した。また、特別展への出品資料を選定し、それらの実見調査、計測等を実施し、展覧会図録や会場解説執筆のための情報を収集できた。			
【年度実績概要】 ・國立故宮博物院において下記の実見調査、計測等を実施した。 染織分野：25年11月28日(参加者1名) 絵画・書跡・典籍分野：25年12月16日～19日(参加者2名) 玉器・青銅器・漆工・陶磁・文房具分野： 26年1月20日～24日(参加者3名) 上記分野の出品作品について、制作年代や作者、材質技法、表現様式などに関する具体的な知見を得ることができ、展覧会の内容・構成に関して有益な調査結果を得ることができた。			
			
出品作品の一つ 青磁輪花碗			
【実績値】 調査回数 3回 調査件数 約80件 収集資料数 20件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4554-2-6

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	C	A	A
判定理由 適時性：美術品補償制度の整備に伴い実現可能となった展覧会であり、各界の期待が高い。 独創性：国立故宮博物院の展覧会は、日本のみならず、アジアでは初めての開催である。 発展性：今後の当館と国立故宮博物院との良好な関係を築く上でも有益である。 効率性：国立故宮博物院との交渉は初めてのことが多く、時間は要するため。 継続性：質量ともに多くの資料を収集できた。 正確性：国立故宮博物院所蔵の資料の多くは調査不可であるが、それらも含めて相当数の資料を調査できた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	調査件数	資料収集数			
判定	A	A	A			
判定理由 調査回数：計画通りに3度の調査を実施し、多くの資料を収集した。 調査件数：調査の受入が制限されているなか、事前協議で許可された以上の作品を実見調査できた。 資料収集数：展覧会図録の執筆に必要な資料を計画通りに収集できた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	展覧会準備のため、平成25年度中に計画していた資料のうちほぼ9割以上を調査できたので、意義ある展覧会開催が期待できる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	平成25年度中に収集を計画していた展覧会関係資料は、ほぼ予定通りに収集できた。次年度の特別展「台北 国立故宮博物院―神品至宝―」展を開催するために本年度分は十分な準備ができた。

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4561-1

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	正確性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：作品の活用と保護の観点が重要視される今日、展示環境の安定化はその具体的な解決策を探る研究として効果が高いため。 独創性：実際の展覧会場を対象にして、施設の管理運営と保存科学的知見を融合して、具体的な解決策を提示できたことは優れた成果であるため。 発展性：今後の同様な課題に対して成果の活用が大いに期待できるため。 効率性：臨床保存における調査診断及び予防保存の専門家が役割を明確に発揮して行った研究であるため。 正確性：分析及び環境の専門家がそれぞれの立場から研究に参画し、的確なデータを得ることができた。						

2. 定量的評価

観点	研究発表件数					
判定	A					
判定理由 研究発表件数：予定通り、成果の波及効果が期待される学術団体において公表することができた。						

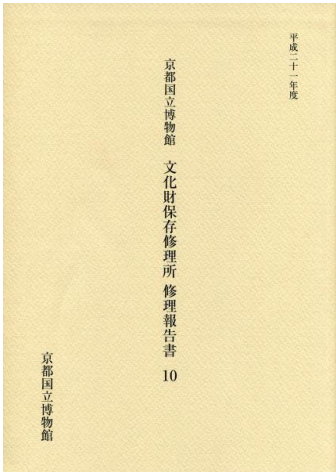
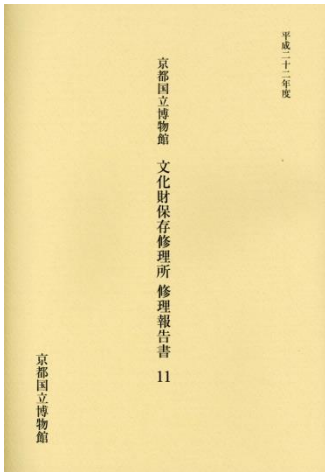
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	実証実験を行うことで得られた客観的データを詳細に分析することで、従来から存在する問題点について具体的な解決の方向を見出したものであるが、基礎研究にとどまらず、実用的側面に大きく寄与する成果が得られた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施されており、当該年度計画を100%達成。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進。		
プロジェクト名称	1) 修復文化財に関する資料収集及び調査研究 ((5) -⑥)		
【事業概要】 文化財保存修理所において修復が行われている文化財に関して情報を収集する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 浅湊 毅
【スタッフ】 大原嘉豊（企画室主任研究員）、伊東史朗（和歌山県立博物館長・調査員）			
【主な成果】 平成 25 年度に新規搬入された作品の「修理計画書（設計書）」に基づき、データを入力し、平成 24 年度に完成、搬出した作品については、各工房より提出された「修理解説書（報告書）」に基づき、データを追加、更新した。また、平成 21・22 年度に修理が完成した作品に関する報告を『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』第 10・11 号に掲載し、修理時に発見された銘文の平成 21 年度 13 件、平成 22 年度 17 件を「銘文集成」として報告した。			
【年度実績概要】 - 文化財保存修理所の工房に搬入される新規修理作品に関して、データを収集し、データベースに登録した。 - 過去の修理作品に関してもデータの更新、整理作業を行った。 - 毎月行っている文化財保存修理における修理工房の巡回時のほか、適宜工房において、修理中にしか得ることの出来ない情報（作品の構造や使用材料、内部納入品や銘文など）を収集し、分析を行った。 『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』第 10・11 号に掲載する平成 21・22 年度修理作品のデータを整理するとともに同年の修理で発見された銘文の解説作業を行った。  修理報告書 10  修理報告書 11			
【実績値】 - データ収集件数 101 件 平成 25 年度は 101 件の新規修復文化財の搬入があり、これらの作品に関してデータを収集するとともに、修復データベースへの登録を行った。 - 修復データベースの追加更新件数 1920 件 過去のデータに関して 1920 回追加、更新を行った。 - 調査回数 11 回 修理所の巡回を 11 回行った。その他、新発見の事実や銘文の調査を適宜行った。 - 報告書 2 冊 平成 25 年 9 月に『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』第 10 号（平成 21 年度分）、平成 26 年 3 月に同報告書第 11 号（平成 22 年度分）を発行した。			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4562-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：文化財の修復は社会的関心の高い問題であり、収集したデータはその貴重な資料となっているため。 独創性：修理作品を館の寄託品として受け入れ、修理によって得られたデータを各研究員の間で共有しているため。 発展性：修理データをデジタル化して、修復データベースへ登録し、将来の公開に備えているため。 効率性：データをデジタル化することで、修理作品の情報検索を容易にしているため。 継続性：収集したデータにより『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』を継続的に発行しているため。 正確性：報告書の発行に際し、データの正確性について再確認をしているため。						

2. 定量的評価

観点	データ収集 件数	データ追加 更新件数	調査回数	報告書		
判定	A	A	A	A		
判定理由 データ収集件数：修理作品に関するデータの蓄積は、順調である。 データ追加更新件数：修復データベースへの追加更新は、順調である。 調査回数：修理所の巡回・調査回数は、順調である。 報告書：『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』は第10・11号の2冊を発行し、順調である。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財保存修理所で行われる修理作品から得られる情報を収集・登録でき、またその成果を報告書に反映した。 よって修復文化財に関する情報の収集を適切に行い得ることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	修復文化財に関する資料収集及び調査研究を予定通り進めることができた。本年度に収集された情報をさらに充実させるため、他年度と関連づけながら、さらなる情報の収集を図りたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進。		
プロジェクト名称	2) 文化財の保存・修復に関する調査研究 ((5) -⑥)		
【事業概要】 京都国立博物館所蔵「病草子」は、平成23年度朝日新聞文化財団の助成を受け、修理事業を実施する(4ヵ年事業)。 本修理事業に伴って、修理受託者である岡墨光堂と協力し、修理品についての各種光学的調査と精密分析を実施し、修理中にしか得ることのできない貴重な調査結果を得ることを目的とする。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長 村上 隆
【スタッフ】 鬼原俊枝(列品管理室長)、浅湊毅(保存修理室長)			
【主な成果】 (1) 「病草子」(紙本着色／平安時代後期／国宝)の修理に伴って、各種の光学調査と紙質分析を実施し、作品のオリジナルの状態、技法材料や、修理履歴などに関わるさまざまな情報を得ることができた。 (2) 修理中にしかできない調査・分析によって得られた結果は、本修理品を含め、文化財の調査研究・保存修復の現場での幅広い活用できる貴重な情報である。			
【年度実績概要】 京都国立博物館所蔵「病草子」の修理に伴って (1) ・赤外撮影と透過赤外撮影を行い、下書きからの描線の変化を確認することができた。 ・特に、透過赤外撮影によって、人物の顔の表情や手の位置など、下書きからの変化が大きな箇所が明らかとなった。(挿図参照) (2) ・透過光による料紙の調査・撮影を行い、本紙料紙はすべて厚みにむらがあり、料紙は過去に修理のため相剥ぎされ薄くされていることがわかった。 ・折れ伏せや補紙など過去の修理箇所の位置と状態を確認することができた。 ・料紙の簾の目は、絵では11～15本/3cm、詞書では15～17本/3cmであり、特に絵のほうで、紙ごとにばらつきがあった。 (3) ・料紙裏面よりごく微量サンプリング(5紙のみ)し、委託分析した。(委託先：高知県立紙産業技術センター) ・分析の結果、楮繊維が検出され、繊維長は1～2mmと短く、繊維を切断している可能性があるという報告を受けた。これは繊維の稠密さによる紙の平滑化を求めた結果であり、表面観察で見出される雲母による処理と通じる。 ・また《1 風病の男》と《5 痔瘻の男》からは米糊が検出された。			
  「病草子 七 霍乱する女」の部分 通常撮影(左)と透過赤外撮影(右)			
【実績値】 ・調査項目 5項目(通常光・透過光・赤外・透過赤外・紙質分析) ・紙質分析(委託調査) 5サンプル			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	S	C	A	A	A	S
判定理由 適時性：修理中にしか実施できない調査・分析を適時に行った。 独創性：文化財調査で一般的になりつつある手法を用いているが、絵巻の特徴に合わせた調査を行った。 発展性：平安後期を代表する絵巻の調査であり、館内外における文化財保存・活用に活かせる貴重な情報を得た。 効率性：修理事業に併せて、修理受託者と連携し、効率的な調査を行うことができた。 継続性：文化財の光学的調査で用いられる基本的な手法を用いており、調査の継続性、結果の汎用性が高い。 正確性：文化財への影響に十分な配慮が求められる中で、網羅的な調査を実施することができた。外部委託による分析によって、客観性の高い結果が得られた。						

2. 定量的評価

観点	調査項目	紙質分析				
判定	A	A				
判定理由 調査項目：継続性、汎用性が高い調査方法で調査を実施し、観察記述だけでなく、撮影画像として記録が残された。 紙質分析：試料採取に、文化財への影響に十分な配慮が求められる中で、網羅的なサンプリング、客観性の高い分析を実施できた。						

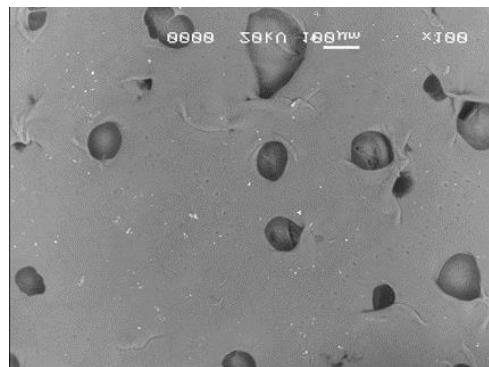
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	今後も、修理事業に伴う同様の調査を継続し、積み重ねていくことで、本調査の意義はより高く評価されると期待できる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本件と同様に、近年では、文化財の修理の際にさまざまな光学的調査、精密な科学分析が行われることも珍しくない。それら諸成果は、単なる個別的修理のためだけに終始するものではなく、数量が増加することで統計的に有意な意味を持つに至っており、美術史学との相関によって、文化財の修理が、文化財の本質を探る研究活動を発展させている。本研究を通じて、その意義と継続の必要性について、博物館と修理事業者との間で改めて認識を共有するに至った。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 収蔵庫・展示室・ケース内部等における環境の、文化財に与える影響などに関する調査研究を持続的に実施し、収蔵品の保存環境の向上を図る。(5)－(6)		
【事業概要】 展示室・展示ケース・収蔵庫等の環境が文化財に与える影響の解明を目的として、温湿度センサーによる展示室・展示ケース内等の温湿度データ収集、展示ケース内に浮遊する粉塵の電子顕微鏡観察、パッシブインジケータによるVOC調査、文化財害虫調査トラップの定期的な設置・回収等を継続的に実施し、調査で蓄積されたデータを分析することで展示室等の保存環境向上を計る。			
【担当部課】	学芸部保存修理指導室	【プロジェクト責任者】	室長 谷口耕生
【スタッフ】 岩田茂樹(美術室長)、内藤栄(工芸考古室長)、清水健(主任研究員)、斎木涼子(教育室員)、山口隆介(美術室員)、降幡順子(奈良文化財研究所主任研究員)			
【主な成果】 (1)展示室・展示ケース内に設置した温湿度センサーのデータを分析し、展示・収蔵環境の保持に努めた。 (2)展示ケース内から回収した粉塵の種類・量を計測し、展示ケースの気密性向上に資するデータを蓄積した。 (3)展示室・収蔵庫等への昆虫トラップの設置回収により文化財害虫の生息状況を調査し、害虫被害回避につなげた。 (4)防災工事に伴う収蔵庫内のVOC(揮発性有機化合物)残留濃度調査を実施し、収蔵環境の保全に努めた。 (5)「環境整備委員会保存環境に関するワーキンググループ」会議を定期的に開催し、保存環境の改善に努めた。			
【年度実績概要】 (1)展示室・展示ケース内の各所に無線機能付き温湿度センサーを設置し、24時間リアルタイムに温湿度の変化を監視するとともに、LAN回線を通じて学芸部内で収集したデータを蓄積し、展覧会ごとに報告書にまとめた。収蔵庫・文化財保存修理所内についてはロガータイプの温湿度センサーを各所に設置して、保存修理指導室員が定期的に温湿度データの回収を行った。これらのモニタリングによって得られたデータを分析し、文化財の展示・収蔵環境の保持及び改善につなげた。 (2)正倉院展終了後、展示ケース内から回収した粉塵を電子顕微鏡で観察し、粉塵の種類及び単位面積当たりの量を計測して、展示ケースの気密性向上に資するデータを蓄積した。その結果、粉塵量が多いと判断されたケースについては機密性確保の改修工事を実施した。 (3)展示室・収蔵庫・文化財保存修理所内など館内150箇所に設置している文化財害虫調査用トラップを、学芸部研究員が当番制により2ヶ月に1回交換・回収し、回収したトラップは外部業者に委託して文化財害虫の捕獲数データを蓄積した。この調査データをもとに、害虫被害が懸念される箇所を中心に忌避対策及び殺虫処置を実施し、併せて害虫発生を防ぐための清掃による衛生環境の保持などIPMの実践につなげた。 (4)収蔵の防災工事に伴って庫内壁面に新規設置する調湿ボードについてその性能評価実験を重ねるとともに、設置工事によって接着剤等から発生する有機酸・アルカリ性ガスの残存状況についてパッシブインジケータを用いた検査を行い、保存環境の安全を確認した。 (5)学芸部保存修理指導室員と総務課環境整備係員を中心に構成される「奈良国立博物館環境整備委員会保存環境に関するワーキンググループ」の会議を8回開催し、上記の調査等で確認された保存環境に関わる問題点について討議を重ねることで、施設の改修など保存環境の改善につなげた。			
			
展示ケース内粉塵の電子顕微鏡による観察			
【実績値】 保存環境調査実施箇所数：247箇所(展示室内温湿度調査：75箇所、展示ケース内粉塵調査箇所：22箇所、文化財害虫生息状況調査箇所：150箇所) 保存環境調査報告書作成件数：7件(温湿度モニタリング報告書3件、昆虫類調査用トラップ分類同定結果報告書4件) 研究者発表件数：「保存環境に関するワーキンググループ」開催回数：8回			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良国立博物館

処理番号 4563-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：温湿度モニタリング報告書を展覧会ごとに、昆虫トラップ報告書を1回作成した。 独創性：1日2万人が来館する正倉院展という特殊環境において、ケースの機密性、温湿度の調査を実施した。 発展性：保存環境関わる基礎データを着実に蓄積し、施設の改修につなげた。 効率性：温湿度センサーなど最新機器を導入し、効率的な保存環境データの収集に努めた。 継続性：無線機能付き温湿度センサーによる24時間モニタリング、当番制による2ヵ月に1回の昆虫トラップ設置回収を着実に実施した。 正確性：最新機器を用いてデータを収集し、得られた成果を定期的に報告書の形にまとめた。						

2. 定量的評価

観点	保存環境調査 実施箇所数	報告書 作成件数	研究発表件数			
判定	A	A	A			
判定理由 保存環境調査実施箇所数：前年度と同じ（調査実施箇所数としては必要十分な）点検箇所について継続的にデータ収集を実施した。 報告書作成件数：温湿度モニタリング報告書を展覧会ごとに、昆虫トラップ報告書を1回作成した。（目標：[温湿度モニタリング]展覧会毎ごと、[昆虫トラップ]1回） 研究発表件数：8回開催し、調査データの検討を重ねた。（目標：5～6回）						

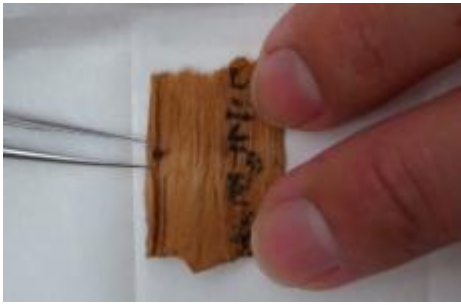
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	前年度に引き続き一年を通じて保存環境調査を着実に実施し、そこで得られたデータをもとに展示環境の維持・改善に努めることができた。次年度も本年度と同規模の調査を継続的に実施し、データの精度をさらに高めるとともに、保存環境変化の兆候を十分に把握できる体制を築いていきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業は、その進捗度、従来の水準を維持しつつ比較的堅調に実現できたと考える。今後もこのペースを維持しつつ、保存環境の維持・改善に努めていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 館蔵品・寄託品等の調査研究を文化財修理の観点から実施し、文化財の活用及び後世への継承に資する。((5)－⑥)		
【事業概要】 ・館蔵品、寄託品について詳細に保存状態の調査を実施し、保存カルテとして記録を蓄積することで、将来の文化財修理への指針に役立てる。 ・館蔵品、寄託品の修理に際し、事前に当該文化財の保存状態について入念な調査を実施し、その結果を基に修理調査を作成する。 ・文化財保存修理所内での修理中に文化財から得られた材質や銘文などの基礎情報について調査分析を実施し、その成果を当館研究紀要に掲載する形でデータを蓄積する。			
【担当部課】	学芸部保存修理指導室	【プロジェクト責任者】	室長 谷口耕生
【スタッフ】 岩田茂樹(美術室長)、内藤栄(工芸考古室長)、清水健(主任研究員)、斎木涼子(教育室員)、山口隆介(美術室員)、降幡順子(奈良文化財研究所主任研究員)			
【主な成果】 (1) 館蔵品、寄託品について保存状態を中心に入念な調査を実施し、その所見をもとに保存カルテを作成した。 (2) 館蔵品、寄託品の修理に際し、保存カルテや新規に実施した保存状態調査の所見をもとに修理調査を作成し、修理方針を決定した。 (3) 文化財保存修理所で修理中の木造文化財について樹種同定調査を実施し、その成果公開の準備を進めた。 (4) 文化財保存修理所で修理中の文化財から発見された銘文の調査を実施し、その成果公開の準備を進めた。			
【年度実績概要】 (1) 館蔵品・寄託品の貸与や修理などの機会に、彫刻・絵画・書跡・工芸・考古の各部門担当者が、光学機器等を用いて保存状態確認を中心とする文化財調査を実施し、そこで得られた成果を保存カルテに記入して基礎データを蓄積し、将来の修理への指針に役立てた。保存カルテについては、新規フォームの作成・保管などの管理業務を保存修理指導室が担当した。 (2) 館蔵品・寄託品の修理時において、事前に保存状態を中心とする入念な文化財調査を実施し、その成果や保存カルテの情報を参照しつつ修理調査作成し、館内鑑査を経て修理方針を決定した。 (3) 当館と京都大学生存圏研究所との間で締結した協定に基づき、当館文化財保存修理所内における未指定の木造文化財の修理過程で自然に脱落した資料について、所蔵者の同意を得て樹種同定の調査を行った。調査対象となったのは奈良市指定の奈良・當麻寺所蔵の金剛力士像頭部及び役行者像2件であり、分析結果は当館研究紀要『鹿園雑集』17号(平成27年3月刊行予定)に「平成25年度 修復文化財(木造)材質調査報告」として掲載する予定。これらの樹種データを蓄積することによって、木造文化財の製作技法・製作背景等を樹種の観点から解明する基盤としたい。 (4) 文化財保存修理所内で館蔵品・寄託品及び未指定文化財の修理中に発見された銘文については、当館研究員と修理技術者が共同で調査を実施した。とりわけ前年度に完了した館蔵の木造南無仏太子立像の修理に際して合掌手の中から仏舎利に見立てたと思しき一粒の鉾物を包む墨書銘を付した紙片が発見され、この紙片と仏舎利は像本体とともに特集陳列「新たに修理された文化財」(25年12月25日～26年1月19日開催)において展示公開した。			
 館蔵南無仏太子立像の修理に際して合掌手内から発見された墨書銘			
【実績値】 保存カルテ作成件数：総計 98 件 うち彫刻 14 件、絵画 39 件、書跡 2 件、工芸(金工・刀剣・漆工・染織) 30 件、考古 12 件、建築 1 件 修理調査作成件数：総計 11 件 うち彫刻 1 件、絵画 4 件、書跡 1 件、工芸 2 件、考古 3 件 調査回数：計 6 件(木造文化財樹種同定調査実施件数：2 件、修復文化財銘文調査実施件数：4 件) 調査概報：2 件(「修復文化財(木造)材質調査報告」、「修復文化財関係銘文集成」)			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：調査で得られたデータを報告書として公開し、成果の一部を展覧会に反映させた。 独創性：他の研究機関と協定を結び、共同で最新の分析機器を用いた修理文化財の材質調査を実施した。 発展性：材質・保存状態に関する調査を着実に実施し、将来の文化財修理に益する貴重な基礎データを蓄積した。 効率性：修理・貸与の時宜を見計らって計画的に文化財の材質・保存状態調査を実施した。 継続性：文化財の材質・保存状態調査を継続的に実施し、そこで得られた基礎データを着実に蓄積することができた。 正確性：最新機器を用いて文化財の材質・保存状態に関する基礎データを収集し、入念な分析によって得られた成果を報告書の形にまとめた。						

2. 定量的評価

観点	保存カルテ作成件数	修理調書作成件数	調査回数	調査概報		
判定	A	A	A	A		
判定理由 保存カルテ作成件数：貸与時に列品室から発行される貸付簿とセットで保存カルテを管理するシステムが軌道に乗り着実に保存カルテを作成することができた。 修理調書作成件数：館蔵品修理、寄託品の財団助成修理時に必ず修理調書を作成し、館内の修理鑑査に備えた。 調査回数：文化財保存修理所の各工房と協力して、文化財修理時に材質・銘文調査を着実に実施した。 調査概報：調査で得られた修理文化財の材質・銘文データを全て当館紀要に掲載した。						

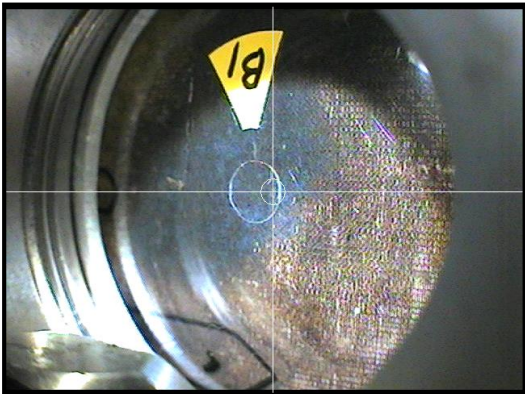
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	館蔵品・寄託品の保存状態調査に基づく保存カルテの作成や、以前から継続的に実施している修復文化財の樹種同定調査・銘文調査を着実に実施し、将来における文化財の研究・修復に資するデータを蓄積することができた。次年度以降も本年度のペースを維持しつつ修復文化財調査を着実に実施していく予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業は、その進捗度、従来水準を維持しつつ堅調に実現できたと考える。今後もこのペースを維持しつつ、修復文化財の基礎データ蓄積に努めていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3) 館蔵品・寄託品等の調査研究を保存科学の観点から実施し、貴重な文化財の後世への継承に資する。((5)－⑥)
【事業概要】 (1) 館蔵品、寄託品等の修理に際し、修理前・修理中に当該文化財に対して透過X線や蛍光X線等を用いた光学調査を実施し、その所見を修理方針に反映させる。 (2) 館蔵品、寄託品の文化財の修理において、修理前に電子顕微鏡を用いた料紙・料絹の繊維組成調査を実施し、その成果をもとに補紙・補絹を調製する。 (3) 文化財保存修理所で修理中の文化財について、研究員と各工房職員が共同で光学機器を用いた材質調査を実施する。	
【担当部課】	学芸部保存修理指導室
【プロジェクト責任者】	室長 谷口耕生
【スタッフ】 岩田茂樹(美術室長)、内藤栄(工芸考古室長)、清水健(主任研究員)、斎木涼子(教育室員)、山口隆介(美術室員)、降幡順子(奈良文化財研究所主任研究員)	
【主な成果】 (1) 館蔵、寄託品の修理に際し、蛍光X線を用いた材料調査、近赤外線写真やポリライトを用いた補筆・補絹分布調査、透過X線を用いた構造調査等を実施した。 (2) 館蔵、寄託品のうち絹製文化財の修理において電子顕微鏡を用いた料絹の組成調査、紙製文化財の修理において同じく料紙の繊維調査を実施し、その所見を修理に用いる補絹・補紙の調製に反映した。 (3) 文化財修理所の修理寄託中の文化財について蛍光X線を用いた材料調査を実施し、修理方針に資するデータを蓄積した。	
【年度実績概要】 (1) ・ 絵画部門の館蔵品、重要文化財絹本着色普賢延命像の修理に際し、肌上げ作業終了時に料絹の裏から近赤外線撮影を行うとともに、蛍光X線を用いて裏彩色の顔料調査を実施し、絹裏の状態について基礎データを収集した。 ・ 絵画部門の館蔵品、絹本着色六字経曼荼羅の修理に際し、高精細デジタルカメラを用いた近赤外線写真撮影を実施して、補筆・補彩の有無や、補絹箇所における絹の重なり状態について把握し、その所見に基づいて補絹去作業の方針について協議した。 ・ 工芸部門の館蔵品、国宝刺繍釈迦説法図の修理に際し、刺繍面の損傷及び補絹の状態を把握するためにポリライトを用いた蛍光画像撮影を実施し、修理方針決定に向けての基礎データを収集した。 ・ 考古部門の館蔵二塚古墳出土鉄製品、工芸部門の寄託品、黒漆厨子(温泉寺蔵)の修理において、透過X線を用いた構造調査を修理技術者と共同で実施し、その成果に基づいて修理方針を決定するとともに、材質教化のために含浸させる樹脂の選定についても修理技術者と検討を重ねた。 (2) 館蔵、寄託品のうち絵画部門の絹製品3件の修理において、電子顕微鏡を用いた料絹の組成調査を修理技術者と共同で実施し、その成果を補修絹の調製に反映した。同じく、書跡部門の紙製品1件について、電子顕微鏡を用いた料紙の繊維調査を修理技術者と共同で実施し、その所見を補修紙の調製に反映した。 (3) 次年度以降に修理着工予定の国宝・綴織當麻曼荼羅及び貞享本當麻曼荼羅(ともに當麻寺蔵)について、当館写場において高精細デジタルカメラによるカラー分割画像及び近赤外線分割画像を撮影し、損傷状況の把握及び今後の修理方針決定に資する基礎データを収集した。	
	
絵画修理に伴う蛍光X線分析器を用いた顔料調査	
【実績値】 調査回数 10回 (館蔵品、寄託品等の修理に伴う光学的調査実施回数：10回) 研究会回数 19回 (館蔵品、寄託品等の修理に使用する補修材料の検討会実施回数：19回)	
【備考】	

【書式B】
(様式2)

施設名 奈良国立博物館

処理番号 4563-3

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：修理前、修理中に実施した材質・構造調査の成果を修理方針に反映させた。 独創性：最新の光学機器を用いた材質・構造調査を実施し、その成果を修理方針に反映させた。 発展性：修理文化財の材質・構造に関する基礎データを着実に蓄積し、そのデータを修理技術者に提供することで修理技術の発展に努めた。 効率性：文化財保存修理所内で修理される文化財について、館が所有する最新の光学機器を積極的に活用し、高精度の材質・構造調査を館内で効率的に実施した。 継続性：修理文化財の材質・保存状態調査を継続的に実施し、得られた基礎データを着実に蓄積することができた 正確性：最新機器を用いて文化財修理に有益な材質・保存状態に関する基礎データを収集・精査し、そこで得られた所見を補修材料の選択等の修理方針決定に反映させることができた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	研究会回数				
判定	A	A				
判定理由 調査回数：館蔵品・寄託品の修理において確実に調査を実施することができた。 研究会回数：修理文化財の材質・構造調査で得られたデータについて修理技術者と共同で検討を重ね、その成果を補修材料の選定等の修理方針に反映させた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	館蔵品・寄託品の修理に伴って、保存状態の確認や材質解明を主目的とした光学的調査を着実に実施し、当該文化財の修理方針決定や、将来における文化財の研究・修復に資する基礎データを蓄積することができた。次年度以降も本年度のペースを維持しつつ、館蔵品・寄託品を主対象とする保存科学的手法を用いた調査を着実に実施していく予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	調査研究事業は、その進捗度、従来水準を維持しつつ堅調に実現できたと考える。今後もこのペースを維持しつつ、文化財の基礎データ蓄積に努めていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進												
プロジェクト名称	1) 文化財の材質・構造等に関する共同研究 ((5)－⑥)												
【事業概要】 文化財を解体することなく内部構造を立体的に調査する方法の開発を目指す。当館において、X線CTや透過X線を用いて文化財の内部構造を調査する。また3Dデジタイザを用いて文化財の詳細な三次元形状を調査する。文化財の構造や制作技法を理解し、文化財の健康状態を知る。さらに、得られた成果を展示に活用することを目的とする。													
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長 今津節生										
【スタッフ】 臺信祐爾（企画課長）、河野一隆（企画課文化交流展室長）、市元壘（企画課特別展室主任研究員）、楠井隆志（展示課主任研究員）													
【主な成果】 透過X線撮影、X線CT調査、3Dデジタイザ調査等を実施した。トピック展「雪と火炎土器」で展示した「火炎土器」についてX線CT調査、精密三次元形状計測を実施し、三次元プリンタで原寸大のデジタル複製品を製作した。デジタル複製品手に触れるハンズオン作品として展示した。また、文化交流展元関連の鷹島海底遺跡出土品について、展示替えの機会を利用して文化財の構造や材質を調査した。													
【年度実績概要】 ・トピック展で展示した「火炎土器」をX線CT、精密三次元形状計測を実施し、三次元プリンタで原寸大のデジタル複製品を製作し、デジタル複製品手に触れるハンズオン作品として展示した。さらに、デジタル複製品を1.07倍に拡大し、粘土に置き換えて焼くことで、縄文土器に近い質感を得ることができた。この土製のデジタル複製品を手に触れるハンズオン展示として活用した。展示会には多くの子供連れが訪れた。また、三次元プリンタで製作した縄文土器は先進的な例としてマスコミにも取り上げられた（洋泉社 MOOK 『三次元プリンターがわかる本』）。 ・文化交流展元関連の鷹島海底遺跡出土品について、文化財の構造や材質を調査した。調査は、当館が借用している矢束、鉄刀などに加えて、松浦市所蔵の冑、矢束、武器類、不明鉄製品などに対して行った。測定は、当館のX線CTを用いて、320kV、2mAの条件で実施した。解析はVolume Graphics社のVGStudioMAXを用いた。その結果、鉄製品のほとんどは地金の鉄が溶脱しており空洞化していることが判明した。空洞化した鉄製品のデータを反転し、遺物の形状を明らかにした。 また、長崎県松浦市鷹島の海底遺跡から発見された元寇関連遺物については、X線CT調査を実施し、錆と泥に覆われた遺物の立体形状を明らかにした。その中から中国北方民族が特徴的に使用する「火打ち金」を発見した。 ・また、研究成果として、有機遺物のCT調査結果を学会発表数とし、論文として文化財の科学研究におけるX線CTの活用を発表した。													
 火炎土器のデジタル複製品													
【実績値】 <table><tr><td>調査件数</td><td>60 件</td></tr><tr><td>調査回数</td><td>30 回</td></tr><tr><td>資料収集数</td><td>230 点</td></tr><tr><td>学会研究会等発表数</td><td>1 件 (①)</td></tr><tr><td>論文掲載数</td><td>1 件 (②)</td></tr></table>				調査件数	60 件	調査回数	30 回	資料収集数	230 点	学会研究会等発表数	1 件 (①)	論文掲載数	1 件 (②)
調査件数	60 件												
調査回数	30 回												
資料収集数	230 点												
学会研究会等発表数	1 件 (①)												
論文掲載数	1 件 (②)												
【備考】 学会研究会等発表 ①「X線CTを活用した勝負砂古墳出土有機質製品の調査」日本文化財科学会（25年7月6日） 論文 ②「博物館研究におけるX線CT活用の可能性」『東風西声』第9号、九州国立博物館（26年3月31日）													



火炎土器のデジタル複製品

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4564-1

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：C T 調査は形状や保存状態の把握に大きな効果がある。鷹島海底遺跡発見遺物について新たな知見を得るなど、形状把握に効果があった。 独創性：我が国の博物館で唯一、非破壊で文化財の構造調査や三次元計測、三次元造形を行うことができる。 発展性：X線C T・3Dデジタイザ・三次元プリンタによる調査研究は適用範囲が広く、得られる結果も多様である。 効率性：X線C T・3Dデジタイザ・三次元プリンタは短時間でデータを取得できるので時間的投資効果が大きい。 継続性：非破壊で採取した計測データを基に、短時間で内容豊富な質の高い基礎情報を蓄積することができる。 正確性：X線C Tでは文化財内部の構造を約0.2 mm、3Dデジタイザでは0.02 mmの高精度で記録することができる。						

2. 定量的評価

観点	調査件数	調査回数	資料収集数	学会研究会等 発表数	論文掲載数	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 調査件数：60回の調査を計画通り実施できた。 調査回数：30回の目標を達成できた。 資料収集数：230点の資料調査を計画通り実施することができた。 学会研究会等発表数：目標を達成できた。 論文掲載数：目標を達成できた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本研究の成果は手に触れるハンズオン作品として展示され、多くの市民が文化財に親しむ契機になった。また3Dプリンタの普及に伴い、マスコミでも注目された、今後は更に多くの文化財を調査研究し、市民が文化財に親しむための機会を作りたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当初計画にそって研究内容の水準を保ちながら順調に遂行している。引き続き外部資金を積極的に活用しながら研究を継続したい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	2) 博物館における文化財保存修復に関する研究((5)－⑥)		
【事業概要】 当館の文化財保存修復施設の機能と利点を生かし、西日本地域の大学で装こう技術による文化財保存修復を学ぶ学部生・大学院生を対象とした研修を実施する。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	保存修復室主任研究員 志賀智史
【スタッフ】 渡部史之（博物館科学課アソシエイトフェロー）、下田詩織（博物館科学課研究補佐員）、大賀典子（博物館科学課事務補佐員）、竹上幸宏（国宝修理装こう師連盟九州支部技師長）、元 喜載（国宝修理装こう師連盟九州支部技師）、弓場 健太郎（国宝修理装こう師連盟九州支部技師補）			
【主な成果】 吉備国際大学2名、九州産業大学2名、別府大学2名、広島市立大学2名の計4大学8名が研修に参加した。修復技術者の協力を得て、少人数で実践的な研修を実施することができた。本研修により、修理技術者育成に寄与すると共に、学生の文化財保護への理解を深めることができた。			
【年度実績概要】 ・当館の文化財保存修復施設を利用して地域大学との協業を図る短期インターンシップ研修プログラムについて、平成17～24年度の実績をもとに検討、改善した。その成果は、4大学8名の学生を対象に25年8月19日（月）～23日（金）の5日間にわたり実施した、装こう技術に関する短期インターンシップ「文化財保存修復研修」に反映された。研修では障壁画の下貼り作製に関する講義と実習を通じて、文化財保存修復に対する参加学生の理解と研鑽を深めることができた。 ・実習では当館文化財保存修復施設を使用している国宝修理装こう師連盟（国の認定する選定保存技術保存団体）の協力を得られたため、実践的な研修を実施することができた。			
 文化財保存修復研修 実習風景			
【実績値】 研修開催数 1回（17年度より9回目） 参加者数 計4大学 8名 （吉備国際大学2名、九州産業大学2名、別府大学2名、広島市立大学2名）			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4564-2

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：公共の財産である文化財を、修理を通じて伝えていくためには、修復技術者の育成が不可欠である。 独創性：同様な研修を行っている公的機関は中四国九州地域では当館が唯一である。 発展性：文化財の修復分野は近年メディア等で注目されており、社会への影響が強い。 効率性：文化財保存修復施設で修理を行っている団体から協力を得られたので、効率的に実習を行うことができた。 継続性：修復技術者の育成は継続的に行う必要があり、研修も毎年継続して行う必要がある。 正確性：国宝修理装こう師連盟の協力により、正確な研修を行うことができた。						

2. 定量的評価

観点	研修開催数	参加者数				
判定	A	A				
判定理由 研修開催数：計画通り実施できた。 参加者数：実習としては適切な人数である。地域大学からの申し込みも多く、研修への関心の高さが窺える。						

3. 総合的評価

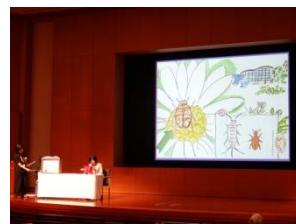
判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	大学で保存修復の基礎教育を受けた学生を対象に実践的な研修の場を提供できる機関は極めて少ない。次年度以降も地域大学の学生を対象に、本事業を継続していく予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	平成17年度より少人数の実習を継続的にっており、参加者数も安定している。そのため、次年度以降も引き続き同様の研修を実施する予定である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3) 博物館危機管理としての市民協同型 I PMシステム構築に向けての基礎研究((5)－⑥)
【事業概要】 平成 25 年度地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業「市民と共に ミュージアム I PM」実行委員として、地域の博物館等と連携協力し、実施する。本事業の目的は、我が国の博物館等における I PM（総合的有害生物管理）普及のための地域共働システムづくりである。本事業では、自治体と NPO 法人や市民ボランティアの共働によるワークショップやシンポジウムの開催及び大学・専門研究機関・地域文化施設の連携による支援者育成研修プログラム確立を通し、I PM の社会的理解度を深めつつ自立的な地域共働システムづくりを目指すものである。	
【担当部課】	学芸部
【プロジェクト責任者】	特任研究員 本田光子
【スタッフ】 三輪嘉六（館長）、西村栄造（副館長）、森田稔（副館長）、谷豊信（学芸部長）、阿部勝（総務課長）、今津節生（博物館科学課長）、篠崎孝司（交流課長）、大石淳子（総務課長補佐）、秋山純子（博物館科学課環境保全室研究員）、河北絵里子（学芸部事務補佐員）、野田真紀子（学芸部事務補佐員）	
【主な成果】 (1) 研修会等参加者は、全国の美術館・博物館の学芸員及びボランティアからなるが、参加申込受付開始日に定員に達するなど、参加人数が大幅に増え、学芸員・市民の関心の高さがうかがえた。よって前年度よりさらに様々な意見を集約することが可能となり、ミュージアム I PM 支援者研修プログラムの確立に充分活かすことができた。 (2) 公開シンポジウムでは専門家の講演と I PM 実践館等による報告を行い、東京での情報発信ができた。 (3) 平成 25 年度地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業「市民と共に ミュージアム I PM」を軸に市民協同型 I PM システム構築に関する研究を展開し、その成果を 3 冊の報告書にまとめた。	
【年度実績概要】 (1) 地域連携協力普及事業 ・ワークショップ 専門機関職員、当館研究員と環境ボランティア及び NPO 法人から成るチームのアウトリーチによるワークショップで、飛鳥資料館（25 年 8 月 19 日）、熊本市現代美術館（26 年 2 月 18 日）で開催した。 (2) シンポジウム 日本の I PM 普及の現状と課題について、美術館博物館や研究機関の専門家による講演と各地文化施設実践事例の報告。2 名の専門家による基調講演と 6 本の基調報告、4 本の事例報告を 25 年 10 月 12 日に東京で開催した。 (3) 人材育成事業 これまで実施検証を重ねた支援者育成プログラムの完成を目指して実施した。ミュージアム I PM 支援者研修は、専門機関や大学との連携による先進館や伝統的施設の調査結果及び協力者会議の指導助言により改善し実施した。「ミュージアム I PM 支援者研修」修了者報告会は、研修実施の意義や効果について、過年度の受講生自身の意見発表を受け、研修プログラムの最終修正に役立てるために行った。	
【実績値】 ○検討会等開催回数・・・7 回 ・「市民と共に ミュージアム I PM」全体会議：2 回 ・ワーキンググループ検討会：5 回 ○支援者研修会開催回数・・・3 回 ○支援者研修会参加者数・・・107 名 ・ミュージアム I PM 支援者研修（基礎編）：56 名 ・ミュージアム I PM 支援者研修（技術編）：33 名 ・ミュージアム I PM 支援者研修（実践編）：18 名 ○シンポジウム開催回数・・・1 回 公開シンポジウム「市民と共にミュージアム I PM」（25 年 10 月 12 日） ○シンポジウム参加者数・・・116 名 ○報告書 3 冊 ・「市民と共に ミュージアム I PM」事業報告書（研修編）1,000 部 ・「市民と共に ミュージアム I PM」事業報告書（報告会・施設見学調査編）1,000 部 ・「市民と共に ミュージアム I PM」事業報告書（シンポジウム編）1,000 部	
【備考】 学会研究会等発表 ① 「ミュージアム I PM の実践と課題」文化財保存修復学会（25 年 7 月 20 日） ② 「市民ボランティアによる文化財 I PM の発信について」文化財保存修復学会（25 年 7 月 21 日）	



公開シンポジウム

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：研修会参加申し込みは先着順としているが、募集開始時に定員に達することから需要・必要性がある。 独創性：I P M活動に市民を組み込んで進めている。 発展性：アウトリーチによるワークショップを実施。具体的なI P M活動を展開し、普及に努めた。 効率性：文化庁の補助金、太宰府顕彰会の助成金を活用しているため。 継続性：I P M支援者の育成は継続的、段階的に行う必要があり、毎年継続する必要がある。 正確性：昨年と比べ研修受講者が大幅に増え、より多くの館でI P Mの理解を深めるのに役立った。						

2. 定量的評価

観点	検討会等開催回数	支援者研修会開催回数	支援者研修会参加者数	シンポジウム開催回数	シンポジウム参加者数	報告書
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 検討会等開催回数：目標回数、開催した。 支援者研修会開催回数：目標回数、開催した。 支援者研修会参加者数：予定を上回る人数の参加があった。 シンポジウム開催回数：計画通り実施できた。 シンポジウム参加者数：目標人数を達成した。 報告書：予定通り刊行した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本年度は文化庁補助金事業の最終年度に当たり、これまでの本事業の集大成と位置づけ、研修プログラムの確立、I P M普及のための体制作りを目標に取り組んだ。これまでの研修会・公開シンポジウムなどの実施によって、確実にI P Mが広く普及したといえる。次年度は文化庁事業ではなくなるため、新たな研修実施体制の確立とI P Mの普及を継続して進めたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	地域に展開可能なミュージアムI P M支援者育成プログラムを確立し、館の保存管理機能の基盤強化と共に地域のミュージアム支援者層の拡大に寄与することができた。また地域市民や専門機関との連携を深めながら、より積極的にI P Mを軸にした文化財保存に関する調査及び研究を推進した。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	4) 東アジアの文化財修復用手漉き和紙の調査研究(UNESCOとの共同) ((5)－⑥)
【事業概要】 日本、中国、韓国における文化財の保存修理には、良質の手漉き紙の確保が必要不可欠である。そのため、各国の手漉き紙の製作状況を調査し、材料や技法などを詳細に実地調査し、映像記録（動画、静止画）や調査カードにまとめる。また、各国での調査結果について報告会を開催し、紙文化財の保存修理に関する各国の共通理解の進展を図るとともに、その報告書を作成する。	
【担当部課】	学芸部博物館科学課
【プロジェクト責任者】	前保存修復室長 藤田励夫
【スタッフ】 森田稔（副館長）、本田光子（学芸部特任研究員）、渡部史之（博物館科学課アソシエイトフェロー）	
【主な成果】 UNESCOとの共同事業として、平成20年度より五ヵ年にわたって実施した日本・中国・韓国での手漉き紙の製作状況調査の集大成として、前年度当館において開催された「第5回東アジア紙文化財保存修理シンポジウム」の報告書を作成した。	
【年度実績概要】 ・当館において前年度開催された「第5回東アジア紙文化財保存修理シンポジウム」には、日本・中国・韓国・アメリカ・イギリス各国より総勢170名に及ぶ紙文化財の保存修理関係者が出席した。本年度は、その時の基調講演1本、研究報告9本（日本3本・中国3本・韓国3本）、パネルディスカッションの内容を収録する報告書を作成してその成果を記録に留め、広くその情報を発信した。また、報告書にはそれぞれの内容を日本語・中国語・韓国語の3言語に翻訳して収録することで、日本国内だけでなく、中国・韓国にも広く情報を発信し、各国の共通理解の進展を図れるようにした。	
	
第5回東アジア紙文化財 保存修理シンポジウム	
【実績値】 報告書： 1件 「第5回東アジア紙文化財保存修理シンポジウム」報告書	
【備考】	

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4564-4

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：日本・中国・韓国は紙文化財の保存修理について共通の問題を抱えており、共通理解の進展が必要である。 独創性：実地調査の難しい海外の手漉き紙の調査結果をふまえた報告書を作成することができた。 発展性：報告書には各報告を日本語・中国語・韓国語の3言語に翻訳して掲載し、情報をひろく三ヵ国に発信した。 効率性：ユネスコと連携することで海外での円滑な調査が可能となり、その成果を報告書に反映することができた。 継続性：各国の手漉き紙の製作状況調査及びその成果の記録・発信は継続的に行う必要がある。 正確性：複数の伝統的製紙工場の調査に基づく日本・中国・韓国の報告を報告書に収録した。						

2. 定量的評価

観点	報告書					
判定	A					
判定理由 報告書：計画通り刊行することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	日本語・中国語・韓国語の3言語による「第5回東アジア紙文化財保存修理シンポジウム」の報告書を、計画通り作成することができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り報告書が作成され、当初の目標を達成することができた。なお本プロジェクトは、本年度をもってひとまず終了する。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	5) 赤外線撮影法による彩色材料調査の有効性に関する研究(学術研究助成基金助成金) (5)-⑥)
【事業概要】 彩色材料は当時の社会情勢や世界との交流の歴史を解明する上で重要な要素のひとつである。近年の分析装置の発展により非破壊で多くの情報が得られるようになってきている。その中で彩色材料について確実な情報を得るには、有効な分析手法を確立する事が求められる。本研究では、赤外線撮影法により彩色材料を非破壊で二次元的に判断することを目的とする。	
【担当部課】	学芸部博物館科学課
【プロジェクト責任者】	環境保全室研究員 秋山純子
【スタッフ】 畑靖紀（文化財課資料管理室主任研究員）、森實久美子（企画課特別展室研究員）、鷲頭桂（企画課特別展室研究員）	
【主な成果】 本年度は赤外線撮影で有用となる彩色材料を明らかにするため、基本となる彩色材料を検討し、カラーチャートを作成した。そしてカラーチャート及び実際の絵画の赤外線画像と彩色の科学分析の結果を照らし合わせ、赤外線画像の解析を試みた。	
【年度実績概要】 - 江戸時代までに一般に入手可能であった主な顔料をピックアップした。選定した顔料は群青（8番、12番）、白群、緑青（8番、12番）、白緑、辰砂（10番、14番）、鎌倉朱赤口、丹、弁柄、岱赭、藤黄、日本黄土、鉛白、白土、胡粉、墨の14種類である。また、修復の専門家による彩色材料についての意見を下に赤外線調査の基本となるカラーチャート（写真）を作製した。 - カラーチャート及び絵画作品の赤外線画像を非接触大型画像取得装置 Ni ji-H（高精細スキャナ、株式会社サビア製）を使って撮影した。赤外線撮影はモノクロカメラ（レンズ Micro Nikkor 55mm f2.8、絞り 5.6）を用いて、可視光に近い近赤外領域の赤外線で行った（IR-LED 光源、紫外線吸収フィルタ SC70）。 - カラーチャート及び絵画作品の赤外線画像をデジタル一眼レフカメラ（PENTAX 製 645D）を使って撮影した。フィルタは可視光撮影には IR カットフィルタ（リコー製）、赤外線撮影には R72 フィルタ（Kenko 製）を使用した。 - 蛍光 X 線分析装置で成分を把握し、購入した彩色材料の基礎データを収集した。蛍光 X 線分析では成分分析しかできないが、赤外線画像と分析結果を照らし合わせるには顔料分析においても非破壊調査が求められるため、今回は簡易型の蛍光 X 線分析装置（デルタハンドヘルド蛍光 X 線分析計、機種：Premium、Rh 管球、分析ソフトウェア：土壤モード（絶対値）、Alloy 合金モード、岩石鉱石モード、型式：DP-4000）を使用した。実際の絵画の分析を想定しているため、彩色材料そのものではなく、膠で塗布したカラーチャートの分析を行った。	
【実績値】。 - 調査回数 4 回（国内 2 回、海外 2 回） - 学会研究会等発表数 1 件①	
【備考】 学会研究会等発表 ①「赤外線撮影法による彩色材料調査の有効性に関する研究 1」文化財保存修復学会（25 年 7 月 21 日）	



図1 作製したカラーチャート

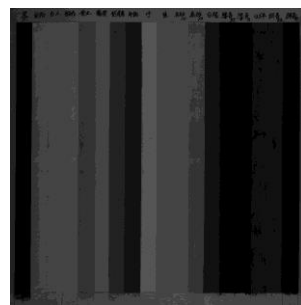


図2 赤外線画像

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4564-5

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：国内外に関心が高い調査であるため。 独創性：彩色材料の非破壊調査に系統的に赤外線を活用する手法は新たな試みであるため。 発展性：さらに適応例を増やし、より確実なデータを収集することで、汎用性が増す。 効率性：デジタルで撮影も簡単であるので、時間的投資、人的投資が少ない。 継続性：基礎データを元に実際の絵画に適応し、データを積み重ねることで確実なデータとなっていく。 正確性：赤外線撮影用のカメラを活用することで、高精細な画像データを得られる。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	学会研究会等 発表数				
判定	A	A				
判定理由 調査回数：年間4回、計画通り国内外の絵画を調査した。 学会研究会等発表数：文化財保存修復学会にて計画通り実施できた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本研究に使用している撮影機材は、非破壊で簡便な撮影ができる。蛍光X線分析による結果と組み合わせ、より確実な彩色調査が可能であることが分かった。次年度はさらに多くの資料を調査すると共に、蓄積したデータの活用を進めたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究の基礎となるカラーチャートの作成とそれを基準とした実際の絵画の赤外線撮影を行うことができた。赤外線画像の解析を進め、次年度は様々なフィルタを活用した赤外線撮影を行い、波長の違いによる赤外線画像の違いを解析する。蛍光X線分析と組み合わせ、彩色材料の弁別に役立つデータを蓄積する。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	6) 三次元データに基づく文化財研究と新展示手法の開発 ―興福寺 国宝阿修羅像を中心に― (科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金) (5)－⑥)		
【事業概要】 本研究は特別展の際に各地から収集された文化財を科学的に調査することによって、文化財研究の基礎資料を蓄積すると共に、その研究成果を生かして新しい展示手法を開発することを目的とする。具体的には、文化財用の大型X線CTスキャン調査によって得られた、奈良興福寺の国宝 阿修羅像をはじめとする十大弟子像4 軀、八部衆像5 軀の像内の高精細三次元データを分析し、奈良時代の脱活乾漆像の構造及び技法、修復履歴を明らかにした上で彫刻史上の作風的位置づけを行う。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長 今津節生
【スタッフ】 楠井隆志（展示課主任研究員）、鳥越俊行（文化財課資料登録室主任研究員）			
【主な成果】 本研究は興福寺の特別な許可を得て、X線CT調査で得られた国宝 阿修羅像をはじめとする十大弟子像4 軀、八部衆像5 軀の高精細三次元データを、美術史・工芸史・修復技術・文化財科学・博物館学の専門家が一同に集まって解析する研究である。これまでに、X線CTによって得られた三次元画像を 450 枚以上蓄積した。また研究の成果を出版すべく編集作業を進めた。			
【年度実績概要】 ・本年度はカルラ像を中心に八部衆、十大弟子の構造解析を進めた。カルラ像の心木は虫食が無い良好な状態であることが判明した。また、鎌倉時代と江戸時代、明治時代に実施された修理の痕跡も明瞭に把握することができた。さらに三次元データの解析から像内脚部付近に欠落材が存在することを明らかにした。この欠落材を三次元プリンタで造形化し、形状や釘の位置を検討した結果、この欠落材は腰部の前後に補強材として取り付けられていたものが、何らかの原因で釘が外れて下部に落ちたと推定できた。このように、本調査によって、文化財の過去の破損歴や修復歴を明らかにできた。このように、本研究によって天平彫刻の基準作品を、科学調査を基盤として客観的に位置づけることによって、日本彫刻研究の新しい研究基盤を形成することが期待される。			
 カルラ像の横断面画像			
【実績値】 収集資料数 9 点 論文掲載数 1 件 (①)			
【備考】 論文 ①「博物館研究におけるX線CT活用の可能性」『東風西声』第9号（26年3月31日）			

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4564-6

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：天平彫刻の最高傑作を、科学調査することによって日本彫刻研究の新しい研究基盤を形成することができた。 独創性：所蔵者である興福寺様の特別な許可を得て実施できた研究であり、これまでにない新たな研究基盤である。 発展性：X線CTと三次元プリンタによる調査研究は適用範囲が広く、得られる結果も多様である。 効率性：展示会の際にCT調査を実施しており、高精度の三次元デジタルデータを解析しながら研究データを得られる。 継続性：採取した三次元データを基に、内容豊富な質の高い基礎情報を蓄積することができる。 正確性：正確な三次元データを基に、文化財の状態を把握することは、多くの文化財調査に有効である。						

2. 定量的評価

観点	収集資料数	論文掲載数				
判定	A	A				
判定理由 収集資料数：9点（写真数 450枚）の調査を計画通り実施できた。 論文掲載数：目標を達成できた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本研究は、X線CTによる膨大な三次元データを美術史・工芸史・修復技術・文化財科学・博物館学の専門家が一同に集まって解析することにより、天平彫刻の最高傑作を日本彫刻研究の新しい研究基盤として位置づけることになる。本年度はカルラ像を像を中心に八部衆、十大弟子の構造解析を進めた。次年度は、随時研究成果を公開し、最終的には膨大な研究成果を集積した報告書を作成する予定である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本調査研究は、当初計画にそって研究内容の水準を保ちながら順調に遂行している。すでに、450枚以上の画像データを収集し、研究報告の出版を計画している。引き続き外部資金を積極的に活用しながら研究を継続したい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	7) 三次元デジタル計測技術を活用した中国古代青銅器の製作技法の研究 (科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金) ((5)-(6))
【事業概要】 京都・泉屋博古館所蔵の住友コレクションのうち、中国古代青銅器コレクションを中心に、古代中国青銅器の鑄造技術の解明のためにX線CT、3Dデジタイザ、三次元プリンタ等の科学調査機器を用いて科学調査を実施、その成果を中国で出版して広く成果の普及と学術交流を図る。	
【担当部課】	学芸部
【プロジェクト責任者】	部長 谷豊信
【スタッフ】 今津節生 (博物館科学課長)、河野一隆 (企画課文化交流展室長)、市元壘 (企画課特別展室主任研究員)、鳥越俊行 (文化財課資料登録室主任研究員)	
【主な成果】 当館では京都・泉屋博古館と共同してX線CT、3Dデジタイザ、三次元プリンタ等の科学調査機器を用いて、中国古代青銅器の内部構造データを集積したデジタルアーカイブを構築している。本年度は大阪・和泉市久保惣記念美術館が所蔵する中国古代青銅器を調査すると同時に、中国科学院と協議して成果の検討を進め、中国科学出版社とは出版に向けての打ち合わせを行った。	
【年度実績概要】 ・本年度は、大阪・和泉市久保惣記念美術館の殷周青銅器を対象として、肉眼観察と共に画像解析を実施した。その中でも脚や持ち手等青銅器本体から伸びる立体造形の接続状況に着目して分析を行った。これらの成果は住友コレクションで以前から進めてきた立体装飾造形の調査成果を補強するもので、中国古代青銅技術の広がりを確認する結果となった。 ・北京の中国科学院、科学出版社を訪問して、中国語版の成果報告書を出版するための学術的・事務的な協議を進めた。特に科学院との検討では、本成果が中国はもとより世界的に見ても例を見ない成果であるため、早く中国の学界に報告すべきであるとの意見を頂戴し、そのために改訂すべき諸点 (スパーサーや厚さの均一性をどう表現するか) が明らかとなった。また、中国古代青銅技術が、広くユーラシアに系譜が求められると同時にオリエントとは異なるいくつかの要素が認められることも明らかになった。中国科学出版社との協議は事務的な内容が中心だったが、報告書の体裁や印刷・製本の方法が固まり、見積取得できる段階に到ったため、次年度の出版がスケジュール・予算的にも明確となった。また、本年度末に京都・泉屋博古館で開催する日中双方の研究会を経て、翻訳作業に入り、次年度10月中の出版を目指して、研究論文の執筆や画像作成を進めていく予定である。	
【実績値】 海外共同調査数 1回 海外研究者招聘・受入数 1回	
【備考】 (参考) 学会研究会等発表 (共同研究者) ① Takafumi Niwa, Hidehiro Shingo, Takahiro Yatsuki, Yosuke Higuchi, Experimental archaeological study for reconstructing the relationship between technologies and the remains of metal artifacts: Based on an investigation of Zun-Pan vessels from the Zengzhou Yi tomb	



科学研究費成果 原稿(案)

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4564-7

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：文化財CT分析は必要性が高まっている分野であり、国際的にも日本が優先的位置を占めている。 独創性：この種の研究は世界でも類が無く、速やかな成果公開が求められる。 発展性：資料が無くても、海外で共同研究が進められ、発展性が期待される。 効率性：計測時間が飛躍的に向上し、ノウハウが蓄積されている。 継続性：住友コレクションに対する計測の蓄積がある。 正確性：デジタル計測のため、肉眼による分析に比べ確度が高い。						

2. 定量的評価

観点	海外共同調査数	海外研究者招聘・受入数				
判定	A	A				
判定理由 海外共同調査数、海外研究者招聘・受入数： 特に目標値は無いが、実務的な協議が達成できたため、A判定とした。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本研究に使用している調査研究機器は、世界的に最も優れた装置の一つとして高く評価されている。大阪・和泉市久保惣記念美術館との連携研究の他に中国古代青銅器の著名なコレクション（住友コレクション）を有する泉屋博古館との共同研究も進んでいる。また、中国科学院との研究者の連携研究も進めている。次年度はさらに多くの資料を調査すると共に、蓄積したデータの活用を進めたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	当館では、文化財を外部の博物館から借用して展示することが多いので、展示借用の際に、最新機器を用いて共同研究を進めている。すでに、これまでの研究協力において国内外の博物館や研究機関と共同研究が進んでいる。次年度はさらに連携を進めて共同研究を実施していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	8) 石棺に塗布された赤色顔料についての基礎的研究（学術研究助成基金助成金）（(5)-(6)）		
【事業概要】 本研究では、弥生時代～古墳時代の墳墓の埋葬施設（室、槨、棺）への赤色顔料の塗布について、その種類や塗布範囲の調査を行い、時期差や地域差、階層差の有無を検討することを目的とする。これまで墳墓から出土する赤色顔料の使用方法については、塗布や散布、敷かれたなどと言われることがあるが、使用対象が木棺や遺骸といった有機物であることが多く、実際にはその使用方法は明確では無い。ここでは、石棺や甕棺などの腐朽しない棺を主な調査対象とし、これらの点について検討を行うものである。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	保存修復室主任研究員 志賀智史
【スタッフ】			
【主な成果】 内面が赤く塗られた棺の初現については、これまで北部九州の弥生時代中期後半の箱式石棺墓で、ベンガラが塗布されていたものと考えられていた。しかし、同時期の甕棺墓では水銀朱が塗布されていたものがあることが明らかとなった。古墳時代の石棺等での調査は、現在調査を実施中であるが、内面にベンガラを塗布した例が多いようである。ただし、内面に朱を塗布した事例も少なからず認められる。次年度以降、調査範囲を広げ、さらに検討を行う予定である。			
【年度実績概要】 ・本年度は、主に九州地方を調査対象とした。 ・受託研究として行った弥生時代中期後半の大部分県日田市吹上遺跡の甕棺墓での調査結果を受けて、本科研費で関連資料の調査を行ったところ、当該期の北部九州では、甕棺内面に水銀朱が塗布されているものが一定量存在していることが明らかになった。棺に赤色顔料が塗布された事例としては、従来、同時期の北部九州の箱式石棺墓でのベンガラの塗布が初現と考えられてきた。今回の調査で、墳墓の形態と棺内に塗布された赤色顔料の種類に相関関係がある可能性も指摘できた。これらは埋葬施設への赤色顔料塗布の出現期の状況として、大変重要な調査成果である。 ・古墳時代前期中頃の福岡県宗像市田久瓜ヶ迫遺跡1号墳出土円筒棺の調査を行い、内面にベンガラが塗布されていることを明らかにした。 ・古墳時代中期後半の福岡県大牟田市石櫃山古墳出土1号石棺の調査を行い、内面にベンガラが塗布されていることを明らかにした。 ・長崎県大村市竹松遺跡や群馬県金井東裏遺跡での関連資料の調査を行い、発掘現場でしかみることができない赤色顔料の出土状況の調査を行った。			
【実績値】 調査回数 5回 収集資料数 30点 学会参加数 3回			
【備考】			



資料保管先での携帯型実体顕微鏡を用いた調査風景

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4564-8

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：これまで遺物として認識されてこなかった赤色顔料について、基礎的な調査を行うことが求められている。 独創性：出土赤色顔料を考古学的に検討する研究は、ほとんど行われていないため独創的な研究であると言える。 発展性：出土赤色顔料は世界各国、色々な時期に認められることから、今後は世界的視野からの検討も必要である。 効率性：出土状態の検討や顕微鏡観察は、長時間の観察が必要であるが、これまでの経験を生かし効率的に調査を実施することができた。 継続性：調査内容の質を保ちながら調査を継続している。 正確性：顕微鏡による付着状況の観察や赤色顔料粒子の観察も行っており、調査結果は極めて正確である。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	収集資料数	学会参加数			
判定	A	A	A			
判定理由 調査回数：付着状況の顕微鏡観察に長時間を必要とすることから、十分な調査回数と考えられる。 収集資料数：顕微鏡を用いた赤色顔料粒子の形態観察に長時間を必要とすることから、適切な資料数と考えられる。 学会参加数：数は少ないが、会員数の最も多い文化財科学関連の学会に参加しており、適切な参加数と考えられる。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	科学研究費による4ヵ年継続事業の1年目であるが、新知見を得られたことは大きな成果である。次年度は中四国地域を中心に調査を行いたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究は、当初の計画に沿って研究内容の水準を保ちながら順調に遂行している。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館
業務実績書

処理番号 4571-1

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	1) 博物館環境デザインに関する調査研究(5)-(7)		
【事業概要】 東京国立博物館における文化財の展示／観覧環境のデザインについて調査・研究し、今後の展示／観覧環境のデザイン向上を目的として実施する。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	企画課デザイン室長 木下史青
【スタッフ】 勝沼早苗（企画課デザイン室 アソシエイトフェロー）、矢野賀一（企画課デザイン室主任研究員）			
【主な成果】 - 平成26年4月の本館改修工事に先立ち、平成館と本館を結ぶジャンクションとなる本館17室の案内・誘導・注意サインについて、4言語(日・英・中・韓)によりわかりやすくなるよう整備した。(25年10月) - 本館から平成館へ移設・新設された<東京国立博物館 寄贈者顕彰コーナー>を、寄贈者の顕彰とともに憩いのギャラリーとしてリニューアルした。 - 平成26年度にオープン予定の「正門プラザ」は、ショップ・売札・もぎり・インフォメーションカウンターなど、東京国立博物館の来館者全体を招き入れる施設となる。この施設のサイン全てについてデザインを行った。			
【年度実績概要】 - 他館展示／観覧環境のデザイン調査：これまでの国内外の博物館・美術館での事例調査に加え、さらに地方博物館・美術館における環境デザインを調査し、特に今年度においては寄贈者顕彰コーナーの参考とした。 - 調査先／プラド美術館、ソフィア王妃芸術センター（マドリッド）、国立故宫博物院、台湾国立台湾博物館（台北）、ベルリン博物館島、ベルリン自然科学博物館（ベルリン）、ライプツィヒ造形博物館（ライプツィヒ）、沖縄県平和祈念資料館（沖縄）、福島県立美術館（福島）、青森県立郷土館（青森県）、広島県立美術館（広島）、二条城（京都）、名古屋市美術館、名古屋城本丸御殿（名古屋）、IMT インターメディアテク（東京）等			
			
本館 17 室案内・誘導・注意サイン		平成館「東京国立博物館 寄贈者顕彰コーナー」	
【実績値】 研究発表件数 5 回 ・《展示と照明》講演、ワークショップ 於・台中自然科学博物館、国立台中美術館（台中市） ほか 論文等掲載数 4 回 ・照明学会誌（照明学会）、『日本歴史』（吉川弘文館） ほか			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性		
判定	A	A	B	A		
判定理由 適時性：当館の来館者数拡大が事業目標とされる中で、より解り易い案内サインの整備が課題である。「正門プラザ」建設にともなうサイン整備にあたり、さまざまなサインに関わる検討がなされた。 発展性：平成16年度の本館リニューアルから、平成22年度のアクションプランまで、館内サインの充実がなされてきた。一方デジタルサイネージ等、技術的進歩に対応しつつ当館に適応するデザインを整備しつつある。 効率性：正門プラザでは、大型ディスプレイやモニタによる、当館初のウェブサイト情報とリンクした情報発信が可能となる予定である。今後は時間的・人的な手当て等、より効率的な情報発信を推進したい。 継続性：館内サインへのデジタルサイネージ導入についての一定の有効性は判断できる。正門プラザでの情報提供整備へ向け、継続的な最新の技術面・デザイン面での継続的な調査研究が望まれる。						

2. 定量的評価

観点	研究発表件数	論文等掲載数				
判定	A	A				
判定理由 研究発表件数：全館的な方針に沿って研究を行い、その成果として館内において計画を実施（製作・設置）している。 論文等掲載数：特にデジタルサイネージについて、最新の技術的・意匠的な面での調査研究が望まれ、文化施設のみでなく、先進的な事例として商業環境を含む調査も合わせて必要である。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	展示・公開事業の基本的なメンテナンスは欠かせない一方で、急速な技術的進歩を遂げているサインのデジタル化（デジタルサイネージ）及び画像・映像利用の増進に対応して、展示解説等への応用的デザイン研究を計画的に進めている。 平成25年度に得られた成果、特に東洋館リニューアルで実施・検証された、サイン掲出におけるコンセプトと、視認性・判読性等の方法論的知見は、特に26年度にオープンする「本館リニューアル」及び「正門プラザ」に反映させる予定。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	25年度においては本館リニューアルと正門プラザ建設の事業を中心に計画通り実施している。 引き続き館内の環境デザインのファシリティ及び質的向上を計画的に行う必要がある。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2) 博物館教育に関する調査研究((5)―⑦)
【事業概要】 当館本館特別4室及び東洋館2室、6室の教育普及事業を専門に行なうスペース「みどりのライオン」において、総合文化展と密接に関連した博物館教育事業の理論と実践に関する調査研究を実施する。 総合文化展の来館者の鑑賞体験をより豊かなものにするため、総合文化展のスマートフォン用アプリケーションガイドとして、「トーハクナビ」を一般公開し、その成果について調査する。	
【担当部課】	学芸企画部
【プロジェクト責任者】	博物館教育課長 小泉恵英
【スタッフ】 鈴木みどり（ボランティア室長）、永田香織（教育普及室任期付研究員）	
【主な成果】 ・本館特別4室及び東洋館2室、6室「みどりのライオン」における博物館ガイダンスやハンズオン体験コーナー、年間で10万人を超える利用者があり、当館の博物館教育プログラムとして定着している。この事業の一部は、当館のボランティアの主要な活動範囲となっており、博物館教育におけるボランティアの現状と課題について調査した。 ・トーハクナビは、アンドロイド版に加えて、iOS版をリリースし、さらに体験型コンテンツを充実させた。このアプリケーションは、GPSを用いた位置の測定や観覧車の滞在時間の調査などが可能であり、観覧者の回遊状況についての調査を実施した。	
【年度実績概要】 ・本館特別4室では、触知図によるハンズオン体験、東洋館6室では、開館時にはボランティアがほぼ常駐し、来館者への案内、体験コーナーの紹介を実施している。この用務は基本的に当館のボランティアが担当している。プログラムに対する来館者の対応、ならびにボランティアの果たす役割について、これらの業務を通じて調査、研究し、以下の発表を行った。 鈴木みどり 「東京国立博物館の生涯学習ボランティアについて」（文化庁「第二回企画展示セミナー」口頭発表 25年7月4日） 「東京国立博物館におけるボランティア制度の現状と課題」（日本博物館協会平成25年度研究協議会「博物館とボランティアの新しい地平」口頭発表 26年1月16日） ・トーハクナビは、ISID（電通国際情報サービス）、クウジツ社との共同研究で開発し、平成24年4月より一般公開を始め、その後、コンテンツの拡充、各種OSに対応するバージョンをリリースしてきた。本年度末までに当館の展示全般にわたるガイドコンテンツを作成し、次年度より公開の予定である。 また、本研究に関し、地理空間情報フォーラム2013において共同研究者の（株）クウジツが、成果報告を行った。 塩野崎敦 「拡がりつつある屋内におけるロケーションサービス」（地理空間情報フォーラム 2013、於日本未来館 口頭発表 25年11月14日）	
【実績値】 研究発表回数 3回	
【備考】	



クウジツ社のフォーラムでの発表

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4571-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性		
判定	A	A	A	A		
判定理由 適時性：情報化社会の発展した時代ニーズに対応し、広く公開を目指したものであるため。 独創性：今までの博物館にないサービスの提供を行っているため。 発展性：今後のサービスの多様化に向けての多くの可能性を示しているため。 効率性：有効な人材の活用ならびに、人的な投資に代わる機器の利活用を実施しているため。						

2. 定量的評価

観点	研究発表回数					
判定	A					
判定理由 研究発表回数： 東京国立博物館の教育普及活動の実践例を多角的に紹介し、情報化社会の中での博物館の役割について広く知らしめているため。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	東京国立博物館が実施している教育普及活動は、ガイダンス、レクチャー、体験型プログラムなど様々であるが、これらの業務にボランティアが積極的に関与し、成果を上げている。また、近年ではスマートフォンの普及により、来館者が情報を得る手段が変化してきているが、アプリケーションガイドの充実により、こうした時代の動きに適切に対応している。

4. 中期計画の実施状況の確認

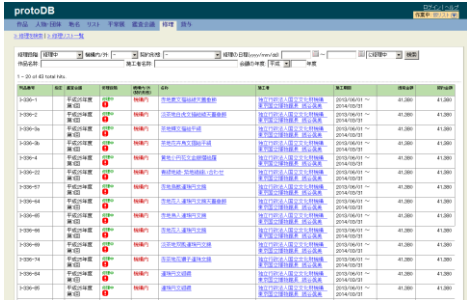
判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	博物館教育に関しては、おおむね計画に沿って進行している。時代の変化に遅れず、観覧者に対して適切なサービスが実施できるように、今後も取り組んでいきたい。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4571-3

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	3) 博物館資料・業務の情報処理に関する調査研究((5)－⑦)		
【事業概要】 東京国立博物館における収蔵品管理システムの開発を通じて、資料情報と学芸業務の有機的な関連について調査研究し、博物館における効果的・効率的な情報の管理及び蓄積、活用のための環境構築に資することを目的とする。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	博物館情報課情報管理室長 村田良二
【スタッフ】 和久井遥（博物館情報課情報管理室アソシエイトフェロー）			
【主な成果】 東京国立博物館における収蔵品管理システムのプロトタイプについて、収蔵品検索機能、平常展管理機能、鑑査会議管理機能、貸与管理機能、修理予定・履歴管理の各機能を継続的に運用し、随時改善を重ねて機能を向上させた。さらに、作品の検索性能の向上や、データの一括アップロード機能の追加を行った。また、システム環境の漸進的な更新にむけた作業を開始した。			
【年度実績概要】 収蔵品管理システムの運用を継続することにより、収蔵品のデータ更新・追加・訂正を円滑に行える環境を維持し、随時改善を重ねて一層の機能向上を図った。 作品の検索機能においては、全文検索システムを応用した索引生成の手法により、これまでよりもシンプルな実装で、同等以上の速度・精度の検索が可能となった。また、作品データの登録作業のために CSV ファイルから一括でデータをアップロードする機能を追加した。 システムは2005年から開発を継続しているものであるが、サーバソフトウェアやプログラミング言語等の環境の変化にあわせるため、また、よりメンテナンス性を高めるために、これまでも移行を検討してきたが、現行のシステムそのものを漸進的に更新していく方法がより現実的であることがわかり、そのための作業に着手をした。			
 収蔵品管理システム (修理情報管理画面)			
【実績値】 収集データ件数 209,794 件 (内訳) 作品データ件数 202,752 件 平常展データ件数 3,416 件 鑑査会議データ件数 73 件 貸与データ件数 1,094 件 修理データ件数 2,459 件			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：業務に合わせて必要とされる改修・改善を随時行っている。 独創性：既存のシステムにない総合的な博物館資料情報システムとなっている。 発展性：柔軟な機能追加・改善が可能な設計となっている。 効率性：内製により効率的な開発を行い、検索性能の向上により業務効率の向上に寄与した。 継続性：データ整備の基盤構築として継続的に実施した。 正確性：作品に関する調査結果を随時反映し、データの正確性をさらに向上させた。						

2. 定量的評価

観点	収集データ件数					
判定	A					
判定理由 収集データ件数：効果的な業務支援機能により、学芸業務を行う流れの中で効率的に無理のないデータ収集が可能となり、その結果データを着実に蓄積している。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	収蔵品のデータ蓄積と業務支援を密接に連動させたシステムにおいて効果的にデータの蓄積、活用を行うことが可能となっている。今後は、現行のシステムの機能を維持しつつ、より今日的なフレームワークやソフトウェア環境に適合的で、メンテナンス性の高いシステムとなるよう更新を重ねていく。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	各分野の研究員、業務担当者と連携をとりながらシステム開発を継続しつつ、館内の利用者アカウント管理の統合や、文書出力関連の機能強化を進める。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4) 凸版印刷と共同でミュージアムシアターでの公開に向けた研究を引き続き実施する((5) - ⑦)		
【事業概要】 館蔵文化財のデジタルアーカイブを活用した、新たな公開手法を凸版印刷株式会社と共同で研究する。 平成19年度から「国宝 聖徳太子絵伝」「国宝 灌頂幡」「重要文化財 洛中洛外図 舟木本」「土偶」「十一面観音菩薩立像」の高精細デジタルアーカイブを作成し、それらを素材としてミュージアムシアターにおけるコンテンツの公開を実施している。本年度は重要文化財「日本沿海輿地全図」(伊能忠敬の日本図)を素材にコンテンツ制作を行う。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	企画課長 井上洋一
【スタッフ】 田良島 哲(学芸研究部調査研究課長)、松嶋雅人(企画課特別展室長)			
【主な成果】 (1)前年度にデータ取得及びコンテンツ制作に着手した文化財について、ミュージアムシアターのコンテンツを公開した。 (2)重要文化財「日本沿海輿地全図」8 鋪について、凸版印刷との共同で超高精細画像データを取得し、それに基づいたシアター用コンテンツの制作に着手した。同コンテンツは平成26年6月から8月にかけてミュージアムシアターで公開する予定である。 (3)既に取得した作品のデータを元にした新コンテンツ2件を監修し、公開した。			
【年度実績概要】 (1)前年度にデータ取得及びコンテンツ制作に着手した重要文化財「十一面観音菩薩立像」について、ミュージアムシアターのコンテンツ「三蔵法師の十一面観音」として公開した。 (2)館蔵の歴史資料である 重要文化財 日本沿海輿地全図 伊能忠敬作 8 鋪(P-2906)について、超高精細画像データを取得し、それに基づき、凸版印刷が当館の監修のもとに、ミュージアムシアター用コンテンツ「伊能忠敬の日本図(仮称)」の制作に着手した。同コンテンツは平成26年6月から8月にかけてミュージアムシアターで来館者に公開する予定である。併せて同時期に平成館企画展示室において特集「伊能忠敬の日本図」を開催する予定である。 (3)作成済みのデータ及びコンテンツを元にした「土偶 縄文人の祈りのカタチ」・「洛中洛外図屏風と岩佐又兵衛」の2件のコンテンツ制作の監修を行い、特集陳列及び特別展に関連した企画として公開された。			
			
日本沿海輿地全図の超高精細画像データ取得作業			
【実績値】 データ化件数 1件(8点) コンテンツ化件数 1件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4571-4

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：博物館の情報化と、より広範な文化財の活用という現在の動向を反映している。 独創性：希少性の高い文化財を素材として、研究員の知見に基づいた他に類例のないコンテンツを制作している。 発展性：多目的に活用できるデータを蓄積している。 効率性：凸版印刷との協業により、効率のよいデータ蓄積を行っている。 継続性：共同研究以来6年を経過し、引き続き積極的な展開を図っている。 正確性：凸版印刷の持つ画像技術の応用により、高精細かつ正確なデータの取得を行っている。						

2. 定量的評価

観点	データ化件数	コンテンツ化件数				
判定	A	A				
判定理由 データ化件数・コンテンツ化件数：所期のデータ化及びコンテンツ化ができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	計画どおりに新コンテンツの公開及び次のコンテンツの素材となるデータの取得が行われた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	凸版印刷との共同研究を継続しており、アーカイブの方法も含めた作品データの蓄積と活用を進めるとともに、新シアター向けのコンテンツが公開し、平成26年度公開に向けたデータ取得を行うことができた。引き続き、研究対象の選定と方法について協議を進め、新たな素材に関する研究とデータ及びコンテンツ制作に取り組む。

【書式B】
(様式1)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4571-5

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	5) 聴力障がいを持つ児童・生徒のための鑑賞プログラムの構築に関する調査研究(学術研究助成基金助成金)((5)-(7))		
【事業概要】 聴覚に障害がいもつ児童・生徒の博物館での学習や鑑賞の困難さの特徴を示し、その具体的解決方法としての鑑賞プログラム構築を行う。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	博物館教育課教育普及室アソシエイトフェロー 川岸瀬里
【スタッフ】			
【主な成果】 聴覚障がいをもつ児童・生徒への特別支援教育についての調査と、国内外の美術館・博物館で行われているバリアフリー化、ユニバーサル化事業の調査を行った。			
【年度実績概要】 ・聴覚特別支援学校、特殊教育学会、国立特別支援教育総合研究所、聾教育研究会などでの調査、情報収集のほか、特別支援教育研究者や教員、ろう者との意見交換を行った。 ・国内外の美術館・博物館で聴覚障がいに限らず、障がい者に対応しているプログラムや設備、ツールに関する調査、情報収集した。健常者にもあらゆる障がい者にも有益なものは限られているが、聴覚障がい、視覚障がい、知的障がい、肢体不自由など障がい種を越えて、児童が利用していたものに韓国で多く見られたフロッタージュや、アニメーション等動画による解説などが挙げられる。道具の工夫等で、日本の既設のフロッタージュなどもユニバーサル化できることを国内の美術館・博物館関係者と確認した。 ・聴覚障害者への対応の遅れと、その解決法について意見交換を行った。 都内調査：三井記念美術館、東京ステーションギャラリー、山種美術館、国立新美術館 九州調査：石橋美術館、九州歴史資料館、熊本博物館、熊本県立美術館、九州国立博物館、熊本市現代美術館、福岡アジア美術館、西南学院大学博物館、福岡市博物館、北九州市立美術館、いのちのたび博物館 韓国調査：国立中央博物館、ソウル薬令市韓医薬博物館、仏教中央博物館、サムスン美術館リウム、南山コル韓屋マウル、景福宮、国立民俗博物館 和歌山調査：和歌山県立博物館			
			
韓国・国立中央博物館フロッタージュコーナー			
【実績値】 美術館等調査回数 5回 特別支援教育施設等調査回数 3回			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4571-5

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	B	A	A
判定理由 適時性：博物館のユニバーサル化という時代の要請に込えているため。 独創性：これまで注目されてこなかった聴覚障がい者を対象とした、先進的な取組を行っているため。 発展性：今後の展開を視野に入れながら行っているため。 効率性：周到な計画の上に行っているため。 継続性：計画に基づき、情報収集及び検討を重ねているため。 正確性：美術館・博物館だけでなく、特別支援教育の現場と協力し検証しながら進めているため。						

2. 定量的評価

観点	美術館等 調査回数	特別支援教育 施設等調査回数				
判定	B	B				
判定理由 美術館等調査回数・特別支援教育施設等調査回数： 広く情報収集するとともに、意見交換等を通じ、聴覚障がい者の学びに関する新たな視点を提供してきたため。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	特別支援教育の現場では、博物館への訪問を希望しているものの、受入体制に不安を抱えていることがわかった。また、美術館、博物館をはじめとする多くの公共施設で、聴覚障がい者に対する教育普及事業やサービスがほとんど行われておらず、その必要性も感じられていないことが確認された。しかし既存のプログラムの中には聴覚障がい者の学習の特徴を踏まえ、改良することで、聴覚障がい者に有益なプログラムにできることを提案してきた。今後もさらに研究を続けるとともに、成果の情報発信を精力的に行っていきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	本研究は、概ね研究計画に沿ったかたちで順調に進められていると考える。今後も新たな教育手法の有効性を検証し、また有形文化財に関する調査研究の最新の成果を活用しながら、博物館という場をいかした実践的プログラムの開発に取り組んでいきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財を活用した効果的な展示や教育活動等に関する調査・研究		
プロジェクト名称	6) 藤ノ木古墳出土品からみた考古系博物館における展示・公開に関する総合的研究(科学研究費補助金) ((5) -⑦)		
【事業概要】 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館が所蔵する藤ノ木古墳出土品をはじめ11件（3000点以上）の国宝等国指定文化財を対象に、照度・大気・振動・温湿度等の展示・収蔵環境の調査と非接触高精度三次元形状計測および透過X線撮影検査による微細物理的検査との相関性について研究し、適正保管・管理・公開を促進するための計画の指針（試案）を検討する。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	学芸研究部調査研究課考古室 研究員 品川欣也
【スタッフ】 今尾文昭(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 学芸課課長)			
【主な成果】 ・当館ならびに橿原考古学研究所附属博物館が使用している非接触高精細三次元計測機の特徴を把握するために、各々の機器の利点や弱点などについて把握することができた。 ・非接触三次元計測によって得られたデータについてレリーフ画像や断面形状を比較するだけでなく、データの解析処理を行うことによって、より細かなレベルでの物理的な検査が有効であることが判明した。			
【年度実績概要】 ・当館ならびに橿原考古学研究所附属博物館が使用している非接触高精細三次元計測機について、実際に計測作業とともに行うことでそれぞれの機器のもつ利点や弱点、また資料ごとの効率的な作業方法について意見交換を行った。 ・岩手大学工学部における調査にて、従来手計りで作成した実測図と三次元計測して得られたデータによる図示方法について意見交換を行い、また資料の微細な物理的な変化について検査を行うために必要な解析処理について助言を得た。			
			
非接触高精細三次元計測機による計測作業風景			
【実績値】 調査回数 4回 検討会参加数 2回			
【備考】			

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：非接触高精度三次元形状計測機を用いた考古資料の計測データの集積が進みつつあるため。 独創性：計測データをもとに、これまで検討が困難であった対象や方法で分析が可能となってきたため。 発展性：計測データは汎用性の高いものであるため、研究だけではなく、映像やレプリカなどの作成による新たな展示手法の開発も可能であるため。 効率性：既存の計測機器に加えて榎原考古学研究所附属博物館では新たに三次元計測機を導入しており、人的・時間的コストの削減を図っているため。 継続性：同博物館はこれまで三次元計測機を用いた青銅器(鏡や銅鐸)の計測とその研究を進めてきた。同様に分担者も三次元計測機とそのデータを用いた分析方法の開発やその実践を進めてきた。双方の研究成果を組み合わせることで、より効率よく充実した研究成果をもたらすことができると考えるため。 正確性：三次元計測による計測データは、従来の手図りによる記録方法とは異なるもので、確度の高いものであるため。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	検討会参加数				
判定	A	B				
判定理由 調査回数：三次元計測機を用いた計測データの分析方法の開発のために、資料の特性に応じた検討を行ったため。 検討会参加数：全体での検討会が複数回行われたが、業務などの都合で参加できないことがあったため。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	研究計画の遂行が不十分なために、分析方法の開発やその結果に対する十分な議論ができず、成果の公表にいたっていない。次年度は計画に基づいて研究を実施し、成果の公開を進められるようにする。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
ほぼ順調	三カ年の研究計画の一年目にあたる本年度は個々の非接触高精細三次元計測機のもつ特性、微細な物理的な変化を把握するための分析方法の確立のための計測手順や誤差の扱いについての意見交換ができ、基本的な共通認識が得られた。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	7) 日本とドイツの美術解剖学教育の発展と展開 (科学研究補助金) ((5)-(7))
【事業概要】 東京国立博物館所蔵の美術解剖学関連資料について調査を行い、我が国における美術解剖学の導入及び教育方法を位置付ける過程を明らかにする。さらにこれら資料の公開を目的として特集陳列を実施する。	
【担当部課】	学芸企画部
【プロジェクト責任者】	企画課デザイン室長 木下史青
【スタッフ】 宮永美知代 (東京藝術大学大学院美術教育 美術解剖学Ⅱ 助教・客員研究員)	
【主な成果】 東京国立博物館所蔵の美術解剖学関係資料、特に森鷗外・久米桂一郎・黒田清輝に関する資料調査を、24年度より継続して行った。	
【年度実績概要】 ・他館における資料調査 25年8月31日 久米美術館 『学んだ！教えた！久米桂一郎と美術解剖学展』(25年8月24日～10月14日) 調査内容：美術解剖学関連の久米桂一郎に関する資料及び作品等の展示方法について 25年11月 ベルリン自然科学博物館(フンボルト大学附属)において解剖学関連等資料の展示調査を行った。 ・館内での資料調査 26年1月～2月、黒田の滞欧時代のものと思われる「美術解剖学ノート」の翻刻を行った。 久米美術館所蔵の美術解剖学関連ノート・スケッチ・メモ(コピー)について整理を行った。	
 久米美術館『学んだ！教えた！ 久米桂一郎と美術解剖学展』  ベルリン自然科学博物館 の解剖学関連資料の展示  「美術解剖学ノート」(当館蔵)	
【実績値】 資料調査回数 5回(うち他館2回、館内3回) (参考値) 研究発表件数 1件(①)	
【備考】 研究発表 ①・25年6月27日(木) 映画「タリウム少女の毒殺日記」トークイベントにて、当館所蔵資料紹介・美術解剖学について発表を行った。	

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4571-7

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	発展性	効率性	継続性		
判定	A	A	B	A		
判定理由 適時性：森鷗外・黒田清輝・久米桂一郎がドイツ・フランスから移入した「美術解剖学」に関わる基礎資料が、歴史資料として当館（東京国立博物館と黒田記念館）に保管されており、総合的に調査する事が求められている。 発展性：科研のテーマであるドイツにおける教育的関連を研究する必要があるが、特にドイツや東京美術学校と関係の深い森鷗外関係資料との関連性について発展することも視野に置いている。 効率性：黒田清輝と同時期にフランスに学んだ久米桂一郎に関わる資料を保管する久米美術館所蔵資料と並行して調査研究することにより、より効率的に今後も新たな知見が得られることが考えられる。 継続性：昨年度に引き続き、資料紹介論文・ウェブサイト上等で、より広い対象に公開することができた。						

2. 定量的評価

観点	資料調査回数					
判定	A					
判定理由 資料調査回数：当初の計画通り資料調査を行った。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	美術解剖学関連資料は現在「館史資料」の位置付けで、東京国立博物館所蔵の列品として保管されている。これらを横断的総合的に研究する必要があると、24年度に特集陳列企画としてまとめて公開する機会を得た事は意義深いことであった。25年度は「美術解剖学ノート」の翻刻・翻訳に着手し、作業を進めており、次年度以降その成果を『MUSEUM』等研究誌にて公開することを計画している。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	前年度までの成果をもとに未整理の資料を分類し、今後の公開機会に向けて研究をすすめている。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	8) 文化財管理における美術品用語辞典の作成（科学研究費補助金）（(5)-(7)）		
【事業概要】 本研究は、日本の文化財について使用されている用語を収集・体系化し、それら用語に関する典拠情報を作成することを目的とするものである。			
【担当部課】	学芸企画部	【プロジェクト責任者】	博物館情報課情報管理室長 村田良二
【スタッフ】 河内晋平（東京藝術大学総合芸術アーカイブセンター 教育研究助手）、原田一敏（東京藝術大学大学美術館 教授）			
【主な成果】 文化財に関する情報を扱う施設から収集した用語データを整理、体系化した。特に分担者は、データの整理や公開方法について検討した。			
【年度実績概要】 文化庁が公開している国宝・重要文化財リストと指定文化財目録、東京国立博物館が館内で使用している収蔵品データベース、東京藝術大学大学美術館の収蔵品データベースそれぞれから、絵画、書跡、工芸の分野を中心に、名称や品質形状といったカテゴリの用語をデータとして収集した前年度に続き、それら収集した用語について整理し、体系化を行った。また一部について試行的に用語解説を付与し、Wiki をベースとしたデモ版の用語集システムを検討した。			
動画テープ名: mono project tape0001 投稿情報: ☐ なし ☒ 投稿済 ☐ 未投稿 vimeoタイトル: 松田権六作品に関する増村紀一郎教授へのインタビュ 分野: 漆工 作家名: 松田権六（1896-1986）／増村紀一郎（1941-） 関連人物: 横溝廣子、藤幡正樹 作品名: 松田権六《草花鳥獣文小手箱》（大学美術館） 再生時間: 38:08 動画説明: 漆芸家・増村紀一郎のインタビュー映像。東京芸術大学と国立情報学研究所による共同研究「ものプロジェクト」（2001～2003年）に際して撮影された。 キーワード: 日本、近代、現代、美術史、工芸、漆工、美術教育、技術記録、オーラルヒストリー、東京美術学校、東京芸術大学、ものプロジェクト 権利保有者: 大学美術館 vimeo目次: 0:25 蒔絵の技法について 01:48 平蒔絵と高蒔絵の違い 05:25			
Wiki をベースとしたデモ版画面			
【実績値】 整理用語件数：47,479 件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 東京国立博物館

処理番号 4571-8

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性			
判定	A	A	A			
判定理由 適時性：用語の典拠情報を提供する上でインターネット上での提供手法を検討できたため。 独創性：これまでに作成されていない典拠データであり、提供手法もあわせて研究している。 発展性：本研究の手法は他分野の文化財関連用語の典拠情報整備にも適用できるため。						

2. 定量的評価

観点	整理用語件数					
判定	A					
判定理由 整理用語件数：収集した用語データについて網羅的に整理した。						

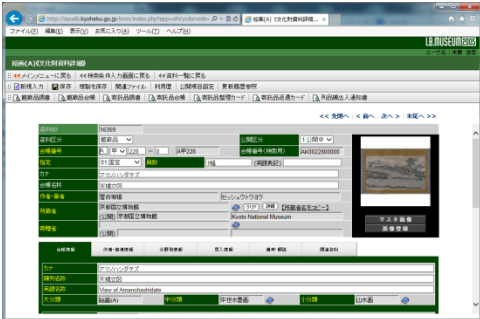
3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	典拠情報整備に向けて着実に用語データを収集し、分析をしている。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	文化財情報の整備のための基盤として期待される典拠情報の整備と分析が順調に進められた。また提供手段のデモ版の検討も行った。これらを元に、次年度はさらに提供手法についても検討を進める。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進。		
プロジェクト名称	1) 文化財情報に関する調査研究 ((5) -⑦)		
【事業概要】 当館のウェブサイトや文化財情報システムなど、運用中のコンテンツの問題点の検討やサイボウズなど機構内の共通システムの運用に対する対応、館内 LAN システムの発展的整備の方向性など、文化財情報に関する諸般の調査研究を実施する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	上席研究員 赤尾栄慶
【スタッフ】 後藤 真（花園大学専任講師・客員研究員）、澁谷完滋（総務課事業推進係係員）			
【主な成果】 (1) 写真資料のデジタル化を進め、ウェブサイトにおける収蔵品公開データベースの追加・更新を随時行った。 (2) 収蔵品公開データベースの解説文について、研究の進展に伴う新たな知見を反映させ更新を随時行った。 (3) 文化財情報システムの運用上の問題点を検討し、システムの改良を随時行った。 (4) 管理棟移転を期に、研究系ネットワーク・画像処理環境の近代化を通じて作業環境を向上させた。			
【年度実績概要】 ・各月ごとに現時点での情報システムの運用面における実態調査を行い、その結果について、当館研究員・事務職員・情報システム技術担当と共同で検討会を実施して、システム全体の問題点を抽出。改良を随時行った。 ・特別観覧業務（写真資料の活用等）のデジタル化に伴い、システムへの高精細画像追加・更新を継続して実施した。 ・デジタル撮影及び写真原板デジタル化の進展に伴い、不可逆処理前の RAW データを保管可能な大容量ストレージの整備を、継続して実施した。 ・ウェブサイトコンテンツと情報発信についての対応を強化するため、上記検討会にてワーキンググループを編成し、ウェブサイトコンテンツの検討会を集中的に実施した。 ・ウェブサイトにおける公開情報の充実に向けた取り組みとして、国宝・重要文化財をはじめとする高精細画像の公開データベース更新、研究紀要『学叢』バックナンバーPDF 版の拡充、館外貸出作品一覧の更新、展覧会情報の更新など、コンテンツ充実に向けての検討を行った。 ・増大する研究系データの集積と、耐用年数を迎えたシステム更新コストの削減を両立させるため、研究系システムを仮想化技術により集積する仮想化基盤システムを試験的に小規模環境で構築し、実証運用を開始した。 ・管理棟の平成知新館移転を通じ、研究系ネットワークの基幹インフラを刷新し実効通信速度・安定性の向上を図るとともに、デジタル化で使用する画像処理環境を見直すなど、関連業務の作業効率向上を図った。			
【実績値】		文化財情報システム（資料概要画面）	
・システムの現状調査	10 回（概ね 1 回/月）		
・システム検討会	10 回（概ね 1 回/月）		
・ウェブサイトコンテンツの検討	10 回（概ね 1 回/月）		
【備考】			



文化財情報システム（資料概要画面）

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 適時性：平成知新館への移転や開館に向け、システム移転やウェブサイト公開において適時対応を行った。 独創性：館蔵品をほぼ網羅した収蔵品公開データベースや解説ページの更新を行った。 発展性：新館において導入されたネットワークシステムや仮想化サーバ装置の能力向上により、発展性を確保した。 効率性：文化財情報システムの改修を通じ、資料管理・画像管理業務における業務効率の向上を行った。 継続性：中長期的な運用計画を検討し、増大する画像やデータを処理するためのシステム更新を継続的に行った。 正確性：収蔵品公開システムを適宜更新する事で、正確性を維持する取り組みを行った。						

2. 定量的評価

観点	システム現状調査	システム検討会	ウェブサイトコンテンツの検討			
判定	A	A	A			
判定理由 システム現状調査：情報基盤整備のため各種システムの問題点について随時調査を行ったほか、管理棟移転のため現状システムとネットワークの点検を随時行った。また、移転時期の遅れに伴う整備計画見直しのため、耐用年数を超過するシステムの延命等について調査を行った。 システム検討会：定期的な検討会においてウェブサイトや文化財情報システムの運用改善、リニューアルなどを検討し、対応を行った。 ウェブサイトコンテンツの検討：平成知新館開館に向けたアクセス件数向上のため、ページ構成や動線の整理による見やすさの向上、CMSシステム導入による情報速達性の向上などを検討し、ウェブサイトのリニューアル要件を取り纏め構築を行った。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	ソフトウェア面では文化財情報システムなど各種システムの改修・情報更新を続け、管理棟の新建屋移設を機に通信インフラ網の新規設計や機材の一新など、ハードウェア面の強化を行った。また、情報発信の要であるウェブサイトについても、質・量ともにさらなる充実を図った。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	予算・人的リソースを最大限に活用し、山積する問題点を整理・順位付けすることで、緊急性の高い事項から順次検討を行い、改良を加えている

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進。		
プロジェクト名称	2) 新平常展示館の新装開館に向けた、同館における新たな教育ツールの開発のための調査研究 ((5) -⑦)		
【事業概要】 新平常展示館の新装開館に向けて、館内に設置する「ミュージアム・カート」を開発・作成する。これは、カート上でハンズ・オン教材を展開し、対話によって展示作品や文化財への理解を深めるための教育ツールである。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教室研究員 水谷亜希
【スタッフ】 山川暁（教育室長）			
【主な成果】 (1) 他館の教育ツールの調査 (2) 試作品の作成と反応調査 (3) 「ミュージアム・カート」に配備する教材の作成			
【年度実績概要】 (1) 他館の教育ツールの調査 「ミュージアム・カート」の作成にあたり、他館の教育ツールやプログラムを体験、見学、事例報告を聞くなどして、事例を調査、資料を収集した。(34 件) 具体的には、今年度は東京国立博物館や京都国立近代美術館、京都大学総合博物館、大津市歴史博物館などに赴いたほか、当館も参加した「こども☆ひかりフェスティバル」で他館のブースを見学したり、全国美術館会議や日本博物館協会の研究部会で他館の事例発表を聞いたりするなどした。			
(2) 試作品の作成と反応調査 「ミュージアム・カート」の実際の運用にあたっては、新たに募集する「京博ナビゲーター」（ボランティア）が常駐し、来館者とやりとりをする方式を想定している。そのため、実際にどのようなやりとりが可能となるか、子どもを対象として、事前に反応調査を行った。 絵画の材料見本（岩絵具・膠・金箔等）については、試作品を作成し、このプロジェクトとは別途実施した絵画に関する訪問授業やワークショップに持参し、子ども達の反応を観察した。 銅鐸、銅剣のレプリカについては、実際にカートに設置してモデルに触ってもらい、どのような反応があるか、取り扱いの際の安全性も含めて調査した。		 試作中のミュージアム・カート	
(3) 「ミュージアム・カート」に配備する教材の作成 考古、絵画、彫刻の3分野について「ミュージアム・カート」に配備する教材を作成した。作成にあたっては、各専門家に制作や助言を依頼した。 考古：銅鐸レプリカ、銅剣レプリカ、銅戈レプリカ（計3件） 絵画：岩絵具、膠、金箔、胡粉、墨、絵筆、画絹、紙（計8件） 彫刻：衣紋の彫刻見本、漆箔工程見本、木材見本（計3件）		以上合計 14 件	
【実績値】 他館の事例調査 34 件 カートに配備する教材の作成 14 件			
【備考】			

【書式B】
(様式2)

施設名 京都国立博物館

処理番号 4572-2

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	正確性		
判定	A	A	A	A		
判定理由 適時性：リニューアル・オープンに向けた新しい取り組みである。 独創性：カート上でハンズ・オン教材を展開し、対話によって理解を深める方法は古美術の分野では珍しく、あまり例のない取り組みである。 発展性：実際の運用に基づき、教材の活用方法を改善したり、カート内の教材を増やしたりすることで発展させることができる。 正確性：作成にあたっては、各専門家に制作や助言を依頼し、展示作品や文化財への理解を深めるために十分な質を確保した。						

2. 定量的評価

観点	他館の事例調査	カートに配備する教材の作成				
判定	A	A				
判定理由 他館の事例調査：前年度までの調査結果に加え、参考事例として十分な件数を調査することができた。 カートに配備する教材の作成：3つの分野においてそれぞれ、基本となる教材を作成することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	リニューアル・オープンに向けて、調査、試作、制作までを行うことができた。次年度は実際に利用者の反応を見て、教材の改良や活用方法の発展、追加の制作を行う。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	新平常展示館の新装開館に向けた、同館における新たな教育ツールの開発のための調査研究については、順調に進んでいる。今後は他の分野についても制作する予定である。また、制作した教材を、訪問授業やワークショップなど、別の活動にも応用したい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進。
プロジェクト名称	3) 高精細デジタル複製を使用した文化財鑑賞教育についての調査研究 ((5) -⑦)
【事業概要】 京都市教育委員会の協力のもと、京都国立博物館とNPO法人京都文化協会が共同で行っている訪問授業、「文化財に親しむ授業」の理論と実践に関する調査研究を実施し、その成果を発展的な事業展開のために公開することを目的とする。公開の方法として、学校教員に向けたガイドブックを作成する。	
【担当部課】	学芸部
【プロジェクト責任者】	教育室研究員 水谷亜希
【スタッフ】 山川暁（教育室長）	
【主な成果】 (1) 文化財ソムリエ（大学生ボランティア）に対するスクーリングを行った（18回） (2) 京都市内の小中学校への訪問授業を行った（7回） (3) 『文化財に親しむ授業ガイドブック』を刊行した（1000部）	
【年度実績概要】 (1) 「文化財に親しむ授業」で講師を務める文化財ソムリエ（日本文化を専門に学ぶ大学生ボランティア）に対するスクーリングを18回行い、ソムリエが授業内容や教材を作成する課程で、指導・助言を行った。 ソムリエからは、子どもとのやりとりの中で、「伝えることの難しさや面白さを実感した」という意見があった。また、大学や研究分野の異なる学生との交流が「自分の視野を広げるのに役立った」という声も聞かれた。他館の学生ボランティアとの交流や、博物館教育を研究する大学院生の見学などもあり、この活動が、文化財や教育普及について学ぶだけでなく、学生同士が大学の枠を超えて出会い、交流する場としても機能するという成果があった。	
(2) 京都市内の7校の小中学校で訪問授業を行った。授業では教室に高精細デジタル複製を持ちこみ、子どもとの対話を中心としながら、作者や制作された時代、画材などの紹介も行った。授業にあたっては、そのつど事前に学校の先生方と打合せを行い、内容を検討した。児童・生徒のアンケートでは、「今まで興味がなかったけど面白く見えてきた」「作者のことや屏風のこともっと知りたい」という意見が多数見られた。 また、2年続けて授業を受けた生徒からは「文化財ソムリエになりたい」という声が聞かれ、若い大学生が講師を務めることで憧れの気持ちが生まれ、文化財に関する活動に興味関心が高まると言う効果も見られた。	
(3) 学校からは以前より、訪問授業の回数を増やしてほしいという要望があったが、準備期間を考えると文化財ソムリエが訪問授業を実施できる回数には限度があり、要望に全て答えることができないのが課題であった。それを解決するために作成したのが、これまでの活動などをまとめた『文化財に親しむ授業ガイドブック』である。次年度の新学期に京都市内の小中学校に配布し、学校の先生方に高精細複製を用いた授業を実施していただく予定である。さらに、そのノウハウを文化財ソムリエにフィードバックすることで、博物館教育と学校教育、両者の活動をより充実したものに発展させていく。	
【実績値】 ・スクーリングの実施回数 18回 ・訪問授業の実施回数 7回 ・ガイドブックの刊行部数 1,000部 『文化財に親しむ授業ガイドブック』	
【備考】 『文化財に親しむ授業ガイドブック』京都国立博物館、2014年（企画・執筆 水谷亜希）	



訪問授業の様子



『文化財に親しむ授業ガイドブック』

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	S	A	A	A	A
判定理由 適時性：学習指導要領の改訂に伴い、学校教育では我が国の文化財への感心がいっそう高まっている。学外に児童・生徒を連れ出さなくてもよい訪問授業は、時間的・金銭的にも、安全面においても学校側の負担が少なく、最も要望の高い事業である。 独創性：博物館が大学生を育成し、大学生が小中学生に教え伝える、という二重の教育を担っている点が独創的である。本事業は、大学生、小中学生の双方にとって学習の場となっている。 発展性：ガイドブックを作成したことで、次年度以降、教員が高精細複製を使った授業をすることが可能になった。 効率性：文化財ソムリエが講師と補助（子どもに話しかけたり、屏風を開いたりする）を務めることで、クラス単位での授業やグループ活動が可能になり、より親密なコミュニケーションを通して文化財の魅力を発信することが可能となっている。 継続性：先輩の文化財ソムリエを後輩が見習うことで、人が入れ変わっても蓄積したノウハウが受け継がれていく。 正確性：研究員が、教材となる文化財に関するレクチャーを毎年行っており、文化財ソムリエは最新の研究成果を学んだうえで授業を行っている。						

2. 定量的評価

観点	スクーリングの実施回数	訪問授業の実施回数	ガイドブックの刊行部数			
判定	A	A	A			
判定理由 スクーリング実施回数： 当初の予定通り、月に約2回のペースで計18回実施し、文化財ソムリエの育成に十分な効果があった。 訪問授業 実施回数： 年間で計7回実施した。文化財ソムリエが授業内容や教材を作成するために必要な準備期間を考慮し、最大で実施できる回数を行った。 ガイドブック刊行部数： 新学期に京都市内の小中学校に配布する部数に加え、公立図書館と、全国の教育普及関係者への活動紹介のために必要な部数を作成した。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本活動は平成21年度から継続しており、ノウハウの蓄積や文化財ソムリエの成長に伴い、今年度は例年にも増して充実した活動を行うことができた。増え続ける訪問授業の要望に全て答えられないことが課題であったが、教員向けのガイドブックを作成することで、次年度の教員による高精細複製を用いた授業実施にむけて、下地を整えることができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	高精細デジタル複製を使用した文化財鑑賞教育についての調査研究は、これまでの活動の蓄積を生かし、年々内容が深まっている。博物館外に持ち出すことができ、間近で鑑賞できるという高精細複製の特性を生かし、今後も、文化財に対する興味関心を育む教育普及活動に取り組んでいく。

当館学芸部職員による出張講義を掲載した
新聞記事

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：博物館が基点となった「世界遺産学習」とは何かを追求する好事業となった。 独創性：展覧会情報を生かした「語りかけ」を検討することで、他の観光案内にはない博物館のオリジナリティをもたせることができた。 発展性：「世界遺産学習」活動の充実により、ボランティアガイドの育成・充実にも貢献し、来館者向けの開設サービスの向上にもつながっているため。 効率性：職員・ボランティアで共有された情報を繰り返し利用して生徒に語ることができ、効率的であり、かつ反復により精度を高めることにもつながった。 継続性：「世界遺産学習」は継続的に行っているため。						

2. 定量的評価

観点	「世界遺産学習」 に来校した小学校数	出張講義 に赴いた回数				
判定	A	A				
判定理由 「世界遺産学習」に来校した小学校数：「世界遺産学習」に来校した小学校数が33校に達した。（目標：20～30校） 出張講義に赴いた回数：出張講義に赴いた回数が3回に達した。（目標：2～3回）						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	職員とボランティアの間で情報を検討する時間が多くとれば、「世界遺産学習」のみならず一般来館者への解説サービスの向上にもつながるものと考えます。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	「世界遺産学習」は歴史・伝統文化の宝庫、奈良にある博物館が担うべき重要な事業である。今後の継続性のみならず発展性をもふまえて、さらに情報の蓄積と方法論の先鋭化をはかっていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2) 文化財アーカイブズの形成に関する理論的・実践的研究を行い、その成果をデジタル画像の作成・各種データベースの構築（収蔵品・画像・図書）・各種情報資源の公開推進に反映させる。（学術研究助成基金助成金）（(5)－⑦）
【事業概要】 当館が活動範囲とする仏教にかかわる歴史と美術について、展覧会や調査研究事業と連動した情報収集を行い、そこにデジタル技術を適切に取り入れることにより、データの継続的な作成・データベースの構築・情報資源の公開ならびに共有へと展開させる。その際には実践に即した方法論を鍛え、文化財の保存活用に資するアーカイブズの形成・発展にも寄与することを目指す。	
【担当部課】	学芸部資料室
【プロジェクト責任者】	室長 宮崎幹子
【スタッフ】 岩田茂樹(美術室長)、内藤栄(工芸考古室長)、野尻忠(企画室長)、岩井共二(教育室長)、谷口耕生(保存修理指導室長)、吉澤悟(情報サービス室長)、清水健(企画室員)、岩戸晶子(列品室員)、斎木涼子(教育室員)、北澤菜月(情報サービス室員)、山口隆介(美術室員)、永井洋之(工芸考古室員)、原瑛莉子(企画室員)、佐々木香輔(資料室員)	
【主な成果】 デジタル撮影の本格的な稼働をうけ、その安定的な継続を目指して、撮影機材、撮影環境、保存用ストレージ、体制等の整備を引き続き行い、多数の文化財を撮影した。館内の情報システムや公開用データベースのリプレイス、データ更新を適宜行い、情報資源の拡充と公開に積極的に取り組んだ。仏教美術資料研究センターにおいても、資料と施設の整備を継続的にを行い、公開と見学受け入れにより、一般への普及に努めた。上記の実践と並行して、文化財アーカイブズに関する研究を進めた。	
【年度実績概要】 ・デジタル撮影 特別展「當麻寺」の開催と連動して、30年ぶりに国宝綴織當麻曼荼羅の撮影が実現した。高精細デジタルカメラを用いた分割撮影と接合を行うことにより、現状で最も高品質の画像を取得することができた。これに続いて當麻曼荼羅文亀本、貞享本の撮影と接合も実施し、當麻曼荼羅3幅の画像が揃い、さらに他の展覧会出陳作品の撮影も多数行った。これらの画像は当館以外では得ることが極めて困難なもので、基礎資料としての整備と今後の活用が可能となったことは大きな成果である。また、特別展「みほとけのかたち」の開催に合わせて、館蔵品・寄託品の彫刻を新たに撮影した。これまでにない角度や部分のカットを多数撮影し、国宝・重要文化財を含む重要作例の基礎資料を充実させることができた。 ・国立情報学研究所との共同事業 国立情報学研究所の協力を得て、国宝綴織當麻曼荼羅原本・文亀本・貞享本の画像を用いたデジタルコンテンツを2種制作し、展覧会場などで公開した。その内の1つは3幅の當麻曼荼羅を任意の場所で自在に拡大・比較出来るもので、操作性の高さと学術的な有用性から、観覧者ならびに専門家から大きな反響を得た。 ・奈良女子大学への学術協力 奈良地域の文化財の画像公開を目的とする「奈良地域関連資料画像データベース公開事業」において奈良女子大学附属図書館と学術協力の協定を締結している。今年度はこの事業の一環で、寄託品の日張山縁起（青蓮寺）の撮影を実施し、画像提供を行った。 ・「日本美術院彫刻等修理記録」の整理とデータベース構築 「日本美術院彫刻等修理記録」の整理とデータ作成を継続した。前年度に引き続いて、彫刻部門の研究員の協力を得てガラス乾板の同定を行い、撮影対象の名称及び所蔵者を明らかにすることが出来た。データベースについては、現在学芸部内で共有しているものを一般公開に向けて改修する作業を行った。	
【実績値】 画像撮影件数：4,561件 データ登録件数（画像データベースへの個別データ登録）：9,093件（そのうち公開 4,280件）	
【備考】	



なら仏像館での寄託品の撮影風景



「當麻曼荼羅デジタルビューア」

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	独創性	継続性	発展性	適時性	効率性	正確性
判定	A	A	A	A	A	A
判定理由 独創性：展覧会や調査研究事業と密接に関連させることにより貴重な文化財の撮影を行い、当館以外では取得の困難な画像を多数蓄積し、稀少かつ学術的価値の高い文化財アーカイブズの形成へと繋げることができた。 継続性：画像の作成枚数及びデータベースへの登録件数を順調に増加させ、公開に結び付けた。 発展性：画像が文化財指定調査や修理時の基礎資料となるなど、文化財の研究や保存の進展に大きく貢献した。また、データベースの構築や連携にも積極的に取り組み、文化財アーカイブズの発展性を示した。 適時性：南都を中心とした文化財の新発見とも連動しており、適切なかたちで新たな記録の蓄積が叶った。 効率性：限られた人員と予算の範囲内において、効率的に撮影ならびに登録件数を増加させた。 正確性：調査に伴って取得された一次的なデータに基づいてアーカイブズの形成を行っており、またデータベースの継続的かつ安定的な運用を行うことにより、信頼性の高い情報を公開している。						

2. 定量的評価

観点	画像撮影件数	データ登録件数				
判定	A	A				
備考 画像撮影件数：本年度も十分な調査と撮影を実施しており、画像撮影件数は豊富であった。 データ登録件数：撮影後の処理やデータベースへの登録件数については、当館の規模やスタッフ数を勘案しても他機関と比較して遜色のない数をこなしており、順調に増加している。						

3. 総合的評価

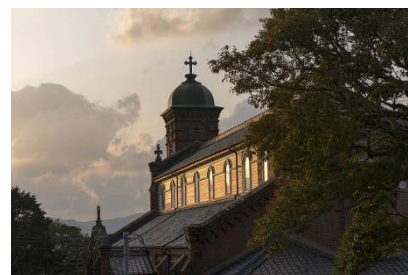
判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財の調査と撮影は、文化財の保存や所蔵者の意向、物理的・時間的制約など様々な要因が影響するため、過去の平均値との比較から年度の実績を評価することは必ずしも適切ではない。実績概要でも述べたとおり、當麻曼荼羅に代表されるような、学術的に重要でありながら調査と撮影の機会を得ることが通常では極めて困難な文化財について、調査を実施し、質の高い画像を取得して、公開へと繋げていることの意義は非常に大きい。今後も当館の事業と密接に連携しつつ情報の蓄積を続け、仏教美術情報の一大拠点として、コレクションの質・量双方の維持に努める予定である。 情報資源の運用にあたっては、デジタル技術を適切に取り入れ、内外の複数のデータベースとの連携に取り組むと、文化財アーカイブズ形成の実践を鋭意進めている。今後も更なる発展を視野に入れた研究に力を注いでいく。 また、国立情報学研究所の技術支援を得て、当館の画像を利用したデジタルコンテンツの制作と公開を行う共同事業も実績を重ねている。高品質の画像を、一般利用者と研究者がともに満足できるようなかたちで発信しており、調査研究の成果を幅広い層に向けて還元していくという意味でも大きな成果をあげている。人員と予算が限られる現在のような体制の中で、外部の研究機関との連携を効果的に展開している点でも評価できる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	デジタル撮影については現在のところ安定的な稼働を実現できているが、館内での処理から最終的な情報公開までの一連の流れについて、今後とも人材及び機材の確保を含めた長期的な展望が必須である。また、現在行っているカラー・近赤外線デジタル撮影にとどまらず、透過X線・CT撮影についてもデジタル化を実現すべく、機材・設備の整備が急務である。当館では仏教美術分野では国内唯一と言っていい貴重な画像コレクションを維持管理しているが、文化財調査の拡充にあわせて、アーカイブズの充実がはかれるよう体制を充実させていくことが肝要である。 今後も文化財の保存・活用そして研究の基盤として機能すべく、文化財アーカイブズ形成の実践を続けていくとともに、それを下支えする理論の構築にも取り組んでいく。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	1) NHKと協同で高精細画像を活用したシアター4000での映像公開に向けた研究 ((5)－⑦)
【事業概要】 テレビの世界ではフルハイビジョンが主流だが、その4倍の画素数の4Kテレビという高画質のテレビが近年普及しようとしている。当館では開館以来、この4Kのさらに4倍の密度を有する8Kというスーパーハイビジョンシステムによる映像を、世界で唯一の常設施設として公開してきた。このスーパーハイビジョンの質感と臨場感に優れた特性を、文化財の保存と活用のために、魅力的なコンテンツ制作と、コストも考慮した新しいシステムの調査研究を推進する。	
【担当部課】	展示課
【プロジェクト責任者】	課長 赤司善彦
【スタッフ】 三輪嘉六（館長）、臺信祐爾（企画課長）、河野一隆（企画課文化交流展室長）	
【主な成果】 今回、プロジェクタシステムが機器更新を迎えることから、新しい機器の実験を通じて、最適なプロジェクタシステムの比較調査を実施した。スーパーハイビジョンシステムの将来を見据えたときに、機器の技術情報を関連企業にのみ独占させておくのではなく、当館自ら最新技術動向を把握し、調査研究を行うことで安定運用とコスト削減のバランスを図ることができた。また、新しいコンテンツを上映公開した。	
【年度実績概要】 - 当館のスーパーハイビジョンシステムの主な仕様である画面サイズ、解像度、階調を満足させ、あるいはそれに近い性能を有する表示装置をNHKと共同で選定した。実際の選定ではプロジェクタ方式だけでなく、これらとは根本的に表示方法が異なる液晶ディスプレイも候補に入れて、現在3つの企業が製作している3機種を選定した。 - それぞれに特長と短所があることから、装置の方式や解像度、光出力、画面サイズ、映像信号入力方式などの属性を調査して、性能の差を調べるとともに、シアターでの映像実験を行うなどして、性能とコスト等の多角的な観点で評価を行った。あわせて、選定した機種を用いる前提で、他の関連装置（映像信号再生装置・映像信号変換装置・画像管理装置）についても、調査を実施した。その結果、本システムの安定動作を保証する仕様と、その検査・支援体制をまとめることができた。 - 長崎の島嶼部には、江戸時代にキリシタン弾圧が始まると多くの人が逃れるように移り住んでいた。そこでは信仰が密かに守られ、明治時代に信仰が認められるようになると、自分たちの教会を建てはじめた。こうした教会群を静止画で撮影し、これを「受け継がれるおもい、小さな島の教会群」のタイトルで番組を製作し、定期的な上映をすることができた。	
【実績値】 ○調査回数 2回 ・現地調査 2回（25年4月11日・8月26日） ○打合せ回数 5回 ・コンテンツ上映の打ち合わせ 2回 ・設備改善についての打ち合わせ 3回	
【備考】	



上映番組の一場面

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4574-1

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：教会群は、ユネスコ世界文化遺産暫定リストに登録されており、その番組制作の意義は大きい。 独創性：動画ではなく、あくまでも静止画によって臨場感あふれる番組を制作できた。 発展性：将来の安定的な映像の展開ができる機器のシステムのあり方について見通しが立った。 効率性：今後、機器を取り替えることで大幅なランニングコストの低減を図る目途がついた。 継続性：NHKもスーパーハイビジョン放送の早期実現に積極的に取り組むこととなり、当館との連携を協議できた。						

2. 定量的評価

観点	調査回数	打合せ回数				
判定	A	A				
判定理由 調査回数：計画通り実施することができた。 打合せ回数：予定通り実施することができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	動画的な手法も取り入れ、臨場感あふれる教会の姿を観覧者に感じていただくことができた。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	中期計画に沿った内容で実施でき、展示作品を分かりやすく伝える手法として、今後さらにハード面も含めて開発・改良を図りたい。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	2) 特別展のテーマに則した、解説パネル、冊子、ワークショップ等、観覧者の理解促進のための教育普及プログラムの調査研究 ((5) - ⑦)
【事業概要】 特別展ごとに観覧者に展示内容の理解を促進するため、教育普及プログラムを実施する。本年度は、「大ベトナム展」「中国 王朝の至宝」「尾張徳川家の至宝」「国宝 大神社展」の4つの特別展において、教育普及プログラムを実施する。	
【担当部課】	学芸部企画課
【プロジェクト責任者】	課長 臺信祐爾
【スタッフ】 藤田励夫（前博物館科学課保存修復室長）、市元壘（企画課特別展室主任研究員）、酒井芳司（展示課主任研究員）、楠井隆志（展示課主任研究員）、西島亜木子（企画課特別展室アソシエイトフェロー）、山下久美子（企画課研究補佐員）、鮫島由佳（企画課研究補佐員）	
【主な成果】 展示室内での解説パネルの掲出、体験コーナーの設置、配布物・ジュニアガイドの作成、ワークショップ、講演会などを実施。アンケートでは、展示を楽しめた、わかりやすかった、親近感が持てた、などの感想を得た。	
【年度実績概要】 わかりやすい解説パネルや、展示物をより身近に感じるプログラムは来館者にも好評であるため、来館者の要望を反映したさまざまなプログラムを実施した。 ・「大ベトナム展」では、ベトナムの歴史をわかりやすく伝えるため、ベトナムを旅行しているような気分で展示を見てもらうよう、トラベラーズノート風の解説パネルを設置した。 ・「中国 王朝の至宝」展では、夏休み期間中であつたことから、夏休みの宿題冊子風のジュニアガイド「夏休みの朋友」を作成し、小中学生に配布した。また、展示室内では、ジュニアガイドに連動した夏朋パネルを設置。国語や算数など教科ごとのテーマで展示作品や時代背景を解説した。体験コーナーでは、展示作品「猿形帯鉤」の機能に関する理解を促すため、3Dプリンタで作成した複製品のベルトを装着する体験と、磨かれた玉のなめらかさを感じる体験を実施した。 ・「尾張 徳川家の至宝」では、作品について理解を深める解説や、時代背景を解説するパネルを設置した。 ・「大神社展」では、神社を身近に感じてもらう企画として、配布物「おみくじ風まめちしき」を作成。神社に関するまめちしきや作品理解を助ける内容とした。さらに、当館ウェブサイトでお気に入りの狛犬に関する情報を広く募集し、当館ウェブサイト及び、1階エントランスホールで掲示した。 ・各展覧会を通じて、連続講演会・記念講演会を複数回実施した。	
【実績値】 解説パネル作成 22枚（大ベトナム展 13枚、中国展 5枚、徳川展 4枚） 冊子及びリーフレット等の配布物の作成 2回（中国展 1回、大神社展 1回） 講演会 24回（大ベトナム展 2回、中国展 9回、徳川展 5回、大神社展 8回） ワークショップ 1回（中国展 1回） 体験コーナー 2回（中国展 2回） (参考値) 解説パネル満足度 （大ベトナム展 72%、中国展 74%、大神社展 69%） *徳川展では、教育普及単独のアンケート調査項目は立てていないため、満足度は不明。	
【備考】	



「中国 王朝の至宝」展
猿形ベルト体験コーナー

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4574-2

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	継続性		
判定	A	A	A	A		
判定理由 適時性：観覧者が求める作品に関する情報や時代背景等を適切に提供できた。 独創性：3Dプリンタで作成した複製品を使用した体験や展示と連動した配布物など、独自のプログラムを実施した。 発展性：今後の展示にも応用が利く内容であった。 継続性：本年度の実施を踏まえ、次年度も継続して実施していく予定である。						

2. 定量的評価

観点	解説パネル	配布物の作成	講演会	ワークショップ	体験コーナー	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 解説パネル：展覧会毎にその特性を生かしたパネルを作成した。 配布物の作成：子供向け1回、全ての対象者向けに1回作成し、展示理解を助けた。 講演会：入門的なものから専門的なものまでバラエティに富んだ講演会を多数実施した。 ワークショップ：ワークショップを実施することで、作品や展示の理解が深まったと、好評であった。 体験コーナー：展示物の魅力を最大限に伝えることができる体験で、展示物がより身近に感じられたと好評だった。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	特別展の展示内容の理解促進につながる、バラエティに富んだプログラムを実施し、来館者からも評価を得た。次年度も来館者の要望を適切な形で反映していきたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通り実施されており、来館者からの反応も良好である。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進
プロジェクト名称	3) 学校教育との連携を図りながら、学校貸出キット「きゅうぱっく」の研究・調査（(5)－⑦）
【事業概要】 現在、13種類の「きゅうぱっく」を準備し（各2ぱっく、計26ぱっく）、学校や社会教育団体等への貸出を行っている。今後の新規ぱっく開発を見据えて、現在ある「きゅうぱっく」の有効な活用法に関する実践事例を収集するとともに、教員研修や出前授業を通して博物館の活用や「きゅうぱっく」に関する情報を発信し、利用の普及を図る。	
【担当部課】	交流課
【プロジェクト責任者】	教育普及室主任研究員 釜瀬進一郎
【スタッフ】 池内一誠（交流課主任研究員）	
【主な成果】 「きゅうぱっく」を貸し出した学校の実践事例を指導案の形式で収集することができた。また、福岡県教育センターのキャリアアップ講座を通して、博物館を活用した授業づくりに関する指導案を収集するとともに、「きゅうぱっく」について普及を図ることができた。	
【年度実績概要】 ・「きゅうぱっく」の利用報告書とは別に、「きゅうぱっく」を活用した実践事例の指導案提供を求め、「社会科」「総合的な学習の時間」に関する学習プリント等を含む多くの資料を収集することができた。 ・福岡県教育センターのキャリアアップ講座は、定員を前年度の60名から40名に絞り込み、事前に博物館を活用した指導案作成を課題としたところ、実践事例を含む具体的な指導案が収集できるとともに、「きゅうぱっく」の活用について周知を図ることができた。 ・太宰府市立太宰府中学校の「総合的な学習の時間（飛梅タイム）」の歴史探訪講座に九州歴史資料館（小郡市）と連携して職員を派遣し、出前授業を行った。また、大野城市立大利中学校と春日市立須玖小学校の「総合的な学習の時間」にも出前授業を行った。 ・新規「きゅうぱっく」の開発のための研究を進めた。北海道大学 橋本雄准教授（日本中世史）の協力を得て、開発中の新シリーズ「アジアの海は日々是好日（仮称）」に搭載予定の「日明勘合」の仕様・活用方法について調査・検討を行った。	
【実績値】 「きゅうぱっく」貸出件数：72件 博物館職員による授業実践支援回数：5回（対象生徒数延べ約382名） 「きゅうぱっく」の活用に関する教員研修：3回（参加教員数延べ約105名）	
【備考】	



「きゅうぱっく」の資料を熱心にスケッチする児童

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	B	A	A	A	A
判定理由 適時性：小学校及び中学校の学習指導要領には、博物館や人材の活用が示されている。学校貸出キットなど博物館の資源を教材として活用した学習指導の展開は、必要性が高い。 独創性：多くの実践事例に関する指導案等を収集し、新たな活用法について調査研究する上での基礎資料を集めることができた。 発展性：同じぱっくでも多様な活用方法があり、活用される学年、教科、単元は多様である。今後も新たな活用法の開発が期待できる。 効率性：学校連携担当職員の配置により、活用や授業展開に関する教師との打ち合わせや資料の要望に応えやすい体制になっている。 継続性：文化交流展示Ⅳテーマに対応した資料を、新規「きゅうぱっく」として製作予定である。現状の13ぱっくに加えて、更なる活用や授業実践が期待できる。 正確性：三次元プリンタで出力した資料や、文化交流展示室のハンズオン資料と関連する教材が活用されている。資料の有する情報の正確性は非常に高い。						

2. 定量的評価

観点	きゅうぱっく貸出件数	授業実践支援回数	きゅうぱっく活用教員研修			
判定	A	B	A			
判定理由 きゅうぱっく貸出件数：特に目標値は定めていないが、貸出件数は72件で、前年度比129%（平成24年度56件）と増加した。また、県外への貸出が13件（18%）と一定数を占めている。 授業実践支援回数：特に目標値は定めていないが、支援回数は5回で、前年度比56%（平成24年度9回）と減少した。これは、前年度に新規指導案開発のため同一校に6回連続で出向いていた支援が一区切りついたためである。 きゅうぱっく活用に関する教員研修：特に目標値は定めていないが、研修回数は3回で、前年と同数であった。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	「きゅうぱっく」の貸出は順調であり、教員研修も内容を進化させながら継続して実施している。「きゅうぱっく」が有効な学習教材として、学校で学習活動に活用されていると考えられる。今後は収集した実践事例を整理して公開し、学校へ提供するなどの活用が考えられる。 また、文化交流展示Ⅳテーマに対応した資料を、新規「きゅうぱっく」として製作予定であり、今後も展示に関わる貸出キットの製作に向けた調査研究が必要である。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	カリキュラムに「きゅうぱっく」活用が位置付けられる学校があるなど、学校教育との連携は着実に進展している。現行の学習指導要領が求める教育活動において、「きゅうぱっく」が意義ある教材であることは間違いない。また、館内での「きゅうぱっく」活用や特別支援学校での活用も少なからずあり、今後の活用の発展が期待できる。これらのことから、学校教育との連携は今後ますます強化が求められるといえる。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	4)平成 27 年度に迎える開館 10 周年における一定程度的リニューアルを見据えた、現在の展示施設、展示環境や展示方法の課題や展望についての検討（(5)－⑦）		
【事業概要】 27 年には開館 10 周年を迎えることから、文化交流展示室のリニューアルを念頭におき、現在の展示全般に関するさまざまな課題に対して、展示に関係する全研究員による討論や、外部委員会による意見の聴取あるいは、展示業者等との討議により、新しい展望を開こうとする取り組みである。			
【担当部課】	展示課	【プロジェクト責任者】	課長 赤司善彦
【スタッフ】 三輪嘉六（館長）、森田稔（副館長）、谷豊信（学芸部長）、本田光子（学芸部特任研究員）、臺信祐爾（企画課長）、富坂賢（文化財課長）、今津節生（博物館科学課長）、秋山純子（博物館科学課環境保全室研究員）、志賀智史（博物館科学課保存修復室主任研究員）、渡部史之（博物館科学課アソシエイトフェロー）、河野一隆（企画課文化交流展室長）、池内一誠（交流課教育普及室主任研究員）、八尋智之（交流課ボランティア室主任研究員）、楠井隆志（展示課展示調整室主任研究員）、鳥越俊行（文化財課資料登録室主任研究員）、畑靖紀（企画課特別展室主任研究員）、川畑憲子（企画課文化交流展室主任研究員）、森實久美子（企画課特別展室研究員）、鷲頭桂（企画課特別展室研究員）、進村真之（展示課情報サービス室主任研究員）、酒井芳司（展示課展示調整室主任研究員）、遠藤啓介（展示課展示調整室研究員）、岸本圭（展示課情報サービス室主任研究員）、丸山猶計（文化財課資料登録室主任研究員）、原田あゆみ（企画課特別展室主任研究員）、望月規史（文化財課アソシエイトフェロー）			
【主な成果】 (1) 研究員全員参加による検討会を行い、各課題の解決や必要な展示についての共通理解を得ることができた。 (2) 外部委員会「次の 10 年を考える懇話会」を開催し、識者や市民代表による率直な意見をうかがうことができた。 (3) 上記検討の成果を関連展示 1 室の改装工事に反映した。			
【年度実績概要】 (1) 平成 23 年度より実施。毎月 1 回、閉館後の 40 分程度、文化交流展示室を会場に全研究員と非常勤職員が参加する検討会を実施。各回テーマを決め、それぞれ専門分野や担当テーマの立場からこれまでの取り組みや課題などについて討議した。関連展示室の改装について、4F エントランスホールの使い方、キャプション表記についてなど、活発な意見交換を重ね、共通認識を深める格好の機会となった。検討内容については協議概要をまとめて配布しており、共通理解を構築している。 (2) 平成 24 年度より立ち上げた新規事業。文化交流展示だけでなく、国際交流、ボランティア活動、地域との連携、広報・サービス面に関する様々な意見・要望が外部委員から寄せられた。 (3) 25 年 9 月より 12 月にかけて関連展示 1 室の改装工事を実施。改装計画の立案にあたり、これまでの展示検討会での意見を反映させることができた。		 関連展示 1 室（改装工事前）  関連展示 1 室（改装工事後）	
【実績値】 (1) 館員による展示検討会 4 回 (2) 外部委員による次の 10 年を考える懇話会 5 回			
【備考】			

自己点検評価調書

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	
判定	A	A	A	A	A	
判定理由 適時性：2年後には開館10周年を迎える。それにむけて課題の洗い出しを着実に進めることができた。 独創性：館内関係者だけでなく、外部の様々な視点を取り入れ、新たな活動の展開につなげようと試みているため。 発展性：関連展示室改装を実施するなど実績を積み重ねている。 効率性：展示検討会は毎月の学芸定例会議開催日に定例化し、定着した。そのため、関係者の出席率も高い。 継続性：館員による展示検討会は、平成23年度から引き続き定例的に検討を進めており、館員の共通認識を深めることにつながっているため。						

2. 定量的評価

観点	館員による 展示検討会	外部委員による 懇話会開催				
判定	A	A				
判定理由 館員による展示検討会：検討会がほぼ定例化されることで館員に定着した。リニューアルにむけての共通認識を得ることにつながっている。 外部委員による懇話会開催：ほぼ3ヵ月ごとに開催され、外部視点からの多岐にわたる意見を聞くことができた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	全研究員による検討会の定例化、外部委員会の実施をとおして、10周年リニューアルに対するある一定の方向性を見出すとともに、館員の共通認識を得ることにつながっている。着実な検討を進めていると評価できる。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	展示に関係する全研究員による討論や、外部委員会による意見の聴取により、10周年リニューアルに対する具体的な方向性を見出しつつあるとともに、館員の共通認識を得ることにつながっている。

業務実績書

中期計画の項目	4 文化財に関する調査及び研究の推進		
プロジェクト名称	5) 高等学校所蔵考古資料の調査研究((5)－⑦)		
【事業概要】 日本の各地の高等学校には様々な考古資料が保管されている。収蔵資料の多くは、教員や地元有志からの寄贈、構内遺跡出土品、歴史系クラブ活動の調査資料品などである。いずれも高校がその地域において知の集積地として機能していたことを示しており、収蔵資料の実態把握は、考古学上重要であるばかりでなく、近現代の社会史的あるいは教育史的意義を有する。しかしながら、学校によっては管理者が不在であったり、知識不足から活用がなされなかったりと、文化財の活用という面において各種の問題を抱えている。本研究では、高等学校が所蔵する考古資料について全国的な調査を実施して、保管実態を精査するとともに、平成26年度には関連する展示会を実施し、文化財保護の普及ならびに実物資料の重要性と有用性の啓蒙をはかり、かつ次代を担う高校生たちの考古学に対する興味を存分に感化することを企図するものである。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	特別展室主任研究員 市元 壘
【スタッフ】 河野一隆（企画課文化交流展室長）、志賀智史（博物館科学課保存修復室主任研究員）			
【主な成果】 福岡県、大分県、長崎県、広島県、奈良県の高等学校所蔵資料の調査を実施して、収蔵状況における実態をつぶさに把握することができた。また兵庫県において博物館連携を進めている学校教員にヒアリングを行い、今後の指針とした。さらに福岡で開催された高校教育に関する研究会に出席し、現今の学校教育がとりまく諸問題について知見を深めた。			
【年度実績概要】 ・前年度に引き続き、考古学に関係する高等学校のリスト化と関連資料の収集を進めた。 ・西日本、九州を中心に高等学校を訪問し、各校が所蔵する考古資料とその来歴、ならびに現在の活用状況やクラブの活動状況について調査を実施した。本年度調査を実施できた高等学校（調査日）は以下の通り。 福岡県立筑紫丘高等学校（25年5月17日、12月12日）。福岡県立糸島高等学校（25年5月18日、12月14日）。長崎県立国見高等学校（25年5月20日、9月10日）。奈良県立畝傍高等学校（25年5月31日奈良県立橿原考古学研究所で調査）。広島県立府中高等学校（25年7月31日、8月1日）。熊本県立鹿本高等学校（25年10月10日。山鹿市立博物館をあわせて訪問）。大分県立中津南高等学校（25年11月20日。中津市歴史民俗資料館をあわせて訪問）。島根県立矢上高等学校（26年3月12日）。香川県立高松北高等学校（26年3月13日） ・25年12月9日には兵庫県立須磨高等学校教諭に面会し、本研究テーマに係る意見交換を行った。25年12月15日には福岡大学で開催された高校教育関係の研究会に出席し情報収集を行った。なお、本調査の成果の一部を26年7月から9月にかけて当館トピック展示で公開することが正式決定し、一部の出品資料について集荷と写真撮影を実施した。			
【実績値】 収集資料数：実績40点 収集図書数：実績40点 学会研究会等発表数：1件（①） （参考値）新聞取材：2件(②～③)			
【備考】 学会研究会等発表 ①「高等学校の考古資料が抱える諸問題」福岡県高等学校歴史研究会（25年5月22日） （参考） 取材記事 ②「九州国博が収蔵品調査」西日本新聞（25年5月23日） ③「高校歴史部 栄光よ再び」朝日新聞（25年11月1日）			



福岡県立筑紫丘高等学校
所蔵甕棺



福岡県立筑紫丘高等学校
所蔵甕棺

【書式B】
(様式2)

施設名 九州国立博物館

処理番号 4574-5

自己点検評価調査

1. 定性的評価

観点	適時性	独創性	発展性	効率性	継続性	正確性
判定	A	S	A	A	A	A
判定理由 適時性：高校所蔵資料はつねに散逸や毀損の危機にあるため、本研究は緊急性が極めて高い。 独創性：全国レベルで調査をしている博物館は他にない。 発展性：研究成果を学校現場や地域社会に還元できる。また昭和史の新たな側面を浮彫にすることができた。 効率性：事前の情報収集により調査対象校を絞り込み、効率的に調査が実施できた。 継続性：計画的に調査を続けている。 正確性：各府県自治体の関係職員の協力と一次資料の収集により正確な調査を行うことができた。						

2. 定量的評価

観点	収集資料数	収集図書数	学会研究会等 発表数			
判定	A	A	A			
判定理由 資料収集数：考古学上の重要資料を収集し得た。また目標を達成した。 収集図書数：学史上重要な図書を収集し得た。また目標を達成した。 学会研究会等発表数：発表と研究会参加によって、今後の調査の指針を策定できた。						

3. 総合的評価

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	当初目標を達成した。また、新聞2社から取材を受けたことは、当該テーマの取り組みが社会的に関心をよんでいることを裏付けるものである。これを踏まえ、次年度に実施するトピック展示「全国高等学校考古名品展」は高い公共性を有するものと期待できる。なお、次年度以降は本年度まで未着手であった四国、山陰などでの現地調査を実施し、研究のさらなる充実をはかりたい。

4. 中期計画の実施状況の確認

判定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
順調	計画通りに調査を実施できている。